THE CENTRAL REVIEW

中央公論

3-1928

魁春特別號

(「普通選舉」と「大衆文藝」號)

四十三年 第三號 第四百八十二號



旅行用品は松屋へ
御手輕て、御便利な船來及新製旅行用品をいろ〱豊富に取揃へて御座います。愉快な御旅行には是非共弊店の品を御用意の程偏に御願申上げます
松屋呉服店
東京銀座



教養を岩波文庫に委せよ

岩波文庫

第三回發表新刊書目

- 哲學體系　スピノーザ著　小尾範治譯　★★★
- 自然認識の限界について 宇宙の七つの謎　デュ・ボア・レーモン著　坂田德男譯　★
- 法の精神（上卷）　モンテスキュー著　宮澤俊義譯　★★★★
- 經濟要錄　佐藤信淵著　瀧本誠一校訂　★★
- 福澤撰集　福澤諭吉著　★★★
- 勞賃・價格および利潤　マルクス著　河上肇譯　★
- 藝術經濟論　ラスキン著　西本正美譯　★★
- 訓讀日本書紀（上卷）　黒板勝美編　★
- 蕪村七部集　伊藤松宇校訂　★★

既刊書目

- プラトン　ソクラテスの辯明 クリトン　久保勉 阿部次郎譯　★
- プラトン　プロタゴラス　菊池慧一郎譯　★
- カント　實踐理性批判　波多野精一 宮本和吉譯　★★
- カント　プロレゴーメナ　桑木嚴翼 天野貞祐譯　★★
- ポアンカレ　科學の價値　田邊元譯　★★
- ポアンカレ　科學と方法　吉田洋一譯　★★★
- リッケルト　認識の對象　山内得立譯　★★★
- スミス　國富論（上）　氣賀勘重譯　★★★★★
- マルクス　資本論（第一卷第一分冊）　河上肇 宮川實譯　★
- マルクス　資本論（第一卷第二分冊）　河上肇 宮川實譯　★
- マルクス　賃勞働と資本　河上肇譯　★
- ルツオ　民約論　平林初之助譯　★★
- 五重塔　幸田露伴著　★
- 風流佛・一口劍　幸田露伴著　★
- 綱島梁川集　安倍能成編　★★
- 北村透谷集　島崎藤村編　★★
- 藤村詩抄　島崎藤村自選　★★
- 千曲川のスケッチ　島崎藤村著　★
- 幸福者　武者小路實篤著　★★
- 出家とその弟子　倉田百三著　★★
- 布施太子の入山　倉田百三著　★
- 賢者ナータン　レッシング作　大庭米治郎譯　★★
- ヰルヘルム・マイスター修業時代（上）　ゲーテ作　林久男譯　★★★★
- 埋木（水沫集より）　森鷗外譯　★
- ゲエテとの對話抄　エッケルマン著　龜尾英四郎譯　★★★

大佛次郎氏著

照る日くもる日（全二册）

四六判函入美裝
定價各壹圓八拾錢
送料金拾貳錢

赤穂浪士の事蹟を傳へるものにして稗史野乘の類はもとより明治以降の小説戯曲の多くは狹隘なる自家の倫理觀に跼蹐して浪士の人間的なる生活と感情とを沒却するは勿論、その理解は深く時代精神と社會生活との相關に渉らず濫りに荒唐の作爲を擅にせるもののみ。

赤穂浪士

四六判布裝函入
挿繪八葉
四百八拾頁
定價貳圓參拾錢
送料拾八錢

わが大佛次郎氏にこの新著のある所以である。本書は大盗、美人、浪人、成金その他凡そ社會の表裏に活躍せる人物は悉く拉し來り構想の妙を盡して元祿の時世粧を描きつつ浪士と彼等を遶ぐる人々との行動と心理とを巧みに浮彫にし、歴史小説にして社會小説の趣を具へたる近時稀に見る傑作をなす。江湖の御一讀を俟つ。

泰西大盗傳

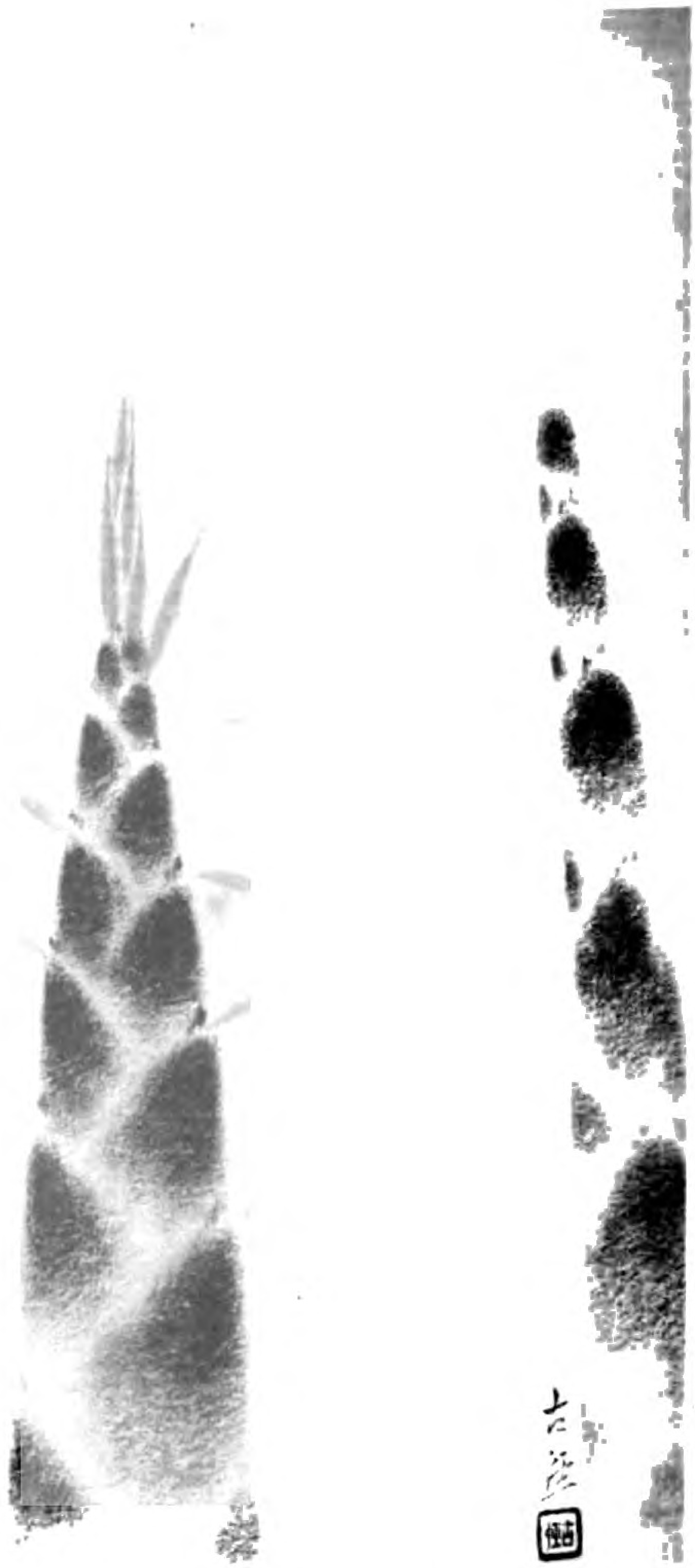
四六判函入美裝
定價壹圓五拾錢
送料拾貳錢

東京市神田區表神保町二番地

渾大防書房

振替口座東京七五二八番

◎「自然兒 杉村龍之助」……村松梢風……三六
◎舞臺上の愛人「龍之助」……澤田正二郎……三八



竹子　　小林古徑筆

豫約募集

日本戲曲全集

第一部歌舞伎篇（三拾二册）

一、古代歌舞伎集（高野斑山編）元祿中心の狂言本の殆んど全部（約百種）網羅全部。

二、中古江戸歌舞伎集（伊原青々園編）雷神不動北山櫻。玉櫛粧曾我。助六曲輪名取草。高尾宮本地開帳。高尾大明神楓鑑。千代始音頭瀨渡。傾城片岡山。けいせい優曾我。

三、京坂歌舞伎集（守隨憲治編）伊勢海道錢懸松。嫣髮歌仙櫻。大當百足山。戀。幼稚子敵討。傾城咬𠺕吧文章。秋葉權現廻船話。

四、並木正三集 宿無團七時雨傘。せいせい天羽衣。近江源氏鎧講釋。鬍太郎天狗酒宴。三十石𦪌始。和布刈神事。

五、並木五瓶時代狂言集 けいせい黃金鯱。けいせい飛馬始。入間詞大名賢儀。けいせい忍術池。神謠播州廻。けいせい倭莊子。

六、並木五瓶世話狂言集 五大力戀緘。富岡戀山開。青櫻詞合鏡。隅田春妓容性。月武藏野秋狂言。四紅葉思戀操川。江戸紫由緣十德。

七、寬政期京坂時代狂言集 金門五山桐。艶競石川染。けいせい青陽鷄。天滿宮菜種御供。競伊勢物語。

八、寬政期京坂仇討狂言集 伊賀越乘掛合羽。姉妹達大磯。敵討安榮錄。淺草靈驗記。敵討千手助太刀。大願成就殿下茶屋聚。

九、寬政期京坂世話狂言集 戀飛脚大和往來。伊勢音頭戀寐刃。競ふとの紅翅。銘作切籠曙。隅田川續俤。百千鳥鳴戸白浪。思花街容性。

一〇、初代櫻田治助集 國色和曾我。けいせい吾妻鑑。大商蛭子島。瀨川の仇浪。けいせい鏡臺山。春錦伊達染曾我。女達高麗屋經衛。赤松玉蟾見島臺。

一一、鶴屋南北怪談狂言集 東海道四谷怪談。彩入御伽草。阿國御前化粧鏡。法懸松成田利劍。獨道中五十三驛。

一二、鶴屋南北世話狂言集 心謎解色絲。春錦伊達染曾我。女達高麗屋經衛。當龜八幡祭。於染久松色賣販。勝相撲浮名花觸。浮世相比翼稻妻。盟三五大切。

一三、顏見世狂言集 御攝勸進帳。花三升吉野深雪。八百八町瓢簞弁。壯平家物語。戾橋脊御攝。雪月花黑主。蝶花形戀聟源氏。

一四、曾我狂言集 戀便假名書曾我。稻光田每月。比翼蝶春曾我菊。御國入曾我中村。初冠曾我皐月富士根。全盛虎女石。

一五、赤穗義士劇集 假名手本忠臣藏。太平記忠臣講釋。忠臣いろは四十七訓。忠臣連理の鉢植。いろは假名隨筆。菊宴月白浪。忠臣藏後日建前。假名書忠臣講釋。

一六、伊達騷動狂言集 伽羅先代萩。伊達競阿國戲場。錦曲輪花伊達染。萬歲阿國歌舞伎。けいせい睦玉川。

一七、寬政期江戸世話狂言集 袷小袖血汐染色。幡隨長兵衛。大三浦達壽。闘取菖蒲絹。其往昔戀江戸染。堂島田實込。男達五雁金。河原噂京謠。

一八、化政度江戸世話狂言集 垣衣草手向發心。短衣仇獻書。文月恨鮫鞘。褄重噂菊月。繫頭霞彩幕。東都名物錦繪始。男作女吉原。

一九、化政京坂仇討狂言集 繪本天下茶屋聚。敵討義戀柵。敵討黃鳥塚。敵討高砂松。敵討揃珊瑚。

二〇、化政度江戸仇討狂言集 敵討娼雁的。敵討相合袴。繪本合法衢。靈驗龜山鉾。

二一、滑稽狂言集

東京市京橋區南傳馬町二ノ六
發行所 春陽堂
振替東京一六一七
電話京橋（六）四五二一五

[illegible]の夢、[illegible]兵衛。ちよいのせ番六。三吉。乳もらひ。とん〳〵の烟草の十作。かりのたよりら[illegible]。[illegible]首のおきん。おもと新助。三世相。

二二、三世櫻田治助集　名譽仁政錄。青砥稿。隅田川對高賀紋。名高手毬諷實錄。[illegible]壽開駒昰傳記。月梅薫景清。明烏花濡衣。新板越白浪。

二三、幕末期世話狂言集　與話情浮名横櫛。東山櫻莊子。妹脊鷄。近頃河原の達引。殿三升曾我初夢。散書戀文章。袖浦故郷錦。世情相宿噺。

二四、お家狂言集　花菖蒲佐野八橋。梅柳若葉加賀染。濃紅葉小倉色紙。花嵯峨猫魔稗史。けいせい鄒源氏。

二五、小説脚色狂言集　花魁莟入總。復讐高音鼓。梅白來也談。信州於六櫛。花御祭大和文庫。花楓秋葉話。

二六、勝諺藏集　[illegible]。松前庭月影夜櫻。玉櫛笥箱崎文庫。東海道小夜中山。近世櫻田雪紀聞。名高田紋後諷錄。花茨胡蝶彩色。御誂染袴加賀紋。朝顏處女香紅筆。

二七、舞踊劇集　舌出し三番。うつぼ猿。六歌仙。松江七變化。奴道成寺、操三番百眼。鳴神鐘入櫻。角力おし鳥。身替りお俊。關の扉。吉田屋。戻り駕。雪のお鶴。船饅頭。葛の葉。蜘蛛の絲。女夫松。色の寨。茶筌賣。お染久松。山鳥。小倉山。榮華の夢。落人。若松。左甚五郎。女清玄。望月。日本振袖始。杜建何我。女鉢木。今様高野物語。

二八、義太夫狂言時代物集　菅原傳授手習鑑。義經千本櫻。妹脊山婦女庭訓。本朝二十四孝。一谷嫩軍記。近江源氏先陣館。木下蔭狹間合戰、

二九、義太夫狂言世話物集　夏祭浪花鑑。双蝶蝶曲輪日記。關取二代勝負附。伊賀越道中双六。

[illegible]。

三〇、歌舞伎劇集（上）

三一、同（下）

三二、三世新七及其水集

第二部現代篇（第拾八册）

三三、坪内逍遙。

三四、依田學海。福地櫻痴。宮崎三昧。榎本虎彦。右田寅彦。岡村柿紅。松居松翁。

三五、岡本綺堂。

三六、岡鬼太郎。高安月郊。山崎紫紅。伊原靑々園。長谷川時雨。岡田八千代。野上彌生。大村嘉代子。木村富子。

三七、池田大伍。小寺融吉。濟見陸郎。林和。額田六福。

三八、佐藤紅綠。川村花菱。瀬戸英一、大森痴雪。木村錦花。

三九、新派劇脚本集。

四〇、[illegible]。永井荷風。小山內薫。

四一、長田秀雄。木下杢太郎。吉井勇。郡虎彦。灰野庄平。

四二、谷崎潤一郎。久保田万太郎。里見弴。泉鏡花。

四三、中村吉藏。島村抱月。秋田雨雀。坪内士行。島村民藏、藤井眞澄。

四四、有島武郎。長與善郎。倉田百三。吉田絃二郎。室生犀星。

四五、武者小路實篤。正宗白鳥。

四六、菊池寛。山本有三。

四七、久米正雄。横光利一、犬養健。邦枝完二。北尾亀男。鈴木泉三郎。

四八、岸田國士。佐藤春夫。岡榮一郎。田島淳。水木京太。關口次郎。

四九、藤森成吉。長谷川如是閑。金子洋文。村山知義。前田河廣一郎。

五〇、北村小松、高田保、池谷信三郎。鈴木彦次郎。田中總一郎。北村壽夫。北村喜八。其他。

◎不滅の大衆文藝

三百年に亘つて億兆の見物を向うに廻して喜怒哀樂灼熱的喝采を博したるもの、明日の日古くなる本と違ひます。

◎芝居繪の大繪卷

挿繪總計一千枚以上口繪百枚の異彩錦繪から今日の新劇の舞臺迄本全集の最も誇とする所です。

◎繪入内容見本進呈

（全國小賣書店にあり）

▶規　略◀

◎種類　全五十卷
- 第一部　歌舞伎篇　三十二卷
- 第二部　現代篇　十八卷

◎裝幀體裁　木村莊八畫伯裝幀
總布四六大版函入
木版刷表裝上製本

◎締切　三月廿五日

◎申込は各部一種にても受付ます

◎會費
一分拂　一册一圓
一時拂　第一部　貳拾八圓八拾錢
第二部　拾六圓貳拾錢
通し　四拾五圓

◎申込金
各部　金一圓
通し　金二圓
これは最後の會費に充當します

有朋堂

一冊壹圓

最初にして最終の記念破格大特價

特價版の一圓提供は、絶對に一度限り、この機を逸しては永久に再來致しません。

◆申込期日三月廿日限り

▼第一次提供六十册を三十册づゝに二分し、甲乙二種として提供。
▼甲乙兩種共各一册金一圓總額各金三十圓(外に送料)
▼申込前金甲乙兩種共各金一圓。最終月の一册分に充當。
▼甲乙兩種共各會費毎月金一圓づつ二十九ケ月。
▼甲乙兩種共毎月各一册宛刊行。三十ケ月を以て完了。

甲乙何れか一組に申込めば、他の一組の方は幾册どれを御擇びになつても構ひません。(一册一圓)

□「有朋堂文庫」は初刊以來十數年を經て、その間數回の會員募集を企て、此種の豫約物として正にレコードホルダーたる權威を持續して居ります。

□良書の生命は悠久です。書物の內容は一時の流行を意味するものであつてはなりません。「有朋堂文庫」が十數年の久しき、而も年と共にその聲價を高めつつある所以は一に玆に存すると存じます。

□良書は又一時の消耗品を意味するものであつてはならぬ筈です。所謂大量出版によつて廉價の書册を提供する事の盛になつて來たのは、學界の爲め誠に慶賀すべき現象だと存じます。只それが粗惡の製本となり、空疎の內容となつて、單なる消耗品の濫出とならぬやうに努める事は吾々出版業者の責務でなければなりません。

□「有朋堂文庫」は長い版歷と、讀書家の深い聲援とによつて、既に家庭文庫の名を得る迄に普及致して居ります。斯くの如くにして美本としての「有朋堂文庫」は叢書たるの使命を全うし盡したといへませう。卽ち玆に弊堂創業の二十五周年を記念すべく特價版の破格提供を敢てする所以であります。

□特價版―而もそれは良書としての使命を犧牲としての粗惡本單なる廉價本ではありません。

表紙―(背は從來の美本と全然同一なるクロース金模樣金文字入／平は最上質厚紙表紙)

用紙　從來用ひたるとほゞ同樣の上等紙

印刷に裝釘に、盡しその最高限度として誇るに足るものだと信じます。

文庫 豫約募集

□「有朋堂文庫」が、上田、關根、藤井三博士監修の下に、專門諸大家の手によつて嚴密に校訂され、句讀を正し、振假名を附け、その必要ある種類のものには、頭註を施し、索引を添へ、原畫をそのまゝ複寫する等、古典文學の現代化としてその內容の善美を極めて居る事は、世に周知の事實、更めて喋々する要もないでせう。

□今度第一次として提供するのは全百二十冊中の六十冊で、殘りの六十冊は更に第二次として提供する計劃であります。而も六十冊を三十冊づつの組合はせとし、何れかの一組をお求めになれば他の一組中からどれでも勝手に選ぶ事が出來るやうにした事は、購讀者に取つて非常な御便利であらうと信じます。この提供は二十五周年記念の意味で、絕對に一回限りですから、どうぞ此機を逸せず御申込の榮を賜はるやう切望致します。

◎◎◎◎◎◎詳細の內容見本

御申越次第お送り申上げます。それによつて本文庫眞價の一斑を御承知下さい。

第一次提供六十冊

▽甲種三十冊▽

- 古事記・祝詞・風土記……全一冊
- 萬葉集……全二冊
- 宇津保物語……全二冊
- 源氏物語……全四冊
- 平安朝物語集……全一冊
- 平安朝日記集……全一冊
- 枕草紙・方丈記・徒然草……全一冊
- 水鏡・大鏡・增鏡……全一冊
- 保元物語・平治物語・北條九代記……全一冊
- 平家物語……全一冊

△乙種三十冊▽

- 源平盛衰記……全二冊
- 太平記……全二冊
- 謠曲集……全二冊
- 狂言記……全二冊
- 名家俳句集……全一冊
- 風俗文選・和漢文操・鶉衣……全一冊
- 西鶴文集……全二冊
- 近松淨瑠璃集……全三冊
- 益軒十訓……全二冊
- 山鹿素行文集……全一冊
- 常山紀談……全一冊
- 太田南畝集……全一冊
- 百人一首一夕話……全一冊
- 名家隨筆集……全二冊
- 親鸞聖人文集……全一冊
- 日蓮上人文集……全一冊

- 禪林法話集……全一冊
- 江戸名所圖會……全四冊
- 日記紀行集……全一冊
- 新撰川柳狂詩集……全一冊
- 繪本西遊記……全一冊
- 南總里見八犬傳……全六冊
- 東海道中膝栗毛……全一冊
- 浮世風呂・浮世床……全一冊
- 偐紫田舍源氏……全二冊
- 脚本集……全二冊

東京神田

有朋堂

電話神田 {二〇四七・一二四八}
振替東京 七一四八〇二

内容見本申込次第進呈

豫約募集

新校羣書類從

菊大判本文廿二册・索引二册合計廿四册・一萬八千頁大册

監修

文學博士 上田萬年
文學博士 和田萬吉
文學博士 藤井乙男
文學博士 三浦周行
文學博士 新村出
文學博士 幸田成行
文學博士 辻善之助
文學博士 藤村作

顧問

文學博士 三上参次
文學博士 黒板勝美

編輯及校訂

宮内省圖書寮編修官文學士 芝葛盛
東京女子高等師範學校敎授文學士 佐伯常麿
東京帝大文學部史料編纂官文學士 花見朔巳
東京商科大學豫科敎授文學士 川上多助
第六高等學校敎授文學士 松本彥次郎
東京帝大文學部助敎授司書官文學士 植松安
東京帝國大學文學部史料編纂官 井野邊茂雄
文學士 物集高量

塙撿校の羣書類從は日本國民として、必讀すべき不朽の名著一千二百七十種、五百三十卷、有らゆる部門を具備して百科研究の典據を示し、極めて豊富にして正確なる資料を供する點に於て、一大專門的大百科全書であり、又一大圖書館である。今之を刊行するに當り、細心の用意と嚴密なる出版良心とを以て、現諸權威者監修指導の下に、斯道學者の嚴正なる校訂を施し、各卷頭に精到簡明なる解題を附し、最後に詳細なる總索引を附し、所求の事項檢索の便に供する。校訂の完美最上の用紙、鮮明なる印刷、菊大判優美典雅なる製本等、極めて細心の注意を拂ひ、内容と相俟つて人事の最善を盡して居る。伏して大方の清鑑を待つ。

體裁

▲菊判 天金 總布製 杉浦非水畫伯裝幀 最上美本 一册平均七百五十頁

略規

▲申込金五圓(最終會費に充當)毎月拂込金五圓分拂合計金百廿圓▲前金一時拂金百十圓(申込金不要)外に送本料を要す。四月より毎月一册宛廿四ヶ月完結

豫約申込 三月卅一日限

東京市小石川區竹早町三十二番地
電話小石川一〇五四番・三二六九番
振替東京八九六〇番

内外書籍株式會社

無產諸政黨合同の好機運

——(卷　頭　言)——

總選擧の結果ともかく若干の無產黨議員を送り出すことが出來た。近く開かるべき臨時議會での彼等の行動は國民一般のひとしく刮目する所である。知らず、彼等はよく這の國民の期待に孤負するなきを得るや否や。

此時に當り吾人は切に彼等に望む、何よりも先づ同志の緊密なる提携をはかり多年の懸案たる共同戰線の完成に一步を進められんことを。提携合同の必要は今更說くまでもなく、之が實現の爲めには今日は正に絕好の機會である。少しく、大局に目を開いて與れさへすれば、蓋し事は易々と運ぶに相違ない。

無產黨の人達の主觀的立場には固より色々の言ひ分もあらう。併し乍ら第三者の見地よりする今日の政界の客觀的狀勢には、無產諸黨をして提携合同に急がしめこそすれ、毫も在來の反目暗鬪を續けしむる素因がない。いま之等の點を詳述するの遑はないが、無產政黨の主たる關心事が地盤の開拓と黨勢の擴張とに在る間は相互間の爭奪戰の不當に昂ぶるは免れ難く、理に於て如何に兄弟墻にせめぐの愚を諭しても翻然として其爭をやめしむることは六かしい。けれども今や問題は一轉した。地盤の開拓黨勢の擴張も不必要となつたのではないが、新に議院に若干の席を占むることに依て、官權金權に對する奮鬪の方が現實の大問題になつた。現實の問題に打つ突つて始めて對立の諸小黨が漸く合同に向ふものなるは、各國の歷史の教ふる所でもあり、我國また獨り之が例外たるものではない。今日の各無產黨は結局それ〴〵重要なる構成母體となりて、やがて大きな統一的無產黨の出現を見るべきは必然の勢である。

明治初期の政黨史に在ても、全國に羅布せる百數十の小政黨が初め主義綱領を同うして而も合同を肯ぜず、議會の開くるに及び新に開けた必然の勢が知らず識らず自ら統一合同の機運に導きしは人の知る所。昔の小黨對立の名殘りは地方的部會として今日にも殘つて居り、時に其間に利害の衝突を見ることもないではないが、之に由て大局の進運の阻害されたと云ふことはなくなつた。之と同じ樣な經過は思ふに今日を發端として無產諸黨間にも行はるべきものであらう。

只老婆心ながら一言注意して置きたいのは、這の客觀的狀勢を利導して提携合同の實を擧ぐるに付ても、一面には過去に於ける旣成政黨の經驗に鑑戒するを怠らざると同時に、他面には飽くまで大局に着眼し誠意に終始して私意を遂げんとする者の橫行を許さざらんことである。

中央公論



第四十三年第三號
三月號
四百八十二號

本願思想の開展とその道德的文化的宗教的意義に就て

木村泰賢

はしがき

佛敎、殊に大乘佛敎にあつては菩薩の本願（pūrvapraṇidhānam）といふことを說く。菩薩が其修行時代にあつて、將來、佛道を成し

た曉に於て悉く〳〵の作用なり狀態なりをその建設した佛國土內に於て實現せんとの前以ての誓願である　而もそれは今世に於て發願して今世に成就するといふよりは寧ろ生々世々に渉る遠遠の修行を經て遂に最後にその計劃せる念願を實現しようとするが本願思想の特徵である。

通例この本願を總願（sāmānyapraṇidhānam）と別願（viśeṣa praṇidhānam）との二種に區別する。

總願とは凡ての菩薩に共通するの誓願で、最も簡單に言へば一切智者となること、卽ち佛陀となることであるが、更にその內容を分ちて四項とするが通例である。所謂、四句誓願であつて、――無邊の衆生を誓つて濟度し（衆生無邊誓願度）無邊の迷執を誓つて斷滅し（煩惱無盡誓願斷）、無量の法義を誓つて學習し（法門無量誓願學）、かくして遂に最高無上の佛道を成就する（佛道無上誓願成）といふ願である。之を二句に縮めたのは卽ち上求二菩薩一、下化二衆生一の標語で、大乘的佛敎精神の基調とせらるゝものである。

この總願に對して別願といふのは、その下化衆生の言はゞ樣式に關する特殊の念願で、而も種々の菩薩又は佛陀によりて多少、その種類なり、性質なりを異にするものと考へられてゐる。例せば數の上からすれば、千手觀音に六願あり、藥師如來に十二願あり、阿彌陀佛に二十四願又は四十八願あり、釋迦に五百大願ありと言つた類である。蓋し之を消極的に言へば限りなき衆生には限りなき弱點あるに應じて、之を救ふの佛、菩薩にありても、その意企によりて特に或る方面に主力を注ぐの相違あり、之を積極的に言へば佛、菩薩が理想王國（淨土）を建設するに際して、何程かその趣好に相違するの致す所と、解釋するが通例になつてゐるけれども、亦この間に思想開展の程度の相違もあることを見逃してはならぬ。

かく本願に總別の二種ある中で、歷史的見地からしても、敎理的見地からしても、はた、現代的意義からしても最も興味あるは別願思想である。蓋し、總願は大乘佛敎の根本精神を代表するといひながらも、それだけ抽象的標語に過ぎざるに反し、別願の方はその具體的規定で、而もこの間に種々の敎訓と暗示とに富み、今日の吾等からしても最高文化の目標として學ぶべきものが多いからである。

そこで、こゝでは、總願の方をば豫想として置いて專ら別願思想に就て論ずることにしたいと思ふが、問題の性質上之を二方面から眺むる必要がある。第一は本願思想開展の經過に就てゞ卽ち歷史的部門であり。第二は前の材料に基いて、その道德的文化的宗敎的意義より進んで之を佛敎敎義學の立場からその內容を調ぶる組織的部門である。

（甲）願數を基準として　本願思想の開展

一

餘他の問題に於て然るが如く、本願思想も亦、その整へる形を得るまでには種々の階段を經て開展したものである。從來は藥師の十二願も彌陀の四十八願も、凡て釋迦自身の說示したものと考へられたけれども、佛教の歷史的研究は到底、之をそのまゝ認定することを許さぬ。原始佛教を出發點として部派佛教（小乘）を經て大乘に到りて、而もここでも幾多の階段を經て初めて整ふた思想に纒まれることは少しく批判的に佛教を研究した人ならば何人も認めざるを得ぬ事實である。併し私の知れる限り、未だ特にこの本願思想に就てその開展の次第を秩序的に論究した著書なり論文なりが、餘り之なきやうであるから、少しく煩に涉るの恐がないでもないけれども、原始佛教から出發して、出來得るだけ、その梗概を見ることにしたいと思ふ。而もこの問題の論究は、獨り本願思想自體に關して許りではなく、延いては、本願思想關係の經典成立の經過に關する研究にも、何程か寄與する所あるべきは私の信じて疑はざる所である。

二

先づ之を原始佛教に徵するに、勿論、言葉としては念願（paṇidhānaṃ, paṇidhi）又は希願する（paṇidahati）といふことは屢々用ゐられてゐるけれども（概ね上天に關聯して）、未だ後世に於けるが如く、思想の本筋内に取り入られた所がない。寧ろ歷史的佛陀の目標とした所は上天に對する希願などを捨てゝ、直ちに究竟の涅槃を獲得せんとする所にあつた。佛陀の使命は自ら涅槃を得るが如くに人をも涅槃に入らしむるにあるとは佛陀自身の屢々宣言した所で、而もそれは生を隔てた遠き未來にではなく、即今直ちに涅槃を證知し實現して、その中に遊履するといふ或る意味に於て、强き現實主義の主張であつた。從つて少くも佛陀自身の立場からすれば悟證も解脫も佛陀と佛弟子（聲聞）と間に何等の區別もなく、後世に於けるが如く菩薩（佛陀の候補者）と聲聞との間に資格上、差別を立てゝ菩薩は本願を立てゝ衆生の救濟に從事するけれども、聲聞は獨り自らその解脫を樂むといふが如き思想は、原始佛教には未だ之なかつた所である。

然らば本願思想の萌芽は遂に原始佛教内に之を見出すことが出來ぬかといふに、必ずしも未だ然りと斷定する譯には行かぬ。餘他の教理の然るが如くこの思想も亦、暗々裡には原始佛教内に含まれる萌芽の次第に開展したものに外ならぬことをも亦見逃してはならぬ。之に就ては先づ佛陀とその弟子達がいかにして區別されたかの理由から明かしてかゝるの必要がある。私はその契機として二個條を擧げることが出來ようと思ふ。第一は理論上、佛陀もその弟子達（聲聞）も同じ悟證者であり解脱者であるとした所で、實際にありては佛陀と弟子達との間には種々の點に於て超ゆべからざる懸隔のあつたことは、どうしても認めねばならぬ事である。殊にその著しきは佛陀の解脱は所謂、無師獨悟の結果であるに對して、弟子達のそれは佛陀の教を聞き、その導きに依つた結果で獨創的でなかつたことである。佛陀を「完全なる覺者」と喚ぶに對して弟子達を聲聞（サーヴカ）即ち聞き手と稱するもこゝから來たものである。然らばこの相違が何に起因するか、こゝに必ずそれを説明するの理由が見出されねばならぬ。第二に原始佛教の力説高調した所は、この世ながらにして解脱する所にあつたとした所で、實際上にありては、數多き修行者中には、修行半ばにして、死亡したものも尠くはなかつた。併しその中途の修行者と雖も無効に終らぬことの安心を與へ若しくは自らそを得るためには、生を隔てゝ修行の繼續することをも認めねばならぬことになる。即ちこの際は輪廻の信仰が生々世々に渉る修行繼續の保證となるべきであつて、羅漢に到るの四階級中、前三果は實にこの見地から立てられたものである。

かくして右の兩觀察を結合して特に之を佛陀觀に適用することになるや、特別に勝れて偉大圓滿なる佛陀も、修行の結果として然る限り、その修行はたゞに現世だけでなく、必ずや、過去に遡りて無數の生死中に積まれたもので、現世に於て佛陀となれるは要するにその最後の結果に外ならぬといふことにならう。佛陀が降誕するや直ちに種々の奇瑞を演じたといふ信仰も實にかくして構成されたものである。從つて之に對して聲聞としての佛弟子達の佛陀に劣れる所以は、假令、生を隔てゝ修行した所で、僅かに數生に渉るのみであり、その多くは佛陀によつて初めて教化されて悟りを開ける言

はば速成科の卒業者たるに止まる、といふ歸結になるべきも亦自然の數である。これ蓋し佛敎の特長は、人はたゞ修行によつてのみ完成者となり、天然に與へられた聖者なしと見る所にあるので、人格の圓滿、不圓滿も力用の廣きも狹きも偏へに修行年時の長短と努力の緩急いかんにあると解する所から來る自然の歸結であつた。

かくて、佛陀自身の平等的宣言にも拘らず、次第に佛位と弟子位との間に區別がついた。之に伴つて小乘敎より大乘敎に及びて、之に關する種々六つかしき神學的解釋を生ずることになつたのであるが、之と同時に他方には佛陀の前生即ち所謂、菩薩時代に關する種々の物語を産出して遂に厖然たる大文學を形成するに到つたのは、即ち有名なる本生譚（Jataka)である。

而も神學的解釋の專ら敎界内の專門家の所談に止まれるに反して、この本生譚は廣く通俗社會に及び、佛敎精神を一般化する上に於て非常なる役目を演じたものである。或る意味からすれば、かなりに難解な原始佛敎や小乘佛敎の中心敎理よりも、寧ろこの本生譚に織り込まれた佛敎精神の方が通俗社會を佛敎化するに、より多く役立つたと言つても然るべき程であつた。

本願思想は、實に、少くも萠芽としてはこの本生譚に起因するものである。それは菩薩が無數の前生に於て種々の身分を現し、而も概ね自己を犧牲に供して人のため道のために努力したといふが、數百に上る本生譚（現今傳はるものに五百有餘種あり）の骨子であるが、その犧牲的努力を目的論的に解釋すれば、畢竟本願といふことになるからである。即ち種々の努力も最後には菩提（bodhi悟り、智慧）を內容とする佛陀になるためで、佛陀になることは迷へる衆生を救はんがためとすれば、こゝに即ち上求菩薩下化衆生の所謂總願が、その根柢をなしたといふことになるからである。而もこは最も原始的な本生譚すら明かに明言してゐることである。佛陀の前生を――それが猿であつても兎であつても――菩薩（bodhisattas 菩提薩埵、一切智を求むる人）と名くる所以も、その形はいかやうにもあれ、苟も菩提道に志す限り、凡ては佛

陀たることの修行道程にある人といふ意味を明にせんがためであつたと解すべきである。かくして、之を推し進むる時は、後に大乘になつて種々の菩薩が自ら苦心努力して佛陀となつて特定の淨土を建設し、他の衆生を容易にそこに導くの本願を立てたといふ思想も畢竟するに釋尊が本生譚的修行の結果として成佛し、所謂連成科を案出して、その弟子達をして開悟せしめたといふ思想の模寫であり擴大に過ぎぬといつても敢て不可なからうと思ふ。併し實際をいへば、思想のそこまで進む間には本生譚自身内にも幾多の階級的開展あり、進んで大乘文學に到りても、前に述べた如く、種々の開展を經てからのことであるから、急いで歸結を見出さんとするが如きやり方は吾等の大に謹まねばならぬ所である。

之を要するに、本願思想は原始佛教の表面的立脚地からすれば、その中心思想を代表するものではなく、寧ろその傍系に屬するものである。併し之を裏面からすればこゝに到るの思想的萌芽は已に原始佛教の中心問題中に含まるもので、而もそれが佛身觀に聯關してその通俗化運動の中に萌芽した點に於て、矢張之を原始佛教の中に求めねばその起源を說明することが出來ぬものと心得べきである。

三

本願思想の起源は本生譚にあるけれども、前に述べた如く、本生譚自身にも幾多の變遷も發達もある。從つて之に應じて、本願思想も初めは本生譚系統の經典を通ふして次第に發達したのも勿論である。而して本生譚は總じて原始佛教より大乘佛教に到る間に產出したと考へらるゝもので、その古きは原始佛教に連絡し、その新しきは大乘に連絡する點に於て、この間に發達した本願思想は言ひ得るならば本願史上、その初期を代表するものである。私は更に之を極めて大雜把に三階段位に分ち得べしと考ふるものである。第一は例の五百數十種を一類とする本生譚(チャータカ)で代表せらるゝもの、第二は聖勇(Ārya śūra)の編輯した Jātakamālā とその漢譯、菩薩本生鬘論(十六卷)邊りが代表するもの、第三は菩薩六度集經

（康僧會譯八卷）である。第一はパリー語で傳はり、第二は散克利（サンスクリット）と漢譯とで傳はり、第三は漢譯のみで傳はるものである。中に就て、第一類のものは、勿論、その中に亦發達もあるけれども、總じて云へば、原始的なもので、中には當時世に行はれた教訓的物語りを僅かに加工して菩薩譚に直ほしたに過ぎぬと思はるゝものも尠くはない。從つて本願思想に殆ど無關係と思はるゝものもあるけれども、少くもその重要なものとなれば、菩薩の行つたあらゆる功德も所詮は凡て一切智（佛陀たること）に廻向するがためといふことが、物語りの前後に判然と記載されてゐる。のみならず、種々の本生譚中に眞實の祈誓（saccakriya）といふことを高調し、何か大事變が起ると菩薩は所謂「眞實の祈誓」を發する時、その念力によつて、不可意の事變が消滅したといふ昔物語を出してゐる。之はまだ生を隔てゝの將來に關したことではないから、本願といふことが出來ぬけれども、ともかく、念願力がそを實現するの力を有するといふ意味を含む點に於て、後に本願思想となるべき一要素たるや疑ふべき餘地がない。之より進んで梵語で傳はるJatakamala及び、同書の翻譯とは云ひながら、實は思想に於て今の梵語原典よりも複雜化してゐる漢譯「本生鬘論」となるや、物語りの材題自身からすれば前の本生譚と同じきものでも、その中に盛れる宗教的意義となれば前よりも一層深化して來た。殊に漢譯本生鬘論中にはその第十二として稱念三寶功德緣起を擧げ、念佛稱名の功德を說いてゐる程で、本願思想の先驅として重大な意義を含むものが尠くはない。かくして最後の六度集經となるや、之は言ひ得るならば小乘のヂヤータカが將さに大乘化せんとした時の產物なるだけに、本願思想も著しく明白となり、總願としての將來成佛の誓ひは勿論のこと、所謂別願思想の萌芽さへ見ゆるに到つたのである。即ち菩薩が何にか不當に苦められた時、自らは之を忍受しながらも將來、成佛の曉には、特に先づ當該苦因を除去せんとの誓願である。一二の例を擧げるならば、——昔て菩薩が前生に於て修行者として忍辱行に住した時、迦梨王といふ惡王ありて、菩薩の身體支節を割いた。菩薩は自ら之を忍受しながらも「菩薩念じて曰く、我れ上道を志すや、時人と爭ふことなし。而もこの王、尙ほ我に刀を加ふ。豈に況や黎庶に對してをや。願くば吾れ佛位を得

なば必ず先づ（惡王）を度して衆生に對してその惡を爲すを効さしむる勿からん」（第五卷）と。尚ほ一例を擧ぐれば、菩薩が甞て獼猴なりし時、人を救ひて却て裏切らるゝや、「自ら念じて曰く。吾が今の勢の度し能はざるものは願くは、その來世に常に諸佛に逢ふて道行を信受し、之を行ふて度することを得て、世々に惡を念ふ斯の人の如きあることなからしめん」（同上）と。即ち共に將來、佛に成るといふ總願と同時に特定の惡人を濟度して世の害惡を除去せんとしたのを、言ひ得るならばその別願としたものである。未だ斷片的で且つその誓願も消極的たるを免れぬけれども、後に整へる積極的本願もかゝる所から發達したことを思へば決して輕々に見逃してはならぬ材料である。

かく、本生譚系統の文獻を追ふ限り、六度集經に於て本願思想は可なりに熟して來たけれども、何んと言つても六度集經は未だ小乘の色彩を脫せざるものである。こゝには十方諸佛の思想も見え、授記作佛のことや、變生男子のことや、般若經で有名な常啼菩薩の先驅的傳說もあり、加ふるに或る意味に於ての迴相廻向風の萠芽もあるけれども、菩薩といへば、凡て釋尊の數々の前生に限り、未だ種々の菩薩が諸方に同時に存在して、種々の誓願を起すといふ所まで進まぬ。之を一進せしめて同時存在の諸菩薩を認め彼等に種々の本願あらしめたのは大乘に屬する經典文學である。

四

私は茲で大乘と小乘との區別を詳論してゐる暇がないから、本願思想の理解に必要な範圍だけに就て、先づ述べて、然る後、本願自體の問題に移らう。

小乘の目標とする所は、個人的解脫で必ずしも他を帶同し救濟するをその必然的條件とせぬ。その最高理想とする地位も佛弟子即ち聲聞たるに滿足して自ら正等覺者としての如來となつて、一切衆生を濟度するが如きは、望んでも得られぬ所と見る。佛陀たることは眞に擇ばれた人が數億歲に一度び出づるもので、而も決して二佛が並んで出てないと解するを

通則とする。從つて佛陀たることを求むる所の菩薩といふも專ら釋迦佛（若しくは過去佛）の前生時代のことで、同時に文殊、普賢、觀音等の諸菩薩あつて種々の誓願を立てゝ無數の善德を修しつゝあるといふが如きは小乘の許さぬ所である。之に反して大乘の特質とする所は、自ら佛陀たるが如くに人をも佛陀たらしむる所にありて、言ひ得るならば佛位の社會化をその必然的條件とする。從つて何人と雖も苟も志をさへ立つれば佛陀たることが出來ると同時に、已に出來上れる佛陀も一人釋迦佛に限らず、諸方に種々の佛陀あり、その候補者としての菩薩にも、種々あつて各々佛國土（Buddhaksetra）の建設に努力しつゝありと見るのが、小乘の個人的解脫を理想とするのと大に異る所である。

かく大乘の特質を定めて、然らば大乘經典中に於ける本願思想開展の經過はいかにといふに、大乘には數百種の經典あり、無數の佛、菩薩を立つるに應じて、その本願にも種々あるけれども、面白いことは此間に亦、發達の脈絡を見出し得べき手懸りのあることである。それは即ち本願條項の增加振りを調査することである。例せば或る菩薩に六願あり、或る佛に十二願あり、或る佛に二十四願ありとすれば之は軈て一定の秩序的發達の階段を示すものであらうといふ見當である。勿論、實際をいへば單に數目の多少から許りで、發達の前後を定むることは可なりに危險で、數と同時に思想內容の性質をも考へて然る後に之を定めねばならぬ。併し略ぼ同じ思潮に屬する諸經典內に於ける本願條項の多少は、その間に於ける發達の經過を示す有力な表徵たることは爭ふべからざる事實である。而もこの數目の增加開展には一定の秩序の存することは、已に原始佛教資料と考へらるゝべき經典內に於て明言し置く所である。例せば、五蓋障や七覺支に關して「この五蓋障や七覺支の說は外道不信の徒も知つてゐることではあるけれども、いかにして五が十になり、七が十四の數に開展することを知つてゐるのは佛教徒許りである」といつてある類である。私の調べた限り、大乘に於ける本願思想も亦、實にかゝる數的法則に從つて、開展したことは、從來、學者の餘り氣のつかぬ所であるけれども、文獻的研究上、疑ふべからざる史的事實であると思ふ。

五

前に述べた如く、本生譚に從へば、佛陀はその前生、菩薩時代に於て、善事といふ善事をあらゆる形に於て履行したことになつてゐる。而もそれを最極完全な程度に於て實現したといふ所から之を波羅蜜（パーラミター）（Pāramitā）即ち完全行と名づけ、波羅蜜を行するを菩薩特有の修行と見做すやうになつたのである。（波羅蜜を亦度と譯すこともある。）且つ菩薩の諸善萬行を六類又は十類に分類して所謂、六波羅蜜又は十波羅蜜とすることは、本生譚分類の方式で、殊に六波羅蜜とするが通例となつた。本生經典の最後期を代表するヂャータカを六度集經と名けた所以もこゝにある。即ち菩薩の諸徳を慈善（布施）、德行（持戒）、忍住（忍辱）、努力（精進）、精神統一（禪定）、明智（智慧）の六德目に分類して、その實例として種種の物語を配置するといふ仕組みをとつたのである。

かく、六波羅蜜を修行することが、菩薩の特徴となるや、大乘に到つて菩薩思想がその中心を占むるに及びて、六波羅蜜思想も非常の開展を遂ぐるに到つたのも勿論である。或る意味からすれば、大乘教の種々相も所詮、六波羅蜜思想の分化に外ならぬといつて然るべき程である。從つて本願思想も亦、この六波羅蜜に關聯して考察さるゝやうになつたのも自然の數であるが、殊に六波羅蜜を行することは、全體として總願に回向する所以であると同時に、その一々は亦、他日淨土建設の曉に於ける淨土を道德的文化的に特徴づくる所以の別願と考へらるゝに到つたのは、實に小乘の本生經になき、大乘經典の一特徴である。

之を文獻に徵するに、六波羅蜜と本願とを聯關せしめ、之によつて總願と別願とを兼ねしめた最も古きものは、小品般若（Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā、八千頌般若、道行般若）であらう。蓋し般若思想はもと、六波羅蜜中、第六智慧（般若）波羅蜜より開展したもので、總して初期大乘を代表するが、特に最も早く手頃に整へられた小品に表はるゝ文獻

は大切な意義を有するものである。小品般若中、本願思想を說けるはその第十九章甚深義品で、こゝに即ち六波羅蜜の一一を行することによつて、消極的には自己內心の私欲を征伏するの結果として、あらゆる苦みや怖れから解脫すると同時に、この功德によつて將來、建設さるゝ淨土には初より苦痛も怖畏も不如意もなからしめんといふ本願を立つるのが、般若に依る菩薩精神であるといふ旨を力說したのがそれである。試みにその大要を擧ぐるならば——

布施波羅蜜（完全なる捨離）を行することによつて惡獸と雖も恐るゝに足らぬ。それは菩薩が元來、身體を捨つることを何んとも思はぬからである。併し將來建設の佛土には初より、惡獸なからしむるを誓願とせねばならぬ。持戒と忍辱とを行することによつて精神的には怨賊からの怖れを解脫することが出來るけれども、將來の佛土には初より全く怨賊なからしむるを誓願とせねばならぬ。精進を行することによつて心の渴愛が斷ぜらるゝので、渴水の苦みを斷し得るも、佛土には、初より八功德水をして充滿ならしむるやう誓願せねばならぬ。禪定によつて法喜禪悅食を得て飢餓を脫し得るも、淨土をば初より飲食充足の處たらしめやう。智慧を修習することによつて、人に病が常なりと達觀して病苦を脫するけれども、將來の淨土をば初より疾病のなき健康地たらしむるを誓願せねばならぬ。——といふが之である。（梵文原典）三、三五三、施護譯、佛母般若第十八卷、月七50）

即ち各項共、前半は消極的で、般若に基く眞空觀によつて一切の苦痛より精神的に解放さるゝの功德を明にしたものであるが、その後半は眞空力の應用として他日、淨土を建設する際には之を妙有の方面に轉換して、積極的に初より道德的に文化的に完備したものにしやうといふ本願を明にしたものである。之を先きに擧げた六度集經などに表はるゝ本願思想に比較するに、系統を確かにそこに惹きながらも、之を六波羅蜜に配當して別願としたのと、更に判然と淨土の理想を積極化した所が、何んといつても著しき大乘的開展と言はねばならぬ。而もこの六願思想は、爾後種々に開展したあらゆる本願條項の基調となつた點に於て、簡單ながらも、本願史上、最も注目すべき文獻であらねばならぬ。

かく小品般若經は、初めて六度に結び付けて六願思想を確立したが、數目的に云へば文獻上、この次ぎに來るのは十願思想である。蓋し十波羅蜜思想に應ずるの本願數で、華嚴經を中心として、盛に主張されただけに、佛教教理史上、矢張重大の地位を占むるものである。併し之を六度を中心としたものに比すれば、後に述ぶるであらう如く、この系統に屬するものは、その後大なる發展を遂げざる點に於て、何れかといへば、傍系的本願と名けて然るべしと思ふので、私は簡を欲して私はこゝでは之を省略したいと思ふものである。

六度を中心として、先きに擧げた數目倍加で進むを佛教の特色とするの立場からすれば、十二願思想を以てその正系的發展とせねばならぬ。之よりその倍數の廿四願、廿四の倍數の四十八願となるに到つて、その最も整調を得た開展順序となるもので、而も何れも立派な文獻の支持を保てゐる本願數である。併しながら實をいへばこは一應の配列順で、もつと細かに研究して見る時は、倍數的に進んだと見るよりは寧ろ次第に六願づつ增加して四十八願まで漕ぎつけたと見る方が寧ろ至當のやうである。卽ち若し完全に揃へることが出來るとすれば、六願、十二願、十八願、廿四願、三十願、三十六願、四十二願、四十八願となるべき進展振りである。勿論、實際をいへば、この中、私は未だ獨立した文獻中に十八願と四十二願との例は、見出しかねてゐるけれども他は何れも判然と文獻的に見出し且つ系統づけ得るものゝみである。のみならず十八願說も或る意味からすれば附屬の形で十二願經の中に見出すことが出來るから、殘るはたゞ四十二願說のみなる點に於て、私は、本願の開展は右系列の順で進んだに相違がないと、少くも今の所では、確信してゐる。而も此事は、私の知れる限り、何人も判然と指摘せぬ事實と思ふから、以下、十二願より四十八願に到るの順序に從つて之を文獻的に立證しながら、この間に思想內容の變遷をも尋究して見よう。

七

先づ十二願說からするに、その最も明白なるは藥師如來本願經にある十二願文である。併し實を云へば之は大乘佛教の末期に當つて密教思想に伴ふて起つたものであるから、直ちに般若の六願思想を繼承し開發したものと見る譯に行かぬ。私の調べた限り、小品般若と略ぼ同じ潮流の產物で而もそれより稍々遲れて成立したと思はるゝ經典中で、十二願（及び十八願）を骨子として本願思想を述べたものは阿閦佛國經である。之には支婁迦讖と菩提流支譯と二譯あれど、略ぼ同一內容で、東方に阿閦佛（Akṣobhya 不動）あり、現にその國土に於て衆生を敎化しつゝありといふ信仰を基として、その佛陀の菩薩時代に於ける本願より、本願成就の結果たる佛土の狀態に及び、乃至、佛陀の敎化振よりその涅槃に到るまでの有樣を說くを主意としたものである。蓋し阿閦の信仰は將來佛としての彌勒（Maitreya）に次いで古く起つたもので、而も彌勒佛の何れかといへば小乘敎的なるに對して、阿閦の信仰は般若思想を背景として立てられただけに、純大乘的で、初期大乘時代に於て信仰界に最も勢力のあつた佛陀である。その本願はこの佛陀が過去因位にあつて、大日如來に對して誓約したと考へらるゝもので、主として自己の修行方針を立てゝ誓言したことになつてゐる。その個條は私の數へた限り、總計二十一になつてゐるけれども、その中心となれるは十二ケ條である。前の四ケ條は未だ阿閦即ち不動の名を得ざる以前の言はゞ豫備的誓約であり、後の五は經典の文體からしても附錄樣に思はるゝもので、核實は中間の十二ケ條と見るが至當である。十二ケ條とは

一、凡ての修行を一切智（佛陀なること）に廻向すること。二、一々の言語は悉く念佛に相應すること。三、生々出家すること。四、出家して更に十二頭陀を行すること。五、四無碍智を成就すること。六、行住座の三威儀に住すること。七、根本罪を犯さぬこと。八、婦人に對して說法して欲念を起さぬこと。九、佛菩薩の說法に對しては必ず之を諦聽すること。十、外道異端の說を聞かぬこと、十一、財施法施に當りて平等心に住し、彼此の區別を設けぬこと。十二、罪人を見ては必ず之を救ふこと。（大寶積經不動會、地一 82-83. 阿閦

佛國經上卷、地八(52)

である。その內容からすれば必ずしも、小品般若で提出された六願思想と密接の關係を有せぬやうであるけれども、ともかく十二を中心としたといふ點に於て、先づ以て前の六願を豫想して之を二倍にしたものと解し得べきであらう。のみならず、之は單に自己の修行に關する誓言であつて、佛國土を建立して衆生をそこに到らしむる願ではない。經典にはこの外、積極的に國土の功德を述べた所あり、而もそれは內容上明かに小品般若の六願より出發して大品般若の三十願に到る中間思想を代表するものである。即ちこの點に於て阿閦佛國經は小品より大品に到る間の產物たるを告ぐるものあり、前の六願とこゝの十二願との間に於ける史的連絡の極めて密接であることを明白にすといふべきである。

然らばその淨土の積極觀とはいかにといふに、面白いことには、こゝに吾等は十八願說の一つの型を見出し得ることである。勿論、經典自身には別に之を十八と銘を打つて說いてゐる譯でもなく、また、特に之を本願と名けて說いても居らぬ。併し私の數へた限り、阿閦經に於ける淨土の特相は大凡、十八ケ條に收まるべく、而も其等は後の經典になると何れも本願の形で說かれてゐる所からすれば、之も矢張、阿閦佛の因位時代に於ける本願の結果と解して然るべしと思ふ。今試みにその個條を擧ぐるならば——

一、國土に三惡道なきこと。二、凡ての人は善を行ふこと。三、國土平坦なること。四、その地柔軟にして綿綖の如きこと。五、人民に惡色醜卑なるものなきこと。六、婬怒痴薄の人なきこと。七、國土に牢獄なきこと。八、邪說異道なきこと。九、樹木に花實繁り、人人はその樹より種々の衣をとること。十、衣食共に芳香あること。十一、飲食自然に現出すること。十二、住所は七寶より成ること。十三、八功德水充滿すること。十四、婦人貞淑にして天女の如くなること。十六、人々の寢床も七寶よりなること。十七、人々の飲食が天人に勝ること。十八、國に王者の號なく法王のみあること。(地八、(55)を見よ)

といふが之である。之を前の十二願に比するに前者の何れかといへば、出家主義を中心とするに對して、こゝに來ると著しく在家的理想の高調されてゐるのは、その大に異る所である(こゝに彌勒淨土思想の影響あるを見逃してはならぬ)。

而も前にも述べた如く、内容的に言へば、小品より出發して後の彌陀中心の廿四願說や大品般若の三十願說に連絡するのが、寧ろこの方面である所からすれば、この方面は寧ろ本願思想の全潮流に乘じたものといふことが出來やう。便利上、前の十二願を自行願と名け、後の十八願を淨土願と名くるとして、問題となるのは兩者の關係に就てゞある。之を性質の上からすれば前の方は因行で後の方はその結果であるから、兩者相合して初めて、完全なる本願の體系をなすべきものであるけれども、私のこゝで最も知り度く思ふのは、十二數と十八數とが同時に成立したものであるか、はた、その間に何程か歷史的開展を經たものが後に一所に纏められたものであるかといふことである。差し當り私は之を次ぎの如くに考ふるものである。

惟ふに、阿閦の本願は十二を以て、主體としたことは、後に阿閦の變形として藥師が立てらるゝに及びて、その本願を十二と確定したに徵しても疑ふことは出來ぬ。併しその性質上、前の十二願だけでは、淨土に關する圖案を欠く點に於て不完全を免れぬから、必ずや十二願と共に淨土建設に關する本願も初より何程か作つたに相違があるまい。而もこの分は之より先きに成立してゐた彌勒下生時に於て實現すと期待されつゝあつた理想國の型を襲ひ且つ前にも述べた如く、小品より出發したる積極觀に系統を惹くだけに、次第に開展して、遂に數に於て主本願たる十二を超過して十八にまで進んだ。かくして遂にその邊で一定の形に纏められたのは、現在、吾等に傳はる阿閦經となつたものである。蓋し阿閦佛信仰は決して、阿閦佛國經から初まつたものではなく、寧ろ信仰としては早くからあつて、而も種々の變遷を經て、初めて現今傳はるが如き經典にまで纏められたものであるからである。この意味に於て私は淨土願の考も、その內容からすれば前の十二願と初めより並び存したけれども、之を特に、十八特相に纏めたのは前の十二を豫想して、之に六を加へるの意識からしたものと、その間に歷史的開展の一段階を置いて然るべしと思ふ。

かく、阿閦佛國經に於て十二願說と十八願說とを見出し得るとして、次いで來るべきは廿四願說であらねばならぬ。而もこは文獻上、判然と廿四と銘を打つて說かれてある本願數である。即ちこれは初期無量壽經に說かるゝ法藏菩薩(Dharma Kara 阿彌陀佛の菩薩名)の本願で、支婁迦讖(A.D.147——186)の譯した無量清淨平等覺經(これを漢譯ともいふ)と、支謙(A.D.223——253)の譯した阿彌陀經(之を呉譯といふ)とが之を代表する文獻である。蓋し阿彌陀佛思想の起源に就ては種種の異論もあるけれども、ともかく、阿閦佛思想よりも稍々遲れて、而も阿閦思想に激發され且つ之に對抗して起つたもので、阿彌陀の極樂世界を西方に配したのも、率直に云へば、阿閦の東方に對立せしむるの趣意に外ならぬといつて然るべき程、兩信仰の間に密接の關係があつたといふことだけは疑ふ餘地があるまいと思ふ。從つてその廿四願も阿閦の十八願に負ふ所の多かつたのは勿論で、或る意味に於て彌陀の廿四願は阿閦十八願の修正增補であつたといふも不可なき程である。試みに平等覺經によつてその廿四ケ條を擧ぐるならば——

一、國土に三惡道なからしめん(阿閦淨土願第一)。二、我が國土より再び三惡道に退轉せじ。三、人民悉く金色ならん(阿閦第五、惡色醜卑なきの願と同じ)。四、天上人間の間に區別なからしめん。五、國土の人々は悉く宿命通を有せん。六、天眼通を有せん。七、他心智を有せん。八、飛行自在ならん。九、天耳通を有せん。十、人々に欲愛なからしめん(阿閦、第六)。十一、人々は凡て遂に涅槃に住せん。十二、聲聞の弟子無數ならん。十三、自らの光明無量たらん。十四、壽命も然らん。十五、國人も無量壽たらん。十六、國人に惡心なからん(阿閦第二)。十七、我が名十方に聞えて、諸の衆生、我が國に生れんと願はん。十八、清淨心に住して我を念ずるものに對して、弟子と共に來迎せん。十九、惡人と雖も我が名を聞いて懺悔するものは我國に生れん。廿、我が國の諸菩薩は悉く一生補處位(次生には佛位を成するの資格)を得ん。廿一、國人悉く三十二相を具足せん。廿二、諸佛を供養するの資料自在ならしめん。廿三、飲食自在ならん(阿閦第十一)。廿四、我が國土に於ける諸菩薩は、說法に於ても修行に於ても佛陀の如くならん。(縮藏地八に)

之を前の十八願と比較するに、その合するは表面上からすれば、僅か五六ケ條に過ぎぬやうであるけれども、その大

體の精神に於ては非常に能く似た所多きは爭ふべからざる事實である。のみならず之を支謙譯の廿四願說に徵するに、大體に於て平等覺經のそれと同じきも、また異る點もあり、而もその中には所謂、國土清淨の願（阿閦、第三第四）や、女人に對する變生男子の願（阿閦、第十四より發達せるもの）などもありて、阿閦十八願と彌陀廿四願との連絡を一層よく明にするものがあり、彌陀の廿四願は阿閦十八願を利用して立てられたものなることは、到底疑ふべき餘地がないと思ふ。たゞ兩者の異る所は、阿閦佛國土の方は何れかといへば道德的文化的なるに對して彌陀の極樂世界は、更に藝術味と宗教味（地力的）の加はつたのと、前者の方はより現實的なるに對して、後者の方は全く理想化されたことである。彌陀佛を推し立てゝ阿閦を超越せんとした趣旨も亦之に外ならぬ。之れ即ち阿彌陀思想の興起によつて、阿閦の勢力が次第に衰へ、遂に後に到つて改めて阿閦の變形として藥師を推し立て、彌陀信仰とも調和しながら、その復活を斗らねばならなくなつた所以である。

九

かくして、阿彌陀の信仰は阿閦のそれを止揚し超越せんとしたけれども、本願思想の進展は決して單に之で止まらなかつた。彌陀本願の著しく他力的なるに對して、何れかといへば自力的なる阿閦本願を支えて、更に彌陀の廿四願を超越せんとした運動が起つた。即ちそれは大品般若經（大般若經第二分＝二萬五千頌般若＝放光般若＝光讚般若＝羅什譯二十七卷本摩訶般若經等）に表はれた本願思想である。蓋し大品般若は疑もなく小品般若を增補擴大したもので、而もこゝに到る間には、阿閦思想にも彌陀思想にも大乘的根柢を與へて、その基礎的背景となりつゝも、特に密接の關係ある阿閦思想を支へながら、それ自身の優越的地位を確保せんがために、特に本願に關する一品を設けて、廿四願說を超越せんとしたものであらねばならぬ。

大品般若で特に本願を明にしたるはその第五十八夢行品（羅什譯による）で經典の體裁からすれば、疑もなく小品菩薩品の內容を開いて獨立の一品としたものである。即ち小品が六波羅蜜に應じて六願を立てたのを大體、そのまゝ繼承すると同時に、更に之に廿四願を加へて、三十願とし、淨土建立のため菩薩の修すべき本願としたがそれである。例によつてその內容を列記するならば

一、衣食、その他資生の具を充足せしめん　閦十―十二。彌、廿三）。二、病弱者なく健康者のみたらしめん。三、國人をして相互に父母兄弟の如くならしめん。四、國人をして三乘法に於て精進し得脫せしめん。五、國人の精神を統一し悉く正念に住せしめん。六、邪見なく正見に住せしめん。（閦八？）――以上は六度に應ぜるものにて、大體、小品の六願と同じもの――七、衆生をして涅槃に於て正定者たらしめん（彌、十一、必至滅度の願）。八、三惡道なからしめん（閦一、彌、一）、九、地清淨ならしめん（閦三支謙本同、三）。十、黃金を地とせん。十一、欲愛、繫縛心なからしめん（閦六、彌十）。十二、四姓の區別なからしめん。十三、衆生に上中下の區別なからしめん、（以上二合して、彌、四？）。十四、衆生の間に色の相違なからしめん（閦五、彌、三）。十五　王者の號なく、法王のみたらしめん（閦―八）。十六、五趣又は六趣なからしめん。十七、四生の區別なく、悉く化生たらしめん。十八、國人をして悉く五通を得せしめん（彌五―九）。十九、國土に大小便の患なからしめん。廿、光明無量たらしめん（彌十三）、廿一、日月歲時の名なからしめん（彌十五？）。廿二、壽命無量たらしめ（彌十四―十五）。廿三、悉く三十二相を具足せしめん（彌廿一）。廿四、善根を植ゆることを以て諸佛の供養とせしめん。廿五、三毒四病なからしめん。廿六、二乘の名なく、凡てを一切智（佛乘）に歸入せしめん（彌廿七、說一切智の願）。廿七、國土に增上慢の人なからしめん。廿八、光明無量、壽命無量、弟子數無量たらしめん（彌十二―十四）。廿九、國土をして廣大なること無數の佛土を合したるに等しからしめん。卅、生死悠久なるも實には生もなく解脫もなしと達觀せしめん。（羅什譯般若經第十七卷、月四 22-23。無羅叉譯放光般若第十三卷、月二 151。尙ほ大般若經初分願行品も同じく三十願である）

之を前の阿閦の十八願、彌陀の廿四願に比較するに括弧內に指摘した如く、兩方に通ずるものを利用したこと五ケ條、廿四願說のみにあるを利用する十二ケ條、阿閦經のみにあるを利用したこと二ケ條許りの勘定になる。即ち大體に於て廿四願說を最も多く利用した點に於て、疑もなく直接に廿四願說から發展した本願なることを示してゐる。けれども、之を他方面からすれば、王者の號なからしめんとあるが如き、阿閦本願のみにあるものをも利用した上に、廿四願說にある他

力主義的本願をば概ね省略してゐる點からすれば、この大品の三十願は、前にも述べた如く、何んと言つても、廿四願說を超越して、而も般若自身の立場から、その妙有的方面を建設せんとした思想的產物であると言はねばならぬ。殊にその第三十願に於て、生死を一如に見るの思想を高調した邊り最もよく右の消息を傳ふるものと言ふべきであらう。

一〇

大品般若は三十願說を以て彌陀中心の廿四願說を超越せんとしたに對して、更に再びその三十願說を超越せんとの企てが、彌陀信仰の側から提出せられねばならぬ。文獻上、この要求に應じて表はれたのは法賢の譯出した無量壽莊嚴經（三卷）の三十六願說である。蓋しこの經典は宋代になつてから譯出されたもので、譯出年代（A D 九九一—一〇〇一）からすれば魏譯（康僧鎧譯、大無量壽經）唐譯（菩提流支譯、大寶積經無量壽會）の四十八願說の後に來るけれども、本願の數及びその性質上からして疑もなく四十八願說の前に成立した原典が、長く保存されて、偶々漢譯さるゝの運命に逢ふたものに相違がないからである。之を前の廿四願說に比すれば、十二願の增加となつてゐるけれども、一足飛びにそこに到つたものではなく、この間に大品般若の三十願を豫想して、之に一階段としての六願を增加しての產物たることは、前の進展振りに照らして疑ふことが出來ぬ。

然らばこの三十六願說になつて、いかなる條項が加つたかといふに、餘りに煩はしくなるのを恐れるので、私はこゝで、その一々を舉げて比較するの手續きを省きたいと思ふが、結論だけを舉ぐれば、大凡、次ぎの如く言ひ得ると思ふ。

（一）三十願說を超越せんとしながらも、內容上に於ては、格別に般若的氣分を利用した形迹が存せぬ。蓋し般若特有の立場の自力的道德的なるに對して、彌陀系のそれは他力的なる所に存するの關係上、前の廿四願說を超えんとした部分を利用し得なかつた爲であらう。（二）、三十六願說に到つて加はれるものは之を四十八願說からすれば第廿六那閭延身の願以

後に置かるゝ部分である。即ち主として、名號の功徳を讃嘆した部分で、般若三十願の法意に省いた方面を力說し且つ擴げたものである。

即ち之に依つて見れば此三十六願說は量に於ては前の三十願說を超越せんとしたけれども、質に於ては之を止揚的に利用せんとしたよりは、寧ろそれと無關係に特有の方向に進まんとした産物といふことが出來やうと思ふ。併し之を後の四十八願說に對比すれば、肝心なる念佛往生の願を欠きなどして、未だ不徹底を免れざる所あるは言ふまでもない。

三十六願の次ぎに來るべきは、順序上、四十二願說であらねばならぬ。而も若し之が般若部系又は阿閦佛系の經典内に見出さるゝとせば、同じ潮流に掉しながらも、やゝ異れる方向に向へる兩系統が本願數の立て方に於て互に追ひ拔きの競爭をなした事實を示すの面白き材料を提供することにならう。が、不幸にして前にも斷つて置いた如く、私は未だ何れの系統に屬するものからも四十二願經を見出しかねてゐるのは遺憾である。私は過般去る學會でこの問題に就て些か講演した際に梵文 Sukhāvatīvyūha（大無量壽經原典）の願數を四十二と數へたが、あとで能く調べた所、私の所有する原典が丁度、四十二願を終つた所から數頁、落丁になつてゐたのを見落して、そのまゝ之を承認した不注意に基いた斷定であつたことを發見して、恐縮した次第である。四十二願文のある經典は私の未だ見出し得ぬことを再び述べて、こゝであれを訂正して置きたいと思ふ。

二

かくして四十二願說を飛んで、四十八願說に及ぶに、之は、改めて言ふまでもなく、最も整へる形に於ける彌陀の本願として吾等に傳はるものである。即ち所謂、大無量壽經（略、大經、魏譯、康僧鎧本）、及び大寶積經無量壽會（略、寶積

經本、唐譯、流支本）である。前者は西紀三世紀（二五二）に於て、後者は七世紀末から八世紀の間（六九三―七一三）に譯出されたと傳ふるものであるけれども、前者は支那に於てかなり多く加筆された形迹の明白なるものがあるから、眞に梵文を代表するは寶積經本であらう。併し四十八願の順序及び内容となれば兩本共、小異を除いては概ね一致する點に於て何れに從ふも同じと思ふから、こゝでは、便利上、唐僧鎧譯と傳へらるゝ大無量壽經により、傍ら唐譯及び原典を參照してその說を見ることにしたいと思ふ。たゞ玆に問題となるのは現今、吾等に傳はる梵文 sukhāvatī vyūha の願數に就てゞある。こは大體に於て四十八願本に近いものでありながら、願數となれば四十六條のみで六數基本の約束に添はぬのをいかに取扱ふべきかといふことである。正直の所、私はこの點に就て可なりに苦心したけれども、未だ適當な解釋を與へかねてゐるものであるが、結局する所、梵文無量壽經の編輯者は、三十六願說邊りから四十八願に進む途中に從來の慣例的約束を忘れて、四十六數で滿足した結果ではあるまいかと、今の處、安直に推定してゐる。蓋し四十八願說の確定したのは、魏譯の原本ではなく、寧ろ唐譯の原本と信じ得べき理由もあつて、かなりに遲いことであるから、こゝに到る間には種々の動搖があり、その動搖中に言はゞ未定稿として出來たものが、偶々保存されて今日に傳はつたものと考へ得べき餘地があるからである。とにかく、四十六願本があるとしても、彌陀本願の最も整へるは、上述の開展振りからして四十八願說であらねばならぬ。

然らば四十八願說の特長は何處にあるかといふに、先づ初の廿四左願内に之を求むるならば、こは大體に於て平等覺經の廿四願と同じであるけれども、たゞ一つ最も著しき特質を發揮した。即ちそれは十念往生の思想である。梵文よりその全文を譯出すれば――

若し我れ菩提を成就したる後、無量無數の佛國土内に於ける衆生逹が我が名號を聞き、我が國土に生れんとの心念（Citta）を發し、諸善根をそこに手向けたりとせんに、少くも十念の發動相續によつて（dasacitta-utpādaparivartaiḥ）

　我が國土に生ぜずとすれば、然る間は我は無上正等覺を證得せざるべし。但し無間業を犯せるもの、及び正法に毀謗と障礙とをなせるものを除きて。（梵第十九願。魏譯第十八及び第卄願。唐譯第十八願）。

といふが之である。彌陀の名號を念ずることによりて往生すべしといふは已に卄四願時代からあることとなれど、之を十念相續と切りつめてまで强調したのは、こゝに初めて表はれたもので、所謂、他力易行道に對して一進展を來たしたものとして、四十八願說の眼目となつたものである。殊に魏譯となれば、この第十八願を「至心に信樂して我が國に生ぜんと欲し、乃ち十念に至るものは云々」と說き、專念することと自身が直ちに往生の因たる旨を高調してゐるが、之は果して原典の正當な譯か否かに關しては、學者の間に異論があるけれども、ともかく乃至十念のことは梵文原典より魏譯、唐譯に共通することにて、他力本願の根本基調として、淨土敎に於て最も重ぜらるゝものである。たゞこの本願に於て、目障りになるのは、無間業者（五逆罪を犯せるもの）と誹法者とを除くとて、往生に一種の道德的制限を附したことである。而もこは前の卄四願說にも三十六願說にもないとで、寧ろ卄四願說の如きは「前世に惡業をなせるものと雖も念佛懺悔する者は往生し得」（迦織譯第十九願、支謙譯第五）と言つてゐる程である。蓋し斯の如きは餘りに他力易行的となつては、遂に倫理的精進を欠くの結果になるのを恐れた爲めであらうと思ふけれども、純粹他力の立場からすれば、尙ほ徹底を欠くものあることは爭ふべからざる事實である。之を更に前の惡人往生の願に結び付けて、純粹なる他力本願にまで進めんとしたのは法然を經て親鸞の淨土敎となつたもので、この意味に於て法然、親鸞、殊に親鸞の他力觀は、大無量壽經自身を超越したといふことが出來やう。併したとへ、一定の條件を附したとはいへ、兎も角、十念相續の念佛によつて往生すべしとの願がこの四十八願說に來つて完成したのは、何んと言つても四十八願說の最大特長と言はねばならぬ。

　かく初めの卄四願內に於て「從前の卄四願說（三十六說にも）中になき特質を發揮した四十八願說は、後の卄四願に於て、更に三十六願經以上に新條項を加へて、極樂世界をして彌が上にも完全ならしめんとしたのである。併し茲で四十八願の

一々を述べてゐては餘りに繁雜になるから、後の廿四願だけを擧ぐることにしよう（但し番號は魏譯及び唐譯によること）

一―二十五、多少の相違あれど、大體に於て平等覺經の廿四願と同じ。廿六、國人は悉く那羅延神の如き身體を有せん。（宋法賢譯卅六願說廿二願）。廿七、國土の形色、極めて嚴淨ならん。廿八、何人も廣大なる菩提樹を見得べし。廿九、國人は悉く四無碍智を得て說法自由ならん。（吳十八、宋譯廿三）。卅、國人の智慧も辨才も無限たるべし。卅一、國土平坦にして淸淨なること鏡の如けん、（吳三、宋廿五）。卅二、國土内に妙香充滿せん（宋廿四）。卅三、佛陀の光明力によりて諸土に於ける人々の身心が柔軟たらん（宋廿六）。卅四、名號を聞くことによつて、何人も離生と總持とを得ん。卅五、名號を聞くことによりて女人は轉じて男子たらん（宋廿七）。卅六、名號を聞くことによつて、人々は梵行を修して遂に成佛せん（宋廿八）。卅七、名號を聞いて菩薩行を修し、必ず人天に敬せられん（宋廿九）。卅八、國土の人々には、衣服自然に成就せん（宋卅）。卅九、我が國土に生れたるものは、身心自ら淸淨にして快適なること、解脫者の如くならん。（宋卅一）四十、國人はその寶樹の間に無數の他の佛國土を見得べし。四十一、國人は凡て諸根を具足して、また不具者なからん。四十二、我が名號を聞きて、他土の衆生は善分別勝三昧（Suvibhaktavatti Samādhi）を得て、十方佛を見得べし（宋卅二）。四十三、他土の衆生にして我が名號を聞くものは世々尊貴の家に生れん。四十四、他土の衆生にして我が名號を聞くものは、努力歡喜と修行との一致を得べし（宋三十三）。四十五、我が名號を聞くものは、普至三昧（Samantanugata Samādhi）を得て、瞬時に十方の佛を供養し得べし（宋卅四）。四十六、我が國土の衆生は隨意に欲する法を聞くを得ん（宋卅五）。四十七、名號を聞くものは、我國他國を問はず必ず不退轉位を得ん。四十八、名號を聞くものは必ずや無生法忍を得て、三寶の眞理に到達せん（宋卅六）、（南條氏、佛說無量壽經梵文和譯支那五譯對照、九七頁―一〇〇頁參照のこと）

前に三十六願の名目を省いたので、括弧內に之を指摘して、二十四願說以外、三十六願に到りて、いかなる部分が增加されたかを示すと同時に、括弧內に指摘なき部分は四十八願說に到りて初めて加はれるものなることを明にせんとしたつもりである。而して、之に依つて見れば四十八願中、後の廿四願は大體、卅六願說の延長であるけれども、特に他土に於ける衆生に對して名號稱念の功德を卅六願說以上に高調したのと、淨土に於ける文化的施設の完備を一層詳說したのが四十八願說の前者より進める特長と言ふべきである。

要するに、此四十八願說に來つて一方には他力本願の基調を定むると同時に、他方のは極力淨土の理想化に力を致し、

且つ吾等（所謂他土の衆生）に對して、念佛稱號の功德を說いて、彌陀淨土との連絡を明瞭にしたのが最大特質である。
而もその背景中には、從前の彌勒、阿閦の淨土觀は勿論、こゝには觸れぬけれども、當時一般に行はれた諸佛淨土の思想をも控えて之を精練すると同時に、特に本願數に到りては、小品の六願より出發したる趨勢に乘つて、同系統に屬する廿四願をも三十六願をも、異系統に屬する十八願をも卅願をも凡てを利用しながら凡てを超越したものである。之れ即ち少くも文獻上、この四十八願說は、本願の最上位を占めた所以で、この後、釋迦の五百願などの說も起つたけれども、到底、四十八願說の勢力に及びかねた理由もこゝにある。遮莫、更に之を種々の立場から思想的に推しつめて行く時は、この四十八願說にも種々、不徹底の所あるは、早い話が前に觸れた他力本願（念佛往生の願）の一項に徵しても明かで、本願思想の趣く所、單に之だけで止まることが出來ぬ。この後、印度にあつても、種々の立場から、言ひ得るならば之に對する修正的意見を提出した大小の本願經の生じたのも之がためであるが、殊に支那日本の淨土思想家となるや、修正の形よりも寧ろ救釋の形によつて、その徹底を計らんとの努力を生じた理由もこゝにある。

二

以上、本願思想の全潮流を追ふて、その開展の次第を調べた。併し佛教の本願に關する文獻は決して之で盡きた譯ではない。以上の主潮流に對して、或はその傍系として、或はその後繼として、尚ほ種々の本願說のあることは前已に觸れ置いた所である。彌勒の本願、文殊普賢の本願、觀音藥師の本願といふが如きは即ち之である。殊に文殊師利佛土嚴淨經二卷（西晉法護譯）の如きは阿閦阿彌陀の本願を豫想して、餘り成功はしなかつたけれども、ともかく、それ以上に出でんと企てたものである。之にも增して本願思想に關係深きは悲華經で、或る意味に於て本願叢書と言つて然るべき程、從前の諸本願を集めて、而も何程か、調和せんとしたものである。釋迦の五百本願といふもこの中で記されてゐるものである。

(五百本願とは蓋し本生經五百話を一々本願と見做した說であらう)。故に本願思想を藝術的に研究せんがためには是等の文獻にも涉りて、その相互關係を研究すべきは勿論であるが、併し是等は何んといつても、氣韻の上からしても、數目的規定からしても、主潮流程、一貫した精神を有せぬことは爭ふべからざる事實である。これ私はこの論文に於て、是等の點を度外視した所以であるけれども、部分的に云へば、是等に到りて主潮流の足らざる所を補ふた所もあるから、次ぎの組織的研究に際しては何程か之を利用せんとすることを斷つて置きたいと思ふ。

以上、述べた所を縮めて云へば、本願思想の開展は、次ぎの數ケ條に收まる。

一。本願思想の大に發達したのは大乘になつてからのことであるけれども、その起源的萠芽は已に原始佛教に含まれること。殊に本生譚に深き關係のあること。

二。本生譚より六波羅蜜思想開展し、六波羅蜜に應じて六願思想の起れること。

三。六願思想を原型として般若敎系と淨土敎系とが交互に本願數を展開し、次第に六數づつを加へて遂に淨土敎系の四十八願まで漕ぎつけたのをその頂點とすること。(此意味に於て本願思想の發達にも阿毘達磨流の數目的累加法が行はれたといふべきである。)

四。之を思想內容からすれば、初めは專ら消極的に罪過や困苦なからしむるを目標としたけれども、次第に之を積極化し文化的道德的藝術的完備を本願內容とするに到つたこと。

五。本願は淨土建設の方針なり、圖案なりに外ならぬから、本願思想の開展とは所詮、佛教に於ける理想的國家觀の發達に外ならぬこと。

(乙)　本願思想の道德的文化的宗教的意義

本願とは要するに自ら完成者(覺者)となるの誓にて、且つ自ら完成者たると同時に他をも完成者たらしむること、即ち全世界を擧げて理想的社會を實現せんとする遼遠の未來に及ぶの願望である。而して種々の本願個條なるものも、所詮この理想的社會の條件を四方八面より具體的に規定せんとしたものに外ならぬことは前に述べた通りである。之を一種のユートピヤ的憧れといへば勿論、それまでゝはあるけれども、併し人類が自分の住む現實界の不完全に痛感して、空想ながらも一種の理想郷を定むることが、軈て人類をして向上發展せしむるの一動因たることを思へば、こゝに吾等は或る意味に於て最高文化の指導的精神を見出し得やう。而も面白いことには、本願構成の當時にありては、他方佛國土ならでは、實現し得られじと考へられたことで、今は此土に於て實現せられ、若しくは實現せられんとしつゝある事柄も尠くはない所から判ずれば、宗教的理想以外に、こゝに生きた文化的意義を見出し得べき希望もあらうといふものである。ともあれ、私は前には專ら本願の歴史的開展を述ぶるに急で、その思想内容を組織的に考察するの方面を缺いたから、上の材料を使用しながら、こゝでは主として、本願思想に含まる完全なる社會狀態に對する佛教の理想を二三の立場から眺めて見やうと思ふ。便利上、之を道德的方面と文化的方面(狹義)と宗教的方面との三立脚地からし、最後に本願思想の意義をいかやうに解することが佛教精神を貫く普遍的立脚地に契ふ所以であるかを論じて結論とすることにしたいと思ふ。

A 道德的方面より

私はこゝで、宗教と道德との根本關係から說き起さうとせぬが、とにかく佛教は初より倫理的色彩の最も濃厚な宗教であることは改めて言ふまでもない所である。リス、デイヴイツ教授やオルデンベルグ教授が佛陀の最初の說法即ち術語で轉法輪(Dhammacakka pavattanam)を英譯して「正法王國の建設」としたのは、種々の點からして最も味ひのある譯し方で、實際、佛陀は自ら法王として、正法王國を建設せんとしたものであつた。此正法王國の理想を極度まで進め而も

之を具體的に剔き出したのは實に淨土である。蓋し淨土には種々の特相があるけれども、その最も著しきは道德的秩序の完備といふ所にあるからである。この事は本願主たる佛、菩薩の名目よりしても明かなことで、彌陀の前身たる Dharmākara とは文字通りに譯せば法を與へるもの(法藏又は法作と譯してゐる)といふ意になり、阿閦(Aksobya)を譯せば「動ぜざるもの」といふ義、彌勒(Maitreya)は慈悲の義で、何れも道德的秩序又は道德的情操を本願の主人公として表徴してゐるのである。況して之を本願內容からするに何れの本願中にも、消極的には惡事、不正なからしめ、積極的には衆人共に德に進むことを說かざるものなく、淨土の第一條件は道德的社會の實現であつたことは爭ふべからざる事實である。

そこで、先づ之を統治體としての立場から眺むるに、大乘佛教には全宇宙を一法界ならしむるの理想も、勿論あるけれども、前掲の本願を通して見る限り、淨土は決して唯一ではない。西方に極樂世界あり、東方に阿閦佛土ありといふ工合で相對する諸淨土を認めてゐるのである。併し各淨土の間には最も親密なる關係あり、相互に宗教的に道德的に絕えず交涉あるを理想とした。この事は種々の經典を見るに、一佛土に何か重大盛事(概ね大說法)あれば、必ず地方佛土より言はゞ使節の派遣の記事あるに徵しても明らかであるが、殊に彌陀の四十八願となればその第廿三(梵二一)に十方諸佛を供養し得べきの願あり、その第四十願(梵三八)に十方諸佛の國土を見得るの願あり、その第四十二と第四十五(梵四〇及び四三)に禪定に入つて諸佛に見え且つ之を恭敬するの誓願ありて、何れも地方佛土と關係を結ぶことを以て、各淨土間に於ける理想的狀態としたことを告ぐるものである。故に對立する種々の淨土ありとしても、本願の精神からすれば、其等は言はゞ行政的區劃に過ぎざるもので、その間に、多少文化的特色の異りあるも、相互に何等衝突の意味を存せざるも勿論である。後に密教などに於て大日如來を中心として、諸佛諸土を統一して大曼陀羅(マンダラ)(大國土)たらしめ、西方國土も東方國土も所詮は曼陀羅會中の種々相に外ならぬと主張したのも實に右の關係を極度まで開展せしめた結果に外ならぬ。

併し、とにかく、表面上なりとも、種々の佛土が對立するとして、然らば其等の統治者は何人であるかといふに、改め

て言ふまでもなく、それは、その淨土の建設者であり、建國精神の權化である特定の佛陀である。例せば極樂は阿彌陀、阿閦佛土は阿閦佛といふ類である。而も一淨土は必ず一佛によりて支配せらるゝべきもので、此間に二佛並び出づることなきは各淨土に通ずるの規定である。蓋し各種の淨土は根本精神（總願）に於て一致するとはいへ、種々に分れてゐる所以は、種々の佛陀がそれぞれ特定の別願を以て建設した爲めで、異れる別願を有する二佛の並び立つべき餘地がないからである。況して世俗的なる王者が淨土の支配に參加するといふが如きは、淨土の性質上、到底許るし得べからざる所であつた。阿閦本願（第十八）を初めとして大品般若の本願（第十五）が判然と淨土には王者の號なく法王のみたらしめんと明言したのも之がためである。而も右の結論は一見すれば極めて簡單な論理的歸結のやうであるけれども、事のこゝに及ぶまでには、歴史的に言つて面白き經過を經てゐるから、少しく說明を加へて置かう。先づ一佛思想の方からするに、原始佛教より小乘佛教にかけては時を隔てゝ繼起する種々の佛陀を認めたけれども、同時に二佛並び出づることなしと見るが、その佛陀觀の一特徴であつた。然るに之が大乘となると、前に述べた理由によつて同時存在の種々の佛陀を認め且つ其等は相互に交涉するものと見た。併し若し其等の佛陀が同一國土を統治し敎化するとすれば、佛と佛との間に何程か異る所ありて、言ひ得るならば衝突の患あるべく、若し凡ての佛は全然、同一であるとするならば種々の佛陀を立つる必要が何處にあるかといふ難點が起らう。かくして遂に到達した結論は即ち上に述べた諸論は總願に於て一致すれど別願からすれば各佛土に各一佛といふ譯で言ひ得るならば小乘の一佛主義をこゝに應用して、而も多佛主義を守り立てやうとした苦心の結果である。次ぎに王號排斥に到るまでの經過を見るに、之を歷史的事實に徵するに阿育王時代を除いては、總じて印度の政治は群雄によつて制せられたものであるが、彼等は各々王と稱しながらも實は王道を行ふもの尠く、概ね自己の利益と權勢とを旨として人民の休戚の如きは顧みざる有樣であつた。從つて人民も所謂、王に對してはその恩惠を思ふよりも、寧ろその害を恐れたもので、佛典に屢々火難、水難、賊難の次ぎに王難の名を擧ぐる理由もこゝにある。この補充

として求められたのは所謂、轉輪王で、即ち正法を權威として平和的に天下を統一し人民をして繁榮せしむる理想的聖王であつた。而してこの理想は、種々の形に於て佛教にも採用され、先きに述べた轉法輪の用語も實にこの轉輪王の統治振りから導かれたもので、つまり轉輪王が正法を以て四海を統轄するの理想を精神界に應用したのが佛陀の使命なり自覺なりであつたと解せらるゝ程である。淨土に於ける法王思想は實にこの精神を人格化したもので、之によつて小王は勿論、輪王自身をも超越せんとしたのが、即ち王號なからしめんの本願となつて表はれたものである。而もこの精神を再び地上に引き下げて、之を實際的政治に應用せんとしたのが、印度に於ける阿育王を初めとして支那、日本に於ける佛教的帝王の理想となつたものである。特に我が日本に於て上宮法王太子が大乘佛教の精神を政治の要道とされた如き、聖武帝が華嚴の無盡緣起を以て政道の精神とされんとした如き、實にこの法王の理想を地上に實現せんとした努力であつたと解して然るべしと思ふ。

次ぎにこの法王によりて支配せらるゝ國人の道德的狀態を見るに、勿論、凡ての方面に於て道德的に完備し、少くも最高完成に向つて努力しつゝある人々の團體である。蓋し法王の統治といつたからとて、別に外的なる法律規定を以て之を統制するのではなく、自ら最高完成者として凡ての人々を完全者たらしむべく精神的に率ひ行く導師に外ならぬから、道德的(宗教的)完成を除いては、淨土存在の意義がないからである。

從つて人民相互の關係も——先覺者後覺者の差があるとしても——佛と法との前に於て全く平等で地上に見るが如き差別は全く存せぬ。殊に面白きは、種々の本願が力强く、人種平等、階級撤廢の理想を主張してゐることである。阿閦第五願に我土に惡色者なからしめんといひ、大品般若第十四願に國人をして色の相違なからしめんといひ、大經第三願に悉皆金色ならしめんとあるは、何れも同一主意に出でたもので、歸する所、色による人種的偏見を除去して所謂人種平等案を淨土に實現せんとしたものである。又大品般若第十二—十三願に四性の區別もなく、上中下の區別もなからしめんといひ、

大経第四願に[illegible]

黄白、黒の人種的争ひもなければ、所謂階級闘爭もなく、民心自ら一致協和して完備した父母兄弟の如く（大品第三）平和裡に共に道を樂み共に道に精進するのみである。殊に淨土にありては、生活、衣服、自然に與へられた既定の事實で（衣食住自然成就の願）ある上に、一法王の支配する所として異端邪説なく（即阿弥陀既定の事實）的不安からも思想的分裂からも免れてゐるのは凡ての人をして平等ならしむるに與つて力あるものと考へら堅牢と美觀と倶に關しては前出の本願中には特に明文なきも、彌勒下生時にありては、この世ですら「その時言辭一類にし勿論であるがことなし」（雜一第四十四卷）とある所からすれば法して淨土にありては、言葉の相違による面倒なきや勿論であれ御手のもの

かくの如きは、空想といへば、勿論それまでゝはあるけれども、少くも之を當世（三）水も火谷に照らして印度は種々の人種と種々の階級（四性）と種々の言語とに分れて、民心が一致し得なかつた實情を國土の人には、佛教が右の如き理想を割き出した奥底には當時の社會に對して一種の力強き反抗思想の燃ゆるものゝあつた、之は全く逃してはならぬと思ふ。

而も佛教に從へば右の如き理想的社會を作る原動力は本より佛陀の本願業力にあるの時に於てなれど、社會の各人が、謙遜で（大品第廿七）、私欲なく（同上第十一、閲第六）正念に住し（大品第五—六）、常に精進「七頁引「心を最高理想に相應せしむるの自己反省にあつたことも忘れてはならぬ。否、結局する所、或る意味からすれば、佛始末淨土觀は、自己の清淨を基礎とし出發點として構成されたもので、何處まで行つても自己が世界の基調たることは、本願の或否でも異ることがない。

之を要するに淨土の理想は之を道德的立脚地からする限り、人格價値の平等を基礎とし、先覺者と後覺者とが、後覺者同志が結合するに、正義と慈悲と精進とを以てした統制的團體である。而してこは一面からすれば完全態に到達したものであるけれども、無窮の完成を理想とする立場からすれば、淨土は又修道の道場であつた。このことは、いかなる本願にも、淨土内に於ける修德をその大切な條項とせぬものなきに徴して明である。而もこの點に於て、當時の印度教諸派の樂

土觀が專ら之を享樂の場所と見たるに對して、佛教淨土觀の最大特長の存することは、後更に述べようと思ふ。

B 文化的方面より

淨土は獨り道德的に完備した所である許りではなく、同時に生活に對する文化的施設の方面に於ても最も完備した場所である。之も亦、本願思想の開展に伴ふて次第に著しく表はれた特質であるが、中には近代に於ける文化的施設の粹を豫想するが如く思はしむる點もあつて極めて興味を惹くものがある。蓋し道德の場合と同じく、現實に於けるこの方面の不完全が産み出した理想たるや勿論であるけれども、亦現實生活から積極的にその構成材料迫とされた所もあるだけに、その理想の途に實現せられ得べきものも尠くはなかつたのである。んとした

先づ之を全體としての國土の相からするに、淨土の領域の極めて廣大ならんといふ般若（第卅九願）を初めとして諸本願の等しく言ふ所である。而してその何れの方所も嚴淨にして且つ豐饒なる面に於て共に快適の地たるは、淨土の樂土たる所以として、本願經の口を極めて高調する所である。併し實をいへばて、別に外れば佛教の淨土觀も娑羅門教的淨土觀も先づ大差なしと言つて然るべきであるが、たゞ文化的見地からして神的に率ひ、一特徴といふべきは特に國土の道路に對して大に注意を拂つたことである。「土地整平にして鏡の如し」とに於ける道路の狀態として彌勒經に說かれてある所なるが、爾來、之は阿閦經以下諸經に繼承され、而も特にその前に於て又組み入れられ、種々の表現法を以て說かる〻ことになつたのである。謂く、「地平かに淸く輝くこと鏡の如」の理想を主張し、（大品第九、大經三十一等）謂く「黃金を地とせん」（大品第十）、謂く「歩むに絨纏の如く柔輭にし且つ邏迮なからしめ」（阿閦第四）と、その他か〻る表現を以てした國土の形容は歸する所、凡て道路に關したもの、と解すべきよる人種的偏これ、道路を整へ、兩側に並樹を植え、諸所に井戶を掘れとは、釋尊の民衆に勸めた所であるが、この區別もなく、上中に來つて淨土內に具體化されたも

のて、佛教がいかに交通に注意したかの證左として、極めて價値に富める事實なりと言ふべきであらう。

かく土地が快適で且つ整理されてゐるに應じて、住民の衣食住も亦極めて完備した狀態にあるも勿論である。土地の豐饒なるに伴つて衣服も飲食も勞することなくして成辦せらるゝが即ち飯食、衣服、自然成就の願（阿閦第十一—十一。大品第一。平等覺第廿三。大經第三十八等）の精神で、つまり人々が與へられた既定の事實として愉快に生活し得るまで經濟狀態の高められたのが淨土の特相といふ意味である。特に住宅に關しては、堅牢と美觀と便利とをかぬるを理想として、諸經文の筆を極めて說く所である。從つてその內部の設備の極めて精巧なるも勿論であるが、少しくその精神を迎へて解釋すれば文化的見地よりして極めて味ふべきものもある。先づ燈火設備としては御手のものとして例の光明無量の願あり（大品廿八、大經第十二等）上水の設備に對しては八功德水の願あり（阿閦第十三）水も火も光りも凡て言ひ分なしであるが、殊に面白きは下水の設備に對する注意である。大品般若第十九願に、「我が國土の人には大小便の患なからしめん」とあるが、斯の如きは一見すれば空想のやうであるけれども、能く詮索して見れば、之は全く下水設備の完備を理想化して表現したものに外ならぬことが分る。蓋しこの願の背景となれるは、例の彌勒下生時に於て「其時、男女の類、故らに大小便を欲するに地、自然に開き、事終るの後亦還て合す」（拙著、原始佛教思想論三六七頁引用）とある言ひ得るならば水流式便所の豫想であるからである。即ち大小便の患なしといふ本願の眞意は、大小便の始末に對する患なしといふ義であらねばならぬ、而も今より二千年前、淨土の特相としてかゝることまでも考へたことは、或る意味に於て驚嘆に値するものがあらう。（序でゝあるから言つて置く。本願思想の生きた眞髓を得るためには、その歷史的開展を調ぶるの要あることはこの一例でも明であるが、外にも種々の例がある。例へば、已に前に言つたことではあるけれども大經第三—四に淨土の住民は悉皆、金色で、天と人との間に區別なからんとあるが如き是れである。蓋し單にそれだけでは、空想のやうであるけれども、若し之をその背景となれる大品般若第十二—十四の我が國土には四姓の區別なく、上中下の區別なし色の

相違なからしめんとあるに照應すれば、前に述べた如く、そこに生きた道徳的社會的意義の含まることを見出し得るからである。）

若しそれ通信機關なり交通機關なりに對する外的設備に到りては、私の知れる限り本願中に之を明文として見出すことが出來ぬけれども、この要求に應ずるの活用は決して見逃した所ではない。即ちそれは例の五通の本願で（大品第十八。大經第五—九）、住民が悉く天眼、天耳、宿命、他心、神境の五通を得やうといふことである。天眼とは遠きものをも微細なるものをも見得るの力、天耳とは遠くを聽き得る力、宿命とは過去を知り得るそれ、他心とは他人の心を知り得る力、神境通とは飛行自在力を謂ふので、之を今日の言葉で翻すれば電信なり、電話なり、ラジオなり飛行機なり汽車なり、自働車なり、乃至、諸種の科學的設備によつて充たさるべき妙用に外ならぬ。たゞ今日では之を外的施設に求むるに對して、本願は之を衆生の內面力に求めんとしたのが違ふ所で、それだけ空想といへば空想ではあるけれども、少くも、この間に文化的要求の伏在することだけは見逃してはならぬと思ふ。

かくして、右の狀態なり設備なりを利用して、ここに、住する人々が、前に述べた如く、衣食住の滿足を得るは勿論、三毒四病の難を免れ（大品第廿五）諸根具足して不具者あるなく（大經第四十一）何れも同一色にして三十二相を備へ（大品廿三、大經廿一）雄大なること那羅延神にも比すべき身を持ち、（大經第廿六）、而も壽命無量にして（大品第廿一—廿二、大經第十三、及十五）生活を樂みながら、法喜禪悅を味ふのである。

之を要するに文化的施設の立場からすれば本願の狙ふ淨土は藝術的であると同時に云ひ得るならば、科學的應用の最も進んだ所である。一見すれば、いかにも單なる空想に過ぎぬやうでも根を洗つて見れば、その何れも實際生活に即した理想の發現で、而も面白いことには、その或るものは、今日に到つて次第に此世に於て實現しかけて來たことである。佛教ではかゝる理想的狀態のこの世では容易に實現し難きの代償として概ね之を他方佛土に求めたけれども、元來、現實生活

に對する理想を投影したものであるから之を再び現實生活に戻して、之を解釋するの必要があると同時に、更に進んでその實現化に努力すべきは、本願を信ずるものの義務であらう。とにかく、由來凡てを觀念內に封じ込むる風あつた佛教が——勿論、心を主とすべき佛教本來の立場ではあるけれども——本願思想の開發と共に、更に物質を通ふして、觀念を實現すべきの一方向を開いたのが、本願思想の一特質として吾等の注意すべき所である。

C　宗教的立場より

上述の如く、本願には道德的方面も文化的方面もあるけれども、何んと言つても、その中心たるべきは宗教的要求に對する滿足感であらねばならぬ。道德的完備も文化的完備も所詮、宗教的要求の中に入り來つて初めて本願體系の中にその地位を占め得ることになる。そこで、私はこゝに宗教的要求とは何んであるかに就て述べねばならぬことになつたが、併し今之を詳論してゐる暇がないから、暫らくその結論だけを出して、それに對する本願の意義を論じて見ることにしたいと思ふ。

私は宗教的要求は、之を心理的に見る限り、二つの要素から成立すると考ふるものである。一つは無限生命に對する憬れの心で、他は解脫を求むるの心である。無限生命に對する憬れとは、生きんとする意志を出發點として生命の限りなき持續と自由とを求めて止まざるの心をいひ、解脫を欲するの心とは、現實界に於ける內外の必然的壓迫に痛感して、自らを現實の束縛から解放せんとする切なる要求を指すのである。共に生命の內部から發したものであるけれども、一は積極的に他は消極的に働き出した要求である。併しこの兩要求は決して無關係に離れて働くものではなく、核心に於ては、寧ろ相互に補充し合ひ、からみ合ひて、初めて眞の宗教的要求となるもので、一を離して他だけ起るといふことは絕對にあり得ぬ關係に立つものである。たゞ或る特定の宗教がその表象の衣を着るに當つて、種々の理由よりして或は積極的方面

の色彩が強く表はれ、或は消極的解脱的方面が著しくなつたりするの區別があるけれども、裏面にあつては一體不離なるを宗教心の特徴とするのである。

宗教的要求をかく定めて、之を本願思想に徴するに、その大主意の全くこの兩要求の滿足にあつたことは、少しく注意して本願條項を讀むならば、何人も容易に氣附き得べき所である。殊に面白いことには、本願思想の開展につれて、その表看版が次に消極（解脱）より積極（無限生命）に變りながら、裏面には常に他を刻みつけて、何時でも、それを表面化し得べき用意の整ふてゐることとである。即ち前に述べた所をもう一遍繰り返すならば、初め本生譚にありては專ら罪惡、苦痛よりの解脱を本願としたのが、小品般若となるや半ば解脱を目標とし、半ば積極的生命活動を目標とするやうになり、それより阿閦、平等覺、大品般若、大無量壽經となるや、消極的方面は裏面に潜み積極的方面が表面の立場となつたけれども、いかなる場合にも强き解脱感がその根柢になつてゐるのが歴史的事實である。即ち之を術語で云へば、初めは主として眞空に重きを置くのが本願の主意であつたが、次第に之が妙有の方面に開展したけれども、元來は、眞空妙有を離さぬのが大乘の立場である限り、兩者はたゞ表裏の差に過ぎぬといふ事である。

かく、本願は表裏の兩面に渉つて、その宗教的要求の滿足を求めたけれども、何んといつても、その著しき特質は、積極的方面、即ち無限生命に對する要求を端的に滿足せしめんとした方面であらねばならぬ。蓋しこは已に原始佛教内に豫想されながらも、それは表面に歌はるゝまでには、佛教思想史上、長き思索を經た結果として初めて本願化された思想であるからである。本願條項中、この特質を發揮した者に、種々あるけれども、其最も著しきは、例の壽命無量、光明無量の願（平等覺第十三―十五、大品、第廿一―廿二。大經第十二、第十三、第十五）であらねばならぬ。壽命無量の願は、言ふまでもなく無限持續の要求に對したもの、光明無量の願は生命力の最も充實した當體に對したもので、即ち合して言へば、正しく無限の持續と自由とを屬性とする無限生命に對する要求から來たものであらねばならぬ。而して其の願が淨土に於

て實現せらるといふのであるから、その本願力に與り得ると信ずるものにとつて、こゝに吾人の要求と歡びと安心上の生するは、即ちその宗教的機能の核心である。即ち單なる解脱の氣樂さの外に更に、少くも表象上、積極化された絕對者佛と彼岸に於て融合すとの確かしき希望に燃えしむる所に無量壽、無量光に關する本願の宗教的價値が存するのである。而もこは本願思想史上、明文としては未だ小品般若にも阿閦經にもなく、阿彌陀廿四願經に到つて、初めて明白に本願項目とせられた點に於て、疑もなく彌陀を中心として發起された思想である。願主、法藏菩薩が無量壽（Amitāyus）無量光（Amitābha）を含む阿彌陀（＝無量）の名を得たのも決して偶然ではない。併し實をいへば、こは法藏本願に來つて明白に、意識的に主張されたといふのみで、內容的には凡ての本願に通ずる上に、後には眞空を主とする大品般若にも採用された點からすれば、歸する所、何人も遂に阿彌陀佛になるのが、本願共通の眼目であたつと言はねばならぬ。

所でこゝに問題となるのは、かく人々が阿佛陀佛になることがあらゆる本願を貫く大主意であるとして、然らばいかにして阿彌陀佛になるかといふことである。換言すれば自ら精進してそれになるか、將た、已に完成せる絕對者としての彌陀によつて救ひあげられるゝによるかといふことである。即ち自力か他力かといふことである。之を歷史的に云へば、こゝにも亦前に述べた如き變遷もあるけれども總じて云へば、之を本願主の側からすれば淨土の建設は勿論、その支配も凡て自力精進の致す所である。併しその淨土の建設も自らこゝで享樂せんが爲ではなく、人々をそこに導かんがためであつた所からすれば、少くも吾等の側からすれば本願の價値は總じて他力的たる所にあると言はねばならぬ。之を端的に推し進めたのは即ち彌陀の本願で、稱名念佛が十念に及ぶならば救ひの手に預り得べしといふ或る意味からすれば、最も安直に最も易行的となつたのである。所謂、他力本願之である。併しながら之を以て直ちに絕對無條件的救濟が本願の主意であつたと解するならば、少くも文獻上、速斷である。前に述べた如く最も他力的に精錬されたと考へられるゝ魏譯の第十八願ですら、例の「除五逆誹法」の除外例を設けてゐるが、よしやこの除外例も至心懺悔によつて通過し得べしとした所で、

矢張、懺悔に精進するの必要がある。假令、本願力の致す所、所謂、五體を地に投じて懺悔するの必要なしとした所で、少くも彌陀の本願を素直に信受するの沒我的謙譲心の必要がある。之をも不必要なりとは、文獻上、遂にいかなる本願條項にもなき所である。而も之なきは寧ろ宗教としては適切である。蓋し救ひと云ひ、不思議力といひ、畢竟するに自覺であり反省であり神秘的直感である以上　自覺も反省も直感をも伴はざるは内面生活としては空名に過ぎぬからである。こゝに即ち他力主義を特質とする本願内に自力的要素を豫想するの根據あるもので、沒我の心態、我執の殼を破つた心持、そこに初めて本願力が神秘的直感として働くといふとは例の至心信樂欲レ生二我國一の明文に徴しても疑ふことが出來ぬ。況や他力本願といふも、主として淨土に入るまでの手續に關したことで、淨土に入つてからは、こゝを道場として道場主の導きに從つて、そこで歡喜と精進との生活を送つて自ら正覺を成ずるまで（自ら彌陀となるまで）之を廢せざるを淨土内の修行とする限り、何處まで進んでも、そこに、自修的意味の離れざるは、少くも文獻による限り、本願の主意であつた。之を印度教に徴するに十二世紀に開かれたラーマーヌジヤ（Rāmānuja）の派が後に分れて二派となり、一を猿仔派といひ他を猫仔派と名付けた。猿仔派とは神の救ひに預る條件は猿の仔が自らその母體を執へて離れざるやうにする所にあると説く派で言はゞ條件派であり、猫仔派とは、神の人を救ふや母猫がその仔をくはへて安全地に運ぶが如きもので、絶對無條件であるといふ派であつた。之を今の問題に移して考ふれば、經典自身の立場からすれば、本願の主意を何んと云つても猿仔派である。之を猫仔派にまで進めたのは親鸞の本願説で、蓋し前の心理的なるを論理的に直ほした結果であるけれども、矢張、直接體驗としては、こゝでも、沒我的修養をその先行條件とするや言ふまでもない。

D　佛教教學の立場より

以上の三項に於て不完全ながらも本願思想の意義内容に關する主要點を調べた。併し之を佛教教學の立場からすれば、

間に研究せねばならぬ幾多の問題が殘つてゐる。その委曲を盡すことはこの小冊子には迚も不可能であるけれども、その主なるもの二三に就て、以下少しく之を說いて見よう。

前に述べた如く、淨土は一面からすれば樂む所であるけれども、他面からすれば修行の道場であるとして、先づ問題となるのは、淨土内の人々が修行專門家（聖者）のみであるか、はた、そこには在俗者（凡夫）もあるかといふことである。蓋し佛敎では修養の立場からして、人々を外道と内道とに分ち、内道を更に信者（信男信女）と出家者（比丘、比丘尼）とに分ちて次第に之を向上せしめんとしたるは、實際的事實であるが、この問題を本願が淨土内の事實として、いかやうに取扱つてゐるかといふことである。之を本願に徵するに、淨土内には、その性質上、外道異學の徒なきは勿論であるけれども、凡夫と聖者とに關しては、種々の本願體系と淨土觀とによつて多少の相違があつた。而も歷史的に言へばこの間に發達の跡を示してゐる。彌勒下生時代に現出すと考へられた樂土（恐らく最も早き淨土觀）は、この世界を舞台とするだけに、そこの住民も、もとは凡夫であるのを、彌勒が例の龍華の下で、三回に涉りて濟度して聖者に進ましむることになつてゐる。之を一步進めて、他方に淨土を求めたのは、阿閦佛土であるが、こゝになると、本願力による法爾の功德として、初より半分だけが聖道行者であるけれども、あとの半分は在家者で、而も此土に於けるが如く夫婦生活を營みて子を舉げることは、婦女が貞淑で、出產の極めて安易なるを說いてゐるに徵して明である。而して彼等を更に敎化して究竟にまで進ましむるが淨土内に於ける阿閦佛の役目とせられたものである。然るに之が更に大品般若や阿彌陀經の淨土觀となると、こゝには最早、婦人なく（男子として變生す）、從つて夫婦道なく出生するものは悉く化生で、凡ては悉く精神生活に集注する聖道行者の集團とせらるゝに到つたことは、その本願條項に照らして明である。かくして、此の點に關する淨土觀發達の次第を見るに、初めは所謂、凡夫土にあつて其等を化して聖道に進ましむるを主意とし、次ぎは所謂、凡聖同居土にありて、凡を聖と化し、聖を更に向上せしむる所にあり、最後は聖土にありて、其等を究竟にまで導くを主

意としたといふことが出來よう。而もこは歴史的開展の次第であると同時に、他面からすれば、淨土を修養道場と見る限り、總て淨土内に於ける修道進展の階段であつたといふことも出來ようと思ふ。

かく、淨土の理想は、凡てを聖道に向はしむる所にあるとして、佛教に從へば聖道に三種ある。所謂、菩薩乘（佛乘ともいふ）、獨覺乘、聲聞乘之である。菩薩乘とは自ら佛陀となり、淨土を建設して衆生を濟度せんとの目標を起して修行する聖者を指すもので、亦之を佛乘とも名ける。獨覺乘（或は緣覺乘）とは内面的悟得からすれば佛陀と同じきも、淨土建設の能なき行者をいひ、聲聞乘とは、佛弟子として修行し悟得して遂に涅槃に入つて長く休息するを目標として修行する人をいふのである。而も右の三乘は同じ聖道であるけれども、少くも作用の點からすれば、そこに價値的階段があるもので、菩薩乘は一番重く、獨覺乘之に次ぎ、聲聞乘最も低しとは、少くも大乘宗（菩薩を理想とする派）のいふ所である。かくて之に關聯して起れる問題は三乘を別々の道と見るのが佛教の本旨か、將た三乘の區別は暫らくのことで、遂には凡てを佛乘（一乘）に歸入せしむるが、佛教の本旨かといふことであつた。或る意味からすれば之は、少くも大乘佛乘に於ける天下分け目の問題となつたもので、法華經の如きは全く一乘眞實の旨を力說せんがために起つたものである。所で今の問題となるのは、淨土内に於ける聖者とは三乘の何れであるか。換言すれば三乘を別々に導くが本願の主意であつたかまた、法華の如くに之を一佛乘に歸入せしむるを淨土内に於ける修行の目標としたものであるとかいふことである。

之を大體からすれば、本願思想は元來、菩薩思想を中心として發達したゞけに、本願の大主意が凡てを一佛乘に歸入せしむる所に歸着せねばならぬ。併し實際をいへば、その結論に到達するまでにはかなりに曲節を免れなかつたものである。蓋し獨覺乘のことは、どうでもよいとして、聲聞乘なるものは元來、生きた教團（大乘宗は之を小乘といふ）を目指して立てられたものだけに、いかに淨土なりとはいへ、この教團を度外視して、聖衆俱會を考ふることが出來ぬものである。かくてこゝにも發達があつた。彌勒の教化する所謂、龍華會下の聖者は凡て聲聞衆であつたに對して、阿閦經となる

か、弟子學成品（聲聞乘）と菩薩學成品、とを以て聲聞衆の外に菩薩衆を教化の對象としたのは流石に大乘化の傾向を發揮したけれども、菩薩乘と聲聞乘とを別途の道とした點に於て、明かに三乘各別教の立場を本旨としたものである。之より般若と進むに、般若は元來、三乘共通教と言はるゝだけに、矢張、三乘を別々に見たことは、大品本願の第三に國土の衆生をして三乘法に於て解脱せしめんと言つてあるに徴して明である。併しこゝに到ると一乘思想も漸く頭を擡げ、我が國土に二乘（聲聞、緣覺）の名なからしめん（第廿六願）とも、言つてゐる所からすれば、國土の聖者として、三乘を認めながらも、之を遂に一乘に歸入せしめんとした底意も充分にあつたものと認めねばならぬが、併し他面には弟子衆（聲聞）無數の願もありて（大品第二一）、總體として此の點が未だ不徹底を免れぬ。かくて大無量壽經本願となるや、流石にこの點に於ても大進展を來たしたけれども、併し徹底といふ點からすれば、矢張、未だ到らぬものがある。蓋し理屈の上からすれば、前に述べた如く、一切衆生をして、阿彌陀と同等たらしむるが、彌陀本願の極意であるべき理ながら、少くも文獻上からすれば、廿四願經以下四十八願經に到るまで、尙ほ聲聞衆を歡ぶの意味を高調した所も尠くはないからである。例せば第十四、聲聞無數の願の如き、第十九臨終現前の願に於て、彌陀の隨伴者を比丘衆（聲聞）としたるが如き之である。併しこゝに來ると少くも宋譯（三十六願經）に從へば、その第廿八願（大經第三十六常修梵行願）は、彌陀の名號を聞くことによつて聲聞、緣覺をして遂に無上正等覺（佛乘）を成ぜしむるを目標としてゐる點に於て、その限り明かに二乘を大乘に轉向せしむるの思想もあつたと見ねばならぬ。たゞ併しかゝる意味深き本願も梵語原典にはなく、魏譯、唐譯には聲聞緣覺の代りに初より菩薩をしてと說いて毫も轉向大乘の意味を含ましめぬ所などからすれば、何んと言つても彌陀の本願中には法華經程、强い意味に於て三乘を一乘に融歸するの思想がなかつたものと判ずべきである。この後、文殊師利佛土嚴淨經などが「その國中をして聲聞緣の名あることなからしめ、純ら諸菩薩のみありて疲厭瞋恨の難を滅除し梵行を淨修して佛土に周遍せしめん」（地一〇 11a）との本願を發するに到つたるも、實に右の不徹底を救はんとした努力であつ

たといふべきであらう。要するに、淨土を廣義の教團（僧伽）とすれば、初は在家出家の雜居團（凡聖親會）と見たるを次第に專門的なる聖道行者のみの團體と見るやうになり、（聖衆會）更に同じ聖道行者中にも三種類ある中、菩薩乘を最高と見るに到つたのは本願思想開展の順序である。而も之は轉て淨土内に於ける修行の進展の道程を意味したものであるけれども、三乘を凡て一乘に歸入せしむるの一段となれば、――そこに到るべき方向に進みながらも――かなりに緩漫たるを免れなかつた。之れ蓋し淨土を修業の道場と見ながらも他方面には樂土の思想も強かつたので、樂土の立場からすれば聲聞緣覺の自受用的法樂をそのまゝ認め得る餘地があつたからである。併し何んと言つた所で、上求菩提と同時に下化衆生に努力するが大乘の極意たる限り、淨土に於ける修行にも亦、この意味を認めねば收まりがつかぬことになるべく、而も上求菩提下化衆生を標目として修行するが菩薩道であるから、淨土道場の衆生を凡て菩薩たらしむるが本願の歸着點であらねばならぬ。

かく淨土を以て樂土であると同時に、修行道場と見たのが佛教淨土觀の特長であるとして、そして、文獻上では餘り著しくないとしても、その精神を推せば菩薩道の修行道場たらしむるが少くも大品以下に表はれた本願の趣旨であるとして、こゝに問題となるのは、然らば淨土に於て下化衆生の約束を果たすの道はいかにといふことである。之に對して先づ第一に考ふべきは、淨土内にも先進者と後進者とあるべき理であるから、先進者が道場主としての佛陀の旨を仰いで後進者を資助し教養するの義務あることである。淨土内に於ける下化衆生の責任は先づ之で果たさるべきである。大經第廿五願（梵第廿三）の所謂、說一切智願に淨土内の菩薩が凡て一切智者（佛乘）に相當する法話をなし得るの能力を備ふることを述べてゐるのも、この必要からと解すべきである。が併し之だけでは下化衆生の全部ではない。何んとなれば無邊の衆生を濟度するのが菩薩の總願たる限り、三惡道のない淨土だけでの布教ではその目的を達することが出來ないからである。そこで第二に考ふべきは、更に淨土より再び穢土に戻つて、この總願を果たすべきの道である。後の術語で云へば所

謂、還相回向の道である。が併し、之は、當然の歸結とは云へ、前に述べた如く樂土思想の强さに應じて、その當然の歸結を得るまでには、矢張可なりの思索を費やしたものである。之を文獻に徵するに阿閦本願にも大品本願にも未だ之なく、僅かに大經本願に到りて、少しく表はれたに過ぎぬ。即ちその第廿二願（梵大第廿願）たる所謂必至補處の願と、第十五願（梵第十四）たる眷屬長壽の願とに於ける除外例の場合が之である。必至補處の願とは極樂淨土に生れたものは、必ずこゝで次生には佛陀となるべき位に達すといふ誓願であるが、少くも卅六願經以後となれば、こゝに取除きの文が附加されてゐる。即ちそれは「一切世間の義理に通達し、一切世間を調制し、一切世間を涅槃に導き、一切世間に於て菩薩行を行ひ、恒妙に等しき諸佛に奉仕し、無數の衆生を最上覺に於て安立せしめ、更に自ら最上道に進向せんがために、所謂普賢行を修するものをば除く」（大要）といふ句である。即ち特に發心して、一切衆生を濟度し盡すまでは上求菩薩下化衆生の活動を休止せぬといふ誓を立てた菩薩は、淨土に於て佛位の補處者とならないで、再び戻りて永遠に濟度行（普賢行）に從事するから、之は特別とするといふ意味である。又眷屬長壽の願とは、極樂に生れた人々は悉く無量壽を得べしとの誓願であるが、之にも特殊の願（praṇidhāvaśa-viśeṣaṃ）あるを除いてといふ句を附して、衆生濟度のために戻らんとするものはこの限りにあらずと特に注解したのである。かくて是等によれば淨土より戻ること、即ち還相回向することは、特殊の場合で一般の義務ではなかつたことは、少くも大經までの本願の精神であつたと言はねばならぬ。併し大經に到つて、ともかく、除外例とは云へこの事を言ひ出したのは、本願思想の一大進步で、而も菩薩道の眞精神が漸やく淨土願に關連して發揮さるゝに到つた證據として大に注目すべき點であらねばならぬ。之を更に一步進めて除外例を本則に直ほしたのは、悲華經に於ける四法精進の本願說である。悲華經によれば本願に四法怠墮と四法精進とある。四法怠墮とは一、願ふて淸淨の世界を取り不淨界をとらぬこと。二、善人のみの濟度を願ひ、惡人の濟度を願はざること。三、成佛のみを願ふて聲聞緣覺の法を說かぬこと、（蓋し轉向大乘の努力をせぬことか？）。四、成佛し已りて無量

壽のみを願ふて捨壽を願はざることである。即ち從前の欣求淨土思想を以て凡て易きにつくといふ點から一種の意隨法であると貶したもので、悲華經はかゝる本願を起す人を菩薩（Bodhisattva,悟りを求むる人）ではあるけれども摩訶薩（mahāsattva 大人）ではないと喝破してゐる。之に對して四法精進とは一、願ふて不淨世界をとること。二、惡人中に於て佛法を建立すること。三、成佛し、已つて三乘法を說くこと、（轉向大乘に努力すること）。四、淨土の壽命として短ならず長ならざるを願ふことである。即ち享樂よりも寧ろ衆生無邊誓願度の誓ひを果たすに都合よき條件を具備するを理想としたもので、正しく普賢行に住することを理想的本願としたものである。悲華經はかゝる本願を起す人こそは正しく菩薩にして且つ摩訶薩であると稱歎したのである（悲華經第八卷、大正藏三、p.218）。蓋し或る意味からすれば極樂思想に反抗したものであるけれども、實は、その眞精神を發揮せんとした擧なることは、悲華經が彌陀を初め阿閦その他、種々の本願說を採用してゐるに徵しても明である。之を再び彌陀の本願に適用して往相（自受用的方面）還相（他受用的方面）の二廻向說を立て、而も往相よりも還相に多くの意義を認めたのは、支那日本に於ける淨土敎家の補道的努力である。

所でかく淨土より再び戻りて下化衆生に從事するを本願思想の進步であるとすれば、淨土も畢竟するに一種の輪廻界ではないといふ問題が起らう。何んとなれば往生して再び戻るには、生死の途を經る外に道がないからである。併し之を他方面からすれば淨土の本願中には、必至二涅槃一の願あり（大品第七大經第十一）、得二不退轉一の願あり（大經第四十七）、見樣によつては淨土に往生することを直ちに一種の涅槃と見得る餘地もあつて、實をいへばこの問題は佛敎々學上、かなり六つかしきものとなつて來るのである。從つて之に關しては專門家の間に古來より種々の異說もあるけれども、今は其等を顧慮することなく、暫らく私だけの意見を述べて見よう。

之を歷史的に考察すれば淨土往生の思想は、生天思想と密接の關係のあることは爭はれぬ事實である。從つて之を畢竟寂靜の解脫を理想とする立場からすれば、何んと言つても、淨土の生活は第二次的理想で最後には矢張、解脫涅槃に入らね

は收まりがつかぬことになる。彌陀の本願にも、前に述べた如く必至滅度（必定して涅槃に入ること）の願あるはこれがためであるが、更に進んで言へば、願主にして淨土の建設者たる佛陀自身も亦最後には遂に涅槃寂靜に歸入すべしとは、大乘諸經文の等しく說く所である。彌勒經によるも阿閦經によるも法華經によるも種々の佛陀が淨土を構成しその教化已るや特定の後繼者を得て最後には涅槃に入ることになつてゐる。阿彌陀に關しては三部經による限り、この事なきも觀音授記經などとなれば、矢張、彌陀の入涅槃を說き觀音をその後繼者としてゐる所からすれば、矢張、例外ではない。この意味に於て淨土なる境界を、小乘教理に對比すれば、その四果中、第三果の不還果に相當するもので、或る意味からすれば、第三不還果の聖者が上天して、そこで入涅槃するといふ思想を通俗化し積極化したものといふことも出來よう。從つて涅槃と輪廻とを判然と對立せしむる限り、未だ眞の涅槃に到らざる淨土の身分は、輪廻界に屬するものと言はねばならぬ。淨土から再び戻つて來ることの理論はともかくとして、法藏菩薩がその第三願として極樂で死んだものは再び三惡道に退轉するならんことを本願としたことになつてゐるのも、極樂の果報は實に業力による生死界に屬するといふ處から業力衰變の法則のこゝにも行はれてゐることを豫想したからである。かくして、涅槃空寂を最高理想とする見地からする限り、極樂世界も阿閦佛土も、前一歩ではあるけれども究竟地ではないと、少くも一應は言はねばならぬことにならう。が併しそはたゞ一應の解釋である。かく片附くることは必ずしも大乘の根本立脚地からして、本願思想や淨土思想の心持に契ふ所以ではない。そこで玆に亦、更に大乘の根本立脚地を明にしてかゝるの必要あるが、併し之を詳しくする段となれば大變であるから、簡單にその標語だけを擧ぐるならば——

あらゆる大乘に共通するの標語は眞空妙有の四字である。即ち我執我欲を基礎として建設された自然態を打破するが眞空で、然る時は更に新なる意味に於て、自由の新天地が開けて來るのを妙有といふのである。全く體驗を基礎として打ち立てられたもので、而も大乘に於ける種々の教理も所詮、この眞空妙有の關係をいかやうに基礎づけいかやうに表象する

かの相違に外ならぬ。本願思想も淨土思想も亦之を背景としたもので、而も眞空より次第に妙有の方に進む思想的經過中に特に道德的文化的藝術的色彩をとりて表象されたものたることは前にも度々述べた所である。淨土思想が當時の有神派的神話に負ふ所ありながらも、遂に佛教たり得る契機もこゝにある。

そこで今之を輪廻對涅槃の問題に引きつけて考察するに眞空の郷地は言ふまでもなく、個別的なる一切を打破した所でこゝに到ると迷もなく情執もなく、從つて之を基礎としての業（カルマ）も業習（カルマアーシャヤ）もなく、少くも自内證の立場からすれば、全く輪廻を解脱した當體である。之れ即ち寂滅涅槃で、原始佛教や小乘佛教が之を極地として一と先づ打ち止めにした所で、また大乘と雖も格式としては、一應之を認むるが通規となつたものである。併し大乘の特質とする所は、この打止めに滿足しないで更にこの空に即して而も高次的世界を建設したのが即ち願主たる佛陀の立場からした淨土であると同時に、この高次的世界を通ふして空に進まんとするが淨土内の修行者たる菩薩に對する淨土の意義である。即ち淨土は佛の側からすれば空より有に下り菩薩の側からすれば有より空にのぼらんとする階級であると言ふべきで、無量光無量壽の願の如きは、正さしく前者の立場からしたもの、必至滅度の願の如きは、後者の立場からしたものと解して然るべしと思ふ。かくして、有の兩義を上揚しての立場からした淨土の意義は空に即しての有、有に即しての空で、他語もて云へば、空有を統一して一の行に歸着した所謂、普賢行といふことになるべきである。從つてこゝには最早、前の意味に於ての業もなければ輪廻もないけれども、併し言ひ得るならば無作の業、無碍の輪廻のあるべきは勿論である。何んとなれば業も輪廻もない所に普賢行のあり得べき筈がないからである。所謂本願業力といふも所詮、この意味に外ならぬ。たゞ前のそれと異る所は前にあつては我執我欲の自然態によるに應じて業も輪廻も必然の法則によつて支配せられそこに自由の分なきに反して、こゝに來ると業も輪廻も凡て自主自由の範圍にとりこまれて來ることである。換言すれば業も輪廻も、凡て自發的活動として上求菩提下化衆生のために就中下化衆生のために、自ら願ふてすることになるのが眞空を豫想せざる業なり輪廻なりと全然

異る所である。即ちこれは假令、生死的器であるとはいへ、最早、運命に左右されてのそれではなく、衆生無邊誓願度の約束を果たすための必須的手段たる自主的進行であり或る意味からすれば菩薩の遊戯三昧となつた輪廻である。而も佛教で輪廻を解脱せよと叫ぶの根本理由も所詮は、他主的生活を去つて解放の當處に自主的生活を建立せんとした所にあつたことを思へば、この自發的活動としての輪廻は寧ろそのまゝ涅槃といふことが出來よう。たゞ格式上、表象の上に於て寂靜無活動を上位とするの立場から所謂無餘涅槃を最後に置くために、この自由的輪廻さへも超えて、更に最後に眞空の涅槃界に入つて隱沒して再び現ぜずといふことになつてゐるけれども、實はたゞ全くの格式のみである。苟も衆生無邊誓願度を菩薩の根本願とする限り、そして衆生の盡くることのない限り、菩薩は必然的義務として、限りなく淨土と穢土との間を往復輪廻すべきが、菩薩本願の歸結と言ふべきである。而して若し之を涅槃の名でよぶとすれば、この立場こそは正しく不住般涅槃であらねばならぬ。生死にありながら之に左右されず、大安心の郷に住しながら自受用三昧のみに耽けらず飽くまで衆生救濟の活動を捨てざるを不住般涅槃といひ、法相宗などにては四種涅槃の一種に數ふるが、本願中には術語としてこの說なきも、淨土よりの却來鄉に重きを置く限り、衆生の救濟を淨土の任務と見る限り、淨土生活は實に不住涅槃であると斷ずるべきである。否、かく解することによつて淨土願求の思想は快樂主義より救はれて初めて、歡喜と慈悲と努力との結合の上に永遠の歷程を目標とする大乘佛教の眞髓を發揮したものといひ得よう。(三、一、一五伊豆伊東にて)

御斷り

一、この論文は、もと私が哲學會東洋アーベンドに於て講演した手控を修正、增補しそして何程か通俗化したものである。今之を本誌に揭載することになつたのは哲學雜誌編輯主任の寛大なる認容によることを述べて感謝の意を表したいと思ふ。

二、本論文を草する上に於て彌陀本願に關しては南條博士の佛說無量壽經梵文和譯支那五譯對照（明治四十一年東京出版）に負ふ所多く、又大品般若の本願に就ては、駒澤大學教授今津洪嶽氏の指摘によつたことを述べて、兩氏に敬意を表したいと思ふ。

普通選擧が齎す『重大な意義』とは何ぞや

生産的人口による再變化

杉森孝次郎

目下進行中の普選第一回の代表的意義はなにか。それは日本の社會に於ける一大再變化過程の新たなる開始にある。

約一千萬の新有權者は約三百萬の舊有權者に比してすくなくとも數に於て壓倒的だ。立候補の顔ぶれを見るに、ここにも新顔が簇出してゐる。

その新有權者を特徴づけるものは第一に貧だ。及びそれと關聯した生産だ。またその二たつと關聯して實質的進歩主義、道德主義社會改作主義だ。そしてその舊有權者を特徴づけるものは大體に於てその反對だ。

立候補の新顔を見るに、先づ四個内外の無産黨を中心として、質的に全然新、即ち既成政黨との關係に於て全然無緣または反意識の新なるものが多い。本質的に時代、思想、習性を既成政黨者流とは判然異にするものがそこにはすくなくない。

かくの如き新有權者を背景としてかくの如き新候補が立つことを考察すれば、それだけですでに或新變化の可能または必至の構想が不可避にされる。

選擧民、立候補または當選者、既成黨、無産黨、これらすべてを通じて舊、新分子をそこに識別することができる。しかる時、新分子即ち無産系は、大體に於てすくなくとも、そして既成、舊有權系に比してすくなくとも、一定の社會改作主のこと

に熱情と誠意を持つ。舊分子系は、政黨者流としては政權獲得が目的であり、一般有權者としても現在の制度に自分達を保護、特惠させる以上の目的を持たない。

その政權獲得慾が、既成系の場合にあつては、社會理想、社會改善のための手段としてであるよりも、習性的に私的だ。新分子の世界は、今のところすくなくとも、多少とも超私的だ。前者には熱よりも慾があり、後者には慾よりも熱がある。

この熱が、これこそが新派の身上だ。あの慾が、あれこそが舊派の癈疾だ。

雜然、騷然、無象、有象、千變萬化的ではあるが、壓倒的新有權者數と、ともかくもそれを反映する新立候補または當選者とは、日本が產業文化を持つ一つの社會となつてから始めて、生產的、そして不消費的大衆のためにその反對階級を敵として起つ新興自覺階級の政治的に具體的なものを持つかたちにほかならない。

ここに期待される、また期待すべき第一事は最も必要に再變化過程の進展だ。最も必要な再變化過程とはなにか。それは勿論、消費主義者による社會支配を生產主義者による社會支配へ、その生產主義者自身の自覺ある意思によつて移すことだ。

既成政黨の新適應は決して絕對的不可能事ではない。しかし、新政治結社の發生と發達が絕對的に必要なものであるにくらべては、それは全くの閑問題だ。いはんやまた、その閑問題が極度に內容と實質を持ちうる可能を想定しても、それは新結社からの外壓を條件とするものたるに於てをや。

生產大衆を眞に意識づけ、組織する努力が今日最も急要な努力に屬する。社會的再變化過程が進展すべき材料的條件は具備してゐる。形成力が不十分だ。これは、しかし、勿論、希望的、理想的見地からの言だ。

普選第一回は、形式的、したがつて必然的に、生產的、無財的、階級意識的、社會意識的新分子の澎湃たる大衆的勢力の水門を切り開いただけ、切り開くだけの作用をば呈する。その解放された新勢力が浸潤、波及、また激揚して日本の社會層と社會組織をどれほど、またいかなる式に變改するか、これは可能、必至、必要の諸見地から考察して目下最も關心的な一問題だ。

すくなくともその必要といふ一見地のみから考察する限り、私自身は、機能主義を條件とする生產主義が普選第一回に於て國民によつて新たにまたは再び新たに認用されべき指導意識的原則であることを疑ふことができない。

社會の興發は生産主義を必、當的原因とする。それの衰亡は消費主義をそれとする。現在に於て、その生産主義は新有權者と新候補、當選者側に要するにあり、その消費主義はその反對の側に要するにある。目下最も必要な一事は、國民のすべてがこれを知るにある。すくなくとも無特權的人口がそれを明確に知るにある。明確なる知識は切實なる感情を呼び起こす。

現在の制度の原則に批判を自由に加へうる便宜をば新分子のみが持つ。原則改善が急務だが、それは新分子を教育する努力の發達を一條件としてその新分子に期待するほかない。もしも普選第一回を一出發點として、制度上の原則改善が進展しないならば、新大衆から見て自責すべき理由が强大だ。その原則は一言にして所有權に集注する。舊分子は徹底しえない環境的、事情的原因を持つ。新分子によつて、どうしても、必要な徹底を、目下の日本は自身の進歩的保存のために、致さねばならん。

法の改善、法そのものの改善が、法による改善と共に必要だが、この自由を持つものは現在の體制によつて恵まれてゐる人人ではありえない。それはまたそれによつて恵まれようとする意思ある人々でもありえない。普選第一回に際して、無特權的人口の各の可能と責任は決定力的に有だ。

すべての必要なもの、有用なもの、善きもの、しかし量に於て有限であるそれらのものの分配をば生産主義者を第一目的とする制度に改善する熱と誠が、新分子の所有であり、新分子が所有しうるものであり、所有せざるべからざるものだ。その「それらのもの」は食、衣、住、乘り物、教育、娯樂費としての財だ。及び企業資金だ。生活費を各人に保障する意思、教養費と企業費を能力を條件として保障する意思が新政治の最低限必要だが、これは普選第一回の新分子と共に現實に有望化される。

——二月四日——

この妖婦を連れ去らしめよ

室伏高信

二月一日、この日は日本の全國を通じて普通選擧の熱風が吹きまくつてゐる日である。私は今これを冷眼視しながらこの短い一文を書こうとはじめた。普選のもつてゐる重大なる意義！　これが中央公論からわれ〳〵に與へられた課題である。一もとの草と雖ももとより重大な意義なきはないのである。されば普選が重大な意義をもつであらうことを疑ふものはないであらう。だが、その重大な意義とは普選の有りがたさであるのか、あの既成政黨が自己の手柄として吹聽してゐる普選の有りがたさであるのか、無產政黨と稱するものがこれこそわれ〳〵の機會であると叫んでゐる大衆のための福音であるのか、それともまた普選によつて示された政治の暴露、政治そのものの暴露であるのか。普選の歷史を說くまでもない。普選の福の神よ、お前は歐羅巴の隅々を尋ね、亞米利加には逸早く訪れ、そし今われ〳〵の日本に福袋を掛げてやつてきた。如何に久しく日本の無產階級の鬪士なるものが二千圓の供托金を貯へてお前のきたることを待つてゐたことであるか！　だが、福の神よ、お前は歐羅巴や亞米利加では、如何なる幸福を與へたのであるか。亞米利加でクウリツヂやハアデイングや等々のウォオル街の代辯者を白堊館に送つたのは正にお前の力であつた。英國では櫻草の反動を、佛蘭西では賠償餓鬼のポアンカレを、そして獨逸では一九一四年の吸血鬼として世界史とともに殘るであらうヒンデンブルクを馬鞍に乘せたのはまた正しくお前の力であつた。お前はそれでも尚ほ足りないといふのか、日本には幸に軍閥の寵兒が二〇三高地からわれ〳〵に洋刀をもつて號令し、そして腕の喜三郎が物凄い腕を振つてゐるばかりか、三菱ケ原を代表する日本一の大政黨もまたお前の名において祝福あれと祈つてゐるばかりか、無產黨の千手觀音が千本の手を差しのべてお前を「戰ひとらん」としつゝある。正に普選萬歲の時がきたのだ。だが普選の福の神、否妖婦よ、三井か、三菱か、〇無し千手觀音か、お前は抑も何ものの味方であるといふのか。お前の自己宣傳はもう澤山だ。お前の過去はお前の未來のよき鏡である。um das " einfache " Volk zu nasführen—平民等を愚弄するために！　レエニンはさすがにうまいことをいつたではなかつたか。この愚ろかな平民等を愚弄し愚弄するがいゝ。議會、政黨、普選、ソキエト、おゝ何といふ人民愚弄の機會が完備してきたことであるか！　政治家等よ、人民の「指導者」等よ、その結果が遂に如何なるものであるかを知るに至るまではこの人民等を愚弄するがいゝ。勿論、新しい無產政黨の呼び聲のあることは私も知つてゐる。その無產黨である、普選を戰ひとらんといつてゐるのは。何といふ素晴らしい人氣である

ことか！ ラツサアルが六頭立ての白馬に跨つて伯林入りをするであらうとその戀人に語つたやうに、大山郁夫が香川から、鈴木文治が大阪から、麻生久が足尾から六頭立ての白馬に乘つて東京入りをするの日が近づいたかのごとくに、無産政黨の素晴らしい新聞景氣が無産黨の素晴らしい人氣を煽つてゐる。昨日までは貧民長屋の露路あたりにくすぶつてゐた無産黨候補の奥様たちの寫眞がブルジョア新聞の三面を飾つてゐる背景の何んと皮肉にもまた華々しいことであるか！ 野心あるものは一人殘らず政治にと行け、有産であると無産であるとは今は問ふの時ではない。野心滿々たる青年等は相率ゐて政治の舞台に進出せよ。流行のスポオツマンになる腕もなく、人氣ものの活俳となるべき才色ももたないものは政治において彼等の滿たしがたきものを滿したらよい。こゝに無産黨人氣の一つの原因があり、政治的マルクス主義全能の一面がある。普選の功徳の何んと夥しいことであるか！ ボオルドキンを、クウリツチを、ポアンカレを、ヒンデンブルク大元帥を祝福した後に、今や日本の無産政黨の諸君を悉く祝福しなければ止まざらんとす。だが、それは日本の無産政黨が普選を「戰ひとつた」のであるか、それとも普選が日本の無産政黨を「戰ひとつた」のであるか。あの政治が熱の前に氣狂のやうになつて戰ひつゝあるところの、就中仲間喧嘩に夢中になつてゐるところの無産黨の闘士たちの上ぼせぶりを見るがいゝ。無産政黨が普選を戰ひとつたのであるか、それとも戰ひとられたのであるか。英國のやうに人口の八割が都會人口であり、そしてまたその大部分が勞働者、然り工業勞働者である英國においてさへ勞働者の政黨が今にまだ議會の多數を制することが出來ないでゐるのに、この半農半工の日本において果してどれだけの○無し派の代議士が出られるかはもとより疑問である。それは五人であるか、十人であるか、二十人であるか、兎も角も一握りだけのエム・ピイたちが無産黨の旗印のもとに帝國議會の一隅に座を占めるであらう。彼等の一挙一動はその數の割合には勿論世間の注意を惹くであらう。それは今の議會には好き面當てでもあり、嘲罵でもあり、議會名物の紛擾、喧嘩、野次、腕まくり、咽喉ぜめ、毆打、傷害は一段と勢ひを増してもくるであらう。だが、それは無産派の勝利であるのか、屈辱であるのか。あのおしやべりやの倶樂部に腰掛けをもつといふことは、あのブルヂョア大臣等の施政方針を聽きながら立つたり坐つたりすることは、そして最後に「少數と認めます。否決！」といふ決まり文句によつて何でゝも葬り去られてしまうといふことは、無産派の名譽であるか、恥辱であるか。それは名譽でもなく不名譽でもなく、た

だ「進出」だといふか、何といふ僻れた「進出」であることとか、議會外においては多數であるところの無産者階級を議會内においては少數として證明するといふことは、勿論そこには最後の口實が一つある。やがては多數を制するであらうといふことが。日本の無産政黨が果して多數を占めるであらうかどうか、また占めるであらうにしてもそれは十年後であるか、二十年後であるか、三十年後であるか。更に無限に近きほど彼方の方であるか、それは何れとするもいい。だが、無産政黨の勝利といふことは無産者の勝利であるか、六頭の白馬に跨つたラッサアルの勝利であるか。それは智勇辯力あるものを、就中抑しと狡智とに富めるものを無産者の間から代議士にもし、大臣にもし、總理大臣にするの時もあるであらう。だがそれは無産者の勝利であるか、「指導者」の勝利であるか。それは「指導者」とランク・エンド・ファイルとの距離を一歩々々遠くにし、そして遂に無限の距離にと隔てるであらう、支配者と被支配者とに。主人と奴隷とは。日本のデマゴオグは尙ほ大衆のための政治的自由の獲得、そして社會科學の自由の獲得といふ（中央公論二月號大山郁夫氏「科學と政治」參照）。だが彼等の夢の國、ソヴエト・ロシヤは如何。その政治的自由、そして科學の自由とは抑も何人の、何人のための、何人によつての自由であるか。スタリン！今やこの新しい暴君！そして最後の暴君！

總選擧と中心的の興味

山川均

○

まづ第一に政友會では、總選擧によつて、必ず議會の絶對多數黨になると云つてゐる。民政黨では、吾こそ普選の殊勳者であるから、二十名ばかりはたしかに殖えると云ひ、實業同志會も二十名になるといふ武藤會長の保證がついてをり、革新黨でも、もちろん增加を主張する。そこでブルジョア四政黨の豫算をそのまゝ承認し、取らぬ狸の皮をその言ひ値通りに買上げる

と、結局來るべき新議會は、定員四百數十名の代りに五百何十名といふことになる（！）のであるが、しかしこれらの諸政黨の相對的の勢力關係には、大した變化はない。そこでブルジョア政黨が、普選による最初の普選議會として豫期してゐるものは、せい／＼舊議會を、安物の蟲眼鏡で擴大したもの以上の何ものでもないのである。

しかしこの點については、多くの觀測者の一致するところであつて、新議會には、相當の數の謂ゆる『新顏議員』が選出せられるではあらうが、ブルジョア諸政黨の勢力分野には、現在の關係を一變するほどの著るしい變化が現はれるものとは思はれぬ。したがつてこの範圍では、普選は畢竟、舊議會を複生するにすぎないものである。

しかしながらこの同じ（或は、ほゞ同じ）議會は、もはや三百萬の有權者によつて選出せられたものではなくて、一千三百萬の大衆を基礎とするものである。これは從來のブルジョア政權が、三百萬人の基礎の上から、一千三百萬人の基礎の上に置き替へられることを意味してゐる。ブルジョア政黨が普選に期待してゐることは、この新しい、より鞏固な、そしてより安固な新基礎の上に、舊議會をそゝまゝそつと（もちろん、自黨に都合のよい、些細な變更を加へて）置き替へることにある。

これはたしかに、劃期的な事實である。しかしブルジョア政黨の豫期する新議會は、依然として舊議會であつて、ブルジョア政黨の關する限り、新議會のどこにも、『劃期的な』事實を求めることはできぬ。であるから、普選議會に求め得られる唯一の新しい事實は、全たく新たな社會的要素が、獨立した政治勢力を代表して、新たに議會のうちに這入つてくることにある。この新要素は、數においては小さいに違ひない。けれども歷史的意義においては、極めて大きなものである。そこで總選擧の中心的の興味は、無產政黨がどれだけの議員を議會に送るであらうか、そしてどのやうな人物を、その代表者として議會に送るであらうか、といふことに集まつてゐる。

○

ブルジョア議會のうちに、勞働者と農民とその他の被抑壓大衆の代表者が、僅かに數名ないしは十數名送られるといふことにも、極めて重大な意義があるとしたならば、この重要は、必ずしも議員の數にあるのでないことは明らかである（もちろん、數はどうでもよいといふ意味ではない）。たとへばブルジョア議會における十五名の勞農議員は、交渉團體にさへもなれない勢力であつて、議院において發言の機會を得ることさへも、

なか／＼容易でない。從つて議院におけるその行動の直接の効果に、過大な期待をすることはできぬ。それにもかゝはらず、ブルジョア議會に僅々十五名の勞農議員を選出することに、重大な意義があるとしたならば、それは議院における十五名の勞農代議士といふ引き離した事實に重大な意義があるのではなくて、議院外における事實との關聯において、初めて重大な意義があるのであつて、こゝにブルジョア政黨の議員の數と、勞農政黨の議員の數との上に、根本的な違ひがある。言葉をかへて云へば、議院の外において、この資本主義社會の全地底において、醱酵しつゝある新興階級の勢力とその作用とが、少數の勞農議員となつて、ブルジョアジーの支配裝置のうちに、その一端を現はしたといふことに、大なる意義がある。この新興勢力の侵入は、あらゆる方法によつて阻止せられてゐる。新選擧法そのものが、左の手では參政權を與へ、右の手ではその行使を阻止してゐる。

これはもう一度言ひかへれば、ブルジョア議會における勞農議員の重要は、議院の外における、無產大衆の政治的鬪爭との關聯においてのみ、この大衆的な政治鬪爭の有機的な一部分としてのみ有する重要だといふことを意味してゐる。これに反して無產大衆が、その政治上の鬪爭を、自分自身の手から、これらの勞農議員に一任するといふことであつたなら、ブルジョア議會における十五名の勞農議員には、もとより、何らの重要な意義をも見出だすことはできぬ。

○

であるから、ブルジョア政黨にとつては、選擧戰は、たゞ議員を選擧するための運動であるが、無產大衆とその政黨とにとつてはそれはたゞに議員を選出するための鬪爭であるばかりでなく、ブルジョアの政治的支配に對する日常不斷の政治上の鬪爭の一部分をなすものである。從つてブルジョア政黨にとつては、如何に多くの當選者を出すかといふことが、選擧戰の一切の問題であるが、無產大衆とその政黨とにとつては、如何に多くの當選者を出すかといふことの外に、選擧戰がいかに戰はれるかといふことが、一そう重大な問題になつてくる。

そこで總選擧の興味の中心は、たゞ單に、勞農議員が何人出るか、といふ問題だけではない。この選擧戰が、無產大衆の政治鬪爭の發展の上に、どのやうな影響を與へるか、それは無產大衆の政治鬪爭を、どのやうに展開するか、そして無產階級の政治勢力の結成の上に、どのやうな作用を及ぼすか、といふ問題によつて總選擧における無產政黨の成功と失敗とが批判され

決定せられることゝなる。

從つて、第一には選擧戰における實踐が、無産政黨の戰線統一の上に、どのやうな作用を及ぼすか、第二には、この選擧戰のうちから、どのやうな大衆運動が生まれるかといふ、この二つの問題が、總選擧に關聯した問題のうちの、最も重要な問題なのである。

○

第一の問題は、無産諸政黨の間に成立した選擧協定の問題と密接な關係がある。五ケ月前に、支離滅裂な陣形をもつて地方選擧に臨まざるを得なかつた無産諸政黨の間に、兎も角も選擧協定の成立を見たことは、統一戰線への大なる進步と成功であつた。この協定とその精神とが、おの／＼の地方において如何に實現され、協定にもとづく共同の鬪爭が、如何に展開せられたかといふことは、それによつて何人の議員が選出せられたかといふこと以上に、遙かに重大な意義をもつてゐる。

もちろん選擧協定には、多くの不備があつた。たとへばその協定が、單なる地盤の協定に止どまつたこと、共同の政策と共同のスローガンを採用することができなかつたことなどは、この協定の根本的な欠陷であつた。この欠陷は、選擧戰の第一日から、すでにその破綻を現はしてゐる。協定は到るところにおいて、破壞し蹂躙せられてゐる。この破綻が、協定の不備に由來するものであらうとも、その破壞者は、階級的道義の蹂躙者として、徹底的に批判し糾彈されなければならぬ。

第二の問題は、今日すでに無産諸政黨によつて要求せられてゐるところの、徹底的普選獲得の運動と、密接な關係をもつてゐる。現行の普選は、ブルジョアジーの議會を、より廣大な社會層を基礎として、そのまゝ復生しようとするものにほかならぬ。それはブルジョア政治勢力の、擴大と、安定とを意味してゐる。無産大衆にとつては、名目上の普通選擧は、實際上の極度の制限選擧にすぎないことは、總選擧の體驗によつて、大衆の前に實證された。それ故に、普選による最初の總選擧は、無産大衆が眞實の參政權を要求する新しい鬪爭の出發點とならなければならぬ。

ブルジョア政黨は、一千三百萬の有權者の新基礎の上に置き替へた舊議會を、大衆をして『劃期的な』事實であると信ぜしめようとする『劃期的な』事實は、總選擧によつて完成するものではなくて、總選擧によつて初まるものでなければならぬ。

普選の實質的意義

新居格

普選による第一次の總選擧が行はれた、そしてそれが最初の試みであつたことからかなりのセンセエーションがあつたやうである。

選擧權の擴張に伴つて新に有權者になつたものこの東京府だけでも六十七萬七千四百七十六人あるが、彼等が如何なる動きを取るであらうかが興味になつた。舊法による選擧ならば、これまで幾度か選擧の經驗を經て來たものなら投票に關する大凡の見當は付いたものだが、普選による新有權者の動向は豫測が出來ない。それがまた興味になつた。第二に無産諸政黨が政治的自由の獲得を標榜して總選擧裡に進出して來た。政黨としての無産諸政黨の實勢力はまだ極めて微弱であるのを免がれないが、その背景が新興階級であるのと、新しい總選擧戰への出場者だけに一般世間特に新聞紙から見ての絶好の好題目となつた。實質以上に花やかな出現を無産派立候補者は取つた。

普選は國民にどんな重大な意義を與へたか與へないかは後述するとして、制限選擧が普選になり、その程度で選擧權が擴大されたのだから、政治に價値を置く立場では、それ丈の意義もあらう。それから普選による新たな總選擧は著しく既成的な固定評價に動搖を與へた。既成政治圈での所謂大立物と新興階級に支持された青年とが對立してもどちらがどうと當選の豫測が立たない。三土忠造、小川平吉の如き大臣（大臣なぞが何かの價値であるかの如く誤想したのは過去の間違つた考方だが）と宮崎龍介河上丈太郎の如き諸君が逐鹿してその勝敗の豫想がつかないと云ふ點で丈でも固定評價の破壞になる。それにわいしよ〳〵いろんな奴が飛び出し彌次がそれに伴ひ、お祭り騷ぎのやうなことになるだけでも普選の意義はあらう。で、普選なぞはごつた返しをして混雜すればする程意味がある。だが、それと共に淺墓かな名譽心に驅られての盲動が、全體としてはそれもよからうが、個人の心理を墮らせ腐蝕させる弊害も伴ふ。

私は普選に就いて冷靜に考へて見なければならぬ。無産階級の立場において特に冷靜に考慮してみなければならぬ。先づ現在の普選は不完全である。それに附隨する施行令は支配階級に有利になつてゐる。普選制は見方によつては擡頭しつゝある無産階級の衝迫力を狡るくも緩衝しようとする支配階級の政策に外ならぬ。けれども、一見理屈は立つ、即ち國民の政治的權利をよく普遍的にしたと、而して無産政黨でもこの折角與へられた權利を有効に利用し、政治行動の進出すべきであるとそれ〲に理由はある。だが、それは何れも表面の理屈で、支配階級は自己の階級的利益に反對である勢力を有効に導き入れようと欲するものでなく、無産階級は支配階級と討議して自己の階級的利益を獲得して行こうとする意思ではない。

社會民衆黨の安部磯雄の如き人なら飽迄も穩健に、英國の勞働黨のやうに議會主義を奉じて着々として進みたいのであるから、氏等の意思では無産階級獨裁の如き所説は生まれまいが、日勞黨、勞農黨の如き何れもマルクス主義で、表面の理屈は何であれ、無産階級の獨裁を肯定もし、議會利用主義であつても、ブルジョアヂーと同一の基底に立つ議會主義者たる道理はない。若し安部氏等の如き考へ方に傾くならば、彼等としては墮落である。だから、彼等が普選によつて議會入りをすれば、總選擧と云ふ動きで先づ無産黨的示威を與へ、次ぎに議政壇上で第二の無産黨的威力をほのめかす丈で少數である彼等の提案が通過すべしとは彼等自身だつて考へもしないであらう。でも、根氣よく十幾年乃至幾十年もつと以上の年月を豫想し、無産黨議員が一人ふへ、二人ふへて仕舞には議會に大多數を得るまで待つてそこで社會主義的政策を行へばいゝのだと考へるのであらうか。だが、そんな呑氣なことは日々のパンの鬪爭に苦慮してゐる多數無産階級の呑氣にも待てることではない。

去年年末英國の政治學者ハロルド・ラスキーは「議會政治の地位、その缺點の分析」と題する講演をして、英國の議會政治が中心歸來的になつて、地方の意見が議會に反映されないために、今や英國の選擧は地方に於て冷淡を極めてゐることを指摘した。英國に於ける昨年の縣會の選擧に際し地方の都市では五割以上の棄權のあつた個所のあつたことは新聞紙が報道した。ラスキーは英國の過去五十年の議會史は討論妨害の機制史であつたと云つてゐる。彼は最後に議會の欠缺を救治すべき有力た方法がないと嘆息してゐる。これが議會政治の本元英國で、少壯博識の政治學者として知られたラスキーの嘆息であることはそも〲何を物語つてゐるか。議會政治の本質論が右の如く論ぜられ、一方フランスなぞで普選布かれて既に永年しかも、

無産階級はそのために何等利する所のなかつたのはフランスの政治史が物語つてゐる。形式的普選に醉ひ且つ亂舞しうるものは普選にたいする幻影を樂觀的に描き過ぎてはゐないか。それとも時々の波に乘つて踊ればいゝとする道化役者か。

政治の起源、政治の本質、政治の意義を再思する必要がある。政治の意義は時代〳〵に幾分の變化はあつたが、政治の本質に相違はない。政治の本質はもつともよい意味であつても事務であり、方法である。政治の武器は政策である、そして政策とは權謀術數の同義語に外ならない。政治の目的は支配である。

普選であることは普選でなかつた時よりすれば政治的には一段の進歩である。しかし、それ丈の理由で狂奔するのはお目出度い。投票者が初めてかちえた一票がその人をも明かるくさせる光線ともならない。明るい一票、淸い一票と呼びかける所に既に利用の第一歩がある。

新社會の確固なる基礎は無宣傳のうちに築かれねばならぬあ

普選の投票獲得と圓本の讀者獲得とほゞ同一の性質の下にある。浪花節話しのビラ同樣に立候補の寫眞を入れた不愉快さを見よ、圓本の廣告同樣に書きつらねられた推薦狀を見よ。圓本の新聞廣告で、某々氏曰はくがある如く、もつとひどく推薦者の名前の列記を見よ。僕らの窓から投ぜられる立候補宣言書の一として不愉快でないものがあらうか。資本主義的商業主義なら諒とする。だが、政治主義に伴ふ資本主義的な誇張公示は些か閉口させざるを得ない。

普選にたいする形式的の意義はあらう。だが、無産階級解放の實質に即する場合には果してどれ丈の意義があるか。むしろ政治がその本質に內含する毒素的作用が無產階級解放の實體的進行に少なからず禍ひするものではないかとさへ考へられる。要は、實體的の考察と行動とにある。これがわれ〳〵の立場よりする普選觀なのである。

日本の政治過程と普選の使命

長谷川如是閑

近代の代表政治は、デモクラシーの政治學が云つてゐるやうな、全社會的の大衆の要求から起つたものではなく、舊特權階級に對する新特權階級の勃興に基いたものであつた。それは議會制度の起原に於ける代表制とある共通の點をもつたものである。原始的議會の代表制度は、中央集權に對し、地方の封建的勢力又はそれよりも寧ろ地主の勢力を代表したものであつて、特權をもたない階級は與らなかつた。近代政治の民衆的代表政治は、さういふ舊經濟的勢力――主として不動產に立脚する――に對して、新經濟的勢力――主として動產に立脚する――の勃興したことが、代表の中心即ち政治的勢力の中心を所謂市民階級に移動せしめたものであつた。即ちこの意味の代表政治は、所謂『有資格者』の政治であつた。而してその資格の中心となるものは、財產であつた。だからこゝでも特權のない階級――財產のない階級――は與らなかつた。

だから財產的利害の集團がある程度まで結成されるに至らないうちは、代表制度は決して近代的のそれに移らなかつた。即ち中產階級的結束が政治的勢力化するには、經濟的に階級された新社會的勢力の成立を條件とした『有資格者』的代表制度の――自由主義政治の――完成に相當の年月を要したのは、それがこの基礎的條件に待たねばならぬからであつた。

この『有資格』制度は、どこの國に於ても、次第に、その『資格』の制限が減退せられて所謂普選への進展となるのであるが、これについてはやはり『資格』――財產的――のない階級の結成を基礎的條件としなければならなかつた。產業革命の結果、無產階級の發生となつたが、その勢力がいきなり、政治的勢力の結成として發動する譯のものではなかつた。動產階級が、經濟組織の上で統一的勢力として成立するまでは、それが政治的機能に入り込むことのなかつたやうに、無產階級も、經濟的統一組織に於ける一勢力として結成されずに、その組織的制壓に依る外部的目的物である間は、一種の『自然的勢力』としては社會に對して一定の影響を與へることはあつても、政治的有機關係に於ける一勢力ではあり得ない。だからローマの奴隸一揆やわが中世の農民一揆のやうなものは、その力の勃發に於てはある程度まで結成されてゐるが、經濟的統制に於ては、それはたゞ外部的隸屬物たるに過ぎないので、その發動も、物質的勢力として統制を脅かしたが、決して政治を有機的に進展せしめる力とはならなかつた。

我國に於ける事情を顧ると、わが立憲政治そのものは、必ずしも中產階級の經濟的組織の完成を待たないで、外國の經濟に刺戟された、社會の上層――政治階級乃至知識階級的層――

の政治的意識作用に基く、當時の支配階級内部の鬪爭關係によつて現出したものであつた。從つてそれは『天降り式』のそれであつた。それを基礎づける近代經濟の組織による有産階級の結成が必ずしも『近代經濟』的結成でなかつたことは、その時代の政治の基礎的組織たる政黨が、産業的分權主義に基かずに、封建的分權主義の延長に據つてゐたとでも明かである。されば、我國の有産階級的政治の初期は、有産階級的結成も、從つてブルジョア意識も甚だ畸形的のものであるとを免れなかつた。その結果は今日に及び、我國にては、つひに先進近代國家に於けるやうな自由主義政治は完成されずにしまつた。その間に、産業組織それ自體の自由主義が失効して帝國主義的構成をもつに及んで、政治も封建的に逆戻りしたが、我國に於ては、逆戻りでなしにそのまゝ封建的非自由主義的形態を持續せしめて今日に及んだ。

それと似た關係が、今回の『普選の獲得』なる現象にも存在してゐる。この『有資格』政治の減退は無論、無資格階級即ち無産者の經濟組織に於ける勢力の增進に基くものであるが、我國に於ける普選の成立に於ては、やはり明治初期の急進主義に於けると同じやうな特別の事情が存在してゐた。即ちそれは、有産階級の内部的分裂によつて、單純に、政略的に、普選が絶へず唱道されたことであつた。その意味の普選の唱道は恐らく明治十年代から始まつたといつてもいゝ位であらうが、それはど超越的の唱道ではなく、もつと具體的の、支配階級内の鬪爭過程に於ける意識として、時の政府の反對黨は、代る〲普選を唱道した。自己が在野黨の時代はそれを唱へ、政府に立てばそれに反對するといふ風であつた。政友會の如きは一度自から議會に提出して衆議院を通過しめた後に、政府者として、それに反對し、普選論は『社會を脅威』する危險思想であると公言した。

然し、かゝるブルジョア政治に於ける遊戲的普選論がつひに本物——無論性質はまだ本物の普選を去ること遠いが——となつたのは、戲談から駒が出たやうなものだが、然し、如何に遊戲的とはいへ、さういふ遊戲をしない譯に行かなくなつたのは、無論、わが國の近代的經濟組織に於ける無産階級的勢力の認識によつたものであつた。がそこでも注意すべきことは、それが現實の無産階級勢力の結成そのものとは別な、少くともそれをある形で歪めて現はした勢力であるといふことであつた。即ち、中産階級的勢力を透過してのそれであつた。無産階級的意識は、先進國の史的發展によつて意識的にわが國にとり入れられたこと、フランス革命の歴史の維新當時に於けるが如きものであつた。無産階級的勢力の結成は、自己創造的に、この傾向を押し進めるだけの力となつてゐなかつたことは、明治

初期の中產階級が、立憲政治を嚴重に中產階級的構成の有機關係に據るものとすることの出來なかつたのに似てゐた。無論、燃料のないところにはマッチを擂つても燃へ上る筈はないのだから、それを基礎づける經濟的條件は確實に進行してゐたに相違ないが、その條件が政治的機構に作用するにはまた特別の組織的發展を必要とするのである。無產階級の經濟上の地位は、たゞその自然狀態に於ては、さういふ作用をもつに至らないのであつて、それには、組織的統一の過程が進行せねばならぬ。此點に於て我國のそれは甚だ充分とはいひ得られなかつた。勞働階級の結成の如きも、英國に於けるやうな中世紀式職人組合の歷史的因緣に煩はされないで、直ちに先進國の經驗を踏襲する自由はあつたが、同時に、團結力に乏しく、特權的職人のギルド的意識の組織に於て充分でなかつた如く、それが無產階級化した場合の統一的組織に於ける意識と團結力の進展は遲々たるものであつた。それも亦畢竟、經濟的段階の然らしめた所であらうが、何れにしても、日露戰役以後の短い年月の間に、先進國に於ける一世紀間の飛躍を經驗せねばならなかつたことがさういふ事情を釀成せしめた重な理由であつた。

それこれに拘らず、中產階級的政治に於ける機構から、普選の唱道が政治的武器となつたことは、やはり近代政治の當然の歸結を持ち來す結果となつた。されば、この新制度と無產階級の結成との間には相當の間隙のあるのは免れないことであつた。政治的興味と階級的結成の要求とは必ずしも一致するものではなく、英國の如きは、勞働階級の團體は、常に政治的發動を回避する傾向にあつたが、然し經濟的勢力は、それが結局、政治的に發動することの必然であることは、商人階級のやうに、對政治的地位に數千年間置かれたものが、終ひに政治的機構の中心勢力をなすに至つたことによつても察しられるので、產業的支配に於ける勞働階級の進展は、それの經濟的地位を政治的に反映せしめる機構を含んでゐるものと見ねばならぬ。しかもさういふ風に經濟的根柢が政治的影像を現在することを、經濟と政治との關係に於ける自然の順序とするのである。然かもわが國に於けるそれは、政治的影像に對して、經濟的本體の貧弱を免れなかつた。これはその政治過程に於て、中產階級的勢力の機構が歪められて現はれたことの結果であつた。

ここから、わが無產階級結成の內容は、種々なる性質と意味合とに於て中產階級的要素を含んでゐる。如何なる過程もその過渡期に於て、さうであることを免れないものであるから、このとは大局の於て、障碍的であるよりは寧ろ推進的であると見ねばならぬことであるが、然し、そのために、與へられた政治的條件の效果は未だ充分のものであり得ないとを覺悟せねばならない。殊に、普選實行の際に於ける無產階級の政治的結成の甚しい分散的形勢の如きは、維新當時に於ける藩閥の分裂よりも、實勢力に影響することを脫れない事態である。これも亦、經濟的

利害の對立よりは、階級的結成の統制關係それ自體の分裂で、「社會的」對立に對する「政治的」對立と同じ現象であつた。云ひかへれば、中産階級內の分裂とその機械的乃至心理的動因に於て相近いものであつた。たゞそれは今日の既成政黨間の分裂とは違つて明治初年の政治的對立に似て、先進國の政治的對立の經驗的意識に基くものであつた。而して、今一つそれとも異る所は、明治初年のそれは、史的經驗の意識の選擇が、それに先在する舊政治的對立の潜意識に基いたもので、ある政治的分裂は舊政治的地位がその意識の性質を決定したものであつたが、今日の無産階級的分裂は、舊政治的地位の對立から生じたものでなく、時日と內容とに於て極めて淺いがとにかく日本の現在の時期に於るけ現實の過程を實踐した經驗的意識と、外國的意識との背馳によつたものであつた。それが共に嚴格に實踐的といはれない所以は、前者の經驗的意識は、舊政治的機構のそれに隨したものであり、後者の意識は、常に現實の史的過程によつて修正されねばならぬ社會過程一般の認識によつたものである點に存する。がそれはどうあらうとも、さういふ過渡的現象は必ず歴史的に脫れないことであり、又それは、過渡的であるのみならず、恐らく常住的に、さういふ傾向の存することも見込まなければないことであらうが、普選に於けるその形勢は常に數の上の効果に止まらず、「無資格者」の政治の實現過程を曲線的ならしめることはいふまでもない。

されに、普選は、無産階級の經濟的根據に基く結成された勢力の發展と共にでなければ、こゝ暫らくは中産階級的政治過程の發展として作用するに止まるのであらう。然し、これをもつて、決してわが國の政治過程に於ける普選の意義を輕からしめることは出來ない。その反對に、右のやうな現在の中間的過程に於ての故に、一層機能的であるともいはねばならぬ。といふのは前にいつた如く、わが國に於ていまだ殆んど實際の効果を收めてゐなかつた自由主義的急進主義が、これによつてわが政治過程に作用する機械的方法を得るからである。中産階級的急進分子は、そこに於て始めて近代政治の動力として成立するのである。さういふ歴史的順序によつて、封建的制度の撤廢される過程は、わが國では、これから始まるのである。近代的の徹底した政治的自由は、わが國にとつては、外國の書物に書いてある御伽噺に過ぎなかつたこと、今日、ソヴイエツト革命がロシヤの本に書いてある御伽噺に過ぎないのと異らなかつたが、少くとも右の前者だけは、普選の成立――今の普選よりも、もつと『無資格』的ならしめる必要は急に迫つてゐるが――によつて進捗する。而して此意味の近代的自由の完成しないところでは、社會組織の進化は、舊政治のそれの如く、突發的變異の過程としてのみ期待さるべきものとなるが、普選の効果がどこの位徹底するかしないかゞ、恐らくその邊の事情をも決定するであらう。

政黨心理の解剖

高畠素之

一　嘘八百の政治學

世に政治學と呼ぶ一科の學がある。その研究對象とするところは政治現象であり、その認識目的とするところは可成的眞であると稱しながら、結局は最大多數の最大幸福に倫理的是認を求める位がオチで、いづれも秋霜烈日なるべき科學的批判を缺如してゐる。その段は、理想主義的プラトン亞流も現實主義的マキァヴエリー亞流も問ふところでなく、科學的社會主義のパテントを獨占するマルクス亞流に於いてさへ、甚しき曖昧糢糊を發見せざるを得なかつた。

政治學を斯く僞似科學の領域に蹈跡せしめたについては、おのづからなる二つの原因が算へられる。その第一は、政治現象に對する遠慮會釋なき放言を躊躇しなければならなかつた怯懦に原因し、他のもう一つは、實際政治を直接の研究主題とすることに依り、自己の政治的野心を忖度されまいとする警戒に原因してゐた。換言すれば、迂濶に觸つて後の祟りを招かさらんため、政治とか國家とかは、これを『神』の地位に祭り上げてしまつたのである。

元來、人間の性質には、躇氣となつて蔽ひ隱くさうとする醜惡な部分と、實際以上に持て囃やさうとする善美な部分と、この二つの明暗があると一般に信じられてゐる。ドストイエフスキー流にいふなら、取りも直さず『神と惡魔の混血兒』であるが、斯うした人性觀上の二元論は、昔しながらの性善性惡兩説の公武合體論として、文藝家のいはゆる『人間的』といつた是正の言葉で認容されつつある。何ぞ知らん、後者は前者の派生に外ならぬといふ理屈は後まわしとして、兎に角にも政治現象

なるものは、右の秘し隠くしにかくさうとする醜悪部分の、最も醜悪的發作だつたことを理解する必要がある。

そこで勢ひ、ザインの狀態に於いて政治現象を理解することは、我れ人ともに牡臍を拔かれる思ひをしなければならないので、淺猿しくもゾルレンの形式を假定し、政治の本質に關する究明を、政治の目的に關する或るアプリオリから出發するに傾かしめたのもやむを得ない。斯くて、政治が一定の倫理的內容を有つかに詐稱され、延いて政治學說も、一定の倫理的考慮の上に建設すべきものとされてしまつた。これは明白に虛構である。虛構ではあるが、それが餘りに重層的に累積された結果、最初の意識的虛構が今度は無意識的虛構となつてしまひ、遂に感覺能力上の中毒を惹き起す騷ぎとなり、今もつて相も變らぬ本末顚倒を敢てしつつある。これ政治學が科學の名を僭稱しながら、形而上學から一歩も進出し得ぬ根本の理由でなければならない。

政治の本質は、明白に人類の利己的鬪爭だと言ひ得る。憲法とか、議會とか、政府とか、凡そ勿體らしい制度や機關やで紛飾されてゐるが、その本質に至つては、熊公八公の喧嘩沙汰と少しも變らぬ利己的本能に出でたものである。その限りに於いて、政治の本質を理解せんとするなら、豺狼の交歡反噬を觀察する動物學者の冷徹な眼光を用意しなければならぬ。大臣や議員の巧言令色を極めた演說に惑はされず、これを熊公や八公のベランメー的惡口雜言に飜譯して理解し、彼等が共通に利己的動物であつたことを認識する必要があらう。さもない限り、政治に對する有害無益な幻想を放棄し得ず、隨つてまた、政治活動が倫理衝動に立脚するといふ荒唐無稽な妄念から解放され得まい。

總べての人間は、程度の差こそあれ、悉くエゴイズムの持主である。尤も中には、身を殺して仁をなす聖賢人や殉教者もなかつた譯でないが、彼等は稀れに見る例外的存在と解すべく、差しづめ生物學上の『變異』と見て差し支へない。百本に一本、毛ばかりの玉蜀黍が出來たとて、そんなものは玉蜀黍の構成や榮養分の考察に影響がないのと同じく、九十九パーセントの俗人が悉くエゴイズムであつたなら、殘る一パーセントの例外は、必らずしも人間の本性考察に顧慮を來たす筈もなからう。既に人間がエゴイズムである以上、誰れしも人間は、他人のことよりも先づ自分のことを關心する。他人はどうでも構はないと言はぬまでも、とにかく自分の都合、自分の利益、自分の快樂、自分の人氣、自分の權勢、自分の富貴を考慮したがる。善くも惡くも、これが人間の天性だから何ともお氣の毒であ

る。

社會的動物と呼ばれる人間でありながら、また現に社會的生活を營みつゝある人間でありながら、またあるが故に、天性の斯かるエゴイズム的本能は絶えず臍をつつき、他人を凌駕して自分本位の欲望を發揮しようとする。そこに鬪爭が開始される。最も卑近な例證を求めれば、熊公の吉原説と八公の洲崎説が鬪らずも牴觸し、組んづほぐれつの大道的鬪爭を開始する如きものである。

政綱の政策のと、如何にも倫理的動機に出發するらしき金看板を掲げる政治上の鬪爭にしても、結局のところは、熊公八公の喧嘩と五十歩百歩の相違に過ぎない。けだし、素朴的なると修飾的なるとの相違はあつても根本は彼等のエゴイズムに誘發された鬪爭だからに外ならぬ。這般の消息を確認し得ざる限り、政治學は遂に僞似科學の領域を脱し得ないであらう。

2　政治は必然の惡

人間は利己的な動物である。しかし、如何に利己的だといつても、朝から晩まで、晩から朝まで、四六時中いつもエゴイズムの利劍を磨ぎすましてゐる譯ではない。時には、自分ばかりでない他人の都合も考へる。殺身成仁の境地は及びもないが、せめて生身成仁に貢献したい念願は多分に所有してゐる。それが證據に、何の由縁もない路傍の乞食に五錢白銅を恵んだり、野田の罷業團に力瘤を入れたり、どうやらエゴイズム一元論では解決つき兼ねるやうな醉狂な眞似もする。だが、それは皮相な見解で、例へば斯くすることに依つて、自分の强者的誇負を滿足せしめ得たといふ如き意味で、矢張りエゴイズムの發露だつたことに氣づくであらう。世上比々として皆しかり、他人への考慮は、決して他人の便宜そのものを目的とせず、他人の便宜を圖ることに伴ふ色々な自己的關心の滿足が、根本にして唯一の目的となつてゐるのである。

善因あれば善果あり、情は人のためならず、人取る龜は人に取らる、惡事の酬ゐは天罰てき面等、はなはだ多くの默阿彌的名句は、その意味で浮世小路の眞理を雄辯に喝破したと言ひ得る。實際、人が他人のために盡くすのは、これに依つて自分が利益を享けられればこそで、自分の利益に寸分の貢献がないなら、變異的人種の聖人賢者ならぬ限り、世間なみの人間は尻に帆あげて逃げるが必定の經路であらう。尤もこの場合、彼れの盡力が他人の利益に寄與することは大いに有り得よう。だが、他人が利益した代りには、自分も同程度か同程度以上の利益を享け得たことを考へれば、意識すると意識せざるとを問はず、

直接なると間接なるとを問はず、矢張り自分中心のエゴイズムに要約するの外はない。聖人賢者の場合だつて、彼等が身を殺すことより仁を成すことが、彼等の自己的關心に於いて、ヨリ强大な引力となつてゐたからと解すべきである。進んで磔死を擇んだキリストを以つて、最大の個人主義者となしたオスカー・ワイルドの卓見を、單なる逆說や反語として葬り得ない所以も玆にある。

ところで、斯くの如きエゴイズムの權化たる人間が、何故にこれを、直線的に發揮せずして曲線的に發揮するかの問題である。それも結局、直線的ならしめるより曲線的ならしめた方が、ヨリ效果的だといふ打算に基づいてゐる。つまり、エゴイズムの深刻化であり、同時にまた複雜化であつた。そこが同じ利己的動物でありながら、他の諸動物と比較して、人間が社會的動物と自稱する所以でもある。だが、人間の斯うした屬性は、謂はば後天的に獲得した種屬的所產であつて、先天的には猛獸や毒蛇の如く孤立的だつたに違ひない。唯だ人間に繫がる動物種屬は個體としては生存競爭上有利な武器を與へられてゐなかつたので、獨力では他の諸生物と抗爭することが出來ず、自然の最後の一案として社會的結合を促進したに過ぎない。これに反して、猛獸や毒蛇は、生れながらにして强力な武器や戰鬪力を所有し、隨つて社會的結合の必要を訴へられなかつたが、如何に一匹どつかへでは勇猛果敢でも、多勢に無勢の譬へに洩れ得なかつた結果、今や完全に人間に征服されるのやむなきに立ち到つた。

社會的結合をなし得たばかりで、人間があらゆる生物の王者たる地位を獲得した事實は、彼等をして倍加的に團結の必要を痛感せしめずには措かぬ。斯くして、社會的本能の發達に貢獻すると共に、やがては倫理道德の樹立を喚起し、それやこれやの手違ひが、人間をして社會的動物と自惚れる程度の進化を遂げしめたのである。けれども、三ツ兒の魂は矢張り拔け切れない。凡ゆる人間に共通する自己中心慾は、その間接的表現たる社會的本能の手前を忘れ、ともすれば利己的本能として直接的表現を試みたがる。猜疑心や優勝慾の如き、一見いかにも反社會的本能と思はれやすき社會的本能は、凡ゆる善美な社會的道德の裏を搔いくぐり、本來自然のエゴイズムと結托して、人生をいやが上にも複雜ならしめつつある。事態が斯うなり、各人勝手のエゴイズムを奔放自在に發揮させたのでは、肝腎の社會的結合を維持する事が出來なくなる。玆に於いて何らかの細工が必要となり、謂はば第二次的の結合要素として、支配統制といふ政治法律機能を發動せしめたのであつた。ホッブスやルッ

ソーは、斯うした支配機能の發生を人爲的意識的な契約に求めてゐる。が、實は社會的結合を保持する當面の必要上、自然淘汰的に發生したのである。社會學的政治學の集成者ラッツェンホーフアーの言ひ草ぢやあないが、政治はその意味で『自然的エネルギーの現はれ』と解釋すべく、同時に『人類の運命にまつはる必然惡』と觀念するの外はない。政治學はそれ故に、彼れの喝破せる如く『社會の精神病理學』に外ならず、凡ゆる政治現象を精神病理學的に解剖して、始めて正體の核心を把握し得るであらう。

3 道徳も遂に手段

萬物の靈長と生れた悲しさに、人間は我れと我が身の急所を突かれることを甚だしく厭ふ動物である。穢いとこや醜いとこは、成るべく目を瞑つて知らない顔をする反面、少しでも善いとこ美しいとこを發見すると、大聲叱呼して自慢のタネに利用したがる。仁義忠孝、奉公義勇、博愛正義、自由平等、等、等、凡そ神樣の申し子か何かのやうな自己欺瞞に陶醉し、さうした美事善行が靈長的存在に錦上花を添へる所以なるかに吹聽してゐる。しかもその癖、對人的關係が一旦生ずる場合に當面すると、人を見たら泥棒と思への金言を墨守して除らない。これは言ふまでもなく、明白か暗默かに相互のエゴイズムを警戒する證據だが、阿賭物と蔑視する金錢の貸し借りにも一々抵當を設定し、證書を交換しなければ氣が濟まぬやうに、三人寄れば文珠の智慧を絞つて、やれ規約だそれ覺書だと、お互にお互を束縛して喜こんでゐる。そして尙、その規約なり覺書なりに照明せられた意志は、最高無上の權威が與へられることを常とする。

考へて見れば、ずいぶん莫迦な話しだとも思ふが、さうしなければ他人は兎にかく、自分で自分のエゴイズムの處置をつけ兼ねる人間の弱點は、何にか知らの形で公的强制を必要としてゐるのである。この事實は、遠く有史以前の人類記錄に發見せられ、婚姻、復讐、裁判、懲罰等の規定が既に存在してゐた。けれども、當時にあつては、斯うした强制權が一群の首長に依つて壟斷されてゐたので、極めて素朴單純な形で存在したに過ぎなかつた。やがて同質結合の社會が異質結合的となり、種族對種族の鬪爭が行はれるやうになつてからも、敗北群は優勝群に文字通り隷屬しなければならなかつた關係上、征服者の意志を意志として追從するの外なかつた。けだし、これらの時代に於いては、武力のみが唯一の强制的手段であり、武力的優勢が社會的勝敗を決定してゐたからである。

然るに、社會の發達が次第に進化するや、勝敗優劣の決定は單なる武力のみでなく、雜多の要素が社會鬪爭上の武器として充用されるやうになつた。知識力、技術力、經濟力等、いづれも有力なそれである。事態が玆まで進展すれば、社會的鬪爭も武力的抑壓の形を以つてせず、少なくとも表面上は、飽くまで平和的協同の形を採るやうになつてくる。封建制度が倒れて立憲制度が現はれた徑路は、直線的素朴的な鬪爭形態から、曲線的修飾的な鬪爭形態への進化だつたといふを得よう。けだし、封建の武力支配が微動だもせざりし時代には支配群たる貴族階級の意志をそのまま遵奉してゐた町人階級が、相互の階級的利害の正反せることを知り、且つ被支配群たる彼等自身の利益を何らかの形式で伸長せんとした結果、勝味のない武力的手段を避けて議會といふ平和的手段を考察し、實質的に貴族支配の牙城を覆へさんとしたのである。モンテスキューは這般の消息を喝破して、町人階級に依る『詐術』と見なしたが、全くその通りだつたといひ得る。

エゴイズムも原始的な個體鬪爭である間は、まだしも容易に因果の關係を觀取し得る。けれども、それが群體鬪爭となり、武力的なそれから平和的なそれに歪められては、動機と目的の先後さへ曖昧ならしめ易い。斯くの如く、平和的手段に訴へて鬪爭を有利に展開せんとする狡智が作用した結果、人はみな自分の醜惡な動機を蔽ひかくさうとし、似ても似つかぬ善美な目的だけを掲げて、恰もさうした目的のために行動云爲するかの如く裝ふのである。これは、自分のエゴイズムを他人に警戒されまいとする用心の發露で、逆面的に見れば、以つて他人のエゴイズム的弱點に乘じようとする以心傳心の狡智に外ならない。政治が人性の極醜的部面に出發しながら、しかも極美的部面の發揚であるかに取沙汰されるのは、斯うした欺瞞作用の結果と解して差し支へない。

殊に立憲制度は、お互ひがお互ひのエゴイズムを、インポテントのまま抑壓しようとする巧妙な組織であるから、尙さら大義名分的な看板を掲げる必要が濃厚である。正義のため、自由のため、人道のため、國家のため、等、等、凡ゆる倫理的技巧は彼等の政治的手段を效果的ならしめんとして、個人の凡ゆる利己的傾向の基礎上に行使せられる。政治に若し倫理的動機がありとすれば、その命令權は自由意志から派生したものでなく、倫理的動機がなければやつて行けぬといふ必要、即ち一個の社會的必要に胚胎したと解すべきであらう。鷄が先か卵が先かは不明でも、政治目的が先で倫理動機が後だつたことは明白に理解し得られる。寧ろ謂はば、倫理的動機そのものが、政治

的オルガニゼーションの一部として發達して來たのである。その道理を忘れ、本末を顚倒するやうでは話しにならない。

4 立憲政治の母胎

政治學教科書の記すところに依れば、政黨は責任政治の執行をなす上に於いて、絶對に必要にして不可缺のものだといふ。或はさうかも知れない。巧言令色なりの政綱政策であつても、人氣吸收の手段として登錄商標的に掲げた限り、結局彼等の自繩自縛を促がすことになり、延いては責任政治の確立に貢獻するのも事實である。けれども、それは偶然の結果に過ぎず、政黨的結合をなす抑もの物理的乃至心理的の動機は、何もさうした高級目的の實現にあるのではなく、これに依つて彼等の利己的滿足を追求せんとするからに外ならない。

人類の發達が未だ幼稚であり、その欲望も主として色食に限られてゐる間は、社會生活に何ら複雜な機能を必要としなかつた。物理力的强者に依る物理力的弱者の支配といふことだけで、支配統制の政治機能は十分に維持されたのであつた。然るに、次第なる人類の進化が欲望の分裂を促がし、前述の如き優勝慾とか猜疑心とか、如何にも反社會的傾向と見られ易き變形的社會本能を發達せしめると同時に、個性の複雜化を來たした結果、政治機能そのものも、單なる物理力强制だけでは維持を困難としたのである。けだし、優勝慾は自己エゴイズムを奔放に發揮せんとする傾向であり、猜疑心は他人のエゴイズムを極端に警戒する傾向であつて、兩者が錯雜混合して作用する限り、善くも惡くも結局、相互のエゴイズムをインポテントのまま抑壓するの外なかつたからである。立憲制度はその意味で、各人をして各人のエゴイズムを發揮せしめざる人爲的組織だつたとも解されよう。

とはいふものの、人間の利己的本能は、そんなことで拂拭されるほど微弱ではない。堰かれれば堰かれるほど、戀の早瀨を決するが如き勢ひを以て、如何なる方面の如何なる形式に於いてか再生の立場を發見せんとする。協談的なら協談的なりに、合法的なら合法的なりに、如何にも協談的乃至合法的なことを裝つて、巧みにその裏で利己的本能の充足を追求せんとする。

立憲制度は利己心牽制の、驚くばかり精密にして緻密な組織である。その大黒柱たる憲法は、政府と國民との自由活動を極度に規制した成文である。行政、立法、司法の三權が特立し、相互に侵し侵されざることを原則たらしめ、苟くも惡事惡行の發揮の餘地はこれを殘さない。また國政運用に當る政府に對しては、議會といふ小姑を設けて嚴重に監視させ、非違あらば直ちに糺

揮し得る權能を與へ、これには選擧に依る國民の代表を以つて充當せしめてゐる。随つて、立憲政治の名目上の中心は議會であり、立憲政治即議會政治と見て差し支へない。ところが、議會政治の基礎は夜店の蜜柑なみに多數主義である。猫が杓子でも、頭顱的多數を集め得れば文句はなく、玆に少數支配に對する反動としての多數主義が、新しい政治道德として出現したのであつた。別言すれば、多數の猜疑心が少數の優勝慾を壓倒して、立憲時代の政治原則たらしめた譯である。

今や多數の猜疑心は、デモクラシーの名の下に、あらゆる政治活動の自由を規制しつつある。若し或る者が政治上の優勝慾を充足せんとすれば、彼れの利害が如何にも大衆の意志を代表するかに誇稱し、大衆の意志を意志として彼れが發現するかに少なくとも表面上は取りつくろはなければならぬ。さもない限り、大衆は彼れの野心を猜疑して、決して彼れを周圍に近づかしめないであらう。嘘も方便、斯くして政治上の野心家は、國利民福の羊皮を冠つて凡俗的羊群を馴化すると共に、恰も彼れの政治目的が倫理動機に出發せるかの如き口吻を弄し、秘かにエゴイズムの爪牙を磨くに至らしめた。玆に於いて、倫理的技巧は政治的技巧と完全に一致する。

政黨なるものは、斯うした野心家共が、彼等の大なり小なりの野心を追求する手段として、有象無象を問はぬ一山十錢連を掻き集めたものに過ぎない。唯しかし、有象にしても無象にしても、生きとし生ける人間は必らず各自の利害を有する。歴史的に地理的に、人種的に宗教的に、經濟階級的に職業的に、その他、はなはだ複雜多岐なる利害を交錯的に所有してゐる。その限りに於いて、有象無象なりにも彼等を掻き集めるためには、彼等の直接に關心する利害問題を掲げて、恰かも彼れが、彼等の利害に殉ずる使徒であるかに裝ふ必要も生じてくる。政治家といふ政治家が、一人の例外もなく、政治的支配に優勝慾の充足を求めようといふ最も露骨なエゴイズムの所有者でありながら、國利の民福のと、どこを押せばそんな音が出るかと思はれるやうな善美的な理想を並べ立てる心理は、彼等が意識すると意識せざるとを問はず、他人の猜疑心を挑發せざらんとする極度の用心が然らしめた結果である。政黨の揭揚する政綱政策も、甘きにつく蟻を集めるための砂糖的意味を出でない。

5 政黨の羊頭狗肉

立憲政治は今もいふ通り、猜疑心を母胎として成立したものである。その縮圖たる議會の組織も、それぞれに異なる關心を抱く國民を甲乙なく代表するかに見せかけ、ヨリ大なる關心に

ヨリ小なる關心を追随せしめる仕掛けとなつてゐる。實際問題として、いづれをヨリ大なる關心とし、いづれをより小なる關心となすべきかの判定は困難であるが、そこにソコありフタあり、選擧制度といふ特別のカラクリに依て醜化してゐるのである。

選擧は投票の自由行使である。自分の意中にある者を選出することに依り、自分の意志を彼れに依つて間接に代表せしめ得る方法である。然しこれは、單なる名目上の形式に過ぎず、選擧者と被選擧者は互ひに生ま身の人間である限り、兩者の完全な一致などは有り得べき道理がない。一旦選擧されれば、似ても似つかぬ鬼ツ子の面目を發揮することは、世上その實例の余りに多きを憾みとする。唯それなりに、政治家商賣は人氣稼業であるから、次回の投票を掻き集めるための信用を繋がなければならぬ必要上、余り阿古木な處置を取ることが出來ないといふ現實的な理由があるので、露骨に選擧者の意志を蹂躙しないだけである。

これは個人の場合も集團の場合も同じだ。集團といふ意味は、取りも直さず政黨を意味するが、譬へていへば政黨も一種の店舗である。隨つて、出來るだけ永く顧客の信用を繋ぐ必要があり、政綱政策として發行した約束手形の處置は、彼等が内心で好む好まぬに拘らず、外部的に決濟を强要されることにもなつて來る。そこで『招かざる客』の責任政治の樹立にも結果し、ウソから出たマコトの善政が期待される所以でもある。憲政會は十年の野黨時代に沈湎した結果、政友會に對して反對のための反對を强持しなければならなかつた。何のために斯く反對したかといふに、政友會に依つて代表される利害と、全く正反した利害を感ずる分子を糾合せんがためであつた。斯くして、政友會の保守的政策に對しては進歩的政策を、積極的政策に對しては消極的政策を、それぞれの必要に依つて高調して來たに過ぎぬ。幸か不幸か、自棄半分の手形濫發ではあつたが、一たび政權を獲得するや、普選法案を提出し財政整理を斷行するの余儀なき事態が生じ、謂はば自繩自縛に陷つた感が認められる。田中内閣の地租委讓にしても然り、民政黨の集權的財政策に對して分權的財政策の提唱が必要だつたばかりに、飛んだウソからマコトを放出するに至つたものである。

政黨の斯くの如きオツポルチュニズムは、その成立が既に臨機應變的だつたことを想像せしめて余りある。即ち政黨は、その指導者たる幹部の側からいへば、これに依つて彼等の政治的支配欲を充足するための手段であり、追隨者たる黨員の側からいへば、彼等の生活的利益欲その他を達成するための手段であつて必らずしも主義の異同や、或は政策の相違に依つて分別さ

れたものでなく、兩者の利害の微妙なる相扶關係に支持されてゐるのである。故に若し、相互間の利害關係が背反した場合は素より、彼等を吸引するヨリ大きな利害關係が新しく生じた場合は、弊履の如くこれを棄て去るに何らの躊躇を感ずるものでない。政黨の頻繁なる妥協苟合、或は離合集散といつた現象は、圖らずも性來のエゴイズム的馬脚を露出したものと解せられる。

政黨的結合が既に斯くの如く、便宜的にして暫定的なものであるとすれば、永遠の結束を約束する如き主義とか政策とかは、全く無用の長物の如くにも考へられるであらう。或る意味では、それに相違ない。けれども、他の意味に於いては、便宜的にして暫定的なればこそ、特に勿體らしき主義や政策を擔ぎ出す必要があるとも言ひ得る。けだし主義や政策は、それを掲揚することに於いて、恰かも彼等自身が、さうした倫理的動機を中心として結合したかの如く錯覺せしめるに役立ち、延いて相互の結束を規制する手段に貢献し得るが故である。殊に人間と生れた淺猿しさは、カサケとウヌボレを免れないのが通弊であるから、自分の行動云爲が利害觀念に動機せずして、反對に道德意識に發現したかの如く思ひ込みたがる弱點を有する。主義政策の掲揚は、その意味で斯かる人情の弱點を巧みに利用し得るが故に、内にしては黨員の結束を制約し、外にしては新黨員の投入を刺戟するに有効であつた。

6　政策に異同なし

政黨は個々人と同じく、その内情が醜惡であればあるだけ、外容の善美を殊更らに誇張するやうになる。市井の泥棒が惡事の數を重ねるにつれ、待合の女將が非行の數を重ねるにつれ、却つて神信心に凝り固まるといふ事實は、世上往々にしてこれを認めるところである。これは彼等が、平素の背德に苛責される余り、一時の信心に依つて埋め合はせをつけようといふ心理の現はれに外ならない。政治に於ける倫理的動機の誇張、然り政治學者が敢てなす誇張は、政治それ自體の惡を瞑默せんとする狡智に出づる部分が甚だ多い。殊に黨人に至つては、彼等自身が當の犯罪者である關係上、他人と共に自分をも醇化せんとして、不自然と思はれるまで彼等の目的理想を誇張したがる。國家のため、人道のため、取つてつけたやうな氣焔を吐いて、他人と共に自分をも煙に卷くことを忘れない。主義主張も政綱政策も、所詮は泥棒の神信心と同様である。

信心對象としての主義政策であつて見れば、言ふまでもなく、鰯の頭より鯛の頭だつた方が有りがた味が多い。そこで政黨の

看板も、成るべく御利益がありさうな御神體を擔ぎ上げる必要があり、火難、水難、剣難、盗難……有りと凡ゆる災難避けを算へ立てたところ、觀音樣の御札も遙かに及ばざるを遺憾とする。實際、政黨に依つて掲げられる主義や政策は、村田屋の店頭を飾る煙管のサンプルに類し、見たところは如何にも、偉大にして善美を極めたものであるが、必らずしも實用的價値を考慮して製造したものではない。看板として觀客を吸引するための必要のみに出でてゐる。既に看板的必要であるから、甲黨も乙黨も似たり寄つたりの巧言令色を試みるのが當然、まして執り行ふ實際政治に至つては、殆んど相違を見ないのが常である。

政友會と民政黨の政綱政策を比較する限り、彼等が何故に對峙する二大政黨として分別しなければならなかつたか不明である。勿論、地租委讓の義務敎育國庫負擔のと、鳴り物入りの看板を先頭に押し立ててはゐるが、これとて突きつめて行けば、地方行政の疲弊困憊を救濟するといふ眼目にしてゐるので、眺めんとする高嶺の月の姿に變りは發見されない。唯だ分け登る麓の道に多少の相違があるのみ。こんな相違は、彼等をして犬と猿との關係に於いて　み合はせる原因たるべしとは考へられぬ。それにも拘らず、現に見る如き狀態で抗爭角逐を能事としてゐるのは、彼等の政權目的を中心とした利害が根本的に背反するからである。つまり啀み合ひの原因は、主義政策の發生以前すでに用意されてをり、唯だこれを大義名分化する必要があつたから、無くもがなの主義政策に強ひて異同辨別を求めたに過ぎない。所詮は反對のための反對である。それもこれも、彼等の露骨なエゴイズム的動機を粉飾する手段であり、ヨリ社會的な看板を掲げることに依つてヨリ一般的な關心を吸收し、まるで彼等が主義主張に殉ずるかの如き出鱈目を誇張することに依つて、目前の政治鬪爭をヨリ有利に展開し得るからに外ならない。何ぞ知らん、坊主を憎むが故の袈裟の憎みである。怪寫眞を擔ぎ上げ、怪文書を拾ひ出し、政爭が陰險性と辛辣性を加ふるにつれ、それが『國家のため』であることを極度に宣傳する心理は、その最も共通的にして代表的な實例であらう。

斯うした巧言令色は、何も政友會と民政黨にのみ通有する弊風ではない。時間の古今を問はず、空間の東西を問はず、階級の上下を問はず、凡そ政黨といふ政黨は悉くさうした僞善的集團である。有産黨が必らずしも有産者の利害のみを掲げざる如く、無産黨また必らずしも、無産者の利害のみを主張するのではない。彼等も亦『國民大衆の利益』を伸長し、且つ『社會協和の理想』を促進することを高調力説してゐる。共産黨の如き明白な無産者獨裁の支持者でさへ、それが將來の『無階級』

を招來する過程であるかに辯明しつゝある。この事實は、如何に政黨が、全體の意志を自己の意志として體現せるかに誇張しなければならぬか、如何に一部の利害のみを代表せざるかに粉飾しなければならぬかを語るものである。けれども、實際に於いて、公共的福利なるものは存在し得よう道理がない。同じ性慾充足の手段にあつても、熊公の吉原說と八公の洲崎說が常に牴觸する如く、各人が各人の利害を執つて降らない限り、萬人が萬人に都合のよい福利を想像するなどは痴人の迷夢である。而も迷夢なりに、有產黨も無產黨も、假定的な公共福利を實在的なるかに說き立て、以つて黑燒の本家爭ひに余念なく沒頭しつつある。だからこそ、主義も政策も多くは似たり寄つたりに結果すべく、せつかく亂立して與れた我が無產諸黨にしても、如何なる理由と必要に出でたものであつたか、第三者は素より當事者とて知る由もあるまい。

7　泥仕合ひの效果

政黨の本質は斯くの如く僞善的である。その原因は、余りに彼等の實體が醜惡だつたからである。何故に醜惡かといへば、その結合が最も露骨なエゴイズムに動機してゐるからである。自分が他人を支配するといふことは、單に彼れの優勝慾を滿足させるのみでなく、これに附隨する幾多の物質的慾望も、同時的に達成し得るからに外ならない。そこで政黨對政黨の鬪爭は、勢ひ最も多く原始鬪爭の面影を殘存することともなつた。有るものは單なる敵意であり、いやしくも手段を擇ばず、政權獲得を最後の目的として對手の死命を制すべく努力する。若し議會に於ける數學的事實が、明白に勝利を確定してゐるなら正攻法も採らうが、不幸にして少數だつた場合は、政府乃至與黨の落度を有ること無いこと囃し立て、時にはその刑事犯罪を摘發してまで、嫌でも應でも失脚を余儀なからしめるやうに仕向ける。舊くは山本內閣に對するシーメンス事件の摘發の如き、近くは田中內閣に對する機密費事件の摘發の如き、いづれも斯かる目的のために仕組まれた芝居に外ならない。それ程でない場合でも、政府乃至與黨の處置を道德的見地から辯難攻擊する戰法は、これも東西古今を問はず慣用された手段である。若槻內閣に對する朴烈事件、マクドナルド內閣に對するキャンベル事件等、これは國本の基礎を危殆ならしめるといふ大袈裟な筋書からなされた悲喜劇である。而も結果は、直接間接に政府倒壞に貢獻した意味で、決して無駄な努力だつたといふことは出來ない。

政爭が深刻になればなるほど、斯うした泥仕合は常に繰り返

へされる。素より醜惡には違ひない。だが、政黨の實體はそれ以上に醜惡なのである。平清盛の醜惡が、衣の下から鎧を露出した時に始まらなかつたと同じく、政黨の醜惡も泥仕合をやることに依つて始めて生じたのではない。圖らずも泥仕合に依つて、醜惡の馬脚を一端だけ暴露したに止まる。然し河岸を代へて考へれば、斯くの如き泥仕合があればこそ、政黨は相互のエゴイズムを牽制し得たのである。假りにデモクラ屋の口吻の如く、フエーア・プレーでないといふ意味で泥仕合を遠慮してゐたなら、彼等の惡事非行は天下御免、國民大衆の利害などは名實とも床の間の置き物とされてゐたであらう。それが曲りなりにも保障されたのは、偏へに泥仕合のお陰げであつた。勞農黨一派は暴露戰術といふ。他黨幹部の非違を摘發することに依り『大衆』の信用を剝奪するといふ意味である。柄に似合はず巧言令色的であるが、それなりに戰術として大きな效果を發揮すべきは疑ひを容れない。

大體、政爭をフエーアならしめようといふのは、鵜の眞似をする烏の身の程を知らぬ愚かさに似てゐる。尤もこの場合、もし對手方の泥仕合的追擊を免れんため、豫め高飛車にこれを抑へつけようといふなら面白味もある。だが、さういふ御本人まで自己陶醉に耽り、對手の條件も考へず、自分ばかりフエーアがつてゐるなどは、愚かといふも尙ほ及ばざる感が深い。殷鑑遠からず、目前の總選擧に大元締を勤める鈴木內務大臣の如き、勿體なくも『腕の喜三郎』と呼ばれながら一向に腕の冴えがなく、デモクラ的弱氣を一人で脊負つてゐるのである。それ故にこそ、古宇田知事の起訴も承認しなければならず、無產黨代表の掛け合ひに對してすら『親の心子知らず』などと、大臣面目さうに恐縮を表白する醜態を演じなければならなかつた。弱將の下の弱卒たる山岡警保局にしても、獨善的な氣焰に我れとみづからが陶醉し、まんまと鼻毛を拔かれた府縣會選擧の失敗も忘れて、他愛のない『選擧第一主義』などと來るから嗤ふにも嗤へぬ。星亨を經て原敬に至るまでの政友會は、勝てば官軍敗ければ賊軍の主義を、實に心憎きまで體現した政黨であつた。目的のためには手段を擇ばず、有象無象でも搔き集めて議會の數學的勝利を確保しようといふ意氣は、飽くまで强氣の一點張りだつたのである。然るに、今日のデモクラ化は如何か。あれでは、斯道の先輩たる民政黨を覗つて遠く及ばず、遲かれ早かれ、この儘で進む限り義和は免れないであらう。

院內の政爭は素より院外の政爭も、それが力と力との抗爭である以上、强氣の火力が白熱してゐないと見物は面白くない。面白くないといふ意味は、單に興味本位の遊戲氣分からばかり

でなく、緊張の缺乏が當然政界の頽落を豫定するからでもある。緊張に緊張して、時と所とを嫌はず泥仕合でもやつてくれると、さすが横着な黨人も不渡手形を濫發することが出來ず、惹いて惡事の發揮も困難とするので、玆に政界の謂はゆる進歩と廓清なるものを期待し得るのである。

8 有産無産共に醜

說き來たつて政界の現狀を瞥見する。鐘や太鼓の宣傳も賑やかに、今や選擧戰の最中である。政友會も民政黨も、生れ落ちて以來の無產者の味方だつたやうな顏で、善美を盡くした社會政策を約束しつつ、以つて普選に依る新有權者の人氣に投合せんと腐心してゐる。實同會も革新黨も、どうせ政權希望に見棄てられてゐるといふ安心があるものか、實行の可能や不可能は言外に置いた政綱政策を掲げ、ザコのトトまじりを氣取るも優に柔しき情景である。考へて見れば、これがつひ先年まで、普選が危險思想だの時期尚早だのと、臆面もなく太平樂を並べてゐた政黨だとは思ひもつかないであらう。進步の實跡や驚嘆すべし、と言ひたいところだが、實はそれほど眞面目に考へる必要がないほど、彼等の臨機に應變するオツポチユルニズムは徹底したものである。換言すれば、彼等は人氣稼業の人氣稼業たる所以を知り盡くし、流行とあれば、劍劇に浮き身をやつす役者の器用さも所有してゐるのである。而も彼れが、本心から劍劇俳優たることを好むか好まぬかは問題でなく、要は斯く扮裝することに依つて、見棄てられんとする自己の人氣を繋ぎ得れば足りるのである。

唯しかし、彼等は人氣を顧慮する商賣主義に徹底してゐるだけ、突拍子もない豹變をなすことに依り、舊來の人氣まで放棄するやうな莫迦な眞似はしない。あちらを立ててこちらを立て、そこで我が身の立つ瀨を求めんがため、少なくとも表面だけでも、主義主張の一貫を取りつくろはんとする用意だけは忘れない。ところが、これが無產政黨方面になると、素人の悲しさも勿論あるにはあるだらうが、主義主張を輕視すること塵芥の如くである。その癖、平素の口吻は主義主張に對して狂信的熱誠を披瀝し、有產諸政黨の無定見無節操を目の敵と心得てゐる人種だから呆れる。隨つて、彼等の離合集散は一から十まで御都合主義であり、その日とその場の風の吹き加減で、最も露骨なエゴイズム的動機から右往左往して定住するところがない。兩三年以來の、余りに多き實例は默殺するにしても、最近發表された日勞黨と日農黨の合同聲明の如き、あれくらゐ徹底した豹變ぶりは、無產黨は兎にかく有產黨では曾て發見されなかつ

た。

天地神兵も照覽ある如く、現在の日農黨に對し『ブルヂョアの走狗』の『政友會の下廻り』のと、不倶戴天の仇敵として極度の惡罵を放つた者は、誰れあらう、現在の日勞黨一派がその急先鋒であつた。彼等が從來の態度を更めない限り、生きて此の世で提携せぬと聲明した舌の根も乾かぬ間に、明白に『從來の態度に誤まりがなかつた』と聲明しつつある彼等を迎へるといふのだから、これほど人を莫迦にした話しはあるまい。從來の態度を更めないといふ以上は、依然として日農黨一派は『ブルヂョアの走狗』であり、同時に『政友會の下廻り』であるべき道理ではないか。春秋の筆法を用ふれば、日勞農もブルヂョアと政友會に降伏したことになる。勞農黨一部の日勞黨提携派も然り、提携論を以つて黨内の立場を築き、延いてロシヤ本店の御意に添はうとする了見の程は殊勝だが、それにしても餘りにエゴイズムが露骨すぎるではないか。勿論、エゴイズムそのものが惡いといふのではない。エゴイズムは善くも惡くもないが、これを發揮する以上は、もう少し體裁だけでも理屈の辻褄を合はせなければ滑稽だといふに過ぎない。

以上、言はずもがなの長談議に墮した憾みもなしとせぬが、結局政治なるものは、直線的闘爭を曲線的闘爭で反映したものに過ぎず、政黨はさうした闘爭機關としての現實的組織だつたことを理解すれば足りる。寧ろ見ように依つては、社會のあらゆる分野に、闘爭本能を發揮されては困るので、官許御免の政黨内部に闘爭本能を集約し、被害の波及を成るべく局部的ならしめんとしたものとも言ひ得る。その意味では、政黨は腫物のやうなものである。人體の生理組織は、毒物の全身的瀰漫を防備せんがため各部にそれを集約し、局部的腐蝕によつて全身的被害を免れしめる。人類の社會組織に於ても亦、毒物は政黨といふやうな一局部に押し込め、その内部で惡事惡行を公認することに依り、他の部分への被害波及を防備する作用があつたのだかも知れない。その點は公娼制度をも髣髴せしめる。差し詰め、議會は妓樓で議員は嫖客、欲望對象の娼妓は政治的支配に該當するかも知れない。

選擧運動の取締及び制裁に就て

蠟山政道

一 選擧法の趣旨とその構成

此論文に於て、主として論究せんと欲する問題は、昨年以來少數の市會議員選擧及び大多數の府縣會議員選擧に於て始めて施行せられ、更に今回一般的に且つ大規模に衆議院議員選擧に於て實施せられたる所謂普通選擧法の運用、殊にその選擧運動の取締及び罰則に就てである。斯種の問題は、普選法の立法に際して既に相當の論議を見たることは、當時の貴衆兩院に於る委員會の速記錄に現れてゐる。然し乍ら、立法者の場合を除いては、學者の論議又は新聞紙上の評論等に於て、特に此の問題を取り上げて、學術的に論究せるもの甚だ尠い。選擧運動の費用の制限に關する事項は、相當多くの注意を惹いたやうであるが、該事項を含めての一般的議論を試みたるものは、決して多くない。勿論普選法の法律的註釋書にして、當然この部門に及べるものの多いことは云ふまでもない。然し、法律的解釋と雖も、特に此の部門を詳細に取扱へるものは、昨年以來の普選實施にからんで、實際上の疑義續出したる結果として、出でたるものが多いのである。

惟ふに、普選法公布の前後に於て、此の部門に關する一般的論議の尠かつた所以のものは、普選法が直接要望された最大の理由である選擧權の擴張や選擧區の改正等の諸問題に多くの注意が向けられてゐた爲であらう。又議會の解散が實現されさうにもない様子であつたから、この實施の機會が目前に迫つてゐるとは考へられず、從つて實施に當つて始めて問題となるべき性質の斯種の問題に就ては、自然世間の注意が惹れなかつた故でもあらう。ともあれ、その當時餘り問題とせられなかつた諸

種の問題が、今やその實施に當つて、惹起せられ、その立法の是非、その運用の當否に就て、喧しきまでに論議せられるに至つた。蓋し當然なる事理と云ふべきであらう。

いま、此の問題を直接取扱ふ場合に、普通選擧法そのものの趣旨及びその構成にまで事新らしく遡つて、論ずる要もあるまい、と一應は考へられよう。なぜなら、人々が既に現實に經驗せる如く、此の部門の規定は實に細々しい技術的性質を有するものであつて、一般的な立法論や一時的な便宜論などでは片づけられる性質のものではあるまい、と言はれるであらうから。然し乍ら、如何に詳細な精緻な規定であれ、又如何に外國の經驗を參照して作られた技術的な規定であらうとも、それが儼然たる法規として、選擧の場合、多數國民の行動を規律し、之に違反する者は重い刑罰を以て制裁を課せられるものである以上、それ等は普通選擧制度の根本趣旨より批判せられ、又運用したる上での經驗に比照して改正せらるべきものであらねばならぬ。この意味に於て、かゝる實際問題を念頭に置きつゝ、一應所謂普通選擧の根本趣旨なるものを顧み、更に普選法の構成全體の上より見て、選擧運動の取締及び罰則が如何なる地位と役割とを有してゐるかを見ようと思ふ。而して、余の立論の立場は、主として政治學的又は行政學的研究の方法に據るものであつて、法律學的方法に就ては、余の素養の然らしむる所、何等の自信を有せざる所である。然し乍ら、選擧法問題と言へば、殆んど法律學的方法によつてのみ論議されつゝある時に當り、異れる立場よりの論議も亦、強ち告朔の餼羊たる譏を受くるものでもあるまい。小野塚博士も曾て、『選擧法改正管見』なる論文に於て、『選擧法問題は法學者の研究に待つ所大なると同時に、政治的研究者の貢獻すべき餘地多し』と言はれたことがある（『現代政治の諸研究』四八七頁）。ここに、普通選擧法の趣旨及びその構成と云ふも、政治學的立場より見たるものである。

元來選擧制度なるものが、獨立の政治的部門として見らるる爲には、普通選擧の徹底によりて、選擧權なるものの性質が、制限選擧の場合とは全く異れる政治的意義を有するに至ることが肝要である。換言すれば、選擧權を賦與せられたる者の範圍が、單に以前に比して擴大したと云ふ量的の變化のみでなく、それは、原則として總ての人民に對して賦與されたものであるが故に、選擧權の行使なる現象は國家的機能の一つと見られる。從つて、選擧權の擴張は、從來政治的自由の達成と牽連して考へられ來つたが故に、今や政治的自由なるものは、重大なる國家的利益と見做されねばならぬ。法律上、選擧の自由なることが、重大なる法益として認められてゐることは、正に之と相應

するものである。而して又、自由の伸張は、人格の發展に外ならぬ。然らば、政治的自由の伸張は、個人人格の政治的領域に於る發展であり、普通選擧制度なるものは、個人人格の選擧制度に於る發展と見なければならぬ。然らば、個人人格の尊重は、國家的利益であり、之が侵害は國家の防衞せねばならぬ所と言ふべきである。

斯くの如き重大なる意義を有する普通選擧制度下に於る選擧權も、これが行使される場合に於て、或は外部より牽制され、或は他人の妨害に逢つて、その選擧權把持者の自由なる良心の命ずる所に從つて行使せられなかつたならば、前陳せる意義を沒却してしまふであらう。從つて普通選擧制度なるものが、個人の政治的自由の達成を可能ならしむる所以の制度であるならば、當然それは選擧權の所有者のみに關する事項の外に、その選擧權行使の方法に關して、その根本趣旨を透徹せしめねばならぬ。吉野博士が『普通選擧制度の理論的根據』なる論文に於て、その積極的根據に就て述べられたる際、次の如く言はれたるは、余の言はんと欲する所をより簡潔に説明せられたるものである。曰く『政治的自由と云ふ事は、之を二つの方面から考へることが出來る。一は此自由が或る人に與へられ或人に拒まれては不可いといふ事であり、他の一は與へられたる自由は外部よりの牽制に左右されず、良心の命ずるが儘に行はれなければならぬと云ふ事である。若し前者を分量的意義の自由と云ふ可くんば、後者は之を性質的意義と謂つて可い。我が普通選擧は即ち分量的意義の政治的自由の謂に外ならぬ。して見ると、普通選擧になつたからとて政治的自由が未だ完了せられないと云ふ事は明白であらう。權利は悉く與へられた。與へらる可くして拒れて居るものは一人もなくなつた。然し折角與へられても、選擧民が之を彼等の良心が命ずる通りに眞に自由に行使し得るのでなければ何にもならぬ。此制度が社會文運の進歩に何等かの貢献をなし得ると云ふためには、形の上の自由たるに止まらず、眞の實質的の自由でなければならぬ。そこで、普通選擧制の達せんとする目的即ち政治的自由の完全なる達成を期するには、各選擧民が眞に自由なる判斷を爲す樣に、換言すれば選擧民の自由判斷を多少でも拒げる樣な原因があらば極力之を除去してやる樣に、せなければならぬ。是に於て吾々は普通選擧制をして眞に文化的に意義あらしむる爲には、他に猶之に附隨して幾多の施設すべき物あるを見るのである』(『現代政治講話』五〇六—七頁)と。吉野博士の所謂分量的及び性質的自由が併び達成せらるべき制度として、始めて普通選擧制なるものは、その充分なる意義を發揮するに至るのである。これ、

とりも直ほさず、普選法の立法趣旨に對する指導原理たるものである。

吉野博士は、我が普通選擧制を稍分量的意義に於る自由の達成といふ趣旨のみに傾けるものと、右の引用文中では見て居らるゝやうである。然し乍ら、法文の構成より見るならば、現行衆議院議員選擧法は、その舊法に比して、吉野博士の所謂性質的意義に於る自由の達成の爲に必要なる施設に就て、全く新なる規定を設くると共に、罰則に就ても科刑の程度を重くして一般的豫防の效果を期さんとしてゐるのである。その規定や罰則が當を得たものなるや否やに就ては、多くの議論あり、今後改正の餘地大に存するであらうけれども、その立法の趣旨たるや、右に述べたるが如き普通選擧制の根本原理に合致せんが爲に出でたるものであることに就ては、寸毫も疑はない。加之ならず、その規定たるや、微に入り細を穿つて、寧ろ不馴な選擧人及び運動者をして困惑恐怖せしめて居る位である。本文に於て取扱はんとする問題たる選擧運動の取締及び罰則に關する規定の如きは、實に舊法時代に於て全く見るを得なかつた所の新たなる規定であるか、又は改正を加へられた所のものである。然らば、此等の規定は、改正選擧法の全體の構成の上から見て、如何なる地位を占めて居るか。

いま、選擧法を分類して、主たる區分に分つて見る。分類の常として、多少機械的となり、區分の何れにも關係あるものを何れかの一に組み入れるが如き結果を來すけれども、便宜の爲に、之を左の如く三大部門に分つて見よう。その第一類は、人に關する規定であり、第二類は、方法に關する規定であり、第三類は效力及び制裁に關する規定である。之等を法文の章條に該當せしめて、表解して見れば、左の如くとなる。

一　人に關する規定
- （イ）選擧權及被選擧權（第二章）（第五條―第十一條）
- （ロ）選擧人名簿（第三章）（第十二條―第十七條）
- （ハ）議員候補者及び當選人（第七章）（第六七條―第七七條）
- （ニ）議員の任期及補闕（第八章）（第七八條―第八〇條）

二　方法に關する規定
- （イ）選擧に關する區域（第一章）（第一條―第四條）
- （ロ）選擧投票及投票所（第四章）（第十八條―第四三條）
- （ハ）開票及開票所（第五章）（第四四條―第五七條）
- （ニ）選擧會（第六章）（第五八條―第六六條）
- （ホ）選擧運動（第十章）（第八八條―第一〇〇條）
- （ヘ）選擧運動の費用（第十一章）（第一〇一條―第一一〇條）

三　效力及び制裁に關する規定
- （イ）訴訟（第九章）（第八一條―第八七條）
- （ロ）罰則（第十二章）（第一一一條―一三八條）

斯くの如く、選擧法は、外見上は、少くとも、一箇の組織的有機的關係を構成して居る。此の外、選擧法施行令十四章百十一箇條と施行規則十二箇條あり、又特に選擧運動の爲にする文書圖書に關する省令、郵便無料規則等ありて、選擧の實施につき、萬般遺漏なきを期してゐる。いま、斯くの如き諸規定によりて秩序立てられたる選擧なるものに於て、その選擧運動に關する取締及び選擧に關する罰則が如何なる意義を有し、如何なる役割を演ずるものなるかを究明せんとするのが、以下に於ける本文の目的である。

二　選擧運動取締の理論的根據

一口に選擧と言つても、それは連續した一聯の行爲の綜合を指して云ふのである。選擧の直接の目的は、選擧人がその投票を爲すべき候補者を決定して其の決定したる意思を表示する行爲と言へるであらう。從つて投票行爲がその中核を成すものと見られる。然し乍ら、その投票行爲の行はれる以前に於て、選擧人をしてその意思を決定せしむべき過程が時間の上に於ては長いのである。この過程に對するものが選擧運動なのである。

この意味の選擧運動なるものは、實質的意義に於る選擧運動である。舊法時代に於ては、選擧運動なるものに就いて何等法規によつて定義を與ふることも、又その過程を規律することも無かつたのである。然し乍ら、改正法に至つて、選擧運動なるものに一定の意義が與へられた。普選法の下に於ける選擧運動なるものは、この形式的意義に於る選擧運動を指稱するのである。この意味に於ては、選擧運動とは、選擧期日の公布又は告示ありたる後に於て、特定したる選擧に對して、議員候補者たる屆出を了したる特定の議員候補者の爲めに其の當選を期する目的を以て斡旋する一切の行爲を云ふのである。この定義の由つて來る法文上の根據を尋ぬるに、先づ第六七條に『議員候補者タラントスル者ハ選擧ノ期日ノ公布又ハ告示アリタル日ヨリ選擧ノ期日前七日迄ニ其ノ旨ヲ選擧長ニ屆出ツヘシ』とある。從つて、この屆以前の行爲は、立候補準備であつて、議員候補者たる資格を有して爲す行爲ではない。又第九六條に曰く、『議員候補者、選擧事務長、選擧委員又ハ選擧事務員ニ非サレハ選擧運動ヲ爲スコトヲ得ス但シ演說又ハ推薦狀ニ依ル選擧運動ハ此ノ限ニ在ラス』と。此の條下に於ては、選擧運動を爲すべき人員の資格を限定してゐるのであるが、その人員の資格たるや、總て選擧の特定し、議員候補者の定まれる後に於てのみ取得せらるるものであるから、此の條文よりしても、選擧運動なるものは立候補後に於る夫れを指稱するものであつて、夫れ以前の

ものは改正法に於ては禁止せられてゐると見なければならぬ。然し乍ら、第九六條但書に云ふ所の『演説又ハ推薦狀ニ依ル選擧運動ハ此限ニアラス』と云ふを根據として、此の二方法に依るものは、立候補以前に於ても差支なし、と云ひ得ないか、と云ふ疑がある。然し乍ら、これは法定運動者と第三者たる獨立運動者との爲し得る運動方法の差異を示したるに過ぎずして、その選擧運動の時期を異にし得ることを規定したものではない、と解するのが恐らく法文の構成から見るも、立法者の意思から見るも、正しいと思はれる。從つて、本法に於て適法と認めらるる立候補以前の選擧運動は、その立候補するにつき直接必要なる諸行爲に止まる。斯くの如きが、選擧の性質より鑑みて妥當なりや否や、それに依つて不當に多數の違反者を出すことなきや、大に考究を要する所である。

選擧運動の意義は、右の如く、その開始の時期に於て限定せられ、又それを掌るべき有資格人員を特定せることによつて限定せられてゐるが、更にその方法及び費用に於て、限定せられてゐる。その主たるものは、世人周知の所であるが、戸別訪問其の他之に類する個々面接運動及び電話運動の禁止である。第九八條に曰く『何人ト雖モ投票ヲ得若ハ得シメ又ハ得シメサルノ目的ヲ以テ戸別訪問ヲ爲スコトヲ得ス、何人ト雖モ前項ノ目的ヲ以テ連續シテ個々ノ選擧人ニ對シ面接シ又ハ電話ニ依リ選擧運動ヲ爲スコトヲ得ス』と。次に、文書圖畫に關する制限がありて、その形式、數量及び頒布及掲示に關する、寧ろ杓子定規に失せるが如き規定がある。(第百條及内務省令)その外、選擧事務所に對する制限(第八九、九〇、九一條)、休憩所其の他之に類似する設備の禁止(第九二條)がある。更らに、選擧運動の報償制限ありて、財産上の利益を受け得べき者、その受くる利益の範圍及び選擧事務員に對する報酬規定がある(第九七條)最後に擧ぐるけれども、重要なる規定は、選擧運動の費用制限に關する諸規定であつて、改正法は之が爲に特に一章を宛て、詳細なる項目を設けてゐる。何を以て選擧運動の費用たりとするかに就ては、選擧運動と同じく條文は明白にその意義を規定してゐないが、特定の選擧に於て特定なる議員候補者の當選を期せん爲、其の活動に消費せらるる金錢並に金錢以外の財産上の利益を謂ふ、と解せられてゐる(木村彌三郎著『普選の取締と罰則』一九二頁)。この費用の支出方法(第百一條)費用額の直接制限(第百二條)、費用の評價(第百三條)費用の範圍第百四條)費用の記載方法、精算屆出(第百五條、第百六條)帳簿書類の保管義務、警察官吏の帳簿檢閲(第百七條、第百八條)費用に關する事務引繼(第百九條)超加支出に對する制裁(第百一〇條)

等の諸規定がある。

以上の諸規定は、選擧運動に對する消極的な取締規定であるが、尙右の外に、選擧運動を專ら言論文章に依らしむる趣旨を徹底せしめ、且つ費用の負擔を減ぜしむる趣旨よりして、無料郵便物の差出權（第百四十條第一項）と營造物の使用權（同條第二項）とが認められてゐる。これらは、積極的な助長的規定と見做され得る。

以上の選擧運動取締に關する二十有餘條の新規定は、既に述べたる如く、普選法の特色をして、單なる有權者數の擴張に在らしめずして、選擧運動そのものを一箇の秩序ある組織的行爲たらしめ、以て選擧の『自由』と『公正』とを確保せしめんと試みたる點にも亦、存せしめたるものである。然し乍ら、ここに注意すべき重大な問題が生ずる。又現に發生してゐるのである。人民をしてその有する選擧權を『自由』に行使せしめ、相伴逐する選擧運動をして『公正』を保たしむる爲めには、何故に、右の如き可成り煩瑣なる取締規定を設けて、一定の枠框に打ちこめることが必要なのであるのか。換言すれば、選擧運動取締の理論的根據如何を問はねばならぬのである。この根本的疑問に答ふることなくしては、箇々の場合に發生する取締規定の運用に對する是非曲直の判斷は出來ぬわけである。

既に一言したる如く、選擧は二つの部分より成る。その一は選擧人の意思を發表せしむる行爲に關するものである。投票に關する方法又は施設は之である。他の一は、選擧人の意思を確定せしむる爲に執らるる行爲に關するものである。選擧運動の取締はこれに屬する。換言すれば、選擧人對議員候補者及び選擧運動者間の行爲に對して、自由放任主義を執らず、國家干涉主義を採用したものである。更に實質的に表現すれば、衆議院てふ立法機關を成立せしむる意思の構成過程に對して、國家が統制を行ふものと見られる。然らば、この現象は、十九世紀後半より起り來れる團體干涉主義の一つの現れと見て差支なからう。從つて、選擧運動の國家統制は、この一般的大勢論より一應是認せられねばならぬ。即ち、選擧運動を個人の放任に委さずして、一定の規律を與ふる理論的根據は、斯くの如き社會思想史的背景より理解せらるるであらう。英國が一八八三年に『腐敗行爲及び違法行爲豫防法』を發布して、個人的自由への干涉を試みたる所以のものは、正に斯くの如き一般論より是認せらるる所である。我が普選法に於る選擧運動の取締規定も亦、範をこの英國法にとつたものであることは、この法案の起草に參加せる人々の明言せる所である（坂千秋、三宅正太郎著『普通選擧法要綱』七三頁。）

ものは改正法に於ては禁止せられてゐると見なければならぬ。然し乍ら、第九六條但書に云ふ所の『演説又ハ推薦狀ニ依ル選擧運動ハ此限ニアラス』と云ふを根據として、此の二方法に依るものは、立候補以前に於ても差支なし、と云ひ得ないか、と云ふ疑がある。然し乍ら、これは法定運動者と第三者たる獨立運動者との爲し得る運動方法の差異を示したるに過ぎずして、その選擧運動の時期を異にし得ることを規定したものではない、と解するのが恐らく法文の構成から見るも、立法者の意思から推るも、正しいと思はれる。從つて、本法に於て適法と認めらるる立候補以前の選擧運動は、その立候補するにつき直接必要なる諸行爲に止まる。斯くの如きが、選擧の性質より鑑みて妥當なりや否や、それに依つて不當に多數の違反者を出すことなきや、大に考究を要する所である。

選擧運動の意義は、右の如く、その開始の時期に於て限定せられ、又それを掌るべき有資格人員を特定せることによつて限定せられてゐるが、更にその方法及び費用に於て、限定せられてゐる。その主たるものは、世人周知の所であるが、戸別訪問其の他之に類する個々面接運動及び電話運動の禁止である。第九八條に曰く『何人ト雖モ投票ヲ得若ハ得シメ又ハ得シメサルノ目的ヲ以テ戸別訪問ヲ爲スコトヲ得ス、何人ト雖モ前項ノ目的ヲ以テ連續シテ個々ノ選擧人ニ對シ面接シ又ハ電話ニ依リ選擧運動ヲ爲スコトヲ得ス』と。次に、文書圖畫に關する制限がありて、その形式、數量及び頒布及揭示に關する、寧ろ杓子定規に失せるが如き規定がある。(第百條及内務省令) その外、選擧事務所に對する制限(第八九、九〇、九一條)、休憩所其の他之に類似する設備の禁止(第九二條)がある。更らに、選擧運動の報償制限ありて、財産上の利益を受け得べき者、その受くる利益の範圍及び選擧事務員に對する報酬規定がある(第九七條)最後に擧ぐるけれども、重要なる規定は、選擧運動の費用制限に關する諸規定であつて、改正法は之が爲に特に一章を宛て、詳細なる項目を設けてゐる。何を以て選擧運動の費用たりとするかに就ては、選擧運動と同じく條文は明白にその意義を規定してゐないが、特定の選擧に於て特定なる議員候補者の當選を期せん爲、其の活動に消費せらるる金錢並に金錢以外の財産上の利益を謂ふ、と解せられてゐる(木村彌三郎著『普選の取締と罰則』一九二頁)。この費用の支出方法(第百一條)費用額の直接制限(第百二條)、費用の評價(第百三條)費用の範圍第百四條)費用の記載方法、精算屆出(第百五條、第百六條)帳簿書類の保管義務、警察官吏の帳簿檢閲(第百七條、第百八條)費用に關する事務引繼(第百九條)超加支出に對する制裁(第百一〇條)

等の諸規定である。

以上の諸規定は、選擧運動に對する消極的な取締規定であるが、尚右の外に、選擧運動を專ら言論文章に依らしむる趣旨を徹底せしめ、且つ費用の負擔を減ぜしむる趣旨よりして、無料郵便物の差出權（第百四十條第一項）と營造物の使用權（同條第二項）とが認められてゐる。これらは、積極的な助長的規定と見做され得る。

以上の選擧運動取締に關する二十有餘條の新規定は、既に述べたる如く、普選法の特色をして、單なる有權者數の擴張に在らしめずして、選擧運動そのものを一箇の秩序ある組織的行爲たらしめ、以て選擧の『自由』と『公正』とを確保せしめんと試みたる點にも亦、存せしめたるものである。然し乍ら、ここに注意すべき重大な問題が生ずる。又現に發生してゐるのである。人民をしてその有する選擧權を『自由』に行使せしめ、相角逐する選擧運動をして『公正』を保たしむる爲めには、何故に、右の如き可成り煩瑣なる取締規定を設けて、一定の枠框に打ちこめることが必要なのであるのか。換言すれば、選擧運動取締の理論的根據如何を問はねばならぬのである。この根本的疑問に答ふることなくしては、箇々の場合に發生する取締規定の運用に對する是非曲直の判斷は出來ぬわけである。

既に一言したるごとく、選擧は二つの部分より成る。その一は選擧人の意思を發表せしむる行爲に關するものである。投票に關する方法又は施設は之である。他の一は、選擧人の意思を確定せしむる爲に執らるる行爲に關するものである。選擧運動の取締はこれに屬する。換言すれば、選擧人對議員候補者及び選擧運動者間の行爲に對して、自由放任主義を執らず、國家干涉主義を採用したものである。更に實質的に表現すれば、衆議院てふ立法機關を成立せしむる意思の構成過程に對して、國家が統制を行ふものと見られる。然らば、この現象は、十九世紀後半より起り來れる國體干涉主義の一つの現れと見て差支なからう。從つて、選擧運動の國家統制は、この一般的大勢論より一應是認せられねばならぬ。即ち、選擧運動を個人の放任に委さずして、一定の規律を與ふる理論的根據は、斯くの如き社會思想史的背景より理解せらるるであらう。英國が一八八三年に『腐敗行爲及び違法行爲豫防法』を發布して、個人的自由への干涉を試みたる所以のものは、正に斯くの如き一般論より是認せらるる所である。我が普選法に於る選擧運動の取締規定も亦、範をこの英國法にとつたものであることは、この法案の起草に參加せる人々の明言せる所である（坂千秋、三宅正太郎著『普通選擧法要綱』七三頁。）

然し乍ら、斯くの如き一般論のみにては、選擧に際しての個人意思の統制てふ特定なる事項に對する論據として不充分である。特にこの事項に對しても、統制の可能且つ妥當なることを證明するの必要が存するであらう。換言すれば、選擧の自由公正を確保する上に、斯くの如き國家統制が必要であるてふ積極的の論證が成立たねばならぬ。統制の爲めの統制であつてはならぬのである。換言すれば、統制の必要の有無は、選擧の根本趣旨から批判されねばならぬのである。いま、選擧運動に對するこの必要の有無を論證する爲に、選擧の他の部門たる投票行爲に關する强行規定として採用されてゐる秘密投票に就て爲されてゐる議論を考察して見る。我國の選擧法が明治三十三年の改正以來、秘密主義を採用してゐることは今更ら說くを要しない周知の事實であるが、大審院判例に於ても、その必要に就て左の如く說かれてゐる。曰く『議員ノ選擧ニ於テ最モ尊重スベキ所ノモノハ各選擧人ヲシテ他ニ毫モ畏怖顧慮スル所ナク全然自由ノ意思ニヨリ眞ニソノ選擧セント欲スルモノニ投票セシメントスルニ在ル』（大審大正五・一一・二七）然るに、勢力關係、雇傭關係その他の經濟的社會的身分的關係の差異强弱よりして自己の自由意思を以て選擧を爲し得ざる者が存する場合には、この支配關係の支配より脫せしむる爲めに、この秘密投票主義が必要とされるのである。これ恐らく諸國の選擧法に於て、この制度の採用されたる趣旨であらう。然るに、この制度に對して、選擧の公共的性質に鑑み、又選擧人の政治的自覺の增進、その階級的結成の發展てふ根據よりして、大に疑問を提出し、寧ろ公開投票主義によるべきではないか、と主張したのが、ジョン・スチユアート・ミルである。ミルも亦、或る時代に於て、秘密投票主義の必要なることを認めてゐる。然し乍らも、彼の見る所によつて、當時の英國に於て、最早その主義の必要はなく、寧ろ反つてそれによつて不正―他からの牽制でなく利己的な目的によつて―が增大することを主張したのであつた。彼の主張は、今日に於ても決して事實觀察に該當せるものでなく、餘りに合理主義に偏せるものであるといふ非難がある。グラーム・ウオラスの如き社會心理學的立場より政治的研究方法をとるものは、さう論斷してゐるのである。余も亦、秘密主義の必要今日に於ても猶ほ存在すると考へるのであるが、ミルの議論の中に、我々の傾聽すべき二つの點があると思ふ。その一は秘密投票方法の如きものは、假令ある場合に必要であつても、決して絕對的永久的のものではなく、時代人心の變遷と共に變化せねばならぬことを暗示せることである。他の一は、個人なるものは、單獨に判斷するものでなく、職業的集團又は階級的結成の下にその意思

を決定して行く傾向の存することを指摘したことである。殊に後者の傾向は、普通選擧制度の徹底と共に增進するものである。若し、然りとするならば、最早秘密主義は無意義とならざるを得ない。現に、此の傾向は、今回の我國に於る普通選擧に於て隨所に現れつゝある。或は職業組合、或は同業組合、或は勞働組合てふ結束の下に、投票意思が決定されつゝある。

いま、投票方法に關する國法による强行規定に就て試みられたる議論を、選擧運動の取締規定に適用して見るならば、何人と雖も、今日その必要の存することに就て、頭から反對する人はあるまい。然し乍ら、それが恒久性を有することを信ずる者はあるまい。又その個々の規定に就ては、大に疑を有する人も存するであらう。その一例として、余は、立候補以前の選擧運動の禁止を擧げたい。今回最初の選擧違反として新聞紙に喧傳せられた東京第四區の宮崎候補の運動員が、屆出以前に於て運動せる咎で處罰されたと云ふことであるが、かうした規定を知らう筈のない勞働者階級の人々が、熱心の餘り逸早く運動に着手したことが、法に觸れてその人達にとつて痛手な罰金に處せられたのである。若し、これが一寸した規定の改正で、或は判例等に於て、政黨の公認した候補者の場合には、斯種の運動差支なしとでもなつたら、何んでもなき事柄である。英國に於ても、一八八三年の法律では、正式立候補以前の選擧運動は不法であつたが、一八九五年の判例で、政黨の公認せる候補者の場合は適法とされるに至つたのである。

又他の一例を擧げて見よう。現行改正法に於ては、候補者推薦の爲めにする協議會又は豫選會等に於て、特定の議員候補者又は議員候補者たらんとする者を、或る一部の人が豫め內定して、會合者に對し、之が贊同を求め、又は推薦されたる議員候補者が其の席上に於て挨拶を爲し、それらの言辭中に、暗に投票を依賴するものと認めらるべきものありたりとせんか、之は選擧運動なりとせらるるのである。從つて、これが選擧違反の嫌疑となる虞は充分存するのであつて、現に橫濱市に於て小泉候補の爲に爲されたる協議會の司會者は、これが爲に後日檢擧せられたりとか傳えらる。勿論これが、不特定の多衆を會合せしめたる場合ならんには、選擧人の自由なる意思を制肘する嫌ありとの理屈もつくけれども、勞働組合又は農民組合等の場合に於ても同樣に見做さるるものである。然し乍ら、此の場合の會衆は、不特定の多衆の會合と同一視すべきではない。從つて、この立候補前の選擧運動を嚴格に禁止する制度の如きは、第九十八條の個々面接の禁止規定と同じく、組合組織の發達と決して兩立すべきものとは考へられぬ。換言すれば、此種

の規定は、選擧の自由公正なるものを、全く個人主義的な社會組織を前提として、保維せんとするものであつて、そのやうな社會組織の存續する限度及び場處に對してのみ合理的であるに過ぎぬ。要するに、選擧運動の取締は、過去の經驗にのみ捕はるることなく、變移し行く將來社會の傾向をも看取して、餘りに融通のきかぬ法規を制定せず、寧ろ自由なる解釋を容るるに足るやうな抱括的な規定を設くべきではあるまいか。この統制範圍と個人自由の調和とは、頗る至難の問題であるが、グラーム・ウオラスが一箇の比喩を以て説明せる文句は以てこの立法及び運用の方針となすことが出來よう。曰く『工學技師が、その計畫の安全性の限界を高めようとする場合に、物質の力を增加する化學的便法とその物質の上に加はる壓力を減ずるやうな構造的變化とを同一の數量的問題に於る要素として取扱ふやうに、デモクラシーに於る安全性の限界を高めようとする者は、個人の政治的力量が道德的又は敎育的變化によつて現實に高められる度合と個人に對する要求がその力量に對して强過ぎることを防ぎ得るやうな、デモクラシーの構造中に於ける諸要素を保維し、或は擴大し或は工夫し得る可能性とを、一向ら眞理に到達せんと欲するの外他意なく、兩方ながら側定せねばならぬ』と。(G. Wallas, Hunan Nature in Politics, p.240)

三　選擧法の運用と制裁の役割

新選擧法に於る罰則は、大體舊法を踏襲せるものであるが、新に前項に述べたる選擧運動の取締規定が附加された爲に、それに對する違反規定が新に加つたことと、科刑の程度が重きを加へられ、從來多く禁錮刑に過ぎざりしものにも懲役刑が課せられるやうになつて、一般豫防主義が一段と加味せられたことは、新法の特色の一として擧げられる所である。卽ち、罰則の設けらるる所以のものは、選擧をして法規の命ずるとほり、嚴格に行はしめ、選擧の自由公正を確保せんが爲めに外ならない。特にその刑罰を重からしめた理由は、過去の經驗に鑑み、その重きを課する必要を認め、裁判官をして刑の量定に廣き範圍を與へたのである。

抑も選擧犯罪と雖も、その犯罪たるの實質より見れば、選擧に特有なるものとは限らず、たま〳〵選擧に關係して犯されたものであるが故に、特に選擧法の刑罰規定に依り、一般刑法上の規定に依らざるものたるに過ぎないものがある。買收その他の破廉恥罪はこれである。その外、選擧法が、前項述べたるが如き趣旨の下に、選擧又は選擧運動に一定の秩序を與へ、一定の手續を踏ましめてゐる場合に、それに從はずして違反となる

場合の犯罪がある。この二種の犯罪の分類に就ては、何人も異論はあるまい。然し乍ら、この二種の犯罪の性質を根本的に區別すべきや否やに就ては議論があらう。若し、この二種の犯罪を學者の所謂刑事犯（自然犯）及び行政犯（法定犯）の區別を以て臨む場合には、選擧法の法制上の性質からして憲法的なりや行政法的なりやに就て形式上の區別の困難あるべく、又この區別自體に就ての議論も考慮しなくてはならぬ。美濃部博士は刑事犯と警察犯との區別に就て論及せる際にかう云はれてゐる。曰く『刑事犯ト警察犯トノ性質上ノ區別如何ハ、今日ニ於テモ未タ一般の定說ヲ得ザル問題ナリ。余ノ見ル所ニ據レハ區別ハ畢意刑事法ト警察法トノ區別又ハ刑罰權ト警察權トノ區別如何ト同一ノ問題に歸ス。何トナレハ刑事犯ハ刑事法ニ依リ刑罰ニ該當スヘキモノトシテ定メラレタル行爲ナルニ反シテ、警察犯ハ警察法規若クハ警察法規ニ基ク處分ニ依リ命セラレタル義務ニ違犯スルノ行爲ヲ謂フモノニ外ナラザレハナリ。刑事法ト警察法トハ共ニ社會の秩序ヲ保持スルコトヲ目的トシ、秩序違反ノ行爲ニ對シテ國權ニ依リ制裁ヲ課スル規定ナルコトニ於テハ、其ノ性質ヲ同ウスト雖モ、刑事法ニ在リテハ其ノ主眼トスル所ハ或ル行爲ヲ命令シ又ハ禁止スルコトニ在ラスシテ、其ノ命令又ハ禁止ハ社會生活ニ於テ必然ニ守ラルヘキ制限ナリト前提シ唯之カ違犯ニ對スル制裁ヲ定ムルコトヲ主眼トスルモノナルニ反シテ、警察法ニ在リテハ其ノ主眼トスル所カ或ル行爲ヲ命令シ又ハ禁止スルコトニ在リテ、之カ違犯ニ對スル制裁ハ唯其ノ義務ノ効果ヲ確實ナラシムルカ爲ニ定メラルルニ過キサルモノナルコトニ於テ其ノ性質ヲ異ニスルモノナリ』と（『日本行政法』各論上、一〇二―三頁。）牧野博士は曰く『刑事犯行政犯ノ區別ノ要點ハ、刑事犯ニ在リテハ、其ノ實質カ公ノ秩序善良ノ風俗ニ反スルコトヨリシテ、法律ハソレニ對スル規範ヲ當然ノ事項トシテ豫定スルモノト謂フコトヲ得ヘク、行政犯ニ付テハ、法律ハ先ツ一定ノ規範ヲ定メ、其ノ規範ヲ强制スルカ爲其制裁ヲ科スルモノト謂フコトヲ得ヘシ』（增訂『日本刑法』六九頁）と。これらの有力なる學者の議論よりすれば、選擧法中の罰則には、刑事犯の實質を具へたるものと行政犯の實質を有するものとが、併存するものと言ふべきである。一箇の法規に包含せられてゐるといふ形式論を以てしては解決できぬと見ねばなるまい。

現にこの二種の區別が法案の立法者に於て採用せられてゐると見られる點は、其犯罪に對する制裁に就て斟酌を加えたる點である。即ち刑事犯と見らるべきものには懲役刑を以て臨み、行政犯と見らるべきものには禁錮刑又は罰金を以て臨んでゐる。

然し乍ら、二者共に選擧に關係して發生するものであるが故に、單なる刑罰を以ては威嚇の效力無しとして、その附隨的效果として選擧に關する失格及び失權の如きを課してゐる。と同時に、選擧犯罪に就ては、その處理を速からしむる必要から、公訴時效を短期のものとしてゐる。斯くの如きが大體に於て選擧犯罪の刑罰的性質である。

從來の選擧に於て、如何なる種類の選擧犯罪が如何なる割合を以て行れたるかを見るに、次の表の示す如く、買收犯が壓倒的多數なることを示してゐる。（三宅正太郎外二氏『普選法釋義』三五四頁）

年次		買收犯人員	其他の選擧犯人員	不詳	總計
第一次	明治二十三年	一三一	二三	五	一五九
第二次	同　二十五年	九五	三一	〇	一二六
第三次	同　二十七年	二五四	七八	二七	三五九
第四次	同　年	一八九	二三	一七	二二九
第五次	同　三十一年	二五八	三六	七〇	三六四
第六次	同　年	三一〇	六	二三	三三九
第七次	同　三十五年	一、〇〇四	三四	一六四	一、二〇二
第八次	同　三十六年	四二四	二四	三九	四八七
第九次	同　三十七年	一七一	一三	一八	二〇二
第一〇次	同　四十一年	一、三三八	四四	四五	一、四七七
第一一次	同　四十五年	三、三二九	三三	一一〇	三、四七二
第一二次	大正四年	七、二七八	八三	七六	七、四三七
第一三次	同　六年	二、九三二	五〇	二二六	三、二〇八
第一四次	同　九年	五、二六六	一二七	〇	五、三九三
第一五次	同　十三年	一三、九八六	三七七	〇	一四、三六三

昨年秋に行はれたる普選法による府縣會議員選擧に於ては、正確なる統計を知るを得ないが、選擧犯罪數七千餘件にして、その中約七割は依然として買收犯罪であると云ふ。（二年十二月二十五日現在司法省調査に依る）然し乍ら、同時に注目すべきことは、選擧運動の取締規定に對する違犯の數も相當に大きいことである。これ、改正法の公布以來始めての選擧であるため、選擧運動者及び選擧人に於て法規に習熟しなかつた故でもあらう。例へば、濱松市會の議員選擧に於て、昨年九月六日までに告訴された事件は、司法省の發表によれるものによつて、東京市政調査會の報告する所によれば左の如くである。

戸別訪問者　四名（第九十八條第一項、第百二十九條）

法定運動者に非ずして選擧運動をなしたる者　八名（第九十六條、第百二十九條）

法定運動者に非ずして、其上に個々面接をなしたる者　三名（第九十六條及第九十八條第二項前段、第百二十九條）

演說妨害者　二名（第百十五條第一項、第百二十五條第一項）

選擧運動の立看板に所定の氏名住所を記載せず、且つ制限外の大さの

ものを使用したる者　一名（内務省令第五號、第一條及第三條、衆
選擧第百三十二條第二項）
法定運動者に非ずして、其上に投票の買收をなしたる者　一名（百
十二條第一號、第百十二條第一號）

この事例に於ては、市會議員選擧なるが爲めであらうが、全部十九件中、買收犯罪は僅に一件なるに反して、他は悉く改正法規定の選擧運動取締規定の違反である。これらの場合より推定するならば、今回の衆議院議員選擧の場合に於て、この種の新たなる行政犯が相當多數に上ることであらう。それらの多くは、新法の趣旨が徹底するならば、漸次消滅するであらうが、徒に選擧人には運動者をして法網に觸れしめ、選擧に不便困惑を感ぜしむるのみならず、社會的に人格の缺損を爲さしむる誘因となるものが存しやしないか、大に今後の研究に俟つべきものがあらう。

最後に、この罰則規定の適用が、選擧法の運用の上に如何なる役割を演ずるかを考察して見ねばならぬ。その一般的効果に就ては、既に述べた所より明白である。そは、選擧のあらゆる面相に亘りて、法規の命ずる所に從つて秩序ある正當なる行動がとられることを要求し、然らざる場合に向つて制裁を課すことになつてゐる。即ち（イ）選擧人の眞正維持、（ロ）選擧權行使の自由公正の確保、（ハ）立候補の自由公正の確保、（ニ）選擧妨害取締及び投票秘密の確保、（ホ）投票の眞實公正の確保、（ヘ）選擧運動の秩序維持、（ト）選擧運動費取締等の諸項に亘つてゐるのである。然し乍ら、これらの制裁が濫用せられ、過度に失する時は、所謂政府干渉の弊と共に、反つて選擧の目的を達成し得ぬこととならう。これらの制裁の適用は、警察制限に關するものを除き、專ら檢事の活動によつて開始せられるものであるが、檢事の手足となつて犯罪の所在を發見探知するものは、地方長官及びその配下に存する司法警察官吏である。司法警察官吏は、單に犯罪ありと思料する場合に之を檢事に報告するの任務を有するに過ぎない（『司法警察職務規範』三一條第七項）然し、その報告の故意又は過失によつて、誤れる場合と雖も、檢事の活動は開始せられるのである。單なる世上の風評の如きも捜査の端緒となり得るものであつて、選擧法は決して親告に依ることを必要としてゐないのである。これが爲め、單に犯罪ありと思料せられ、後に至つて證據なく、或は微罪にして放免せられるもの夥しき數に上るのは、これが爲めである。昨年十一月一日の『大阪朝日』の報ずる所によれば、その當時まで、府縣會議員選擧違反の嫌疑にて受理せられたるもの四千二百七十八人の中、起訴せられたる者はその約半數の二千四十一人であると云

ふ。これらの事實が、司法警察官の側に於る一種の干渉の結果と見るべきや否やは速斷し得ない所であるが、選擧の自由公正を確保する爲めと同時に選擧に不便困惑を來さしむるものであることには疑ない。司法警察及び檢事局の選擧時に於る行政的活動に就て研究を要すべきものなきや。これ又今後の考究に俟つべきものであらう。

若し夫れ、選擧法上の規定に根據する警察制限又は警察下命の運用及びそれの違反に就て、又、治安警察法による言論集會等の取締規定の濫用によりて、地方長官及び其の下僚が所謂選擧干渉を試み得る餘地の存することは、蔽ふべからざる事實である。改正選擧法は、その第百十六條に於て、選擧に關し、官吏又は吏員が故意に其の職務を怠り、又は職權を濫用して、選擧の自由を妨害したる時は、三年以下の禁錮に處せらるべき規定を設けて、嚴にこの干渉を戒しめて居るけれども、昨秋の宮崎縣知事の如き事例あるを見れば、我々は此の點更に考究して、法規の上に又實際行政の上に於て改善すべき點を明かにせねばならぬ。

右の如く、極めて簡單に、選擧運動の取締及び制裁に就て、問題たるべき點を論及したのであるが、その實際運用上の經驗に就ては、總選擧終了の後、實際の事實に徴して、もつと具體的に研究する必要がある。いまは、ただ今日問題とされ始めたる機會に一言するに止める。因に本稿を草するに當り、參考して多大の裨益を受けたる左の書目の名をここに誌して置きたい。(二月八日)

坂千秋・三宅正太郎共著　普通選擧要綱

石原雅二郎・坂千秋・三宅正太郎共著　普選法釋義

木村彌三郎著　府縣議戰の實際に見たる普選の取締と罰則

芳谷武雄著　普選の取締と罰則

小田垣光之輔　普選に依る最初の市會議員選擧

石原雅二郎　選擧犯罪の研究(「自治研究」第三卷八號以下)

世界各國の普選實施前後
――無産階級政黨の進出如何を中心として觀たる――

川原次吉郎

一、はしがき

いよいよ我國にも待ちに待つた普選實施第一回の總選擧が來た。今や全國に渡つて國民は政戰の渦中に卷き込まれてをる。政友勝つか、民政立つか。否それにもまして興味津々たるは無産政黨の成敗如何である。

普選後の政局の變轉如何も世人の最も知らんとするところである。かかる際に諸外國における普選實施第一回の總選擧の跡を顧みるもまた決して無駄なことではないであらう。もとより各國ともに政情を異にし、社會事情を違へてをる。政治の動きを全然同じうするものでないことは勿論であるが、しかし諸外國の先例は吾人の思索によき參考となることは今更いふまでもなきところである。で、わたくしは今オーストラリア、イタリア、イギリス、ベルギー、の四ケ國をとつて、これを大觀しようと思ふのである。ただフランスの普選は今ではあまりに遠きことになつてしまつたし、アメリカは各州それぞれ普選實施の年を異にしてをるのみならず、多く前世紀のことであるから、比較的新らしく普選を實施した以上の四ケ國を代表的に採つたわけである。限られたる紙面であるから、もとより鳥瞰圖(バーヅ・アイ・ヴュー)に過ぎない。讀者の寛恕を乞はねばならぬ。

二、オーストリア

オーストリアに普通選擧制の採用されたのは一九〇七年である。この時までの選擧法はオーストリア獨特の極めて複雜なる制度であつた。即ち有權者を五階級に分ち、第一は大地主で、

（一定の租稅を納むるもの、稅額は州によつて違がふが五十「グルデン」乃至二百五十「グルデン」である）これは全國を通じて八十五名の議員を選出することが出來る。第二は都市在住者で、（十「グルデン」以上の稅金を納むるもの）全國を通じて二十一名の議員を選出する。第三は商業會議所及び工業會議所で、これは會議所なる團體に選擧權を與へたるもの、選出議員數は百六十名。第四は村落在住者で（十「グルデン」以上の納稅をなすもの）百三十一名の議員を選出することが出來る。第五は一八九六年の改正によつて追加されたものであつて、普通選擧の精神を採り、二十四歲以上の一切の男子に選擧權を認めたのである。但し選出議員數は七十二名に過ぎない。加之第四級までの有權者は自ら二重の投票權を有することになり、不公平も極まる制度であつた。もちろんこの第五級をも認めたる制度によつて全體としての有權者數は一、七三二、二五七名より一躍五、三三三、〇〇〇餘人に增加したけれども、その中の有產階級たる一、七三二、〇〇〇餘は合して三百五十三名の議員を選出し得るに對して、殘餘の三、六〇一、〇〇〇餘のものはわづかに七十二名を出すに過ぎなかつた。そこで社會民主主義勞働黨 Diesozial-demokratische Arbeiter-partei などは先頭に立つてこの不合理不公平を攻擊し、盛んなる普選運動を引つづき起したのである。その結果つひに獲得されたのが前述の如く一九〇七年の新選擧法であつて、それに依れば、滿二十四歲以上の男子にして、一年以上選擧行使區域內に住所を有するものは、原則として皆選擧權を有することとなつた。

さてこの普選實施によつて如何に政局に變動を生じたか。前述せるところによつても分る如く、舊選擧法は甚だ不公平極まる制限選擧であつたので、勞働階級はほとんど全く政治的進出の機會を封じこまれてゐた。しかし一八九六年の改正で第五級の制度が制定されてから、辛うじて十四名の代表者を議會に送る事ができたが、この不平等なる制度では到底强き勢力を示す事は不可能であつた。現に一九〇〇年の總選擧では漸く九名、一九〇二年には十一名といふまことに微々たる有樣であつた。しかし一九〇七年の普選實施は勞働階級にも多くの希望を與へ多年の欲求を遂ぐるはこの時とばかり、普選第一回の總選擧からもう白熱的の運動を開始したのである。その結果はつひに社會黨（精しくいへば社會民主主義勞働黨）は八十七名當選といふ大成功を納め得た。得票數は全投票數の約四分の一に達してゐたことも同黨の優勢を物語るものである。しかも同國は小政派の分立の著しい點、民族關係の混雜等によつて、單獨の政黨を强固に維持することは至難とされてゐたのに、全民族を通じ、全

區域を通じ、無産階級の勢力を統一し、ここに八十七名をまとめ上げることの出來たことに對しては、何人も偉としなければなるまい。但し社會黨以外の保守的政黨には大なる變化は見られなかつた。

普選實施後の第一回總選擧において直ちに絶對多數を無産階級がかち得ることの不可能なるは、何れの國においても共通の事實である。けれどもその後の形勢において、(例外的に一進一退はあつても)結局漸次勢力を增進し行くことは、これまた多くの國の政治史上實證されるところである。就中その後の進展を見るならばオーストリアの社會黨及び勞働階級の政治的進出は順調に發達したものといつてよい。この點はイタリアのそれと比して遙かに好境に置かれたものといはねばならぬ。

三、イタリア

イタリアにおいて普通選擧制度のはじめて採用せられたのは、一九一二年であつた。正にジョリッチー第四内閣の時である。それまでは、滿二十一歳以上の男子にして、一ケ年直接國税十九「リレ」八十「チエンチシミ」を納むるものといふ選擧資格が設けられてゐた。それを一九一二年に改正して、納税制限を徹廢したわけである。(但し一般人は滿三十歳以上、現役兵役を終りたるもの及び相當教育を終りたるものは滿二十一歳以上。)その結果、選擧有權者の數は三、三一九、一四七名より一躍二倍半八、六七二、二四九名になつた。人口に對する百分比は九・二八より二四・一九に增大した。

この普選法による最初の總選擧は一九一三年秋行はるることになつた。その結果たる當選者の政派別は吾人の興味をそそるもの甚大であるが、當時イタリアには確然たる政黨の分立を認識することは困難であつたため、ただ大體の傾向に依る分類をなすより外はない。Journal des Débats 1913. Sept. 7. によれば

立憲主義者にして政府黨たるもの	二九一
同、政府反對黨	二二
同、政府に對する態度不明のもの	五
カトリック黨	二四
急進黨	七〇
共和黨	一六
改良的社會黨	二三
正統的社會黨	五一
サンヂカリスト	三
獨立社會主義派	三
合計	五〇八

これを前回の總選擧(一九〇九)の結果たる議會の大勢と比較すれば、更に參考となる所が多いと思ふ。即ち左の如くであ

つた。(Journal des Débats 1913. Sept. 5.)

立憲主義派	三七二
カトリック黨	一五
保守黨	六
急進黨	五一
共和黨	二三
改良的社會黨	一四
正統的社會黨	二三
獨立社會主義派	四
合計	五〇八

右の二表を對照すれば分かるやうに、一般に左翼派が勢力を得てをる。右翼政派の勢力維持は政府の極端なる干渉によつてある程度まで効を奏したこと勿論ではあるが、それにも拘らず、新興階級の政治的進出は如何することも出來なかつた。ことに社會黨は當時にあつてもほとんど例外的に最も組織の具はつた政黨として、有力なる活動をなしたが、それの急激なる發展は、貧民階級の多數あるイタリアとしてはあまりに當然なることとであつた。保守派のものがこれ普選による弊害の一なりと云つたが、進歩派からみれば、これこそ普選の効果の筆頭に擧げらるべきことであつた。

しかし大勢からみれば、この國においても亦普選第一回の總選擧では、大なる政局の變動はなく、政府黨の勝利に終つてをるのは、矢張り舊選擧制になれたる國民の惰性と、新興階級の組織化の不足とに歸すると見なければならぬ。殊に新有權者中全然の無教育者の可なり多かつたことが、選擧觀念の欠乏と、投票實行の實際的不可能を止むを得ざらしめたことは明らかである。

元來イタリアの政界は個人的色彩濃厚にして、社會黨を除きては政黨としての確固たる團結もなく、政策においても不動不護の依據なく、時によつて或は右に或は左に、常に激しき動搖をくりかへすに過ぎなかつた。ただ全般的にみて右翼派の勢力が、國民の政治的自覺の少ないところより比較的根強く朋黨的にはびこつてゐたのである。普選の施行によつて急激なる政界の展開を豫期したものにとつて多くの失望を與へたのも無理もない次第といはねばならぬ。

その後財政の困難のため折角多數派となりながらチオリッチーは內閣を投げ出して、休養を欲し、次のサランドラ內閣(一九一四年三月成立)も、社會黨及び急進黨の反對に時にはやや同情を受けたにも拘らず、政局を安泰ならしむるにはあまりに穩和主義者であり、十分なる活動もなし得ず、ついに翌年(一九一五年)五月には總辭職を奏請したが、國王の新たに組閣を命じたるマルコーラは固辭したので結局うやむやの內にサンド

チ内閣は大戰爭に當面することになつた。

要之、イタリアにおける普選實施後の政局は、多くの期待に反してあまり大なる効果をもたらさなかつたことは、何人もこれを認むるに躊躇せざるところであらう。

當時社會黨の將來の進展を豫期したものも、戰後のファシスチの擡頭により、今やイタリアはムツソリニー派の單一政黨となり、前古稀なる專制政治になつたことには定めし一驚を喫してをるに違ひない。

四、イギリス

イギリスで普通選擧制のやや完成されたのは一九一八年である。一八八四年の大改正によつてやや普選に近き制度を得たが、まだ財產資格の制限が多少保存されてゐたので、成年の男子にして選擧權を持たざるものも少なくなかつた。故にわたくしは多くの學者の意見に反して、英國普選實施期を一九一八年となすに躊躇しないのである。但し完成といつても婦人に關する限りにおいては、普選ではないことは勿論である。且つたとへ居住者でなくとも若し一年の賃貸價格十「ポンド」に相當する土地若しくは建物を占有する「プロフエシヨン」或は「トレード」を營む者は、その選擧區において別に投票をなすことを得ゐるといふ制度の存在に依つて、一部的複數投票の行はれてをるところも、平等、普通、を眞意とする普通選擧には完璧とはいへないが、それら以外ではまづ完成と稱へて大過なからう。

かくイギリスでは通常、滿二十一歲以上の男子、及び一定の資格ある三十歲以上の婦人の選擧權が確立したので、それがため一九一八年の總選擧以後には政界に與へた影響も相當大なるものがあつたのである。

即ち從來保守、自由二大政黨の天下二分が、不動の原則なるが如く思はれてゐたイギリス政界に、新興無產階級の政黨たる勞働黨が第三黨としての地位を確立し、將來に多大の希望と發展の可能とを思はしめたことは、何といつても普選採用第一の影響であつた。

前述の一八八四年の選擧法大改正は可なりの有權者の擴張をきたしたことは勿論であり、從つて勞働階級の政治的進出も漸くその機會を得つつあつたことは、たとへ徐々にではあつたが、これまた疑ひ得ないところであつた。一九〇〇年の總選擧に二名の勞働代表の議會に入つたことはそれを示してをる。又、勞働黨の結成された一九〇六年に同黨から二十九名、一九一〇年一月には四十名、同十二月には四十二名と漸次その數を增しつつあるを見ても明らかである。さて一九一八年の普選第

一回の總選擧に勞働黨が三百六十一名の候補者中五十七名の當選者では前回に五十六名の候補者中四十二名といふ未曾有の好成績を表はしたに對しては、あまり香しからぬ結果ではあるが、しかし議席の增大は將來の發展を期せしめ、就中前回に同黨の得票總數が三七〇、八〇二なりしものが一躍二、二四四、九四五といふ桁違ひの好成績と發展振りを示したことは、たしかに新興勢力のあなどるべからざることをはつきりと示すものに外ならなかつた。その次の一九二二年、二三年、二四年と毎年行はれた總選擧にも、得票は非常の勢で增大し、當選者も最後の一九二四年に多少の減退をしたのみで、他は何れも急速の增率を示したのである。

一方保守黨はバルフォア内閣が一九〇五年にジョセフ・チャンバーレンの保護貿易提唱によつて國民の信任を失つて以來政權の機會なく、戰時中はロイド・ヂョーヂ内閣の下に各黨聯立の形を維持して、國内的には政戰休止の狀態を續けてをつた。しかるに一九一八年の總選擧によつてロイド・ヂョージ聯立内閣の新任が新たにされたので、再び擡頭の機も來たらざるかと思はれたのに、他方自由黨にあつては一九一六年以來内訌絕えず、とかく足なみのそろはぬ傾向があつて漸次昔日の優勢も衰へんとする兆が見えたから、ここに稍々保守黨の進出も目醒しき勢を示してくるやうになつた。自由黨の衰運は一つは右の如くその內訌にも因るが、一つには勞働黨の運動の發展につれて、自由黨の到底たのむに足らざることが、殊に無產大衆間に知られたからである。自由黨は保守黨の傳統的根强さと、勞働黨の新進の威力とに挾擊されて今やその大勢年とともに傾き、見る人をして哀れを催さしめてをるが、政治界必然の變轉などうすることも出來ない。

五、ベルギー

ベルギーの普選の施行は、普通には一八九三年（九月七日）と云はれてをる。なるほど同年の改正によれば、納稅及び財產に關する制限を廢止して、「滿二十五歲以上の男子にして同一市町村内に一ケ年以上住所を有し完全なる公民權を有する者は選擧權を有す」といふ原則が樹てられたのであるから普通選擧制には相違ない。けれども同時に極端なる複數投票主義(Le vote plural)が採用されて、普選の眞意たる「平等普通」なる原則は實現しなかつた。すなはち「滿三十五歲以上にして、直接國稅年額五法以上を納め、現に妻帶せるか、又は鰥夫となり正當の子女を有する者、」或は、「滿二十五歲以上にして、公定價格二千法以上の土地を所有し、又は毎年百法以上の收入を與ふ

る白國公債を所有し、若しくは同額以上の年金を受くる者」は更に一個の附加票を與へられた（但しこの兩者の條件を兼有せる者でも附加票は一個）のみならず、「滿二十五歳以上にして、大學の卒業證書を有し、又は高等學校の全科を修了せる者、若しくは之れと同等以上の豫備知識を必要とする公職に在る者、又は在りし者」は、以上とは別に更に二個の附加票を與へらる制度であつた。故に結局は有産者に有利なる、極めて不公平なる選擧制度であつたのである。

故にわたくしは、ベルギーの普選實施を、これらの制限すなはち複數投票制度の撤廢されたる一九一九年なりと見んと欲するものである。因に一九一九年の改正に依れば、年齢は二十一歳に範圍が更に擴張されてをる。

さてこの一九一九年には普選實施第一回の總選擧が行はれたのであるが、その前後の政局の形勢を比べてみなければならぬ。

元來ベルギーでは早くから（一八四七年以後）「カトリツク」黨と自由黨との二大政黨對立が行はれ、相互交々立つて政權の授受をなしてゐたこと、恰も英國のホイツグ、トーリー二黨のそれの如き趣があつた。勿論夫々の勢力維持年月の長短はあつたが、相互に代る代る立つてゐたことは、それに違ひなかつた。この兩黨は、一方は、カトリツク保守派、他方はフランス革命の思想に影響された自由派で、はじめは提携してゐたこともあつたが、後に二派に分離對抗するやうになつたのである。

しかるに選擧法改正によつて複數投票制が廢止され、いよいよ正銘の普選の實現した一九一九年の總選擧からは、右の二大黨の外に社會黨（勞働黨 Parti Ouvrier Belge といふこともある）が急激に擡頭して來た。この社會黨は、前述の一八九三年の曲り成りの普選施行の頃から漸時勢を生じ選出議員の數を增加しつつあつたのであるが、もとより勞働階級を背景とする政黨であるから、有産階級に有利なる複數投票制の行はれてをる間はいつも苦戰を續けざるを得なかつた。「カトリツク」黨や自由黨は上流中流階級を地盤として固持してゐたからである。しかるに一九一九年の普選撤底は多くの勞働階級の新有權者を加へ、あまつさへ戰後の不景氣に遇つて失業の續出とともに勞働階級の社會的自覺が進んだために、社會黨の勢力いやが上にも揚つて來たわけである。

一八八四年からづつと引續き戰爭前までは、「カトリツク」黨が議會の絕對多數派として大いに勢威を振つてゐたけれども、大戰爭の勃發とともに擧國一致內閣を造らんとする輿論が强か

つたので、つひに「カトリツク」、自由、社會、三黨の聯立内閣が出來上ることになつた。かくてドイツ軍の侵入に對する悲壯なる抗爭も、眞に擧國一致で行はれたのであつた。しかし戰爭終了後即ち一九一九年一一月の總選擧では、三派の提携も勿論解かれ。ここに鼎立戰が行れるることとなつた。その結果、戰爭勃發まで多年政權を維持して來た「カトリツク」黨の强勢も、つひに新興の社會黨の爲めに侵略され、その誇りたる絕對多數の地位も蹴落されてしまひ、ここに三黨互に拮抗の勢となつたので、何れかの政黨が單獨にて内閣を組識することは到底不可能となり、三黨又は何れか二黨の聯立内閣が戰後のベルギー政局の習慣となるに至つた。ただ一度だけ例外としてヴアン・ドヴ・ウイヴエール Van de Vyvère が「カトリツク」單獨内閣を組織したことがあるが、それは「三日天下」ならぬ十日天下に終つてしまつた（一九二五年五月十三日――同二十二日）。

今、複數投票制を廢したる普選最初の總選擧、及びそれの一同前、及びその以後の總選擧に於ける各派の下院における勢力を表示すれば、（外務省歐米局編「各國政黨」八一六頁による。）

總選擧年別	カトリツク黨	自由黨	社會黨	共產黨	その他
一九一四	一〇一	四四	三九	〇	二
一九一九	七三	三四	七〇	〇	九
一九二一	八〇	三三	六八	〇	五
一九二五	七八	二三	七八	二	〇

（右表の内一九二一年までは定員一八六名、一九二五年以後は一八七名）

また各黨の得票數を見るに、

年別	カトリツク黨	自由黨	社會黨
一九一九	六五九、三六八	三一〇、八七六	六四五、一二四
一九二一	七六八、〇八〇	三四九、八八八	六七四、二〇四
一九二五	七九九、二六四	三〇四、四六四	八二〇、一四八

右の數を見ても分るやうに、社會黨の勢力は漸次增大の傾向あるに對し、自由黨は衰亡の道を辿りつつあり、保守黨のみ辛うじて社會黨に拮抗の姿を保持せるに過ぎない。又、社會黨中の急進分子が一九二〇年別に共產黨を組織し、一九二一年の總選擧に候補者を出したが、物にならず、一九二五年の總選擧に至つてやつと二名の當選者を得た（共產黨の得票は三四、一四九）のみである。これベルギーにおける最初の共產黨議員であるが、普選の實はかくの如くして年々その効果を擧げて行きつつあることを見ねばならぬ。

右の外に分離黨その他の小政黨あれども大勢を動かすに足らない。婦人には一九一九年から制限的參政權が認められた（上

院では一九二一年から）が、その數男子に比すれば極めて少數である。ベルギーでは投票は義務となつてをる（ベルギー憲法第四十八條第三項）のであるから、以上に掲げたる各黨の得票は、大體において、各黨の現實の勢力を示すものと見てよい。

ベルギーは商工業を重要産業とする國柄である。從つて勞働階級の數も益々增加の形勢あることは自然の數と云はねばならぬ。そこで明確に保守的立場をとるカトリック黨と、斷乎として進歩的立場をとる社會黨との對立は到底免れあたはざる所であつて、中間に位する自由黨が兩者からたのみ少なく思はれ、年とともに勢力を失墜しつつあるは、恰も英國の自由黨の運命と思ひあはせられて興味ある政治界の動きであると思はるる。

六、むすび

わたくしは以上ヨーロッパ各國の普選實施第一回總選擧の前後の政局を、殊に新興勞働階級の進出を中心にして眺めて來た。今これを概觀して感ずることは、普選によつて直ちに無産階級の絕對多數などは到底期待し得ないといふことである。それは選擧運動費等主として經濟問題に原因するものといへる。その點では有産階級政黨に比してはたしかに不利な立場に置かれることは止むを得ない。もう一つは一般國民中に無産階級政黨に對する理解が急激に進展しないことも見逃してはならぬ原因である。中には單なる無理解からくる疑惧すら抱くものが少なくない。但し、普選實施後幾回か總選擧を重ねる度毎に無産政黨の勢力の增大し行くことは、何れの國の歷史を見ても明らかに認めるところであつて、これ選擧そのものが一つの政治敎育の此上なき機會たると同時に、有産階級政黨の政治的虛構の眞相が、無産階級政黨の議員によつて暴露され、生活難や失業におびやかされる無産大衆の階級的目醒めが年とともに深刻化するためであらう。

我が國今次の總選擧においても、無産各派の政黨の進出は實に目ざましきの極みである。將來第三黨として力のある發言の機會を議會内に握ることも充分信じ得られる。だが今は保證金制度や運動費の都合上立候補者の數の既成政黨に及ばないことは止むを得ないが、はたから見てゐてもあまりに馬鹿々々しき暴壓のために、恐らく當選者も決して豫想に添ふ如きものではないかも知れない。然し未來を約束されたる無産政黨の前途の多望は云ふまでもない。これ諸外國の政治史が明示し、政治科學の理論が證明するところでもある。

經濟時評

日銀の通貨統制問題

牧野輝智

中央銀行の最重最高の任務は通貨を統制し、其發行した紙幣の信用を保持することである。貨幣進化の徑路を考えて見ると、未開の時代は別として、金屬貨幣から紙幣に進み、其の紙幣は政府紙幣から銀行紙幣に進んでゐる。而して今日の貨幣事情では、本位貨に兌換される銀行紙幣が最も時代に適合せるものとされ、其兌換紙幣の發行は大抵中央銀行に統一されてゐる。それといふのは中央銀行に統一された兌換紙幣は、經濟界の實情に應じて其供給量が自然と伸縮され調整されるからである。

併しながら中央銀行をして此の本務を全ふせしむるには之を政府の政略的干渉から獨立せしめ、公正なる立場から經濟上の理法に順應した處置をなさしむることが肝要である。極端な例としては、獨逸麻克紙幣の崩潰（一九二三年）、現實の例としては佛蘭西銀行券の低落、是等は政治的干渉が銀行紙幣發行の上に加へられ銀行券の流通を經濟界の需要に應當せしむることが出來ないからである。斯うなると中央銀行の紙幣でも、自然的調整の不可能な點に於て政府紙幣と何等異る所はない。我國の通貨狀態を說明するに當り、數年前の崩潰した麻克や、今日の佛蘭西の通貨などを引用することは餘りに大袈裟過ぎる感はあるけれども、我國の現在の通貨事情が、著しく不自然の狀態にあることは我々の看過してならないことである。

此の不自然の狀態といふことの第一は、依然金の輸出が禁止され事實上は不換紙幣國であるといふことである。墺地利も獨逸もデヴアリユエーションの斷行により、兎に角貨幣價値を安定せしむることに成功した。其の後匈加利白耳義等の諸國が是に倣ひ、昨年末に伊太利も亦デバリユエーションを行ひ、貨幣

の價値を大體安定せしめ得ることになつた。我國は獨佛兩國とともに今日では通貨問題に就ては取殘されたる國となつてゐる。金解禁問題などは近來政府も國民も忘却してゐるかのやうであるが、此の根本問題が解決しない間は通貨問題の眞の安定は望み難い次第である。

◇　◇

然るに此の問題が未だ解決しないに先ち、昨今更に又一つの新なる通貨問題が加はることになつた。それは日本銀行が特別融通法や震手法、臺銀救濟法などの實施の爲めに、一種の救濟銀行と化し、中央銀行としての通貨統制上の機能を大に減殺せんとしてゐることである。本文の劈頭に陳べた通り、日本銀行の最高の職責は、發券銀行としての機能を全ふすることである。ところが今日の狀勢では此の點がいよ／＼覺束なくなりさうになつた。それは色々の事實に徵して明白である。試みに最近の日銀週報を熟覽すると、第一に兌換券の發行高が金融の緩漫な割合に非常に多過ぎてゐる。昨今の金融はコールが五厘位になつてゐる程緩漫である。此の緩漫狀態からいふと、兌換券の發行高は十億圓臺を割つてもよささうに思はれるが、事實は二億圓に近い限外發行が行はれ、兌換券の總額は十三億七、八千萬圓に達し、金融緩漫の影響が少しも兌換券の上に現はれてゐない。是は日銀が通貨の統制力を失つてゐる一つの證據である。

第二は日銀貸出の激增である。昨年の今頃の日銀貸出は三億三、四千萬圓であつたが、昨今の日銀貸出は七億五六千萬圓に達してゐる。いふまでもなく此の增加は特別融通法や震手法、臺銀救濟法規による貸出の結果である。是等の諸救濟法規により日銀が既に貸出してゐる額は、五億圓に達してゐる、今後特別融通法による貸出期間の滿了期（本年五月）までに更に貸出す可く決定してゐる額が十五銀行救濟を中心として約三億圓ばかりある概算である。斯くて合計八億圓の巨資が不良銀行のコゲ付から肩替りして日銀の貸出となる次第であるが、是は殆ど全部固定貸であつて、金融界の繁閑により伸縮されるものではない。日銀の通貨統制力阻失の原因は實に此の點に存してゐるのである。不健全なる現象の第三は日銀の預金（政府以外の預金）が二億八千萬圓にも達してゐるといふことである。昨年の今頃の日銀預金は七千萬圓見當であつたが、昨今は二億圓も增加してゐる。それは日銀から特融法其他により借入れたものが、日銀に當坐預金をなしてゐるために增加してゐるものであるから、何時引出され通貨膨脹を實現さすか分らないものである。此の種の預金は五月までには更に增加す可き傾向にあ

るもので、それだけ日銀の紙幣は經濟界の眞の需要に頓着なく、激增す可き狀態に置かれてゐる譯である。

◇　◇

以上列擧した第一乃至第三の事情は互に密接なる關係を有するものであつて、必ずしも別種のものとは稱し難いけれども、試みに之を三種となし、（一）兌換券の發行狀況、（二）貸出額の激增、（三）民間預金の激增の三方面から我國の貨幣現象を觀察し、今日の通貨事情が金輸出禁止以外の特殊の理由により極めて不健全なる現象を演じ、それが爲に日銀の通貨統制力が危殆に瀕してゐることを說明した次第である。萬一日銀にして通貨の統制機能を喪失することとならばそれこそ經濟界の重大問題であるが、それといふのは政黨や政府の當局が黨略本位に特別融通法其他の濫用を强ひ、日銀當局亦其の壓迫に餘儀なくされて、特融の適用に寬大なる手加減を加えたことに重大なる關係を有してゐる。

然らば如何にすれば此の不安なる問題を圓滑に解決することが出來るのであるか、根本の問題は財界を堅實に立て直し一日も早く金解禁を實現せしむるやう準備を整ふることである。今日の通貨制度では金解禁が實現しない限りは眞に經濟の理法に適したる通貨現象は實現し難いことである。大戰後の苦がい經驗に懲りて各國が擧つて金本位制の恢復に努力しつつあるは、是が爲である。而して是に成功したる國の幣制はます〱堅實味を加へ（例へば英國）其然らざるものは依然經濟的の大苦難に遭遇してゐる（例へば佛國）。此の意味に於て我國にても金本位問題の解決は政府といはず、國民といはず、其堅實なる解決に十分の努力を集中するの必要あることを痛感する次第である。

乍併昨今特に目立つて感ぜられ且憂慮せられる通貨統制力の問題は其原因が特融法其他に基く救濟行爲に存することを忘れてはならない。從つて此の救濟法に原因する通貨の不自然なる膨脹を阻止することは、即ち日銀の通貨統制上の機能を恢復せしむる所以である。無責任なる政治家は特融法の運用期間を更に延長し、不良銀行の救濟を此の上にも濫行す可き旨を、慫慂してゐるが是等は誠に亂謀極まる提案である。通貨統制力の問題は單なる日銀の問題ではない。經濟社會全體に亘る重大問題である。政府も國民も眞面目にかゝる問題の發生する所以を考察し、是に對する最善の解決策を攻究するの必要があると思ふ。

實行豫算と追加豫算

第五十四議會解散の特別收穫は昭和三年度豫算案が不成立になつたことである。普通の場合にありて議會解散の第一の損失として擧げられるものは豫算の不成立である。帝國憲法では議會が解散になれば前年度豫算を踏襲することになつてゐる。議會解散のため豫算が成立せず、前年度豫算を踏襲することになれば、新なる施設は丸潰れとなり、國運の進歩發展の上に多大の支障を生ずることになる。是が議會解散の容易に行はれ難い重大なる理由である。然るに今回の場合は事情が全く異つてゐる。私は現政府の不眞面目なる豫算案を見て、斯の如き豫算が成立したならば、國運の進展に資するどころではなく、財政の基礎を危ふし、國民經濟上にも深甚の惡結果を演ずることを憂慮した次第である。其理由は本誌新年號の本欄に於て陳べた通りであるが、兎に角今日のやうな財界不況の場合に片岡前藏相の放漫豫算に更に輪をかけた豫算を編成し、其財源として剩餘金の全部を消盡し、更に公債を增發して是に充當するやうな遣方は、財政經濟の堅實なる發展を思念する人々の如何にも納得し難い事のみである。

◇　◇

ところが議會解散の結果として此の放漫なる豫算案は不成立になつた。其の豫算案に計上されてゐた約二億圓の新規要求は不成立となつた。若し此の新規要求なるものが眞に國運の發展上必要なものであるならば、其不成立は歎はしいことであらねばならぬが、所謂新要求の內容を點檢して見ると、黨勢の擴張上新施設を急ぐといふ裏面の理由以外に、公平に判斷して今日の窮迫せる經濟事情財政事情に頓着なく、一年を急いで施設せねばならぬといふものは殆どない。新事業の第一に數へられるものは鐵道の建設であるが、不成立豫算では新線の追加二十六線、既定線路の延長六線、既定線路の工事繰上五十六線を計上し、其財源として公債八千萬圓の發行をなすことになつてゐた。是などは最も露骨なる黨勢擴張策であつて眞面目な人々の反感を買つた重要な實例である。又現內閣が頻りに高調する產業振興の內容はどんなものかといふと、曰く肥料改善、曰く桑園改良、曰く漁業振興、曰く民有造林促進、此の外蠶業水產、絹業の各試驗所の設置、等、一として一年を急がねばならぬと

いふ程のものではないばかりか、其施設の根本に於て尙ほ大に攻究す可きものが少くない。更に又其治水及び港灣修築の事業に就て見ても、大野川那賀川の改修、小名濱、細島、土崎、宮古、浦戶の諸港の修築等、何れも此の地方民の希望からいへば、一日も早いことを願ふであらうが、國家として財政上の無理をしてまで一日を急がねばならぬ程のものでない。此の外教育基金一千萬圓の復活の如きも、日露戰役後永らく中止してゐるものを、今日財源上の無理をして復活せねばならぬ必要は、何としても認められぬ。是等の新施設たる何れも地方民の歡心を買ひ、其地方に於ける黨勢擴張の手段に供せんとするに外ならないもののみである。

然るに議會解散豫算不成立のため是等の不急事業若くは不用事業は總べて不成立となつた。其のために節約される額は二億何千萬圓である。政府では目下前年度豫算を基礎として實行豫算の編成中であるが、既定財政計畫に依れば前年度豫算を基礎として作製さる可き實行豫算の總額は十五億七、八千萬圓である可き筈である。我國の財政經濟の實情からいふと、豫算の總額は此の程度でも尙ほ多過ぎる位であるが、それは暫く忍ぶとして、兎に角財政の立直しを行ふには總豫算を大きくとも此の程度に切り詰めることが肝要である。幸に前年度豫算の踏襲により實行豫算は此の程度に切り詰めねばならぬことになつた。是が私が今回の豫算不成立を以て議會解散の特別收穫と稱する所以である。

◇　◇

尤も總選擧後に特別議會が開かれ、それに對しては追加豫算を提出することも出來るけれども、特別議會に對する追加豫算なるものは眞に緊急止むを得ざるもののみでなければならない。目今の問題に就いていへば大禮費豫算の追加要求のみが特別議會に於ける追加豫算の主要なるものであらねばならない。不急の鐵道建設や河川港灣の改修などは特別議會の性質からいつても此の場合に提出す可きものではない。此の外不成立豫算案に計上されたる新事業の大部分は特別議會に提出すべきものではない。世上傳へられるところでは政府の方針は相當多額且つ巨額の追加豫算を提出する意嚮であるともいふ。若し斯の如しとせば而してそれが特別議會を通過することともならば、議會解散による財政負擔の輕減は遂に實現しないことになる譯であるが、私は其の然らざることを切に希望し、不眞面目なる放漫豫算のため我財政經濟の禍されることの少しでも尠からんことを切に希望する次第である。

社會時評

選擧犯に對する國民的評價を糺すの必要

吉野作造

去年の秋の縣會議員の選擧に際し某縣知事がその地位を濫用して奇怪な干渉を行つたと云ふので檢事局の問題となり遂にその免官と起訴とを見たと云ふ事件がある。目下審理中の所謂古宇田事件と云ふのがそれだ。若し之れが西洋での出來事であつたら、滅多にない政治的一疑獄として世間も隨分驚いたであらう。國家の大不祥事として定めし識者の大に眉をひそめた事でもあらう。それ程に彼の國々では斯うした露骨な干渉は稀であり又從つて之に對する國民的嫌惡の念も强いのである。併し考へて見ればそれは當然の事で、苟にも高祿を食む上級の官吏が身その取締の任にあり乍ら職權を濫用して選擧に私を圖つたとあれば、世人の大に之を咎め之を憎むは怪むに足らぬ。政治を以て一國の運命にも係はる重大高尙な仕事と觀ずる國々に在ては、何處でも選擧に關する犯罪をば詐欺竊盜以上に醜陋視するを常とする樣である。之れでこそ始めて政界の潔白も保たれるのだ。私事に嚴にして公務に寬なるは決して喜ぶべき現象ではない。所がこの古宇田事件に對する我國今日の上下一般の態度はどうだ。驚きもせねば、一向憎みもせぬではないか。第一に監督の任にある内務大臣が平氣でゐる。世間では全然之を責めぬではないが概して云ふに格別の遺憾事とも感ぜぬらしい。從つて此事件は裁判所に於ける法規上の所罰を受くる外格別社會の道德的制裁は受けずして濟みそうだ。事に依つたら遠からさる中に復たもや官界に復活せぬとも限らず、少くとも次期の總選擧位には政友會の庇保のもとに公然立候補するかも知れぬとさへ感ぜられる。古宇田氏に取ては洵に結構な話だが、斯くて我國政界の風氣は一體どうなる。私は別に古宇田氏に恩怨はない。個人としては相當の敬意を拂ふことをさへ躊躇せぬ。併し

事は公けの問題だ。日本の政界の正しい發達の爲には彼れの今次の過誤に對する國民的評價はもツと〳〵嚴重でなくてはならぬと考へる。選擧の本質を考へ之を取締るの職責を考へ而して今日我國の政界が何に最も多くの缺乏を感じて居るか等を思ひ廻らすとき、古宇田氏の過失は餘りに度外れな非常識ではないか。斯んなことに國民がもツと嚴格にならねば政界の廓正は當分駄目と諦めるの外はない。

× × × × ×

知事の選擧犯に對してすら國民的制裁の微弱なること斯の如し、普通人の同種犯行に對し國民多數の驚くべく鈍感なるは遺憾な事だが致方はない。選擧に關する罪は之を犯しても恥ぢるに及ばずとありては、如何にしてそれの公正に行はるるを期することが出來よう。

私は永年學校の教師をやつて居り從つて澤山の青年に接近して居ると云ふ所から能く諸方から結婚の媒介を賴まれることがある。先年も田舍の物持ちの娘と一大學生との縁談を中介したことがあるが、其話が順調に進行して將に豫約の成立を見んとする刹那、該大學生が突如私を訪ねて來た。息せき切つて云ふ所を聞くと、先方の家庭が極めて圓滿幸福であり父君も亦地方での徳望家だと云ふに安心して話を進めたのに、最近調べた所に依ると父君は先年幾月かの禁錮に處せられたと云ふことが分つた、前科のあることを隱して其娘を私に押し付けるとは先生もあんまりひどいと詰るのである。父親を貴ふのではない娘を貴ふのではないかと一應は抗辯したが、彼れの言ふ所も尤もなので、更に私は此の物持ちを私に紹介した人に前科の點を聞いてやつた。所が此人の來て云ふ説明が振つてゐる。曰く、前科たつてあれは選擧での遣り損ひです、何も惡いことをしたのではございませんと。その洒々たる落ち着いた態度には、流石の私も呆れて二の句がつげなかつた。選擧で賄賂を授受したと云ふことは惡事醜行の中には這入らぬときめて居るらしいのである。

併し之はこの人ばかりの考ではない、世人の大多數が槪して斯うした考に徹底してゐるのではなからうか。程度に厚薄の差あるは問題でない、選擧犯を普通の財物騙取よりも以上に憎惡する樣にならねば駄目だと思ふ

× × × × ×

正しい政治は正しい選擧からはじまる。選擧を正しからしむるに付て何よりも大事なことは、選擧犯に對する國民的評價を糺すことである。自ら政治教育を以て任とする者は從來大にこの事に骨折らぬではないが、今日のところ未だ一向に效績が擧

つて居らぬ。努力の足らざる所もあらうが、之には外に重大な原因があることを看過してはならぬ。それは何か。

一つは政界の先達が率先して無垢の選擧民を誘惑することである。朝野兩黨共に利權の提供などに出て選擧の勝負を爭ふは公知の事實であるが、就中政府側が巧に利をくらはし職權を濫用して不當なる庇保を一部の選擧民に與ふるの慣行は、最も强く一般國民の選擧犯意識を鈍らしめたのである。此點に於て今日の內務大臣鈴木喜三郎君が著しく評判のわるいのは、寧ろ同君の爲に氣の毒であるが、孰れにしても歷代の內務大臣が概して此方面に於ける第一の元兇と認められたことは明白の事實である。

次には選擧に關する實際の犯行に對し政府側糺彈の手が常に必ず偏頗に動くことである。同じ事をやつても、政府黨なら大目に見て貰へる、在野黨だとひどい目に遇ふ。甚しいのになると、單に在野黨に味方したと云ふだけで犯行の實跡もないのに警察に呼ばれては兎や角と文句を云はれる。是れは一種の干涉になるが（干涉はまた干涉として大に之を責めるの必要あるは勿論だ）、犯行の單なる取締に在つても、一方に寬にして他方に嚴であれば、責められた方は在野黨であると云ふ事實に責任を嫁して本質的に自ら悔ゐねばならぬ所以を忘れ勝ちになり、世間も亦在野黨なるが故に奇禍に遇つたと云ふ不運を弔するに止まりて其事自身の惡性を反省せずに終る様になる。この點でも私は政府の態度の隱れたる惡影響を思ふて常に憤慨措く能はざるものである。

終りに私は選擧取締に於て一番肝要な點の徹底に關し政府當局が概して怠慢に過ぐるの事實を指摘したい。前項に於て私は政府の態度の動もすれば、偏頗になり勝ちなことを責めたが、偏頗であつてもなくても、政府の手を下すのは些細な末梢的の犯則に對してであつて、取締上根本的に必要な點は却て之を逸し去るを常とする様だ。故に政府の所謂取締勵行は、僅に遠巻きに在野黨の活動を阻害するの效あるにとゞまり、選擧界の本當の肅淸には毫末も觸るる所がないことになる。そればかりか、之を看過することとの結果陰にその公行を助成し、由て以て益々選擧犯意識の鈍感を馴致するに至るのである。一つの例を選擧費用の制限にとらん乎、之れなどは最も嚴重に勵行すべきものだのに、曾て之が爲に犯則者の擧げられた話を聞かぬ。立看板の數や尺寸を制限するなどを幾ら八釜しく云つたつて、金を無制限に使ひ得る以上陰でどんな事をするか分らない。どうでもいゝ様な事に氣をもむ遑があつたら、寧ろ費用の制限の方に目を光らした方がよくはないか。費用の方を嚴しく制限して

さへ置けば、立石板や運動員の數などは全然放任しても差支ないのである。之は費用の制限に限る話ではないが、要するに我國の政府は斯うした根本的に肝腎な方面には案外に且つ不當に寬大である。之を狡猾と解するのが酷だと云ふなら、小くとも怠慢に過ぐると云て差支なからう。其結果種々の選擧犯則が、而もその比較的重大なる性質の犯罪が、罰せらるゝ危險なしに公行を許される。是れも選擧界の廓淸を礙げて居る一重要原因ではあるまいか。

斯う考へると禍の源は主として政府に在る。政府が惡いと云へば今の所直接に政友會を糺彈することになるが、併し民政黨とて決して其責任を免るゝことが出來ぬ。それは民政黨でも政權を握れば矢張り同じ事を繰り返すにきまつて居るからである。故に概して云へば、政友會といはず民政黨といはず、現在の政界に權力を爭つて居る既成政黨は、皆同じ罪惡を犯すことに依て始めて其の生存を主張し得る運命に在るものと謂つていい。政治教育を以て任ずる者の苦心は實にこゝに在る。同時に私共が遂に望みを既成政黨に絕つたのも之が爲に外ならぬ。

× × ×

こゝまで書いて來て私は圖らずまた、現行選擧取締諸規程が國民の選擧犯意識を鈍感ならしむるに偉大の効力ある無類の惡法たる旨を讀者に告ぐるの必要を認める。私は現行法の制定されし際の來歷に付て聊聞く所ないでない、從てそが相當の惡法たる所以に付ても多少知る所がないでない。けれども今日それが愈々實行に移される段になり、疑義百出官民ともに何が何やら皆目分らぬと云ふ現狀に直面して、今更乍らその惡法たる所以の餘りに酷しきに驚いて居る。適當の機會に於て一刻も早く改正して欲しいものである。

何々の點で現行規則は惡法であるのか、少くも速に改正を要する點はどんな事か。之を數へ立てれば一にして足らぬ。重大な問題だから近き機會に於て詳細に之を論じて見たいと思ふが、こゝには唯一つ前段の所論と密接に關聯する一點を例として說いて置きたいと思ふ。

私は前段の末項に於て、肝要な事項の勵行されぬのが宜しくない旨を述べた。折角定めた重要項目を空文に歸せしむるの宜しからざるは論を待たないが、その反對に本來法の制裁を以て强行すべきに非る事項を取締規程中に包含することも亦、同じ程度に不良の結果をもたらすものなるを知つて貰ひたい。何となれば之を勵行することに依ては無用に過多の犯人を作り、その勵行を緩和することに由ては大に法の威嚴を損ずるに至るからである。

私はこの意味に於て元來禁酒禁煙法などの制定にも反對を表し來つたのである、之を特に少年に禁ぜんとするの案に對してすら無條件に贊成することを躊躇した。それは固より飲酒喫煙を奬勵すべきものと考へるからではない。之等は各人の道德的判斷に委すべき事柄であり又少くとも社會の道義的制裁に託すべきものと信ずるからである。强て法律を以て之を禁ずるとなると、先づ何が酒かを機械的に定めねばならず、藥用に供する場合等の例外の許さるる條件をも規定せねばならず、それからそれへと無數の疑義を續出し到底止まる所を知らぬだらう。其極終に官憲は瑣末の煩しき取扱に忙殺され、酒害を社會に減滅せんとの根本目的はいつの間にやら逸し去られてしまう。而して現行の選擧規定には實は之よりもツと酷いものがあるのだから堪らない。

現行選擧取締規程の中には、全然選擧人各自の自制に放任して可なる性質のもの、少くとも社會の道義的制裁に委すを得策とする底のものが、澤山法の嚴制を附して定められてある。一つの例を戸別訪問に取らう。戸別訪問が幾多の弊害を伴ひしは過去の選擧界の經驗が證明する所、之には一點の異議も挿まぬ。併し戸別訪問に托して金錢の授受をする樣なことは他の方法でも處置が出來る。請託が面白くないと云ふなら、已れを屈して頼み廻る樣な卑屈漢に警戒せよと選擧民に教へれば足りる。選擧民さへ確かりして居れば戸別訪問の如きは本來毫も之を禁ずる理由はないのである。而已ならず、之はまた單に禁ずるのが愚だと云ふので濟む問題ではない。戸別訪問の禁は一面に於て個人的交渉の禁と云ふ事になるが、この個人的談合を嚴禁して一體如何にして本當の選擧が行はれ得るか。是れ宛かも千里の走行を命じておき乍ら或は車を禁じ馬を禁ずるの類ではないか。そこで實際の結果は、必要なる限りに於て例外を認めると云ふことになる。否、同じ樣な事柄に付て之は禁令の戸別訪問に當る之は當らないと云ふ風に其間に機械的區別を設くるの必要が起る。それは可い之れはいけないと法禁に觸るると觸れざるとのけぢめは馬鹿にやゝこしくなり、規則制定の本旨は遠く棄てられて、終には、どうでもいゝ樣な下らぬ事にのみ拘泥する結果になる。モ一つの例を立看板の例にとらう。長さ幾尺幅幾尺ときめて見ると、今度は提灯は如何と云ふ問題が起つたと云ふ。提灯は直徑で測るか周圍で測るかなど滑稽極まる穿鑿ではないか。之などは前段にも述べた如く選擧費用制限の規定を嚴格に勵行すれば足りる問題である。金で抑へれば自然立看板の寸法も數も制限されるに違ひない。之をどんなに八釜しく云へ立てても、肝腎の金の使ひ方を放任しては到底取締の目的を達することは

出來まい。いづれにしても、現行規則は肝要な根本的の源泉には手を觸れず却て些末の點のみを過度に八釜しく云ひ立てるので、罪となるとならぬとの境が全然機械的であり、常識を以て誤りなく行動することは何人にも不可能になる。語を極端にして云へば、屁をひッてはならぬおならは差支ないと云つた樣な規程なので、取締の任に當る者までが解釋に苦んで居る現狀だ。故に選擧民から云ふと、何をどうしていつ罪になるか判らない、自分の良心で之が良いときめたからとて安心が出來ず、怖くて〳〵手も足も出ぬと云ふわけになる。現に此點を懸念して國民當然の自由行動を手控へようかと云ふ者も尠らずあると云ふことだ。

尤も私はさう云ふ人達に忠告して居る。些しも法禁に觸れまいとすれば手も足も出ないと云ふのは私共でも同じ事だ、併しさればとて選擧に際して國民の重要なる仕事を怠つては國家に濟まぬ。如かず萬一の所罰は惡法の下に住む身の不運と諦め良心の良しと命ずることには勇敢に邁進しようではないか。斯んな場合には面倒な法規の解釋に無用の時を費すよりも一に自家の誠實なる良心を賴りとするの外はないと。

斯うなると、つまり選擧犯などはどうでもいゝ、所罰を受けても良心に愧ぢないと云ふ事になる。是れ益々法の威嚴を蔑にするものであつて、洵に好もしからざる現象ではあるが、肝腎の選擧規則がわるいのだから今の所外に何とも致方はない。之を以て觀ても、現行規則の一日も早く改正さるるを要するものたることが明であらう。之を適當に改正して速に法の威嚴を立て直し、更に幾多の工夫を凝して、選擧犯に關する國民的評價を一日も早く正しきに向けしめたいものだ。

ルツェルンの春

阿部次郎

1

千九百二十三年（大正十二年）の五月十九日、私は伊太利をあとにして再び瑞西にはひつた。この年の正月匆々に獨逸を出て、一度瑞西を抜けて羅馬に着いてから、埃及旅行の一ケ月をも加へて約半年の間、微恙にかかつた幾日かを除けば、私は殆んど毎日古寺や廢墟や美術館の歴訪に日を暮してゐた。曾て人類の作つたうちで最も偉大なもの——カルナツクのアンモンの殿堂や、ギゼーのピラミツトや、カイロ博物館の第三第四王朝の彫像や、羅馬のサン・ピエートロや、カペルラ・システイナのミケランジェロの壁畫や、アェシージにあるサン・フランチェスコ上下寺とその裝飾や、フィレンツエのヅオモその他の諸寶や、ミラノのグラチエ寺にあるリオナルドの聖晩餐の圖や、ヹネチアのサン・マルコ寺やドオチエの館や、その他數へあげれば數限りもない——かう云ふ優れた藝術品を日毎に見て、私の頭はもう重苦しく夢魘にうなされるやうに疲れてゐた。その上に、私はその頃日本を出てから丁度一年を經て、心の底に鄕愁がしみじみと湧いて來る時期にゐた。特に二度目の羅馬滯在以來二ケ月の間北伊太利の獨旅を續けて、一人旅を愛する私も流石に旅疲れの休息

が欲しくなつてゐた。自分の見物欲をそゝるべき美術品の乏しい土地、秀麗な自然が柔かに自分の心を包んでこれに落付と安息とを與へて呉れるやうな場處——かういふやうな場處に私は深いあこがれを感じてゐた。さうして私はそのために瑞西のルツェルンを選んだのである。ワグナーが第二の妻を得て隱栖の幸福を味ひすすつたところ、ニイチェが一生のうちで最も曇りのない友情を享受して生涯忘れることの出來なかつた湖畔——其處に私も亦一週間の休息を見出さうとしたのである。

十九日朝の九時五十分にミラノをたつて、私は夕の五時にもうルツェルンに着くことが出來た。これは東京、仙臺間の急行車よりも時間がかゝらない。併しこの七時間の汽車は、北伊太利とはまるで違つた風光と生活との世界に私を連れて來た。ミラノ附近の平原、もう夏らしく熱を帶びて青く輝く空、其處に躁惡家らしく投やりに生きて行く伊太利人の世界は、コーモ、ルガーノ、ラゴ・マッヂオレ等の湖水帶を經て、サン・ゴットハルトの山峽に進むに從つて一變する。奔流して來る清冽な水に逆つて登るまゝに、高山は目睫の間に迫つて來て、重雲の間にこれを送迎しつゝ進行する間に、空には雲や霧雨の往來が劇しくなる。瑞西に入つても可なりの間、吾々は矢張伊太利語を使つた伊太利らしく生活してゐる人達の間を通るのであるが、ゴットハルトの隧道を拔けてルツェルン湖（四林湖）に近づくに從つて、言語も人間も急に獨逸流に變化する。私の見るところによれば、瑞西人は獨逸人のやうに空想的浪漫的なところがなく、何處か拔けてゐるところから來る可愛さと大きさとを缺いてゐるが、山國の人らしくキチ〳〵として、勤勉で、整理癖のあるところは、彼等を伊太利人とは全然別様の人間にしてゐる。瑞西ではその山と水とが人間の性格の中に沁み込んでしまつてゐるのである。山と水との美といふよりも寧ろ山と水との生活が彼等の人間の底に薫染してしまつてゐるのである

私のこれまでの經驗によれば、一人旅の汽車の中では、大抵向ふから近いて來て話をしかける人達に逢つた。此等の人達との話がその土地に對する私の觀察に材料を提供してくれることが多いので、私はいつもそれを樂みにしてゐた。併し

この度の汽車の中では不思議にさういふ人が出て來なかつた。私は一人で窓外の景色を眺めながら、ポケットから手帳を出して連句の獨吟を試みた。これも亦私が一人旅の間に屢々やつて來た習慣であつたのである。連句がすら〳〵と出て來ることは殆んどないが、古人の名句を立發句にしてこれを眺めてゐるうちに、私の心は次第に引締つて、疲れて散漫になり勝な旅客の心が段々に靜かに湛へてゐる世界に引入れられることを感ずる。現に十日前ボロニアからヱネチアに行く汽車の中でも、私の全伊太利旅行中一番氣持の惡かつた車室のいらだたしさをこれによつて慰めた。芭蕉の「旅人と我名なのらん初時雨」を發句にして脇をつけるために、これを頭の中で繰返して味つてゐるうちに、私の心にはおのづからゆとりが出て來たのだつた。さうして今日も亦伊太利とのわかれを心に蓄へて置くために又手帳をとり出す氣になつたのである。立發句は同じく芭蕉の「麥の穗をたよりにつかむ別かな」である。併しこの句によつて私の頭の中にひき出されて來るものは伊太利の回想ではなかつた。私は日本の風光、日本の生活、日本の傳統的文化が、おぼろな霧のやうな姿をとつて、捕捉し難く自分の心の前を通りすぎて行くことを感じた。結果はたゞ脇句が半分出來たゞけでまるでものにはならなかつたが、縱令連句は出來なくとも、名句と睨み合ふことによつて客愁を散じ得たのは全く先人のお蔭である。その後又十日を經て、ヰーンからミュンヒェンに行く汽車の中で私はその脇句の先を續けた。歸朝後の今日から見れば、一人の日本人が自分と全然違つた世界を歩き廻りながら、猶内面的にどれほど祖國の中に生きてゐたかを示す點に、これ等の句を回顧する興味がある。附合の格に協はぬ拙劣な句ではあるが、この意味で序にそれを玆に書きつけて置く。

麥の穗をたよりにつかむ別れかな
　朝燒さめて春騷ぐ海
思へども叶はぬ願身を責めて
　殘る蚊をうつ腕の青筋

森深し葉ゆれしづまり出づる月
　電車に遠き堀割の秋
勤行も吉原近き鐘の音
　みどり信如に芽ぐむ春草
岡のかげ朽葉は朽ちて露の臺
　羽織を呼びておばしまの月

2

ルツェルンの湖は又四林湖(フイアワルトシテツテルゼー)とも名けられる。それは不規則な十字架のやうに四翼を持つてゐて、その基底にL字形を左向にして結へつけたやうな形の湖である。汽車が湖の東と北とを迂回して西側を頭とした十字架の尖端に出れば、吾々はルツェルンの停車場について、驛前から直ちに四林湖を縱に見渡すことが出來るのである。五月も下旬に近い夕、私は小雨の中をこの停車場に降りた。宿はミラノから葉書で Hôtel de l'Europe に注文して置いた。ニイチェが「雲のない」日を送つた場處に春雨のしめやかな中に着くのも面白いと思ひながら、私はホテルから差廻して呉れた自働車に乘つた。ロイスの流れがすぐに湖水と合するところにゼープリュッケがある。その橋を渡つてハルデン街の散歩道の木陰を、湖の北岸沿ひに可なり行つたところに稍小高く歐羅巴ホテルは立つてゐるのである。私はすぐに湖水に面した、小さつぱりした、二階の部屋に通された。支配人は私が部屋に落付くか落付かぬうちに、すぐに宿泊條件の談判を始めた。滿五日(フオレ・フユンフ・ターゲ)以上ゐればパンジョンにして幾らくで、滯在日數がそれ以下ならば室代がいくらか高くなる。食事は定食(ターブル・ドート)にすれば時間がきつちりきまつてゐるので窮屈だが安く、レストーランだと二フラン高いが時間のゆとりがある。どちら

でも貴君のいゝやうになさいといふ話である。結局滿五日ゐて、パンジョンで、食事はレストーランにすることにして一日二十二フランに決定する。その談判がすむと、貴君は獨逸語が旨いとか、貴君は才幹のある日本人だとか、御世辭には最も不向きな、かさかさした瑞西獨逸語（シュワイツァー・ドイッチュ）で御世辭を云つて置いて、最後に、貴君に私のホテルを推薦したのは何といふ方ですかとたづねる。誰にもきかないが、たゞベデカで見て位置がよささうだから來たのだと答へると、さうですか難有うと云つて彼はさつさつと歸つて行つた。まるで情味はないが、事務的に簡單明瞭だから、面倒がなくて休息には却つてこれも結構だと私は思つた。

支配人が歸つてから、ソーフアの上に身を投げかけて煙草をふかしながら、私は窓外の景色を眺めた。物古りた庭の木立を通して、小雨のうちに暮れて行く湖水と、對岸の雪峯ピラーッスとを見るのは靜かな心持である。庭の向ふに電車は通つてゐるが、それもがたがたした東京式騷音をたてゝ、氣分を紊すほど積極的に活動してゐるのではない。ホテルのうちがひつそりして、まるで誰もゐないやうに見えるのは、滯留客が皆散歩に出て、まだ夕飯に歸つて來ないためであらう。私は此處に來て漸く美術品から解放されたことを喜んだ。閒よりそれに代つてニイチエとワグナーとのことが新しく私の頭を占領し始めたが、それもこの自然の中に包まれた人事の一片として、やゝ甘くセンチメンタルに自分の心に訴へて來るのみである。私は曾てフェルスター・ニイチエ夫人のニイチエ傳で讀んだ「トリプシエン」の一章を心の中で復習し始めた。

ニイチエは千八百六十九年の五月十五日、聖靈降臨祭（フィングスト）前の土曜に、テルスプラッテ（ルツェルンから云へば湖を縦に貫いた對岸L字の底邊にあるヰルヘルム・テルの遺跡）で休暇の兩三日を送すために、始めて四林湖畔に來た。ルツェルンで彼は、去年の秋ワグナーから受けた招待に従つてトリプシエンの隱栖を驚かすべきか否かを考へた。それは美しい春の朝であつた。まだ孰れとも決し兼ねながら、彼はピラーッスの麓、四林湖の湖畔、湖と山との靜寂の中に閉まれてゐるト

リプシエンへの途を歩いた。別墅の前で立とまつて、彼は幾度か繰返される苦しさうなアッコルドをきいた。丁度庭から出て來た下僕にたづねると、主人は二時までは仕事の時間で面會を謝絶してゐるといふことだつたので、彼は名刺を渡して歸らうとした。併しワグナーは曾てライプチヒで、その妹ブロックハウス教授夫人の許で逢つたことのあるニイチエ教授ならば是非晝食を共にしたいと門前の客を呼び込ませた。不幸にしてニイチエはテルスプラッテでそれをする筈の約束があつたのでこの招待を斷はらなければならなかつた。こんなにして彼は、翌々十七日に始めてワグナー夫婦の客となり、その後一生を通じて彼の唯一の回想ともなり苦惱ともなつたあの「星の友情」が結ばれるに至つたのである。このときニイチエは新任匆々のバーゼル大學教授で、まだ二十五才の青年に過ぎなかつた。これに對してワグナーは五十六才、彼の世間に對する勝利はまだ十分に確實とは云へぬながらに、社會的家庭的に既に幾多の波瀾を凌いで來て、その友人ハンス・フオン・ビユローの妻コジマとの數奇な戀が漸く結婚によつて解決されようとしてゐるころであつた。――

夜になつて食堂に出ると共處で話されてゐる言葉が殆んど悉く英語であることが少しく私の夢を醒した。食後湖畔を散歩するとき、左斜に見えるビユルゲンストックの頂上まで、ケーブル・カーと山上のホテルとの電燈がピカピカしてゐるので、私の夢は又少しく醒された。私の求めて來たのは、ニイチエとワグナーといふ二艘の數奇な船が錨を並べて停泊した太古のやうな山中の港で、全歐羅巴の盛り場ではなかつたからである。併し私の注文が無理なことは、私自身がよく承知してゐた。十九世紀の中葉、ニイチエが最初に其の土地を踏む十餘年前に、既にトルストイの「ルツェルン」が書かれてゐる以上、二十世紀ももう四半世紀に達しようとする今日、それがこれほど開けるのに何の不思議があらう。寧ろ私は私がこの土地のセーゾンに來合せて、もつともつと「ひそかにして囂しい」英語に耳を聾する必要がなかつたことを感謝すべきである。私は湖畔の闇の中に立つて、岸に囁く水の音に、人工に汚されぬ自然の靜けさを聽き得ることを喜んだ。その夜の私の寢心地は、流石にミラノのホテルのそれとは異つてゐた。それは更けるに從つて山氣が窓近く迫つて來ること

を感ずる者の寢心地に相違なかつた。

3

翌二十日の朝、私はトリプシエンを訪ふために昨夕の途を逆に歩いた。丁度日曜だつたので——考へて見ると私が此處に來たのも、ニイチエと等しく五月の土曜だつたのである。ただ私は彼より日數にして四日遲かつたが、恐らくニイチエが最初に見た四林湖畔の風光も、私がこの時見たところと同じ色同じ空氣の中に包まれてゐたであらう——湖水沿ひの並樹道には人の往來が賑かだつた。七十年前にトルストイを憤慨させた瑞西館波止場(シュワイツァ・ホーフ・カイ)の眞直な道を通り拔けてゼーブリュッケを渡り、停車場の前を通り過ぎて、私は矢張湖添ひの道を行つた。併しその道は汽車や船の工場らしいものが續いてゐる間を暫く進んだあとで、結局丘の麓で行詰つてしまつた。幸ひに其處に犬を連れた一人の紳士が出て來た。その人にきくと、ワグナーのゐた家はこの丘の陰に當るが、道はずつと向ふから廻らなければならない。それに今は閉ぢてゐて人には見せないといふ。併し私はそれであきらめてしまふ氣になれなかつた。せめて彼等の歩き馴れた道だけでも歩いて見るつもりで、その人と連立つて引返しながら、道々獨逸の話をした。その人は、獨逸人は勤勉で仕事好きないい國民だが政府の失政が彼等を今日の羽目に陷れたのだと云つた。人民を自分の奴隷視し、自分を神授の權力ある者と考へたカイザーは氣違ひ沙汰(フェアリュックト)だと云つた。又、自分は東京に兄を持つてゐるが、彼は十五年間其處にゐて、その間に政府も人民も大變よくなつたと云つてよこした、自分も半年ぐらゐの豫定で訪問に行きたいと思つてゐるなどと云つた。その人と別れて停車場の近くから次第に高くなつて行く丘の道に出ると、左手に廣い空地があつて、其處に雛菊や名を知らぬ小さい紫の花やキンポウゲに似た黄色い花が丁度暗紫色の穗を出したばかりの雀の稗にまじつて咲いてゐる。皆日本にある野の花のたぐひである。私はこの空地を越して、五月の午前の日光の下に輝く四林湖の藍碧の水色を望みながら、ニイチエのことを思

つた。彼がワグナーをたづねて停車場からトリプシェンに急ぐころには、この廣い、新開らしい道はなかつたかも知れない。同時にこの道と湖との間に挾まる工場らしいものもなかつたであらう。兎に角彼はこの邊を幾往復しながら「悲劇の誕生」を一部分とする古代文化の問題とこれを將來に投影する人類未來の運命の問題を、張詰めた心で考へてゐたであらう。—その廣い道をのぼりつめれば道は左右にわかれる。湖の方に向いた左の道に折れると、それは木立の間に狹められて、昨日の雨の名殘りか、處々まだ泥が乾かぬ木蔭の里道であつた。ルツェルン市の公式の告示として、某の請求によつて、彼の不動産（リーゲンシャフト）に近づき又は踏入る者は若干の罰金に處せらるべしと書いた立札が、路傍の處々に立てられてゐる。私はこのうるさい立札に、百五十年前ゲーテが感じたやうな、瑞西人の小市民的根性を見るやうな氣がして眼をそむけながら、さつき下から眼をつけたギラの邊まで行つたが、其處で夫婦の英吉利人がその邊をまごくしてゐるのに逢つた。彼等はワグナーのゐたうちを知らないかと私にたづねる。人の話によると多分この下の邊だらうと思ふが、どれだかわからないと私が答へると、さうかと云つて彼等は歸つて行つた。併し私は猶あきらめずに、百姓の納屋めいた物の見える下の道に降りて見ようとしてゐるとき、丁度其處に、豚か鷄に餌をやりに行くらしい百姓が出て來た。武骨らしい顔に少しく笑を見せて、ワグナー・ハウスはこの衝當りになると教へて呉れたのはこの男である。成程、丁度突當りの右手にある田舍家の奥に、門を鎖したギラらしいものが見える。鎖された門の前まで行つて見たが、其處には無論ワグナー居住の地などといふ標示はなく、ただ「この家は私人の所有につき入るべからず」と書いてあるだけであつた。而も門口にある田舍家には Warnung vor dem Hunde!（猛犬御用心）とさへ書いてあつて、實際一匹の犬がその邊をのそくしてゐたのである。あまりにケチなやり方に腹を立てながらも、私は鎖した門の柵の間から奥の方を覗いて見た。門のところから相當に長い間鈴懸の並木が立籠いてゐる。それは小枝を刈り込んで幹をずんぐり肥らせて、枝のところには瘤々した瘤の出來てゐるやうなものであつた。このとげくしたものは、多分ワグナーが住んでゐた時分の並樹ではないであらう。この並樹の奥

に、私は僅かに白つぽい建物の玄關を見ることが出來た。ふと氣がつくと、前の田舍家からピヤノの響が洩れて、若い女の唄ふ聲がこれに伴つてきこえて來る。併しそれは新しい旋律と和聲との産みの苦みに、繰返し試みられる音とはまるでちがつたものであつた。秀麗な自然の靈氣を除けば、創造者の偉大な精神は、もうこの土地に殘つてゐないのである。

兎に角ワグナーの家を發見し得たことに滿足して、私は歸路に就きながらその邊の地勢を見廻した。それは四林湖を縱に見るので湖水を廣く見ることの出來る一角にある。それに湖岸の上下の鼻が左右から出て、この縱長い湖水の眺めに横の變化を與へる。雪をいただく高山は正面にも左横にも背後にも聳えて、ルツェルンの町は右手の丘に隱されて見えない。さうしてこのやうに秀麗で高峻で而も窮屈ならぬ自然の間に籠り隱れてゐる一帶の土地は、斜なる草地をなして、その間に相應の大木が處々に蔭をつくつてゐるのである。自己に集中して仕事をしようとする人にとつて、これほどふさはしい隱栖は容易に發見し難いであらう。此處を、ワグナーやコジマやニイチエは、時としては一人一人、時としては二人、時としては三人連立つて、考へたり話したり默つて並んで歩いたりしながら、幾度か散歩したことであらう。あの丘の上を出つてからの木下蔭の里道は、確かに三人の足跡を印したまゝの道に違ひないと思ひながら、私は彼等の見た花の子孫が路邊に咲き亂れてゐるのを摘んだ。私は時々立留まつて振返りながら、立札や門の制札のことを忘れて、一時頃ホテルに歸つて來た。

私はこの美しい風光の中に、それに相應しい人達が住んでゐた時代を想像するために、フエルスター夫人が兄と共にトリプシエンを訪問した最後の夕の記事を附記する。年は千八百七十一年で、時は矢張春のことであつた。

――「太陽は沈みかけて、圓く澄んだ月はもうテイトリスの照りかへす雪原の上に懸つてゐた。太陽の光が次第に蒼白い月の光に處を讓るままに、湖も、あの繪畫的な姿をした輪廓の鋭い山々も、次第に柔かに靄がかかつて而も透明になり行くままに、吾々の生々してゐた會話は途切れた。吾々はみんな夢見心地な沈默の中に沈んだ。

「吾々四人（實を云へば五人）はすぐ湖沿ひを通ふ所謂ロイバーヌーヒを歩いてゐた。最先にはコジマ夫人と私の兄と――コジマは淡紅色のカシミヤの着物を着て、それには、幅廣な、着物の裾までも屆く、本物のレース緣がつけられてゐた。その腕には、淡紅色の薔薇の花束をつけた大きいフローレンツ帽がかけられてゐた。彼女のあとには、巨大な眞黒な、ニウフアウンドランド種のルースが、勿體らしく重々しくお伴をして、それからワグナーと私とがそのあとについた。ワグナーは和蘭風の畫家服を着てゐた――黑の天鵞絨服、黑繻子の半ヅボン、黑い絹靴下、空色繻子の頸結は豐かな褶をとつて、その間に感じのいゝリネンとレースとを交へ、その當時まだ多かつた褐色の髮には美術家頭巾をかぶつてゐた。光が木の間を洩れてそれ〴〵の姿の上にどんなに落ちたか、私達が言葉なく歩みを運んで銀色に輝く湖水をどんなに眺めやつたか、私はまだ鮮かに眼に見るやうに思ふ。私達は打寄せる波の柔かな囁きに耳を傾けた。この甘美な單調な旋律は、恰も魔角（ツァウバーホルン）の響のやうに、それぞれの人に彼自身の思想の歌を聽かせたであらう。

「私達の漫歩の目的地は隱者の庵であつた、一つの樹皮葺の小屋であつた。それはこの領閾の最も高い處にあつて、殆んど畫のやうに明るい月光の中に、遙かに湖とこれを取圍む山脈との得難い眺望を開いて見せたのである。――次第に沈默の咒（じゆ）は破られた。ワグナーとコジマと私の兄は、人間生活の悲劇について、希臘人や獨逸人について、又多くの計畫や願望について話し出した。私は、この三人の、あれほど性質が違つた人達の會話に、これほど一致した不可思議な諧鳴を發見したことは、前にも後にも一度もなかつた。各の人は彼自身の音符と彼自身の主題とを持つてゐて、全力を以てそれを強調した、而も猶何といふ莊麗な調和だらう！この特異性ある人達の凡てが、彼自身の高みに立ち、彼自身のかがやきに照つてゐた、而も猶何人も他の光を妨げることがなかつたのである……」

吾々はフエルスター夫人のこの記事に、對話の內容に觸れぬ感激の聲を聽く物足りなさを感ずる。併し當時二十五才に過ぎなかつた少女がその崇拜する兄と偉人夫婦との間に立つて、四林湖畔の月光に醉つてしまつて彼等の語るところを記

億してゐる餘裕がなかつたことを咎めることは出來ない。更に角トリプシェンの言葉にこの二人の世界史的人物を立たせた一場を腦裏に描き出す補助手段として、この一節を抄出することは決して無用ではないであらう。

4

トリプシェンから歸つて晝食をとつてゐると、空が曇つて來て一寸雨がぱらついた。その後も照つたり曇つたりして夜に入つた。二十一日も空に雲があつて、晝食のときに又ほんの一寸小雨を降らした。これは伊太利にはない天氣である。山上の國に氣象の變化が多いのはやむを得ない。

二十一日は登山電車で Gietschiberg（ギイッチベルクと讀むのであらうか）の柔かな丘陵を散歩した。この山のことはあとで書かう。二十二日は少し風邪の氣味だつたので、暫く湖岸を散歩したのみで、その他はホテルで本を讀んで暮した。安息が次第に身に沁みるに從つて氣分が感傷的（リユールゼーリヒ）になつて來るのは、孤遊の身にとつては避け難いところである。これは自分でも許し、他人にも許して貰はなければならぬ。

二十三日はいい天氣だつた。私はゲーテの跡を追つてアルプスの大觀を見るために、リギ・クルムに登つた。千七百七十五年の晩春、リリーに對する戀に苦みながら瑞西旅行に逃れたゲーテは、東の方シウヰッツから、四林湖の東北にあるロヱルツ湖を舟で渡つて、東口からリギに登り、南の方、丁度十字架の基底に當るフイッツナウに下つて、其處から再び船に乘つてL字の縱線の中央に當るゲルザウまで行つたのだつた。千七百九十七年秋の瑞西旅行に際して彼が四林湖を横つた途は、十字架の左腕の端スタンツから右腕の端キュースナハトに聯絡する横の線である。それを私は今、十字架の尖端に當るルツェルンから縱線に貫いてその基底のフイッツナウまで舟行し、ゲーテの降つた道を逆に、其處からリギに登らうとするのである。從つて私のとる途は、十字架の縱横が交叉する點に於いて一度、ゲーテのとつた舟路と交叉する。

さうしてフイッツナウで上陸してクルムに到着するまでの間、登り路降り路の相違はあつても、更に角再び重り合ふのである。

山上で食ふべき辨當はホテルで拵へて貰つた。九時五十分の汽船に乘るつもりで宿から出かけたのが、生憎それが休航だといふので、私は十一時三十分まで待つてゐなければならなかつた。私は待合室のベンチに腰をかけて、丁度ポケットに入れて持つてゐたゲーテの伊太利紀行を拾ひ讀みした。シチリアに渡る三月の船の中で、暴風に逢つて船暈に惱まされながらも、一切を忘れて「タッソー」の結構を考へることが出來たゲーテは羨むべきであるが、私は今ゲーテのやうに暴風雨の襲來を顧慮する必要を持たなかつた。五月の湖は青く晴やかに笑つて、戯れに小波を搖り動かしてゐた。空には雲もなく春の太陽が輝り渡つてゐた。時間が來て船に上ると、思ひがけず一人の日本人の顔が私に笑ひかけた。而もその一人は、嘗て偶然に羅馬のフオーロ・ロマーノで出逢つたO氏であつたのである。二度の奇遇に驚いて久濶を敍してゐるうちに、船は靜かに青い波の上に乘り出した。

船が十字架の上半ルツェルンの入江を進行する間、左の方には歐羅巴ホテル一帶の岸が柔かなギイッチベルクの丘陵を負うて横り、その右肩は今私の志してゐるリギ・クルムが六千尺の高さを以てこれを抑へてゐる。右はトリプシェンの低い丘の上にピラッスの峯が雪を載いて聳え、正面にはビュルゲンストックの峯を右に外して、四林湖の青い水が遙かに縱長に遠く開いて私達の行手を迎へてゐる。船が十字の交互點に近づくころ、振かへつてルツェルンの街の方を見ると、トリプシェンの岬の鼻に、高いポプラの並樹に圍まれた白い小さい別莊が、背後から私達の船を見送るやうに顔を出してゐた。それこそワグナーの隱地であつたのである。陸地の上では狹苦しく猛犬に護られてゐた彼の「農夫の家（バウアーンハウス）」であつたのである。さうして私の船脚がゲーテの舟路と交叉する邊に進めば、ピラッスの肩には、もつと奥に、もつと遙かに、もつと高く、エッター・ホルン、シュレック・ホルン、メンヒ、アイガー、ユングフラウ等一萬尺以上の高峯が次第に顔を出して

來るのである。空の青、日に輝く雪山の薄く赤味を帶びた白、今を盛りな湖岸の樹木の緑、さうして此等凡てを受けて、錯綜せる巖石に縁どられた積水の藍碧。それは日本の山水のやうにワイルドな趣を缺いてはゐるが、飽までも清く、美しく、朗かな崇高に輝いてゐる。さうして「東の方、水は峭峻な、暗く茂つた巖壁に包まれて、ゲルザウの鼻が僅かに湖の上部に通ずる通路を許してゐるやうに見える」（ゲーテ、「千七百九十七年瑞西紀行」）エッギス灣を行きつくして、私達は暫少し過ぎにフイッツナウに着いたのである。

私は其處でブルンネンまで湖水を横ぎるといふO氏の一行と別れて、一人で登山汽車に乘つた。海拔千五百尺のフイッツナウから六千尺のリギ・クルムまで四千五百尺の間を、車窓に身をもたせて左にあらはれる四林湖とその西岸北岸の山を眺めながら、一時間餘にして登りつめてしまふのはあまりに安樂に過ぎる。ゲーテが二時間余を費したカルトバートからクルムまでの道を、今私達は二十分で煙草一服の間に運ばれるのである。汽車が山巓に近く終點に達すると、同じ列車で運ばれた人達が三々五々隊を組んで眺望によささうなそれ〴〵の隅を占領する。それは丁度日本の花見氣分である。私も亦此等の人達にまじつて山上のホテルの背後の高みにのぼつた。さうして勿體ないほど樂な登山によつて、世界にも珍らしいほど美しい山上の眺望を恣にしながら、旺盛な食慾によつて美味にされた携帶の辨當を、頗るおいしく食ひ終つた。午後になつて雲が出始めたので、西南の方四林湖を越して遙かの空に列をなしてゐるベルン地方の高峯を、一つ一つ見わけることは出來なかつたが、雲の動くまゝに或ひは現れ或ひは隱れる山の姿と脚下の湖水の斷片とは、却つて縹渺の美を増して見えた。この日最もよく眺望が利いたのは、北に向つて獨逸のシュワルツ・ワルトのあたりを目路の限りとする方面であつた。それは私達の來た方向から云へば裏側である。午後の日は次第に西に傾いてそれは光が薄く陰になりつゝあつた。而もリギの嶺は正にその方に向つて急斜面をなして落込んでゐるのである。限りなく遠く薄白く續く雪の峯々は銀灰色の空に融け込まうとしてゐた。其處におのづから誘ひ去られる目を次第に近いところに移すに從つて、私は絶峻に脚下

に落して行く荒れた寂しいこの裏山の麓に、ツークの湖が小さく隠れてゐるのに氣がついた。私はこの風景を見て、曾て燕岳の曉に發見した北陸の山々の裏側を思ひ出した。此處では固より燕岳のやうに對岸の連峯を間近に見ることは出來ない。それは寧ろ限りのない遙けさと廣さとによつて私達の哀情を誘ひ去らうとする。併し其處に漂つてゐる寂しさに於いて、この二つの景色の間に親緣が結ばれてゐることを私は感じた。さうしこの氣樂に登つて來た瑞西の山の嶺に、日本流の「さび」を拾ひ得たことを私は幸福とした。

一停車場だけ歩いて三時過の汽車に乘るつもりで、私はクルムからリギ・スタッフェルまで徒歩で降りて來た。其處の停車場の茶店で繪葉書その他の記念品を買つて、汽車の來るまで賣子の娘と話をしながら、私はこの山上の生活が急に私の心に親しくなることを覺えた。彼女は一年中、冬も此處で暮すのださうである。學校に行くにはどうするときくと、學校はもう終へましたと彼女は答へる。學校に出てゐるころは、冬も歩いて下の村まで通つたさうだ。併しそんなに遠くはありませんと彼女は附け加へた。丁度高等小學を終へた十六七の年頃の娘である。彼女は美しいと名けらるべき娘ではない。顏には少しニキビが吹き出てゐる。併し山氣を帶びて新鮮な感じと、人なつかしげな樣子が私の感傷に觸れた。私はもう少し話してゐたかつたが、生憎下山の汽車が來て、私はそれに乘込まなければならなかつた。彼女は山中の少女らしく更紗模樣の前掛をかけて高山植物の深山薄雪草（エーデルワイス）を賣りに立つた。私は汽車に乘りながら、とまりがけに來ればよかつたと思つた。丁度三月月のころであるが、山上が晴れてゐれば月が素的だらう、假令月は霧に妨げられて見えないにしても曉の起心地が嘸よからうと、私は先年燕の小屋にとまつたときのことを想ひ起した。さうして山路の黄昏を歩いてこの茶店に立寄つて、時間構はずにこの山中の少女と話して見たかつたと私は思つた。それにつけてもゲーテがこの山にとまつた夜のことが思ひ出される。彼は此處から少し方角をちがへて、「雪中のマドンナ」の御堂に近く宿をとつたのだが、短い言葉に深い感じを込めて、彼はその夜のことを自叙傳の中にかう書いてゐるのである――「今や黄昏が來て次第に夜とた

るにつれて、物悲しく諧調をなす物音が私達の耳についた。御堂の鐘の響き、井水のはねる音、様々に吹くそよ風のそよぎ、遠方の號角(ワルトヘルナー)——それは心を穩かに、安らかに、うまゐに誘ふ折からであつた。」

併し乘り込んだ汽車の中は、込み合つて賑かだつた。中で娘二人を連れた西班牙人の夫婦が私の眼についた。姉娘の方はもうジャケツの下から二つの胸のふくらみが見わけられる年頃だつた。妹はまだ脚を出した短い着物を着て、ふつくらした餅のやうな肌を惜氣もなく露出してゐた。父が子音の多い獨逸語を可笑しがつて眞似をすると、姉娘が特にくつくつと笑ひ轉げる。妹の方は大人しやかで顏も美しく、姉の着物の裾がまくれるのを氣にして時々なほしてやつてゐた。一體の樣子が曾てフィレンツェの旅舍で私の目をひいた西班牙の娘達に酷似してゐて、スペイン流の生々しさ(レベンディカイト)と戯謔氣分(シャルクハフティヒカイト)とに興味を感じさせた。併しかういふ人達とも、汽車の中の一時間を共にしただけで、行方も知らず別れてしまふのである。

ルツェルンのホテルについたのは六時、夕日の中を歸る船上の眺めは美しかつた。

5

一人旅の樂みの一つはホテルの食堂とサロンとである。一人默々として食事をとりながら室内を見廻してゐるうちに、嬉しさうな一族のまとゐ、美しい人、變つた人間がおのづから私達の心にとゞまる。さうしてサロンで音樂をききながら煙草を燻らしてゐると、一人旅の日本人が珍らしいらしく、二三日ゐるうちには乾度向ふから話をしかける人が出て來る。こんなにして私達の間には淡い馴染と淡い別離の哀愁とが生れて來るのである。一日の見物から歸つて來て食堂に行くと、お互に眼で挨拶してゐた美しい人の一團が見えなくなつて、その食卓には見知らぬ武骨爺が坐つてゐることもある。愈々出發する段になつて、住處や其處に行く道を書きつけてくれて、私の町に來たら是非たづねて來るやうにと、握手して別れて行くのもある。ルツェルンは心に殘る邂逅の最も少かつたところであるが、それでも私は、リギから歸つた

日の晩食に、食堂に一つ穴があいてゐることを發見した。

ルツェルンに着いた翌日、晩食後サロンで音樂をきいてゐると、二人連れの若い女が私の側に來て腰をかけた。彼女達は英語を話してゐた。彼女達は私と話をしたいらしく、そのうちで稍美しい方の一人が今夜の音樂のプログラムをあけて今やつてゐる曲の名を私に敎へてくれたりした。併し其處に無遠慮に高笑ひするアメリカ女の四人連が來て、私達から對話のきつかけを奪つた。さうして一日を隔てた廿三日の晩食には、彼女達の食卓にはもう他人が坐つてゐたのである。流石に少し寂しい氣持をしながら、私は食後サロンのヹランダに出て、庭の木立を洩れる三日月を見ながら音樂をきいてゐた。不圖私の前に立つて How are you ? と音樂をかける男がある。もう五十を越したらしい、顏の蒼白な、英吉利の紳士にしては少しく容儀の備はらぬところに却つて貫が見えるやうな男である。私が Thank you, very good. と答へると彼は私の傍の籐椅子に腰かけて話を始めた。彼はロンドンの醫師で少し體の具合を惡くしたので妻と(その妻もあとでやつて來て私達の話に加つた、彼女は夫に較べて大變若かつた)大陸に遊びに來てゐるのだつた。彼は始め私に、貴君は支那人かシャム人かとたづねたから、私は日本人だと答へた。彼は、成程さうでせう、私は最初から日本人だと思つたから「如何です」と聲をかけたのだと旨いことを云ふ。How are you ? が日本人を意味するのは初耳だと、少し皮肉の微笑を含んで話してゐるうちに、彼は到頭、私達には日本人支那人シャム人を見わけるのが甚だむづかしいと白狀した。この夫婦はその翌晩も私を捕へて、遂に彼等の私宅まで私を連れ込んだ。話してゐるうちに、夫の病氣が夫婦二人の不幸になつてゐるらしい樣子を私は見た。この老人は熱心な切手の蒐集家だつた。私は丁度日本の友人が送つてくれた日本の古切手のうち大半を彼の蒐集に寄附した。私はお互に好意を持ちあつて翌日彼等に別れを告げた。

併し私の人を見ようとする興味は、此處では、かういふ平凡な同宿者との交渉よりも、寧ろ食堂で働いてゐる男女の召使の上に集つた。ガルソンのうちに、眉毛から何からあらゆる毛のブロンドな、赤ら顏の醜い青年がゐた。私はこの男の

及び腰に歩く恭しい恰好と、笑ひ顏の中に輝く要求のない善良さとに愛を感じた。彼は私を教授、教授と呼んでゐたが、その言葉に何處か特別に響くものがあるので、一日食事をしながらその身分をきいて見たら、彼は果して大學生であつた。彼は働いて學資を得るために、その貧乏な祖國墺太利から態々此處まで働きに來てゐたのである。この事が彼に對する私の同情を增した。廿五日此處を立つとき私は彼に少し餘分のチップを握らせやうとした。併し彼は大學生らしくこれを受取ることを固辭した。ホテルの規則によつて禁ぜられてゐぬ以上、歐羅巴のホテル使用人で與へられたチップを辭退する者は、私が嘗て見たことのないところである。私はこの男とも亦名殘を惜んで別れた。

私は又女給仕の一人に注目した。二十一日トリプシェンから歸つての晝食に、前の食卓で皿を差出してゐる彼女のうしろ向の腕が不圖私の目をひいた。肉の引締つた細い腕には白金茶色の生毛が生えてゐた。私はこの腕の輪廓に、謙遜と眞面目と庶民に屬する者の哀れさとが潜んでゐるやうに思ひながら、彼女が正面向に顏を見せる時期を待つてゐた。待ち得てこれを見れば、それは長くて、平ぺつたくて、血色のいひ、日本でも往々見受けるやうな長重箱式の顏である。彼女はその顏を、働くことに夢中になつた人のやうに、稍上氣して赤くしてゐるのである。不愛相と見えるほどに眞卒と集中とを持つた顏である。この類の顏は、笑ふときに本當に「破顏」とも云ふべき朗かな相好を見せるものであるが、この女も確かにその部類に屬してゐるであらう——私はかう思ひながらそれとなしに注意してゐた。果然、彼女はその後私の食卓の前に來てその笑顏を見せた。客が何か云ふのを、始めのうちはわからずに生眞面目な顏をしてゐる。さうして漸くわかつて來ると、靑天の霹靂のやうに、その生眞面目な相好を崩して、彼女は後ればせに笑ふのである。此處にゐる間、英米の淑女以上に、彼女の顏は私の食卓の樂みであつた。併もこの興味は固より當人に通ずべき性質のものではない。私は默つて彼女の表情を愛して默つて彼女と別れた。

6

五月二十四日の日記から

「最初の豫定に從へば僕は今日此處をたつ積りだつた。併し昨日リギ行で一日を暮して今日たつてしまふのは、僕の物見高さから云へばあまりに惜しすぎるので、もう一日ゆつくりしてルツェルンの名殘を惜みたさに、出發を明日に延期した。今日はまた晴つた空である。朝八時半、又ディッチベルクの柔かな草原や森の中で一日を過すつもりで登山電車の停車場まで行つたが、それが運轉を始めるまでにはまだ一時間もあることを發見して、僕は歩いて山に登つた。雪の山が雲に隱現する。湖水は下の方に鈍色に靜に横つてゐる。咲きの盛りの草花の上を、知れぬほどに風が渡つて、蟲がその間に頻りに鳴いてゐるところは、日本の初秋を思はせる。道で行逢ふ人が grüss Gott と云つて挨拶するのは、既にベルリンでも氣がついたやうに、この國の人の習はしなのであらう。廣い草原を横ぎり、小さい森をぬけて、木影に隱れたベンチの上で煙草を一本ふかしてゐると、向ふの方に、雪山を望む美しい草原があることを發見した。其處で持つて行つた「伊太利紀行」を讀まうとしたが、見れば雲が濃く重り合つて、ピラーツスの右手の山々がもう雨に包まれてゐる。降つたら雨を避ける家か木陰のあるところまで行かうと思つて僕は又歩き出した。草原の斜面を左に見ながら、森の一隅を通りぬけて、又草花の咲き亂れた道をのぼりかけると、もう少し雨が落ちて來た。幸ひ其處を僅かに上ると大きい樫の並木が蔭をなして居る道に出ることが出來る。僕は其處で木蔭をあちこちと歩きながら雨晴しをした。美しく滑らかな景色が日本の或部分を思ひ出させる。上林溫泉含滿ケ淵附近の草原、箱根の蘆の湯から笛塚鷹巣にかけての散歩道、秋草に埋もれた赤倉の高原、輕井澤から小瀬に行く山腹のうねうね道――日本の景色はもつとワイルドなところを持つてゐるとは云へ、瑞西のこの風光をそのまゝ日本に持つて行けば、吾々は浴衣がけの脛もあらはに、下駄を穿き、棒のやうなステッキを持つて自

由に歩き廻り寢轉ぶことが出來て、行き合ふ人の視線に對しても、今のやうに神經質ではないであらう。從つて雪山の莊嚴も湖光の清明も、草花の愛らしさも蟲の音もそよ風も、もつと深く吾々の胸に喰ひ入つて來るであらう。美しいものが日本にゐるときほどに沁み込んで來ないのは、その美しさが少いためでもない、土地の人が不親切だからでもない、吾々がこの土地にとつて異邦人であるといふ意識、この土地が吾々にとつて異人の邦であるといふ意識――常に客であるといふ意識を離れることが出來ないからである。客愁、旅愁――それはそれ自身に於いて一種の深い心持である。併しこの氣持が客中の風物と吾々との間に、常に一種の親み難い、落付かぬ情調を造り出して來る。この情調なしに自然と――吾等の自然と觀面に親みたい。自然の美しさの中にゐるにつけて、旅の寂しさと客愁とが、又胸の底に湧くことを如何ともなし難い。

雨の晴間に山上の停車場の方から、女の子の一隊が歌ひながらやつて來た。約そ十ばかりの年頃の子供達であらう。二三人の尼に引率されてゐるのである。丁度彼等が私の眼の前のスロープにかかつたときに雨が又降り出したが、彼等は平氣で草花を摘みながら下つて行く。中で一番大きい十三四の二人は、一番あとに殘つて摘み集めてゐる。老年の尼が持つて來た傘をひろげて傍にゐる一兩人をその下に入れたが、他の子供達は何とも思つてゐない樣子である。雨が一頻り劇しくなると、ジヤケツを頭から被る子も出て來たが、さつき僕が煙草をのんだ木陰のベンチに辿りついて暫く其處に塊つてゐたあとで、雨が上るといつの間にか低い森の中に姿を沒してしまつた。

自分も亦歩き出した。通り雨の大したものにならぬことと竊かに恐れてゐた雷の來ないにきまつたこととを見たからである。僕は又さつき見て置いた草原に戻り、雪山を見渡す方のベンチに腰をかけて、伊太利紀行を讀み出した。さうして時々煙草をふかしながらぼんやり遠くを眺めたり、立上つて、森の緣をぬひながら草花の多いスロープをめぐつて行く小徑を歩いたり、草をしいて横になつたりした。その間自分の前を通つたのは女の二人連、自分の眼に映つたのは、向ふの

草原を散歩する男の二人連だけであつた。

正面にリギの山が見える。だんだらをなした斷崖の雪の上に見えるのはホテルである。嶺の輪廓を傳つて少し降りて來るとそれが平になる。其處に昨日暫く話をした少女の家がある譯である。彼女は今日も亦、汽車が停る毎に深山薄雪草の花を賣りに出て、それが通過すると前のテラスに立つて遙の下に見える湖水とルツェルンとの方向を眺めてゐるであらう。自分はかういふ山中に育つ少女の戀の運命を思つた。近處に似寄の年頃の男がゐれば、朝夕これと接觸してゐる間に、二人の間に戀が成立つことは、殆んど定められた運命であらう。他に選擇の對象を持たぬ男と女とは、きまつてお互に選び合はずにはゐられないであらう。併しあの山の中に育つ者のうちに、好惡な男は恐らくゐまいから、この限られた選擇は彼女にとつて必ずしも不幸ではあるまい。寧ろ幼い時から根を組み合つた(フェアワクセン)二つの心は微妙に親み合ひ信じ合つた緣を結ぶであらう。彼女にかういふ緣が與へられんことを心に祈る。併しリギの山はまだ淺い。單に「都」の人だけではなくて、世界中の人が此處に往來する。彼女が若し美しかつたならば、彼女を摘んで都に移さうとする者、若くは彼女を摘んで又捨てゝ行かうとする者の眼を脫れることは出來ないであらう。この時山に育つて山を出た者の悲劇――一種の鄕土藝術――が生れて來る。特に人少い處に住む者のなつこさや廣い世界に對するあこがれが、豐かに誘惑の機緣を與へるであらうから。――自分はリギの山を見やりながらこんなことを思つた。恐らくこれも亦自分の絕えず感じてゐる客愁の投影であらう。

歸りに又徒歩で山を下るとき、道の岐れ目に手車を置いて、お婆さんと一緒に木陰のベンチに休んでゐる少女を見た。彼女は兩手をうしろにやつて栗色の髮をいじりながら、僕の下りて來るのを見て Grüss Gott と挨拶した。ルツェルンは世界の盛り場である。この世界の盛り場の側にも、手車をひいて山坂を上つたり下つたりしながら、貧しい一生を過さうとする若い娘がゐるのである。自分は鎌倉の漁村や箱根の山道を通るときのことを思つた。さうしてかういふ處に住む娘

達が吾々に與へる一種特別の哀情を、運命の不思議に對する淚脆い感傷を、感じた」。

二十四日山から歸つてかういふ甘い日記を書き終へたとき、夕暮の庭樹の上に本式に雨が降り灑ぎ、ピラーツスの方から本當に雷が鳴り響いて來た。雨は一夜降り續いた。明くる廿五日も曇つて雪の山が見えなかつた。私はその日の午後一時二十分の汽車でチウリヒに立つた——其處に一夜を明かして翌日キーンに向ふために、チロールの長い峽谷を通つて荒廢せる墺太利の都に、又新しく美術品の鑑賞を始めるために。

最後に私は二十五日の朝出發前に書きつけた日記を附記してこの文章を閉づる。それは私が旅行中に甘くなつてとろけてしまつたのではないことを示すためである。

「ルツェルンの日記のおしまひに二つの洒落を書いて置く。

一、リギに登つたとき、レールの側に雪があつた。右側にゐる亞米利加人の夫婦は snows! と云つて立上つて外をのぞいた。左側にゐる獨逸組は schnee! と云つて窓から首を出した。それがあべこべだつたら現在の世界の事情にふさはしかつたらうに。（この洒落はスとシとを混同する東北の人間にでなければ通じない）。

二、鏡を見て、成程吾々の眼は、西洋人には釣上つて見える筈だと思つた。自分の眼を少し誇張すると、ブラッキシテレスのサテイルの眼になる。併しあのサテイルの眼に笑を含ませるとモンナ・リザの眼に甚だ近いものになるだらう。多くの人はこの事に氣付くまい。これは僕の新發見である」。

海外近事

英國自由黨の黨費問題

この文が世に出る頃は丁度、わが國における普通選擧が第一回の試練を終つた計りの時である。そこで今回は重に海外の選擧に關することを書いてみよう。

最近、英國の政界で最も問題になつたのは、自由黨の黨費と、これを保管して居つたロイド・ジョージ君を中心にする問題である。誰も知るやうに英國は憲政政治にかけては世界の草分けだけあつて、選擧に干渉や買收は絶對に行はれず、またそんなことをしたら國民自身が承知するものではないが、併しポスターやパンフレットにお金が要ることは、日本も英國も變りがあるものではない。一黨の頭株は矢張りこれで苦勞してゐる。

その大切な黨費をロイド・ジョージ君が多額に保管してゐるといふことが、餘程前からの噂であつた。自由黨が悲境のドン底に陷つてゐる頃は、これも餘り問題にならなかつたが、近頃大分勢力を盛り返して來たのを見た反對黨は、そろそろこれを問題とするやうになつて來た。その金はロイド・ジョージ君が卑劣な方法を以て集めたとか、或は暗い目的のために使つたとか、好ましくない噂をたてたものがある。かうした問題については、英國などでは決して後暗い立場を許さない。ジョージ君も始めは默殺してゐたが、今年の始めになつて憤然としてステートメントを發表した。

ステートメントには相當激しい言葉を使つてあるが、それによると同君が總理大臣をして居つた頃は、英國の内閣は保守黨と自由黨の聯立で、院内總理も無論二人あつた。この政府黨の立場を利用して『過去百年餘の間實行して來た方法によつて』政黨の黨費を集めたのだが、このやり方は自由黨も保守黨も少しも違つたことではない。そしてその金は黨費保管委員が保管して居つて、自分は一錢といへども自から取扱つたことはないといつてゐる。

こゝで問題になるのは『過去と同じ方法』といふのは何であるかだが、これは英國では毎年一回づつ國家の功勞者に對して爵位や敬稱（例へば卿といふやうな）を與へる。その時に金持などは相當にこの黨費を寄附するのであつて、ジョージ君もこの點は暗に承認し、たゞかれは『その推薦は全く院内總理に一任した』ことを述べ、チエンバレーン君や死んだボナー・ロー君（何れも保守黨）の演説を引照してゐる。

ロード・ジョージ憤慨す

自由黨がかうして集めた金が何れぐらゐかは發表してゐないが、今現に千萬圓は越してゐるらしい。ジョージ君の機關新聞であつたデイリー・クロニクルなどにいはせると『自由黨のこの黨費が增したのは、その利用宜しきを得たからである。即ち新聞社に投資してそれが儲かつた』からであつて、先頃その新聞の株を賣つて增加した黨費は更に新しい管理

委員に對し、それが收支は立派に發表してゐるといふのである。

それでは從來、黨費は何に使用して來たかといふと、ロイド・ジョージ君のステートメントには左のやうにあげてゐる。

(イ)總選擧が何回もあつたが、これに對して資力の不自由な候補者に金錢的援助をした。

(ロ)石炭産業及び農業の狀態を調査するために、人を國內、國外に派遣し、これ等の調査費が要つた。

(ハ)國の內外の産業について徹底的に調査した。

(ニ)選擧區に對して以上の調査の結果を遺憾なく知らしめた。

(ホ)傷軍人その他の不幸な人々にして、絕えず事情を訴へて來る者があるので、これがために事務所を開いてその費用に使つた。

以上がその黨費の使途である。かれは更に續ける。『下等な、卑劣な、醜惡な連中が、密かに下らない風說を流布してゐるのでなければ、私はこんなことを云ひたくないのだが、私はこの黨費に對し一文と雖も、私用に供したことのない事實を、こゝで聲明しておく。私は總理大臣をやめてから、新聞記者(チャーナリスト)として私の生活費を得て居る。そして私はこの職業が相當に成功してゐることを喜んで告白する。私の文章は世界の殆んど總べての大國に現はれてゐる。これから來る過去四ケ年間の收入は、在官十七ケ年の總計よりも餘程多いのである。かくの如きことを書くのは隨分非常識のやうだが、卑怯な醜漢があつて、蔭口を利いて居るに顧みて、まことに已むを得ざるに出づるのである』

自分のお臺所のことまでさらけ出すのは、流石に英國の政治家である。これは昨年の八月にジョージ君がデイリー・クロニクル新聞の株を三千萬圓ばかりで賣つて、その直ぐ後でロンドンのアヂソン街に住宅を買つたので、政敵の疑ふところとなつたのも一原因である。『黨費は一文と雖も私しない』といつたのは、からした流說に對する答へである。

米國上院議員の收賄說

同じ頃、議員にからまる收賄事件が米國でも問題となつた。事の起りは米國で黄色紙を以て有名なハースト系の新聞が、メキシコ政府の陰謀と稱するものを素破拔いたに始まる。メキシコ政府がボルシエビキ政府と相通じて共産主義的活動をして居る事、また日本と秘密條約を結んで、合衆國の利益を覆がへすやうな陰謀をなして居り、更にニカラガ國の革命政府は同國の運河權(太平洋と大西洋とを通ずる)をメキシコと日本へ讓渡する計畫があるなどと盛んに書立てたものである。

ハースト系の新聞は信用こそないけれども米國において發行高においてこれに及ぶものがないほど有力で、殊にこの事件には非常に力を入れて、秘密文書の原本といふものを寫眞版にして國內二十六個の日刊新聞に出したのだからたまらない。米國では相當な問題になり日本政府に對しても『何故辯明しないか』などと親日家から催足があつたほどである。

同紙の記事は更に進んで、『メキシコの大藏大官は大統領カイエスの旨を受けて、米國のある上院議員に百二十萬ドルを贈つた』と書いた。その誰であるかは明記してなかつたが、怒つたのは米國上院で『これは上院全員の信用を傷つけるものだ』といふので、早速

特別調査委員會を作り、リード君を委員長として調査に着手した。

暫らくするとハースト系新聞はその收賄したといふ議員の名をあげた。それはボラ、ノリス、ヘフリン及びラフオレツトの四君で、米國でも非妥協的と清廉を以て鳴る人々である。世間でもこの名前を聞いて却つてその記事を信用しなくなつたが、何れにしてもメキシコとの國交のため、又上院の名譽のため徹底的な調査を必要とする旨をどの新聞でも書いた。一方上院では各關係者を召喚し、調査を進めたが、その結果秘密文書といふものも、まるで噓のものであることが判明した。これより先きハーストは自から證言臺に立つて『メキシコ政府の公文書の中から引きぬいて來たもので、わが社ではこれに對し一萬六千ドルを支拂ひました』と鼻高々と述べたが、世の中には上に上があるもので、ハーストがうまく僞物を掴まされたものであることが證明されたのである。

米國を神様のやうにいふのは元より當らないが、併しその輿論は公人に對しては極めて嚴格だ。田中首相に對する機密費事件なども、あれが米國であつたら首相自身が根本的に身の證しをたてるであらうことは明白である。

選擧費を使ひすぎて失格

序でに今一つ米國の上院で、選擧費を餘計費ひすぎたが故に、議員たるの特權に座し得ない話しをして置かう。米國の選擧法には日本のそれと違つて、選擧費用の制限などはなく、それは個人の常識に任してをくが近頃選擧費は中々澤山いるやうになつた。現にペンシルバニア州のヴエアー君は共和黨から上院議員に立つたが、豫選において約七十八萬五千ドルを使ひ（尤も此は他の候補者の費用も合せてだが）更にイリノイ州のスミス君は同じ豫選で四十五萬八千七百二十ドルを費つた。

何でもドルで數へたがる米國だ。『一萬ドルの年收しかない仕事をとるために、五十萬ドル近くも使ふのは何事だ』と當時から大分な批難があつたが、それにかゝはらずこの二人は愈々當選し、正式な手續を經て、目下開會中の米國議會にやつて來た。ところが玆に問題が起つたといふのは、上院の多數の間に『かゝる金を以て議員の席を得たものは、上院議員たることを拒絶すべし』といふ議論が沸騰したことである。

そこで上院は『この新來の議員當選者に對し、議席を與ふべきや否や』を投票に附した。その結果はスミス君の方は五十三對二十八、ヴエアー君の方は五十六對三十で何れもその議席獲得を拒否したのである。拒否した理由は『多額の金を費消したことは調査委員會の調査によつて明らかで、かくの如きは上院の體面と名譽を穢し、自由政府の恒久性に危險である』からこの決議をするのだといふのである。

この上院の處置については今や憲法上の問題になつてゐる。一の議論は『ある州が正當な手續きを踏んで、その州の代表者を上院に送るのに、上院は何の權限があつてこれを拒絶するのだ、それは州權を蹂躪するものだ』といふのである。これに對して『上院は腐敗政治を矯正する特權と任務がある、また憲法上からいつても議員の選擧と資格を判斷するのは當然である』と述べる論者もある。かくてその法律上の最終の解釋は決定して居らないが兩氏は今のところ失格した。



支那の大衆文學

井上紅梅

はしがき

支那の文學界は近來めざましい活躍を呈した。民國六年口語體の使用を宣傳してから、北京大學を中心に劃時代的の文藝改革となり、外國文學の飜譯、新詩新小說の試作、敎科書の改正、口語體新聞雜誌の發刊、新字の作製等あらゆる方面に向つて最善の努力を盡した。

總じて新しいものは活氣あまりあつて格調が整はない。折角努力して作つた新詩も新小說も在來の物と比べると根據が淺く、何となく安ッぼく見えて世間の冷笑を受ける點が多かつた。そこで詩の方面では舊型を脫するために今まで捨てゝ顧みなかつた民謠、小唄の研究が初まり、小說の方面では宋明以來の舊口語體小說の研究が行はれた。前者は北京の歌謠研究會が中心となり全國に散亂せる歌謠を蒐集し、後者は胡適氏の水滸傳、紅樓夢、儒林外史の考證となつて現はれ、上海の亞東圖書館から新式標點付の本が續々發刊された。於是口語體の研究は更に進んで方言の研究となり、從來僅かに一地方の人にのみ讀まれた蘇州語の小說などが一般の人に歡迎されるやうになつた。同時に京劇の脚本、寄席の讀み物、語り物、俗道の說敎節などが眞面目な文藝批評眼を以て分類解剖されるようになつた。筆者は民國七年頃から右のやうなものに注意してゐたが、當時は支那人の研究者も至つて少く、露店の本屋で三文本など漁つてみたが、誤字が多くて手の着けやうがなかつた。然るに今夏商務印書館から發行された「中國文學研究」を見ると、その中に幸ひわたしの狙つてゐたものが可成り多く集めてあつて、幾分眼鼻が着いてゐるのに甚だ嬉しく感じた。そこで左の項目に分け、中國民衆文學を紹介してみようと思ふ。

（一）舊口語體小說と地方語文學、（二）寳卷（說敎節）（三）京劇（淸朝末期に全盛を極めた民衆劇）（四）灘簧（寄席で行はるゝ卑俗な歌舞）

（五）民間傳說等

一　舊口語體小說と地方語文學

舊口語體小說は宋の話本から起り、戲曲の影響を受け、明の回章小說となつた。話本は講談の臺本である。これにはいろんな區別があるが、一般に小說、說經、講史、合生の四種に分かれてゐる。

一、小說は一名銀字兒といひ、艶事、怪談、傳奇、お判き物、武勇傳などで古今を談論して水の流るゝ如し、とあるから日本の講談と略ぼ同樣なものであらう。現在江蘇地方で行はるゝ評話といふものは、三國、水滸、七俠五義といふやうな固い物を讀んで木(き)を用ゐ、其口演振りも日本の講談そつくりである。又別に彈詞といふものがある。これは琵琶或は三絃に合せて歌を唱ひ、唱ひ畢ると平話で話す。その點は浪花節によく似てゐるが、内容は人情物で歌の節は細く哀れに上品である。評話と彈詞を總括して說書といふ。

二、說經は現在支那では敍事詩の方のみ行はれてゐる。これは寶卷といつて佛說を七言句に綴り鐘太鼓に合せて唱ふ、或は糸竹を加へることもある。在家に招來されて寶卷を唱ふことを宣卷といつてゐるが、今は殆んど道士の手に歸してゐる。宋時代には日本のやうな口演的說經もあつたであらう。又別に參請といつて禪僧の問答など說いたものがあつたそうだが今は無い。恐らく吹腔の問答體の歌や童話の問答體の歌は參請の變化であらう。

三、講史は歷史講談で、通鑑漢唐歷代の史蹟興亡を說いたものである。五代史平話、梁氏平話など今も殘つてゐる。三國志演義の前身、三國史平話も近頃日本で發見されたそうである。平話は即ち現在の評話であるが、只讀み本が遺つてゐる。

四、合生は當時の新聞を說べた世話物で一回讀み切である。京本通俗小說中に今殘存せる碾玉觀音、菩薩蠻、西山一窟鬼、志誠張主管、拗相公、錯斬崔寧、馮玉梅團圓などは銀字兒や合生の臺本であらう。當時の俗語をそのまゝ用ゐてゐるので甚だ面白い。

以上の如き寄席に屬すべきものは唐宋には雜劇中の說話と稱してゐたが、南宋の滅亡と共に雜劇は絕え、說話は机上の讀み物となり、後ちの口語體小說の源流となつた。

說話の說き方は歷史物でいふと、先づ七言詩をはなに置いて話の主意を明かし、次に天地開闢以來の史實を種に妄誕な因

果說を述べ本文に入る。本文に入つても史上の大事件よりは末節の鎖談に力を入れ、所々に詩句を引いて威厳を見せ、或はチャリを交ぜて笑はせ、最後に又詩詞を置いて結ぶ。

世話物の編成も歴史物と大同小異であるが、これは叙景の詩詞をはなに置き、先づいろんな世間話をする。そうして本文と類似の事や正反對の事を集めて多くの例を引き、さんざん餘事に渡つたあとで本文に入る。最後は矢張り詩句を以て結ぶ。

此種の說き方は佛法の教典に好く似てゐる。それは唐代に西竺の教典が續々飜譯され、說教などが盛んに行はれたので、自然その體が民間の講談に傳はつたのであらう。觀音經を見ると、先づ觀音の靈驗を散文で說き、次に同じことを韻文で說いてある。これは教理を注ぎ込むのに尤も便利な方法で、くどくはあるが記憶に殘る。許地山氏の說に據ると、佛典に於ける韻文は輸盧迦即ち頌であるが、支那譯はこれを偈といつてゐる。小說の詩詞は佛典の偈から變化したものである。そうして本文の頭に「聽說」「話說」「却說」などといふ文字を置くのは、佛典の唐譯「如是我聞」と同じ意味である。燉煌發掘の口語體本「孝子董永傳」には「聽說牟尼佛初學修時」とある。又或物は形容し或は論斷する場合に、古詩句、諺語を以て證明する文體、例如ば「正是、手にもつ三尺龍泉の劍、奪却す中原四百の州」の如きは印度式の說き方である云々と

明代には宋の話本が一轉して演義小說となり、机上の讀物となつた。即ち講談の臺本が回章小說といふ形の整つた長篇小說になつたのである。此時代の代表作は水滸傳、三國志演義、金瓶梅、西遊記、今古奇觀、封神傳演義などである。此中で注意すべきは、水滸傳が泥棒の間に行はれたる一種の方言を用ゐたる事、金瓶梅が家庭の內部を精寫せる事である。又今古奇觀は回章小說體に編輯してあるが、實は每回讀切物で、前置きの長い體裁上から見ても宋の話本の遺物である。

清朝に至つて回章小說は南北兩方面に於て發達した。北方では紅樓夢、兒女英雄傳、七俠五義など旗人の著作が多く現はれ、純粹の北京語を用ゐた。中にも紅樓夢は上流社會の家庭を精寫したもので先人未發の點がある。南方では儒林外史が取材を當時の文人生活に置き、果敢なき試驗に悶ゆる幾多の愚人を罵つた。此書は多數の挿話を寄せ集めて不即不離の間に事件を進展し、全篇を纏める大骨子がないので無布局無構成の書き流し物となつた。これは社會の出來事を片ッ端から摘發してゆくには、手數のかゝらぬ便利な方法で、清末の悪罵小說、官場現形記、二十年目覩の怪現狀など皆此體である。同じ形式を以て奇談を寄せ集めたものに廣陵潮がある。花柳界を描寫したもの

に海上花列傳、上海繁華の夢、九尾龜などがある。儒林外史は諷刺小説として野卑に流れず、長江流域の標準官話を用ゐたので少年の讀物に適し、南北に偏せぬ完全なる國語讀本として今日重きを置かれるわけである。

海上花列傳は地方色小説として特異なものである。蘇州語は從來他の方言と共に彈詞及び崑劇の一部に用ゐられたが、海上花に至つて立派な蘇州文學を大成した。前に記した廣陵潮は揚州小説として異色を放つものだが、揚州語を用ゆる點に於て極めて控え目であつた。然るに海上花は地の文丈けを標準語にして、對話は悉く蘇州語を用ゐた。其結構は儒林外史から脱胎して、著者の所謂穿挿闇藏法といふ一種の新體を開いた。儒林外史には鳥瞰的布局がなかつたが、海上花には大局の纏つた組立があり、幾多の連續せざる事件を接ぎ合せて、其骨子を裏に廻し表に現はし、千變萬化の中に精細なる描寫と巧妙なる省略法が行はれた。

此小説の發表されたのは、日本の明治二十四年に當る光緒壬辰の年で、作者は西洋の影響を少しも受けてゐないのであるが、其筆致を見ると、從來支那に類例無き寫實的態度で、個性の描寫に成功し、無裝飾のサラ〳〵とした文體の中に地方色を充分に盛り込んだものである。發表の當時は讀者は上海蘇州の一地方に限られ、ごく僅かな出版高で間もなく絶版になつたが、民國十三年魯迅氏の中國小説史略に依て紹介され、昨年十二月上海亞東圖書館より翻刻された。海上花は支那の口語體研究者が、在來の類性的文學に滿足せず、個性的高級文學を求めるため、標準語の研究より地方語の研究に移つた最初の好資料であつた。

回章小説は毎回八字二句の小みだしを設け、本文の前に楔子を置いて作者の主張を述べ、詞詩に初まり詞詩に畢る。而して毎回のはなには必ず「且説」一類の文字を置いて前回の概略を述べ、終には「畢竟此事はどうなりますか下回を見れば解ります」と書く。これは講談本の型を取つたのであるが、海上花になると回尾の文句は無く、回首は按の一字でアッサリ片附けてゐる。これだけでも隨分進歩したものである。又毎回の小みだしと勞頭の詩詞と楔子は戲曲の型に依つたものであるといふ説もあるが、講談も唐宋には雜劇中に加はつてゐたのだから、どちらが先へ初めたのか分らぬ。兎に角言文相離れてゐたので机上の讀物が習慣上長く講談の形式を借用してゐたのである。

現代の支那文藝家は日本及び西洋の創作を翻譯し、その文體を逐一吟味してゐるので、小説の結構も多大の進歩をなした。殊に三角戀愛を描く張資平氏の作品にその跡が見える。又魯迅

氏は地方色の表現に努力し、田舍者の素朴な生活と奇習、下層社會の悲慘な狀態と奇癖などを寫し、一種枯淡な面白い文體であるが何處となく漢文臭氣があつて垢拔けた口語體とは言へない。又獨逸留學生趙伯顏氏や露西亞留學生蔣光赤の作品を見ると取材は外國丈けに變つてはゐるが、その組立方も表現法も眞に新しいものとはいへない。然しながら五六年前に比べると、支那人の文藝技巧はめざましい變化である。迚も日本の自然派以後の騷ぎではない。これを見ると矢張り支那は文學の國で將來美しい東洋の花園となるだらう。

二　寶卷

寶卷は說經節である。これは僧侶や道士が初じめ法事の禮讃として用ゐたものであるが、後ちには鐃太皷の外に管絃などを加へて節面白く唱ひ囃し、一種の餘興になつて仕舞つたのである。

寶卷は前にも述べた通り、佛典の偈を獨立させたものである。佛典は教理を記憶させるため、先づ散文で佛の功德を說き、次に韻文で同樣のことを唱つた。此形は觀音經、父母重恩經などにあるが、唐末五代に至つて口語體を用ゐ、更に俗耳に入り易くするため、故事を支那に取り、人物、場所も悉く支那に改めた。其唱ひ方も隋唐以來輸入された西域調（即ち印度調）に依つたものであらう。寶卷は間もなく道士の手に移り、呂洞賓その他八仙人の神通力を示し、或は儒學風の教訓を交じえたものもある。現在道士の唱ふものは、內容が非常に小說化し、女子供は講談、琵琶歌同樣の興味を以てこれを迎へる。これは彈詞（琵琶歌）鼓詞（太鼓歌）戲曲などと相互的關係があつて、取材も形式も同樣の物が多い。鄭振鐸氏は「中國文學研究」の中に佛曲敍錄と題し、寶卷の目錄說明書を作つた。其中に燉煌の發掘物六種を載せてあるが皆佛典の飜譯らしい。その外民間に流行せる寶卷三十六種を載せてあるが、寶卷はこれのみではない。何百何種とあるのだから他日稿を續ぐそうである。わたしはその中で有名なものを二三摘記して寶卷の內容を示さう。

【香山寶卷】 は寶卷の中でも尤も古く尤も有名なものである。普傳へに據ると、宋の普明禪師が崇寧二年（西紀一一〇三）八月十五日杭州の上天竺で神の感示を受けて作つたものだそうである。一名、觀世音菩薩本行經簡集と稱し、全編二卷、上海文益書局、民國三年出版の石印本である。別に咸豐壬子、上海翼化堂發行の觀音濟度本願眞經あり。これは前者を觀音自身の自敍體に改作したもので、內容も結構も殆んど大差無し。

迦葉佛の時、須彌山の西に興林といふ國があつた。その國の

人皇を婆伽といひ、年號を妙莊と稱した。人民は安樂に國は豐かであつたが、只一つ太子の無いのを苦にやんだ。皇后寶德は既に二人の皇女を生んで妙書、妙音となづけたが、妙莊（年號）十八年二月十九日、又もや一人の皇女を生んで名を妙善となづけた。此皇女は尋常人ではなく仙女の生まれ變りであつた。いつしか妙善は十九歲になつたが、いつも上天に向つて祈り、皇宮を捨て出家奉佛を願つた。宮女等は彼女の修業振りを見て皆笑つた。或日皇帝は朝廷に出られたが、太子のないことを思ひ浮べると嘆かずにはゐられない。群臣等は皇帝の只ならぬみけしきを見て跪いて奏した。「皇女樣はお三方とも、もはや妙齡に達せられましたから、適當の婿君を召してお世嗣としたら如何で御座いませう」皇帝は此申出を容れて三人の皇女に婿を召された。そこで第一の皇女は一人の文人をお取りになり、第二の皇女は一人の武將をお取りになつたが、第三の皇女はひたすら修業の道に志して婿取を拒んだ。皇帝はこれをきくと大層な御立腹ですぐに彼女を後園に監禁した。彼女は却て喜んだ。鳥が籠を出たやうに、囚人が枷を脫したやうに、宮中の生活を離れて自由自在の身になつたのを喜んだ。そうとは知らず皇后は第三皇女を思念され、一個月の後ち皇帝に向つて切に赦罪を請うた。皇帝はそこで皇后と二人の皇女と宮女等に申付け、妙善を說得させたが、彼女は何と言つてもきき入れない。半年の後ちには遂に後園を拔け出して白雀寺に入つた。皇帝は慌てゝ尼僧を喚び出し、彼女を宮中に歸へすやう取計らへ、さらずば寺を燒き拂ひ尼を滅すと嚴命した。尼は驚いて引きさがり、あらゆる難題を持ち掛けて追ひ出さうとしたが、彼女はいかなる苦痛をも忍んで、手の着けやうがなく、ぜひなく此由を覆奏すると、皇帝は大怒遊ばされ、すぐに兵を遣はして寺に火をつけた。彼女はさわがず身を刺して血を噴き上げ、くれなゐの雨を降らせて火を消し止め寺院を全うせしめたので、皇帝の怒り益々甚しく、再び兵を遣はして彼女を召取り都に引き來りて斬罪に處したが、斬つても斬つても彼女は死なない。けれど彼女は父君の煩悶を痛ましく思ひ、自ら天に禱つて死をねがひ弓弦を以て吭を縊つた。此時山崩れ樹倒れ海乾き河竭き、天地晦冥、日月光無く、此國の人も他の國の人も悲嘆に暮れぬ者はない。折柄一つの虎が現はれ彼女の屍を啣へて深林に運び去つた、かと思ふと彼女の魂は地府に遊び、其本願の慈悲心を以て多くの惡鬼を濟度し超生せしめたので、地獄は忽ちガラ空きになり、閻魔王は狼狽して彼女を此世に送り歸した。此世に歸つた彼女は獨り林の中で、泣き悲しんでゐると、太白金星のお示しがあつて、香山の懸岩洞に到着し、其中で九年の劫を積み成道して

觀世音となづけられた。此時玉帝は興林國の毀佛滅法をみそなはし、神勅を下して瘟部行病使者を遣はし、病ひの種を彼國に送つた。妙莊皇帝は忽ち不治の難症に罹り苦痛に堪え兼ねた。香山皇女は既に此事を知つてゐたので、すぐに僧人に化身して彼れを救ひに行き、不嗔人の手眼に靈丹を交ぜて飲めば病ひ癒ゆべしと說き、其不嗔人の手眼は香山の懸岩洞内に求めよと敎えた。皇帝は敎えられた通りに、香山の懸岩洞に使者を差し出したところ、果して彼女の手眼を獲て病を癒やした。皇帝と皇后はみづから香山に行つて謝恩すると、手眼を捨てた仙女は圖らずも己れの娘であつた。皇帝は驚いて、手眼の再生を祈願した。果して皇女の手眼は再生した。於是妙莊皇帝と皇后と宮妃は皆行ひを改め道を修め佛法を崇信したので、淨土に歸することを得た。

〔梁山伯寶卷〕 これは上海文益書局石印の二卷本である。

或年の七夕に天上の牛郎と織女が忽ち凡念を起したので、玉帝は大怒遊ばされ、彼等の罪を責めて凡界に貶した。そこで牛郎は梁家に生れ變つて梁山伯となり、織女は祝家に生れ變つて祝英台となつた。梁山伯が十八で祝英台が十六の時、杭州に一つの學塾が開かれたので、山伯はそこへ行つて勉强しようと思つた。英台も亦男裝して入學したいと思つた。英台の嫂は女の學問を譏つたが、彼女は構はず出掛けた。二人は途中で行き遇つて義兄弟の約束をした。三年の間二人は勉强して一つの床で起き伏しした。英台はどこまでも我が身の女であることを隱してゐた。山伯は或る機會にうす〳〵感付いたが、英台は體よく胡麻化した。けれど終ひにとう〳〵隱し切れなくなつて、英台は書塾を辭して家に歸つた。別れる時、英台は先生の奥さんにまことを打ち開け、山伯と夫婦になりたいから、彼女の家に結婚の申込をするように勸めて呉れと頼んだ。そうとは知らず山伯は、或る所まで英台を送り出した。彼女はみち〳〵山伯に我が身の女であることをほのめかしたが、山伯の靈魂はその時太白金星に召し上げられてゐたので情が動かなくなり、彼女の挑撥的の言葉が少しも分からなかつた。英台は彼れと別れて家に歸ると、父母はすでに彼女を馬大榮の子、馬文才に許した。彼女は泣いてこれを拒み死なうとしたが死に切れなかつた。一方山伯は先生の奥さんから英台の意のあることをきいて、急いで祝家に馳け付けたが、もう遲かつた。英台は彼れに一切の事を打ち開けた。彼れは失望して家に歸つた。家に歸ると重い病氣に罹つて幾日もたゝぬうちに彼れは死んで仕舞つた。此報をきき傳へた英台は幾度も氣絕したが、丁度その日は吉日に當つて馬家から迎への轎を寄越した。英台はせめて山伯の墓參をして行きたいといふので、父母はゆるした。英台は喪服を着て山伯

の墓所に行き、泣いて拜んだ。拜んで又泣いた。すると忽ち山伯の靈が現はれ、墓を裂きひらいて英台をその中へ突込んだ。英台のからだが中へ這入ると墓はもとのようにつなぎ合つた。女中どもはあわてゝ引留めたが間に合はず、彼女の裙だけ手に殘つた。折も折とて婿の馬文才は急死した。彼れは死ぬとすぐにあの世の役所に行つて、山伯が彼れの妻を奪つたことを訴え出た。閻王は前因後果を說き示し、彼等は胡蝶となつて天上に行くものだと、告げ知らせたので、馬文才は何もかもすつかり分つて、魂が元の身に歸り、再び此世の人となつた。彼れの父は此話をきいて不審を起し、使をやつて山伯の塚を開いてみると果して二人の屍體はなかつた。只二つの胡蝶が墓穴からひらひらと出て、天高く飛び去つた。

【白蛇寶卷】上海文益書局石印二卷本。

宋の眞宗の時、峨嵋山中に一つの白蛇があつて一千七百餘年の間修鍊した。或時の蟠桃大會に觀音菩薩は彼女を携帶して席に臨んだ。ところが西池金母娘々が白蛇の機緣を道破し「凡そ仙たる者は、必ず恩を酬る德を報じてこそ仙班に列すべし。汝の恩人は一千七百年前に汝の性命を救ひしが、現世は抗州に在つて、姓を許、名を漢文といふ。汝は彼れに報答をすまして後、命に臨むべし」と說いた。そこで白氏は即刻抗州に赴き、靑蛇を取入れて婢となし、名を小靑となづけた。のち〳〵果して許漢文に逢つた。許漢文は其時の名を許宣といつてゐたが傘を貸したのが緣となつて彼れと婚約した。ところが白氏は官庫の中の元寶を盜つて彼れにやつたので、それがため彼れは罪を受け、軍隊の前線に廻されて蘇州に行つた。白氏主從は跡追ひかけて蘇州に行き許宣を救ひ出して夫婦となつた。或年の端午節に白氏は雄黃酒を飲み過ぎて現形をあらはし、許宣を嚇し殺した。白氏はあらゆる危險を冒して南極宮中の仙草を盜んで許宣を救つた。途中鶴童に追はれて危く命を失はふとした。それから一時安全の暮しをした。或晩白氏は小靑と共に三百擔の白檀木を盜んで來た。持主は失望して江に投じて自殺を計つたが、金山寺の僧、法海に救はれた。法海は白蛇の仕業と見て取つたので許家に來り、佛像製作の料にとて白檀木の寄附を求めた。許宣は依賴に應じて全部の白檀を法海に喜捨した。佛像が出來上ると許宣はこつそり家を拔け出し寺に行つた。法海は彼れを止めて匿まつた。白氏は小靑と共に寺に追ひ行き、許宣を返へして呉れと迫つたが、法海は勝手にしろと言つて取合はない。彼女は已むなく神通力を以て洪水を起し、金山寺を水攻めにしたが、結局法海の法力に敵しかね、杭州へ逃げ延びた。法海は許宣の惡緣が未だ盡きないのを見て、彼れを斷橋に送り白

氏に會はせた。まもなく白氏は一子を生んだが、生み畢るとすぐに法海は、彼女を調伏して雷峯塔の下に鎭壓した。白氏の生んだ子は夢蛟といひ、のち〳〵狀元に級第し、墓參のため雷峯塔に來て見ると端しなくも法海とめぐりあひ母の仇きを打たうとする。法海は今度は却て白氏を釋放し、彼女と共におの〳〵祥雲に觸して空中遙かに消え失せた。許宣は剃度して僧となり正果を遂げた。

【孟姜女寶卷】 本書は雲山風月主人編輯と題し、上海翼化堂出版の壬子年本と、上海文益書局出版の石印本の二種あり。文句は多少の相違あるも全體の趣好は同じ。寶卷に於ける孟姜女の故事は民謠及び傳說に於けるものと大分の相違がある。孟姜女故事の研究は顧頡剛が現代評論に於て發表した。

秦の始皇が人間を統治した時、阿房宮を作り長城を築き無道の行ひが多かつた。或日、丁度その日が天宮の冬至節に當つたので、もろ〳〵の仙人は皆朝賀に出た。中に一人芒童といふ仙官が、ふと下界を見下ろすと、汚穢の氣が天を沖してゐるので、大心願を起し、下界へ行つて萬民の難を解き救はふと思ひ、仙姫宮の第七仙姑に此事を話すと、七仙姑は餘計なことに手出しをするものではない、と諫めたが彼れは肯かず、其場からすぐに下界に下り、蘇州へ行つて人間の身體を借りて生れ、名を萬喜良と稱した。これを知つた仙姑は放つても置けないので、彼女も亦人界に下つて大冬瓜の中に身をひそめた。まもなく姜婆さんと孟員外は此冬瓜に目をつけ、二つに割いてみると、中から美しい女の兒が出たので互に取合ひを初め、二人は遂に役所へ訴え出たので、縣主の裁きで其赤兒を孟姜兩家の者とした。そういふ緣故で彼女は孟姜女と呼ばれた。

玉帝は其日二仙が出奔の事を聞こし召され、御機嫌よろしからず、いつそ彼等の身を犧牲にして救民の大事を遂げさせせんと思し召され、すぐに太白金星を人界に遣はし、一つの童謠を流行らせた。

姑蘇にあるてふ萬喜良
よろづの民の命の親
死んで長城の王と仰がれ
萬里の城は常盤の如し

此童謠が始皇の耳に入ると、始皇は賞を懸けて萬喜良の召捕方を命じた。萬喜良はぜひなく家を離れて難を避けてゐたが、或日蘇州に歸つて孟員外の花園に入ると、折柄池の中に苦しんでゐる一人の女があるので急いで救ひ出すと、それは同家の令孃孟姜女であつた。彼女は花園に遊んでゐる中、誤つて水に溺れたのである。孟員外は大いに喜び其場で娘を彼れに許した。

丁度結婚の日、追手が着いて喜良は召捕られた。召捕られた彼れは長城に送られ、萬民の身代りとなつて生きたがら城の下に埋められた。始皇は彼れを長城萬里侯に封じた。

孟家ではそんなこととは夢にも知らず、だん〳〵寒くなつて來たので、孟姜女は彼れの冬着を作り、自ら長城へ持つて行かうとする矢先き、喜良は彼女の夢に現はれ、事の次第を告げたので彼女はすぐに身を起し、遙々萬里の城まで行つて泣き崩れると、城の中から喜良の骨が露出した。始皇は孟姜女の美貌を悅ばれ、宮中に召されたが、彼女は三つの條件を持ち出した。一つは喜良のために立派な墓を作る事、二つは萬王廟を建てる事、三つは喜良の墓に始皇が親祭さるゝ事であつたが、始皇は一々これを許された。墓も廟も出來上つて祭禮の日、始皇は親臨した。山のやうに積み上げられた靈前の紙錠は、壯嚴の儀式の下に火を點ぜられ、ぽつぽつと燃ゆる炎は天地も焦がさんばかりの只中へ、彼女は急に身を投じた。

そこで芒童と仙姑はやうやく玉帝の許しを得て、元の神位に就くことが出來た。同時に孟姜兩家の父母は超度されて仙人となつた。

【何仙姑寶卷】 一名呂祖師度何仙姑因果卷といふ。二卷物、上海翼化堂刊行。

呂岩、字は洞賓、彼れは一つの仙人組合を取締つてゐたが、或日ふと想ひ出してみると、上八洞、下八洞の仙人組合の中に、各一人の女仙人があつて（それは驪山の老母及び麻姑を指す）彼等の組は西王母のお祝ひ酒によばれてゆくのに甚だ都合がいい。ところで呂洞賓の仲間には女仙人がない。そこでどうしても下界へ行つて、女仙人を一人引上げて來なければならない。と思つたので先づ杭州へ行つてみると、忽ち一すぢの白光が虛空を支えて光り、行手を塞いでゐるので、彼れは雲をひらいて見ると、一人の女が念佛修行に餘念ない樣子。そこで彼れは雲水の道士となつて彼女を試ろべく出發した。彼女は何といふ姓を名乘る或る藥種屋の娘であつたが、父母が彼女に修道をゆるさないので、少からぬ困難を感じながら、兎に角熱心に修業しつゝあつた。呂洞賓は度々彼女を試みたが、その道念の固いのに感心し、遂に拔擢して連れ歸る。時に彼女の師兄なる黃龍といふ道士が、雲に騎して追ひ來り、彼女を取返へそうとする。そこで黃龍と呂洞賓との間に一大格鬪が初まつて、黃龍は危く滅亡するところであつたが、幸ひ觀音大士の救ひに依て性命を取留めた。

三　民間傳說

支那の神話と傳說は、大抵思想家の手に入つて寓言となつた。此種のものは莊子、列子、淮南子などに多く見る。中にも盤古説は天地混沌の初まりを說き、女媧氏が五色の石を煉る話も太古に於ける天地の修復である。弓術の名人羿の話も、其妻姮娥のことから月世界と關係ある面白い話である。續いて山海經に現はれた崑崙山の神女西王母の話は後代幾多の文藝家の手に依て潤色され、幾變化して恐しいものが美しいものになり、美しいものが亦好色の淫神となつた。その外、紫姑娘の話（本妻に虐待された妾が死して厠の神となり、後ち養蠶家の神となる）盤瓠の故事（八犬傳の伏姬はこれをソツクリ拜借したものである）蠶馬の話（これも盤瓠と同樣で犬の代りに馬を用ゐたもの）神女塚の話（こがれ死にした男の墓をとむらひて自ら合葬する女の話）孟姜女、梁山伯と祝英台の話、雷峰塔の白蛇の話等一々數え上げたら際限がない。

此等の話は寶卷となり彈詞となり戯曲となり作者の技巧が加つてそれ〴〵變化した。そこで民間に殘つてゐる無垢の傳說といふものは甚だ少くなつた。私は何十年か前に上野の圖書館で英國婦人の書いたチヤイニス、ナイツといふ本を見たが、それには正味の傳說らしいものが載せてあつて甚だ面白く感じた。

「お正月に支那人は一個月も戸を締めて休む。此習慣はむかし支那に大洪水があつて中々水が引かない。そのうちだん〴〵寒くなつて野山がみな凍つて仕舞ひ凍死する者が非常に多い。村人は皆途方に暮れたが、その中で一人智慧者が饅頭の中に避難することを案出した。そこで村人は各々麥粉を持ち寄り、一村の人が這入れるような大きな饅頭を作つてその中に這入つた。饅頭がほこ〳〵暖いのでみんないい氣持になつて睡つた。一個月ほど經つ中に氷は溶け野山が暖くなつたので、おの〳〵家に歸つて仕事をした。」よくは覺えてゐないが何でもこんな風な話であつた。外に廣東地方のバナナや茘枝を取りに行く話もあつた。バナナを取りに行くと鼻が象のやうに長くなるといふ面白い事が書いてあつた。

一度浙江地方の河船の中で、或る支那人が塔に關する傳說を語つた。「支那の大地の下には大きな龜があつて、それが手足を動かすから地震が起る。塔はその龜を留めてゐるピンである。だから支那には今地震がない」と言つてゐた。龜の手足は女媧氏の神話「鼇足を斷つて四極を立つ」から出たものであらう。それが日本では鯰に變化した。

近頃民間傳說の採集は頗る熱心に行はれてゐるやうだが未だ單行本として出たものは見ない。大てい兒童文學か童話の中に編入されてゐるやうである。左の三篇は新聞雑誌から拔き取つ

たものである。

「石門の鑰」浙江の石門といふ處に一つの山があつてそれを石門山と言つてゐるのは、其山の下に二枚扉の石門があるからだ。此門は年ぢうしまつてゐて今まで開けた人がない。或年此土地の百姓が二千餘坪といふ地面に冬瓜の種を蒔いたところ、蔓がうねうねと延び、青い葉がそこらぢうにひろがつて大層な勢ひなので、百姓は朝晩これを眺め、樂しんでゐると、だんだん時が移つて實を結んだのは、たつた一つの大冬瓜であつた。それが普通の物と較べると何倍といふ大きさではあるが、いくら大きくとも冬瓜は冬瓜で、長い間の丹精と肥やし代を考へると、いまいましくて見る氣にもなれない。

そこへふらりとやつて來たのは江西の商人で、彼れは其冬瓜を眺め頻りに考へてゐたが、やがて賣つて呉れといひ出した。百姓はヤキモキしてゐた時だから、これは賣物ぢやないと斷ると、彼れはますます所望して、直段はいくらでも出すといふ。百姓は變に思つて

「冬瓜は何處にも澤山あるぢやないか。お前はこれに限つてなぜそんなに入用なのだ。」

「それはお前の知つたことぢやない。わしの方で一寸遣ひ途がある」と言はれて益々變に思ひ「お前さんが使ひ途を話せば賣つてやるが、でなければどうしても賣らない」と頑張るので、江西人はいつまで論判してもゐられず、ぜひなく本當のことを打ち開けた。

「此冬瓜はつまり此石門の鑰なんです。丁度お日様が頭のてツぺんに來た時、此冬瓜であの石門を三度叩くと、二つの扉がガラガラと開きます。あの石門の中には眞珠、寶石、瑪瑙、珊瑚と無數の寶がしまひ込んであつて、それは迚も大變なもので、取盡すことも使ひ切ることも出來ません。こんな手ツ取り早い金儲はないぢやありませんか」

百姓はそれを聽くと跳び上つて喜び「乃公だつて馬鹿では無いよ。そんなボロい鑰を持つてゐながら自分でやらない奴があるもんか。誰だつてそう聽いた上は、みすみす人に賣り渡して仕舞ふことが出來るかえ」と言ひ畢るやすぐに冬瓜を持つて家の中にしまひ込んだ。江西人は見事背負投げを食はされて怨めしく思つたが仕方がない、そのまゝすごすご立ち去つた。

明くる日になると百姓は一人冬瓜を抱へて山下に行き、敎えられた通り石門を三つ叩くと、忽ちガラガラといふ音がして、絕えて久しく開いたことのない石の扉が、ひろびろと左右に開らいて壁際にくつツいた。百姓は冬瓜を外に置いて人に盗まれては大變と、後生大事にそれを抱へていそいそ這入つた。今こそ鑰

錢一つない貧乏人だが、出て來れば何もかも揃つた旦那樣だ、と思ひながら二足三足中へ行くと、すぐにピンといふ音がして二つの扉は元の通り閉くしまつて仕舞つた。百姓は中で大聲上げたが、誰れだつて聞きつけるわけはない。百姓の家族は夕方まで待つてゐたが音も沙汰もないので心配し、石門の側まで行つてみると、何處へ行つたか足跡さへない。これは乾度江西人にだまされたんだ、と大泣きに泣いて歸つて來た。

一日置いて次の日、江西人は寶の結果が氣になつてこつそり來て見ると、百姓の子は雷の如く暴れ出し、摑み掛つて一緒に命を捨てようといふ騒ぎに、近處の者は集つて、いろ〳〵わけをきき糺したあとで、皆の說では、それは誰れを怨むことも出來ない。彼れ自身の貪慾心が惡いのだと言つた。或人は又江西人に向ひ、結局どうすれば中の寶を出すことが出來るのか、ときいた。江西人は說明した。「二人一緒に行き、蠟燭を用意して門が開いた時、一人は火を點じて先きへ入り、一人は外で待つてゐる。そうして午の刻の終りが來た時、冬瓜を以て急に三度門を叩くと、中の人は外へ來られる。若し時刻が來ないで叩くと、冬瓜は碎けてつかひ途にならぬ。あの百姓はこの方法に依らない、のみならず鑰（冬瓜）を持つて中へ這入つたから、此寶藏は永久に開放することが出來ぬ」と說き畢つて嘆息して立去つた。――上海新聞報――

【金雞】わたしどもの村から十里ほど先きに金雞隴といふ處があります。此地方の山中に曾て一對の金雞が生れました。此金雞は羽毛がみな金で夜になると山奥から出て來ます。

或る寶識りの回々人が、此一對の金雞を見て、これは容易ならぬ珍品だとにらんだが、捉らへることが出來ない。それからだいぶ經つて回々人は或る家の子供を見ると、年は十ばかりで年百年中病氣して痩せ衰へてはゐるが、頭が普通の子供の何倍といふ大きさです。回々人はその頭に寶のあることと見拔いたので、彼れの父母に交渉し、いくらかの金で身柄を買取り、錐を以てその頭を切開くと、果して頭蓋骨の中から一つの金碗が出ました。回々人は此金碗こそ金雞を誘引すべきものだと知つて、金碗に米を盛り、金雞をおびき出しに行きました。すると豫想通り一對の金雞が深林から出て來て金碗の中の米を食ひました。回々人は手を延ばして金雞をつかまへようとする途端に、金碗は引ツクリかへり金雞は逃げ出しました。同時に地面が裂けて一つの隙間の中に金碗が落ち込んで仕舞ひました。逃げ出した金雞は二度と出て來ません。それから此地方を金雞隴といふやうになりました。――上海時事新報――

【子規鳥】むかしある處に物持の家があつて夫婦の中に一人の

子供が出來ました。その子供は大層賢いので父親も喜んでゐると、乳離れの頃母親が死にました。二三年過ぎて父親は不便に堪え兼ね、後妻を娶ると、一年たゝぬうちに又一人子供が出來ました。後妻は性來邪慳な質である上に、自分の子供があつてみると先妻の子が邪魔になり、いつそ殺して仕舞へ、と思はぬではないが、世間の手前を恐れて容易に手を下しかねてゐました。けれど或日とう〳〵一つの妙案を想ひ浮べました。

後妻は二人の子供を前によびよせ、前妻の子に一粒の煮豆を與へ自分の子に一粒の生豆を與へて「お前達は向ふの岡へ行つて、別々に此豆を蒔いて芽が生えたら歸つておいで、芽が生えなかつたら、歸つて來てはなりませんぞ」と吩咐けました。みなさん、考へて御覽なさい。煮豆に芽が生えるわけがありません。これはてつきり前妻の子を逐ひ出す手段ではないでせうか。前妻の子は繼母のたくらみを知つてゐるので、手の中の豆を見ると悲しくなり自分の薄命を怨みましたが是非もなく弟の手を曳いて門を出ました。折柄春もやよひの頃で、みち〳〵鳥が啼き花が咲き、野山の景色は名畫も及ばぬ美しさ。二人は歩み勞れて道端で休みました。その間、兄の方は手の中の豆を見て心配で堪りません、すると弟は自分の豆に裂け目が無いから取換えて呉れ」と言ひました。弟はその時やうやく十歳になつたばかりですから、煮豆も生豆も分りません。「ね、にいさん、お前の豆には裂け目があるから、屹度芽が出るんだよ。わたしに取換えてお呉れな。ね、いいだらう」

兄は初じめ承知しなかつたが、弟が何でもかでも取換えて呉れとせまるので、仕方がなしに取換えました。尤も弟は母親の生みの子だから、芽が吹かうと吹くまいと歸宅を許されると思つたからです。

彼等は豆を取換えたあとで又身を起して目的地に進みました。先方に着いた時、二人はおの〳〵自分の豆を蒔きました。前妻の子は取換えた生の豆を蒔いたから、三日もたたぬうちに眞白な立派な芽が出ました。母親の教訓は「芽が生えたら歸れ」といふのですから、彼れは一人歸つて來ました。其時弟は人も通らぬ淋しい處で只一人殘されて煮豆に芽の生える時を待つてゐました。二三日の後ち弟は何處へか行つて仕舞ひました。あとで彼れが鳥になつたことが知れました。其鳥は「子規鳥」と言つて、今もなほ一種悲慘な聲で啼いてをります。「琤琤不錯（ぷーつぉー）、母親眞錯（むーちんぢんつぉー）」だから此鳥を子規鳥と言つて、母の子に對する道を誡しめてゐるのです。――少年雜誌――

灘黄の前に京劇を入れたいのであるが、京劇の稿が餘り多くなり獨立せしむる必要を生じたので、別にこれを分けた。

四　灘　黄

灘黄（たんわん）は初じめ聲色（こはいろ）のやうなものであつたが、今から十二三年前、林歩青といふ名人が出てから、海派蘇灘といふ一種獨特の唱ひ物となつた。日本の聲色は役者個人の音聲を寫したものであるが、支那の灘黄は役柄に依て定められた類型的の聲を出して唱ひ且つ語るのである。支那芝居は立役、ふけ役、子供、女形、道化役等それ〴〵定められた聲柄があつて、歌も說白も各獨特の調子がある。灘黄はその芝居一齣の口眞似である。これには男形、女形、噺方とわけ、手眞似や身振りを交じえるが、出來る丈け省略して顏も作らず、鬘や衣裳も無しに便服のまゝで出る。かういふ芝居の物眞似を初じめは漫然「灘黄」と言つてゐたが、民國六年、新世界といふ遊戯場が上海に出來てから、芝居、寄席其他あらゆる遊戯を網羅したので、灘黄も負けずになつていろ〳〵の流派を起し、蘇灘（蘇州が本元で最初はこれ一つしか無かつた。故に別段蘇の字を冠する必要がなかつた）本灘（上海人は上海を指して本地といふ。故に本灘は上海灘黄である）無錫灘黄、寧波灘黄、武林斑などといふものが現はれ、互に新音を競ふた。その中で寧波灘黄と武林斑は顏を作り、粗末な鬘や衣裳をつける。

灘黄の脚本は初じめ崑劇をそのまゝ借用したが、後ちに創作を起し、卑俗ではあるが一種獨特の下世話趣味を示した。此下世話趣味が灘黄の墮落のやうに思つてゐる人もあるが、わたしはさうではないと思ふ。支那の娯樂物は初じめ貴族の手に成り後ちに平民がこれを奪つた。凡ての物は簡單から複雜に進むのが順序であるのに、近世の支那はこれと反對に複雜から簡單に引戻された。京劇は複雜な崑劇を好く消化して自家藥籠中に納めた。灘黄も同じ行き方で、芝居の領分を寄席の如に奪つた。さうして行儀正しい貴族のお孃様を氣轉のよく利く世話女房にした。何はともあれ、現在尤も流行する灘黄の歌詞を二つほど紹介して、その正體を御覽に入れよう。

「雙望郎」ほの〴〵と二階に移る人影や、ポン〳〵〳〵と打出すと（灘黄の樂器、鼓板の音）そこへ出たのはお孃さん、嫁さんは何か想ひ出し、お父さんはお母さんは三人も四人も子供があるわけではないわ。わたしと妹とたつた二人生んだきりだわ。わたしの生れた時には、それはもう大事の大事の寶物のやうで、一二年間はお母さんが抱きどほし、三年四年は乳母日傘、五つ六つは學問初め、先生をやとつて九つまで讀み書きを習つ

たわ。それからずつと部屋の中で針仕事、あの海棠の刺繡は日に〳〵あでやかに、今年はもう十八歲、妹は十七の花盛り、年頃になると男は女に當り、女は男を撰り分けるといふが、本統にもう日がな一日うつら〳〵して日が暮れて部屋に入るのが情けなく、西も東も男氣は無し、ひとりぼッちで寢るかと思ふと、淋しくて淋しくて、夜ッぴて身悶えせずにはゐられなかつたわ。或日の夕暮、わたしは妹とならんで門口に立つてゐると、向ふから來たのは南村の王德芳。想へば隨分大膽者でなれなれしく二人に話し掛け

「お父さんやお母さんは多分お留守で御座いませう。あなたがそうやつて立つて被在しやると、丸で一對の繡海棠が咲いたようで」

とぺこ〳〵頭を下げた。見ず知らずの男からこんな事を言はれて腹を立てないと、三分の見込みがあると思はれても仕方がないが、わたしはそつと目消ひして內に入ると、男は悶々しく跡に跟いて來た。中堂に入つた時、そこはもう暗かつた。男は跟いて苦しい胸の中を語り深い溜息を洩したので、わたしは彼れを引起さずにはゐられなかつた。わたしは遂に彼れを部屋の中に入れ

「おらくになさいませ」

と上着を取つてやつた。彼れは笑つてわたしの髮道具を取卸して呉れた。

妹は何處へ行つたか初じめから姿を見せなかつたが、三更頃いきなりわたしの部屋に這入つて來た。

「不義者見つけた。この扇子が何よりの證據」

と卓子の上に置いてあつた男の扇子を取つてすた〳〵出て行つた。それには持主の名前がハッキリ書いてあるので、若し妹がお母さんにこれを見せたらお母さんは何と言ふだらう。わたしは思ひ切つて男を妹の部屋にやつた。すると妹は十二時頃までろんぱんしてゐたが、やがてひつそりしたので、見ると灯が見えてゐた。そうして帳の釣手がタンタンタンと鳴つた。

「ふん小鼠が餓を食つてやがる」

とわたしは腹が立つて堪らなかつた。

お母さんは夜明けに歸つて來た。わたしはわざと知らせずに置くと、妹の部屋で男の聲がするので、お母さんはびつくりし

「泥棒」

とばかりおめいて刃物を持つて馳付けた。

男は吃驚り仰天して表門はむろん駄目、裏門は何處にあるやら、滅多無生に馳出して、遂に北の窓から命辛々逃げ出した。それからふッつり姿を見せないので、これは愈々思切つたに違

ひない、と心配してゐると、きのふあの人のねえさんがわたしの處に訪ねて來て、あれからあの人は重い病氣に罹り水叉坊に引移つて、今にも息を引取りそうな話。知らずにゐればそれまでだが、十日からと聞いたからには其儘にして置かれない。どれ妹を誘つて、一つ病氣見舞に行つてやりませう。

と姉は妹の部屋の前へ來た。

「おや、お前は未だ寢てゐるの。こんなにカンカン日が照るのに、よくまお寢られたものだねえ」

とコツコツ部屋の戶を叩く。

「ねえさん、何か御用があるの」

と妹は部屋の中で寢ぼけごゑ。

「お前はあの事を忘れやしないだらうね」

「えゝ忘れるもんですか。寢ても醒めても。本統に三度の御飯もおいしくないのよ」

「そんならお前と一緒に一寸お花見に行かうと思ふが、どうだね」

「ねえさん、あのお砂糖が嘗めたくなつたのでせう。今すぐ持つて來ますよ」

「花見と言つても砂糖ぢやないのよ。あのそれ、ダンベロのようなものさ」

「あゝそれなら城隍廟へ行けばあります。あした一つばかり買つて來て上げませう」

「いいえ、そうぢやないのよ。あのそれ、にいさんのことよ」

「あんな薄情な野郎はうつちやつてお置きなさい」

「でもね。サンビン（生病）なのよ」

妹は尙ほも冷淡に

「ビン（瓶）は小さく壜は大きい、といふぢやありませんか。いつそ死んだ方が增しだ。掛替えを一つ作りませうよ」

「まあそんなことを言はないで、わたしと一緒においで」

「わたしはいやです」

「いやなら、わたし一人で行くよ。そうして若し病氣が好かつたら……それこそわたし獨り占めだわ」

「あらいや、わたしも行くわ」

「どつちが先きへ出ようか」

「きまりきつてまさ。總領が先きへ出るのは」

（唱）ねえさんは先きへ出て、妹はあとに跟いて行く。見舞に行くのはいいけれど、叔母さんが見たらどうしよう。

「お前も拵へるのは上手だが隱すのは下手だね。逢つても知らん振りしてゐるのさ。若し訊かれたら、反物を買ひに行くと言へばいい」

（唱）二人は三ツ叉通りへ出て、若し叔父さんに逢つたらば、何と言ひわけしませうか。若し叔父さんに逢つたらば仕立屋へ行くと言ひなさい。女の足も早いもの、いつしか小橋莊へ來て、二つの丸太の橋を眺め

「おやおや、橋が二つありますよ。まるでわたしどものために掛けたやうですね」

「さうかね」

「姉さん、あすこを御覧なさい。張郎橋と書いてありますよ」

「お前は字が讀めるのかえ」

「ゑゝ黒い字は讀めませんが、白い字は讀めます」

「これは張家と唐家と持合ひで作つたのよ。だから張唐橋といふのよ。お前さん、先きへおいでなさい」

「ねえさん、嚇かしちやいやよ」

「オホン、オホン」

「あらいやだわ。ねえさんがオホン、オホンといふもんだから、わたしはとう〱嵌つて仕舞つたわ。丸でゐぼ蛙のやうだわね。さあ渡つて仕舞つたから、此橋に用は無い」

と丸太を取除けやうとする。姉はよろ〱する。

「ねえさんが橋を渡るのを見ると、丸で白鼠が家移りするやうだわ」

と妹はホヽと笑ひこける。

「お前はよツぽど勝手者だよ。赤坊を生んでも年を取りたくない、といふのはお前のこツた。雀は雄に刃向ふとさ。小さい者ほど猛烈だ」

とこんな冗談を言ひ乍ら二人は橋を渡る。

「これ〱一寸お待ちなさい。今度はわたしが先きへ行く」

と標札を見てゐたが

「こゝよ、こゝよ、水叉坊と書いてある奥の方でなんだか幽靈のやうな聲がするぢやないか。いやだね、地獄のお迎へが來たのぢやないかね。鬼伯伯(クイパツパ)、鬼太太(クイタイタイ)。どうぞしばらく待つて頂戴な。にいさんの病氣がなほつたら精進料理を拵へて上げますわ」

「ねえさんのお料理は定めておいしからう」

「お前のはやわらかだ」

男は床の中でウン〱呻つてゐた。姉妹は側に近寄つて

「お前さん、わたし達の來たのが分りますか」

「ウン、分るには分るが丸で二つの蜘蛛のやうに見える」

「馬鹿々々しい。わたしどもを人參の容れ物にしてゐやがる」

「ウン人參はたつた一本しきやないが、もうスツカリ出枯ら

しだ」

（姉の唱）姉は男の胸に手を當て、まあまあほんにおいとしい。初めて逢つた其時は、色は白くて福々しい立派なお方であつたのに、今は四月の菜の花と見違ふばかりに黄ばみ果て、熱や寒むけでぼんやりし、脊は骨立つて稻の床、齒は亂杭と出ッ張つて、情けないお姿になりましたね。人に言へない話でもわたしの前では構はない。病氣のわけを聞かせて頂戴。

（妹の唱）手を伸べて額を探ぐると、おやま、ほんとに呆れたよ。初めて逢つた其時は、正月の梅、二月のあんず、三月桃の花盛り、赤い中にも色白く、白い中にも色赤く、つや〳〵しい顏色も今は八月木犀の、匂ひも失せて黄ばみ果て、水に落ちた瓜のやうに骨は露はれ脊は丸く、カマキリ同樣におなりだね。お前の病氣は肩の凝り、脊なかの傷から來たのでせう。人に言へない話でもわたしの前では構はない。どうぞ打ちあけて頂戴な」

といふと男は首を振り

「いや肩も脊なかも惡くはない。わたしの病氣は麥田の中の隧で、戸惑ひしたのが初まりだ。こないだ窓から逃げ出した時、池に嵌つてづぶ濡れになり、家に歸ると熱が出て、それからずつと寢込んだが、お袋の畜生、ひどいやつで、早く死ねかしとばかり、水叉坊に送り込み、湯水も飮めない此始末、きのふ姉が來たので、親爺に訴へてやらうと思つたが、まあ〳〵お待ちよ、年寄に心配掛けるものではない。愈々となれば、棺桶の一つ位どうにかしてやるといふ話だ。そこで俺れも覺悟して今はのきわに一遍お前達に逢ひたいと思つたのさ」

「そりやあマア可愛さうに、早速醫者を喚んで上げませう。お前は誰れに見て貰ふ積りだえ」

「どうせ醫者に掛るなら四人の大先生だ」

「四人とは誰れと誰れ」

「第一は包先生、包送終。第二は江先生、扛上坟。第三は夏先生、下泥團、第四は福建の名醫台先生、台老三」

これは語呂に合せて藪醫者を罵つてゐるのである。第一の包先生は包送終といふ名で、病人を殺すのが請合ひといふ意味である。第二の江先生は扛上坟といふ名で、江と扛と同音。人間を墓場へ送込むといふ意。第三は夏と下と同音。下泥團は丸藥の代りに泥團子を飮ませるといふ意味ならん。第四台老三は好くわからぬがこれも無論惡口である。

「未だほかにあるかえ」

「小東門の陸計康先生を喚んで來て吳れ。あの先生は内科は駄目だが、梅毒、癩病、かさが專門だ。それからもう一人、御殿

醫者の陳運芳先生を喚んで來て呉れ。あの先生は死人の着物を燒くのが專門だ」

こんな事を言つてゐる中に、町廻りの鍼醫者が鈴を振つて來た。姉妹は彼れを喚び込んで見て貰ふ。鍼醫者は男の脈を取つて無造作に藥箱を開けると、草根木皮が這入つてゐるので、そんなものは駄目だといふ。これが駄目なら、名あつて實のない藥、と鍼醫者先生しばらく考へてゐたが

「うむ、あるある。白い頭の鴉と七十二の屁玉を煎じて飲めば治る」

「そんなものはありませんわ」

「無ければ此方の命はありませんよ」

「おやまあ、どうしよう」

「あるある。今年の草屋の上にある來年の霜」

「そんなものはありませんわ」

「無ければもう見込みはない」

「おやまあ、どうしよう」

「あるある。黃いろい狗の頭の上の角」

「曲つた鱔魚の兩方のあばら」

「石像の頭から出た赤い血」

「蠅の頭の上にある兩股」

「蜜蜂の陽物二斤半」

「石臼の下の黑鬚黃」

「三歲の子供の水硬骨」

「お孃さんの赤い股引の中の血の尻當」

「そんなものは決してありますんわ」

「無ければもう迚も見込みがありません」

「おやまあ、どうしよう」

「うむ、未だ一つある。蛙の毛と蟹の血を取つて石臼の中に入れ、十七石の陰陽水を加へ、二擔半の燈芯草を焚いて、猪口一杯になるまで煎じ詰め、それを飲むと屹度なほります」

「そういふものは此邊の藥屋に無さそうに思はれますから、どうぞ貴方の家から持つて來て下さいまし」

「おすこへは今一寸行かれない。孃が內職してをるわ」

「そんなら一緒に行つて上げましよう」

姉妹は鍼醫者と一緒に行つたがまもなく歸つて、醫者の藥は無かつたから人參を買つて來たといふ。

「そうか、有難う」

「サア出來たから、おあがんなさい」

と妹は薦めた。

「おゝ大分元氣がついた。此調子では二三日內になほるかもし

れない。なほつたら一つ、あすこへ行かう」と男は言ふ。

(姉の唱)いえ〳〵行つてはいけません。今夜お前は此處へ寢て、あしたスツカリ好くなつたら、お金をどつさり上げますから、床屋へ行つて髮をつみ、風呂屋へ行つて垢を去り、剩つたお金で着物を買ひ、四馬路をぶら〳〵散步して、若し氣が向いたら灘黃を、佛蘭西タウンでお聽きなさい。なるたけ早目に切り上げて、わたしの部屋においでなさい。

男は同じ唱を繰返へしてうたひ、妹の意向を訊く。

(妹の唱)いえ〳〵わたしは放しません。ねえさんなんかと比ぶれば、わたしの方が金持だ。着物一枚何のその。お前があした治つたら、石路の町の中ほどに、大きな店を買ひ取つて、どんな着物も撰り取りだ。お前は今夜誰れと寢る。

石路は東京の柳原みたやうに古着屋の多い町。その古着は質屋の流れ物を仕入れるのである。

男は今度妹の唱を繰返へしてうたひ、姉の意向を訊く。

(姉の唱)お前は行くと言つたつて、わたしは放すもんですか。古着屋なんか何のその。質屋を出して下げますよ。お前はそこの番頭で、黃楊の算盤手に取つて、どんな着物も撰り取りだ。お前は今夜誰れと寢る」

姉妹は互に競爭して質屋から銀行になり、銀行から鹽屋材木屋になり、眞珠屋、瑪瑙屋、阿片屋、人參屋と躍り上げ、妹は商賣などは面倒臭いと、曾國藩、李鴻章のやうに、赤い總付きの帽子をかぶせて、八人昇の大輿に乘せてやるといふ。姉は妹に負けてゐず、北京へ行つて淸帝と相談し、位を讓り受け、かわゆい男を民國大總統にするといふので、男は遂に鏡を取つて自分の顏をよく見ると、色つやは一向好くなつてゐない。そうしてえたいのしれない吹出物が出てゐる。

こんなきたない旦那は、灘黃語りも唱ふのは御免だ。もうお罷めだお罷めだ。歌を罷めて奧へ行つてお茶でも飲みませう。

雙望郎の一節はこんなもので御座います。——雙望郎完——

【賣紅菱】三月三日の淸明節は凧揚げの日である。龍華鎭、薛家村の薛金春といふ惡太郎は、村一番の大凧を作つて揚げた。意匠といひ色合ひといひ、いかにも見事な出來映え、と自慢してゐるうち、忽ち强風にあほられて綱はふつりと切れた。あれよ〳〵といふ中に凧は龍華塔を掠めて隣村へ飛んで行き、范家村の桃園の中に落ちた。桃園の中には一人の美しい少女がゐた。これは范鳳英といふ女で早く父母を失ひ、叔父叔母に後見されてゐた。金春は少女の前に跪き、飛んだ粗相を致し

ました。お宅の屋根が壞れやしませんか。壞れたら左官を寄越して修繕させませう、と言つた。少女は笑つて

「いゝえ別に壞れたものはありませんが、花が少し散りました」

「では花代を辨償致しませう」

「花はどうせ時が來れば散ります」

と應えたので金春は嬉しく、只管詫び入つて凧を持つて出ようとすると、少女は引留め

「凧は表門から持つて出てもよう御座んすが、花は裏門から取りにおいでなさい」

と言つた。金春は此言葉がピンと胸に響いて晩になるのを待ち兼ねて范家の裏門に來た。少女は果して待つてゐた。そうして二人は遂に深い仲となつた。たびかさなるうちに叔父さんに感付かれた。叔父さんは或晩二人の寢込みを襲つて

「不義者見付けた」

と叫んだ。金春は面喰らつて北の窓から飛び出すと、叔父さんは

「泥棒」

とおめき乍ら追ひ馳けて來た。

金春は天の一字を覺えるのに二年半かかり、地の一字を覺えるのに三年かかつた代物だが腕ツぷしときては中々强かつた。それはふだん撥沙袋や弄石燈で鍛え上げてゐたからである。(いづれも力だめしの玩弄具)

金春は追付いて來る叔父さんを目蒐けて、おのれ何をと蹴飛ばすと、運惡くそれが急所に當つて、叔父さんは目を廻はした。泥棒の一聲に近處の者は吃驚りして馳せ集り、金春を取圍んだ。たつた一つの龍はいかに强くとも地廻りの蛇にはかなわない。忽ち手取り足取り繩に括られてお役所に突出された。

時の上海知縣葉古人は、二度の試驗に及第した良千石であつたが、金春を拷問に掛け、口供を取つて時もあらふに五月五日端午の節句に重罪犯の豫審書を作つた。金春の母は田畑を賣り、泣く〳〵袖の下を送ると、さすが淸廉の聞えある葉知縣も筆を曲げて三年の徵役に改め、金春を丹徒城へ送つた。一年程經つうちに運よく大赦に遇ひ出獄を許されたが、故鄕に歸つてみると、母親は病死して財産といへば麻ツ葉一つ殘らない。友達は見兼ねて何程かの金を醵めて、これをもとでに一苦勞して見ろと勸めた。そこで彼れは六月の炎天に土地の名物、蓮根と菱の實を仕入れてあちこちと布れ歩いた。

或日松江の北門外の茶館で一休みしてゐると、水雲林に上海から別嬪が來てゐるといふ話。金春はすぐに荷をかつぎ出し、

水雲林へ來てみると、なるほど新建の立派な家があつて松や檜がこんもりと繁つてゐる。こりやあ商賣が出來さうだ、と一きわ聲を張り上げて、「紅菱角（オンリンコ）」、と叫んだ。

お部屋の中では一人の美人が針仕事をしてゐたが、「賣紅菱角（マイオンリンコ）」の聲を聞いて慌てゝ出て來た。見ると草の帽子をまぶかにかぶつて、身なりもサツパリした男が、若い菱の實と蓮根を天秤の兩端にさげてゐる。

「ちよいと八百屋さん、その蓮根はいくらだえ」

「えゝこれは斜塘の本場物で御座いますから一斤が三十と六仙。菱は一斤十六仙。半斤が八仙、一個で三ツで御座います」

女は笑つて掛目を見たが錢をやる時、男の手のひらを捻つた。男は驚いて見上げると、誰れあらう、その人は紛ふ方なき范鳳英であつた。

「おやおや貴方は」

「叱、叱、八百屋さん。こつちへ這入つてお茶でもお飲み。此熱いのにさぞまあつらいことだらう」

と女は金春を庭内に引入れた。

「まあおめずらしい。まさか此處で貴方に逢はふとは思ひませんでした」

「わたしもまさか貴郎が八百屋さんになつてゐやうとは思はなかつた」

幸ひ其日は主人が外出してゐたので女中に鼻藥を呉れ、二人は打ち解けて話をした。女は不義をしたといふ廉で親戚に財産を沒收され、松江に賣られて人の妾になつてゐたのである。

女は金春の苦役の話を聽くと眼に涙を浮べ

「そうしてお前さんの家は今はどうなつてゐるの。子供衆でもあるのかえ」

「冗談言つちやいけません。女房が無いのに子供があるわけがありません。公事沙汰で財産を棒に振り、お袋には死なれ、何もかも無くなつて、たつた一人ぼつちになつて仕舞ひました」

「まあ可愛さうに」

「考へてみると凧がお庭に落ちたのが惡かつたのですね」

「本統にそうだわね」

と女は手筥の中から百兩ほどの金を出し

「これでお前さん、早く女房を持つて身を固めて下さい。人は世嗣ぎを作るのが肝腎です。わたしもねえ、子供は無し、かうして人の妾になつてゐるのは、どんなにつらいでせうよ」と涙ぐんだ。

「では折角ですから遠慮なしに頂戴してゆきます。これで棺桶でも買ひませうよ」と男も涙ぐんだ。女は慰め顔に

「清明節に墓參りにゆきますから、其時又逢ひませう。兎に角稼業をせい出して下さい。長いうちにはどうにかならないこともないでせう」

　金春は金を貰つてそこ〳〵に暇を告げた。そうして清明節の來るのを樂しみにして働いた。

「黄紅菱角(マイオンリンコ)」の聲も一きわ元氣づいて往來に響き渡つた。――黄紅菱おわり――

　灘黄の歌詞には一種傳統的の調子がある。それは數え歌のやうなものと、問答體と、頓挫抑揚である。數え歌は、人の生ひ立ちを唱ふ場合には歲を以て數える。例令ば七歲詩書をそらんじ、八歲繪を學び、九歲刺繡を習ひ、十歲琴を彈き、十一簫篌を彈じ、十二機を織り十三嫁に行くなどである。これは古樂府から傳統されたもので漢末焦仲郷夫妻の心中歌「孔雀東南飛」などが初まりであらう。前例「望雙郎」の姉娘の述懷「二年間はお母さんが抱きどほし」云々は同型である。又時候の方面では正月は梅の花、と先づ冠を置き其下に或る出來事を敍べ、二月は杏子の花、三月は桃の花、と十二月まで一々冠を置く。これは童謠、小唄によくある型で「望双郎」の妹の唱「三月桃の花盛り、赤い中にも色白く」はその調子を取つたものである。又問答體の方では「望双郎」の藪醫者が口から出任せの藥名を言ふ。わたしは省略して藥名だけ並べたが、原文には初じめ三回の問答と同じ型が十回まで繰返される。一體簡單な曲は幾度も繰返へすうちに音樂上の面白味が出るので、節調を聽かせるために歌詞の重複を厭はないのである。故に出鱈目の問答をなるべく長く續ける。その終りの方にある問答は、女の言つた言葉を男がそのまゝ取つて繰返へし、古着屋から質屋、質屋から銀行、とだん〳〵糶り上げて、遂に曾國藩、李鴻章となり、民國大總統で畢る。これは糶り上げ體の問答歌で、吹腔「小放牛」の問答歌とはちがふ。小放牛の問答歌は本稿の初じめ話本(二)に記した參講の變化であらう。

　頓挫抑揚は明代小說によくある型で「是れ別人ならず、何々縣で音に名高き誰れそれ」といふ口振りである。「望双郎」の「色男の病氣を知らずにゐればそれまでだが一旦知つたにはそのまゝにしては置けない」とか「父母は三男四女を生まなかつたが、わたし達姉妹二人だけ生んだ」といふのはそれである。殊に滑稽なのは、色男が逃げ出す時は必ず北の窓。娘を口說く時には必ず兩脚饅頭跪來浪(兩膝をついて)といつてゐる。これは勿論支那家屋の構造と情慾のために女に降服する滑稽味を見せてゐるのであるが、前の頓挫抑揚と共に節調に捉はれて

ゐる點が少くない。

尚ほ又灘黄の歌詞は、全部七言句で綴られ蘇州語を用ゐてゐる。「守双郎」の歌詞は隨分思ひ切つた馬鹿なものであるが、實演を見ると可成り面白い。これには三つほど極まり切つた演藝上の形式がある。先づ一人が述懐及來歴を述べ、次に相手となる者が一人現はれ、滑稽な問答を初じめ、それから道行となり、目的地に達し、更に一人或は二人を増すのであるが、通例四人以上、場面に上ることは無い。そうして述懐、問答、道行を重ねて畢るのである。(右は必ずしも人數が殖ゑるわけではない。上海灘黄の如きは生粋の口演式で、最初から一坐皆出揃ひ、彈手は勿論、唱手も坐席を離れない)

以上の如く灘黄は極めて簡單なる寄席演藝に過ぎないが、此處に見逃すべからざる一事がある。例令ば吃着嫖賭の四大道樂を誇り、無學文盲を自任し、私通姦通を褒めたたえてゐることは、彼等の趣味の低級といふよりも舊支那の社會缺陷に對する下層民の反抗精神と見るのが適當であらう。前例の「賣紅菱」のは此種の色彩が尤も濃厚であつたが譯文には省略した。

なほ徐傅霖氏が「中國文學研究」に寄せた「灘黄」の一篇は、好く「灘黄」の内容性質を示してゐるから、記載したいのであるが、頁の都合で割愛する事にした。

喜劇代議士候補者

田中貢太郎

故の政友會のきりもので今は世に亡き横田千之助君と血緣のある女を細君にしてゐる某君、痛快兒で徹底してゐる男だから、名を云つたところで別にねぢこんでも來ないだらうが、此の話に名は入用でないから假りに松崎君としておく。

其の假性の松崎君が此の前の總選擧の時、故鄕の武市といふ有志の許へ手紙を送つた。それは、すこし金が出來たから、今度の總選擧に中立で打つて出ようと思ふが、地盤の都合がつくだらうかと云ふ手紙であつた。其の武市君は松崎君とは親しい間柄であるから松崎君が痛快兒で、田も田畑も飲み潰して夜逃げ同樣に故鄕を出、東京へ往つて易者のやうなことをやつてゐることも知つてゐるが、男子三日見ざれば刮目して待て、金が出來たと云へば出來まいものでもない。そこは中央にゐる者の一德、何かの利權にありついたとなれば、一朝にして巨萬の富をなさないにも限らない。それにまんざら政治運動を知らない男でもない。候補者の費用が四萬や五萬かかる位のことは知つてゐるはずだ。それを知つてて金が出來たから打つて出ると云ふからには、金は大丈夫有るだらう、それに、まてよ、あれは横千の親類になつてゐる、ついすると、これは其の方から出ないとも限らない、良い鴨がかかつた。しめたと思つて、武市君は松崎君に返事を出すと、松崎君からも折返し返事が來て、いよいよ話がきまつたので、武市君は選擧區と定めた地方の有志へ急報した。

町長、村長、縣會議員、町村會議員、平有志、さうした有志は武市君の報を得て湧き立つた。此の次の總選擧の時まで待つてくれ、總選擧の時に拂ふ。總選擧の時まで借してくれと云つて、總選擧を大旱の雲霓を望むが如くに待つてゐる有志が金の確な候補者の立候補に湧き立つたのは無理もない。

武市君から松崎君立候補の報に接した有志の中に私の知人が

ゐた。知人は山崎と云ふ新聞記者。山崎君は武市君の手紙を讀んで腕を組んで考へた。と、云ふのは松崎君は山崎君と同じ村の生れで所謂ゆる竹馬の友と云ふ間柄、松崎君の長所も短所もよく知りぬいてゐるうへに、松崎君の村を出てからの松崎君に對する村の批評も耳にたこの出來るほど聞いてゐるので、大に考へさるを得ないのである。そこで山崎君は武市君に手紙を出して、あの男は與太だから何を云ふかも解らない。うつかり乘つてはいけないぞと云ふやうなことを云つてやると、武市君から今度はいいかげんなことぢやない、確に金も出來、本人も眞面目であるから、是非やらせたい、どうか××市へ出て來てくれ、打ち合はせをしたいと云ふ返事が來たので、直ぐ××市の有志會合の場所へ往つてみると、もう彼方此方から有志が集まつて來てゐる。

しかし、山崎君一人は未だ本氣にすることができない。冗談にして武市君と話してみると、武市君は一大眞面目で、決してそんなことはない、松崎君の方は僕が引受けたから、君は君の村を纏めてくれと云ふので、山崎君もはじめて其の氣になつて、直ぐ村へ引返して、村役場へ往き、村長はじめ助役收入役に逢つて松崎君立候補のことを話すと、

「あれがか、」

「何を云ふか判るものか、」

「あんな者が國會議員になれや、天と地とがひつくりかへるぞ、」

と云つて、何人も本氣にしないので、山崎君は、

「だつて、あれや横千の親類になつてるぢやないか、其の方からでも金がでないとも限らないぢやないか、」

と云つて、武市君の詞を受けうりして話してゐると、初めに嘲つてゐた者が、

「さう云へば、あいつは、何處か違つてゐた所があつた、」

「さうぢや、あんなことをしよつたが、何處か大きい所があつたと云へば云へる」

「こりや面白い、一つやつてみようか、」

と言ひだして、村一番の痛快兒のみせしめにせられてゐた者が、忽ち名士と云ふことになつたので、村會議員や頭だつた有志を集めて松崎君を推すことにして話を纏めた。

いよいよ村を纏めたとなると山崎君の責任は重い。ところで松崎君の選擧區となつてゐるのは、××市附近の三郡で、定員二名の所へ持つて來て、其所は當時の憲政會の巨頭濱口雄幸君の地盤で、濱口君は例によつて既に立候補を名乘つてゐるうへに、他にも二三の有力者が手をつけてゐるので、よつぽどしつ

かりしないと、當選はおろか法定數に漕ぎつけることさへなつかしい。山崎君は勢大童とならざるを得なかつた。

そこで山崎君は、××市へ用かけたり、居村附近の各村へ運動したりしてゐるうちに、選擧期も近づいて來たが、松崎君からは金も來なければ、本人も來ないので、そこは松崎君の平生を知つてゐるだけに心配でたまらない。朝晩に責任者の武市君をせめつけてゐると、やつと松崎君から是れから出發すると云ふ電報が來た。

南の國になつた其の選擧區へ來るには、大阪から汽船で××市へ直航するか、瀬戸内海を渡つて向ふ地から自動車で來るかの二つであるが、其の後の電報で松崎君は向ふ地に渡つて自働車で走ることが解つたので、山崎は有志達と其の順路となつてゐる市の入口の八幡宮の前へ往つて待つてゐると、豫定の時間をよつぽど遅れて、夕方になつて松崎君の自動車が來た。自動車の中には運動資金の入つた鞄があると思つたので、有志は松崎君萬歳を叫んだ。

松崎君はフロックを着て手提を一つ持つてゐた。札束の入つたやうな鞄はなくても、銀行爲替か郵便爲替なら手提でたくさんだ。山崎君は松崎君のフロック姿から押して大丈夫だと思つた。自動車の遅れた理由を聞くと、雨で道路が痛んでゐたからだと云つた。とにかく話は旅館へ着いてからだと、松崎君の旅館に定めてある××市第一の旅館○○へ送り込んだ。

松崎君が○○に入つたことが解ると、實行を見てゐた有志も集まつて來て活氣づいて來た。山崎君と武市君は一刻も早く松崎君に鞄の口を開けさして、有志を受持區域に歸し、其の晩から運動に着手さしたいと思つたが、松崎君はいくら待つても鞄の口を開けない。有志の方でも待ちあぐんで總元締の武市君に迫るが、武市君も着いたばかしの者にさうも云へないので、山崎君に、

「ぎんはどうだらう、」

と云つたが、山崎君だつて着いたばかしの者に直ぐ金のことは云へないので、

「明日のことにしようぢやないか、」

と云つて、二人で話を定め、有志に、

「今晩は着いたばかりぢやから、ぎんは明日のことよ、」

と云つて引き取らし、自分達も他の宿へ往つて、翌朝○○○へ出かけて往くと、もう有志が集まつて來て鞄の開くのを待つてゐる。山崎君にしたところで現金をつかまなくちや本當の運動ができないで、それとなく松崎君ににほはすが、松崎君は平氣でかまへてゐて、どうしても鞄の口を開けない。

さうすると有志の間に沙上隅語がはじまつて、ぼつぼつ歸つて往くものが出て來た。大事將に去らんとす。山崎君は氣が氣でない。そこで松崎君に、

「金をみなにやらんといかんか、」

と云ふと、松崎君は、

「自動車を乘りかへたりなんかして、金がなくなつた、」

と云ひ出した。四五萬の運動費を使はふと云ふ候補者が、自動車を乘りかへて金がなくなつたとは話の筋が通らない、と山崎君が呆れてゐると、松崎君は、

「これから△△へ行つて金をこしらへる、君も一緒に行へてくれたまへ、」

とあつさりしたもの。△△とは二人の故郷の村で、立候補すると云ふことで村の評判は一朝にしてかはつてはゐるが、それでも未だ松崎君にこんな金の融通をしてくれる人のないことは解りきつてゐる。それでも何人に借るつもりだらうと思つて、

「何人に借るかね、」

と聞いてみると、

「──さ、あの男なら五百位なら貸してくれる、」

五百圓や千圓で選擧が出來るものか。やつぱり與太だ。山崎君は泣きたかつた。松崎君の名ざした男といふのは、松崎君が遊んでゐる時に金を借りて手を燒かした金貸の老人のことである。

「そんなことを云つてたら、恥の上塗だよ、だめだめ、」

山崎君は松崎君に横すつぽの一つもくれてやりたいと思つて怒つてゐたが、それでも昔の友達であるから恥をかかせにやりたくはなかつた。それで山崎君は、直ぐ村へ歸つて村長はじめ村の有志に自分の不明を謝さうと思つて出やうとすると、松崎君が何時の間にか呼んであつた自動車が來てゐて、

「是非一緒に行つてくれたまへ、」

と云ふので逃げることもできず、仕方なしに其の自動車へ乘つて夕方に村へ行つてみると、何事も知らない村の有志は、村の生んだ名譽ある候補者が來たと思つたので、集まつて來て迎へた。山崎君は恥かしくつて仕方がないが其の場で云ふことはできない。松崎君を急がして目ざす金貸の老人の家へと行つた。

老人の家では其の日何か祝ひごとがあつて、家一杯に御馳走をかまへ、親戚や村の人をたくさん呼んでゐた。老人は昔自分にさんざん手を燒かした男ではあるが、國會議員になるまでに出世したと思つてゐるので、大に喜んで迎へ、山崎君と二人を

上坐に据ゑて御馳走をした。

「たいへんな御出世だ、」

「あなたのやつたことは、今から思ふと、人と違つてゐた、」

老人も客に來てゐる者も口ぐちに松崎君をほめそやしたが、山崎君は穴があれば入りたいと思つた。そして、客が歸つて行くと、松崎君は老人に、

「すこし、金をかしてもらひたいが、」

と云つた。それを聞くと松崎君と心よく話してゐた老人は、ふツつりと口をつぐんで他を向き、返事もしなければ、もう對手にもならなくなつた。それには松崎君も閉口したと見えて直ぐ共所を出た。しかし、外へ出ると、

「これから、叔父の所へ行かう、」

と云ひだした。山崎君はもう我慢ができないので逃げてしまつた。

一朝にして名士となつてゐた松崎君は、又元の痛快兒になつて其の夜の内に××市に引返し、何時の間にか東京へ歸つて往つたが、それから今に至るも松崎君の名刺には衆議院議員候補者と云ふ肩書が附いてゐるとは、最近山崎君が私に話した話である。

机龍之助の人間的興味

机龍之助の人間的興味

大菩薩峠の人物
——机龍之助——

田中智學

◇

何の因緣か、大菩薩峠を一讀して、ヒドク感心したから、その批評を「天業民報」に載せたので、大阪每日から轉載を懇請され、續いて著者中里君から、特に感謝の書を寄せられ、その後來訪を受けて、初めて相識るに至り、終に之が劇化を勸めた關係上、その脚色指導といふ人質に取られる迄に及んだ事は、よくよくの因緣と見える。

◇

「中央公論」からも、本篇の人物解剖とやらをして吳れと言ふて來た、脚色だけで可なり閉口して居るのに、解剖と來ては頗る難澁の次第だが、どうせ死屍の解剖だから、机氏の一命にも拘ることは無いと思つて、脚色の餘意を一二記して見る。

◇

著者は、しばしば聲言して居る「本篇には全く主人公といふものがない、强いて有りと言へば、各々一人一役で、皆主人公である」、これは爾うであらうが、世間では大抵「机龍之助」を主人公として居る樣だ、それも無理ではない、たゞ事件の起點であつて、人物の中心ではないといふ事に歸するかと思ふ、然し、何にしても「机龍之助」は、篇中の由々しきものである事は確かだ、人物の中心よりも、事件の中心である所の「机龍之助」は、一番多くの問題を脊負ツて居るに相違ない、變態心理者と片附けただけでは、何となく物足りない感がある。

◇

こゝに於て、著者が何故こんな人物を事件の主として、あの峠にたゞならぬ風雲を捲起したかと推究して見ると、著者の言明する所に依れば、そも〳〵此小說は、一切衆生の業相を曲盡して、大乘法樂遊戲三昧を、凡下の筆に描寫して見るためだといふ、即ち羯摩曼荼羅の素描だといふ意味に歸する、そこで事件が大きくなつた『一切業障の海は皆妄想より生ず』の佛語に照らして見ると、「机龍之助」以下、篇中の諸人物は、殆ど皆一種の變態心理者で、「机龍之助」が、その尤も精粹を究めたものと見られる、そこで此變態心理が、所謂妄想なのだから、これより展開して來る、事件そのものが、種々の業障を打開して、際限のない場面と事故を繰擴げて行く、その起點が「机龍之助」であつて、同時に妄想の深潭がこゝにひそみ、業障の波瀾もこれから湧出す

◇

「机龍之助」の性格は、一種不可解のものとなつて居るが、それは人間の業障が、無限性であり、心波識浪の幻出幻起する狀態を直寫したもの故に、爾うなる、實は極惡非道の事を行ひながら、決して固まつた惡人でもなく、無論意義明白な善人でもない、三性の中では、先づ「無記性」に屬した心的發作で、この事實に露はれた場合、殆ど先天的の兇惡狀を爲すといふ、その根原は、何から來て居るかといふと、家庭の事情でもなく、周圍の不遇でもなく、唯一つの根元思想が、劍から來て居る、「音なし」の武技を創見悟入した所から、その技の神境が、殆ど慢心を長じ、その慢心から魔心を生み、遂に妖劍となつて怪奇の性情を造り出し、この見慢の動きが、殺人鬼となつた、鬼は鬼でも、鬼態式でない、飽まで澄み亘つた、冷やかな、徹底した酷虐を演じて居ながら、それを兇暴とも感ぜず、豫備的惡心もなく、霧の如く起り、煙の如く去る、一種不思議な幻境に徂徠する、根本的無明的發動の如き狀態を示して居る、この間だに起伏する介在性の情欲は、亦一種の妖性を帶びて居るのは、妖劍の慢我から誘致作生して、おのづから常人ばなれのした、氣味のわるい冷さで、可なりな卒直味を以て展びて行く、お濱を見て、ムラ〳〵と凌辱心を起したのは、衝動でなくて、劍慢冷酷心の反動であらう、お豐に對するも、お銀さまに對するも、大抵異曲同工の「心發作」である、只一つ山ノ娘お德に接した場合と、時々幾太郎の事を考へさせられた時の瞬間とが、この人物に潛在して居る人間味の殘缺である。

◇

結構布置の妙は、本篇の最大特色であるが、この甚く所は、着想の高遠なのに在る、而して之を行るに行文の平衡を以てして、悠容迫らざる間だに、途方もない變幻を點出して行く、「机龍之助」の描寫に於て、尤も其妙を極めて居る、この對向の妙は、宇津木兵馬の平凡なる聰明篤實が、出沒往來して、この沈冷の怪人物に絡んで居るのと、呪ひの權化とも言ふべき、妖面の淑女お銀さまとの結び付きが、奇妙に龍之助の人物をアリアリとさせる、龍之助が篇中の核心たることは言ふまでもない。

◇

人さへ鮮かに斬れば、それで龍之助になると考へたら大違ひだ、近藤勇の人斬りとは、全然出發點が異つて居る。彼れは人間がする鮮やかさ、此れは鬼神の憑いた鮮やかさである。或人が「摩訶止觀」の寂而常照の呼吸だと言つたが、少し大袈裟だけれども、そんな氣味もある、要するに劍戟の幻性である。

◇

今度守田勘彌が龍之助を演ずるに就て、勘彌の皮を剝いで、その肉で言動を出し、その骨で精神を出せと言つて迄へた、どういふ風に形現するか、見た上でなくては、可否は言ひ得ない、澤正の龍之助は、ヒドク佳かつたといふ話だ、その上に出ることは、技巧のみではいかぬ、精神悟入に待つべきであらうと思ふ、一番早いところが、中里君の着想を會得することに在るとおもふ。

幾何學線上の亂舞者

大宅壯一

私は過日豐島與志雄氏と數時間に亘つて快談する機會を持つた。氏が文壇有數の不良少年通であるといふことはかね〳〵聞いて知つてゐた。だが、氏はその上に非常な高利貸通であることを、その時知つて私は大いに驚いた。

氏は言つた。

「我々は『金』といふものに對して、妙なこだわりを持つてゐる。友人の家へ行つて、煙草がなくなつたから下さいとは誰でも言へる。だが、歸りの電車賃がないから下さいとは容易に言

へるものではない。そこで僕は考へるんだが、大抵の人は金を使ふんぢやなくて、金に使はれてゐるやうな氣がする。僕の知つてゐる範圍内で、思ふ存分に金を征服し、支配し、驅使してゐると思はれる人間はたつた一人しかない。僕は隨分多くの高利貸を親しく知つてゐるが、高利貸の中にだつてさういふ人間はたつた一人しかなかつた。僕はいつかその男としみ〴〵話したいと思つてゐるうちに、惜しいことに死んでしまつた。」

强慾非道に金を追求したり、或は無暗に金を輕蔑したりする人は多い。だが、善い意味に於ても、惡い意味に於ても、金に對するこだはりから完全に解放されてゐる人は珍らしい。

このことは又、色慾についてもいへる。世間には色魔もピューリタンもざらにある。だが、善い意味に於ても惡い意味に於ても、男女關係のこだわりから完全に解放されてゐる人は珍らしい。

このことは更に、金錢や色慾よりも人間にとつてもつと大切なもの、即ち人間の生命に關する場合には一層適確にあてはまる。善い意味に於ても惡い意味に於ても、この人間の生命に對するこだわりから完全に解放された典型的な人物を描いたのが、「大菩薩峠」の主人公机龍之助である。

机龍之助は神そのもの丶如き自由人である。何者も彼を束縛しない。何物にも彼は執着しない。彼を縛するものはたゞ、この澆季の世に生をうけて、死に劣れる生活をしながら、而もいたづらに生をのみ求めてゐる人間の生命を絕つ刹那の快感ばかりである。彼はこの快感の搾取者である。蝶が蜜を求めて花から花へと飛んで行くが如く、彼はこの刹那的快感を求めて、次から次へと人を殺して行く。たとへ彼が新徴組に加つたとしても、それは決して幕府を擁護するためではない。又天誅組の仲間入りをしたとしても、それは決して王政復古をはかるためではない。この快感のためには、自分の妻をさへ平然として殺すことの出來る男である。間の山のお玉が生死の間を潜り拔けて、彼のため遊里に身を沈めたお豐の遺書を齎らし、お豐は自分の歌を聞いて世を儚んで自殺したのであるのであるから、いはゞ自分が手にかけたやうなものだと嘆き悲しむのを聞いて、「歌ふものは勝手に歌へ、死ぬものは勝手に死ね」と、容嘯くことの出來る男である。一切の現世の約束事から完全に解放され、一切の人間的感情を蹂躙して、生と死との間に横はる目に見えぬ線――幅も厚さもない幾何學的線上で、虛舞の舞踏を亂舞し得る超人である。

併しながら、我々にとつて最も興味のあることは、机龍之助といふ、虛無の「イデア」を示した非實在的人物そのものでは

なくして、かゝる人物を描いた作品が何故に現代人に歡迎されるかといふことである。

現代の社會は、机龍之助よりも、もつと無感情的な、もつと冷酷な、もつと殘忍な、もつと典型的なニヒリストたる「金」を主人公とする一大長篇小說である。彼は如何に完全に、感情を、思想を、學問を、藝術を、宗教を、教育を、名譽を、不名譽を、戀愛を、生命を、征服し、支配し、驅使してゐるかを見よ。これは嚴然たる事實である。而もこの事實が、教育家の說く「忠孝」や、宗教家の說く「愛」や、法律家の說く「正義」や、一般社會人がそれによつて互に縛り合つてゐる「義理人情」によつて、如何に曲げられ、歪められ、曖昧化されてゐることよ。現代人の生活は、これらの「忠孝」や、「愛」や、「正義」や、「義理人情」の間を巧みに潜り抜けて、等しく「利己」の決勝點に向つて突進すべく運命づけられてゐる障碍物競爭である。

然るにこゝに若し一人の巨人が現れて、この障碍物競走の規定を無視し、これら一切の障碍物を足下に蹂躪し、悠然として決勝點に向つて驀進したとすれば、「愛」の梯子に首を突込んで抜け出ることが出來なかつたり、「義理人情」の網に手足をからまれてバタ〳〵悶躁いたりしてゐる連中は、彼の巨姿を仰いで、如何に驚嘆し、讃嘆し、羨望し、渇仰することであらう。

人間の表皮を剝いで、その奥に動いてゐるエゴイズムを露骨に見せたものに、菊池寛の「啓吉物語」がある。女から女へと移つて行つて、何等良心の呵責を感じない男を描いたものに、三上於菟吉の「白鬼」がある。人間的感情を全然持ち合せてゐない純然たる「科學人」を描いたものに、スチブンソンの「ヂエキル博士とハイド氏」がある。だが、彼等はいづれもまだどこか「人間」であつて、巨人ではなかつた。皮と肉との內部にある骨を我々に見せてくれるX光線ではあるが、殺人光線ではなかつた。机龍之助がその巨人であり、殺人光線であるとは言はない。併し前者等よりもそれに近いことは事實である。

かゝる人物を主人公とする「大菩薩峠」は、「人間の諸相を曲盡して、大乘遊戲の境に參入するカルマ曼陀羅の面影を大凡下の筆にうつし見んとするにある」のださうであるが、一般讀者に與へる効果は極めて反動的で、人間相互の無差別平等を敎へないのみか、一切の差別の最も重要なる根源であり、人間の手で除去し得る諸罪惡の源泉である資本主義擁護のメガホーンの一つになつてゐるのは、奇怪至極である。この作品が今や日蓮宗などの軍國主義的要素と相結んで、顯著な反動的役割を演じてゐるといふ事實を、「平民新聞」時代の社會主義者中里介山氏は氣づいてゐるや否や？

終に、机龍之助は金錢に對しては極めて無頓着なやうであるが、想ふに、彼が刀と人の生命とを征服し、支配し、驅使するが如くに、完全に金錢を征服し、支配し、驅使する人物を主人公とする作品が若し現れたとすれば、一般讀者に「大菩薩峠」と反對の効果を與へることが出來はすまいか。尤も、イリヤ・エレンブルグの「歐羅巴の滅亡」のやうなものではいけないが、書き方如何によつては、素晴らしい革命文學になるだらうと私は考へるが、文壇沈滯の折柄、誰か介山氏の向ふをはつて、さういふ試みをする人はゐないか。

自然兒机龍之助

村松梢風

私は机龍之助の自然味が好きだ。

彼が、順禮を斬り、宇都木文之丞を斬つて、故郷を出奔して以來の漂浪生活といふものは、實に自然を極めてゐる。行雲流水の如く、何等の澁滯もない。風の吹くに任せ、水の流れに誘はれて行く處まで行くといふのが龍之助の生活態度である。無抵抗と云へば無抵抗無目的と云へば無目的に、其の場々々、其の日々々を過ごして行く間に、女もこさへれば人も殺すのである。徹底したる虚無主義だ。

此の虚無的自然味、一種の風懷といつたやうなものがあるがために、人ばかり殺してゐる龍之助だが、さして野蠻にもならず、殺風景、下品にもならないでゐる。其處が、机龍之助の面白味であり、讀者の同情を惹く點ではなからうか。

私は「大菩薩峠」を春秋社本で第四卷までしか讀んでゐないが、これ迄讀んだ處では、龍之助が山の娘の頭に救けられて其の家に寄食してゐるあの場面と、お銀樣と一緒に小泉家へ居候をしてゐる條が就中いいと思つた。どちらにも龍之助の自然味が横溢してゐる。彼の成り行き任せの運命の信奉者らしい態度が此の邊では殊に色濃く現はれてゐる。豪雨の日にお銀樣の歸りを待ち詫びたから獨り寢てゐる處から、洪水で家諸共押し流されてしまふあたりの描寫はユウゴオを想はせるやうな筆だが、それと同時に性格が完全に躍動されてゐる。

とにかく、龍之助は不思議な人間である。劍の玄妙に至つては並ぶ者はなく、そして無闇矢鱈に人を斬り殺すが、それと同時に一面に於ては非常に弱い人間だ。第一、肉體的にも精神的にも立派な病人である。宿命的に呪はれてゐる薄倖な人であ

る。人の生血を吸はねば生きてゐられないほど兇暴で、血も涙も無い人間だけれども、傲慢な處はない、むしろ、可成り謙遜で、弱氣な男だ。そして、前に云つたやうに、運命に對しては一切無抵抗である。其處に運命と性格の矛盾があり、此の氣の毒な英雄を活躍さすべきもろ〳〵の悲劇が生れて來る。ジヤン・ヴアルジアンを全然逆にした人間が机龍之助だ。彼が人道的英雄であるのに對して是は惡魔的英雄だが、運命的に薄倖な、悲慘同情に堪へぬ點に於ては一致してゐる。

それから、龍之助の劍である。苟くも机龍之助を論じる場合、彼の劍に觸れぬわけにはいかない。劍は龍之助の生命であり、彼の全部である。彼の性格の尖塔が例の『音無しの構へ』といふ劍法となつて現はれてゐる。これが龍之助を有名にしたところの直接原因であることも否定されない。

しかし、此の『音無しの構へ』といふのは、中里介山氏が架空に創造したものではなく、幕末時代のある劍客によつて編み出された實在の劍法の一流儀であつたといふことだ。此頃或人の書いたものを讀むと、小野派一刀流の名手中西忠太子啓といふ人の高弟である高柳又四郎の劍法がつまりそれだとしてあつた。此の高柳は非常に荒い劍で、竹刀にもあれ、眞劍にもあれ、一たび劍をとつて對手に向つたが最後、父子兄弟の見さかいのない、一意對敵と思へといふのが、其の仕合のモツトオであつた。加之、其の構へが、關東劍客の間に『音無しの構へ』と稱せられたもので、三本勝負のうち三本とも高柳の勝となつても、而も竹刀の音をさせぬといふ劍法だつたといふのだから、何んのことはない机龍之助そつくりである。

高柳は斯樣に劍に荒く、劍に強かつたが、其の劍は師忠太子啓の忌む處となつて、中西派一刀流の正統は兄弟弟子の淺利又七郎義信に相續せられてしまひ、高柳は遂に轗軻不遇のうちに歿したといふことだ。

机龍之助のモデルが此の高柳又四郎であるかどうかは知らぬが、劍道に明るい中里氏のことだから無論高柳のこともよく知つて居られると思ふ。高柳の所謂『音無しの構へ』からヒントを得て、劍、人、自然の一致融合した机龍之助といふ人間が創造せられ、それがやがて小說『大菩薩峠』となつたといふ風に想像して見ることも面白いではないか。

小說全體が愛讀せられる理由は、ひとり作中の主人公だけに係る問題ではないが、大菩薩峠の場合に於て、机龍之助といふ中心人物に對する興味が主因となることは勿論である。そして、彼が人に好かれる理由は、單なる英雄崇拜思想からではなく、其の虛無的な自然味が萬人の心を惹くのだらうと思ふ。

舞臺上の愛人「龍之助」

澤田正二郎

戀は盲目だとは、昔からの諺である。相手が惚れた男なら、あばたもゑくぼに見えるやうに、所詮、戀人は批評の外の存在である。私の、「大菩薩峠」の机龍之助に對する氣持も、正直に云へばその通りで、全く批評を超えたものであつた。

だがしかし、私がかほど戀する「机龍之助」とは、原作者がいふところの机龍之助とは違ふかも知れない。或は小説「大菩薩峠」の作者には思ひも及ばない龍之助であるか知れない。何となれば、私の謂ふ「机龍之助」とは、嘗て私が舞台上に創作した机龍之助であるから。もつと詳しく言へば、その龍之助は、小説畑に生えた「大菩薩峠」の種子を、別に、全然地味の異つた演劇畑に播いて育てた別の龍之助である。(これは如何なる小説の劇化にも已むを得ない當然の結果である)――しかもこれを栽培した私は、全然私自身の遵奉する私の演劇主義によつてその枝ぶりを作り、その葉を刈つたことは、これもまた已むを得ぬ演劇藝術の必然といはねばなるまい。要するに同じ松でもその松は別個の松である。同じ「大菩薩峠」の机龍之助でも、これは私の演劇術によつて創作された別の机龍之助である。言はゞ私は、松の木の有するあるよさを選んだのである。そして別に畑の異ふ舞台の上の松を創造したのである。自然そこには私獨自なるものがある。従つて、私の謂ふ「机龍之助」は、原作者が恐れる坊間作者の筆や、映畫の上に剽盗さることを憂ふることは少しもないものである。例へ何人が眞似やうと、何人が改作しやうと、儼として獨自の存在性を持して保ち得る私の藝術「机龍之助」なのである。

そこで私が、私の戀する「机龍之助」を批評する――これは甚だ困難なことになる。それは、とりもなほさず、私自身の創作を發表し、辯護することになる。これではどうしても批評にはならない。たゞ一と口、强いて言へば、それは難かしい法樂とか、悟道とか、さういふ言葉でもはなしに最も人間的なる藝術的法悦――即ち眞に演劇的なる藝術に即してベストの効果を期してなされた私の創作、これ以外多くを語る氣持にはなれない。と言つて、私の胸から、かくいふ戀人「机龍之助」の姿を除いて、そこに他の「龍之助」の思ひ描かれやう筈がない。かやうに戀人「机龍之助」を心に持つ私が、例へいかに力め

るにしても、その他の「机龍之助」を批判し云爲することは、これこそ許される「机龍之助」にとつて有利な譯がない。これは避くべきことであると同時に、またその時期でもあるまいと信ずる。

要するに私は小說「大菩薩峠」の机龍之助を批判するには、餘りに多く自分自身の「机龍之助」に心をひかれるのである。——これを以つて私の「机龍之助」觀に代へることにする。

（二月六日）

龍之助斷片

守田勘彌

○

机龍之助は多くの人々から興味をもつて眺められてゐるが、龍之助のどこに人々が興味を抱いてゐるか、言ひ換へれば龍之助に對する人々の興味と云ふものは果して共通のものであるかどうか、私は問題であると思つてゐる。龍之助と云ふ人間は實に色々の方面から眺められる人間である。單純である、と見えてその實複雜で、と見えて亦單純である。

○

今度の上演は、草双紙の口繪のやうだと云ふ評も一應肯首出來るやうに先づ大菩薩峠に現れる主要人物を一通り點出させたのであるから、從つて彼龍之助もこゝでは先づお目見得と云つた格で現はれるにすぎない。それでも中で一番彼を活かし得る場面は、大湊船大工與兵衛の船小屋の場であらう。

荒涼とした船小屋の夜を背景として、怪盜七兵衛、可憐なお玉、白衣で盲目の龍之助、そして蒼白い月光、浪の音、千鳥の聲である。こゝには陰慘な空氣と共に一脈の哀愁をそゝる詩情さへある。龍之助の蒼白く冴え澄んだ病的な性格とその人生に於ける孤獨な相とが比較的はつきりしてゐるやうに思ふ。

○

こゝで龍之助は「歌ふものは勝手に歌ひ、死ぬ者は勝手に死ぬ……」と呟いて、純情的なお玉を極度に憤激させるけれども、それだけ誠によくこの一語は彼と彼の人生とを表示してゐると云つてよからう。

一體龍之助の人生ほど、よく見ると何人の女がからまりついてゐるにせよ、孤獨で陰慘で寂寥に滿ちたものはあるまい。之は彼が極端なエゴイストであるからである。その言葉にも現れてゐる通り、彼にとつては「我」以外の存在は生きやうが死な

うが何のかゝはりも無かつた。彼の人生は「我」と云ふ存在の外の何物でもなかつたし、同時にその「我」ですら奉ずる所の何物をも持たない。「我」の存在さへも龍之助にとつてはたゞあるがまゝであつたのである。龍之助にあつては自分自身に對しても恐らく「死ぬ者は勝手に死に……生きる者は勝手に生きる」と呟いてゐたに違ひない。そして「斬りたいものは勝手に斬る」と云つてゐただらう。

この點實に齒がいゝ。人をバッサリとやつて居て、さて、「彼は斬らるべき運命にあつた」と常に呟いてゐるのである。

エゴにもこの位徹底出來ると、我々は之に反感や憎惡を挾む余地がない。のみならず一種の痛快な感じさへうける。何故なら私達はそこに勇敢な自己の代辨者をさへ見出したやうな感じがするから。慣習や道徳の前に心弱くも怖ぢてゐる自分達の代辨者を……。

机龍之助と云ふ極端に冷酷に見える人物に吾々が興味と共に好意をさへ抱かざるを得ないのはこゝに原因してゐはしないかと考へられる。

○

彼龍之助も子供に對する愛情は比較的强く持つてゐたらしい。而かも自分ではそれを意識することなしに。

○

龍之助のやうな性格はまた日本人には稀れな型であると云つてよからう。よく笑ひよく泣き人情的で淡白な一般日本人の類型を遠く脱してゐる。一體日本人と云ふものは、人の喧嘩も買つて出たがり、切腹を名譽としてゐるほど血の氣の多い人間であるのに、龍之助にはそれが全くない。天誅組最后の場面、島田虎之助闇打の箇所等には、これが對稱的に實に鮮やかに出てゐる。かの土方が、最后の一人まで及ばずと知りながら斬りかかるのは在來の日本人の型であり、「我遂に彼に及ばず」と冷然と眺めやるのは、龍之助の龍之助たる所以である。

この時には打算的にさへ見える澄み切つた冷やかさと云ふものは先づ普通の日本人にはない型だ。米友でも道庵でも七兵衛でも如何にも日本人らしい日本人の中に、彼龍之助の存在のみが我々に一種異樣な壓力をもつて迫つて來、大菩薩峠はこの特異な人物を描くのを中心としてゐやしないかと云ふ誤解をさへ抱かしめるのは之に因るのではないだらうか。

○

龍之助のやうな男に、何故女がひかれるかと云ふことは、寧ろ男から女にきゝたいことであるが、私なりの解釋によれば、それはあの龍之助の「犯されない」と云ふ所にあるのだと思ふ。女にはそれが一種森厳な厳正な時には神秘的な存在にすら

見える。女はさう云ふもの丶前に跪くことを喜ぶものである。

龍之助の何と云つても一番ひかれてゐた女はお濱であつた樣に思ふ。それもお濱の肉體であつたかどうか、（一體龍之助と云ふ人物が女の肉體に對してどうだつたかと云ふことは問題であると思ふが）私は恐らく龍之助はお濱の肉體でなく性格にひかれてゐたのだと思はれる。私の解釋ではお濱と云ふ女は余程强い性格を持つてゐた。芝居では龍之助を突かうとしてその場でかへつてとり押へられて斬り殺されることになつてゐるが、原作では、お濱が逃げ出してゆくのを追つかけて行つて刺し殺すのである。一寸した相違のやうに見えるが、私には之がなかなか重大のことのやうに考へられる。龍之助をして追つかけて來てまで殺させるものをお濱は持つてゐたのだ。ふだんの龍之助からゆくとにげてしまつたものは强いて追つかけないのが定石だ。俺が殺せるなら殺してみるがい丶と云つてゐたに違ひない。例へばその容貌がお濱に似てゐるからと云ふので心を惹かれたお豐は、彼女が心中をする時にも余程死にたい命だと云つて龍之助は嘲つてゐるし、またそのお豐が自分と江戸へ行く約束をしてゐながら、金藏と云ふ若者と龍神温泉に落ちて夫婦になる約束をしてゐるのを見聞しても眉一つ動かさない。追つかけて來てまで殺されるのは、さうさせるだけ强く龍之助を惹きつけておいたものがお濱にあり、また龍之助の對稱となり得る性格的强みと云ふものがあつたのだと解される。私が若し龍之助だつたらおそらくメソ〳〵した女は嫌ひだらう。

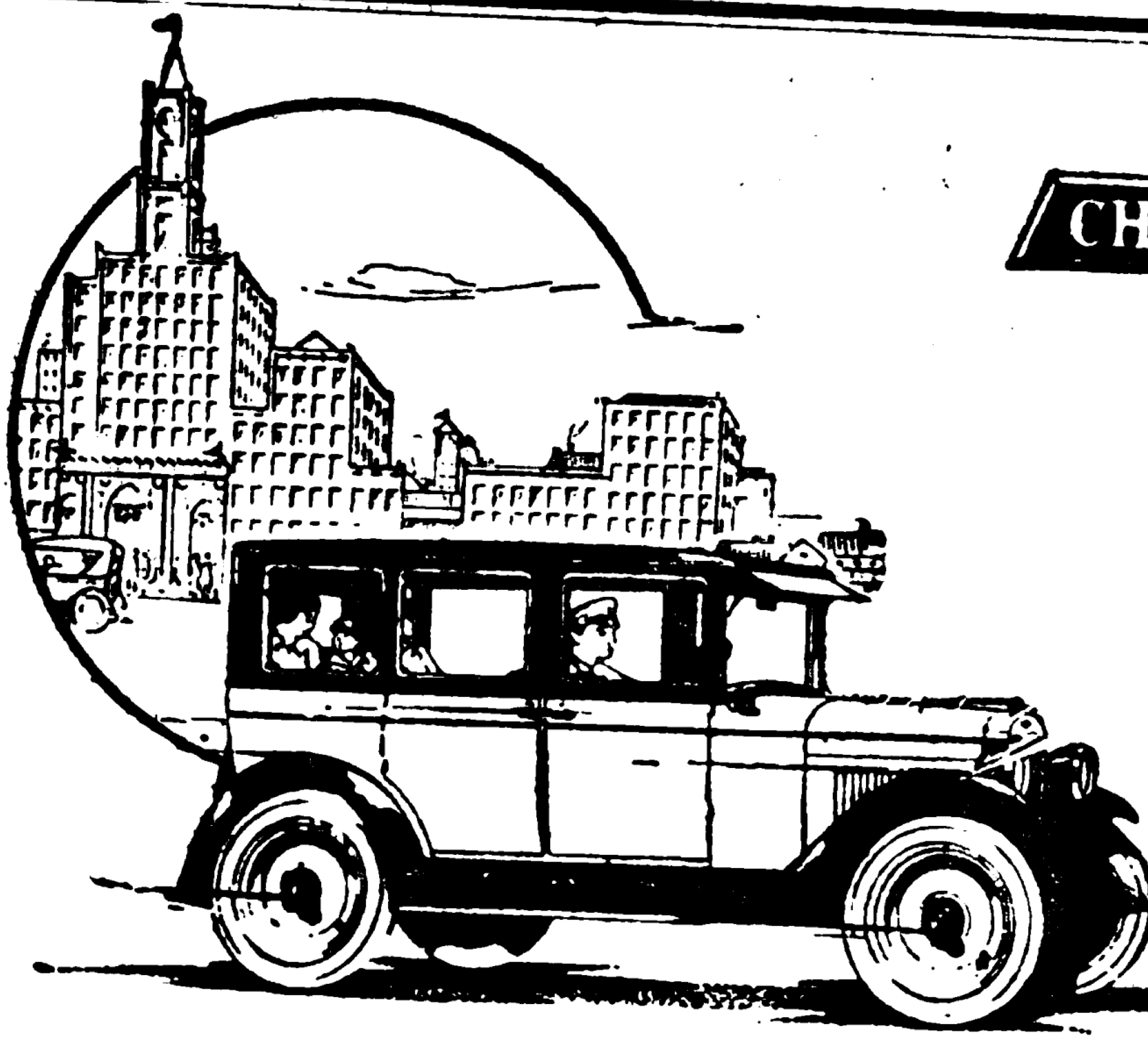
○

龍之助と云ふ人物は、見た所が、あれで人が斬れるかと思ふやうな、普通所謂殺伐と云ふ形容詞から想像される人間とは異つた容姿を持つた人間であつたことは想像されるが、同時に龍之助が單に劍を持つた時のみ、斬らずには止まない精氣が漲り現れたかどうかと云ふことは疑問である。彼の日常坐臥がそれほどまでに澄みきつたものであつたかどうか私は、觸るれば眞二つと云つたやうな鋭さが、彼の何氣ない談話や擧動の中にも時として閃めかなかつたらうかと思ふ。

私は龍之助は、その劍が「音無し」の構へであつたのみならず、彼の人生そのものが彼にとつては「音無し」の構へであつたと考へられる。

○

要するに龍之助の性格は作者も云つてゐる通り惡でもなく善でもない。中性である。一種病的であり變態的である。そしてそれは彼の環境から來てゐない。彼の生來であり、そして强ひて云へば時代の產物である。坪内博士の所謂「濡れ場」か「殺し場」か、血か色情か以外に興味を知らなかつた幕末頽廢期の所產である。



CHEVROLET

今日の自動車はシボレー號！

世界數百萬所有者の滿足

今日シボレー號は其賣行において世界中の他の凡ての自動車を凌駕して居ります。

それには明白な理由があります……即ちゼネラル・モータースはシボレー號を最も現代的(アップツーデート)な自動車として常に他の競爭車に一歩を先んずるやう非常な努力を拂つてゐるからであります。

更に云へば、過去十數年來ゼネラル・モータースの技術部と研究實驗所と試驗運轉場の責任者は、現代における最新最善の製造法を此シボレー號に適用し來つたからであります。

シボレー號は自動車製造において一切の舊套を脱却してゐます。常に最も斬新で最もアップ・ツー・デートであります。世界中の數百萬の所有者は一人として之を疑ふものはありません。

シボレー號は最早や試驗の時代を過ぎてゐます。御試乘の必要もない位であります。 直に御買求めの上、其實質上の價値と滿足とを御實驗下さい。

幌型 定價 金千九百五拾圓（大阪渡）

セダン型 定價 金貳千七百圓（大阪渡）

日本ゼネラル・モータース株式會社

大阪市港區鶴町一丁

唐人ハリス

清澤洌

タウンセンド・ハリスが死んで五十年になる。幕末の日本史に最も巨大な影を印したのはかれである。かれ一人あつて、日本の歴史は、その進むべき道を進んだといつてもいゝほど、かれは移り行く舞臺に大きな役割をつとめた。そのかれは何時の間にか、日本の公衆の眼から隱れ去つた。今年の十月一日、澁澤子、徳川公、米國大使等は下田町柿崎に、かれの記念碑の除幕式を行なつて、その記憶を多少新たにしたけれども、この程度で、かれに負ふた日本人の義理はすむのだらうか。この拙ない一篇を、かれの五十年祭に當つて、遙かにニユー・ヨークのかれの墓の前に獻ずる。

（一）黒船に日本美人差向けの奇策

黒船が、今度は何處に姿を現はした、どこの國のものだらうな、といふ噂が、引ききりなしに傳はると、國内は今更に一種の悪感と恐怖に脅えた。

特に米利堅から浦賀に來たペルリは、その態度が如何にも強硬であつた。日本の國法では外交の事は、一切長崎で取扱つてゐるから、長崎に行つたらよろしい、といつても、かれはいつかな浦賀を動かうとしなかつた。浦賀奉行の支配組與力などが、何回黒船を訪ふたか知れないけれども、ペルリは『最高の大官でなければ面會しない』と、自分では會ふこともしなかつた。多數の船が軍艦の周圍にゐるのが氣に食はないとあつて、『武力を以ても解散させる』と力んだり、早く返事をしないといつては、艦隊を江戸灣の奥深くに進めたりした。

今まで外國で、日本國民として多少共尊敬するに値するものは支那だとばかり思つてゐた。支那は兎に角日本文化の本家であり、文字や禮式の流れて來た源である。それは何といつても偉い國であるに違ひなかつた。これに對して歐米諸國は、當時

のわが國人から觀れば、猿の親類か何かの國としか映らなかつた。だからこの話しの餘程後で、明治政府が開國を宣言した時の建言書にも『是迄犬羊戎狄ト相唱候愚論ヲ去リ漢土ト齊シク視サセラレ候朝典ヲ一定セラレ』とあるほどで、『せめては歐米諸國を漢土と同じ程度に見てやる必要がある』といふのが、當時の餘程進んだ人の意見だつたのである。

この『犬羊戎狄の國』の黒船は、どうも正宗の名刀を以てしても、料理しにくかつた。嘉永六年に來たペルリ……Perry はペリーと發音すべきを、當時はローマ字を一つ〳〵克明に讀んで、ペルリで通つたことは説明するまでない……に對しては、一應の言質を與へて歸つて貰つたけれども、『來年又來る』といふ捨臺辭を殘して行つた。三河の萬歳じやあるまいし、そう毎年來られてたまるもんか。疱瘡の神樣と赤毛人は、一度の御入來で澤山だといふのが、當時の幕府の考へであつた。

『町人百姓でもよろしい。この際對外の奇策あるものは申出でよ』

米利堅からの書翰を和譯して總觸れとし、一般民間からも、對外策を募集したのは、いよ〳〵幕府の役人だけでは思案に餘つた後のことであつた。

この諮問に應じて、國內の各方面からは種々な奇策が集つた。

『遊女を集めて盛裝させ、酒や肴を携へて黒船に近づかせる。そしてその船の底には屈強な壯丁を伏せておく。まづ遊女をして充分毛唐人に酒を強いて、したゝかに醉はせおき、彼等が色香に迷つて夢中になつてゐる時、突然船底から壯士が踊りいで、縱横に切りまくるのだ。かうすれば彼等を殺すも捕虜にするも自由である。黒船は自然に分捕れる。……この旨建白候也』

かういつた意味の建白書もあつた。

昔から美人のためには城も傾け盡すといふのだから、奇策の間に婦人を挿むのは、彼等としては無理のないことであつた。伊豆の下田町に出張して、親しく外人と接觸し、彼等の鼻息の荒いのを知つた外交官連も、この鋭鋒を挫く方法がないだらうかと頭を惱ますことに違ひはなかつた。

『どうだらう、武ヶ宿へ數十名の賣春婦を置き、この女連にうまくとり込まして、毛唐人の鋭鋒を封じては』

『至極名案と存ずる』

下田奉行はこの事を幕府に建議した。幕府では時節柄眞面目になつて、これを討議した。

『大體結構とは存ずるが……』

膝を進めて口を切つたのは川路聖謨であつた。かれはその前の年、長崎に行つて露使と折衝した外交通である。

『私娼をおくのは、感心致さん。寧ろ公娼をおいてその目的を達せしめたら如何でござらう』

『それは中々名案でござる』

議が大分熟した時に、突然上座から大きな聲がした。見るとそれは飛ぶ鳥も落ちるほどの勢望ある阿部伊勢守正弘だ。

『わたしはそんな事には斷然反對だ。妙齡な婦人を彼等の玩弄物にして、それで外交上の成功を得ようなどゝいふ考へは、武士として恥づべき思想だ。そしてそれが好結果を得ようとは私は考へない』

鶴の一聲で折角の妙案は立ち消えになつた。それは安政元年九月のことである。その前年ペルリの黑船は約に從つて再び日本に歸つて來て、氣味惡い黑い煙が、浦賀、横濱、下田などの海風に流れ、それがまだその地方の語り草の中心になつてゐた。

（二）始めの使節としての責任感

米國第一回の總領事としてタウンセンド・ハリスが下關に着いたのは、かうした時であつた。一八五六年（安政三年）八月二十一日、焼けるように暑い港の町に、時々吹いて來る一陣の海風に生き返るような想ひをしてゐた。

ハリスは自分の乘つて來たサン・ヤシント號の甲板に立つて、これから自分の重大な運命を托そうとする國の陸地を、改めて見直した。港には離れてゐるので、町の模樣は見えないけれども、自分の船の周圍に集つて來た漁船によつて　この國の人が奇麗で、身姿もキチンとして居ることを知つた。この人々を眺めてゐると、ハリスの頭には再び、息詰まるような責任感が湧いて出るのであつた。

かれが支那海を通つて、始めて九州の島を見た時に、かれは生れて始めてといつてもいゝほどの感情に襲はれた。八月十八日の日記に、かれはかう書いた——

『日本の領土を見て種々な感情に襲はれた。私の將來がまざまざと私の心鏡に映つて來た。一方には精神的、社會的の孤立から來る不便があると同時に、他面重大な公務がある、そしてこれを適當に果せば、それは私の功に歸するものである。世界に殆んど知られない國民が、社會的、道德的、政治的に如何なる境地にあるかを調査し、報告せねばならぬ、この國の家畜、野菜、鑛物の産額は如何。産業の生産、貿易の能力は如何。彼等の必要品は何であらう。そしてこれに對してわれ等は何を買ひ

得るであらう。新しく、かつ困難なる國語を習はねばならぬ、恐らくは支那及び朝鮮の歴史にも何等かの光明を與へるであらうところの歴史を調べねばならぬ、更にまた諸種の宗教々派をも研究せねばならぬ。かうした雜種の考へが、私の胸中を領した、そして今後も決して怠屈する如きことはないであらう。ただ願ふところは、全身をあげて心からその仕事に從事せしめよ、そして神が、總べての仕事に必要であるところの健康を與へよ』

ハリスは萬感胸に迫つて、いつまでも甲板に立ち盡し、移り行く日本の島に眺め入つた。そしてその晩は昂奮のために寢られなかつた。かれの翌日の日記にはかうある――

『昨夜は寢られなかつた。日本のことゝ、私が近く從事するであらう義務のことを、私の心から追ひ拂ふことが出來ず、總ゆる眠る方法を試みたけれども、午前四時まで眠れなかつた。そして六時には起された、われ等の朝食は七時だからである。……文明國からの承認されたる代表者として、日本に定住するのは私を以て始めとするであらう。これは私の一生にエポックを作るものであり、また恐らくはそれは日本における新しい社會の始まりといつてもいゝであらう。庶はくは日本とその將來の使命を畫く歴史の中において、私が榮譽ある記述を得るに足るやうな行動をなさん事を。』

ハリスのかうした決心は、日本を見て始めて起つたものでは、元よりなかつた。かれにはまだ見ぬ日本が、何か知ら慕はしかつた。だからかれが日本に第一回の總領事たるべく大統領ピアースに志願の手紙を送つた時（一八五五年八月四日）にも

『私が日本に居る間、如何に社會的に孤獨であるか、また如何に精神的に淋しく住まなければならぬかについて、私は完全に知つてゐる。しかも私はこれに堪ゆるところの充分な用意がある』

と書き、更に『もし假りに私に對して、支那の公使となるか、それとも日本の總領事となるかといふ二つの選擇を許されるなれば、私は直ちに後者をとるであらう』といつて日本に對して强い執着を示してゐる。

このハリスの希望は幸ひにして大統領のいるゝところとなつた。同じ年の九月十二日に國務長官マーシーは、かれに手紙を送つて『大統領は貴下の東洋に關する知識及び商業上の經驗知識の豐富であるにかんがみ、貴下が日本人に對し、他日わが國と通商條約を結ぶに至るよう印象を與へることを希望して居る』といひ、なほ膝をつき合せて種々な打ち合せをするに至つたのである。

經驗知識において優ぐれて居つたにしても、ハリスは後で說くように學校教育の履歴のない一個の商人だ。それが大國を代表して最初の使節に任命されたのである。かれの生眞面目な心は責任感で一杯になつた。

『生命(いのち)を賭しても、米國と日本とのために、新しい行手を定めよう』

かれはニュー・ヨークを立つ時から、かう覺悟した。そして日本といふまだ鬼が棲むか蛇がすむか分らない土地へ、ヒユースケンといふオランダ語の通辯只一人を連れて遙々渡來して來たのであつた。

『只今、日本の役人が參りました』

感慨に耽つてゐたハリスは、船員の取次ぎに、われに歸つた。

(三) ハリス追拂ひの策

船に來たのは下田の役人であつた。

幕府でも下田でも、今頃、米利堅の代表者が來るなどとは夢にも思はなかつた。ハリスと話してゐる内に、事の重大性がやや分つて來た。試みにその時の對話書(速記錄)の初めを引用してみる。

對話書

七月廿一日未刻　港内碇泊之亞國蒸氣船江來意爲相尋問候下役齋藤源之丞同心合子鐵太郞通詞名村常之丞立石得十郞爲立合御普請役森澄小治郞御小人目付三浦鐵之丞罷越及對話候趣左之通

此方

一　當所の奉行は岡田備後守に有之何國之船にて何用有之渡來致候哉承度拙者は當所之役人に有之候

彼方

一　御奉行樣は御替り無之候哉先般ペルリ罷越候砌關係之御方に無之候哉拙者はアメリカ、コンシユル官名トウセント・ハルリス人名に御座候

此方

一　ペルリには關係不致候コンシユル始無恙入港大慶存候

彼方

一　忝存候

此方

一　本國何頃出帆致し候哉

彼方

一　十ケ月以前出帆今日當港入沖致候(後略)

かうしてハリスの來朝が、ペリーの所謂神奈川條約によつて赴任して來たものだと知ると、下田の役人は取敢へずこれを幕府に通知すると同時に、他面自分達の手で、かれを追ひ拂ふ策を講じた。

『領事といふものは、國際間に何かの紛議を生じた場合に派遣

されるものではないか。日米間には今、そんな問題がない上に、ペリーの修好條約第十一條では、日米兩國政府において必要と認めた場合に限つて、米國は下田に領事もしくは代表者をおくことが出來るとある。併し日本は曾て領事派遣が必要だと聲明したことはない。從つて今日貴官の來られたのは神奈川條約違反だ。早速お歸り下されたい』

下田の役人が、かういふ意味のことを述べたのも決して無理はなかつた。當時は日本の外交語はオランダ語で、しかもこのオランダ語をよく諒解するものは殆んどなかつた。この翌年(一八五七年)六月十七日のハリスの日記には

『日本の通辯のオランダ語は約二百五十年も以前に使はれた船長や商人の言葉だ。その後彼等は一字も新しい文字を教はらず、從つて條約、協定その他に使はれる文字に至つては全く無智だ』

とあるほどで、ペリー修好條約の條文が、英語と日本語で違つてゐたのが間違ひの原因であつた。即ち同條約の第十一條が、日本語では

兩國政府に於て無據儀有之候模樣により、合衆國官吏のもの下田に差置候も可有之。尤約定調印より十八箇月後に無之候ては不及其儀候事

とあるが、この同じ條項が英語では

There shall be appointed by the government of the United States consuls or agents to reside in Shimoda, at any time after the expiration of eighteen months from the date of the signing of the treaty, provided that either of the government deem such arrangement necessary.

(條約調印の日より十八ケ月を經過したる後何時にても、合衆國政府は下田に駐在すべく領事或は代表者を任命することを得、但し兩政府の一が右を必要と認めたる時)

となつて居る。日本側としてはこれを持出したのは至極尤もであつた。

七月二十六日(八月二十六日)の支配組頭若菜三男三郎調役勤方森山多吉郎以下の『亞人對話書』にはこの邊の對話が遺憾なく速記されてゐる。

此
一　官吏之儀條約之表には十八ケ月之後不都合之義有之候はゞ可差置と有之候得共差置候節は別段使節等有之談判之上取計候事と存候依て不意に被參候故居所等の設も無之候に一時に差支之趣に付見苦敷候得共玉泉寺江上陸可致と應合に及候義故右之譯柄熟考可被致候

彼
一　條約に十八ケ月後下田に官吏差置と有之上は既に治定の事に候

此　一　此方にては治定の事とは不致候間設けも不致且不時の變災等に付當節急に設け候義も難相成候

彼　一　兩國政府無據義有之は官吏可差置と條約に有之自國に於て無餘儀次第有之候に付此度差越候事に候

此　一　其政府に於て差支之義は素より當方にて知るべき謂無之自然官吏不差出候而不相叶節は前以て懸合之上差定候義と存候間差付被相越候而は前約通りと難申候

かうして日本側では始めは條約論でハリスの駐在をこばみ、つひには震災のために江戸も下田も荒れてゐて到底適當な家がないからと逃げたけれども、ハリスは何といつても承知しない。長い間『奉行は病氣だから』で引張つたが、これも永久に誤摩化せるわけのものではなかつた。

『下田に居ることが出來なければ直接に江戸に行く』

とハリスは云ひ出した。

田舍の下田に上陸することが既に問題なのだ。江戸に行かれてたまるものか。下田の奉行岡田備後守、江戸から來た井上信濃守に始めて、役人總がゝりでハリス撃退に努力したけれども、かれの決心をどうするわけにもゆかなかつた。

ハリスはつひに柿崎の玉泉寺に通辯のヒュースケンと二人相移つた。

（四）下田藝者お吉のエピソード

その頃、下田の伊勢善といへば、近郷に聞えた料理屋であつた。そこに奧から一人の若侍が鷹揚に飲んでゐた。

『お吉を招んでくれんか』

『お吉さんだけでよろしうございますか。誰か外の人でも……』

女中は平生のこの人のことを知つてゐるのか、かう云つてその顏を覗いた。

『今日はお吉だけでいいよ』

『よろしうございます』

暫らくして一人の若い藝者が來た。緋ぢりめんの長襦袢に、上着は亂達縞のお召縮緬、お髷づくめの服裝は、下田で一流の賣れつこ藝者だとは誰の眼にも映つた。韮山様の儉約令も花柳界にまでは及ばないらしい。

『私は伊佐といふものじやが……』

若侍は藝者お吉を傍に摺らして、かういふ席には不似ひな調子で語り出した。若侍が自から名乘つたところによつて、この侍が下田では評判のいゝ支配人組頭伊佐新次郎岑滿であること

が知れた。

お吉は伊佐といふ名前をきいて直ぐその用向きが分つた。黒船に乗つて唐人ハリスが、この地に來てから、かの女はこの唐人に侍るように手をかへ品をかへて勸められた。親しい者から勸められたばかりでなく、今までお役人から高びしやにいはれたことも二度や三度ではなかつた。

併しかの女としては唐人に侍ることなどは何としても嫌であつた。生れは船大工齋藤市兵衛の二女で、卑しい身分ではあるけれども、天のなせる麗質と聲のいゝのが評判で、『明烏のお吉』とか『新内のお吉』とか呼ばれて、今年十七才なのにもう押しも押されもせぬ一流藝者なのである。この地位を捨てゝ、何で唐人のお妾などにならう。

役人側としてはお吉をハリスに侍らせようとするのには、無論魂膽があつた。お吉が男優りの氣性であることは狹い町には有名な事實である。幕吏はこの特長に目をつけた。

『かの女によく云ひ含めてハリスの軟化を計り、そして領事の動作や内幕を内探させて、交渉の便を計らうではないか』

幕吏の協議は一決した。唐人ハリスにお吉を、通辯のヒュースケンにお福といふ藝者を當がうことにした。この報酬としてお吉には仕度金二十五兩年手當百二十兩、お福には二十兩に九十兩といふ額も決めた。

話はこゝまで取り運んだにかゝはらず、困つたことには肝心のお吉が何といつても、首を縱にふらない。

『なんでもお吉には鶴松といふ色男があつて、それだから拙者等のいふ事を諾かないらしいぞ』

暫らくするとかうした說も出た。それではといふので、鶴松を優待して、搦手からお吉を口說く方法もとつた。鶴松は船大工で、いふに足らぬ下賤なものである。そこでもし彼が、下田奉行組下の御用を、よくつとむれば、兩三年の中には日井筑後守に乞ふて組下御手大工とし、かつ苗字帶刀御免とするといふのである。鶴松がかうした誘惑に應じたのは無論である。

鶴松を内輪から說かして、幕吏は又表面から說得するの策戰をとつた。そのために乘り込んだのが伊佐新次郎なのである。

『君は無論知つてゐることだが……』

若侍の伊佐は、お吉に酒をつがせながら、かう口を切つた。

『君が唐人を嫌ふのは無理がない。併しこれはお國のためなんだ。昔からお國のために身を犧牲にして盡した婦人があるのは君も知つてゐるだらう。君が自我を殺してメリケン人のところに行き、彼等の容子を内報してくれゝば、これぞ誰にも出來ぬお國への奉公だ。君の俠氣を見込んで、これこの通り、男一

尼の伊佐が頭を下げる』

お吉は流石にそれ以上に斷りかねた。

『よろしうございます。參ります』

二人の間に劇的な沈默が續いた。

お吉とお福が唐人ハリスの居る玉泉寺に顏を出したのはそれから暫らくであつた。併しお吉には、幕吏側に內報するようなハリスの秘密は何にもなかつた。たゞそこには神と正義を愛する人格が、五十三才といふ初老の身體に包まれて居るだけであつた。

お福の方は若いヒユースケンに愛されて長く妾生活を送つたけれども、お吉は直ぐもどされた。ハリスは依然として獨身を守つた。

（五）ハリスの淸敎徒的一生

タウンセンド・ハリスは何故人情の春に背いて、一生家庭的には淋しい獨身生活を送つたか。……藝者お吉が舞台面に出て來て、われ等の注意は端しなくも、この點に引きつけられざるを得ない。

かれは何故結婚しなかつたか。それはかれの傳記を編んだグリツフイス博士の言葉を借りて來れば『かれと共に滅し去つたところの彼自身の胸にのみ疊み込まれた秘密である』。或はかれの母が非常にかれにとつて理想的な婦人で……グリツフイス博士は說く……婦人の典型として傾倒して居つた結果、かれはこれと同じような婦人を求めることが出來ないのを感じたのではなからうか。

この立派な婦人を母として、ハリスは一八〇四年十月三日、ニユー・ヨーク州のサンデイー・ヒルといふ田舍に生れた。先祖代々の淸敎徒で、かれは子供の時から嚴格なキリスト敎の空氣の中に育つた。かれの祖母は六人の兄弟の末子に生れたかれを、膝の上に乘せてあやしながら何時でも云つた――

『眞實を語れ、神を懼れよ、英國人を憎め』

と。その頃の米國人は、まだ英國の虐政を覺えてゐた。そしてそれが胸に徹して、子供の敎育にまで獨りでに出たのである。ハリスはこの三つの敎へを死ぬまで守つた。かれは一生英國製のナイフを使はなかつた。また英國製の洋服を着なかつた。何時でも身姿はキチンとしてゐたけれども、かれはその洋服の布地が、必らずフランス製であることだけは注意した。後年江戸において、英國公使アルコツクと對日政策その他の意見が合はなかつたのは、元より大義名分のためからではあるけれども、またこの子供の時からの感情が交つてゐたのは疑へなか

つた。

ハリスは學校教育は、たゞ田舍の小學校と中學校をやつたにすぎなかつた。それも十三歳の時に父に連れられてニュー・ヨークに出て、雜貨商の小僧になつたのだつた。その後父や兄と共に獨立して瀨戸物の商賣を始め、かれが東洋に來る頃までそれを續けた。

かうして忙しい間に居つても、かれにとつて幸ひであつたことは、かれの母が親切なる教師として、絕えずかれを教へ導いてくれたことであつた。兩親とも讀書が好きだつたから、家庭には本が澤山あつた。母と子は夕陽が西に沈んで、星の光があの廣大な平原を照らす頃まで讀み、かつ語つた。そして時には激しく議論をすることすらもあつた。

同じ家に、兩親を亡くしたハリスの姪が同居してゐた。ある時のことである。

『お前はこんなものを讀んでゐるの?』

かれは自分の姪が、小說を讀んでゐるのを見て、突然かういつてそれを火の中に投げ込んだ。

『叔父さん、ひどいワ。燒いちまうなんて』

若い娘は泣き出した。

『泣くものがあるもんか。それこれをあげるよ』

娘が眼をあげてみると、そこには七十冊の本があつた。それは有名な婦人著作家の書いた歷史やら傳記やらいものであつた。娘の泣顏は直ぐ笑顏に代つた。

母親に心から心服してゐたかれは、その母親に對する尊敬を一般女性に向けるのは當然であつた。かれは當時ノーザン・ディスペンサリーといふ藥學校の評議員であり、また委員であつた。かれはそこで何時でも劇しく臨床講義の實行に反對した。

『貧乏な婦人が、衆目の的になつて、自身を中心に講義され、それがかの女の纖細な感情を損ふことは、婦人に對する侮辱である』

それがかれの論據であつた。その議論の是非はこゝではいはない。かれの婦人に對する態度はこの一事でも分る。かれはその頃よく英國に行くことを勸められた。併しかれは母をおいて家を放れることを拒絕した。その代りを何時でも兄貴がつとめた。

かうして平和な生活に終焉が來た。それはかれの愛する母親が死んだのである。一八四九年の十一月、冬の寒い夜が、地上に忍び寄ろうして居る頃、母は呼べど歸らぬ旅についてしまつた。母なくして何の成功ぞ、何の幸福ぞ。折も折とて不景氣風は全米に吹いて來た。かれは店をしめ、失戀……母に對する…

…の苦をカリフォルニア州と東洋の地に求めることにした。

かれは船を一艘共同で買つた。そしてケープ・ホーンを迂廻して六ケ月を要してサンフランシスコに來た。かれは船に乘つて太平洋の愉快を知ると、かねて頭に畫いてゐた東洋に行つてみたくなつた。かれが東洋との貿易を始めたのはそれからである。

一八四九年のクリスマスは此太平洋の海上で、一八五〇年はマニラ、一八五一年はペナン、一八五二年はシンガポール、一八五三年は香港一八五四年はカルカツタ……から並べて來たゞけでかれの東洋の生活振りを知ることが出來るであらう。始めは成功した貿易も、終りには餘り面白くなかつた。かれは結局東洋における米國の外交官たることを望んで、これを得たのである。かれが曾てニユーヨークの教育會に長であつた時代の友人も、この任命に力があつた。

『かれはアメリカの淸敎徒の家庭の純正なる産物だ』……グリツフイス博士の言はかれの全的性格を云ひ現はし得て妙である。そしてこの人を第一回の外國代表者として迎へた日本は、極めて幸福であり、また日本の重要なる歴史の一部は、かれによつて作られたといつて過言ではない。

（六）　唐人を排斥した當時

私はこの夏下田に行つた。タウンセンド・ハリスの史跡と、また殘された材料を搜さんがためであつた。

ハリスが約一年三ケ月閉ぢ籠つてゐた柿崎の玉泉寺は、下田から一里半もあらう、細い道を這入つて、更にそこを左に曲つた丘腹にある。極めて不便な、併しこの場合ハリスといふ持て餘し者を押し込めておくには頗る格好な場處である。ハリスが始め、かうした場處に住居するを拒んだのも理由あることであり、また幕吏側が口を極めて、同處以外に場處のないのを說いたことも各自の立場から理由あることである。

古い、ハリスを憶出すに格好な寺院であらうとばかり思つてゐた玉泉寺は、スツカリ新しいお寺になつてゐるのに、私は輕い失望を感じた。昔と同じなのは間取りだけで、柱も壁も全く新しいばかりでなく、寧ろ毒々しいペンキで塗りたてられてゐた。聞くと澁澤子や德川公達の肝煎で、寄附金を集めて修繕したのだといふ。どうせ保存するなら、その儘に保存の方法がなかつたものか。私は新しい疊の上に立つて、親切な人々に對する不滿をすらも感じたのだつた。

それでもその當時の記念品が二つ三つあつた。床下から拾つ

たといふ葉卷や、かけたガラス器具やが、硝子張りの戸棚に並べてあつた。その外に幕吏の書いたものであらう、お家流の字で卷紙に『サケのことフシケと云　一ヲヌン、二ヲテワ、三ヲテフルイ』などゝ書いた、オランド語らしい覺え帳もあつた。

ハリスの日記には、十月廿二日（一八五六年）の分に、『私の健康はよくない。……この原因は足部の傷の外、二つある。第一は屋外散歩が出來ない事、第二は煙草を吹い過ぎる事である。後者は廢さなければならない』とあるがこの葉卷は或はその時にでも床下に捨てたのではないだらうか。私は一寸ありそうもないことを、かう結びつけて、七十年以上の孤客の動靜をしのぶのだつた。

そこへこの寺の住職の夫人であらう、若い婦人が出て來た。

『この部屋が支那人の料理番の居つたところです、こゝが通辯の居つたところです』さういつて説明してくれた。

『何かもつとハリスの殘したものやなんかありませんか』

私は聞いた。

『なにしろその頃は、唐人に對してはお上がやかましくて、口を利くことさへも出來なかつたさうです。ハリスが散歩に出てお菓子を子供にくれると、役人が來てこれを取りあげたといひます。この近くのお婆さんで、ハリスが江戸に行くときに、西洋流の風呂桶を貰ひましたが、役人が八かましいといふので夜コツソリ海に捨てに行つたといふほどで、今何にも殘つてゐません』

この婦人の話しは、私にはよく呑み込めた。これもハリスの日記の中にある話しだが、かれが乘つて來たサン・ヤシントの船醫が下町の店で買物をしてゐた。そこへ皮膚病のある一日本人が來て診て貰つた。（吉田松陰が疥癬であつたことゝいひ、その頃は皮膚病が多かつたと見える）。船醫は親切にかれを診察した後で處方箋を書いてやり、それを船に持つて行くように告げた。かれは幾度も頭を下げて、感謝して去つたが、暫らくすると、眞青になつて歸つて來た。船醫に出したのを見ると、それは先刻與へた處方箋である。かれはそれを無理に船醫の手に押し返して、『もしそれを船に持つて行けば、私の首をチョン切られる』と手眞似で述べたといふ。

ハリスの船から持つて來た食物は餘り澤山なかつた。かれが全く形と内容の異なつた日本の食物のため、どれだけ困つたかは想像に難くない。かれが健康を害したのはこれに原因するといふ點に、多くの歷史家は一致して居る。ハリスはせめて牛乳が貰ひたくて、幕吏に交渉したけれども、彼等は頑として應じなかつたことは、左の文書でも分るであらう。

安政三年八月

井上信濃守
岡田備後守

老中宛

當節滯留罷在候アメリカ官吏儀爲養生相用候由を以て牛乳渡方之儀に付右は相渡候儀難出來段支配向之者差遣し及斷申候依之其節之對話書一册相添此段申上候以上

今から見れば、牛乳をアメリカの總領事に與へられない理由、そしてそれを老中にまで報告せねばならぬ重大性は何處にあつたらう。併し笑つてはいけない。それが當時の空氣だつたのである。

これから述べようとする……道草を食つて肝心なハリスの事が述べられなくなつた憾みがあるが……ハリスの行動についても、その背景はかうした思想につゝまれて居つたことだけは記憶するを必要とする。

（七）日本人の『嘘付き』と無數字

日本人は由來『腹藝』だの、樽俎接衝だのと兎角駆引きをやりたがる國民性を有するところに持つて來て、ハリスが謂はゞ歡迎されざる客である。岡田備後守に始めて、幕府の役人は、今日は病氣、明日は都合が悪いと、よくその場限りの出鱈目を云つた。それに加へて一般の民衆も、外國人に對して正直に出來て居らず、玉泉寺の前に樹立すべき旗竿を注文したら、その代價一本七十八ドルを請求されたとハリス自からが書いて居る。

ハリスは下田に着いてから、日本の役人が嘘つきであることを直ぐ知つた。かれはこれをどれだけ嫌ひ、呪つたか知れない。その日記の中には屢々『嘘付き』といふような字を使つてゐる。九月十一日の日記の中にはかうある――。

『私は彼等(役人)に對し明白に、彼等が嘘を吐いてゐると告げた。そしてもし彼等が私の信用を必要とするならば、常に眞實を語らねばならぬ事。またもし私の要求したことが、彼等の許し得る權限外にあるものであり、或は又協議を必要とするものであるならば、たゞ直ちに回答し得ない旨をいへばいゝではないかと述べた。然るに私に嘘を告げるのは、これを子供の如くに待遇するもので私はそれを侮辱と考へる。私の國では嘘を云つたものは恥かしめられ、また何人かゞ「嘘付き」といはれゝば、それは何ものよりも大なる侮辱である。將來彼等が私に眞實を語ること、そしてそうすることによつてのみ私は彼等を尊敬することを告げた』

このハリスの心理狀態は、日本側にはよく分らなかつたらし

い。翌年の一月に對話書にかうある。

昨廿二日於御用所應接

官吏申聞候件々不都合の廉に有之委細可申談處悉く立腹致し右更に申聞候儀聞請不申列座いたし居候御徒目付を指し事柄は不相分候得共頻りに罵る様子に相見亦は給仕之者茶持參候を見請差出に不及との儀にも可有之手を振拂ひ除け候様都ての手爲發狂人之體に付強而及引合候て一向憤怒も相募候まてにて趣意も通兼候に付對話相止申候右の通りに御座候

十二月二十三日

對話者　井上信濃守
岡田備後守

ハリスが兎角機嫌が惡かつたのは、長く柿崎に閉ぢ籠められて氣がムシヤクシヤして居つたからであるけれども、またこの駒引きや嘘言がかれの氣を腐らしたのであるのは疑へない。一八五七年一月八日の日記には

They are the greatest Liars on earth.

とまで云ひ、また六月廿六日には

『日本人には嘘をいふことは即ちたゞ喋ることである』

と書いて居る。

更に日本に住して一ヶ年以上を經た一八五七年十月二十七日付で、ペリー提督に送つた末尾には『あなたの取つた手段は日本人にとつては、最上の方法である』とて暗に高壓的な方法の已むを得ざるを述べ『下田におけるM・Yはなほ嘘をいふ術を忘れずに居ります』と結んだ。M・Yとは通辭森山榮之助のことである。

日本人の特長の一として嘘をつくことを發見したハリスは、他の特長として、日本人に數字のないことに吃驚した。かれは下田に定住した暫らく後に、かれを訪問した森山に、持ち來つた地圖を示して、江戸の人口を質問した。森山はそんなことを聞く阿呆があるものかといつた顔付きでかういつた。

『江戸は大變大きな町です、そして毎日出たり入つたりする人間が澤山あります。こんな大きな町で人間の居る數が分るもんですか』

それからこんな事がある。ハリスは岡田備後守に『下田から大島まで何里あるか、と聞いたら『二十五里ある』といつたので笑ひ出した。ハリス自身の計算では木崎から七里即ち十六マイル以上を越へてゐまいといつてゐる。

『日本人が平氣で、分り切つてゐることでも嘘をついてゐる證據である』と、かれは背いた。

そこに行くとかれ自身は流石にアメリカ人であるだけ數字は確かだ。翌年（安政四年）の十一月卅日に、かれは江戸に入つ

たが、その時に、かれを見るために通路は見物人で一杯であつた。かれは乗物の中にあつて直ぐ數へてみた。

『予はこの群衆の數を十八萬五千人と概算した。これは品川から予の旅館までの距離を七マイルと見積り、その間列を作れる見物は幅二フイート毎に一人と假定し、人牆の厚さ五人と計算したのだ』

この外、幕府の役人は日本の船舶のトン數についても、ハリスに油をとられたことがあるがこゝでは述べない。かれは餘り違ふので日記には『日本の所謂トン量は、西洋のトンとは全く相違するものであらう』と日記には書いて居る。

いづれにしても日本の産業状態の統計を得ることを重大なる任務の一として來たかれは、この點では全く失敗せざるを得なかつたのである。

（八）大名行列で江戸に入る

かうしてかれは日本人の缺點に對する批評は最後まで持つてゐたけれども、そして日米條約締結の談判が少しも進行しないので、隨分脅し文句も云つたけれども、併し日本と日本人に對する根本的な同情は少しも變らなかつた。それは日本に對する同情といふよりも、正義と信じて自から守る强さと云つた方がいいのかも知れない。

かれは米國に生れた者として、日本の極端な階級差別が氣に食はなかつた。談判の時に、奉行が傲然と構へて、通辯が畳の上にへタばるやうにして居ることなどは、分らないものゝ大將であつた。だから幕府の對話書にも、これについてかれに抗議されたことが書いてある。

彼方

一 御奉行衆へ　於御用所御面談致し候節通詞のもの着座にて通辯致候處此方にては御役人方一同腰掛け相用申候右は甚無禮之筋に而矢張着座にて通辯有之度候

一 右は奉行罷越候節腰し掛け相用候儀に付着座に不及是迄之通取計度候

かういはれて幕府側（支配組頭若菜三男三郎等）は、『是迄之仕來を改候儀は自分限り難取計候へとも』と、腰掛けを用ひるか否かのことまで、最高の指揮を仰がねばならぬことを述べてゐる。

どんな些事までも、その命令が江戸表から來て居ることを知ると、ハリスは益々始めの決心通り一日も早く江戸に出て大君（將軍のことを Taicoon といつてゐた）に會見せねばならぬと焦せつた。この間アメリカからの御用船が來ないことと十四

ケ月の長きに及んだ。また米國の國務省から何等の通信も訓令も受取らぬこと十八ヶ月であつた。三月九日（一八五七年）に帆前船メセンヂヤー・ヴアート號が來た時に、かれが如何に喜んだか、僅か數葉の新聞紙をしやぶるが如くむさぼり讀んだかは、その當時のかれの日記に明らかだ。

かうして天涯の孤客であるところに持つて來て、自由に榮養を採り得ないことが、かれの健康を害した。かれの行動が、時時神經的であつたのに對しては、われ等は充分の同情を寄せ得るのである。

併しハリスの忍耐は、つひに酬ひらるゝの日が來た。かれは江戸行きを許され、將軍が會見する旨を通知して來たのである。かれの健康は、この通知のために急によくなつた。かれが下田を出發したのが、一八五七年十一月廿三日（安政四年十月七日）初冬の空はすみ渡つて、寒林が朝日に光つてゐた。かれは馬上に跨つて憶出多き玉泉寺を出た。米國の星條旗がハタハタと風に飜つた。

一行の行列は總數三百五十名『下に居ろ』『下に居ろ』と下座の觸れ聲勇ましく進んだ。ハリスの驚いた事は、どこに行つても見物人が、山のやうにゐたことであつた。それが通路にござを敷いて靜かに見送つた。三島の驛で『何故こんなに多いのか』と通譯に聞くと『貴官の御通過が數日前から近郷に知れ渡つたから、その盛況を見に來たのです、中には百マイルも遠方から來たものもあります』といつた。

これは無理はなかつた。幕府はこれより先き、ハリスの江戸入りを發表したのである。それにはかうある。

記

豆州下田表在留之亞墨利加官吏儀國書持參江戸參上之儀相願候處右は寛永以前英吉利人等度々御目見被仰付候御先蹤も有之且條約爲取替相濟候國之使節は都府へ罷越候儀萬國普通常例之趣に付近々當地へ被召寄登城拜禮可被仰付との御沙汰に候此段爲心得相達候

右之趣向々へ可被相達候

箱根からかれは馬を捨てゝ、自から注文して造つた特別大の籠に乘つた。そして一行はあの箱根の關所へかゝつた。

今まで躊躇してゐた下田奉行は、漸く意を決してハリスに云つた。

『日本國民でこの關所を通る者は、誰でも關守から檢査を受けます。例へば毛利、島津の諸公でも、乘物の扉を開いて關守の檢査に任すのです。無論一片の儀式ですが國法だから服從せさるを得ません』

ハリスは直ぐ答へた。

『日本臣民は日本の國法を遵守することは當然だ。併し予は米國を代表する外交官である。國際公法上の特權として、日本官吏の査問を受ける謂れがありません。貴官は私の身分を知つてゐるのですから、たゞ「この乘物中に米國使臣ハリスあり」といへば充分ではありませんか』

『それでは閣下』副奉行は哀願した。『閣下は馬にお乘りになつて關所を通過して下さい。私は空虛な乘物を關守に示しますから』

『どんな形式でも、私の乘物は絕對に檢査するを許さん』

副奉行は、さすがに怒つてその語氣は自然に荒かつた。

『閣下がその點で少しも讓歩されないならば、仕方がないから急使を江戶に馳せて幕府の訓令を受けます。その間五日間を要すると思ひますから、この山上で待つて下さい』

『こんな小さいことのために、五日間は愚か、五時間も待てるものか。よろしい、もし予の特權を無視して、飽くまで予を査問するならば、予は直ちに下田に引き返すばかりだ』

引きかへされてはたまらない。副奉行は青くなつた。關守と相談すること二時間で、ハリスの主張は通つた。

川崎に來た時が丁度日曜であつた。下田を出たのが月曜日だからこゝまで六日かゝつたわけである。かれは熱心なるキリスト信徒として、日曜だけは如何なる場合にも業を休み、聖書と祈禱に費して來た。かれは將軍家の膝元を去る十三マイルの地で、日本において禁制である宗教による安息日を守ることが出來たのを心から喜んだ。

（九）ハリスの閣老對手の大演說

その當時、將軍にお目通りといふことは大變な問題であつた。殊に『夷狄』を近く召されるといふ報が傳はると、一世は驚倒した。水戶家などは眞先きにこれに反對した。

水戶殿家老岡田兵部殿持參の書付寫巳八月

（前略）第一夷狄を御側近く被爲召候儀御危被奉存候御內意被奉伺候而は三家之立場柄恐入候故御用不相成迄も之段申上候樣水戶殿前中納言殿被申付候

微賤の通譯官などは、千代田城へ入ることすらが、大變な事件であつた。だから閣老堀田備中守とハリスが會見した際の如きは、ただもう恐懼に堪へなかつた。ハリスのこの日の日記には、『この日日本の通譯官は如何なる故にや終始瘧を患ふるが如くに身體顫動し、その前額からは球の如き汗を流した』とある。米國に生れたかれには、この心理狀態が解らなかつたのである。

幕吏としてはハリスが、將軍の前に出れば、必ずその威嚴に打たれて、口もきけないに違ひないと思つてゐた。十二月八日のかれの日記の一部にはかうある。

『午后信濃守は登城の歸途予を訪問し、昨日の謁見について殿中の評判を語つていふよう「昨日の式に列席した諸員は、貴官が將軍の威嚴に打たれて恐懼失措、身は顫へ言語は訥吃するであらうと豫想したのに、案に相違して貴使の態度の壯重であつて、その精神の沈着なのに、驚を喫しないものなく、何れも米國人とオランダ人とは大いに異つてゐることを讃歎した」と。信濃守が尚この種の評判を語り續けようとしたから、予はこれを忙はしく阻止した。』

將軍との謁見が終ると、かれは直ちに更に堀田閣老を對手に、通商條約の締結の交渉に取りかゝつた。この頃になると、かれの人格と誠意、そしてその學識とは幕府の高官を征服してゐた。殊に十二月十二日（日本暦十月廿六日）堀田備中守邸において、幕府の有力者を前において滔々として世界の大勢を述べ、國際關係について全く無智なる人々に對し、二時間に亘つて大演說をしたのは、幕末外交史上の偉觀といふべきである。かれはまづ蒸汽動力の發明により、世界の狀態が異つて來た事、日本は好むと好まざるにかゝはらずその孤立の政策を放棄するのやむを得ざるに至る事、國民をして自由に發明と産業を開發せしむれば、遠からずして偉大にして有力なる國家となる事、商業に適當な租税を課すれば、その收入によつて海軍を保持するに足る事、自由貿易によつて日本の資源を開發すれば、交換價値ある諸種の物資が生れる事、その生産は決して日本の必要な食糧の生産を遮ぐるものでなくて、現に餘つてゐる勞力を使用して充分であることを述べ、

『これから武裝したる外國の船は、開港を要求すべく來航するであらう。これに對して日本は讓歩するか、然らざれば戰爭の苦を味はねばならぬであらう。かりに戰爭なしとしても、日本は絕えず武裝したる軍艦に脅やかさるゝであらう。……その軍艦によつて要求さるゝ條件は、私の如き境遇の下にある者の要求する條件の如く寬大ではあり得ないであらう……支那を見よ、支那が最もいゝ例である。』

といひ、更に

『私はたゞ一人で江戸に來た。そして一艘の軍艦も私の背後にはないのである。かうした者と交渉することは、日本の名譽を救ふためである。われ等は一ケ條々々に相談出來る。また日本は漸次に開港が出來るのである』

と說き、最後にその要求として

（一）江戸に外國使節を住居せしめる事
（二）政府役人の妨害なくして自由に貿易せしめる事
（三）更に他の港灣を開く事

といふ三ヶ條を提出した。

この談判の交渉、内容等を詳しく書くには、更に他の場合を期せねばならぬ。こゝでは堀田備中守その他の眼が自然に醒めた事。越えて一月十八日（日本暦十二月四日）には井上信濃守、岩瀬肥後守が全權委員に任命されて談判が開始され、種々なる經緯があつた後、ついに日米通商條約は調印されたる一事を記しておかう。時正に一千八百五十八年七月二十九日、邦曆安政五年六月二十四日のことである。

折しも神奈川に入港中であつた米艦ポーハタン號は、ターナー提督の命により、日米兩國旗を交叉して、これに廿一發の祝砲を發射した。ハリスが日本に來て正に滿二ヶ年、かれの喜悦はどうであつたらう。（この日米條約締結の交渉にこそ、ハリスの誠意と人格が現はれたが、こゝではこれに觸れ得ざるを遺憾とする）

（十）暗殺横行の中に江戸に居殘る

ハリスは日本にとつては、外交官といふよりも、忠實なる教師であつた。日本の當局者に最も親切に政治經濟及び外交を教へたのは、誰でもない、實にかれであつた。

十二月十八日（一八五九年）のかれの日記には、この日例によつて全權委員が訪問して來て、外國に公使を送る目的、その國における國內法との關係等について聞いたので、これ等について説明すると、彼等は滿足して

『わたし共は、これ等のことについては全く何にも知りません。從つて子供と同じです。だからどうぞ忍耐を以て私共に對して下さい。私共は貴官の云ふことは絶對に信用致します』

といつたとある。見るべし、今やハリスは幕府にとつて、交渉の對手ではなくて、親切なる顧問の立場にあつたことを。

だからその後ハリスが病氣にかゝるや、幕府は非常に心配して、長崎において洋醫學を修めた御典醫二名を下田に派遣し、これに看護を命じ、かつ曰く

『もしお前等二人で、ハリス氏の生命を取りとめることが出來なかつたら、お前達を死刑に處するかも知れんぞ』

と宣告したほどである。かれ一人を賴つて、歐洲諸國の侵略を食ひ止めんとした當局者の眞劍のほどを見ることが出來るではないか。

この幕府の信任に對しては、ハリスは元よりこれに酬ふるこ

とを心がけた。日本人の缺點は缺點として——例へば見えすいた嘘をついたり、驅引をしたりする事など——かれは日本人を愛し、信任した。かれはニュー・ヨークで死ぬ時まで、日本の將來の幸福を祈り、かつ信じたと、『ハリス傳』の著者であり、親友であるグリッフィス博士は、先頃日本に來て話してゐた。

當時、ハリスの江戶入りなどが、尊王攘夷の氣勢に油をそゝいで、日本の國論は麻のやうに紊れてゐた。安政六、七年頃は、この排外熱の最も盛んな時で、萬延元年三月（安政七年三月に萬延と改元した）大老井伊掃部頭は水戶浪士のために櫻田門外で刺された。その頃、ハリスは本國政府に認められて、總領事から公使に昇任し、麻布の善福寺を公使館として、そこから日本の變化しつゝある、しかも悲しき情勢を見守つてゐた。

そこへ一つの大事件が起つた。それはハリスと下田以來、生死を共にして來た通譯官フュースケン（この頃かれは公使官書記官になつてゐた）が、浪人のために暗殺されたことであつた。その日（萬延元年十二月五日、西曆一八六一年一月十四日）フュースケンは赤羽根橋近くのプルシャ國代表者の旅館に行つたが、歸途はもう薄暗くなつてゐた。かれが馬に乘つて麻布森元中の橋に近づいた時に、數名の浪士が突然に現はれた。

『それ！』

と頭目らしい者が命令すると、一團はバラ〱と寄つて來て、フュースケンに切つてかゝつた。かれは腹部を刺さゝれて、そこに仆れた。

米國公使官の役人が暴徒の手により殺されたことが、どれだけ在留外人の神經を刺激したかは想像するに難くなかつた。外人の殺害されたるものが、ヒュースケンを以て、十八ケ月の間に七人目であつた。當時外交團の牛耳をとつてゐた英國公使アルコック（Rutherford Alcok）は、まづ赫怒した。何回も外交團會議を開いて、江戶撤退を議し、强硬なる手段を以て幕府を脅すべきことを謀つた。

この間に立つて、少しも動じなかつたのはハリスである。かれは英公使のいふことに少しも耳を傾けなかつたばかりでなく、二回目からは會議にすらも出なかつた。かれは公然といつた——

『フュースケンが惡い。今頃、夜など出步くといふことがあるものか。予自身さへ個人的自由を犧牲にして家に在つて出でず、かくて白刃の兇漢に襲擊の機會を與へないではないか』

併しかうした讓步論が、他外國使臣の容るゝところとならなかつたのは勿論である。英國公使、オランダ、佛國、プルシャ等の代表者は、相率いて江戶を去つた。

この當時の事情について、故人となつた林董伯の手記による一文が、最もハリスの態度を躍如たらしめてゐる。曰く『予の從弟に佐藤敬次郎なるものありき、當時命ぜられてハリス警護の任に當りたるが、ヒユウスケン遭害の頃、一日ハリスは從來其護身用に供せし一挺の拳銃を彼に示し、且つ謂て曰く、是れ今に於て予に何の用あるなし、幕府有司の警護は予の最も信賴する所なれば、今其意を證する爲め記念として之を卿に贈らんと、而して一方には身に寸鐵だも帶びず輕裝馬を驅つて上野、飛鳥山、向島に遊び悠々自適、身死地に入りて大事を議するものの如くならざりしといふ。是れ眞に大勇の士にあらずんば能くせざる所、其餘裕の綽々たるものある驚歎するに堪へたり』と。

(「日米外交の眞相」序文一〇頁)

　各國使節が江戸を退去した後、かれ一人居殘つた理由としてかれはかういつた。――

『今一外人が遭難のことありたるために、われ等外國使臣擧つて江戸城下を退去し、延いて國際間の大事を惹起するに至るようなことあらば、率先日本に開國の決行を敢てせしめた米國の極めて遺憾とするところである。故に予は單身此地に留り穩便な解決を得るために努力するであろう。さきに予が下田から江戸に入らんとするやその苦心は名狀すべからざるものがあつた。今に至つて輕々に此地を去るは予の斷じて贊同する能はざるところである。試みに思へ、日本人士の激昂するに當つては、井伊大老の如き警護至らざるなきものでもなほ兇手に斃れたではないか。予の任に臨むや固より決するところあり飽くまで幕府の警護に信賴して恐るゝところがない』

　かれが日米親善と、かつ日本の將來のために、死を以て當つて居つた意氣を見ることが出來るではないか。そればかりではない、かれは米國政府に書を送つて、日米條約によつて得たる特權であるところの翌年(一八六二年)一月一日から外國人が江戸に住居する權利を、場合によつて放拋する權能を、かれに與へらるゝよう訓令を仰いだほどであつた。

　かれの對日態度は、かうして最も寛容であつた。ヒユースケンの死に對しても、その母親(オランダに住んでゐた)に對する慰勞金として二萬圓を要求したに過ぎなかつた。これを英國公使アルコツクの要求に比すればその相違が自然に明らかである。即ち英國は、それから二三ケ月して負傷せしめられたところの英國公使館の二英人に對し、各二萬圓を要求し、また例の生麥事件のリチヤードソンの死に對しては(一八六二年九月十四日)十一萬ポンド(約百十萬圓)の賠償を要求したのであつた。アルコツク公使は一人の外國人が殺される每に、二萬圓乃

至十萬圓の賠償を得ることを提議した。

（十一）ハリスの偉大なる功績二つ

私はハリスの事蹟の半分も述べずして、最早結論を述べねばならぬことになつた。

私はハリスの事業から、少なくとも二つの重大なる歴史的事業を發見し得るのである。第一はハリスあつて日本の獨立が、保全されたといふことが、もし誇張に過ぎて居れば、かれが日本の開國當初において、無用なる外國との衝突を避けしめた一事は確實である。

かれは日本との最初の通商條約を結んで、各國はたゞこれを眞似るの外はない次第であつた。かれは又絶えず歐洲諸國の野心を知つて、これに備へ、日本に對してこれを警告してゐた。その一つの例は、かれが日本を辭し去らんとし、かれの後任者としてプリンが來航した時に、かれは後任者に對し日本が米國から三隻の船を購入すべく仲介すべきことを懇望した。それは幕府としては國內の騷動に備へるためであらうが、ハリスはこれを以て、歐洲の野心國の侵入に對し防備をなさしむる底意であつた。プリンは前任者の希望により、全く前例を破つて、自から幕府の代理者となり、交渉の任に當つたのであつた。

ハリスが去つてから、プリンによる米國の對日政策は一變した。今まで何としても提携しなかつた英國とも握手して、下の關攻擊において列國の共同動作に參加した。その後の要求の如きも頗ぶる高壓的で、最後通牒をも突きつけた。開國當初においてハリスの如き平和的な、理解ある人が居らなかつたら、各國の野心から考へて、日本があゝした平和な道を歩いて來たかは、重大な疑問といはねばならぬ。（無論米國の對日政策そのものが公平であつたことは、その條約に治外法權の條項を挿入したことについて、國務長官マーシーも、またハリスも絶えず苦に病んで居つたほどであり、また長州征伐の際日本から得た賠償金を廿年の間一文もつかはず、一八八三年に米國議會はこの全額を日本に返したこと等で明らかだ。）

第二にハリスの事業として數ふべきことは、かれあつて幕府政治から帝政への政權授受が圓滿に行つたといつてもいゝほどの大功あつたことだ。かれは下田について以來、約二ケ年以上も條約の成立を待つた。この間日本の外國に對する態度には——少なくとも最高の當局者には、進むべき方針と理解が出來て來た。ハリスは無論國內の混入つた政情は分らなかつた。そして幕府の役人を、たゞ嘘つく者とばかり思つてゐた。併しそれにしてもかれは忍耐強く、世界の情勢を教へながら待つたのである。

もしハリスが始めから、軍艦を背後にして、條約の締結と、その實行を迫つたならば、日本の混亂はもつと大きくならなか

つたであらうか。現にその後英國政府が、その條約實行を强ふるに嚴格且つ急であつたが故に、幕府の倒壊を早める一原因をなしたことは、公平な歷史家の認めるところである。

これ等の歷史的變遷を知つてゐる歷史家はハリスの名が、比較的に日本人にも外國人にも知れ渡らないのを、極めて遺憾な事實として嘆息してゐる。新渡戸稻造博士はその著『日米兩國間の國交』(The Intercourse between The U. S. and Japan)において『ペリーの使命は開拓者のそれであり、ハリスのそれは種蒔のそれである。……ペリーは自身が戰爭的行爲を計畫し、米國政府により否決され、これに反してハリスは米國政府より戰爭的政策の立案を訓令されたに拘はらず、これを否定した。ペリーは信任よりも恐怖を招來し、ハリスは恐怖よりも信任を目がけた。……世間はハリスを表彰することにおいて決して充分でない。ペリーの記念碑はロング・アイランド州ニュー・ポートに立つてゐるけれど、ハリスのそれはニュー・ヨーク市カレージの大廣間に、教育上の功蹟により寫眞が掲つてゐるばかりである。日本においてすらも、如何にハリスの名の傳へらるゝことの少なきことよ！』と書いてある。(一一六ページ)

更に米國の東洋歷史の權威フオスターはその『東洋における米國の外交』(American Diplomacy in The Orient, by John W. Foster.1903) において

『始めに新しい境地を開拓されたるものは、後世の人に記憶され、尊敬されるけれども、その後に來て絕えざる努力と冒險により貿易を切り開いたものに對しては、その功蹟が殆んど認められないのが常である。それは日本の場合でもそうである。ペリー提督の名は何人にも知られてゐるけれども、ハリスの名は殆んど知られてゐない。……ハリスは偉大なる名譽をかれの國に與へた。もし世界の外交家の地位が、なされたる功蹟によつて、決定するものであれば、かれは明らかに世界第一位の外交官に位するに足るべき人である』(一六八ページ)

英國の歷史家ロングフオードは『ハリスの功蹟は世界の國際關係におけるすべての歷史において、如何なる人のそれよりも優つてゐる』といひ(Longford: "Story of Japan" P. 302)といひ、またデネツト博士はその著『東洋における米國』において『その重要性においてベンジヤミン・フランクリンの外交と比すべくもないが、タウンセンド・ハリスの江戸における外交は、ロンドン及びパリーにおけるフランクリンのそれを憶出させる』と書いてゐる。(Tyler Dennett: "Americans in Eastern Asia." P. 354)

(十二) ハリスの質問に澁澤子答ふ

『これが果して日本のためになるであらうか』

ハリスが一八五六年九月四日に、柿崎玉泉寺の前に、米國國旗を揭げた時、かれはその日記の中に『質問』と書いて、その下にかういふ疑問を書いて、後世の回答を求めた。それは今から七十一ケ年以前のことである。

今年の十月一日、この同じ玉泉寺の前には澁澤老子爵に始めて、徳川公、米國大使マタヴヱー氏などが並んだ。それはハリスの碑の除幕式に連なつたのである。この時に、澁澤子は云つた――。

『私は今こそ、その時にかれが發した質問に答へ得られる。この場處にあなたが米國旗を建てたことは、まことに日本のためであつた』と。

七十年以前も同じく吹いたであらうところの秋風が、颯々として吹いて、時節に早い紅葉がヒラヽヽと二三葉散つた。列席の人は、遙かに亡き人の上に憶ひを馳せた。

ハリスは一八七八年二月廿五日、(明治十一年)ニユー・ヨークにおいて七十五才の高齢を以て死んだ。來年(昭和三年)の二月は丁度かれの死後五十年祭に當るわけである。かれはこの短い間に日本が、かくの如き地位を世界に得ることを想像したらうか。たゞかれは最後まで日本を忘れずにゐたに拘はらず、恩を受けたる日本國民が却つて、かれを憶出すものの少ないことに、われ等は頰のほてるを禁じ得ないのである。

(完)

・附記・　この篇を草するのに、十數冊の書籍を參考としたが、こゝに一々その名をあげない。たゞ文中お吉に關する記事は、下田町の村松春水氏の調査によつたことを記しておく。但し同氏、及び下田案內その他にお吉がハリスの妾として仕へた旨を書いてあるが、私はこれを否定する。それはハリスが嚴格なるキリスト信者であり、禁酒實行家であり、絕えず自己の責任を顧みる外交官であつた事以外に、ハリスに仕へた西山助藏の憶出話にも「私等足輕組の頭役で齋藤源之丞と高橋政世兵衞の兩人は女の周旋をやるが上手……さて其お吉はどうだらうと組頭から交渉してみるとお吉は早速承知してハリスの旦那にかしづいたが一週間でお暇が出た、其時の手當金が二十五ドル」とある。(「日米外交の眞相」四一四頁)言葉が通ぜず、事情が分らないので、この人々の話しには、出鱈目が非常に多いが、若い者のこととて婦人關係の話しは比較的に信用出來るかと思ふ。

私は今年の夏、下田に行つて姉崎正治博士などゝ一緒に講演した時も、下田の者が、地元から、好い加減なことをいふことの非を述べて、大分問題になつたことがある。お吉が幕吏側と、若いヒースケンの策動によつてハリスの許に、一時行つたとは事實だが、見かけ三年も妾生活をしたなどゝいふとは到底信じられない。村松氏の研究を見ても、矛盾に滿ちてゐて、これだけの史實で立派なお吉の墓まで造つて、日米關係の功勞者のようにもちあげてゐるのは、何れにしても不謹愼だ。況んやお吉がハリスの心を和げて、その結果かれが親日主義になつたようにいふのは、ハリスの生ひ立ちと內的生活を知らぬものゝ言である。終りに日米間史實の研究家池田氏がその資料を貸與されたことを謝する。

文樂物語

——人形雜話外三項

三宅周太郎

近事篇（その三）

九、義太夫武勇傳

講談の方に「寛永御前試合」と云ふ話がある。徳川三代將軍家光の御代に、その御前で時の劍術の達人大家を集めて、それぞれ適當な相手を選ぶ。そして勝負をさせる。各人各流で秘術をつくす。それを將軍と大久保彦左衛門とが見ると云ふわけである。

一寸云つたやうに、義太夫は相撲とどこかに相通じた所がある。その修業法と、精神と、心の構え方とに於て、禪坊主と力士と義太夫とは共通してゐる。禪坊主に禪問答がある。相撲はその勝負が成立の目的だ。これ等に相似てゐる敎養の義太夫に一見勝負争ひはないと見えるだらう。が、相似てゐるだけに、結局、前二者同然の勝負ならぬ勝負、問答ならぬ問答じみた出來事はあるのである。その代表的なものを見ると、いづれも一流の苦心、感激、偉大、そして幾分のユーモアさへあつて、どこやらに武術に於ける「寛永御前試合」じみた佳話、或は、武勇傳同樣の笑話を殘してゐるのである。

明治後期と大正年間との文樂唯一の故實通は、私が時々引き合ひに出した三味線ひきの故名庭弦阿彌である。（大正十三年四月、八十三才で歿。）その翁が死ぬ迄、度々その遺族に語つた話である。年代はしかと分らない。が、勿論、明治前期である。

斯道の三味線ひきで、俗に「鬼寛」と呼ばれた三味線の達人があつた。名を寛治と云つて中々の名人である。當時天下の名人

とは人も我も許してゐた。所が、その頃、江戸に「日本一」と名のる者に、三味線の名人初代鶴澤文藏があつた。勿論、これもいろいろ逸話のある人だけに、これは決して嘘でない話であつた。で、江戸では愈々「日本一」の評判が高まつて、世上の人氣を集めてゐた。

これが上方にゐる寛治の耳に入つた。と、彼は「日本一？日本一の三味線とは俺だ。」と思つた。尤も、その自信は單なる過信でない。で、彼は何と思つてか急に江戸へ向つて出立した。今のやうに、三味線を疊んで郵便に持つて歩ける時代でない。彼は一丁の三味線を細長い箱に入れて、恰も、一本の材木を背負ふやうに、それを背中に結びつけた。そして江戸への旅路を急いだ。

やがて江戸へ着く。彼は一夜の宿もとらずに、いきなり文藏の出てゐる小屋へは入つた。旅裝をとくよりも急に文藏の三味線を聞かうとした。間もなく文藏が床に上つて三味線をひき出した。するとその糸の搾につれて、寛治の表情は變つて來た。居住居がきちんとして來た。段々と目は赤くなる。額には汗さへ光り出した。すべての態度が尋常でなくなつて來た。

文藏の藝がすんだ。と、寛治は自分の坐つてゐる所で、はたりと兩手をついてしまつた。そして「已寛治、生れて初めて天下に名人あるを知つた。」と叫んだ。そしてすぐと再び三味線の箱を背負つて江戸を後にしたと云ふ。

名のある寛治が恐れ入つたと云ふだけに、文藏の名人であつたのに論はない。併し、それを認めた寛治の如き、矢張り偉とすべきは論を俟たぬ。元來、複雜難澁のこの道で、他人の妙を知るのは、己も亦妙の域に達してゐればこそである。自己の造詣と蘊蓄なしでは斯道の妙は到底分る筈がない。自然、天下の名人を見出した人の方も、同じく天下の名人であるのは說明する迄もない。

この弦阿彌翁の話は、も一つ文藏對寛治のいきさつが、歴史的に明確でない。多少の修飾やおまけはないとは云へない。併し、記憶のよかつた翁が度々これを口にした所を見ると、さうさう平凡な出來事でないのは明かである。翁がこれを繰り返したのは、畢竟、この事實が、果していづれがえらいか、いづれに優劣があるか分らない。と云つた所の例へば右の御前試合での勝負なしの試合みたいだ。ある凡でない妙味があるからではなからうか。

次は太夫の方になる。前號に五代目春太夫が、斯道の明治中興の祖であるのを述べた。それに對して明治前期の功勞者は三代目竹本長門太夫であつた。氏は勤儉力行の高德の士であつた。

五代目春太夫の門から、我々の知る明治の幾多の秀才を出したやうに、そのもう一つ前の時代の長門太夫は、實に多くの秀才を世に出した。その長門太夫の話である。ある年、博勞町稻荷境内の芝居で、彼は「菅原傳授手習鑑」の「車曳」を語つた。今では「車曳」はかなりいい加減なものになつてゐるらしい。が、人が長門太夫だけに、この「車曳」でさへ、一個の武勇傳みたいな逸話を殘してゐる。

義太夫の「車曳」では、時平の笑ひがやかましいものになつてゐる。近頃は時平の言葉の「命冥加な蛆蟲めら」で笑ふのが普通ださうだ。が、當時は古い型の方で、「現はれ出でたる時平の大臣」で笑つた。この長門太夫は、今の道頓堀の辨天座、即ち、當時の竹田の芝居で、聲を張つて淨瑠璃を語ると、川向うの今の宗右衛門町あたり一帶に、その音聲が響き渡つたと云ふ人だ。現に角聲のある腹の强い人であつた。で、稻荷の座でこの笑ひになる。と、ウハ……と笑ひ出すとそれが隨分長い間續く。自然いつの間にかこれが市中の評判になり出した。で、長門太夫の笑ひが始まると、いつとなく稻荷神社へ人が集まつて來出した。そしてその社の廊下がそのたまりになつた。末は近所の子守から、上は物好きな大家の旦那御寮人樣迄が加はつてゐた。それが長門太夫の笑ひが始まると、いつとなくその、圍が笑ひの音響のリズムにひき入れられるからであらう。いつの間にか大勢で廊下を走つて廻り出した。かなり大きな神社の廊下である。が、ぐるぐると大勢で小走りに廻る事三十度に及んでまだ長門太夫の笑ひがつきない。嘘のやうだが、その廊下を廻る回數が三十五遍の日、三十七遍の日さへあつたと云ふ。武道の大家に五十人力、百人力と云ふやつがある。そんな人間のゐた時代だ。幸田露伴氏のある作を讀むと、上古の日本武尊の命は身長が丈餘に及んだと云ふ。して見ると幕末時代にしろ、長門太夫の笑ひが、稻荷神社の廊下で、人を三十七遍走らせたと云ふのは、多少小說的であるにしても、決して誇張でないらしい。

この長門太夫の門下に、今日の目から見て異彩を放つ一人の秀才がある。これは竹本長尾太夫と云ふ人だ。彼は大阪の天王寺村の庄屋の家長であつた。今でも天王寺村に當る面積は廣い。が、その幕末時代は百何十ケ村乃至二百村を含めて天王寺村と呼んだ。正に佐倉宗吾同然の大きな村の束をしてゐた人である。その名あり、富あり、位ある人で特に義太夫を好んだ。そして長門太夫の門に入つて長尾太夫となつた。つまり、立派た庄屋を捨てて太夫の方に宗旨代へをしたわけである。この稿の最初に私は「大序の人々」を紹介した。後、この稿のため

再び下阪すると「大序」の悲慘は私の記事以上らしく、更に、いろいろの悲慘事を傳へてくれる人があつた。中に變つてゐるのは養蠶事業の大家で當時年五十、(八九年前の話。)その一種の教職同然の地位を捨てて、文樂へは入つた人があつたさうだ。が、たうとうものにならず中途で退いたさうだ。養蠶界の大家で年五十の大序的文樂入りも奇特には違ひない。併し、更に天保嘉永の武家全盛時に、武人同格の天王寺村の大庄屋が、すべてを捨てて今日の文樂の前者に身を投じたとは、結局一種の藝術に殉じた人の感がないでないと思ふ。

尤も、この長尾太夫は立派な秀才であつた。彼も亦その師同樣に「笑ひ」で逸話を殘してゐる。「三日太平記」の「松下嘉平次住家の段」の嘉平次の笑ひである。利かぬ氣の爺の嘉平次が、寢てゐて笑ふ所である。即ち、「うたたねながら高笑ひ、ウムハハウムハハ……」の笑ひだ。これは芝居でもそのやうに、寢てゐて笑ふ點が皮肉で困難だ。笑ひのやうな腹に力の入る事を、力の入れやうのない寢てゐる儘でやるだけに厄介なのが分る。

長尾太夫はこれを大きく笑ふのに苦心し出した。彼はその地位から、先づ天王寺の五重の塔に目をつけた。彼は自分だけその塔の中へは入つた。そして塔の外に人を立たせておいた。初めは二重の塔邊で寢て、右のウムハハを長く笑つた。そして外にゐる人に、外へ聞えるかと質す。聞えると聞くと、今度は三重の塔の上に上る。そして寢て又ウムハハと笑ふ。聞えるかと外へ聞く。聞えるの答で今度は四重の塔の上に寢る。そしてここでも寢て笑ふ。が、遂に下から聞えるの返事で、今度は遂に五重の塔の上に寢て笑ふ。それでも下へ聞えるのを知つた。これを何日か練習して床へ上つたと云ふのである。あの五重の塔の高さはどの位か分らぬが、兎に角大阪の空に聳えてゐる塔である。あの塔にもこんな義太夫の勇ましい傳説がある。但し、この長尾太夫の笑ひは十分成功を得た。嘉平次の笑ひと云ふとこの話が出る位に有名になつてゐるのである。

× × ×

近頃の太夫の武勇傳は、先代大隅太夫に止めを刺す。名人團平につれられて、修業的に今の淺草の東橋亭に出てゐた。段々と藝が進み出した時、東橋亭で時代物の大落し(註、例へば「太十」の光秀が十次郎の落入りを見て泣く所など。)をやると、向島の堤を歩いてゐる人にその聲が聞えたさうだ。又、歌舞伎座で「太十」を語つた時は、十次郎の手負ひになつてからの出「あはやと見やる表口」と聲を張ると、木挽町の今の「あさひ橋」を歩いてゐる人の耳によく聲が聞えたさうだ。(大隅太夫門下の今の文樂の某太夫の實話。)

前號所載、明治卅八年に、攝津大椽紋下時代に、一時この大隅太夫が文樂へ加はつた。その時「八陣守護城」の「船の場」を語つた。御座船の端に立つて正清が血を吐く。と、舞台裏で「めでためでたの若松樣よ」の唄が聞える。そこで「ウハ……」の正清の笑ひになる。所が、その笑ひをきつかけに、床が廻つて大隅は樂屋へは入る。が、床を廻す弟子に、床を廻すのをなるべくゆつくりやれと云ふ。（この床を廻すのと、太夫の白湯を汲む役とは太夫入門の初期の一つの修業である。これにいろいろ雜話があるが他日に讓る。）さうしないとまだ笑つてしまはぬ中に、身體は床の蔭に隱れては入つてしまふからだ。で、弟子の方は寧ろ意地惡く、文樂のあの床をそろりそろりと廻して見る。が、大隅は泰然自然として笑ひ續けてゐる。で、これ以上おそく廻せないと云ふ程、のろく廻して見さへした。が、依然「ヘ……」の笑ひが樂屋の中へ殘る。それ所か、驚くべき事には、その床が廻つてしまつて、それから大隅が立上がる。そして自分の樂屋の部屋へは入るべく、二階の梯子を上りながら、まだ笑つてゐたと云ふ。ひき臼みたいな顏の大隅が、さうして笑ひつつ床から梯子段へ、破れ鐘のやうな響きを發して歸つて行くさまは、全く人間業とは思へなかつたさうである。

但し、この巨人大隅を、ある人が時の古老に「師匠の春太夫とどうですか。」と比較論を聞いて見たさうだ。と、その古老が云ふのに「うむ。あれで春太夫のお粥腹位だ。」と。即ち、象のやうな人物大隅で、春太夫が腹下しでもしてゐる時のお粥腹で、義太夫を語つてゐる位にしか當らないと云ふのである。となると淨瑠璃の「大きい」と云ふ大きさは、すべて武勇傳の狒狒退治、水滸傳の虎退治的に超人間事のわけである。

が、一言する。淨瑠璃は必ずしもこの「大きい」がその第一義でない。人は義太夫は「大きければ大きい程いい」ととりたがる。が、義太夫が單なる力仕事でない以上、無能な「大きい」は結局愚である。無意味な「大きい」より、その反對でも有意義なものの方が、却つて斯道に第一義的なのを云ひ添へたい。それはよく誤り傳へられる義太夫の批評だからである。例へば、初代竹本義太夫の門弟竹本政太夫だ。この人は小音のため師から人前で義太夫を語るのを中止させられたやうな人だ。が、苦心慘憺して、小音でよく人間の心事萬般を語るやり方を工夫して、遂に師歿後の第一人者となつた。二代目竹本義太夫の名さへ襲つた。最近の實例に徵しても、先代彌太夫（大阪の木谷蓬吟氏の父。）も亦聲がなくて、立派に明治期の一偉人たり得てゐる。義太夫は古來から決して無智な「力競べ」ではないのである。近頃の標準が兎角この點の本質的の大小を忘れ、

外形の大小に伴しすぎる嫌ひがあるので敢て書き加へる。以上の亡き諸巨人の「大きさ」は、すべてよく眞の「大きさ」に徹してゐるから一つの佳話たり得る價値を持つてゐるのである。

話を元へ返へすと、右の大隅太夫は一時貧乏で苦しんだ。併し、彼は師團平に仕込まれた「合邦」で、當時の大阪市中の人氣を一身に集注してゐた。「合邦」が流行し出したのは、殆どこの團平の糸と大隅の力とであるらしい。近頃の越路の「合邦」の如きでさへ、大隅に及ばなかつたとは識者の定評である。で、大隅の「合邦」と云ふと、大阪人は狂喜した。そのためか、彼が貧乏の最中、貧窮に窮して、自分が床で使ふ「合邦」の本を、質に入れた事がある。が、流石は大阪の質屋である。だまつて金千圓也を貸した。その頃の千圓だ。しかも、その五行本だけでだ。無論、これを質に入れてゐる間「合邦」は語らないのは分つてゐる。が、大隅と質屋とのこの取組も亦一種の「寛永御前試合」ではなからうか。

故越路太夫にも幾分武勇傳がある。彼は後年今の羽左衞門と交りがあつた。よくうまが合つたさうであるが、彼は羽左衞門同然に、今の世には珍しい立派な戀愛家である。その結果、師攝津大掾に幾度破門を食つたかの話は、廣く世間に知れ亘つてゐる。生前越路と深交のあつた今の文樂のある太夫の思ひ出話である。越路太夫がある時、大阪の某妓と型の如く戀愛をした。周圍の干渉に堪へ兼ねて、遂に二人は明石邊の海岸迄逃げのびた。そこの海へ身を投げて死なうとしたのである。ひる下りであつたが人目のなかつたのを幸、崖から正に二人が海へ飛び込まうとした。その一瞬間である。越路太夫は、「あつ、忘れてゐた今は丁度わしの床へ上る時間や。」と叫んだ。女が目を見はつてゐるのもかまはず、彼はすたすたと停車場へ馳けつけた。そして大阪行の汽車にのると「役をすましてから來ます。」と云つたさうである。

勿論、心中はおぢやんになつた。が、こんな物語だけは斯道には餘り類がない。斯道衰滅の明治大正に、あれだけ大きな足跡を殘して死んだ越路太夫は、かうして前例のない武勇傳を殘してゐる。扨、私はこのやうに種々の寧ろ愚かしい話のみを集めた。が、なぜ特にこのやうな記錄を作つたかと云ふと、大體に過去の天才は奇を持つてゐる。奇は天才を持つてゐる。が、この後奇や天才は多分斯道から姿を隱すであらう。それは今の世が一方さう云ふ個性を存在生長せしめ得ぬ理由にもよるであらう。で、月日が經つに從つて、これ等の佳話逸話は得難い道理になる。故に、一つの「英雄の唄」として、強てもの武勇傳を調べてその墓前に捧げる所以である。

十、故名庭弦阿彌の話、文樂總稽古（舞臺稽古）の話

弦阿彌の家に稽古用の机が一つ殘つてゐる。弦阿彌は度々云つたやうに、物知りであつた。自分の藝以上、斯道の約束奥義に長じた人であつた。從つて、近年の文樂の太夫や三味線ひきで、この翁の薫陶を受けぬ者は一人もない。この人を德とすべきは、獨り今の古靱太夫のみでない筈である。

かう云ふ人の常として、翁は名題のやかましやであつた。右の机を見るとそれがよく分る。それは小さな机にすぎない。が、長壽を全うした人だけに、實に長い間これを前に置いて、多數の人を敎へ、叱つた。その机の前、即ち、翁が向つてゐた方の側に、丸い人間の拳骨大のくぼみがある。このくぼみは翁の敎育法を物語る。翁は文樂の下つ端であらうと、上の方にゐるいい太夫であらうと、たまに來た素人の篤志家であらうと、稽古になるとこの机の前で怒つた。そして夢中になると、ここが惡い、かしこが惡いと云ひつゝ、手に持つてゐた撥で思はず机の前をたたく。それが年々歳々、積り積つて右の拳骨大のくぼみとなつたのである。この机は異樣な感じを持つてゐるので寫眞で紹介したかつたが、その肝腎のくぼみがうまく寫らないので止めるしか仕方がなかつた。翁に恨みは數々あると云ふのが眞理なら、このくぼみなど、當然數々の人の恨みがある筈であらう。

翁はこの机の前にゐて、人を叱るのに一種獨得の地口を以てした。一例、三味線ひきを叱るのに「わりや先代の殿樣ぢやわい。」と云つた事を云ふ。叱られつつ思はず「え」と聞き返へすと、「太夫殺しと云ふのぢやわい。」と怒る。つまり、三味線はどこ迄も太夫の從だ。それを三味線自身でいい氣にひき散らすと太夫を殺す結果になる。これを諷して云ふのである。

又、片手を口許から頤へかけて、つるつとなで下す癖があつた。もし翁の手が頤へかかると人はおやおやと思つた。稽古の非難をする前、必ずつるつと頤をなでるのが、その小言の前兆であつたからだ。同じやうに、人の語るのを聞く時、傍で線香をたく。そしてこの頤なみに、氣に入らぬ事があると、ふうむと線香を鼻へ持つて行く。そしてすうつとその煙を吸ふ。これも不滿の印の一つであつた。

話は變る。文樂では今日我々の云ふ舞台稽古を、總稽古と呼ぶ。私はそれを最近實見した。今は斯道に弦阿彌のやうな指導者がゐないせゐか、殆ど目を光らす者はゐない。が、今でもそれは初日の前日に午前十一時頃から行ふ。勿論、局外者は入れ

ない。雜然と大序から順々に床へ上つて行ふ。ミス中の大序も、當日は大序のとめの人が、一人代表者となつて床へ上つて、大序全部を一人で語る。この日太夫三味線共にふだん着の儘で上下はつけない。これが松竹になる前の文樂時代には、古い時には植村文樂軒の翁がまだ總稽古に立會つてゐた。（明治初期に歿。）が、その子が又斯道に造詣が深かつた。そしてその子も亦えらかつた。次の子（三代或は四代に當る。但し、この點目下取調べ中。他日委細發表する。）が祖先と逆に文樂の趣味を解さないので、四十二年に今の松竹へ小屋全部を賣却した。がそれ迄は代々親讓りの斯道のよき監督者を生んでゐる。例へば、歌舞伎劇に於ける田村成義翁の如き人を續いて出した。特に、二代目かの細君、多分三代の母に當る女性がえらかつた。これは女で十分田村成義氏であつた。

今の文樂の人形遣ひの吉田文五郎、津太夫、古靱太夫など、文樂の古い人は皆この奥方の非凡を推賞してゐる。人形の方から云ふと、文樂座の奥に藏があつたさうだ。その前に小さな橋があつた。そこへこの奥方始め當日は植村家のすべての人々が腰をかけてゐる。座の奥役手代がそれへ續く。人形を選定するのに大抵三人の手が入つた。一人の一番上の人が直接藏から入用のものを選び出す。中途の橋の邊で他の中位の人がそれを取次ぐ。一番若手の見習期にゐる人形遣ひが、三人目で植村家の人人の一群の前でそれを受取つてお目にかけるわけになる。文五郎氏など當時一番下のこの三人目の役で、兩手に捧げて人形の衣裳などを奥方の方へ持つて行く。いろいろ檢査があつてから、別の見分ずみの所へしまはうとする。思はずひよいと衣裳に手が障つたりすると、奥方はすぐと注意して戒しめた。人形や衣裳には、舞台以外では一切手を觸れてはならぬのが掟であつたからだ。それに女だけにこの奥方は、毎日四つ橋の自宅から御靈文樂へ通ふのに、なるべく歩いて古着屋を見て來る。今でも本町御堂筋南入西側の角間と云ふ店が、文樂などに使ふきれを賣る古物商ださうだ。さういふ所をあさつては、古いきれを集めてくる。そして自分で適宜な人形の衣裳を縫つておく。右の藏の前での檢査の日、破損の分をふだん用意してゐた右の品品で充當する。文樂の衣裳一つにしても、今日の文樂と違つて光りを帶びてゐたのはかう云ふ準備があつたからである。序に、この種の準備や檢査の日を、斯道では「衣裳わり」と呼ぶ。これは勿論今でも續いてゐて、開場前數日前に行ふ。今はこれを松竹の衣裳部でやつてゐる。その主任は人形遣ひの吉田玉七氏である。到底、昔日の丹念はないが、人形遣ひが大抵集まつて玉七氏と相談の上、それぞれとり極める事だけは守つて

ゐる。

扨、總稽古の方である。昔ならこれも植村家の監督が嚴重であつた。今は總稽古の日、座の者や太夫三味線、或は、大序の連中など隨意に方々に坐つて人の語るのを聞いたり見たりしてゐる。が、植村氏時代は一切さう云ふ自由な行動は許さなかつた。土間の小一（大阪で云ふかぶりつき。）のみが内部の者のゐるべき場所と限られてゐた。そして太夫人形に一々駄目が出る。殆ど駄目の出ない今の總稽古とは大きな相違である。又、その奧方は舞台の人形の細部にさへ通じてゐた。總稽古の日は今も昔も舞台ですべて人形を遣つて本式にやるが、その人形遣ひにも專問的な修正を出し得たと云ふ。話が餘事になるが、當時は二三度座方となじみになれば、文樂見物の拂ひは六十日拂ひであつた。即ち、一文の現金がなくて、文樂へ行ける。場代食事一切「帳面につけといてくれ。」ですんだのである。これは今の古靱太夫が知つてゐる事であるから、この近頃迄文樂は「帳つけ」で行けたのである。我が家か研究室かのやうに、文樂へ再三出入りする人を私など幼時に見かけたが成程と分つた。

大體、古い時代の總稽古はこんな風であつた。尤も、今でも一つだけ古い例が殘つてゐる。紋下の太夫が床へ上ると、相撲のやうな觸れ太鼓がは入つて、手打ちの式を行ふ事だ。私の見たのは彌太夫座で、當日白井氏は不參であつたが、當然この時間だけには立合ふ筈になつてゐる。座の内部の者しかゐない所で、太鼓の堅い音が響く。津太夫と友治郎とだけは紋付を着て床へ上つて、きちんと兩手をついて辭儀をしてゐる。この情景だけは一寸嚴かであつた。近年迄、この後で座主と紋下の太夫とが古例通り盃のやりとりをしたさうだが、文樂が燒けてから中絶した。

簡略になつた現在でも、かうして開場前數日に「衣裳わり」を行ふ。そして初日の二日前、即ち、總稽古の前日、立稽古をやる。これは人形の出入りと、太夫の役場の打合せのみで、專門的に手短にやるだけだ。その翌日右の總稽古になる。要するに順序と準備は文樂だけに原形を保存してはゐる。唯、殘念なのは駄目や修正を出す右の如き内部のえら者のゐない點である。これは如何にも遺憾事である。もし文樂の死を早めるとしたら、それは秀才の太夫に乏しい點より、却つて前述の如きすぐれた田村式舞台監督のゐないためではないかと思ふ。

が、植村家の手を離れてからも、弦阿彌在世時は、翁が一人年長者で造詣が深かつた所で、よく指揮者たり得てゐた。總稽古の日翁はいつもきちいんと大序から來て坐つてゐる。翁に今年三十才前後の子息藝名猪二郎と云ふ文樂の三味線ひきの若い人

がゐる。有の日、一人の太夫が床へ上る。翁に聞かれると小言がうるさいと思ふと、才走つた太夫は友達に何かを示し合す。と、その太夫が床へ上ると同時に、友達の一人は猿二郎を引つ張つて翁の傍へつれて行く。翁は全くの昔氣質で、我が子の愛に溺れなかつた。我が子を他人と同一に見るのが翁の第一の心がけであつた。で、倅が傍にゐても丸で口もきかない。が、倅は既にある策を賴まれてゐる。で、特に母親か何かからの用をこさへておく。床の上で例の太夫が譯を出しかけたと思ふと、當の猿二郎はそれとばかり翁に母からの話などをする。つれの一人の人も傍から何か猿二郎に話かける。と、その間に床の太夫は役をすませてしまふ。何分初心の太夫は既に云つたやうに、語る所は數分間にすぎない。苦もなく翁の耳を瞞着出來る。こんな三人の若者共同の惡事が行はれた位であるから、その頃の稽古はかなりやかましいものであつたやうである。今では時として三味線の老獪友治郎が、注意を與へる程度になつてしまつてゐる。

× × ×

弦阿彌にはこの猿二郎の上に、本名文藏と云ふ長男があつた。立派な體格で力士然としてゐた。梅ケ谷が文樂へ來た序に、つれて歸つて弟子にして梅の川と名のらせてゐた。有望であつたが、八年前に三十一才で死んだ。その死を翁に傳へた時、翁は泣き悲しむ肉親の者に一言「諦めてしまへばそれ迄や。」と云つたのみであつたと云ふ。

前號に云つた故三代目清六は、翁の高弟であつた。この清六と、別に、初め仙糸で後に廣作と名のつた人、これも死んだがこの二人の弟子を翁は自分の右腕左腕と見てゐた。殊に、清六が七年前に死んだ時、翁は床の中でその報を聞いた。そして「うゝん」とうなつたさうである。少々風邪の氣味でゐたのが、どつと病が重つたさうだ。その前年、倅の死をさう驚きもしなかつたのに、清六の死にはがつかり氣力を落した。昔風の人にはあり勝ちな氣質ではあるが、兎に角これが自然の情操の現れで、殆どわざとらしさのなかつた所が一寸この道の人らしい。

嘗て、翁の壯年時、攝津大掾と一緒に、故桂太郎の前で義太夫をやつた。お座敷であつたのであらう。今有名な「お鯉物語」の著者のお鯉が、愛妾として桂公の傍にゐた。語り物がすむと、お鯉はいきなり當時廣助の翁の三味線を見たがつた。で、これを見せるとその三味線が餘りに粗末であるのに呆れたさうだ。いい音がするので感心して三味線を調べて見たわけである。尤も、翁は三味線に贅澤をしなかつた。副業として三味線屋を自宅でやつてゐたが、いつも三味線の贅澤する人を嘲罵し

た。口三味線は腕でならすのだ。」は翁の慣用語であつた。

併し、このやうに一徹で、やかましやであつたが、相手の攝津大椽には謙遜であつた。常に人前でも、自分は大椽のお蔭で今日があるのだと云つて、自分を卑下した。（大椽をひく迄は故染太夫。）ある時文樂で昔にならつて、番附面で紋下の太夫の名の所へ、當時のこの廣助の名を並べようとした。以前の番附には紋下の太夫、三味線、それへ人形遣ひの座頭格の人と都合三人並べて名を出してゐたのだ。それを大椽になつて一般の人氣によつて一人だけ太夫が紋下へ名を出してゐたのである。が、その喜ぶべき話が出ると、廣助は堅く辭退した。自分は到底紋下にゐるべき人でないと云つて厚意を容れなかつた。で、仕方なく元の儘にして、廣助の名を、番附の三味線ひきの外へ別格に二重のワクをつけて出した。今日、紋下津太夫の三味線の友治郎が同じ二重ワクで番附面に出てゐるが、これは翁の例に從つたのである。弦阿彌とはかう云ふ人であつたのである。

十一、人形雜話

當代の文樂、女形の人形遣ひの名手吉田文五郎氏に、私は漸くの思ひで會へた。所が、氏と對談してゐる事卅分を經ぬのに、氏は坐つてゐて妙にもぢもぢする。身體を變に動かしてゐる。私が少々氣にしてゐると、樂屋に來た文樂の[illegible]が、見兼ねて云ふのに「文五郎はんは坐るのがつらいのです。」

人形遣ひは元來いつでも立つた儘の、立身で人形を遣ふのは云ふ迄もない。多年の習ひ性となると云ふのであらうか。この裴奧役の說明で始めて分つたのであるが、文五郎氏もそれについて云ふのに、氏は坐る事が一番不得手ださうである。この一月は文樂は京都の南座へ出張開演した。文五郎氏は每日大阪から電車で往復する。が、氏は滿員の電車であつても、一向平氣である。と云ふのは氏は電車さへ立つてゐる方が樂なのだ。鮭のやうに釣り革にぶら下る。これは人の一番嫌がる電車中の圖である。が、氏は腰かけるより、その方がいいと云ふのだ。腰をかける事さへ、さうであるから、成程、坐るのが苦手なのは尤もと思ふ。立つてゐる方なら、一日中でも飽きません。が、坐る事だけはと云つて苦い表情をする。ではどうかお平にと云つても、氏は遠慮して滅多に膝をくづさうとしない。會つたのが大阪の私の姉の家であつたせゐであらうか。一寸云つたやうに、氏に會ふのは中々困難らしい。氏は我々筆を持つ者などに、餘り會はうとしない方の人だ。それを再三賴んでやつと私の親類の宅へ來て貰つたのである。しかも、對談は深遠である。坐るのがつらい、立つ方が樂と云ふやうに、一風變つてゐながら識

見造詣は深い。私と殆ど半日話し續けた。足にしびれを切らし、膝を痛くさせたであらうに拘らず、私のためにいくらでも語つてくれる。一つは二人の話に油がのつたせいであらうか。――どこかに人形遣ひの片岡仁左衛門と云つた氣のする點に、私がある親しみを感じて傾聽したせゐであらうか。

氏が接近した文筆の士とは、元大阪朝日新聞で義太夫のすぐれた批評を書いた岡田氏位であらう。但し、それにも曰くがある。先づ文五郎氏の生れは明治二年十月の大阪産、本姓河村巳之助、當年六十才である。父は質屋兼炭屋であつた。が、氏の幼時家は破産した。父は緣故があつたので、御靈文樂の前身、松島文樂へ手代には入つた。そのため氏も亦十五才の暮その松島文樂へ人形遣ひとしては入つた。明治初期の人形の名人吉田玉造の息、同じく人形の名手で吉田玉助の弟子になつて、最初は本名の巳之助で出勤した。この玉助は親に劣らぬいい手腕を持つてゐたが三十才(明治廿二三年頃。)で若死した。北の新地の蜆橋北側竹葉屋なる藝妓小とくの家で急死した。死因はそれが鰒で食あたりと云ふが、確な裏面の消息では美男のため色慾の囚俘となつて死んだとの說がある。が、兎に角天才的な人形遣ひのこの玉助を師とした。が、その歿後殘つてゐた親の方の玉造に仕へた。即ち、親子二代に仕へたわけである。そして最初の入座した小屋は松島文樂であつたが、その後身御靈文樂に暫くゐたのみで、後は堀江座へ入座した。そして同座沒落後、大正四年に今の文樂に復座した。廿八九年の頃(氏は自分の履歴でも丸で年月を覺えてゐない。が、その邊の談は詳しく廣い。)巳助と改名した。その頃からその手腕の凡でないのを認められ始めた。その結果、卅四年に堀江座で吉田文五郎と改名した。寶暦期に吉田文三郎なる人形の名人がある。これは人形の上で二人とない名人だ。「夏祭」の帷子の衣裳を工夫し、その他種々の名案を殘した人として名高い。人形の祖で功ある點、恰も、義太夫節完成の祖竹本義太夫の斯道に於けるが如きものである。その文三郎の兄の名が文五郎であつた。それをとつて襲名したのである。この名譽ある名づけ親が右の岡田氏であつた。文五郎が僅に岡田氏のみを知つてゐるのはこの因緣からである。が、氏の知つてゐる文人とは僅にこの程度である。それ以外は餘り人を知らぬと云ふ。私は話をするのが下手でと云ふ。併し、これは決して皮肉や天邪鬼からでない。天眞爛漫にさう云ふ人事交渉が、坐る事なみに、不得意であるらしい。そして十五才から六十才の今日迄、四十五年間、少しの疲勞なしに、人形と一緒にその生涯を立ち續けてゐるのみの人である。が、斯道に入ると、すぐ一年目の十六才頃、又、二年目の十

七才頃、この仕事を止さうとした。當時、朝は五時から大序があいた。若い巳之助は深夜の三時に提灯をぶらさげて、松島文樂へ行く。五時迄に掃除をする。火の番をする。舞台の仕度をする。師匠の座へは入る用意をしておく。芝居が始まると人形遣ひか小使か分らない位にこき使はれる。人形の見得の度毎にツケを打つ。くじら蠟燭のしん切りをする。飯は家から腰に握り飯を包んで持つて來るだけだ。それを矢張り立つた儘、合ひ間合ひ間に手で掴んで食ふ。おちおち休んで食ふ暇などない。それツケを打て、人形の左を手傳へ、(人形は、云ふ迄もなく左と足と胴と三人共營の仕事だ。胴を使へるのは十分一人前になつてからの仕事である。)師匠の草履を直せと云ふやうに用がある。その上、玉造、玉助共に昔氣質で嚴格だ。二人共舞台の人形の居所が喧ましい。芝居でも心得のある役者は舞台に自分の座を占むべき所、即ち、居所が喧ましい。人形も正にそれだ。とんとんとんと出てくる。そしてきつと立ち止まる。その時、もし巳之助の遣ふ人形の足なら足の位置が、五分でも違つてゐると、師匠はぽんと足の下駄で蹴る。向う脛に血の見えぬ日はなかつたと云ふ。で、巳之助が考へた上、人形の居所を舞台に片手で爪か何かで印をつけておく。そしてそこで止まるとやつと合格する。それで給金は太夫の大序なみに最初は殆ど無給だ。

その頃は朝五時において、夕方六時頃終る。で、夜は素人芝寄席の人形を手傳ひに出る。それでやつと生計の助けにした。それから、巳之助が二十才の時分、今の辨天座の横町の席へ十日間の夜の勤めで給金四十錢也であつたと云ふ。三十年前の話にしても十日間四十錢は安い。尤も、本業の松島文樂ではそれだけさへとれない。巳之助時代に今度は止さう、今度は止さうと、この六十才で、未だに二十才の若者みたいな無邪氣さのある文五郎氏が、それを痛切に感じたと云ふのを見ても、これが一と通りの荒業でなかつたのが察せられる。全く六十で二十の罪のない氣質を持つてゐる氏なればこそ、結局、十五才から今日迄この報はれぬ仕事に一生を捧げ得たのであらう。

尤も、これは文樂の一方の人形の將吉田榮三氏にしても同樣である。氏は文五郎氏より三つ年下の明治五年生れ、大阪の人だ。氏も亦幼時の十二才に、日本橋北詰の澤野席なる寄席へ始めて人形遣ひとなつて入門した。翌十七年彥六座(堀江座の前身。)へは入つた。そして廿六年に御靈文樂へ入つて今日に及んでゐる。氏も亦有の名人吉田玉造の影響薫陶を受けた人だ。氏の口をついて出る言葉も、過去の自分が、我ながらよくもあの苦行を辛抱し得たのに不思議がる點だ。この二人の四十何年の修行(別に紹介した吉田辨門翁も同じく尊敬すべき辛抱人であ

る。)の如き、寧ろその馬鹿々々しい位の艱難な生活は、現在の文樂に於てはあり得ないものであるらしい。二人の現在の人形の技術も技術である。が、過去の深夜三時に小屋入り、朝五時から夕六時迄、そして別に夜は小遣ひ取り、いや、或は本業の仕事より多い給金のとれる寄席稼ぎ、と云ふ寢る時間のないやうな生活の方が、却つて特異としたい心地である。

× × ×

文五郎氏の話によると、玉造玉助在世時代の人形の文樂に於ける權威は非常なものであつたと云ふ。先代津太夫、攝津大掾の如き名人すら、その床をすませると、上下(かみしも)をつけた儘、人形遣ひのゐる部屋へ挨拶に來る。きちんと坐つて「御苦勞樣でした。」と禮を云つて引とる。尤も、この初代吉田玉造は卅七八年の頃、七十何才かで死んだ。その後、文樂の人形は我々の知る女形の名手桐竹紋十郎の世になる。が、その頃から人形の勢力が衰へて今日など全くかう云ふ權威と慣例とはない。

右の玉造在世時である。東京から竹本長尾太夫が下つて來て、文樂へは入つた。(これは前記の長尾太夫の後をついだ人の筈、故南部太夫の師匠である。)相當な太夫で「五大力」の「殺し」の場を語つてゐた。その一節で源五兵衛が刀でとゆを切る。本水を使つて雨の水が落ちる。それで刀を洗ふ。ごーんと下座の本釣りがは入る。それで源五兵衛が向うを見込む。と床は「おれはかんざん寺の入相の鐘」と語る。長尾太夫がそこへ來ると、源五兵衛を使つてゐた玉造が、舞台から「阿呆」とどなる。それが何日か續いた。長尾太夫が困りぬいて教へを乞はうとした。懇願すると玉造はかう答へた。雨水で刀を洗ふ。本釣りがは入る。すぐ「かんざん寺の入相の鐘」と語る奴がある者か。本釣りがは入る。源五兵衛がぢつと向うを見てゐる。その鐘の餘韻と、源五兵衛が殺氣を含んで向うを見る。その沈默の間があつて後「かんざん寺の入相の鐘」と語つてこそ、人形が人間以上に凄くなる。ごーんの餘韻を聞かず、源五兵衛の向うを見る間を考へず、すぐ「かんざん寺」と出るからいけないのだ。――人形遣ひが舞台の太夫を叱り、或は、異議を云ひ立てる例は古來尠くない。その甚しいものが、前述の吉田文三郎對竹本此太夫の「忠臣藏」の爭ひだ。寛延元年にそれを竹田出雲が書卸した時、「九段目」の一節で文三郎が、此太夫にそこの淨瑠璃の語り口を改めるのを申し出た。此太夫は太夫の職分として斷つた。そこで爭ひが起つた。そして遂に當時の竹本座と豐竹座との入れ替りの斯道第一の大紛擾を招くに至つたのである。(主として「義太夫大鑑」による。)かう云ふ大騷動さへ過去にはあつた。が、人形遣ひが權威を持つて、太夫を叱咤した事

賀は、この玉造あたりを最後と見ていいのである。

玉造の得意な藝は「躄の仇討」の瀧口上野とか、「新薄雪物語」の幸崎伊賀守のかげ腹、或は、先年市川中車がやつた「戀女房染分手綱」の「傳授の鎗入」の「能場」の定之進などであつた。これも腹を切つてゐて能を舞ふ役である。すべてかげ腹などの皮肉物で妙技を振つた。一方の吉田榮三氏の談によると、右の瀧口上野で初花をつれては入る引つ込みなど、傀儡の氣が人に迫るものがあつたと云ふ。芝居では普通は花道で初花の帶をといて持つて見得をしては入る。が、玉造の上野は、懷手をする。初花が上手のうちの方へ來ようとするのを上野が肩でとめる。そしてぐいぐいと肩で代る代る初花をつく。人間が肩で風を切ると云ふ動作のやうに、大きく肩でぐんぐん初花を押しつつは入つて行くのださうだ。成程と私は思ふ。芝居と違つてゐるが、えん手のかづらの上野のやうな立敵だけに、肩で初花を押して行く科は相當面白い筈だからである。

× × ×

文五郎氏が四十何年かの間で、自分が人形の主役をしてゐて、一番太夫の語り口に感心したのは、故花靱太夫であると云ふ。例の如く年代は明白でない。が、卅年位前、京都の辨天座で「廿四孝」の「八重垣姫」を使つた。その時、太夫がこの花靱太夫であつた。その「十種香」で、八重垣姫が出てくる「思はず一と間を走り出で」の所だ。一體、八重垣姫みたいな振袖の娘役は、袖を大きくふると時代、小刻みにふると世話になる。が、どの太夫でもその區別を人形に與へる人は尠い。即ち、人形遣ひが時代物の姫だからと云つて、大きく振袖をふらうとしても、太夫に心得がないと、ちよこちよこと語つてしまつて餘裕を與へないからだ。所が、花靱太夫だけはそこを知つてゐた。右の文句の前後にチチン、チチンの三味線の間があるのを、花靱は巧に人形遣ひに活用させた。文五郎はあの時位、姫君のやうな心持で、ゆつたりと、併し、心は嬉しさに勇み立つて「思はず一と間を走り出で」と舞臺で働けた事はないと云つた。氏は口を極めてこの事に執して花靱太夫をほめた。かう云ふ話をする時、文五郎氏の目は輝く。身體と恰好とが舞臺の人形の八重垣姫のやうにさへ見えてくる。得難い藝談好きの人、乃至藝談で己を忘れる人である。

× × ×

人形の多くやる動作の主なるものを擧げて見る。

第一、腕まくり。片腕をまくつて極り、或は見得をする科。立役に屢々用ゐられる科である。

第二、腹。「忠臣藏」の判官などが切腹する時、肌をぬぐ。

そして役者なら着物の前をすつかり帶の下へ入れて支度をする。そこを人形は單に右手と左手とのみで斜に腹をなで下す科で代用する。切腹などの場合のさう云ふ科の總稱である。

第三。三つざし。人形がとんとんと腰を落して、片足を出して極る形である。立役の人形が出て來ていきなり見得を切る場合などに多く使ふ。

第四。六法。芝居の方の六法と同じく、手足を動かして引つ込みなどによく使ふ科。

第五。打込み六法。右の六法に、特に澤山に下座やツケを賑かに入れてやる派手な六法の動作である。

第六。ギバ。芝居と同じく一つ飛び上つて、とんと下へ落ちて足を前に並べて出して腰を落す。ギバに澤山の種類があるが、大體芝居と同じだ。

第七。思案手。額に手をあてる科。

第八。片手の後むき。一例、人形の「合邦」の玉手御前など、さはりの「後を慕ふて」の次の「かちはだし」のしイイイで、玉手御前が後むきで手を袖の脇へ入れて立身で極る。それを云ふ。これは女形のさはりの右の如き節尻の極りに多く使ふ人形獨得の技巧である。流石に大阪の役者は、老練な女形などよくこの科をとり入れてゐる。東京の役者は殆どやらない。

この外、かなりあるが他日補足して發表したい。又、「待ち合せ」と云ふ人形獨得の科があるが、私は曾て私の「文樂の寺子屋」の劇評中で詳しく紹介したのでここには省く。

× × ×

人形に「衣裳わり」なる準備があるのは既に述べた。が、愈々、人形に適當な衣裳が割り當てられる。と、人形遣ひはそれを人形に着せる。そして立役の人形なら、三本でよつた白木綿糸四筋で、人形の着物の急所急所をとめる。女形なら二本でよつた白木綿糸二筋で同じく急所をとめる。尚、この「衣裳わり」前後に人形の面を塗り代へる仕事、即ち、人形の頭(かしら)(首の意味)を仕度する人を人形細工人と云ふ。これは明治年代は大江定丸と云ふ人が名人であつた。この人は文樂の人形のみでなく、一般の人形に通じた。昔大阪で唐子の人形がばね仕掛けで、階段を獨りで下りるのを工夫した人である。この大江定丸に對して、當時鍛冶職で釘清と云ふ芝居の宙釣の金物師の名人がゐた。故齋入の得意の宙釣りはこの釘清の賜であつた。大江定丸はこの釘清と並び稱せられた名人であつたが、その死後、俗に天狗辨吉と云ふ人が文樂でその後を受けついだ。それもゐたくなつて、今はその末流が漸くこの仕事に携はつてゐるのみである。

人形の頭(かしら)にはいろいろある。十何年前であらう。畫家の水島爾保布氏が、大阪朝日新聞紙上に、詳しく繪で書いてこれを紹介せられた。私はこの仕事のために研究の助けにと思つて、氏

から特にそれを拜借して調べて見た。が、繪の書けぬ私は一切紙上で說明のしやうがない。で、特殊中の特殊なもののみを擧げて、後は他日何等かの方法によつて紹介したい

文樂の人形中で一番特殊な頭は、「日向ケ島」の景淸の頭である。最近、大正十二年一月に津太夫がこれを語つた時、その珍しい人形が久々で用ゐられた。これはかなり古いものらしく祖先の文樂軒から今の文樂に傳はるものである。この景淸は瘦せ疲えた人物だけに、人形にも顏、手、足すべて泥の繪の具を使つて、靑黑い筋が入れてある。顏面は台の桐の木の上に縮緬が張りつけられてある。これを俗に「縮緬張り」と呼ぶ。この人形の衣裳も亦古くていい布である。一體、人形の頭は外々の役に流用出來る。一つの頭で一寸手入れをすると、甲の役から乙の役に使へる。が、この景淸の人形に限つてこれ一と役きりである。一つで一役の人形とは、數多い人形の中でこれ一つあるのみである。これは幸に前年の火災にも燒けなかつた。寫眞をとつて紹介したかつたが時間がなかつた。他日ぜひ寫眞で發表したいと思ふ。

この外に、同じく縮緬張りの頭で、「岩藤」とか、「岩根御前」に使ふ人形がある。これも特殊なものだ。文樂の人形中の最も特殊なものとはこれ等がその主なるものである。

別に、前記の弦阿彌の家に、兩面の頭がある。これは「葛の葉」に使ふ人形だ。半分が狐になつてゐ、半分が葛の葉の顏になつてゐる。これは今の文樂には使はない。そして文樂にはこのやうな兩面の頭はないさうである。これは弦阿彌翁が年少の廣作時代に、彥六座あたりで手に入れて殘してゐるものらしい。吉田冠四翁は彥六座出身だけに、この古い人形を折ある毎に弦阿彌家の人に聞くさうである、「まだありますやろな。」と。或は、「あれはちやんと殘しといておくんなはれ。」と。

十一、文樂は？　義太夫とは？

私は貧弱ながら、大體に亘つて、これで今日の文樂の生ひ立ち、義太夫、太夫と三味線、人形、準備の方法の一般を書いた。勿論、外に書くべき多くの事實、考證、調査、紹介は殘つてゐる。好々老爺の紋下竹本津太夫の話など、別に、私は殘して持つてゐる。が、斯道の研究を志して私は未だ十年に至らない。芝居に二十年の年月を費してゐる私から云ふと、この方面はその半分に及ばない。で、これ以上の深遠な記錄は將來に讓つて、一先づ豫定の如く三ケ月目でこの稿を終る。私の幼稚な考察と、粗末な記述とは、未だ研究中の學生が一個のノートを見せたのみの意味で許されたい。そして部分的に遺漏や誤謬が尠くないのを恐怖してゐる。が、他日それは一々訂正する。その意味でこれだけで私の文樂物語の全部ととられるのは少々困る。いつかはよき正しき記錄にするのを心に誓つてゐるからである

結論として文樂の今後はの問題になる。これに就いて多少の說を持つてゐるが、これも將來の勉强の後に譲りたい。同時に、私が熱意を持ちすぎてゐるやうに見えるであらう義太夫とは何かの問題になる。これにも私として多くの說がないでない。が、度々それを論じてゐるだけに、一言私見を云ひたい。

これは高野辰之氏の著書にもあつたかと思ふ。又、他の室町時代の末に出たこの道の古書にもあつた。が、一と口で義太夫とは何かと云へば、結局、それはそれ等の古書にある「夜歩きの友」と云ふ言葉で代辯せられるかと思ふ。

但し、これでは一寸意味は不徹底であらう。が、「夜歩きの友」とは、即ち、この人生を歩いて行く上の多難な道の友の意味に近い。芥川龍之介氏は「孤獨地獄」と云ふ言葉を作つた。これに就いて本誌で正宗白鳥氏が、說を吐かれた事がある。私として氣がさすが、これは私の近年の持論であつたので臆せずこの言葉を擧げる。そのやうに、この人生では所謂孤獨でない。寂寥でない。荒涼でない。が、ある種の人には全身的に、どんな幸福な刹那でも、ある「獨り」の感がひそんでゐる筈である。全くの獨り、この地獄は結局ある種の人間には永久に去り難い賦物であらう。義太夫とはさう云ふ場合の、さう云ふ心境の「友」として發生したと思ふのが、私の今迄の研究の結論である。眞つくらな獨りの夜の道の友、かう云ふ心境の許に、人間の聲が自然に辯して唄はれたものこそ、義太夫の思想的な把原ではなからうか。或は、これをひろめると人間の全身的な「詩」とも云ひ換へられる。これを一々說明する用意を持つてゐるが、未だ私一個の斷定を下すべき時でないと思つて差控へておく。唯、過去五百年で義太夫を說いた敎義や言語の中で、私にはこれを以上の「夜歩きの友」と見る見方が、一番適切であるのを云ふに止めたい。自己を語りすぎるが、今の私など斯道の愛着が、一つの我が夜の道の提灯となりかけてゐる。私の眞つくらな人生の道を足許だけでも、ぼうつとその血のにじんだやうな火りで明るく見せかけてゐるやうな氣がするのである。

（近事稿完。未定稿、三年二月五日夜。）

附記。 前號初代古靱太夫斷殺事の記事の中、二代目靱太夫の名をついだ宮司太夫を、初代靱太夫の弟子と書いたのは誤りであつた。これは五代目駒太夫の弟子で司太夫と云つた人で、別に、靱太夫と縁故はなかつた。が、勢力のある太夫だつたので、局外でゐて靱太夫になつたわけだ。これは今の古靱太夫に聞けば全部分る事だ。が、文樂側の人の意見で今の古靱に先代の不詳な斷殺事だけは、一切聞かずにゐてくれと私は頼まれた。で、古靱太夫に伺ひつつ、私は餘計な神經を働かせて全くこれに觸れずにゐた。そして外で分り難いその初代靱太夫對宮司太夫の關係を調べて書いた。そのための誤りであつた。一寸訂正しておく。

同、前號誤植訂正。

五八頁『泣かぬ苦しさは』は『苦しみは』の誤り。

六四頁、尼紅葉は尾崎紅葉の誤り。

裏から覗いた野田の勞働爭議

山本勇夫

一

最近野田へ行つたのは、本年一月二十日である。

東京では二十日正月を祝ふ日なのに、勞資の爭議戰で騷擾してゐるところへ態々出かけたのは、縁故のある同地の人々の安否が氣づかはれて、一日も猶餘が出來ないと思つたからである。何しろ同盟罷業が百二十五日も續いたといふ我が國の記錄を破つて、益々罷業團は惡化し、町民はいよいよ不安に怯えてゐるとの報せが二三から來たからであつた。

こちらに居て私どもが聽いて居たには、野田の町へ這入らうとするには、先づ停車場で警官の取調べをうけるとの話であつたので、その時の申し開きまで考へて行つたが——他の土地から勞働者の應援隊が來るといふ日には、無論さうした嚴重さであるさうだが——その日の朝はいゝあんばいに何時もと變りがなく、警官が一二人降車の客をじろじろと視てゐるだけだつた。のみならず、町へ這入れば恰も戰亂の巷に等しいものと考へてゐた私の想像は裏切られて、一見何事もないらしい野田の町であつた。一昨年の春この町に大火があつた翌日の方が、俥一台得ることも出來ないで、餘程騷然としてゐたことを私は思ひ浮かべた。が、たゞ何時もと違つてゐたのは、その日が縣會議員の選擧當日であつたから、候補者の名を大書した立看板が驛前の休憩所に樹てられたり、それ等の赤字黑字のビラが辻々の破目や、往來の塀に貼付けられてゐるのが際立つて目についたばかりであつた。

しかるに、町の人々に會つて見ると、矢張り騷がしい町であつた。さうして、親しく町の情況を觀ると、闇澹とした不安の氣分が全町を浸し、殺氣が縱橫に流れてゐることを感じないではゐられなかつた。町の商店は戶を閉めてこそ居ないが、商ひ

も碎すつぼないし、隨つて何も手がつかずに爭議の雲行きが何うなるかをばかり氣づかつて、夜は早くから店を閉めて了うのだつた。のみならず、人氣が一帶に惡くなつて、こせこせ泥棒などが頻りに出沒するから、まことに物騷であるとの呟きを私は數人の者から聽かされた。

　さうして、誰れに會つても別の話はない。お定まりの時候の挨拶なぞはそつち除けで、今度の爭議に關することばかりだ。資本家側は罷業團の行動を非難し、罷業團の方では資本家の頑迷を罵り、お互に迷惑を蒙つてゐる數々を訴へるのだつた。話談がいつか他のことにそれても、忽ち彼等は爭議のことに話柄をひき戻すのである。それはこちらにはいさゝか迷惑だが、土地の人々としたら、町の大動脈である醬油事業の結滯が百二十五日もつゞき、また急には癒えないといふ大疾患にかゝつてゐるのだから無理のないところである。ことに、日に增し惡化して來た罷業團が、何日如何なる暴擧をし出すかも知れない懼れを彼等一般が抱いて絕えず不安に脅かされてゐるのだから堪らない。

　現に、二三日前のことであるが、組合から（勞働組合ではない部分々々の自治的のもの）各戶に向つて、

「罷業團側では、資本家の頑迷を憤つて、いよいよとなれば三名ほどの犧牲者を出せば全町を燒拂ふことも出來ると言つてゐますから、用心するに越したことはありませんよ。」と、かうした警告を與へて步いたくらいだから、安閑としては居られない筈だ。

　私の知人なぞも、既に重要の家財を遠隔の安全地帶に運んだりしたが、野田驛から一つ次の梅鄕に荷物を積出した家が決して少くないとの話である。が、大概の家では火災保險に加入して萬一に備へたことは勿論である。私の義兄も、同地に所有する留守宅へ急いで火災保險をつけたのは、もう昨年の末であつた。また同地の連町といふところの陋巷に住んで、賃仕事で貧しく生活してゐる寡婦の家をその日に私は訪れたが、彼こそ殆んど無一物に等しく、家財なぞも目にたつ物はないのだが、附近の人々から勸められて、毎月五十錢掛けの最低額を火災保險會社と契約したさうであるから、如何に彼等が火災不安を感じてゐるかを知つた。

　丁度その日は、西北の風が烈しく吹き荒んでゐたから、かうした話をその寡婦から聽かされてゐた私も、建てつけの隙間から吹込んで來る寒風に襟を搔合せ乍ら、これにも動產保險をつけられてゐるであらう破れ火鉢を抱き乍ら、等しく火災不安を實感させられたことである。

が、先年大火後に消火器を賣込みに來てゐた數人の商人を見たことを記憶してゐた私は、此際火災保險の勸誘員が多數に入込んでゐるに相違ないと思つた。

二

夕方になつて、ある爭議團員の私宅を訪ねたが、亭主は集合所に詰めつきりで、しばらく歸つて來ない留守の家を淋しく守つてゐる女房だけがゐた
が、彼の女もまた會社が計畫してゐた宿舍の新築を見合せたのも、會社員たちが住宅の修繕を控へてゐるのも、また火災不安のためであるとかこつて、

『私たちも、この頃は何一つ新しい物は拵へませんですの！燒かれてはつまりませんからね』と、述懷するのだつた。が、この爭議が一日も早く解決しないことには、何うすることも出來ないと泣きごとを述べて、

『東京では、澁澤さんなぞは此の事を何う思つてゐらつしやるでしよう？』と、訊くのである。彼の女は、私が澁澤子爵と縁故があるのを知つてゐるので、此際、澁澤子でも爭議を解決しに來てくれてもよさゝうなものだと思つてゐるのらしかつた。

『さうさ……澁澤さんだつて中々手が出せまい。双方の決心が隨分固いらしいからね』と、私はさう言ふより他はなかつた。彼と縁故はあつても、疎遠にしてゐる私のことだから、彼が何う視てゐるかを知る筈もなかつたのである。

『さうでしようか？私たちの方でも死ぬ迄は鬪ふんだつて言つてゐますから、でも、しまいに食べられなくなつたら何うしましよう？矢張わたしたちでも生命は惜いですからね！』と、彼の女は惱まし氣に火鉢に肘をついて顏を伏せてほろりとした。

もう電燈が點つてゐたが、野田のはこと更に光りが鈍いと思つたほど、私の心持ちも暗くなつたので、彼の女に對する慰めもろくろく言へずに辭して來るより他はなかつた。

さうして、その夜私は資本家の一族である茂木某の家に一泊することになつたが、その家でも火災不安の呟きをきかされた。その主人からも、細君からも、また老人からも、さうして小供たちからも、火に怯えたとりどりの眼の色を視せられたので、こちらも變な氣持になつた。

その夜の、そこの家族たちと私との話談は、もちろん今度の爭議を中心としてで、いつか夜を更かしたことであつたが、ひる間からの烈風は尙ほ止まなかつた。庭の樹立を搖るがし、雨戸を鳴らす音が頻りであつた一と夜を、安らかに眠ることが出來なかつたのは、その家人ばかりではなく、外來の私もさうであ

つた。近ごろ、二三回も放火があつたりした話を聽かされて床に這入つたからでもあらうが、眼をときをり覺ましては夜警が巡邏する氣配を耳にし、警鐘の音がしないのに安んじ乍ら眼を閉ぢたりした。

が、夜が明けて、家族たちと一室に朝飯の食卓を圍んだ際、眠り不足の誰れもが口を開いての第一聲は、先づ何事もなく一夜を過ごし得た祝詞であつたのである。

いつたい、今回の爭議がはじまつたのは、昨年の九月十三日のことで、その日の午後、工員の代表八名が會社の重役に面會を求めて『一、荷物の全部を丸三運送店に扱はしめられたきこと。二、丸本運送店と丸三と會社との間には何等かの默契ありと思惟するが如何、吾等は丸本を以て丸三を切崩すものなりと斷ずるものなるが如何。』との要求を提出したのである。

しかるに、會社では、『荷物を何人に扱はしむるも自由である。ことに丸本に扱はせるのは僅か全體の二割強であるから、そのために丸三が經營難に陷ることもない。また二項に對しては彼と何等の默契はない。』との解答をして、工員に再考を求めると同時に、會社もまた考慮だけはするとの約をした。

が、勞働組合の工員たちは、それに飽き足らずとなして直ちに同盟罷業を斷行して、『丸三の問題について町民諸彥に告ぐ。』と題したビラを散布し、爭議戰の火蓋を切つたのである。

三

この丸三問題といふのは、會社では從來から丸三運送店に扱はせてゐた荷物を、九月になつてから新開業の丸本運送店にも扱はせることになつた。

その數量は全體の二三割であつたが、當然丸三運送店の經營に影響して、同店の人夫七十名のうちから失業者を出した。その人夫七十名は悉く勞働組合に加入してゐるから、それによつて會社が勞働組合を切崩すものであるとして、勞働組合加入の會社工員の全部が起ち上つたのである。が、丸三問題を同盟罷業の名分とした彼等は、四五月頃に一度提出して保留となつてゐた要求の、

『一、賃銀の一割增給（女工は二割）。二、解雇、老衰、退職手當の增率。三、年末賞與の最低額を日給一ケ月分と定むること。四、桶工徒弟養成のこと。五、熟練工に達する年限を四ケ年とすること。六、日雇工に對して工員扶助規定を適用すること。七、從來通り會社の荷を丸三に取扱はしむること、八、團體協約の設定。』等を提出して會社に迫つたものであるが、勞働組合員なる罷業團の根本問題は、丸三問題や賃銀問題でなく、

關係協約を設定して、會社に從業する勞働者全部を、すべて勞働組合員にしようとするにあるし、會社としてはそれが何より辛いのだ。

つまり、今回レコードを破る迄の爭議が續いてゐるのは、團體協約の設定といふ大暗礁があるからであつた。大正十二年の大爭議の時に、當時の千葉縣知事齋藤守圀氏が出馬して双方を調停した場合とは異つて、既に昨年十二月の縣會での千葉縣知事は、『野田爭議に對して調停するの意志なし。』と言明したくらいなのである。會社も爭議團も互に死力をつくしてゐるのは此一點にあるのだ。

いまでこそ、野田といへば勞働爭議の名物となつてゐるが、十年程まへまではその影さへ射さなかつたものである。

かつて野田の資本家たちは、他の地方に頻々勃發する勞働爭議を眺めて、對岸の火災程にも感じてゐなかつた。自分たちと勞働者は主從を通り越して親子の關係になつて、親も子も孫も代々ひき續いて雇はれてゐるのだから、勞働爭議などの起らう筈がない。彼等勞働者たちは、自分等が仕事をさせて遣つてゐるから今日の活計をたてゝ行けるのだから、その恩に懷いてゐる以上、何の爭議ぞ、何の罷業ぞと思切つてゐた。勞働者たちも資本家なる御主人に隷屬してゐさへすれば、決して食ふに困ることはないと信じてゐた。所謂、儉しい、野田であつたのであつて、資本家にも勞働者にも天國であつたのである。

だから、茂木、高梨の一家一門は町の殿樣であつた。彼等數家の資本家以外は、彼等の事業に從事してゐる勞働者か、出入商人か、直接間接に多少の關係を持つてゐる人々であるから、公私ともに町の總ての權力は資本家の掌中に收められてゐることを、誰れ一人として怪む者はなかつた。さうして、茂木七家、高梨一家は、互に姻戚關係をつくつて、相援けてゐるから、その基礎はいよいよ堅いものがあつた。他に一二の醬油業者もあるが、迚も比較にはならない。茂木七家のうちに數へられてゐる某の如きは、工員たちが營々とその仕事にいそしんでゐるのは、彼等自身の生活のためにでなく、主人たる自分のためにのみ働いてゐるのだと思つて、すこしも疑はなかつたのは、つい近年までのことであつたといふ。

そんな次第であるから、彼等資本家の一族のうちでも、醬油業を經營してゐる當主ばかりが、あまり幅を利かせ、尊敬されてゐるのを面白からず思つて、心ある者は野田の町に住んでゐるのを嫌つて、大方他の地方に出てゐるのは事實だ。何しろ、野田に行つたら、醸造家でなければ尊敬されないのだから仕方がない。學問があらうが、官位があらうが、藝術家だらうが間

題にはならない。

たゞ、醸造家樣、樣であつたのである。

しかし、かうした彼等の泰平の夢はいつまで破れないではゐなかつた。

四

十年程まへから、時代の思潮は野田町へも流れこんで、資本家たちより先きに勞働者たちの目を覺ましはじめた。三百圓もする莨入を腰に提げた御主人に魚釣りのお伴をさせられ、茶店でたらふく酒を飲ませて貰つたことを、ながく自慢話としてゐた雇人の忰は、その三百圓もの莨入が、果して誰れの努力で出來たかを考へるやうになつた。自分たちの汗の一粒が交つてゐやしまいかと疑ひ出したのであつた。資本家の子供たちが、小學校へ來ても、別室で辨當を食ふのに、自分たちの子供等が教場で喰つてゐるのは、何故だらうかと考へ出したのである。

が、さうした勞働者たちの樣子を察して來た資本家たちは、時世の進轉に順應しようと、忽ち資金を併せて、七百萬圓の株式組織としたのであるが、それはもう遅かつたのである。その頃からいよいよ目覺めて來た勞働者たちは勞働組合を組織し、大正十一、二年頃には急激なる發達を示した。組合員一千人を算したばかりでなく、しかも一人の會費滯納者もないといふ盛況を呈し、總同盟に於ける關東の中堅となつた彼等は、曾つてゐた小羊の群れが、俄に狼となつた勢ひをもつて、大正十二年に大罷業を敢行して會社へ要求を提出した。と、足もとから鳥がたつたほどに驚いた資本家は慘々なる打撃を蒙り乍ら、工員たちの要求と妥協してやつと解決したのであつた。

それから後ちの野田は勞働者の天國とならうとしつゝあつた。もちろん彼等の待遇は改善され、しようや者（醤油屋者の意）と呼ばれてゐたのが、藏人と呼ばれるやうになり、此頃では工員と呼ばれるやうになつた。年給百八十圓食費會社持ちであつたのが、日給最高二圓五十錢、平均賃收二圓二十五錢となり、勞働時間も、平均四時間半、短きは二時間、長くて六時間となつたから、もとよりは大變によくなつた。近頃では、早く仕事を了つた工員が正午頃から入浴して、濡手拭ひをぶらさげて町をそゞろ歩いてゐる姿を見かけるのも決して珍らしくもなくなつてゐる。

隨つて、カキツと云ふ紺木綿の勞働着をつけて、卑猥な鼻歌を唄つてそゝり歩いてゐた彼等は、古洋服を着て勞働歌を唄ふといふ風にいつか進んで、所謂文化人たる彼等となりつゝあつた。と、同時に勞働學校を開いて、眞劍に新時代の智識を吸收

し、新思想の洗禮をうけつゝ、漸次に向上しつゝあつた。且つ、組合の基本財産を蓄積して、彼等自身の戰鬪力を充實させてゐたのである。

けれど、資本家も、大正十四年には資本金を一躍三千萬圓に増資して、理想的の第十七工場を新設して、非組合工員を養成しつゝ、漸次他の十六ケ工場にも自家の理想を實現しようとしてゐたのだから、何時かは勞資の衝突が免れないのだつた。

だがしかし、會社では勞銀も他に比較して現在でも低くはないと言つてゐる。工員たちはいまの勞銀では社會人として生活が出來る筈がないと言つてゐる。が、私には何れの言を信じていゝか分らない。けれど、會社にならない前は、工員たちはそれぞれ、大釜に炊いた飯の殘り——こげつきと言つたものを澤山底に殘す——を家庭に運ぶことも自由だつたし、醬油はもちろん、豆、麥等、または香の物なぞは勝手に持ち出して家庭に供給してゐたり、近在から町へ出たものは釀造家の台所で文句なしに飯を食べさせて貰つたりしてゐた頃の方が、資本家も寛大であつたし、工員たちも暮しよかつたらしい。工員の女房たちは醬油を搾る袋を縫つたりすることで小使錢を貰つてゐたから、喰ふに困るといふことはなかつた。また、獨身の工員たちは工場に寢泊りしてゐて、醜業婦を連込むのも大目に見てゐられたから、工場からお白粉のはげた二三人の女が朝早く歸つて行くのを見かけられた頃の方が、ずつとせち辛くないやうに思へるのだ。

資本家が慈善や公共のために費すところも、其頃の方が多かつたとの話である。

五

それは兎も角として、工員たちは、今度一齊に同盟罷業を決行すると、先づ第十七工場を封鎖せよと叫んだ。第十七工場の門前に天幕を張つて、罷業團員二百餘名が晝夜これを見張つてゐるし、他の多くが附近に集合して勞働歌を唄ひ乍ら、第十七工場に這入らうとする工員を喰止め、意に從はないものを擲つたり蹴つたりして極力妨害したから、第十七工場も休業の止むなきに到つた。

第十七工場の非組合工員三百二十名に入場されて、相變らず操業されたのでは、折角の罷業も徹底しないし、氣勢を削がれることになるから、彼等はそこに力を集中させたのである。私もこのたび該十七工場を參觀したが、その大部分は動力と機械とによつて操業が行はれ、熟練工を要としない仕組になつてゐた。その仕込倉（モロミを作る）の如きは、六千坪程あつて、

東京の誇りとする丸ビルの二倍もある。さうして、會社の年産五十萬石のうち、十五萬石をこの一工場から産出するといふのだから、罷業團が封鎖したのだつた。

が、會社側としても、一日も早く第十七工場を開かうとした。盛んに自動車を走らせて切崩しを行ふものだから、罷業團でも總同盟から借り出して來たオートバイを活躍させはじめたので、ガソリンの爆音と警笛の響が騒しいのに交つて、『裏切り！』『潜入！』等の叫びが騒々しかつた。と、同時に罷業團も會社も、各自の立場によつての聲明書を散布したのを始めとして、宣傳ビラの戰ひとなつた。

即ち、會社側では『所謂丸三問題に就いて。』とか、『既設工場整理廢止をなすやも知れず。』等その他の聲明書や、數々の宣傳ビラを散布し、罷業團からは、『我等の態度を聲明す。』だの、『町民諸彦に告ぐ。』等その他のビラが散布されたので、町民は毎日宣傳ビラの雨を浴びてゐたが、遂に町民の有志からも、『天下の一大事』『危險なる羊の群』なぞの、會社側に好意を持つたビラを散布し出した。さうして、會社は罷業切崩しに狂奔し、罷業團では、演說會を開いて會社を攻撃し、町長、會社重役を訪問して陳情したりしてゐた。

しかるに、會社の生産が全然杜絶したので、非常に困つたのは、豚をさかんに飼養してゐる東葛飾郡北部の町村であつた。彼等は豚の飼料である醤油粕の供給が杜絶しては、多數の豚の生命に關するところであると騒ぎ出して、村會が開かれたりしてゐた。が、會社は極力第十七工場を開かうと焦つたが、工員が集まらない。工場前の見張りは警察が解散を命じてくれたけれど、その途中の諸處に罷業團がうろついて居るから、工場入りをする非組合の工員は危險至極であつた。

けれど、會社を始め、資本家の一族は復歸勸誘に努めたので、漸く身をもつて本社に潜入して來る非組合工員がぽつぽつ出來て來た。が、その頃、某資本家の一族も、自分の家とは譜代の關係ある工員の一人が、罷業團の有力者となつてゐるので、その主人の義弟が會社復歸の勸誘に行つてゐると、はたに居た罷業團員から、

『君の姉さんなる人は、大に吾々の爲に同情を持つてゐるのだから、その弟であるからには、吾々に味方してくれないでは困るぢやないか。』と、きめつけられたので、折角彼を復歸させようとの意氣込みも、ためにひるまされたとの話がある。彼の姉といふのは、最初の萬國勞働會議の婦人代表として出席したことのある社會學者であるのだが、それは既に十年もまへのことで、いまの彼の女の心持ちが、勞資何れに好意を持つてゐるか

を知て居ないけれど、かつて勞働團體でしたことのある彼の女の演説を一度きいた丈けで、いまに彼の女を自分等の味方だと思つてゐるものがあつたのだ。

しかし、復歸勸誘をうけた彼の工員が舊恩に感じてやがて復歸したので、某家に罷業團員が裏切り勸誘の恨みを含んで乘込んだが、門内の貸家に警部が住んでゐるので、强談判も出來ず引き退つたといふことだ。

六

ところが、社員のみの手によつて、ともかくも第十七工場の操業を開始し、約十日目の廿七日に、罷業以來はじめて十七樽を出すことが出來たと同時に、數日まへから本社に潜行してかくれてゐた工員を自動車で前後四回に工場へと送込んで操業をつゞけることになつた。が、その途中を、罷業團は妨害しようとして、會社の自動車の進行を阻止しようと、大手を擴げたりしたので、自動車の泥除けに衝突したものもあつた。が、自動車に飛びついたり、幌を破つたりしたものもあつた。

これは九月二十五日の出來事だが、爭議團長の小岩井某が、復歸妨止を裏切り喰止めのためにサイドカアで奔走してゐるうち、いつか會社の工員訪問隊自動車に移つたはいゝが、ついに東京まで[illegible]團では工員招致の訪問活動の邪魔をしてやつたと喜び、會社では團長を終日捕りこにしたと喜んだなどは爭議中の珍劇であらう。

かうして、會社の重要なる工場から汽笛が鳴り響き、煙突から黑烟が吐かれ、樽の音が聽え出すと、罷業團は激昂した。罷業直後に工場整理のために烟突から烟りをあげたのでさへ、直ちに抗議に及んだくらいの彼等だからその筈だ。はじめて操業開始の黑烟が空に棚引いたときを追想して、會社側の者からは『あの時は實に愉快でしたよ。』との心からなる悦びを、罷業團員の一人からは『本當にしやくでしたね。』との沈痛な叫びを聽かされた私には、烟りがかくも双方の人々に感慨を與へたかの心裏を解することが出來なかつたけれど、一と流れの黑烟が双方の士氣に及ぼしたことは偉大であつたに相違なかつた。

そこで憤慨した罷業團員たちが、第十四工場附近で竹槍を作つて、何かの暴動に出ようとしてゐることを探知した警察では、直ちに十數名の警官を急派して罷業工員十四名を檢束し、竹槍七十四本を押收し、更に取調べの結果、彼等が何れかの工場を襲ふ計畫があつたらしいので、折柄勞働學校に參集して協議中であつた爭議團の最高幹部八名は松戸區裁判所に送られ、

鬪員にて檢束された者が七十名に及んで事無きを得た。

その翌日、九月二十九日には、日給支拂の通知が罷業工員の家庭に屆いたので、その日は雨天であつたけれど、日給を受取に本社へ詰めかけた者が千名以上であつた。が、九月三十日には、會社から懲戒解雇四十六名と、會社の都合での解雇百名に對する通知を發したので罷業團はまた騷ぎ出した。ちようどその日には、竹槍事件で檢束されてゐた罷業團の最高幹部が赦放されてゐたから、十月二日を以つて解雇通知を會社に突き戻し、勞働組合大會を開いて氣勢をあげたが、會社第十七工場の出荷は一日二千五百樽を算してゐた。

だがしかし、町民の有志から正義團なるものが出來て、會社に味方したので、罷業團では野田劇場と野田キネマの二ケ所で會社糺彈の演說會を開いたり、種々の宣傳ビラを散布したりしてゐたが、會社では復歸工員をもつて第九工場の操業を開始したので、裏切を防ぐために罰金の證文を各自から取りはじめ、總同盟大會では野田爭議應援の件を決議し、併せて會員は會社製品『龜甲萬』醬油の不買同盟をも決議した。と、會社にては續いて第十五工場の操業を開始し、『罰金證文は無効なり。』との書信を各工員に發して裏切りを勸誘したりしてゐた。

『龜甲萬』の不買同盟をしたと聽いた町の古老は、その時こんなことを言つてゐた。總同盟の會員が幾萬人居るか知れないが、平常から龜甲萬を使つてゐた人等ぢやあるまい。あれを使ふのは勞働者階級にはありますまい。何しろ、龜甲萬の先々代が昔東京で豪遊を極め、吉原に龜甲萬の都々逸を唄はせたり、自分は**むらさき**大盡とまで呼ばれて、さかんに賣出した品物だから。

七

漸次町民の同情を失ひ、裏切りが續出して來たので、罷業團の氣勢は衰へて來たが、十月二十日には、勞働學校と野田劇場の二ケ所に集合籠城して切崩しを豫防すると同時に示威行列をした。その參加人員は千數百名であり、折柄、總同盟から松岡某外一名の猛者が來野したので一同は殺氣立つた。

が、兎も角も復歸工員を除いた殘りの七百人が、今日まで餓えず凍へず、しかも家族を合せて三千人が會社に對抗してゐられるのは、罷業前までに八萬數千圓の資金を蓄積してゐたし——私の知る工員は女房と子供一人暮しなので每月三圓宛掛金をしてゐた——關東同盟會員から日給三分の一の應援金があつたり、その他各地の勞働團體から同情寄金が、私が本部の鴨居に貼付けてあるビラを一寸見たところでは、高きは千二十一圓か

ら、低きは四圓七十錢等の兩毛、高崎、佐野、大間々支部・京濱支部・京濱支分會・芝浦工場支部・市川支部・十八支部・鐵道運輸勞働組合神田支部等、等の數十枚あつた。現に一月十八日の大雨を冒して地方から三人の來援があつたが、人員の應援は今必要がない、食はれるのが困ると思つてゐると、彼は懷中から金一封を出して呉れたので、大に感謝して團員は受け納めたさうである。

さうした資金によつて出來てゐる購買組合が、即ち肝要の兵站部で、そこから各團員七百の家庭へ、二十名の團員によつて、毎日、米、味噌、醬油、砂糖、茶、その他日用品七種類が運ばれ、まだ不足するので、赤ん坊を背負つた女房連が絶えず何かしらを受取つて行くのである。が、もちろん、いまは爭議中のことであるから、それ彼の物品は傳票一枚で渡されるのであるが、何しろ、收入と來たら罷業以來一錢もないのだから、郵便貯金や銀行貯金が、今日までに五萬圓以上も引出された。一口二圓とか一圓五十錢とかを鼠がひくやうにチビ〳〵と引出して小使にしてゐるのだから、心細い次第である。あと二萬餘圓ほどある資金と、個人〳〵の貯金がなくなつたら、彼等は何處から兵糧を求めるだらうか、勞働組合の友誼團體からの同情と援助を求める他はないのだ。

しかし、關東同盟會野田支部であるところの、[illegible]には、各地の勞働團體から多大の同情がある。總同盟本部でも中中力をいれてゐる。それは、今日までの彼等が、各地に爭議があるたびごと、良く應援し、良く寄附金をして、友誼をつくして來たからである。もし此際野田支部が破れたとなれば、關東總同盟の中堅を失ふことになるから、總同盟でも事重大と觀てゐるのださうだ。

ところが、會社では復歸工員や、また近在の青年や、正義團員によつて各工場を次第に復活させたけれど、尚就業の餘地を殘して、罷業團員にしばしば出勤催告をしたが應じないので、十二月十三日附を以て百四十九名を解雇し、二十日附を以て殘りの七百三十五名を全部解雇したので、罷業團と會社とは全く手切れになつた。が、罷業團の多くは、年内には解決するだらう、會社を負かせるものと思つてゐたのに、會社の態度がいよいよ強硬になつたのを知つて動搖し出した。と、幹事その他が焦燥し出した結果次第に惡化しないではゐなかつた。

で、會社員の父に硫酸を浴ぶせて兩眼を失明さすやら、三百人の團員が大擧して町の門松を引拔くやらした。が、一月十日には四十名の團員が鬨の聲を擧げて工場に投石して塀を破つたり、翌々十二日には、三十名の團員が河岸の工場地帶に出動し

て示威行列をしたりしてゐたが、會社ではかねて計畫してゐた工場移轉を實現するため、兵庫縣に數千坪の敷地買收を終つたとの報を聽いた團員は、最後の手段として工員の兒童七百餘名の同盟休校を斷行した。また連夜裏切り工員の家を襲つてゐた彼等は、百三十名程で野田目ぬきの大通りに出動して、正義團員と見なした家に石瓦を投げて二十數軒の窓硝子や飾窓を破壞したので、九十名は檢束され、幹部以下三十名は松戶區裁判所へ押送されたりした。

八

かうした爭議を百數十日もつゞけてゐる、會社も罷業團も苦痛であるに相違ないが、町民の迷惑はまた非常なものである。四千戶、一萬七千人の町内は火の消えたやうだ。雜貨店や飮食店等の商賣はないし、驛前の俥夫ですら日收が半減したし、その上、日夜戰々兢々として、夜などは人の往來が絶えて了ふといふのだから堪らない。地代も屋賃も揚がらぬ。活動寫眞館はたゞ一軒營業してはゐるが、その不入と來たら氣の毒な樣である。町の廢滅を悲む叫びが到るところに聽える。

が、會社や罷業團の幹部には相當の覺悟があり、互に相讓らうとはしないでゐる。けれど、資本家一族の家族たちや、罷業團員やその家族たち、また非同盟工員やその家族たちは、たゞ一日も早く爭議が終決すればいゝとばかり希つてゐる。その結果は細君連や女房たちの神信心となつて現はれた。會社側の細君連と罷業員の女房たちは、それぞれ思ひ思ひに、町の神社佛閣に參詣して、一日も早く終決するやうにと熱烈な祈願をこめてゐる。かう成つては神頼みより他はなくなつたのだ。

現に二十日の日なぞは、寒風の吹き荒むなかを、赤ん坊を背負ひ、水鼻を垂らした小供の手を曳いた罷業團員の女房が隊を組んで、各所の神社佛閣を巡拜してゐたが、會社重役茂木佐邸の前にある妙法寮に來ると、彼の女たちは團扇太鼓をとり出し、頻りにお題目を唱え乍ら、ドンドコドンドコ囃し立てゝゐたので、警官に解散を命じられての歸途、會社の門前や重役の邸前を通過するごとに、彼等の頑迷を高聲に罵つてゐるのを見た。茂木佐の家族たちは、妙法寮のまへに土下座して、これ見よがしに祈願をこめてゐる罷業側の女房の姿をのべつに見せられるが辛いとも言つてゐた。が、かうなつては神佛も何とか御考慮あらせられることだらう。

七百の兒童同盟休學に對して、會社では彼等の策戰だと言つてゐる。が、私の見聞したところでは穴勝ちさうばかりでもない双方の兒童が學校やその歸り途に、時々衝突しないではゐない。

すると、一方は『會社の犬畜生裏切り者』と罵り、一方は『會社の方がいゝんだぞ。』『罷業して働かないとおまんまが食へなくなるぞ。』と遣り返して、遂には喧嘩になることが度々である。しかも、此頃ではいよいよ烈しくなつた。その喧嘩口論を裁くのは小學校の教員であるが、彼はそれに對していつも『會社の方が正しいので、非組合工員や復歸して働いてゐる方が良いのです。働くのは人間の本分ですからね。罷業して働かずにゐるのは善くありません。』といふのだから、眞にまだ理非の分別のない、彼自身としては何の罪とがもない白紙のやうな罷業團員の兒童七百人こそ慘めなものである。

が、この事實を知つた彼等の父兄が平然としてゐられる譯がない。例へそれが敵であるにしても、この慘めな兒童に對して同情しないものはなからう。父兄の憤りも無理はないので、結極兒童の同盟休校となり、彼等は別に開校して彼等の兒童として適當の教育をしようとなつたのだが、その筋から小學校としての許可がなかつたので一頓挫を來たした。

けれど、學校は開けないにしても、復校させることは出來ないから、今では、赤松克麿氏の令妹が來て世話を燒いてゐるが、勞働學校の不完全な建物のなかで、机一つなく、たゞおとぎ噺を聽かされたり唱歌を唄はせられたりしてゐる丈けである。が、彼等兒童のなかでも、ことに成績の良い者ほど休校を厭つて、もとの校舍を懷かしんでゐる。ある罷業員の女房は、尋常二年生になる愛子を指し乍ら、

『この兒は學校が良く出來ますのに、かうしてゐて遅らして了ふのは可哀想でしてね。………ですけれど、何うも……』と、憂はし氣に言つて暗い顔をした。

私は白いエプロンをかけて、本も持たずに學校でない學校へと、淋しさうに出て行く彼の女兒をしばらく見送つてゐた。

九

私は三四日まへの夜、罷業團の最高幹部某をその本部に訪問した。が、生憎と彼は打壊しの件で松戸に押送されての留守だつた。

けれど、その本部は竹矢來で圍はれた空地の奥に長方形の建物であるのを見た。さうして、空地の入口には受付兼溜り所にあてられた天幕張がある。その兩側がトタン板で圍はれた中に、炭火を抱いて十數人が屯してゐる樣子は、ちようど震災直後の夜警團そのまゝであつた。からつ風が吹き荒む厳寒の夜をそこに明かす彼等を見ると、爭議の犧牲がどんなに辛いかを思はずにはゐられなかつた。彼等の中に巡査のやうな帽子を被

り、金ボタンの外套を着し、長靴を穿いた一人を見たが、それは監視？とか言つて、裏切を見張つたり、各部隊を統率したりする指導者の一人であるさうな。本部の中にも這入つて見たが、その夜は安部某の演說があつたり、幹部が檢束されてゐたので、廣いバラックには無人だつた。が、そこで數人の團員と親しく言葉を交はし、幾人もの團員に接してみると、素朴なる地方人であることを感じ、一圖に狂暴なる手合だと想像してビクビクしてゐた私の考へは裏切られた。

それは兎も角として、會社に行つて見ると數名の警官が事務所に居るのも異樣に感じた。が、重役某々の私邸を訪れると、いづれも正門が嚴重に閉ざされてゐた。某氏の邸宅なぞは、三度も潜戸を經なければ玄關に行かれないやうになつてゐた。それは何時罷業團に襲はれるかの懼れに備へてゐるのだが、隨つて彼の會社通ひは自動車でなければならず、兒寅の通學も付添ひなくては出來ないでゐる。彼等重役は各すくなくとも千萬長者であるのに、かうした不安に怯えてゐるのも、爭議あるが爲だと思はずにはゐられなかつた。いま熱海に逃避中である、その富一億萬圓を擁するといふ某——彼は一個五百圓以下の物は決して買はぬ、それぐらいの價格の物なら何時費るにしても損はないからだと、かつて言つたことがある——にしても、正月を自宅で迎へられないとしたら、生れて此方一個百圓のものも買ひ得なかつた私よりも惱みが多からう。

第十七工場の工員をはじめ、他の工場に復歸してゐる工員は幸福だ。三度の飯も、入浴も、お茶菓子も、宿泊も會社持ちで、給料は丸貰りである上にも、年末の賞與金も貰つたから幅福であると、會社では言つてゐる。が、彼等は本當に籠の鳥だ。工場の門外一歩も出ることが出來ずに働きつゞけてゐるのだ。午後の三時頃には仕事を了つて、入浴して飯を食つて了つても、散歩に出ることも出來ずに幾日も宿りつゞけてゐなければならない。金を貰つても費ふことが出來ず、家庭の樂みから遠ざかつてゐること久しいのである。ある青年工員の如きは、新妻を貰つたその翌日から爭議がはじまつたので、それ以來家には歸へれず、新郎新婦は、工場の塀を隔てゝ時をり相見ることを儚い樂みとしてゐるのもある。何しろ、今は非組合工員と爭議團とに分れて敵視しゐるが、もとは友達同志であるから、裏切られた親友を引戻しに行つたはいゝが友情にほだされて工場入をすると、彼の女房の兄が罷業團の急先鋒であるところから、留守宅で離婚問題が持ちあがつてゐる椿工員もある。

去る二十日の縣會議員選擧の時には、はじめて與へられた普選の一票を持つてゐるものが裏切工員のなかには相當あつた。

が、彼等はもとの仲間であつた罷業員と面を合せるのがいやさに、帽子を深く被り、手製の假面で面を隱し、襟巻で腭から口を埋めて外出したのち、やつと權利を行使したのを見たが、これも爭議中の悲喜劇である。も一つ喜劇を御紹介しようなら、往來に鹽や飯櫃を持ち出して、

『爭議が續いたので食へなくなりましたから、何卒これを貰つて貰へますまいか、助かります……』と、憐みを乞ふてゐる如何にも見みぼらしげな者がゐたので、それを見た罷業員の者たちが訊問すると、彼は會社側の者から十圓の手當を貰つた乞食だと白狀した。それは、罷業團に戰闘力がなくなつた實例を見せるための、會社側苦肉の一策であつた、と、彼等は言つてゐた。

一〇

爭議も百三十日にもなると、工場に籠城してゐる工員も幸い。終業の後ち、まだ明るい午後の四時だといふのに、工場の一隅に蒲團を敷いて、家庭を戀しがつてゐるらしく、淋しい顏を寄せて轉がつてゐる二三の工員を私は見た。工場の一隅で、樂器を奏でゝゐる、青年工の曲から、私は哀愁をそゝられずにゐなかつた。昨年から今日まで、工場に詰めつ切りで、外の得

女から付かされ通してゐる工場長の疲れた姿を私は見た。

しかし、二ケ所の集合所に籠城してゐる七百の罷業員はもの淒い。彼等は設備の貧弱な、供給不足の孤城に立籠つて、自宅には容易に歸へされないでゐる。裏切り勸誘を惧れて、『會社側の者は出入を禁ず。』との貼札がしてある自宅には女房子供が淋しく暮してゐるのだ。重立つた連中は罷業以來家に歸つたは一度か二度ださうである。かう長くなつては遣切れないから、團體から脫けたいが、いまとなつてはとの、一老工員の愁嘆を私はきかされた。東京朝日新聞に『野田爭議團遂に總崩れ。』と出てゐるのに憤慨して、記者某を見かけ次第擲らうと意地張つてゐた罷業團員の一群れを私は見た。爭議に昂憤しつゞけて來たので、神經過敏になつてゐる會社員の一人とも私は會つた。

罷業團の最高幹部の一人である者の家を訪づれると、夫が松戶へ押送された後でもあつたらうが、爭議團の頃には、演壇に立つて氣勢を揚げた彼の女ではあるが、すつかり悄氣げてゐた。が、私の顏を見ると、

『何うなることでしようう?』と、思案に餘つた、憂はしい顏を向けて淚をこぼした。が、『あちらの旦那樣のところへ、明日か明後日ご相談に行かうと思つてゐたところでしたの。あのお方でしたら何とか解決して下れさうなものですから……』

彼の女が、あちらの旦那樣と言つたのは、ある哲學者のことである。彼の女は彼の哲學がこの爭議地獄の苦難から救ひ出してくれるかとの信賴を持つてゐるらしいが、それほど彼の御利生を信じてゐない私は、何にでも縋らうとしてゐる遣瀨ない彼の女の姿から目をそらした。と、壁際の書棚のなかに、新潮社版の『社會問題講座』の數册が樹てられてゐるのを見た。と、社會運動の闘士として、月の半分は他の爭議の應援に出てゐたといふ、彼の女の夫が松戶の區裁判所で寒がつてゐるだらうことを思はずにはゐられなかつた。

私がいよ／＼野田の町を辭さうとした朝、彼の女は私を渡場まで案內してくれた。渡舟が來たので、私が乘移つても、滿々と岸を浸して、滔々と流れてゐる江戶川の畔で、骨に滲る川風に吹かれ乍ら、寒げにしよんぼりと何時迄も彼の女は佇んでゐた。荷車や自轉車と一緒に渡舟に運ばれ乍ら、私は彼の女の現在に同情の淚を禁じ得なかつた。渡舟からあがつて、彼岸を見ると、はじめて歸つて行く、賴りなげな彼の女の筒袖半纏の後姿を通して、七百人の罷業團員の女房たちの慘めさを偲ばされた。爭議は今日で百三十日も續いてゐるのだ。爭議の暗雲が散じて、平和な麗日の光りを見るのは何時のことであるか、會社側では花咲く四月迄はと觀測してゐる。

私がかうして東京に歸つて來ると、罷業員の女房連五名が、內務省社會局を訪づれ、七百名連署の陳情書を提出して解決方を賴んだとの新聞記事を見た。また三十日の新聞には、高等二年生の某兒童が、その眞相を訴へる爲めに、出版印刷工組合主催の演說會にのぞんで、演壇に立つべく上京したとの報道があつた。また今晚も風が強い、野田町に在る私の親戚、知己、兄弟は安眠出來ないであらう。（昭和三・一・三〇）

勝敗

(一) 贔屓心理

廣津和郎

自分は野球は早慶戰の中止時代から見てゐる。アメリカ歸りの早稲田の河野が、派手なボディスキンギングをやつて、網町のグラウンドを壓倒した頃から見てゐる。

それは自分の中學の二三年頃だつたが、その頃は自分は大の早稲田びゐきだつた。

ところが、その後自分は早稲田大學へ通ふやうになると、どうしたものか慶應びゐきになつてしまつた。戸塚のグラウンドに行つて練習を見るよりも、網町のグラウンドに行つて、慶應の練習を見るやうになつてしまつた。もつとも、自分の家が麻布にあつて、網町のグランドに行くのがさう遠くなかつたためかも知れない。當時の慶應には、福田、小山、高濱、佐々木、龜山、等云ふやうな豪傑が揃つてゐた。そして早慶戰は中止となつたが、その後の早慶の力量は、どうやら慶應の方が上になつたらしい事が、外國ティイムなどの來襲の度に、證明されて行つた。

福田といふ選手は恐ろしい捕手で、セコンドによく一直線に近い球を投げてゐたが、その勢でサアドに投げると、三壘の神吉が「ア、痛」と云つて、顏をしかめてゐた。その福田が、何でもアメリカのオール東洋艦隊と戰つた時、投手小山の不出來のために、途中から、自分でプレエトに立ち、十五六の三壘を取つて、リイドされてゐたのを、たうたうあべこべに打負かしてしまつた。——その時自分は、始めて、野球の勝敗がきまる前に、何と云ふことなく見物の我々の胸に來る或豫感を恐ろしいまでに意識した。三點ぐらゐリイドされてゐたのを、一點一

點と恢復し始める前に、何かさあつと云つたやうた、一つの積極的な響が、場内の隅から隅に行き亘つて來るやうな氣がする。『これは勝つぞ』そんなやうな心持が、點數の開きなどには關係なく、胸に來る。それは誰の胸にも感じ始めるものに違ひない。すると、ポンポンと、出るもの、出るものが打つ。敵が失策を始める。守りにまはると、稲田の腕が益々冴えて來る。敵のバッタアが三人づつ死んで行く。

　この見物の胸に來る勝利の確信は、選手の胸には、尙一層波打つてゐるに相違ない。

　それがあべこべの場合がある。勝たせたいと思つてゐる方が、二三點のリードをしてゐても、何といふ事なく『あぶないあぶない』といふ感じのする事がある。狀態がどんなによくとも、積極的な氣持になつて來ない事がある。そしてそんな時には、やはりそんな風に、やつぱり最後には負けてしまふ。

　自分はその後暫く野球に遠ざかつてゐた。かういふものは習慣的なもので、遠ざかつてゐると、それ程の興も惹かない。と同樣に、又見始めると、とても見たくて堪らなくなる。

　自分は早慶が復活する少し前から、又々大の野球ファンになつて來た。（近頃は野球と同樣にラグビイにも甚だ興味を感じ始めたが）そして野球を見てゐると、實際その間は『浮世の善惡』も打忘れる。『戀も悋氣も忘れる』といふ奴かも知れない。そしてそんな風に他の一切のことを忘れて、唯あの十八人の選手の行動如何を見守つてゐる、などといふ心境は、實際他の事では經驗出來ない。

　勝つか負けるか――といふ單純なこの結果が、かうまで人の心を奪ふ魅力あるものであるといふ事は、ただただ驚くの外ない。

　自分は不思議な事に、今度野球興味が復活すると、又々早稲田びゐきに自分が舞戻つてゐたことを見出した。早慶戰の中止時代には早稲田びゐきであり、その後慶應びゐきとなり、これから又早慶戰の復活に近い頃に早稲田びゐきとなつてゐる。――これは自分でも不思議だ。思ふに、かういふ心持は一寸した事から來るものらしい。選手の一人に好きな人間があるとか、或はどつちが勝つかと、かけをして、イヤ應なしに一方の勝を望まなければならなかつた、と云つたやうなきつかけから、それからはそつちがひゐきになるとか――自分のは山崎、井口、根本、竹内などと云ふ選手が、ふと好きになつたところから、急に早稲田びゐきが復活したらしい。

　勝敗心理も面白いが、またどつちに勝たせたいといふひゐき心理も面白いと云はなければならない。

早慶復活の第一戰に、プレエトに立つて亂打されて、みぢから右翼の永井を顧みて、憫みを乞ふやうにして、代る事を願つた慶應の濱崎が、それから一年半の後、たうとう慶應の雪辱戰に、素晴しい威力を以て、早稻田を一蹴した光景は、野球ファンの心に非常な感激を與へた。自分は早稻田に勝たせたいと同時に、濱崎になら雪辱させてやつてもいいといふやうな心持も一方した。が戰が進むにつれて、單なる雪辱どころか、手も足も出ない早稻田に腹が立ち、又益々油が乘つて投げてゐる濱崎に、一種の憎さと共に、憎しみを感じた。――もつともこれは早慶の勝敗といふことを念頭に置いての事で、濱崎があの小さな體軀であそこまで恐ろしい投手振りを示したといふ事は、野球ファンとしての自分に此上ない滿足と快感とを與へた。

野球の勝敗に對する野球ファンの心理も、隨分複雜なものと云つていいだらう。

與へられた題に合つてゐるかどうか解らないが、野球の勝敗を選手自身に云はせたら、もつと違つた面白い感想が聞かれるだらうが、ファンとしてはこんなものである。

(二) 勝馬投票

戸川貞雄

何んな環境に置かれても、人間といふ生物は、その環境のなかで、優劣を競ひ勝敗を爭ふ本能に生きる。これは人類が如何に進歩したところで、假りに仰えることは可能であつても、到底滅ぼすことの出來ない人間性であらう。人間が人間である限りは。優勝劣敗は自然の數、鬪爭性・賭博心理は人間の命。この數と命との經緯が織り出すところのもの、それが人生。

で、僕も人間の一人であるのが因果で、勝負事は嫌ひでない。然し自らスポーツの場に出るには少々無精、かと云つて技を練らねば味も出ない撞球などには無器用で向かぬし、圍碁・將棋は、面倒臭く、賭事であつても、花札戲の如きは、勝つと負けた人に氣の毒になり、負ければ負けたで口惜しく不愉快で、つい同情してみたり腹を立てゝみたり、結句、三昧に入ることが出來ないのである。

そこで見つけたのが競馬といふ奴である。馬券といふ代物た

のである。馬券——などといふと賭博心理が露骨で、お上品なレディイス・アンド・ジェントルメンの自尊心を傷つけまいものでもないから、曰く勝馬投票券。云はゞ財政經濟上の勸業債券や復興債券と同樣、これは帝國畜産事業への投資であつて、あはよくば二十圓で二百圓の穴をせしめようといふ慾張り根性のみで買ふのではないこと、宛も誰も三千圓の割戻しを覘つてのみ債券を購ふのではないと同じ譯合ひのものである。シーズンになると、目黑や根岸の競馬場に殺倒してゐるファンの群を寫眞に撮り、「慾の皮の突張つた人々の群」などと標題したりする不心得な新聞紙もあるが、甚だ怪しからん次第と云はねばならぬ。

競馬の好さは——先づそれ自體がスポーツであることだ。降られては閉口だが、春季にせよ、秋季にせよ、蒼天の下、ひろ〴〵と眼の下にひろげられて、末はうらゝに霞んでゐる芝生の馬場を、日本有數の名馬といふ名馬が、これも一流の騎手に驅られて、トロッティングに大ハンデに、懸命の輸贏を爭ふのである。ナスノ・クモカゼ・コーエイ・ファンタスティック等々、これは名馬の號であるが、眼を閉ぢると、瞼の裏の小宇宙に、靡くたてがみ、躍るひづめだ。

別に自分が騎つて、競馬をしてゐるわけではないが、その興味は、自分が土俵で四股を踏むわけでなくとも、相撲はファンに取つて無上の娯しみであると同樣。その上、馬券といふものがあつて、勝敗を端的にめい〳〵のポケットに響かせようとする仕組み、仲々以て行き屆いた工合のものなのである。

およそ我々が勝敗を爭ふのに——無遠慮に云つて、賭事に夢中になるのには、そこに我々の爭鬪性なり賭博心理なりを誘惑し、魅了するところの何かゞ、測り知られぬ何かゞなければならないのであるが、それはそれ自體の有つてゐるスポーツとしての興味以外、利害の打算が伴ふことは別としても、云ふならば運不運、當り外れ、運命といふ曲者でなければならぬ。運と云ひ不運と云ひ、或ひは不可抗的な不可測な宿命と云つたところで、片附いた後で振り返つて見れば、概ね算數的に割切れるものではあるのだが、さて實際に於いて、一寸先は暗であることも儼とした事實だ。で、豫め割り切れない。意外な人が、新聞の九星判斷でひそかに眉をひそめたり開いたりしてゐる事實を我々は見る。運といふもの——數となし命となすもの、これは人間のこしらえた觀念のなかでは、神さまに亞ぐ、或ひは神さまを凌ぐところの、愛嬌者でもあるし曲者でもある。

その曲者が、すべての勝負事には、おいで〳〵をやつてゐるのだ。そしてきび〳〵と片附けてくれるのだから痛快なのだ。

いでや曲者とばかりに組んづほぐれつ、松にはじまり桐に終る四十八手の裏表、秘術を鬪はしてゐる條にも、または春（秋）期競馬番組表、俗にブックとかいふ奴を睨み据え、鉛筆を甜めて、騎手の名前を書込んでゐる連中にも、必死の相が表れてゐるのは無理もないことであらう。面白いのはこの場合ほど、各人各個の性格がそのまゝ反映することは滅多にないといふことである。我武者羅に押してゆく一方の男、一分の餘力を殘して置くことだけは忘れぬ人間、用心深くして絶えず運命の石橋を叩いて——叩いてみても渡らうとはしない男、等々。

この氣味合に、勝負事の微妙にして複雜な味ひはひそんでゐるので、運賦天賦、イチかバチかの曲者任せでは、我々には興味が薄い。

例へば馬券である。勝負は僅かに一分何秒か二分何秒かで決してしまふ、何しろ駿馬は省線電車より速い脚であるのだ。アッと云つて口を明けてゐる暇に、二十圓の馬券が二百圓に化り、紙屑に化る。運天任せならそれだけの話で、味も素氣もありはしないのであるが、番組に現れた名馬の名を見、騎乘する騎手を知り、さて下見所へ引出された馬のその日の氣合を計るまでには、何うして容易ならぬ用意が要するのである。馬と距離、背負はされてゐる斤量のハンデキャップ、騎手の得意不得意、馬の屬する厩舍關係、天候、馬場のコンヂション、それらは初歩の常識で、馬の血統から成績記錄、騎手の策戰まで考慮して、さてこの組合せならこのレースはこれのものだときまるのであるが、そこへ到るまでの愼重な用意に、實に何とも云はれぬ愉しみがある。つまりさうしたプロセスをも引括めて、アッと云つてぽかんとするまでの間、それが競馬の勝負事としての全部で、だから競馬は賭博ではない、運不運など入り込む隙はない、と主張してゐる人もあるが、仲々さうはゆかないところに、また我々の人生行路に於ける歡びや歎きともひとしいものが味はれるのである。

（三）理想選擧敗北記

宮田修

（一）

勝負を云ふ程夢中になつて戰つたわけではないが、とにかく立候補の名乘を擧げて、見事に落選したのだから敗北記と題してもよからう。

僕が純粹理想選擧を標榜して選擧戰の陣頭に立つたのは、確かにこの前の前の總選擧の時であつたと思ふ。當時僕の區からは立川太郎君と三木武吉君とが名乘りをあげ、そこへ坪谷善四郎君がまた割込んで、互に鎬を削らうとして居た。何れも眞劍であつたばかりでなく、選擧にかけては何れも戰場數度の古つは者であつたから、その合戰の模樣は派手でもあり、激しくもあつた。立看板の林立、選擧事務所の續出、運動員の活躍は日一日と目まぐるしく、果ては飛行機宣傳の餘興まで入つて、戶別訪問の數はその煩に堪へぬ程であつた。この狀況を見て喜ぶものは、物見高い一部の東京人と子供ばかりで、所謂有識者流の中にはかなりの反感もあつた。かく云ふ僕もこの反感者の一人であつた上に、坪谷、三木の兩君は共に同門の誼を以て相識る仲だから、立場としても彌々困つた。そこへまた旋毛の曲つた一部の連中が來て、頻りにやれと勸める。人並みにやるには第一軍用金の準備はなし、その他背景の用意もない。初めは一笑に附して拒絶したが、うるさい戶別訪問に對する公憤と、熱心な勸誘者の親切とが遂に握手して、彌々旋馬に鞭を當てることになつた。

四

だが元より勝負を眼中に置て立つたわけではなく、國家の政治に參與すべき者は斯く神聖でなくてはならぬと云ふところを示さうと云ふ意圖から出たのであるから、第一金をかける運動は一切せず、强て人の自由意志をまげる樣な懇請哀願運動から超越し、立看板一枚出さず、事務所一軒かりず、有志の同情者から寄附された立候補の聲明書と、政見發表の演說速記錄とを、三四の友人及び家人の手を煩して郵送するに過ぎなかつた。尤も演說は區內の新聞社聯盟が主催した候補者立合演說會で一回、三木君の後援會が主催した演說會で一回、合せて二回程はやつた。

初めは全くの茶氣と選擧敎育の意味であつたが、だん〱各新聞が吹聽してくれたり、北澤樂天君の如き同情者が宣傳用の漫畫を畫いて送つてくれたり、未見の人達から激勵の手紙が舞込んで來ると、人の心は妙なもので追々選擧氣分が旺盛になり、世間の噂が氣になり初めた。そこへ…あなたの聲明書は大へん評判がよいとか、先日の立合演說ではあなたの話が一番筋が通つて居ると云ふ評判だとか、うれしいことを云つて聞かせてくれる人がある。從々氣はよくなつて、勝つことは勿論なくとも、百票以上は入るだらう。いや次第によつたら知識階級の多い土地のことだから、意外な番狂はせになるかも知れないなどと自惚れても見た。然し世の中は矢張り理想と現實とに、多く

の距りがあつた。即ち他の三君が千二千の得票の中に、驚く勿れ四十有八票の數を以て勝がついた。

◎

世が世ならと云ふ言葉があるが、今でも僕の立つた意圖と態度とは決して悪いものではなく、また間違つたものでもないと思つて居る。けれど職業政治家が飯の種に政權を爭ふ他面には政治の何たるを解しない衆愚の多い當世には、此態度が容れられないことは多言を要しない

それに投票意識と云ふものは妙なもので、折角の一票を無駄にしたくないと思ふ念が、かなり思慮のある人をさへ、平日の主張から裏切らせる場合がある。現に某大學の教授で別懇の間柄に居た某博士は、戰爭後僕に向つて、「最初は君にと思つたが、勝目が薄い様に考へたので、Mへ投票して了つたよ。わざわざ區役所まで出かけて往つて無駄にするのは惜しかつたからね」と語つた。斯うした例によつても、僕のとつた態度は彌々四十八票を獲ち得たのが却て不思議な位、選擧の實際戰には不適當であつたことが知られる。

議員選擧も運動競技も略ぼ同じで、ファンがつかないとものにならない。ものにするには運動費が潤澤でないと、センセーションを起さない。

◎

當時僕が費つた郵稅その他の雜費の合計百五十有余圓を得數四十八票で割つて見ると、一票三圓强の運動費に當つて居る。是から考へて見ても手ぶらでは戰が出來ない。いかな理想選擧でも、演說會場の借用費、印刷費、郵稅、旅費等の實費はかゝる。それに世話人へ多少の謝禮をするとして、少くとも三四千圓の金は必要だ。さうして見ると選擧を爭ふには、相當のブルヂョアであるか、有力なパトロンがついてくるれか、若くは一か八かの借金をするか、所詮理想だけで立つプロレタリア級では話にならぬらしい。此點から推して今度の無産政黨の候補者諸君に、多大の同情を禁じ得ない。

だが斯うした苦しい中にも嬉しい事が少くなかつた
十數枚の未見の知己から貰つた激勵の手紙の中には、よく僕の心中を味つてくれたものがあり、殊に或る人の如きは三日間無料で數台の自動車を提供してくれようと云つて寄越してくれた人もある。また是は數年の後に聞かされた話だが、未だ曾つて投票場などへは覗いても見なかつた民俗學者の某氏が、此時ばかりは僕の立候補に興味を有つて、わざわざ一票を投じに來てくれたとも云ふ。選擧と相撲と野球競技とには、共通の興味意識も交るらしい。

（四）勝敗の深酷味

橋戸頑鐵

◇

勝負を爭ふ上からは、先づ勝たんとする心願を眞先に立てゝ行かねば、その技術に通達するものではない。庭球界で見るに、遠くは熊谷、原田、近くは安部などの努力は大したものである、世界の人見さんになり得たる同孃の練習記そのものは、いつも之を讀む人をして涙滂沱たらしめてゐる、其他野球に於ける慶應の復讐、ラ式蹴球に於ける京大の擯拂振りを拜見するに、勝ちも勝つた、而してこの負後にはその勝利に相應はしい火の如く燃ゆる肉彈のあつた事でも見落してはならぬ。

◇

勝者となり負者となり、その差けし粒大のことが往々にして見受けられる。かうなると勝つて誇るに足らず、敗れて恨はない。去秋の野球戰には、慶明戰の中稍やかうした印象を受けたものはあつたが、他は依然としてワン・サイデット・ゲームの憾みがあつた。帝大が時に明治を惱したとは云へ、これは一時の轉調であつて、決して常態とは思はれない。野球がかく無氣力に終つた後、京大の東征に伴ふ蹴球戰は、多大のセンセーションを與へて呉れた「そろ〳〵蹴球の時代が來た！」の聲は各所に聞え出した。野球もなまぬるい勝負をしては居られなくなつた、土蔵に火がつきさうである。

◇

勝負そのものが、最も深酷に、生活の上に影響を及ぼすものは相撲社會である。勝つたものはどん〳〵とあがり、不成績者は遠慮なく引下げられて行く。昔の情實など云ふことは、この國では用ゐられない。強い者天下、誠にきび〳〵して心地がよい。土俵場へ行つて見ると、昔の大關を以て目せられたる東關や、兎に角押しの一方で一時は相手を脅かしたる綾鬼などが十兩に下げられ、十年前にはどこの若い衆だか分らぬ新進の連中が、榮位を占めて、颯爽たる英姿を見せてゐる、常陸山なく、梅ケ谷なくとも、これ丈けの顔振れが殘つてゐれば、先づ大出來と見てやつてよろしい。

◇

東京大相撲の一行が、大阪に乘込まんとする前日、私は伏見に於て一行の主催者出羽の海と會見する用務があつて其所へ赴

いた。今を距る十二三年前のことか、其頃大錦は既に晩年に達し、横腹のひわをつかんでは「小さくなりました……」と述懐してゐた。幕下の有望力士が能代潟、大蛇山などであつたので、私は先づ能代と會見した。出羽は「さうもう此外には居ないかな」と諸所を見廻つてゐたが、直ぐ目の前に太蛇山のゐるのを知らなかつた。勿論其頃の太蛇はまだ有望力士の部には入り得なかつた程貧弱の體格をしてゐた。どうです十二三年前の若い衆が、今は大關となり、一は中軸の大立物となつて名をなしてゐる。其頃まで撲つてゐた大錦、栃木山、大門岩、千葉ケ崎などの諸豪いま何處にかある、相撲の十年間は、一世紀以上の變化である。

◇

もういゝ加減に陥落して、番附から名を落すかと想像された三杉磯は、今年の大場所で成績拔群、十一日目玉錦に勝つてゐる相撲を打棄られ敗けた外、十日間は堂々と勝敗て老後の花を咲かせた。彼の撲り口を見 に突かけて來る者は、左に開いてイナし、組まんとするものは、左に上處を引いて思ふ存分四つ相撲の面白味を見せ後粉砕せしめた。怪物錦城山を前者の處で倒し、新進玉碇を後者で屠る。正に彼は中軸以下の力士でないことを證明した。

好事魔多し、玉錦との一敗はおしかつた、順當の勝敗ではあらうが、三杉が十分となつて土俵際まで押し出たいゝお撲である丈けに打棄りが惜しまれる。

◇

一方同成績となりし東の大關常陸岩は、清瀬川との戰に、右四つとなつて吊り捨てんとするを、足くせに浴びせられ、たつた一つの黒星を得た外、他の役關に對しては、殆んど相撲にさせぬ程早い撲り口で押さして了つた。強いて危なかつたものを云へば、初日に劍岳に押された時で、劍の峯に棒立ちとなるまで追つめられたが、稽古は十分に出來てゐる人であるから、さう簡單に腰は落ちない、遂に左方へ美事打棄つて、問題を殘さなかつた。十一日目の時宮城山も早い相撲である。仕事をされては面倒と、彼は一氣に寄り切つて、變化の多い宮城山に變化を與へる餘地を與へなかつた、勝力士は鬼と云ふが、彼のとり口はたしかに鬼以上であつた。

◇

三杉と常陸岩とは共に素破らしい勝利を續けて同成績となり、結局前例に習つて、前者に優勝賜盃と額とが授けられた。此におさまらぬは三杉とその一派の胸である、成績は正に同等

なれど、常陸岩は西の海に對する不戰一勝と云ふ星を持つてゐる（顔觸れが出てから休場した力士は、相手方不戰一勝となる規定によつて）但しその競技にもあるもので、相手の棄權に對して、一方が一戰一勝するは、餘りに平凡な出來事である。三杉派はこれを楯にとして協會に執固いてかゝつた。嘗て太蛇山が同樣のことを出羽の海に質問した時、勿論不戰一勝者は第二位とする旨を答へたとやら答へぬとやら、此間福田大將が三杉に禪を巡つて鬼をつけんとしたが刎ねつけられ、新會長大に面目玉を失するなど相當の悲喜劇があつたらしい。

◇

結局別の有力者が仲間に入りて、協會は二枚の額を掲げることゝした。或人はこれを評して、これまた姑息極まることであつて、これで三杉の主張が容れられたりとすれば大間違であると笑つてゐるが、もと／＼身體が主、頭腦は後の商賣、餘り相撲が利巧になることは難有くないことだ。この位で波瀾が鎮まれば、先は天下泰平、兩國の春はとこしなえに榮えることであらう。

（五）麻雀と將棋と

佐佐木茂索

麻雀は浪乘りである。浪は絕えず澤山あるが、乘れる大浪は幾つもない。うまく機會を摑んで乘る外ない。初心者は磯の小波でぢやぶついてゐるがいい。だが少し慣れては、沖へ出て、機會が來るまで唯浮いてゐる。そして浪が來たら、猛然とひたむきに乘り上げ乘り下すのである。

將棋は短距離の競泳である。初めから、唯最善の努力あるのみである。

運乃至機會と、努力乃至修業と。つまらなさは人生に似てゐる。

○

僕等の麻雀は八圈を以て一勝負としてゐる。八圈では時間が永くかかるからといふので、世間では四圈のところもあり、六圈或は二圈しか戰はないところもある。だが僕等は依然八圈を以て一勝負してゐる。他の世間の人の如く時間を尊重しないか

らか？　あらず。八圈戰でなくては麻雀が本當に樂しめないからである。

八圈を戰ふといふことは、個個の小戰を（假りに一度も連莊がないとしても）三十二回戰ふことである。連莊がないといふことは先づ稀有だから、大抵八圈戰は、少くも小戰を四十回前後戰ふ譯になる。その都度牌をがらがら掻き廻し、正しく並べ直し、牌を換し捨てること平均十度づつ、——考へると莫迦莫迦しい程の手數と時間とである。だが敢て八圈——四十小戰を戰ふ所以のものは、——そのわけを一寸書からうといふのである。

寧波流——少さくどんどん上るのを本旨なら、四圈でも二圈でもよからう。しかし、それでは唯僅かに勝つか負けるか、それだけの樂しみより無い事になる。始終がつがつとして、上りばかりを心懸けてゐなくてはならないのなら、こんな疲勞する遊戲はあるもんぢやない。大小に拘らず浪が來さへすれば、浪乘りをしようと努力するやうなものである。勞して効なきは理の當然である。面白くないこと、云ふまでもない。それ位なら寧ろ牌を手にしない方が優つてゐるだらう。僕等が八圈四十小戰を必要とするのは、そんな小さな勝負の末にのみ目的を据へてゐないことを、自ら雄辯に證してゐるだらうか。少くも僕は、勝負の過程に、もつと樂しみを期してゐるものである。四十回も戰ふうちには、二度や五度はいい機會が來るものである。これを掴まう、これを掴みたいばつかりに、四十回もやつてみるのである。その僅少の機會さへ御し得たら、他の三十何回に敗れても、八圈の終りには勝たぬまでも、負けはしない筈である。よき過程とよき結果と。それを樂しむのが上乘である。といふことが分り切つたことだと云ふのなら、麻雀浪乘り說に君も贊成すべきである。

最後の勝敗よりも過程を。過程を樂しんで最後に勝つてゐたら尙いい。勝つばかりが目的の賭け將棋は、誰しも餘り好きではない筈だ。

（）

近頃四谷に東京麻雀會といふのがあつて、時時大會を催したり「麻雀春秋」といふパンフレツトなどを出してゐる。そこまでは斯界の爲慶賀していいが、最近、段位制定といふことを始めたのは、少し滑稽だ。こんなに運の手傳ふ遊戲に段位など、附けられよう譯はないのである。だが、ヅブの初心者もあり、相當場數を踏んだ者もゐるから、甲乙丙三階級位には分けてもいい。段位だなどとは不可能事である。初段と九段と、そこにどんな技倆の差があるといふのか。初段と九段との戰ひに、どういふハンデキヤツプを附けるつもりか。

元來が無理な上に、發表された有段者表といふのを見ると、甚だ與太である。知らない人が本當にするといけないから、あれは早速次號の「麻雀春秋」で取消してはどうか。菊池寛、久米正雄が五段で佐佐木茂索、川崎備寛が四段だなどは人を笑はせる。

○

將棋も久しいがなかなか強くならない。萩原淳五段に飛香でどうかすると勝つが、何時まで經つても、もう其程度より上らないのぢやないかと思つてゐる。尤もちつとも稽古しないから上達しないのは當然だが。

毎日出る新聞將棋は大抵目を通してゐる。これが大ぶ役に立つてゐるのだらう。昔はさう甲乙のなかつた連中と、最近は確かに甲乙が生じてゐる。瀧井孝作南部修太郎兩君を、一番手直りだが二枚落まで追込み、さうして勝つたのだから大したものである。

將棋は、清らかな座敷に端座し、ゆつくり指さないと面白くない。椅子にかけては駄目。汚い盤や駒も駄目である。青疊の上で、ゆつくり駒音を響かせてゐると、勝敗以外に遊べるが、椅子にかけたり、汚い盤上でなどだと、勝敗そのものさへ十分に樂しめない。

麻雀をやらうかと誘はれてもさう樂しくはない。しかし、將棋を指さうかといふ相手が來ると甚だ愉快である。身邊の雜事をいつも綺麗に片づけておいて、所在なさの時間をどうかして作つて、そんな時、ゆつくり日當りのいい座敷で定跡でも調べてゐたいものである。

八ポイント欄

一、「この八ポイント欄」は有名無名を問はず、廣く世の篤學者、趣味家、好事家、旅行家のために開放して隱れたる智識と埋れたる珠玉とを集めて之を天下に紹介しようと思ふ。故に「八ポイント欄」への投書を特に歡迎する。

一、原稿は出所責任を明かにするため筆者不明のものは採らない。紙上の變名も許さない。そして掲載した分には十圓以上の謝禮をするが、枚數は四百字詰五枚以內にコンデンスして頂きたいことを希望する。

食物再製

服部普白

起死回生も仰山だが、時を經てまづくなつた食物を旨く食ふ法がある、其中の一つ二つ。

食物のお土産で厄介なのは鰻の蒲燒と蕎麥だ。鰻の方は肉は變に固くなつて皮はゴムのやうに齒切れがしない、蕎麥の方は箸に掛けると一固まりになつて持上つてしまふ、折角の御志程には頂戴しかねるのが常で、いろいろ工風をして見ても工合が良くない、所が世の中は廣いもので同憂の士が尠くない、友達には披露したことがあるが一人悦に入つているのも面白くない、一層の事綺麗に白狀して秘法を公開に及ぶ、ナニ元々人に敎はつた事なのだ。

「蒲燒の一、鍋の中に大きい儘の豆腐を入れる、都合によつては横に二つ切りにしてもいい、其上に燒ざましの蒲燒を並べて火にかける、水も何も入れなくとも豆腐から結構出て來る、豆腐が煮へて來る時分には蒲燒はふつくりと在りし姿に立戻る　脂氣は少し拔けるのでたれを掛けて喰ふと云ふ寸法。豆腐は少し加減をすれば晩味で旨くなる、一擧兩得の秘法、これは毎日鰻を喰はなければ芝居が出來ぬといふ市川中車老からの傳授。

「蒲燒その二、小鍋に湯を沸らせて置いて手早く蒲燒をくぐらせるといふ早業、これは山崎榮堂氏の傳授、この方はまだ敎はり立てゞ實驗が濟んで居ないが山崎氏の先生が專門家だから安心して然るべし。其上再製蒲燒は蓋類臭がなくなる複作用がある。

「蕎麥の一、蕎麥の固まつたのには盃一杯の冷酒を灑いで箸で掻き廻す、蕎麥が多ければ酒も増やすのは勿論の事酒がかゝると蕎麥の白條に美事な照りが出る、暫くすると元の色に返るが、返つた時分には酒の氣も無くなり味もよく打立てのやうに一條々々がばらばらになる。これは有樂町の更科の主人の傳授ゆへ間違のない事請合也。

「蕎麥の二、これはちと公開し難いが叱られたら後で詫るとして、やはり更科の藤村君の傳授、蕎麥を蒸すなり熱湯を通すなりして、普通の天麩羅を細かく切つて蕎麥づゆでざつと煮、これを茶碗にとつて蕎麥をつけて喰ふ、この方が汁澤山の天麩羅そばより餘程旨い。

「冷飯。留守番を仰せ附つたり夜更けて腹

の減つた時にはと云ふ田中良親伯の傳授。ソースパンかスチウパンか、何にせよ深い鍋にバタを溶かす、無ければラード、ヘット何でもよい。充分溶けた時分に冷飯を擲り込んで掻き廻す、鹽梅は鹽胡椒で付ける、何か殘肉でもあればよし卵の一個もあれば上等でそれも一所に掻き廻せば何とかライスとでも言ひさうな暖かい飯が出來上る、これには上手下手は無い所が面白い。

「出がらし。番茶や似たりよつたりの惡い茶では困るが、玉露級の上等の茶の出がらしは乾して枕の器にするのは惜しい、集めて生醤油で煮て置くと、茶漬の菜にも酒の下物にも些か珍なものが出來上る。

「まづい饅頭。羊羹と煎餅と饅頭は一番智慧の無い所謂名物で、小旅行のお土産に持込まれることが多い、殊に饅頭の皮が厚く餡が惡いと來て御念の入り過ぎたのは手の附けやうがない。この再製法は少々手がかゝる。少し砂糖味をつけた薄衣にして、揚げて喰ふのが唯一の方法らしい。醤油の附燒で喰へるのは上等の方だ。

「大しくぢり。再製法の研究では時々腹をこはす。その顯况の一は朝鮮人蔘の再製で、あのほろ苦い味を其儘にして置くのは勿體ないい何とかして煎じ滓を副食物化して見たいとお手輕に佃煮にして見た所が、苦くてあだ鹽辛くて、ぐちやくくして箸を二度と下しやうが無い、性の知れたものでさへこの通りだ、想へば神農と云ふ人はよくも色々のものを喰つたものだと今更ながら感服した。

あの頃の安部さん
と幸徳とセン片山

桝居伍六

メーン街パナマ・ホテルの三階の
例のルームに灯のともる頃

こんな下手な歌を在米の青年達がシヤトル市や桑港の邦字新聞に投書して、殺風景な移民地の生活に、わずかに精神的の慰安を見出してゐた頃であつた。一千九百七年の經濟界の大恐慌が大西洋からロッキー山脈にかけて吹き捲くつて、日本の移民達も一齊に職を失つた。アイダホ州やオレゴン州の鐵道に働いてゐた者、モンタナ州やワイオミング州の奥地の炭坑から逼ひ出して來たもの、ユタ州の田舍町で皿洗をしてゐた者、ワシントン州のランバー・キヤンプに木樵をしてゐた者——そんな連中が仕事を失つてシヤトル市に集つた。私共は、友人五六名と一團になつて、汚い或るホテルの一室にザコネをして、其の大嵐が通過するのを待つてゐた。其時、別に申合せをしたと言ふでもないが、我々の中の一人が何かの仕事にありついて一弗でも儲けて歸つた場合には、其の所得は全部の者のパン代に宛てられた。私共の一團は皆廿歳前後の元氣な連中斗りであつて、以前はアイダホ州の田舍の鐵道キヤンプに働いてゐたのだつたが、パニックの襲來と共に解雇せられて、我々の跡にはヨリ安い賃金で働くギリシヤ人が押しかけて來た。お拂箱になつた私達はシヤトル市に出て、安い木賃宿のやうなホテルに泊つて、右のやうな共產生活をしたのだつたが、今考へて見ると、其頃の私共の

生活は日本で謂ふ「自由勞働者」のそれであつた。私達は、毎日パンとコーヒー斗りで命をつないでゐたが、連中の一人が、米人の家庭の臺所の手傳に行くとか、レストラントの芋の皮むきに行く場合には、歸る時には、ポケットの中にロースビーフの切ればしだとか、ドーナツだとかをソッと忍ばせて來ることになつてゐた。

不景氣のドン底で、便所に樂書がしてあつて、「何うぞ、紙を節約して下さい。成る可く裏表とも使つて下さい」など書いてあつたのを覺えてゐる。その頃の事だ、私達は、シヤトル市の「東鄕桂庵」に毎日御百度詣りをしたものだつた。（序に斷つて置くが、アメリカの日本人社會には今でも、「職業紹介所」などと言ふハイカラな日本語はない。桂庵で通つてゐる）。その「東鄕桂庵」のオヤヂと云ふのが、隨分長くシヤトルにゐた人であつたが、私共が、桂庵の黑板の前で、仕事口が電話で掛つて來るのを待つてゐる間に、そのオヤヂさんから色々忠告やら昔の經驗談やらを聞かされたものだが、約廿年を過ぎた今でも私の頭の奧にコビり附いて離れない記憶がある。それは、今では社會民衆黨の首領として納り返つてゐる安部さんの話しである。東鄕桂庵の老主人の話しに依ると、何んでも、安部さんも、其時分の私共と同じやうに（時代は勿論大分違ふが）そのオヤヂさんの世話になつて、仕事口の周旋をして貰つた相である、安部さんがオヤヂに引合に出されたのは大抵私達の中の誰かが、仕事口の好き嫌ひをする時に限つたやうだつた。チリン〱とベルがなると、仕事口が掛つてくる。事務所に集つた若い連中の眼が一齊に電話の方に注がれる。然し、電話が「キアピタル・ヒル、一六七八、スミスさんの所で女中のノラが氷配達夫（アイスマン）と駈落したので、新しい女中が來る迄、日本人のボーイが欲しいのです」てな事であると、青年達は皆肩をすぼめて誰も行き手がない。彼等には狼が遠吠えするモンタナ州の山の中で鐵道に働く方が女中代りより望ましい。そんな時である、東鄕桂庵の老主人がカウンターに乘り出すやうに體を進めて、小學校の修身のやうな話しを始めるが、引合に出されるのは、二宮尊德でもなければ、中江藤樹でもなく、乃木將軍でもない。我が安部さんである。オヤヂさんは、ダーハムの煙で茶色に染つた指先で先づ老眼鏡を直してからこんな調子で修身の講話を始める——

「ユー等、若い者等、そげえ事で何うなる。この不景氣に仕事の好き嫌ひもないもんだ。ミー等、これで若い時から、仕事は何んでもやつたもんだ。今、日本で相當名前を賣つてる安部磯雄さんなんざ、ホントに感心なものだつたよ。あの人は、仕事口があると、すぐ汚いエプロンを小脇に抱えて、威勢よく駈け出したものだよ。ジヤガ芋の皮むきでも、ホテルの皿洗の手傳でも、洗濯屋のマーク附けでも何んでも、嫌應なしにやつたものだ。他かの者等が嫌ふ仕事でも、安部さんだけは、決して厭な顏もせず汚れたエプロンで丁寧に疊んだ奴を抱えて、朝早くから出掛けて、臺所なり、マーケットなりで、こまめに働いて、夕方になると、又其の汚れたエプロンを小脇に抱えて歸つて來たものだ。あの人だけ

は感心なものだつたよ。ユー等も、安部さんのやうに出世したけれや、おとなしく、エプロン抱えて行きねえ――キアピタル・ヒルの一六七八でスミスだ、誰か行かないか？……

讀者諸君に一寸說明せねばならぬことがあります。諸君は、ジヤガ芋の皮むき、皿洗の助手は分るでせうが、洗濯屋のマーク附けは知つてゐる人が少いでせう。殊に洗濯物は米國では日本のもののやうに清潔でないから、單に洗濯物と云ふてもピンと頭に來ないかとも考へます。洗濯屋のマーク附けは、汚れた洗濯物をボイラーに入れる前にインデリブルのインクで所有人の名前をつけるのであるから、仕事は極めて簡單だが、只汚いので、無經驗の者は閉口する。米國の洗濯物は日本などでは到底見られない程汚い。第一、西洋人はあまり頻繁に湯に入らない、或る人達は、米國の勞働者等は、一年に二回、クリスマスと獨立祭にしか、入浴しないと言ふ位に湯と湯との間が長い。彼等は、體を清潔にするには、肌着を時々更へればよいと考へてゐる。勿論、肌着を時々更へれば、二ヶ月や三ヶ月間位入浴しなくとも、よいかも知れないが、入浴もせず、肌着は一ヶ月以上も其儘だとすれば、幾ら白人種でも、肌着は相當に黑くなる。臭ひも決して賞めたものではない。其の上、米國の婦人達は日本の婦人達と違つて、自分達の使つた凡てのものを何の遠慮會釋なく、洗濯屋に送るから、やり切れない。洗濯物にマークを附ける時には、先づ左手の親指と人差指とで以て、汚れ物の邊の一點をつまみ上げるのであるが、婦人ものになると、丸切りお話しにならない。そのやうな物をも米國の婦人等は平氣でランドリーに送るのである。日本の無産階級運動界に於ける最高の人格者として知られてゐる安部先生は、東鄕桂庵の老主人の話しによれば、そんな汚ない仕事でも厭はなかつた相であるから、先生の人格は決してつけ燒刄ではない。

同じ桂庵の老主人の話しによると、セン片山氏も勞働者として頗る勤勉であつたと言ふ事だ。（米國人はセン・ケタヤマと發音するから最初は誰の事だか分らなかつた）。然し、安部さんが不熟練勞働者であつたに對して、片山氏はコックと言ふ特殊の腕前を持つてゐた。コックと言つても幾通りもあるが、彼はショート・オーダー（一品料理の事）を專門にしてゐたので、當時の十仙ミールのレストラントから引張り凧になつてゐた。片山氏が造つたカツレツを食べた經驗を持つてゐた廣島縣人の一老人から時々こんな事を聞かされた――

「片山さんも一品料理のコックなんか早く見切りをつけて、クラブのチーフ・コックの修業してゐたら、今頃は高い月給を取つて、サン・セット俱樂部あたりのコックをさせて貰つてただらうに、ロシヤなんかに往つて惜しい事をしたものだ」

安部さんとセン・片山氏は勞働者としての試驗に先づパスしたが、パスしないのは幸德秋水であつた。彼は米國に滯在中、勞働を嫌ふて、日本人の教會の二階にゴロ〳〵寢ころんで斗りゐた。それ斗りでなく、彼と一緒に泊つてゐたホテルの掃除人の時計をコツソリ持ち出して、附近の猶太人の質屋に持つて

た事が分つて一騒き持上つた相である。彼は、どこ迄も直接行動に出たらしかつた。兎に角、在米同胞の間では安部さんとセン・片山程に秋水は人氣がなかつた米國では日本人の間でも、勞働をせぬ人間は同情がない。

蛙

伊東忠太

凡そ世の中に蛙ほど興味豐なる動物は尠し稀である。勿論蛙にも無數の種類があつて、中には隨分妙でないのもあり、南米の背穴蛙などは寧ろ奇醜の感を與へるが、我國に產する種類は何れも可憐な風貌態度である。堂々たる巨軀の背面に疣の鎧を着たる大蟾蜍の悠々たる雄姿は蛙界の大王たるに恥ぢぬ。美しい文樣の金線の袍に威儀を正した金線蛙の風采は天晴れ大將軍の貫祿を示して居る。赤地の錦を着て勇ましく飛躍する赤蛙は指しづめ勇將の役廻りか、青衣の雨蛙が何處へでも入り込んで恐れざるは偵察の名人である、黑衣のどぶ蛙が襤褸として汚瀆の間に徘徊するは、最も割の悪い走卒でもあろうか。別に超然として浮世の外に隱棲し、溪流の間に詩歌を誦じて自ら樂しむものは河鹿である。

蛙の階級は斯の如く多樣であるが、總じて其態度が頗る無邪氣であり、飄輕であり、そこに得も言はれぬ愛嬌がある。あのケロリとして坐つた形、のそ〱と歩み行くその樣子、ピョン〱と跳躍するその恰好、之を見て腹を立てる人は恐らくは有るまい。殊に雨蛙先生がいつの間にか坐敷に闖入し、障子でも壁でも机の上でも、何處へでも這い上つて平然たるは實に面白い。彼等は又實に多能多藝であり、同時に人類に對して莫大の貢獻をなす者である。

第一に彼は藝術家である。紀の貫之が古今集の序に、花になく鶯水にすむ蛙の聲を聞けば、生とし生ける者、いづれか歌をよまざりけると曰つたのは甚だ妙である。小田の蛙の鳴く音は隨分騒々しいものだが、併し悪い聲ではない。青蛙の雨を呼ぶ聲は爽快であり、河鹿の聲の金鈴を振ふが如きに至つては眞に天下一品である。

彼は又勇者でもある。蛙合戰なるものは珍らしくないが、無數の蛙軍が兩々相鬪ふとき一死を顧みない。仇敵蛇と戰つて終によく勝つ例もある。彼は向ふ見ずに思ひ切て躍飛し、一身の安危を慮らない。殊に大蝦蟇の如きは如何なる敵に向つても傲然として突進して行くのである。

彼は又科學者でもある。彼はよく天氣を豫報する。彼の青蛙は高い樹の梢に登つて空を觀察し、雨の將に來らんとするや歡呼して之を報告する。冬期は深く地に潛んで身を保ち、春暖來れば冬眠より覺めて生殖の義務を果し、さて水の淺深澤溢を測てそこに產卵する。

彼が人生に與ふる功利は著しいものがある。第一に彼は有害なる昆蟲を驅除する。蠅、蚊、は勿論あらゆる青蟲を貪食するのである。しかも身を犧牲にして人間の食料となつて悔ゐぬのである。近頃食料蛙とて大

に流行し出した樣であるが、蛙は如何なる種類でも食料になるので、既に佛蘭西では遠き以前から蛙を賞味して居た。我國でも昔からよく赤蛙を食つたもので、その他の蛙も食ふ人は食ふ。現に我等も大蝦蟇を試みたことがあり、又赤蛙以外の雑蛙も少しはやつて見たのである。必しも美味とは云はぬが兎も角食へるのである。彼は又生理學者の研究材料になる。蝦蟇の油とて何やらの藥になる或種の蛙の皮は蟇口や札入などに製作されるのである。即ち彼も亦た死してなほ皮を留むるものである。

彼の功能は斯の如く大なるに拘らず、往々世間から馬鹿扱ひされるのは氣の毒である。例之ば井底の痴蛙などと嘲けられたり、蛙の面に水などと笑はれたり、衆議院議員の無作法な譬へにまで出される。併しこれ元來蛙の罪ではない。彼が馬鹿でないことは、曾て柳の緑に飛びついて小野道風をして悟る所あらしめた例もあるのである。

玆に又意外なことは、蛙が魔物であるといふ假設であるが、蛙の如き善良なるものが如何にしても魔物にはなり得ない。支那では曾て誤て蝦蟇仙人に弄ばれ、日本では兒雷也に驅使された樣なこともあるが、夫は蛙の本意ではない。鳥羽僧正の手を煩はして兎や猿と遊戯を縱にした樣なことが彼に取ては會心の至りであつたろう。併し又蛙にも有毒なものがあるが、夫は畢竟護身の爲で、敵を防ぐ道具である。朝鮮に產する腹の赤い小蛙は猛毒を有するので、流石の蛇もこれに逢へば逃竄する。蝦蟇の背の疣からも毒液を發射する。曾て野津大將に愛飼された猛犬が巨大なる蝦蟇に咬みついた處が、その毒に當つて忽ちに悶死した。その時傍觀して居た人は、蝦蟇が虹の如き毒氣を吐いたので、犬がその毒に中つたのだと言つて居たが、夫は誤である。俗に蝦蟇の劫を經たものは燈油樽程の大さになり變化極なき魔性を發揮するなどと云ふは、蛙を誣るの甚しきものである。

蛙の祖先以來の怨敵は蛇である。我等は我輩の親愛する蛙の怨敵なるが故に蛇を惡む者ではない。蛇と雖元來善良なる無辜の動物である。偶ゝ蛙が好餌であるが爲に、生存の必要上之を捕食するのである。只だ蛇の容貌が餘りに殺肅で少しも愛嬌がなく、その姿態が餘りに緊張して寛潤な處がなく、その運動が餘りに數理的で毫も情味が無い爲に、人に冷酷峻烈の感を與へ、誰にも可愛がられぬは洵に同情に堪へぬのである。蛙は之に反して、その樂天的な容貌、その滑稽的なる姿態、その運を天に任せて向ふ見ずに飛ぶ突飛なる行動は人に得も云はれぬ可笑味やら面白味を感ぜしめ、何人にも惡まれぬのである。

世に罪なくして人に惡まれる不幸の動物は蛇であり、世に何かなしに人に愛さるゝ幸福なる動物は蛙である。蛇が蛙を付けねらふのはその幸福を妬むが爲か否かを知らぬが、兩者互に相和せざるは偶然でない。世の人事にも亦た此の種の現象が見へるではないか。

(了)

馬賊に裸にされた話

平塚　篤

◀時、一九二五、五、二一日午後二時
◀所、内蒙古烏丹城東方四里の山頂

毛皮の外套を被つても、耐へ切れぬ程寒かつた前日に比べて、無暗に暑い日だつた。お定りの蒲鉾馬車に納つて、ゆるり〳〵と黒山の鞍部に差かかつた。護衛の兵士二人は、長い煙管で、スパ〳〵やり乍ら、乘馬を牽いて、一町も後ろから遣つて來た。見渡す限り眞裸の禿山で、鞍部のゆるい曲線が僕の行手にくつきりと際立つて見えた。

道路も平坦だし、遂ひウト〳〵として、眼を覺ますと、小さな豆の樣な騎馬が、二ツばかり砂を蹴立てて飛んで來る。烏丹城の軍隊か巡警かゞ、慰み半分に馬驅しでもやつてゐるのだらうと思つて、別段氣に留めなかつた。すると其の騎馬は、大きな半圓を描いて、僕らの右手から後ろに廻つたと思ふと、後れて隨いて來た二人の兵士の所で、馬を下りて何か立話をしてゐる樣子だ。

馬車はガタ〳〵揺れ乍ら進んで行く、もう鞍部も眞近くなつた。と思つた瞬間、その境界線の樣な鞍部から、バラ〳〵と二三十騎が現れて、まるで競馬でも仕て居る樣に、まつしぐらに飛んで來る。僕は平然として、今夜こそ烏丹城で、飯らしい飯に有つけるぞと思つてゐた。豫て懇意にした張君の家を驚かして、十日分の御馳走を一晩で喰つてやらうと思つてゐた。なまじ都會に居ればこそ、色々の慾念に責かされるが、ここまで來れば、食氣の外には、一切の物慾もない、あつた所でどうする事も出來ないのだから、仕様がない。思へば馬鹿々々しいものだ、などと思ひ乍ら、ふと眼をあげると、例の騎馬は四五十間先きに迫つて來た。軍人らしいのや、農夫らしいのや、巡警らしいのや、服裝が種々雑多だ。まさかと思つたが、流石の僕もギョッとした。而かも先頭の奴は馴馬を牽いて、向ふ鉢卷をしてゐる。『馬賊だ！』僕は覺えず、車上に坐り直した。

次の瞬間には、もうすつかり包圍されて居た。僕の體には出初式の梯子見たいに、三方から銃口を覘がはれてゐた。眞額に押當てられた短銃口の冷たさよりも、引金の間に挾まれた指先のブル〳〵慄えて居るのが、嫌に無氣味だつた。

『何所から來た？』『赤峰から』『どこへ行く』『烏丹城へ』『コカインを持つてるだらう』『俺は商人ぢやない、日本の役人だぞ』『役人でも何でも構はない、短銃を持つてるだらう』『俺の腰にあつたが、もう誰かゞ持つて往つた』『双眼鏡があるだらう』『無い』『腕時計を持つてるか』『それも誰かゞ外して往つた』

頭目らしい二十五六の背の低い赤ら顔の

男が、色々の事を聞く。僕の答は明快なものだ、語學の不熟練な者は、覺えた丈の語を殘らず陳列するのだから、勢ひ明快ならざるを得ない。こんな問答をしてゐる間に、僕の衣類は全部剝ぎ取られて了つた。

ヘルメット帽をかぶつて、シャツとズボン下一枚に剝がれた僕が、小學校の兵式體操見たいに、兩手を高く擧げた影法師を見ると、氣味のわるいよりも、寧ろ可笑しくて堪らなくなつた。頭目らしいのが、奪つた紙幣束を數へ乍ら、手がふるえてうまく數へられなかつた事も、蒲鉾馬車の內部を搔探しに潜り込んでは見たが、兩脚がガタ〳〵顫えて、降りる事が出來なかつたのも事實である。淺ましい迄肝汁に幽鬱な涕し乍ら、僕が携帶した梨をかりかり齧つてゐる者もあつた。

間もなく僕の護衛兵二人も裸に剝かれてやつて來た。僕は馬車に乘つた儘、後について來いと云ふので、態々捕虜かなと情なくなつて來た。

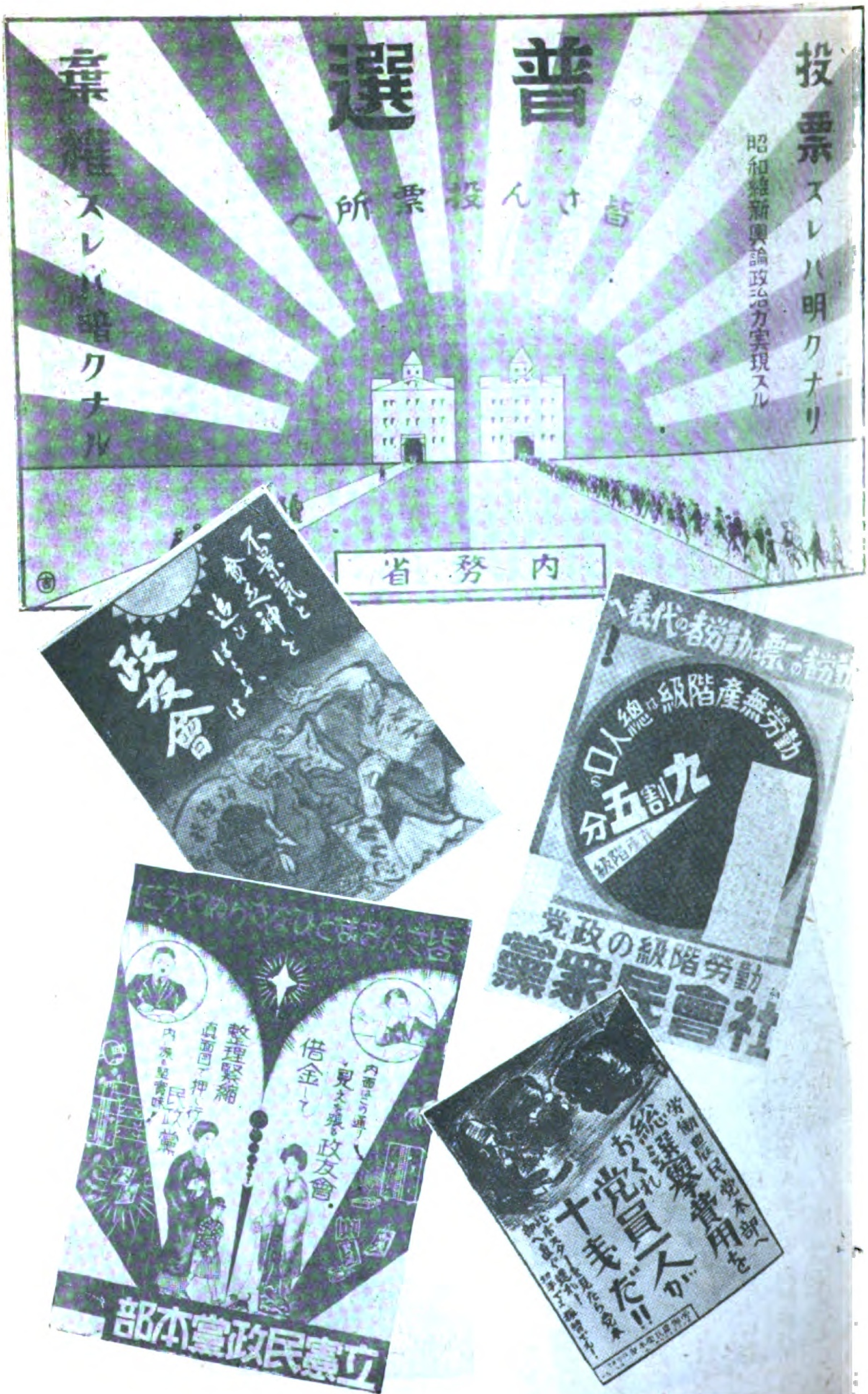
そこへ後てから此の連中を追跡して居たらしい官兵が現れたので、賊徒は僕を棄てて逃走して了つた。やれ〳〵と思ふと喉が乾いて何とも耐へられない。自分では平氣なつもりで居ても、矢張り度膽を拔かれて居たのだ。

烏丹城の張君に借金して、着のみ氣の儘、夜が明ければ朝と思ひ、日が落ちれば夕と思ふ、太古人のやうな旅行を續けて、月末の日まで、老哈河に添つて下る間、到る所で馬賊の噂を聞いたのを、後に思ひ合はすと、僕はその賊徒の逃げて行く道を一所に歩いて居たのだつた。

下窪と云ふ小さな町に出た時、町一杯に兵隊が居て、これが外國人を襲つた馬賊討伐に來たのだと云ふのを聞いて、一寸驚かされた。『襲はれた外國人は『平塚大人』と云ふのだが、君は知らぬか』と一將校に聞かれた時は、『知らん』と答へたものの、嫌な氣がした。

翌月の三日に治拉達古と云ふ古い町に入つたら、賊徒はこの近傍でやられたのだと云ふので町は噂で持切りだつた。頭目らしい重傷者が三人、押切りで首を切られたと云ふ町外れに往つて見たが、死骸はもう全く犬に嚙られて、腸ばかりが殘つて居た、恐らく『犬も喰はない』とは此邊から起つた詞であらう。

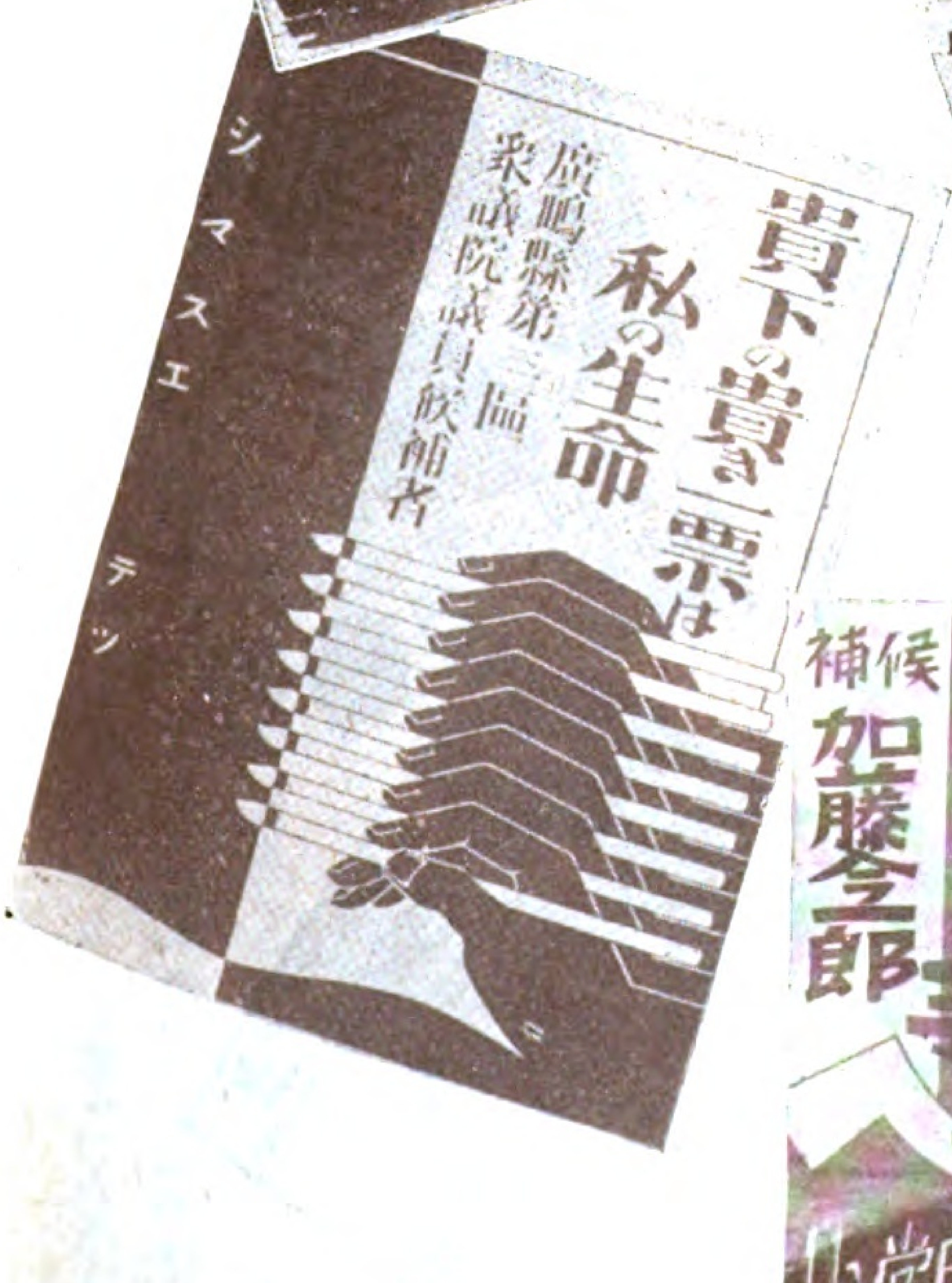
七日に赤峰に行くと、捕はれた賊徒は片端から銃殺されて了つた。領事館の前の衙門には、梟首の箱に蠅が一杯たかつてゐた。銃殺の光景が一際珍なもので、ヅラリと七八人並べて坐らして置く、將校の一人が何やら聲高に怒鳴ると、二三人ばかりの銃手が、銃口を後頭部の二三寸ばかり離れた所へ近けて、ポンとやつて了ふ。無論外れッこは無い、銃は明治初年頃の舊式なもので、大きな鉛彈を入れた奴だから、その無殘な事はお話にならない。そして一人が斃れると、苦力が衣服を剝いで、ヅル〳〵河原へ引摺つて行く。犬共は齒を剝出して、忽ち骨ばかりに甜つて了ふ。いやもう簡單至極なものだが、その音、臭ひ、記憶は、なか〳〵簡單には消えないで困る。

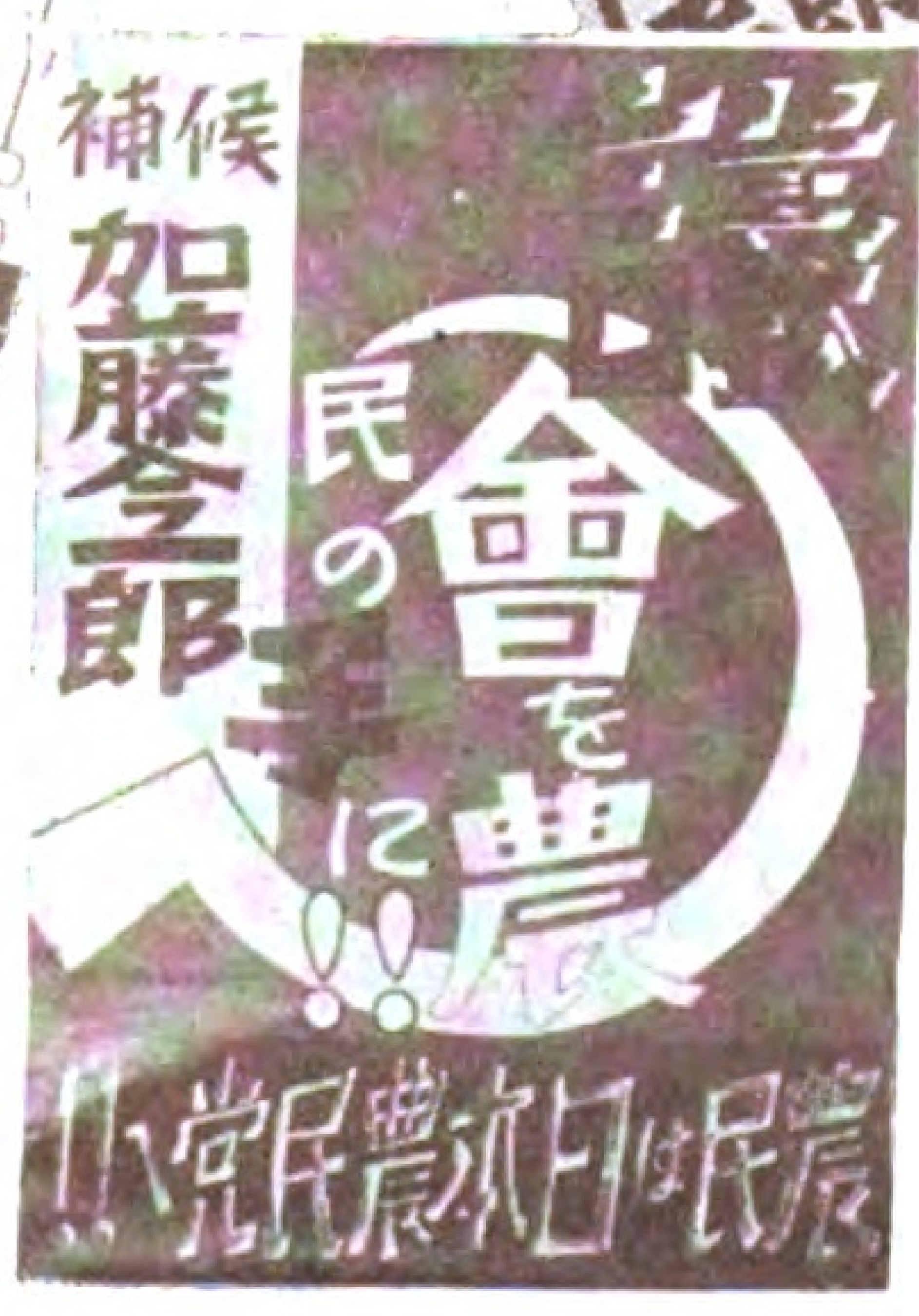

普選
皆さん投票所へ
投票スレバ明クナリ
棄權スレバ暗クナル
内務省
不景氣と貧乏神を追ひはらふは
政友會
勤勞無産階級は總人口の九割五分
勤勞階級の政党
社會民衆黨
整理緊縮
民政黨
借金して
政友會
立憲民政黨本部
總選擧費用を
おくれ
党員一人が
だ!!


社會民衆党公認候補
宮崎龍介
ミヤザキリウスケ
働く者に減税
富豪に重税！


社會民衆党公認候補
鈴木文治
民衆の生活はこの一票から
民衆党


新日本の建設
産業立國策の第一歩
「經費を節約して増税をなさず」
二億〇二百万円
政友會公認候補者
中橋徳五郎君


貴下の貴き一票は私の生命
廣島縣第三區
衆議院議員候補者
シマスエ
テツ


候補
議會を民の手に!!
農民は日本農民党へ!!


労働農民党の主張
労働者に食と仕事を与へよ
働く農民に土地を与へよ
凡ての人民に自由を与へよ
労働農民党公認候補
大山郁夫
このスローガンを見よ!
社会民衆党公認候補
小山壽夫
富豪に重税・貧乏人に減税
金利地代物價を引下げよ
働く者の生活を保障せよ
田中義一
候補者
地租委譲
産業立國
地方分権
税制整理
農漁村振興
麻生久
候補
日本
パン!
土地!
自由!
候補
杉山元治郎
公認
農村の友よ
社会民衆党はこの重税の全廃を約束する!
片山哲
社会民衆党
公認



立憲民政黨公認
衆議員候補者
此の人に投票して下さい
此の人に投票して下さい
鈴木富士弥
文藝家に議席を與へよ
社會民衆黨公認
菊池寛君
公認
横川重次
貴下の貴き一票を
産業立國
君も政友會
僕も政友會
赤松克麿
公認候補
勤勞者の一票は勤勞者の代へ
勤勞無産階級は總人口の九割五分
有産階級
衆議院議員候補者
オカザキケン
岡崎憲
社會民衆黨
横濱支部


労働農民党
公認候補者
南喜一
一、労働者に仕事と食
一、税金は資本家と地主
一、家賃は一斉に三割値
一、労働者の代表を議會へ送
徳の
一票
石井満に
ご婦人お子さまの
ご意見もきかれての
政友会
総務
衆議院議員候補者
岡田忠彦
ヲカダタダヒコ
清き一票を
積極政策は
昇る朝日
消極政策は
傾く夕日
好景氣は
積極進取より
不景氣は
消極退嬰より
須永好
スナガコウ
普選来る!!
吾等中産以下ノ
代表ヲ
議會ニ送レ!!
衆議院
中澤辨次郎


候補
加藤勘十
カトウカンジウ
一、税金は大金持に出させろ！
一、働く者の生活を保證せよ！
一、耕す者に土地を保證せよ！
一、既成政黨打破！
日本労農黨
社会民衆党
民衆の牙城
社會民衆黨衆議院議員候補
小池四郎
コイケシロウ
武藤金
ムトウキン
普選最初の議會へ送れ
布
第一線に立つ
氏を
松谷与二郎


衆議院議員候補者
白旗松之助
働く者の生活を保證せよ!
税金は金持から!
働く者の味方
新労資協調
義務教育費全額國庫負擔
米繭價調節
北日本ノ振興
議會政治ノ確立
内崎作三郎
三多摩の代表者
理想の新人
この人を選べ
衆議院議員
日本労農党公認候補
福田狂二
正しき一票を投ぜよ!!
農民
労働者
俸給生活者
小商人の味方
我等が
郷土の為めに
熱意真摯
正義に伏
努力實行
の人として
人格識見
經綸聲望
倶ニ最適任者

白眼樓夜話


政友會公認
貴下の一票は窪井義道君へ
總理は田中 議員は窪井
岐阜縣の誇
吾等の牧野良三君
誰を選ぶの
常に地方產業開發の爲に努力せる正義の士
中野寅吉君
普選!! 普選!!
政友會公認候補者
武藤金吉君に清き一票を!!
政友會に階級なし
切に御同情を願ひます
普選の實現 貴族院の改革 財界の安定に努力 また
進んで地方分權 勞働問題 婦人問題のため奮闘 ます
衆議院議員候補者
山口義一
產業組合主義の高唱
農村振興、蠶絲業の發展
政友會公認候補者

政界裏面　白眼樓夜話

（政界の一[illegible]、兎耳にして長廣舌。興至れば夜を徹して談論盡きず。時に斧を燎に捲くを以て樂となすに似たり。但し、以下記述するところは、記者が燎に捲かれしと思ふ部分を削除せしものにて、少くとも記者の聽いて眞なり、或は眞に近しと思ひしところのみ也）

刀　吏　公　記

◇……こないだ政友會の××長をやつてゐる男がやつて來た時、『今度は普選の事だし、それに君達は與黨だから、選擧費もこれ迄の半分位ひでやらうと思へばやれるだらう』と冗談に言つてやつたら、先生大眞面目になつて、『飛んでもない事だ、五六萬から場所によつては十萬の用意をして行かなくちやならないので、黨でも選擧費のことでは相變らず困つてゐる』とほとほと軍資金の遣り繰りに困つてゐる話をしてゐたよ。だが何んと言つても政友會は昔から金作りにかけてはズバズバやるし、それに與黨と來て居るんだから、大して困ることもないのさ。××長あたりには、黨の最高幹部は『金が出來ないないない』と言つて聞かたくおや、[illegible]いくら金があつたつて足りやしないと、相の〇〇が言つてゐたよ。おれのにらんでゐるところでは、政友會は二百五十萬から三百萬の調達はどうにか工面がついたやうだね。どこからかつてサ・さうさネ、まあいろいろ穴はあるが、大きくきまつてゐるところは、昔からきまつてゐらあネ、初筆の大口はいはずと知れた滿鐵の機密費だらう。この前、川村が政友會内閣の時に總裁になつて行つた時が、たしか年五十萬圓だつたが、憲政會内閣になつた時、あの男の事だからその儘居据れるものと思つて、五十萬を八十萬圓に増額したいといふ案を持つて書記官長をしてゐた江木のところへ行つたものサ。滿鐵の機密費を増やすのは、政府黨の機密費を増やすことになるんだから、江木は二つ返事で賛成したネ。だが、その後が悪かつたョ、増額の口だけは承認！て置いて、川村には『君は辭めて呉れ』と詰腹切らせたものだ。馬鹿を見たのは川村で、先生その場から尚ぞしりし乍ら政友會へ入黨したといふやうな、まあ格好さ。……これだから、滿鐵の機密費は今、たしか年八十萬圓ある筈だ。これを根こそぎ持つて來るワケにも行くまいが、まあ山条の手で滿鐵から三四十萬、ひよつとすると五十萬位ひは持つて來るかも知れないぜ。

◇……これは何も政友會に限つた事はなく民政黨だつて、誰の内閣の時だつて、滿鐵總裁をきめる時には、始めからそのつもりでやつてゐるのさ。政友會のこの内閣になつて山条をあすこへ持つて行く時のイキサツは君も知つてゐるだらう。内閣が出來る時、抑もの始めには山条は外務大臣をねらつたものさ。ところが、何しろあのシーメンス一件をまだ世間がすつかり忘れてゐないから、閣僚にするのは困るといふ黨内の意見で、滿鐵を割り當てたところ、山条は役不足と思つたのか、それとも東京を離れて工合の悪い魂膽があつたのか、田中から言ひ出したのを其の場で一應辭退したものだ。そこで田中は、これなら久原といふワケで、大阪に行つてゐる出先へ電話をかけて、『お前を滿鐵總裁にするから直ぐ上京せい』と言つたさうだ。ところが、この事を聞噛つた山条の子分共は、これは、いかんと言ふので、彼奴のところへ押しかけ無理やりに滿鐵を引受けさせる事にしたので、山本も少し工合が悪かつたが、引受けると田中へ返事をし直しに來た。その時は、一方の久原は大得意で上り汽車の中に納つてゐたので、田中も弱りぬき、汽車の中の久原へ詫びの電報を打つたといふのは有名な話だ。久原を何んとかしてやらなきやならないといふ田中の腹はこの時に強く決つたのだね……勿論、それ以外にも田中が久原にお禮をする理由はいろいろあるがネ。話は脇道へそれたが、政友會で滿鐵總裁に山条や久原を選ぶのは、他の理由もあるが、總選擧の時、會社の機密費だけでも大丈夫奇麗に持つて來られる男といふ條件に當てはまつてゐるからだヨ。下手をして、貧乏くさいのや、ケチな男を持つて行くと、機密費を自分のポケットへネヂ込んだり何かして、イザ鎌倉といふ場合に間に合はないからネ。そこへ行くと、山本といふ男は何しろ三井で小僧からおすてきまで叩き上げただけあつてソロバン度胸はあるし、頭は堅いし、それに根が商人肌だから、金の出し入れはよく心得てゐる。政友會は例により三井へも貰ひに行くだらうが、その橋渡しも無論山条が主になるのだから、このところ山条の鼻息は相當に強いことだらう。

◇……政友會の選擧費のも一つの出どころとして、黨内の智慧者共が目をつけてゐるのは、勅選の補缺の口だね。たしか今あの空席が五六人あるんだが、まだ誰とも決めて居ない。『今度は學者方面から』だとか、『大阪方面の實業界から一人出すにしても二十人も候補者がある』とか、新聞にいろ〳〵書かせてゐるやうだネ。何？、それなら早くきめて選擧費を作りさうな

ものだつてサ其れをやらないところが素人考で、今やつちや見え透いて了ふじやないか。話さへつけて置けば、任命は都合のいゝ時にして、金はいつでもとれるから世話はないよ。實業家の連中から三人勅選をとれば、一人二十萬として六十萬圓は苦もなく集るんだから大きい。まあ見てゐるがいゝぜ、その中にはきつと思ひ當る新勅選が出來るから。大岡育造が死んでから、憲政に功があつたからといふので勳一等を授けられたが、大倉の爺さんが、死なゝい前に同じ一等を議會の解散前に田中首相の肝煎りで授けられたなども、爺さんにして見れば思ひあたることがあるだらうじやないか？この他に、政友會の選擧費工面係りは例の「神戸の内田」が相當にかけ廻るだらう。船成金といへば少しは立派だが、誰でも一度會つて見れば分るやうに、株屋の親方以上の代物でないあの男が、海軍省の政務次官だの總務だのと、入黨して四五年で幅を利かしてゐるのは、黨の勘定奉行方を相當やるからさ。何しろ、その前の選擧には郷里の茨城で、一票百圓から百五十圓を出し、おまけに、一つ村からでも八十人だ九十人だといふ選擧違反を出し、一度に五六十萬使つたといふのだからね。達磨の高橋が總裁になつてから使つた金で、始末のつかなかつた黨の借金七八十萬も、あの男が走り廻つて片をつけたといつてゐる者がある。尤も、これは、おれにやほんとのところは分らないけれど

◇……民政黨となると、前から金の工面のうまくないところへ、今度は在野黨と來てゐるから可成り骨が折れさうだ。こないだも顧問の○○に會つた時、「どうだ、仙石を顧問に承諾させる事はどうしても出來ないか」と聞いたら、「あの爺も話が分つてゐるよ、顧問なんて名前を貰はなくても、あげるだけのものはあげやう、と言つてゐた。だから無理に田舍者だましの顧問なんて名前は押しつけない事にした」といふ事だつた。仙石は何んと言つても、民政黨のドル箱三菱の橋渡しとしてなくてはならない役者だよ。加藤高明が總理になつた時は、直ぐに鐵道を引受けて「改主建縱」だなどと神妙にやつてゐたが、加藤が死んで若槻になると、性格が相剋といふヤツか直きに仲違ひを初め、大臣を間もなく辭す、娘婿の青木次官に例のゴタ／＼をやらせる――何んのことはない、若槻内閣を松島問題でゆすぶる前に、好い加減内輪からがたつかせたのはあの仙石の爺さんだつたのさ。あれは見様によつては、同郷の濱口を早く死んだ加藤の後釜にすわらせ度い魂膽だつたのだと、見て來たやうにいふ陰口屋も居たが、まあ結果から見るとさういはれても仕方がないのサ。濱口が總裁になつても、病氣だといつて愚圖々々

してゐたのが、近頃やつと元氣づいて來出したのも、金の工面がついたからだらう。今度の民政黨總裁屋敷も表面は黨で買つた事になつて居るが、仙石あたりが三菱から融通して來てやつたものだらうテ。

◇……濱口が政治家としての欠點であり長所であるのは、金作りの下手なことだ。いつかも東北の同黨の一代議士が、二十萬圓からのもうけ口を濱口のところへ持つて行つたことがある。何んでも水力電氣會社關係の話で、二十萬圓會社から黨へ寄附するから、水利權を後で許可して貰ひ度いといふのだつたが、「條件附の寄附は困る」と言つて素氣なく斷つたさうだが、こんな事は濱口には毎度の事だ。神戸の鈴木の番頭の金子とは同じ土佐仲間で、困つてゐる時は融通させたことも大分あるやうだが、これも彼一流の無條件だつたらしい。だが、何んと言つても、鈴木が潰れたのは、濱口には心細い事さ。鈴木は後藤との關係から言つても、いざといふ時の勘定方には思ひ切つて役に立つたものだからナ。

◇……民政黨の金の穴は、政友會ほど大口はないが、それでも在朝時代の稼ぎ殘りもまだ大分あるだらうし、取り掛けになつてゐるのもあるさうだよ。濱口はあゝ言つた堅物でも、黨内にはその方の專門家は相當に揃つてゐるからナ。新聞などにはあんまり出なかつたが、この前内閣を投げ出す間際などには、隨分板の間かせぎのやうな素早いところをやつたものだよ。警視總監の太田が二業地七ケ所を辭職の前日に許したなどは小口で、同じ日に鐵道の方じやたんまりとした大口がかせがれてゐたものだが、その時は新聞などもちつとも氣がつかなくて、後になつて一ツ二ツの新聞が書いてゐたやうだが、ほんとの事は分つてゐないやうだ。今だからいふが、あの時は鐵道省の幹部の間ではド豪い騷ぎが起つたが、後の祭で泣き寢入りになつてゐるのサ。といふのは、若槻が辭表を捧呈した日に、井上鐵相と佐竹、八田兩次官の魂膽で形式だけの幹部會議を開き、申請中の東京循環鐵道、大和鐵道、伊勢參宮鐵道、上野大宮鐵道、西武鐵道新線、目黑電鐵新線の都合六線の建設許可をバタ／＼と許可して了つたのだネ。恰度この會議をやつた日は日曜で、種田、筧、秋山などの局長連中は家へ電話をかけても居なかつたので、井上と佐竹、八田の他には參與官の古屋と工務局長の後藤が出て來ただけだつた。後藤だつて、突然の電話で何んにも知らずに出て來て見ると、右の六線を認可しようといふ話に、彼一人は極力反對したが、何しろ形式の會議だから反對など聽

く譯はなし、後の欠漏した局長連中へも事後承諾といふことで濟せてしまつたんだネ。これは井上を出してやつた研究會への手土産でもあつたが、研究會許りじや無論ないさ。井上と佐竹、八田の三人はやめてからも、この六線のことで話しかけられるのをひどく逃げて居たものさ。

◇……こんな工合で、民政黨もいろんなかせぎ溜りが相當にまだ殘つてゐるだらう。だがこの黨の金作りの大名人は何んと言つても床次さ。死んだ原はあゝして金作りが大きくうまかつたがその原が總理大臣になつた時、それ迄になる間の彼の第一の金穴の〇〇が祝辭を述べに行つたら、『君のお蔭で、わしも漸くこれで一本立ちになり、もう君の心配をかけずにどうやらやつて行ける。就ては今日からは、わしの代りに床次の世話をたのむ』と言つて、床次にそのパトロンを讓り渡したものだ。床次は本黨創立以來それだけにつぎ込んだ金が八十萬圓、前の總選擧の時は百五十萬圓を使つてゐるといふからネ。大阪方面に大分信者が居るので、まとまつた都合がつくやうだ。今度の總選擧にも本黨系の候補の面倒はひとりでやる事になるのだから、あれも樂は出來まい。併し、床次としては今のうちにせいせい勉強して、金の心配も本黨直參許りへでなく、出來るだけ黨內の有望な若い者等を廣く面倒見て置くと好い。そして、濱口の次は床次といふ空氣を今からもつとしつかり作つて置かないと駄目だョ。

◇……久原の外相問題は一寸世間を騷がせたと見え、一時はどこの俱樂部でも、久原になるかならぬかの賭がはやつたよ。おれはどつちへ張るかつて？ これは選擧の結果次第でなると もならぬとも決まるだらうから今から賭は六ケしい。田中の腹では議會解散直後任命して了ひたかつたやうだが、閣內で小川や望月が反對したさうだ。殊に望月のやうに、今では田中の家の子のやうな男から誠心誠意で反對されると、政治には素人の田中のことだから、考へがグラつき出して來るんだネ。反對の理由といふのは、田中の人事振りは山梨の朝鮮總督にしても、木の謙の關東長官にしても、みんな田中の私情關係から出た任命だと言つて馬鹿に世間の評判が惡い。この上久原などを外務に持つて行つたら、田中內閣の信用はガタ落ちになる。どうでも任命するならするでもいゝが、それにしても總選擧の濟む迄はいけない。今、するのは、敵に攻擊の巨彈をこちらから供給するやうなものだ……とかういふ理窟ださうだ。これには田中も『それも、さうか喃』といふことになつたさうだが、總選擧の

結果、味方が大勝利となり吾黨内閣の土臺がしつかりと出來れば恐らく田中は久原を任命するだらう。田中が、久原を外相にしたがる理由は、前にも話した通り、滿鐵總裁にし損なつた行きがゝりもあるが、他にもう二つ理由がある。それは、一つはこの二人は同郷關係で、久原は田中が陸軍の次官になる前あたりから金の方ではいろ／＼面倒を見て來て居る。これは久原も大びらで誰にでも言つてゐる事だから間違ひはない。ところが、久原が世界戰爭で染料工場や商事であの大もうけをしたのは田中がいろ／＼の情報に基いて『この戰爭は長引くぞ』と久原に豫言したその一言のお蔭だといふやうに田中の子分どもは言つてゐる。どつちにしても、この二人の仲は同じ内閣の閣僚以上のものさ――これが理由の一つ。その次に田中が久原を外相にしやうと思ふのは、久原に外相としての腕があるからでなく、外相として最も不適任と思ふからだよ。逆説のやうだが、それは、かういふワケだ。田中はずうつと前から常によくかう言つてゐたヨ、『おらあ、内閣をつくつたら、やつて見たい事がたつた一つある、それは思ふ存分に外交をやつて見度い』と。そこで、思ふ通り今以て外相を兼任してゐるワケだが、専任外相に専門家を持つて來ると、この「思ふ通りの外交」といふ理想が臺無しになるので、久原なら、何んでも自分の思ふ通りにやらせる事が出來るし、それで滿足してゐるのは商人上りのあの男以外には先づなからうといふ見當らしいのだよ。

◇……總選擧の結果かネ？これは蓋をあける迄は内相の鈴木でも見當がつくまいが、政府黨が勝つことには間違ひはないだらう。たゞその程度が問題だ。なぜ勝つかつてソ？それは普選法が政府黨が勝てる仕組みになつてゐるからサ。早い話が、あの選擧費だ。一般に平均すると一萬圓位で一切合財やらなくてはたらない事になつてゐるが、實際は誰でも平均三萬から四萬は使ふだらう。中には十萬から二十萬使ふものも出來るさ。ところが選擧事務長はどうでも帳面面をごま化して法定通りの金額にしなけりやならない。政府の方では反對黨の當選した中からこの費用の點だけでも、ほぢり出せば、選擧法違反で失格させられるのも出て來る。それから、選擧最中でも、あの小面倒な規則を楯にとればどんな干渉でも出來る。だから、政府與黨が理が非でも勝つことだけは間違ひはないだらうじやないか。おれは、それよりも、今度の總選擧に宇垣が一時噂の立つたやうに、民政黨の候補として打つて出たら、何よりも面白い無選の中案ものだつたらうと思つてゐたら、惜しいことに沙汰やみに

なつて了つた。あれは、小さな新聞には一寸出たやうだが、火のない煙じやあなかつたのだヨ。一體、宇垣といふ男は近頃の官界、政界かけての堀り出し者で、西園寺もあの男には目をつけてゐるのは間違のないところだ。田中とは長い間の兄弟分で、憲政會内閣の議會で田中が機密費問題で槍玉にあげられた時、『軍部には斷じて左樣の事はござらぬ』と助け舟に出たのが時の陸軍大臣の宇垣だから、憲政會の猛者共もこの上攻撃のしやうがなくて、田中も面倒なところを逃れたのだネ。そんな事情で、田中も政友會の總裁となり、總理となつても宇垣を敵黨の者と思はずに、陸相の留任を、夜明け頃自宅へまで行つて口説いたワケさ。だが、宇垣は仲々思慮のある男だから、おいそれとは陸相にはならず、後になつて、齋藤の留守に格の高い朝鮮總督代理だけは引受けた。

◇……宇垣は朝鮮總督の居心地が馬鹿に好つたし、世間の評判もよいしするので、齋藤の後には自分が直れるものと思つても居たし、希望もしてゐたのが、山半にさらはれて了つたので、一寸ここに田中との間に面白くないわだかまりが一つ出來て了つたのだネ。

◇……ところが一方、民政黨の方では宇垣の心を充分知つてゐるし、殊に彼が陸軍部内の勢力を見拔いてゐるものだから、この次の組閣の時を考へると、とも角もこの男を自黨の方から餘り離れないやうにしようといふ努力を相當して來てゐる。何んでも、宇垣が朝鮮へ行つてゐる間でも、田中や政友會の大物から行く手紙よりも、民政黨側から行く手紙の數の方が多かつたさうだ。殊に智慧者の安達などはよく勉めて旨い手紙をやつたと見て來たやうにいふ奴が居るヨ。これは宇垣を民政に近よらせる心持にすると同時に、田中や政友會には氣まづいものになつたやうだ。そこへ持つて來て、今の總督一件があり、軍事參議官で位だけは高いが、昔なら朝鮮の副王といふやうな景氣のいゝ地位から來て見ると、恰ど村のお寺の堂守りになつたやうなものだ。そこが人間は感情の動物で、田中が天下取りになつて一人ではしやいで居るところ許りを見せつけられると、何ツ糞といふ氣にもならうといふものだらう。この邊の事情に通じてゐる政界の譯知りが書き下ろさうとした筋書が、宇垣の民政黨よりの立候補サ。

◇……宇垣を民政黨から出させようとする筋書きには、相當のプランがあつたのだヨ。それは、政友會では中國筋の押えに

望月と犬養といふ大物を持つてゐるが、民政黨にはこれに對抗出來るものが一人もない。それには宇垣を岡山から出せば、犬養にだつて十分刃向かへるし、中國筋の民政勢力の挽回策としては申分ないといふので、岡山縣からも民政の地方政治家先生だちまでが同じ意見で上京して來たものだ。そこで、いよ〳〵宇垣にまで兎も角話を切り出し、宇垣も可成り內心動いたらしいが、結極は決心がつかなかつたのサ。宇垣にして見れば、この儘ぢつとして居れば、元帥も眼の前にブラ下つて居て、陸軍の大御所になれるのだから、民政黨の毛利元就位ひじやつまらないと思つたんだらう。それに、宇垣は金を作ることは全く知らないから、政治運動といふと、律義者が女郎買ひの附合ひに引つ張られる位ひに思つてゐるらしい。これが、あの男の身上でもあるが、政界へ行きさうで行けないワケだネ。

◇……まあ今夜はこの位ひにして置かうか。後藤がロシアから歸つたら、又何か變つた話でもゆつくりきいて置かうから、その頃やつて來給へ。あの爺さんも漁業條約調印といふ手土産が出來たのは、何んと言つてもお手柄サ。おれは實は、後藤がロシアへ立つ時、『こりや死にに行かせるのだナ』と思つたが、無事に歸つたのは、目出度い事だ。實際は後藤がロシアへ立つた後できくと、『死ぬかも知れない』と思つて居たものは周圍の間にもあつたやうだ。それで、『後藤としてはロシアで死ぬなら、いゝ死に場所だ』といふつもりで立たせたのださうだ。何しろ、近年は身體も精神も急に弱つて來て居るが、肝心の御本尊はちつとも其れを知らないで『ロシアへ行く、〳〵』と、駄々兒が淺草へ行きたがるやうに頑張つて出かけたものだ。

：おやおや、又長話になつて了つたが、今夜は調子に乘つてしやべり疲れたからもう、何と言つてもよすよ：：

政治家としての菊池寛氏



人物評論

文士の代表菊池君

武者小路實篤

菊池君が議員になる。僕は正直な所議員になりたがる人が多いのを不思議に思ふものだ。一國を自分の思ふ通りにする、自分の理想にちかいものにする、それはたしかに悪いことではない。誰でも日本をいゝ國にし、國民を幸福に出來たらしたいと思ふにちがひない。そしてそれには政府をのつとるのが早や道で、政府をのつとるのは議員を多くつくるのが早や道かも知れない。又それは一番安全な道かも知れない、少くも今の人間の馬鹿さでは。

人間が本當に利口になれば政府なんかいらない、又どの政黨が勝たうが一向さしつかへがない。どんな政府が出來たつてそれが人間を眞價通り正しく生かす政府であれば、別にさしつかへはない。しかし今の時代ではさうはゆかない。皆自分の利益に夢中になつてゐて他人の生命などどうでもいゝと云ふ連中が多いから。

或る政府が出來ると得をする人と損をする人が出來る。時めく人と失意の人が出來る。だから喧嘩しなければならない、しかし僕達はどの政府が出現しやうが別に痛痒を感じない位置にゐる。そして政府の力をかりず同志の力だけで自分の望む世界をつくらうと云ふのだから、從つて議員に誰がならうが別に痛痒を感じない。高見の見物をしてゐればい

い。

そして自分達のすることを片端からすればいゝ。だから菊池君が議員になりたいと云ふ氣持にはぴつたりした同感は出來ない。しかし同君は文壇の内から議員を出すとすれば唯一無二の人だと思つてゐる。

他に議員になつて文壇のために働ける人はない。山本有三君ならその熱心さである所まで文士のために働ける人かと思ふが、しかし一人出すなら菊池君に限る。同君の強みはわかりが早く、さつぱりして、自分のいひたいことをこだわらずに云へ、そして比較的一般について考へられる質だ。自分は同君とはあまり逢つたことはないが、三四同逢つた感じ殊に劇作家協會で逢つた時の感じで、同君の云ふことは一般にあてはまることで個人的でない、だからさう云ふ會では萬事同君に任せておけば安心だと思つた。著作家組合なぞも同君がゐるので出來るので、ゐなかつたらとつくにつぶされてゐるだらう。自分のことはあまり考へず一般の利害を考へてものを云ふ處に政治家的素質があるやうに思ふ。

僕なんかどうでもいゝと思ふことに熱心だ。僕はその點で同君が議員になつたら、文士は得をするだらうと思つてゐる。少くも損はしないと思つてゐる。又文士だけでなく同君は自分の利害からものを考へず一般の人の利害からものを考へられる人だと思ふから、今の議員の人達にくらべてずつといゝ國民の利益の代表者になれると思つてゐる。

かう云ふのは同君に私慾がないと云ふのではないが、ものゝ考へ方がわりに廣く、そして自分の利害でものを考へず、一般の人の利害でものを考へられる質のあることは事實と思ふ。文藝春秋が安くすることによつて一般化されることを事實で示したのも、同君が一般的にものを考へうる性質から出てゐるやうに思ふ。自分の利害關係のわからない人ではないと思ふが、わりにその方には超越してものを考へることが出來る本能と神經をもつてゐるやうに思ふ。

さう云ふ點で國民の代表、文士の代表として菊池君は素質のある珍らしい人の一人と思つてゐる。少くもかう云ふ傾向の人はさうざらにはないと思ふ。

その點では同君の議員になるのは當を得てゐると云へるかも知れない。しかし議員になることがいゝことかどうか。文筆で立つ人は議會に立たないでも自分の云ひたいことは云へる。又議會のかけ引きはあまり面白いものとは思はない。しかし一度やつてみるのもいゝと思ふ。同君は今度落選するか、當選するか僕は知らないが、今度もし落ちてもいつかは議員になる人だと思ふ。

文部大臣にして見たら一寸面白いと思ふ。

面白い以上の點については僕は責任をもつて研究したことはないが、たしかに今迄の多くの文部大臣よりは面白いことが出來さうに思ふ。

適材(?)

佐藤春夫

文士としての菊池君なら仕事をしてゐるのだから、それによつて論ずることも出來ますが、立候補を宣言したばかりでまだ政論の一度もきかせない君を、政治家として論ずることは一大早計事かと思ひます。文壇では政策家だから、といつて政治家の才能があると斷定するのは、文壇では將棋が一番うまいから、名人と手合せしてもよからうといふ儀てた論

法になりさうです。それでは衆議院議員候補者としての君はどうかといふと、有名で世間へとほりのいい人だから、この點では第一によからうと思ひます。また代議士になつた菊池君といふものを想像して見てもさう不似合でもないのを考へると、つまり適材だらうといふことにもなりさうです。尤も議會壇場で獅子吼する菊池君や大臣になつてゐる菊池君などは、空想好きの小生もまだ空想してはみません。

とにかくもいづれ萬端は事實が證明するだらうと思ひますから、それを見た上でなければ批評は出來ないわけです。

ただこの際、これは政界及び一般の社會に聞いて置いてもらひ度い事ですが、菊池君は最も有名な文士ではありますが、だからと言つて菊池君が今日の文藝界を代表する人物だとすることは、文藝の社會は實業家の社會などより多少複雜なだけに菊池君も自由を束縛されて迷惑にちがひないし、文藝社會の方でもちよつと困るやうなことも生じようかと思ひます。これらの點はよく注意をしていただいて菊池君の一言一行に對して、その功罪にかかわらず「今日の文學者といふ人間は」などと一口にひつくるめて輕重を論ずることは見合していただきたいと思ふ。

何にしろ文學者のなかからも三人や五人、代議士になる人があつてもいいし、また議會政治などは眼中におかない社會運動家が、この際一人や二人ゐるのも無意味ではないでせう。

菊池寛の政治的進出

前田河　廣一郎

菊池寛君が、東京市第一區から代議士に立候補した、その政治的進出の根本理由は、現行出版法や檢閲制度の改革にあるのだといふ話だ、所屬政黨は社會民衆黨である——かういふ話や記事や意見は、方々で見聞きしたあまり、大分私の注意力を鈍らせたほどに有名になつてしまつた。世間の人は文學者が議會に立つたりして、何をするんだらう、文學者に政治意見なんてあるものかしら、と疑がつてゐる。實際、別な意味から私なども、菊池君が議會へ出てどうするんだらうか、まさか賣名慾でもあるまいし、さうかと云つて、はて變だなと思つてゐた一人なのである。

それが檢閲制度の改正や出版法の變革と云つたやうな問題を提げて立つたのであるから、まあ一應の理窟にはなるとも思つたのであるが、——さて、考へてゐると、二三の文學者代議士が、全然何もしないよりはいいといふ理由から、議會で形容詞澤山の悲痛な演説をして、あわよくば委員會の入れ札に番狂はせを生ぜしめたとしても、ブルジョア政治機構の最も敏感な末梢神經網である檢閲や出版法が、どの程度まで改正されたり變更されたりするものかも、ちよつと考へ物だといふ感じがする。

政治に於ても、一つの問題だけを他の聯關物から切り離して取扱ふことは、極めて危險なことと思はれる。——その點で、はじめ二三の新聞紙が、菊池寛は檢閲制度反對で立つたといふやうな記事を掲げたことに、私は菊池寛君その人の政治的意見、いや、彼をして代表せしめた無產政黨社會民衆黨の政治的な立場を怪しむだものである。社會民衆黨の綱領は見たが、せめて、あれだけの政治的諸條件位は、立候補した當日から菊池寛君の頭へ植えつけて置くべきのが松岡駒吉君の役目ではなかつたらうか？　こんな些末なアラを拾つたところが何にもなるものではないが、それにつけても、一無產政黨を代表して代議士にでも出ようと

いふ人としては、無產階級意識を『鬪かひ取つた』やうな顏をして、アンテ・ミリタリズム的綱領を掲げたり、八時間勞働を高唱したりするやうな風もなく、ぼんやりと水谷八重子孃や市川猿之助丈までの後援を受けるとか受けぬとかで立ち上がつたところに、或ひは菊池寛君の菊池寛君たる面白味があるのかも知れない。

しかし、一面、私は、菊池寛といふ人は、個人としては所謂る『政治家肌』な人であると思ふ。今ここに開き直つて、菊池寛論をするまでもないが、過去に於ける一二回の論戰でも知つたが、菊池寛君は徹底的に平凡さを持つた作家である。この平凡さは、どんなに奇抜に論じたところが、やはり平凡さを失はぬ程度の平凡さである。アスンアルトやモダーン・ビルデングや代數學と云つたものの特性である堅實性、耐久力、合理主義が、作家として、人としての彼を今日に到らしめたものであらう。その點、どこかヘンリー・フォードの何分の一かを持つてゐるといふ印象も與へられる。奇抜なやうな平凡 常識、巧みに拔きのけ た常識判斷、急進的に見える保守思想、拙劣な名文――かういふ諸特長が、作家として、人としての菊池寛を世の中へ送り出したのであつた。

ごく消極的な意味に於て、彼は、やはり時代の人たるを失はない。

しばしば私も論難したことのある彼れの小ブルヂョア性は、常識で硬め、合理化され、巧みに現實的であつたがために、よく日本の現在のブルジョアジーに適合したのである。ブルジョアジーが、彼れの野察的な物の見方や、執拗性に富んだ思考方法や、計算的な侵略的な主我主義に適當な己れの代辯者を見出したからこそ、その勞力に準ずる給料を支拂つたことに、何の不思議もないわけである。もし、菊池寛君に成功譚といふものがあるとすれば、それは取りも直さず、日本の新興ブルジョアジー勃興史の縮刷された一頁であらう。彼れの勇氣に寒躁的な部分や、彈機力や、飛躍性に於て缺けるところが多いとしても、それは近代人の特性とする計數的な、能率的な執着性によつて遺憾なく補はれてゐる。鬪士としての彼は、楯と矛とを兩手に操りながら、じり押しに敵を戮り仆す種類のグラジエータアにもくらべられるであらう。

この菊池君が立候補して、恐らくこの雜誌にインキのあとが全く乾ききらぬまでには、彼れの代議士としての當選不當選は判明してゐることであらう。當選したとして議會へ出てからの彼が、無產階級政黨の一存質によつてどんな目ざましい働きをするかは、やはり現在の彼を知ることによつて、大半の鑑斷はゆるされよう。したが、無產階級の政治的鬪爭は、決して一個人の出現によつて邪魔されるとも進展されないことだけは事實である。この點、私は、菊池君が、むしろ自分の長所だと思つてゐる個所を十分に克服し清算してはじめて新しい政治家としての進路を展いて行けるやうに思ふ。

一九二八、二、七

○

士族の商法

高畠素之

『郷里なら自信があるんだが……』と前置きしながら、しかし『民衆諸君の切なる勸告もあるので』と躊躇しつつ、我が菊池寛君は、東京府第一區から社會民衆黨公認の看板を背負つて立候補した。『一人ぐらゐは、文藝家の代表が議席を占めてもよいと思ふ。』と抱負の一端を披瀝したとも聞いてゐる。

如何にも菊池君らしい面目である。萬一の落選を警戒し、東京はどうでも郷里の金城を暗示したところといひ、萬更らでもなささうな文藝代表を自任したところといひ、文藝春秋社長に相應はしき『半世間人』を窺ひ得られる。若しこれが藤森成吉君(に限らないが)あたりなら、例え立ての唯物辯證法か何んかで、天晴れ小ガ平大臣を『闘ひ取る』式に克服したがるだらうが、さすがに同じ文學士でも、菊池君のアクは抜けてゐる。そんなヘマを個人様の前で露出しようとはしない。文藝商品主義に一歩を先行しただけあり、世事の諸分けは心得たものである。

だが、その反面に、文藝代表を野暮に固執してゐるらしいところは、善くいへば分材を守る世間知りとも見えるが、悪くいへばそれなりにも、世間知らずの證據が發見されぬ譯でもない。世間といふ言葉が穏當を缺くなら、少くとも政治知らずの譏りは免れないであらう。その點、彼れが文藝家に非ず、企業家に非ず、同時に、文藝家であり企業家であるといふ事實、卽ち私のいはゆる『半世間人』の面目を、遺憾なく看取せられる所以でもある。

○

今の三土藏相が嘗て文相たりし當時、彼れが文藝春秋社の存在を知らなかつたといふので、我が菊池君は『これを見ても、當今の政治家が如何に文藝に無理解であるかが知られる』と憤慨してゐられた。實のところ私は、菊池君のこの憤慨を見て、內心はなはだ滑稽に感ぜざるを得なかつた。失禮ながら、文壇隨一の世間人も、この程度では甘いもんだと思つたのである。

餅屋は餅屋、酒屋は酒屋、おのづから商賣往來を異にした二つの存在である。同樣にまた、餅の通は甘黨でなければ分らず、酒の通は辛黨でなければ分り兼ねる。上戸は榮太樓の甘納豆も藤村の羊羹も知らず、下戸は灘屋の黒松も加六の菊正も知らず、商ひとあつて見れば、郷も何區何町にそんな店があるのか、お互ひに少しも關知せざるが世の常ではないか。

文部大臣ともあらう者が、天下の文藝春秋社を知らぬとは何事ぞといふ憤慨は、菊池君としては如何にも尤もらしい憤慨に違ひない。が、この際は、文藝春秋社の文壇的特殊性が未だ普遍化されなかつたことに諦めをつけるの外はない。雜誌『文藝春秋』が、もし『講談倶樂部』や『文藝倶樂部』やの如くであつたなら、いかな三土大臣でも、講談社や博文館と併べて文藝春秋社を記憶してゐたであらうことに、せめてもの慰めを求めてこそ、始めて押しも押されもせぬ世間人と稱し得る。好漢『文藝往來』の著者を有すれど、惜しむらくは政治往來も經濟往來も知らず、などと餘計なオセツカイに類するやうだが、實は菊池君の對選擧態度か、恰も三土大臣の文壇的無智と、同列の政界的無智を暴露するなきかを憂ふる老婆心に出でたことに諒承を乞ふ。

○

菊池君は社會民衆黨の公認候補である。無産政黨とは浮世を忍ぶ假りの名、民政黨支店として革新黨あたりと優劣を競ふ民衆黨のことであるから、ブルヂョア作家の元締を以て過せられる菊池君を公認したところで、私は決して人間錯誤だなどとは考へない。寧ろ適材適所と考へる證據には、いつぞや菊池君も『自分には社會民衆黨あたりが手頃だ』と述懷してゐた如く、極めて似合ひの結合を發見するからである。何故に然るかといへば、上戸の甘味談議に類する滑稽さを共通に感受し得るからに外ならぬ。

政治家の文藝的無智を嗤ふ菊池君は、勿論それなりに眞理を喝破してゐる。しかし同時に、文藝家や思想家も同じ程度に實際政治の眞理に對

しこは無智である。無智なればこそ、嘗て雜誌『隨筆』が、『好きな政治家』を質したとき、彼等は揃ひも揃つて『尾崎行雄』を擧げてゐた。政治家といへば尾崎行雄と考へるやうな人は、雜誌といへば直ちに講談社を聯想する程度の素人的無智階級に屬する。さすがの御歴々も、商賣往來を異にすれば、斯うも色盲になるものかと驚ろかされたが、我が菊池君もどうやらその埒外に出でないらしい。尾崎行雄氏をお山の大將とする革新黨と、民政黨支店たるに甲乙なき民衆黨あたりに、彼れ自身の政治的立場を求めたところは、當の三土大臣あたりから『菊池君もまだ政界の文藝春秋社を知らないと見える』など、竹箆がへしの啖呵を切られさうな危險も見える。

支那手品師の李彩だつて、商賣々々の功徳を禮讃する營師である。菊池君がいかに、新聞記者のいはゆる『文壇の大御所』だつて、河岸を代へての政治家稼業に憂き身をやつす段になれば、最低の陣笠よりも尚ほ下風に立つ覺悟を必要とするであらう。況して獨力よく、立法機關を通じて文藝家の社會的地位を高上しようなどと考へても、百年河淸を待つより以上の根氣を持續し得るか否か。——などと、まさか菊池君が大野暮にそんなことを考へてゐるとも思はないが、幸運にして立候補の機會に逢着せず、随つてまた、當選の危險を絶對に所有せざる私などの立場に於いては理屈は、理屈として斯く言ひ得るのである。

政治家的非政治家

村松正俊

菊池寛氏が社會民衆黨から衆議院議員候補者として立つたといふ事は、二重の意味に於て驚きを與へる。尤も最初の意味の驚きは、我々に與へる驚きではなくして、世間一般の持つてゐる小說家といふ觀念に與へる驚きである。第二の驚きは、從來ブルジョア文藝の總大將だと思はれてゐた氏が、急に無產黨の名乘りをあげた事である。

私の經驗であるが、地方へ行くと——いや地方ばかりではない。東京でもさうであるが、——よく小說家なんぞが議員になつてどうするのだらうと云ふやうな質問にぶつかる。かういふ人達は「政治家」といふものがあつて、「政治」といふ特殊な事業を行ふものと思つてゐるらしい。さうでなくとも議員になるには、辯護士とか、新聞記者とかでなくてはならないもののやうに考へてゐる。それに小說家といふものは男女の情などを書きたてるもので、政治に手を觸れてもならないと考へてゐるらしい。かういふ質問は特に菊池氏の場合にもよく云はれる。

然し我々はそれに對して「政治」といふ特殊なものがあつて「政治家」といふ特殊な動物がそれを行ふものでないといふ事を力說するのであるが、然しそれにも條件がいる。我々は伊藤仁太郎氏が講談師であつて議員にならうとするのも不思議と思はない。伊藤氏に政治的識見があり、政治的履歷がある事を知つてゐるからだ。小說家だからと云つて政治家にならないといふ事は絶對に無いのであるが、そこに政治家としての資格が闕けてゐるならば、それこそ何の爲めに議員に出なければならないかが解らなくなる。中原德太郎氏は醫師であつたが、醫師以上に政治家としての働きが出來た。菊池氏は文士として盛名を得てゐるが、政治家として果して如何な資格を持つてゐるだらうか。

菊池氏は文士の中に在つて、最も事業家的手腕を持つてゐると稱せられる。文藝春秋社を興したり、弟子共を養つたり、有力な書肆と連絡し

たり、從來の文士の及びもつかない事を充分にやつて除けた。そこであんまり世情に通じない文士は、菊池氏こそ文壇から出す代議士として最適任だと述べてゐた。その噂がまあ實現されたわけなのだらう。然しさういふ噂たるや、單に漠然とした代議士にならうといふ程度のものであつて、決して明確に現在の政治的認識を得てゐるものとは云へなからう。

それでもいゝ。菊池氏の從來の手腕から行けば或る程度まで「政治家」として成功するかもしれない。またそれ丈けの資格を持つてゐるやうである。然しその資格は飽く迄も舊來の政治家氣質、舊來の政治家的手腕以上に出でない事は云ふ迄もない。既成政黨的な政治家氣質であり、既成政黨的な政治的手腕である。さういふ資格丈けではこれからの新らしい意味の政治即ち文士でも政治家になれるといふ意味の政治家には到底なれないであらう。菊池氏が政治家として成功するには、矢張り政友會とか民政黨とかゞ適當である。——いや最も適してゐるのは實業同志會である。

菊池氏の政治的資格がさうであるといふ事は、彼が無產政黨の一であるところの社會民衆黨から出たといふ事に依つて我々に異常な驚きを與へる。菊池氏は到底無產政黨の一人たり得る人間ではない。それが好んで社會民衆黨に入つたのはどういふ譯であらうか。恐らく氏獨特の時世の動きを見る慧眼さに依るのであらう。氏の眼が無產政黨こそ將來の政治的中心になるといふ事を看破させたのであるが、惜しい事にはその眼力はそれ丈けに止まつて、それ以上の分析も、それ以上の批判も出來なかつた。で勞農黨や日勞黨の持つところの意味さへ解らなかつたのであらう。それ丈けの事で無產黨の一人となつたといふ事は、實に意味の無い事である。氏は昔から社會運動に對して働きかけたことはなかつた。あべこべに反動的な役割をつとめてゐた。それが一朝にして豹變したといふのもいゝ。明確な認識さへあれば。然し氏にはその認識はなかつたのであらう。

文壇人として菊池氏はブルジョア文學の總帥だとされてゐた。我々は少くともプロレタリア文學運動に從事して、十年にもなる。此の對立に於て菊池氏は常に我々の反對者であつた。さうして我々は現在の政治的段階に於て、或る者は勞農黨を支持し、或る者は日勞黨を支持してゐる。さうして文藝に於て正面の敵であつた氏が、今や同じ無產政黨の一つに入つて來た。此は文藝的に氏の立場が如何に變つたかを明かにして貰つたのちでなければ承認されない事實である。氏はプロレタリア藝術に對して如何なる見解を持つのであるか。

社會民衆黨は菊池氏を容れる事に依つて、それの本質がプチブルである事を暴露した。さうして社會民衆黨から菊池氏に要求するところのものは、彼の既成政黨的政治家氣質に過ぎず、又ブルジョアに有する文名に過ぎなかつた。此は我々の求める無產政黨の政治の特質に反し、又その求める政治家に反する。菊池氏の政治的意味は無產政黨に入る事に依つて殆んど何物も加へないのである。

肉體的資格

久米正雄

嘗つて雜誌「隨筆」に頼まれて、衆議院を見に行つた事がある。其時、何よりも面白く感じたのは、議席の構造や言論そのものでなくて、議員

の顔だつた。——登場役者の面貌だつた。何か魁偉とも云ふべき、一種のマスクだつた。知名の士のマスクは云ふに及ばず、座席の前方に居る所謂陣笠とも云ふべき人のマスクに至るまで面白くないものは餘りに無かつた。後で、その事を岡本一平君に話したところ、氏は會心らしい笑みと同感を洩らして、「いや、全くさうだよ。殊に近く寄つて見ると猶面白い。身體から云つても、平均二十貫？——今その確實な數は忘れた、ださうだからねえ。何處か變つてるよ。」と云つた。

その時、私はさう言ふマスクの並列を眺め下し乍ら、文壇で、若しかう云ふマスクの所有者を求むるなら、誰だらうと考へた。思考下に、菊池寛の魁頭が浮んだ。田山さんでは少し好々爺過ぎるし、中村武羅夫君の顔も浮んだ、是も北海道選出の資格を感じたが、又、何だか、稍々院外團的、乃至佐々木安五郎的感じで、正統は、菊池寛の顔だと思つた。

——その直感。今日の現實となる。いや、成らうとして居る。顔は人格と言動の象徴。菊池寛の顔は、既成政黨の顔と、四つ相撲に組んで、勝つ見込みがある顔だ。

そしてあの身體も、衆議院の廊下を歩いてゐて、どつしり板につくだらう。

人物に就ては、其の一種の頑張力。平民性、熱、一本氣、黒白明快、現實的。それらを包んで時として神來する童心。——かう云ふ童心を、大と名のつく政治家は、時々持つて居るやうに思ふ。——さう云ふもの凡ては、政治家としても、事業家としても、何としても彼の最大特徴であり、強味であるが、私は何よりも彼の魁頭と軀體に、何よりも政治家を感じる。そしてそれは決して間違はないと思ふ。

まア議院の廊下を歩かして、僕の言の眞僞を確めたいものだ。

映畫時評

小山内薫
久米正雄
室生犀星

『暗黑街』とスタンバーグ

「暗黑街」を見た自分は期待的な壓迫も又窒息的な鼓動をも感じずに、スタンバーグの靜かな緊密な、殆ど類ひ稀れな簡潔な手法と、秩序ある明快な一個の腦髓の閃めきとを感じた。「暗黑街」の人生を通じたスタンバーグは、「サルベエション・ハンターズ」のテンポを一層引き締め、殆ど別人のやうな鋭利な速度を全卷の上に試乘した。微塵も無駄のない、空いてゐる一コマとてもない、緊張以上の緊張を全卷に釀酵させ、それでゐて息苦しいものを與へずに、最下級の壓迫をしごかずに、それらの瞬間と瞬間を靜かにきめ細かく織り込み受け渡し、且つ磨き上げてゐる。

或は「暗黑街」を見た人々は評的の標準のない、餘りに漠然とした平凡な或想念に辿り着くであらうし、彼つと面白くあるべきものを期待してゐたことに心附くであらう。今までの映畫に教養されたファンはその絕頂的興趣の無いところの、さういふ映畫的屑やボロを全然振ひ落したところの「暗黑街」には、且渡その批評の標的を失ふたであらう。併し何氣なく或チクチクしたメスのやうな痛みと、妙に光つたものとを同時に感じ、そこにジゼフ・フォン・スタンバーグが映畫的埃をあびてゐない清らかな眼をもつて立つてゐることに氣づいたであらう。彼はストロハイムやチヤツプリンのカットを既にその頭腦の中で試みてゐる。「救ひなき人々」以來二度までも其製作的失敗の苦い經驗をもつ彼は、殆ど出來得るだけのものをさらけ出したと言つてよいであらう。名監督であるよりも刻苦の人スタンバーグ、ちらちらする名監督的な冴えを隨所にもつてゐたから、それらを完

全に近いまでに出し切つた精進の人スタンバーグ、何處までも處女性の瑞々しさと、鋭どさと冴えと新鮮とを持つてゐるスタンバーグ、ジョーヂ・バンクロフトをあれまでに引き上げ、彼を指揮するに寸刻の隙も弛みをも見せず、あれ程までの鮮烈、意味ある圓熟、壓力ある把握の大きさへまでに押出し、凡ゆる現實性の確證を表現させ得た素晴しい親切なメガホンと熱情あるタクト、——曾てサルベーション・ハンターズを叙情詩的な憧れへ呼びかけた彼は、最早一足飛びの本格映畫の骨髓に切迫し、これを如實に健やかに表現した。彼とバンクロフトとによる連弾的な一臺のピアノは、その最高音からピアニシモに至る魅惑の殆完全な渾一を、我々の手の痛くなるまでに拍手させたことは、スタンバーグとバンクロフトの一臺的交響楽を意味するものに外ならないであらう。

「暗黒街」の全卷に流れてゐる流れの量は、殆合一され、ヤマとクライマックスを抹殺してゐる。或は最後にブル・ウイードが逮捕されるところがそうだとすれば左うかも知れぬが、全卷の上に殆平面的なクライマックスの小出的調和を試みてゐることは見遁してはならない。

スタンバーグ氏と志賀氏

自分は「暗黒街」を見ながら、スタンバーグの手法に何故か志賀直哉氏と共通のものを感じた。底光りと健實と少しの衒氣のないスタンバーグは、志賀氏のこつくりした新味のある文章に通じてゐる「頭のよさ」を見出した。寶石商店にブル・ウイードが首飾を盗んだ後に、歩道を驅け合ふ警官隊のヅボンが、飾り棚の鏡や硝子の小さいものまでに映り出されてゐる、その鋭い睨みを睨んだスタンバーグの手法は、或心理描寫の上でさういふ鋭角さを取りあつかふ志賀氏の、布置の中の結構や用意や落着に髣髴してゐた。

ブルツクのロールス・ロイスとノエザースのブレントとの或氣持の受け渡し、そこに立つスタンバーグの克明な心理描寫、就中、たるみのない全篇へ流動してゐる氣根は、志賀氏の何物かを自分に想起させた。その何物かは言ふまでもない志賀直哉氏の何物かである。同時にスタンバーグの刻苦はそれを描寫的手法の上のものとして考へ見ることができれば、志賀氏を想起するのは強ち自分一人に限られてはゐないのであらう。志賀氏がくらうとの作者であるやうに、スタンバーグも亦くらうと筋の彼でなければならないからである。

『暗黒街』のバンクロフト

「戰艦くろがね號」のジョウジ・バンクロフトは、彼自身の強力な心臟の上に更にスタンバーグのタクトの振動を熱視してゐた。彼の全力的な、鈍重な圖太い線、之加もそれは軟い沁み込みと鱗とを人の心に影響してゆくところの、得も云はれぬリアリズムへの微妙なそして確實な滲透、之加もそれらの高揚的な、高びしやなまで自由な既に演技的なる諸現象を蹴飛ばしてゐるところ、そしてかういふ彼の特質の上に靜かな熱情あるスタンバーグのタクトが、正確な振子のやうに動いてゐる。

ブル・ウイードは猛々しい豹のやうな野性と、豹のやうな優しい愛情と、時に人間的な哄笑とを以つて生れた、野卑を超越した惡漢である。彼が人生について解釋するところは少しの後悔を有たない「惡漢」的意識を飽迄も強大に生活することによつて、その魂を磨く下層人的な或原始性を有つてゐる。之加もバンクロフトとブル・ウイードとの間に一枚の紙背すらない、ブル・ウイードを生活し經驗しながら、ブル・ウイードの血液、肉體を有ち、その凡ゆる行爲に何等の考察や反省すら有ち得ない野性にまで、一個の巨漢バンクロフトは行き着いてゐる。彼が酒場の階段を下りながら右の手を輕く振つて挨拶がはりにする時、又街路へ出ながらの同樣な身振り、舞踊會の夜にも又操り返す同樣な擧止、それらの野卑な挨拶の中にブル・ウイードの生活面が細かに描寫され物語られてゐる。

巨大な榴彈的な哄笑が連發されてゐるのに、惡漢が自身に鞭打ち又自身を憐憫し、彼と繋がる社會面へ叩き付けるところの、途方もない哄笑であつた。底知れない善惡の孰れの人間であるか區別しがたい哄笑、絕對的な、壓迫的な、一すぢの軌道をのみ走る哄笑、單純であるが多角的な面をもつ哄笑、何事もこの哄笑の中で分別し認識し或は喪失し或は歡喜するところの哄笑、柔らかい優しみの中にある野卑な嘲りの相、常に絕望と相隣り合ふ斷層的な哄笑、自分はジョーヂ・バンクロフトの哄笑の中から立つ無數の刺銳い牙を想像した。Vの字に刳られる口と鼻翼の兩側にある二すぢの線、そこに何時も叫んでゐる金壺眼を見詰めて、自分も又同時に哄笑すべき多くの運命に對して拍手し、バンクロフトと融け合ふことを快適に感じた。彼の哄笑とヤニングスの哄笑の間に何と大きい本質的なる相違のあることだらう、ヤニングスの學ろ化學的な作爲ある哄笑に較べて、バンクロフトの自然な血液的な哄笑は、一層秀拔な、決して彼に劣らない未來を暗示してゐるものであらう。

自分はクライヴ・ブルックの「靜かさ」を大ぶ前から睨んでゐた。フラーの中のクライヴ・ブルックはもう何時までも「フラー」の中の彼ではなかつた。バンクロフトの對手役として優、

な位置を保留することにより、彼自身は憐むべき泥の着いた珠玉であつた。入念な視線による一動作への連絡、少し氣取り過ぎてゐる所は惡いでもないが、酒場のブルックの沈着なクイムある動作は、自分に充分な彼の未來への感銘を與へた。バンクロフトの荒涼を潤ほすに、ブルックを選んだスタンバーグの周到な用意が顯はれてよかつた。アルコオル中毒の彼はその蒼白な容貌が一際役立つて効果を擧げてゐたことも特筆すべきであらう。

それにしても猶自分の眼底を去らないバンクロフトの哄笑、あらゆる人生への榴彈であり彼自身への後悔なき惡の意識化であり、同時に何とも云へない子供らしい無邪氣な、罪のない誰も從かさるを得ない哄笑、——(讀者よ若し再び見る機會があるなら、どうか彼の唯一の哄笑を見落さないやうに、我々の運命への加擔を意味するところの彼への瞬間の喝采と、このやくざな現世的屈辱的な意識への爆發との拍手を忘れないやうに。)

「プラーグの大學生」

獨逸でウエゲナーが二度までも製作した怪奇と幻像とを主題とした、重々しいゲルマン風の物語である。かういふ惡魔の詩情ともいふべきものを生かすことは、ゲルマン人の鈍重な氣質の中に沈潜してゐる美事な惡魔派の詩情だと云つてよい。

ヘンリーク・ガレーンの手法は、その怪奇的魅惑と幻像とを何處までもリアリスチックな本格へ働きかけてはゐるが、テンポのゆるい何處か彫刻的な腰重さが、怪奇的物語の頽勢へ引戻してゐる。これらの不思議な魔のごときエフエクトは、何處まで現實性を溶き伸したかと云ふことに依つて、手法の冴えが生きるのである。ヘンリーク・ガレーンのテクニックは鈍重な彫刻的な、新味に乏しい伸長を可成退屈な程續けてゐる。併しその根氣ある不斷の努力は退屈な中に一種クラシックな香氣と、古い書物の手觸りとを同時に感じさせてゐる。酒場のごときは幾度か繰り返された場面ではあるが、矢張り或手重い執拗な手法で寛くりと迫つてゐる。或意味で突き込んで云へばコンラット・フアイトの大學生も、アグネス・エスターハデイの令孃マルギットも「置かれ」た感じであつて、生活してゐる感じではない。この固さは最後まで自分を不滿足にしてゐた。併しかういふ困難な物語をこれほどにこなすことは、獨逸人でなければできない本質的なものであらう。

コンラット・フアイトの大學生は、有數に滋味もあり重さもあつた。どの場面に成功してゐるといふことはないが、持味と演技とはその「行亘り」の上で渾然としてゐた。最後の鏡の砕

片に微かな縞のズボンの映るところは、ヘンリーク・ガレーンの手法とぴつたりした新味が含まれてゐた。唯自分に若々しい熱情のある大學生として見ることができず、冷やか過ぎた物憂い、最初から此物語の中の人物といふ決定的な氣持で動いてゐる彼が、さういふ彼のよく云へば澁みとこなれとの演技が、この映畫では自分を愉快にしなかつたことも事實である。

金貨スカピネリのウエルナア・クラウスも、その一役を立派にこなしてゐる。彼が僅かに三四度くらゐしか現はれないのも、ガレーンの用意に或周到さを見るべきであらう。

かういふ映畫はアメリカで製作されても、これほど効果のある魅力のある作品にはならないであらう。それは同時にコンラット・ファイトのゐないことを證明するものだ。もう一つは同じ主題を三度も製作するといふ根氣と研鑽と努力とは、今のところゲルマン人以外にはなからう。興行價値を見越しての再映であるにしても、根柢にその氣質の重厚さを思はずにゐられない。

上山草人氏とその「面」

「支那の鸚鵡」を見て、上山草人氏が象徴的な或型まで拵へ上げてゐることを知つた。或種のグロテスクな持味は立派にこなせることが首肯かれ、誇張的な象徴味は彼のもつ演技特有の、東洋風な憂鬱を表現する時にのみ成功してゐる。

草人氏の持つ「面」は東洋的な心理表象を形づけるに充分であるが、探偵劇以外の性格的な、彼の持味を濁らせない演技を自分は望んでゐる。その「面」の持つ或深刻な彫刻は必らず正しい性格劇によきニュアンスを與へるであらう。今は餘り見ないが四五年以前にフランク・キーナンといふ老優がゐて、よい悲哀をかたちづくる「面」を有つてゐた。自分は何故か草人氏を思ふと、キーナンの有つ「悲哀境」を想ひ出した。

此の映畫に榮えない醜役をされてゐるホバート・ボスウォースは、昔から自分の好きな俳優だつた。彼もまたマドロスのよい「面」をもつてゐたが、今は老ひて演技にも冴えや熱がなかつた。「ブラッド・シップ」も自分は久濶りで見に行つたけれど、昔見た英雄的な海洋詩人の俤は微かに殘つてゐたが、自分を打つものが最早此人の中にはなかつた。かういふ回顧風な考へは尠くとも「ブラッド・シップ」を見てゐる間に、絶えず映畫界の動きの迅さを、寧ろ小説的人生の速度と同じいものに感じるのだ。年少彼を好きだつた今の自分に感興の無いことも當然だつたけれど、さういふ自分にも未だ多少の同情のあることは嬉しかつた。

アメリカ式新派悲劇の將來

「己が罪」や「朧風戀風」や「不如歸」や「金色夜叉」に據る新派悲劇の發展は、尠くとも二十年前の青年間に一風俗として流行化されてゐた。それらの「思想」の唯一なるものは新時代の女性を背景にした明治中期の青年の物惱ましげな、併し新鮮な心象的な或スタイルを輪廓的にも藝術化したものであつた。

勿論日本に於ける新派悲劇の擡頭期の混亂は、凡ゆる演劇や寄席興行や服裝や日常の言葉使ひにまで現はれてゐた。「朧風戀風」の一女性は自轉車に乘ることにより奈何に新時代の明治風俗を物語つてゐたか？「金色夜叉」の主人公はいかに肉と物質の上に苦悶したか？爾來二十年新派悲劇的要素は漸く心性的痼疾の一病源を形作るに至つてゐる。或はモダン・ガールの如き時代的紙屑の内容も、之等に根さしてゐる道化的な引伸しかも知れない。

併乍ら歐洲戰爭前後のアメリカ映畫の王國時代は、實に我國に遲れること二十年の後に漸くヤンキー式新派悲劇を構成し、甘い牛乳の如きリリアン・ギッシュ式新派悲劇を宣傳したのは、我々の「己が罪」や「金色夜叉」式悲劇の立場からは充分に冷笑すべき事かも知れなかつた。古代をもたない民族の悲劇がカーテンや花束や大理石的庭園や何道な背景にしたのも、又極島の一時代的思潮に遲れ走せながらも悲劇的要素を宣傳したのも、文學の無かつた民族の淺薄な思ひつきに外ならなかつたであらう。併しその映畫化による新派悲劇の諸相は在來の日本的な人生内容であつたに拘らず、「活動寫眞的月光」の新鮮によつて表現されたゝめに、教養なく自覺なきファンはその新派悲劇に同情し喝采するに至つたのである。寧ろ二十年前に我々が讀み棄てたものを再び何等の反省無く、「活動寫眞」なるが故に新たに見直したのであつた。それは將しく「見直し」したのであり「考へ」直したのでは無かつた。

新派悲劇的痼疾は「カリガリ博士」あたりから次第に衰弱し、ルビイッチあたりから盛り直したことも事實である。唯我々の氣付いたことは新派悲劇的要素は、いかにアメリカ人の本質的な性格の中にあるものだつたかと云ふことである。寧ろ我國にそれらの傳統はあつたにしろ、アメリカは實に新派悲劇の創始時代であり、文學なき民族が盛りあげた塔に外ならなかつたのである。デミルやグリフヰスの輩出も此新派悲劇の踏臺の上に坐らなければならなかつた程、かれらはメイ・マクラレンあたりに「新派悲劇」的創始時代の烽火を打ち擧げたのであつた。それは此ブルヂョア王國の窮屈な過剩された戀愛的月光の理想

化であり、小さな扇を弄りながら窓外の氷雪を眺めては、奈何に新派悲劇が人生に取つて必要であるかと云ふことを物語る、彼等の「金色夜叉」であり「己が罪」の文學であつた。若し歴史が歴史であるところの變遷を正確に物語るものとすれば、此の世界創始以來の王國も、また王國としての半夜の夢を物語るに或沒落の時代を將來に於て經驗するに至るであらう。彼らの新派悲劇の好尚もその時代には光輝ある傳統の上に立ち得ることが出來るであらう。

アメリカ式新派悲劇に培養された逆説的新派の第二期の創始者としてのクララ・バウは、極端なアメリカニズムの對照をなしつゝあるのも、偏に新派の進出的現象とせねばならぬ、クララ・バウの演技的性格にある複雜性は同時にアメリカが持つ輕佻浮薄な複雜性を物語るものであり、悲劇が悲劇とならない前にアメリカ式胡麿化しの終始によつて表現されてゐる複雜さである。

「槍供養」

大河内傳次郎氏の「槍供養」を見て、好い小品の感じがした。劍劇が劍劇を緒台にした或る微かな突破もあり、殆偶作的にも好き効果を持つてゐた。劍劇が劍劇を生みつける要素を斯様に表現し得たのも、配役の按配にも手頃な選擇が施されてゐるのも、自分には「大河内」物に愛情を感じた程である。「忠次御用篇」の伊藤大輔氏の手法もよかつた。阪妻がデミル式の大物好みに耽つてゐる時に、自分は「鋭どさ」を失はないでゐる大河内氏を注目したいと思ふてゐる。

他の新派物を見るよりもどれ程舊劇が面白いか分らない。新派が新派の垢を着けてゐる間、日本にまだ「救ひなき人々」の喝采を見ないであらう。努力せられよ大河内傳次郎！

音樂に就いて

映畫の場面と筋とを運ぶものに役立つ音樂的効果は、既に我々の説くまでもないことである。優秀な映畫の内容にはその説明者としての音樂的表現と相俟つて、美しい統一された氣分のもとに、ファンの熱情を温めることも人々の知るところである。よき音樂は場面を一層小説的な細描にまでも引伸し、喜怒哀樂境を一入深甚にすることも事實である。勘くともリリアン・ギツシュ式センチメンタリズムの過去に於ては、これらの音樂が一層三流小説に伴ふセンチメンタリズムを助成し、アメリカ式新新派悲劇を構成するものに力あつたやうである。「音樂なき映畫」を考へられないまでになつた我々は、事實それらの

音樂の必要である經過に就いて考へることに無しに、物悲しげなりリアン・ギッシュ式乃至アメリカ式新新派悲劇的中毒の分子を、不知不識我等の氣持の中に加へられたことは否めない。

我々が音樂をとらへその內容に打ち向ふ氣持には、到底やはり恍然たる氣持以外のものでは無い、何ともいへない美の疼きを感じることは恰も愛する女人の皮膚を撫するやうな氣持でもある。何か月光のごときものを絶えず加へられてゆくやうな氣持の幅と深さを、その音樂のよき累積によつて瞭然と手摑みにする快感である。それは頭底アメリカ式リリアン・ギッシュ式の諸式の表現を拒絶するところの最高のものであらう。自分らが過去に於て些しでも新派悲劇的要素に毒されてゐたのは音樂もまた「新新派悲劇」的墮落に染色されてゐた時代であつた。低級な市井音樂のニーナ式トラムライ式の聽くに耐えない混濁されたヴイオリン式情操に强制され馴致された我々の「映畫と音樂」に就いては、實に一足飛びにこれらを驅散して誠のよき音樂を攝り入れねばならぬ。誠のよき音樂はリア・デ・プチイ式情操に、或は又メイ・マッカボーイの神祕ある皮膚にまで影響し、次いで映畫の感銘とゝもに我々の中に不斷の人生を血液的にまで流し込むものであらう。

「カリガリ博士」や「救ひなき人々」又は「最後の人」の諸作品は、もはや音樂的表現外に立ち得てゐること、これらの映畫には音樂を必要としない超音樂的なまで、人生そのものの音樂のみによつて立ち得てゐること、そして音樂も遂に斷る秀れた作品には役立たないものにまで關係のないことは、軈て映畫が音樂を付屬物としてのみの存在を暗示するものであり、よき映畫はそれ自身が携へるものに依つて音樂とは別途な存在を續けることを物語るものであらう。最も優秀な藝術的な映畫は却つてその特質の獨立性からも、音樂の插入を拒絶し、拒絶することによつて映畫に音樂が最早心要のないことを證明するであらう。「カリガリ博士」に音樂の必要のないのは作品自身の內容や構成が人生音樂の組立を露骨に示したものであるからである。

ロシアの映畫

（室生犀星）

「ロシヤの映畫はどうでした。」

モスコオから歸つた私は、大抵な人にから訊かれた。

ところが、實際私は三週間の滯在中、唯一回しか映畫を見なかつた。

私が主として見學に行つたのは演劇である。併し、映畫の方も出來るだけは見て來ようと思つた。晝間はキネマ、夜は芝居と休みなしに見て歩くつもりでゐた。

私のさう思つたのに無理はなかつた。千九百十二年から千九百十三年へかけて西歐羅巴へ遊學した時、私は大抵さうしたのである。私は伯林で「クオ・ワヂス」の封切を見た。バッサアマンの「デア・アンデレ」を見た。維納でエルメテ・ツアッコオニの、題は忘れたが、醫者が猿から梅毒をうつされる映畫の封切を見た。いづれもそれは晝間だつた。ストックホルムで新派悲劇的な勞働爭議映畫を見たのも晝間だつた。倫敦でサフラジエットのミス・デヰスンがダアビ・デイに競馬の眞つ唯中へ飛び込んで、キングの馬に蹴殺された時の實寫を見たのも晝間だつた。

但し、ロシヤでは、モスコオでも、ペトログラアドでも、晝間シネマを見た記憶がない。併し、西歐羅巴でも晝間やつてゐたのだから、モスコオでも晝間やつてるに違ひないと、唯ぼんやりさう考へて行つた。

ところが、今度モスコオへ着いて見ると、常設館で晝間興行してゐるところは一軒もないといふことが直ぐ分かつた。大抵は午後七時半からで、出し物は一本、同じものを二回やる。日曜にはマチネエをやるが、マチネエは芝居の方にもあるので、ついその方へ行く。月曜の晩は芝居が全部休みだが、シネマもやつぱり休みである。

さういつたわけで、短い期間に出來るだけ多くの芝居を見ようとした私は、ついシネマの方がお留守になつた次第である。

もう一つ理由がある。しかも、それは重大な理由である。それは、私が滯在した三週間のあひだに、芝居の方は割愛しても是非見なければならないと思ふやうな寫眞が、どこの常設館にも上映されなかつたことである。

「諸君、驚いてはいけません。私がモスコオへ着いた、その週間に最も大規模に宣傳されてゐた常設館の出し物は何だつたと思ひます。「ワリエテ」に「巴里の女」に「スカラムッシュ」ではありませんか。」

私は既に日本でモスクヰンの「ポリクウシユカ」を見た。プドオフキンの「母」を見た。「裝甲艦パチエムキン」の話を聞いた。「アエリタ」の話を聞いた。

實際、私はモスコオへ行けば、さういつたものがさらに見られると、さう思つて樂しみにしてゐたのである。ところが、ス

テエションへ著いて、自動車でホテルへ行くまでに、いきなり見せられたのが往來の上を横に切つた「ワリエテ」の飾り旗である。「巴里の女」の大ポスタである。

映畫の製作では世界の第一線に立つてゐるサボツエトロシヤも、常設館の出し物では、日本にさへおくれてゐるのである。私の最初に知つたことはこれだつた。

勿論、私の滯在中に常設館の出し物は二三度變つた。併し、「ワリエテ」だけは、私がモスコオを去るまで打ち續けてゐた。ロシヤ製のシネマも二三出ないではなかつた。併し、私は映畫通である私の通譯イリヤ・ルビンシユテインの話で、そのいづれもが俗受專門のものであることを知つた。可なり評判の高い「皇帝と詩人」(プウシユキンを題材にしたもの)などでも、あまり屢王宮の噴水が出て來るので、あれは「皇帝と噴水」だなどと嘲る人が澤山にあつた。

實を言ふと、私はエルトフの實寫映畫が見たかつた。エイゼンシユテインの撮影所も見たかつた。プドオフキンにも是非會つて「母」についての話が聞きたかつた。(現在の私はプドオフキンの「母」を空前絕後の本質的な映畫だと信じてゐる)そこで、モスコオへ著くと早々、それらの便宜をVOKS(對外文化協會)に賴んだ。併しVOKSは私を劇場人としては認めてくれたが映畫人としては認めてくれなかつたらしい。劇場に關することは、隨分親切に世話をしてくれたが、映畫に關する私の希望條件は終に歸るまで梨のつぶてだつた。私がロシヤ映畫にまるで無知で歸つた理由の一つはここにもある。

以下は私の推測である。

映畫製作には大資本が要る。現在のロシヤにはその財源がない。エイゼンシユテインの爲事も、プドオフキンの爲事も、規模としては、日本で言ふ、プロダクシヨン程度のもので、實に立派な爲事をしてゐるが、出來るものは年に一本か二本ぐらゐのものらしい。エイゼンシユテインなども、例の「スタアチカ」(「同盟罷工」)を作つた時分には、まだひどいカメラを使つてゐたらしい。「パチエムキン」で少し金がはひつたので、やつと獨逸の撮影機を買つたのださうだ。聯邦共和國の農村生活を全線に亘つて寫實的に描寫するといふ大計畫の「ゲネラリナヤ、リイニヤ」なども、去年の十月頃までには完成するといふ噂を聞いてゐたから、向うへ著くと直ぐ訊いて見たが、出來たといふ人もあり、まだ出來ないといふ人もあるので、眞相が分らない。兎に角、私が行つた時分の映畫雜誌などを見ると、現在は政府の金で「十月」といふ革命記念の寫眞を作つてゐるやうだが、それも餘り費用がかかるといふので、どうやら政府側か

ら中止命令が出たとか出さうだとかいふ話であつた。ブドオフキンもやはり革命記念映畫を作つてゐるやうだが、それもどの程度まで進んでゐるのか分からない。エルトフに至つては、その名前さへ知らない人が、モスコオには澤山あるのである。

　これを、要するに、ロシアの最も進んだ映畫製作者は、いづれも財源に苦しんで惡鬪苦戰してゐるのではあるまいか。私は滿腔の同情を禁じ得ないと共に、彼等がアメリカへでも貰はれて行つて、終にその特色を失ふやうな日が來なければ好いと思つてゐる。

　私が唯一つモスコオで見た映畫といふのは、ウクライナで近頃出來た、ゴオゴリの「ソロチンスカヤ、ヤルマルカ」の封切である。ゴオゴリのこの短篇は「ヂカンカ夜話」の中にある有名な作で、既にムツソルグスキイ（？）のオペラにもなつてゐる。だが、この映畫は地獄のシインが稍見られるだけで、他は實に幼稚極まる製作だつた。カメラの廻轉數などもひどく儉約されてゐた。だが、勞働者の多いエルミタアジユの見物はひどく喜んで、初から終まで笑ひ通しだつた。大衆向といふものは、やはりどこの國でも變らないものかと思つて、私は聊か悲觀した。

　併し、インテリゲンチヤの間に於ける映畫の研究は、なかなか盛である。映畫に關する書物も夥しく出版されてゐる。私が買つて來たものの中でも、ブドオフキンの「映畫監督」同じ人の「映畫シネリオ」バルチヤンスキイの「映畫製作者の教養」エイヘンバウム、カザンスキイ、シユクロフスキイその他諸家の論文を集めた「ポイチカ、キノ」などが價値ありさうに思はれる。三卷物の内第一卷だけ出たリハチエフの「ロシヤ映畫史」も貴重な文獻であらう。

　私はこれらのものを、露西亞語の出來る人にだんだん讀んで貰つて、これからロシヤの映畫について學ぶところあらうとしてゐるのである。

　これは唯、それまでの責ふさげに過ぎない。（但し、プドオフキンの「母」については最近稍詳しく自分の感想を述べたいと思つてゐる）（二月六日

「ベタ、オオル」

　ロシヤから歸つて來ると直ぐ氣管支カタルになつて（多分ロシア土産だらうと言つたら、大使館のスパホン教授が、ロシヤにそんなものは賣つてゐませんと言つた）三週間も寢てしまつたので、この頃で見た映畫は「ベタ、オオル」一つだけである。

　プロジエクタのせいか、繪が一體に少し暗いと思つた（帝國ホテル演藝場）。つなぎの戰場は總て平凡だつた。併し、面白

かつた。見てゐて、氣持のだれるところはなかつた。殊に後半は息もつかせなかつた。芝居の前から面白くなるのである。それは後に出來て前に輸入された「彌次喜多空中の巻」にも、手で眞似がしてあるさうだが、人の話で聞くと、やはり本家の方が好いらしい。ミリタリズムもアンチミリタリズムもないところが暢氣で好い。コツクニのしやれつ氣は十分に出てゐる。それがいけないと言はれれば、これまでだ。人間が一人も死なないのも好い。獨逸兵の醉つぱらつてゐる時は、英吉利兵も醉つぱらつてゐる。敵愾心といふやうなケチなものの出てゐないのが好い。アメリカ製の戰爭物とは大した相違だ。人氣の悪い愚兄チヤツプリンも、これで男を上げたと言へよう。

全然ドラマチツクではない。悉くエピソオド的だ。それで、これだけ見物が引つ張れれば、やはり製作が巧いのだらう。

但し、確聞するところに依ると、この映畫は東健而君が編輯をし直したものだ。そこに何か好い効果が出たのではあるまいか。私は研究の爲に元の儘で、その映畫を一度見たいと思ふ。

（二月六日）

（小山内　薫）

白鳥隨筆

正宗白鳥

森鷗外について

(一)

「小説は澤山讀む。新聞や雜誌を見るときは議論なんぞは見ないで、小説を讀む。しかし若し何と思つて讀むかと云ふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小説は、此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云ふ心理的狀態で書いてゐるかと云ふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとか云ふ積りで書いてゐるものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いてゐるものが、却つて悲しかつたりする」

森鷗外は「ヰタ、セクスアリス」(明治四十二年の作、時に、作者四十八歲)のうちにかう書いてゐる。彼れが、當時の日本文壇の作品を、內心馬鹿にしてかゝつてゐたことは、これによつて察せられる。

「そのうち自然主義と云ふことが始まつた。金井君は此流義の作品を見たときは、格別技癢をば感じなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。云々」と、同じ小説のうちに書いてゐる。

日本の自然派と自稱する作家どもが、みんな一樣に色情狂見たいなことを書いて、「これが人生だ」と云つてゐるのを、

不思議に思つた彼、鷗外は、ふと「自分の性慾的生活の歴史を書いて見ようか」と思立つて、この異色のある「ヰタ、セクスアリス」の一篇を作上げたのであつた。二葉亭四迷の「平凡」も、當時の自然派作者の性慾描寫に刺戟されて思立つたものらしかつたが、しかし「平凡」には、舊文學の臭ひが附纏つてゐた。鷗外の古い感情から脱却した明確適切な描寫とは、類を異にしてゐた。

全體、この「性慾史」ばかりではなくつて、鷗外の後半生の小說と戲曲とは、當時の自然派に刺戟されて出現されたのであつた。自然派の作品を馬鹿にしながら、「おれも書いて見よう」といふ創作慾を、彼れは起したのであつた。彼れが前半生に試みてゐたいろ／＼な近代歐洲文學の飜譯は獨歩花袋藤村など當時の文學青年に清新な感化を與へ、舊套を脱した新文學の發生する原因の一つとなつたのであつたが、後では、鷗外自身が、知らず識らず獨歩花袋藤村などの感化を受けた譯になるのである。私はそこに面白みを感じてゐる。「藝術品に對する要求が高いために容易に取り附けなかつた」創作の筆を自由に揮つて、鷗外として文學的事業を史上に留むるやうなつたのは、自然派の刺戟があつたためであつた。島村抱月が、歐洲に留學して學んだものよりも、日本の自然主義の氣運によつて、心の扉が開かれたと同じやうに、鷗外も、長年月の間に讀破し來つた種々雜多な歐洲文學よりも、日本の若輩の、彼れの目からは浮薄低劣に思はれる新文學の作風によつて、自己の天分と學殖とを藝術の方へ傾瀉すべき戸口を見つけたのであつた。これが「遊び」氣分であつたにしろ、馬琴の所謂「有用な書物の購求費のために書かれた無用な文」であつたにしろ、私などは、後半生の創作に於て、鷗外に重きを置くやうになつてゐる。「現代日本文學全集」中の鷗外集が、初期の數種の短篇小說の外は、飜譯ばかりで埋められるやうだつたら、いかばかり淋しいことであらうか。私は、彼れの學殖の深さ淺さはよく知らないし、またそんなことはどちらでもいゝと思つてゐる。しかし、その創作は、讀みつゞけると、津々として盡きざる興味が覺えられる。私は人生の事と文學の事について、彼れの作品から學ぶところが少くない。

（二）

私は、年少の頃「國民之友」で讀んだ「舞姫」と、「水沫集」で讀んだ「文づかひ」と「うたかたの記」とを、久振りで讀直した。そして、わが生の若かりし夢を偲んだのであつた。今讀んでも、好短篇として翫賞し得られるものである。「わたくしは少年の時、貸本屋の本を耽讀した。……讀本、書本、人情本……さういふ本を讀み盡くして、さて貸本屋に、何かまだ讀まない本は無いかと問ふと、貸本屋は隨筆類を推薦する。……わたくしは貸本文學卒業者になつた「(細木香以」のうちに)と、自から云つてゐるほど、江戸文學に熟通してゐたのに關はらず、逍遙露伴紅葉その他同時代の他の多くの作家のやうに、舊幕時代の舊い文學に感染されてゐなかつた。

これ等の三篇は、いづれも歐洲留學紀念の作品である。若かつた鷗外は、異鄕の土地と人とを題材として、自己の青春の夢を語つてゐるのであるが、これを、紅葉が「三人妻」や「伽羅枕」などに、江戸情調の遊女妓女を憧憬し空想して、自己の青春の夢を語つてゐるのに比べると、若い夢のさま〴〵が思出されて面白い。かの三つの小說は、歐洲近代の短篇小說の體裁を模したものだが、當時の青年作家たる鷗外の心臟がそこに鼓動してゐるのである。島崎藤村の抒情詩「若菜集」などと同じやうに取扱はれるべきものである。詩趣情味が豐かである。それに氣品も添つてゐる。後年の史傳的小說が學究の考證記事のやうな無味乾燥に墮さなかつた所以である。「即興詩人」のやうな飜譯以上の飜譯が現はれた所以である。「エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を濺いだ豐太郎」(「舞姫」)の心を作者の心としてゐた鷗外は、アヌンチヤタとアントニオの薄倖な戀物語にも心を捉へられたに違ひなかつた。「涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限りの涙と化して融け去るを覺えたり」とは、アヌンチヤタの最後の手紙を讀んだ時の、アントニオの心を敍したばかりではなく、譯者や讀者の心も述べられてゐるやうに思はれる。

若い男女の戀を描いて、情景兼ね具はつた小說は、明治以來「即興詩人」に及ぶものはなかつた。私はふたゝびこの物語を讀んだ。最初は、「しがらみ草紙」「めざまし草」などに斷續的に掲げられたのを、上野の圖書館に保存された古雜誌の綴込みを捜して止切れ〴〵に讀み、その後、春陽堂出版の四號活字の二冊本によつて、首尾を通じて讀んだ。私は二十代に讀んだ翻譯文學で、最も忘れ難い印象を留めてゐるものは、この「即興詩人」と、小金井きみ子女史の「浴泉記」とである。私は過去を追懷して、數年前に、新刊の縮刷本を買つて、「即興詩人」の第三回目の復習を試みたのであつたが、私は自分の心がもはや作中の男女の心から遠く離れてゐるのを感じない譯に行かなかつた。

作者たる鷗外も、「即興詩人」あたりを打留めとして、青春の夢から醒めて、心は枯淡になりかゝつた。現實世界の實相を見る目も冴えて來たのであつた。「埋木」「浮世の波」「悪因緣」など、「水沫集」に收められた前期の翻譯と、「一幕物」その他の後期の翻譯とを比べると、譯文の調子が變つてゐるばかりでなく、原作の選擇が異つてゐる。鷗外も以前は感傷的分子に富んだ物語を譯することを好んでゐた。彼れが若し、もつと早く、「ヰタ、セクスアリス」を書いてゐたなら、あゝまで情熱を缺いだ科學的態度を持してのみ、筆を執らなかつたであらう。

「世間の人は今の自分を見て、金井は年を取つて情熱が無くなつたと云ふ。しかし、これは年を取つたためでは無い。自分は少年の時から、餘りに自分を知り拔いてゐたのでその悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつたのである。……或は結婚もしなかつた方がよかつたかも知れない。どうも自分は人並はづれの冷澹の男であるらしい」と、作者は、「ヰタ、セクスアリス」の結末に於て自己を省みて、一先づから云つてゐる。しかし、忽ち又考へ直して、「……自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけのことである。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。……自分は無能力では無い。インポテントでは無い。世間の人は性慾の虎を放し飼ひにして、どうかすると、其背に乘つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性慾の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅と云ふのがある。馴れた虎を傍

に寢かして置いてゐる。獅子がその虎を連れてゐる。あの虎は性慾の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の
るべき威は衰へてゐないのである」と云つてゐる。

性慾については兎に角、藝術に於ては、鷗外の意氣は晩年まで衰へなかつた。その悟性も學殖も、彼れの藝術を培養こそすれ、萎縮させることはなかつた。

彼れは、無論天才型の作家ではなかつた。しかし、創作は片手間の仕事で「遊び」氣分で筆を執つたことも多かつたのであらう。非凡な作品、深刻な藝術は彼れの全集のうちから搜出せないかも知れない。………しかし、近年の私は、明治以來の種々雜多の作品のうちでは、鷗外の作品を最も愛讀してゐる。その文章の的確明快なのを好んでゐる。蕪雜の跡のないのを、讀みながら快く感じてゐる。作品を通して窺はれる作家の心境に何となく親しみを覺えてゐる。何よりも鈍昧なところのないのが氣持がいゝ。

(三)

端的に鷗外の晩年の心境の露出されてゐる小品「妄想」については、私はかつて感想を述べたことがある。「高瀨舟」は、他に托して作者の心境を述べたもので、渾然たる佳篇である。作意の晦澁を厭うてゐたこの作者は、自作自註の態度を取つて、いろ〳〵な小說に、屢々說明語を添へて、讀者の理解を助けるやうに努めてゐるが、それが却つて、鑑賞を不純にして、作品の幅を狹くすることもある。「高瀨舟」にも、この作の狙ひどころの說明が添加されてゐる。「財産といふものの觀念」と「死に掛つてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ること」との、二つの大いな問題が、この物語の中に含まれてゐることを、自から指摘してゐる。しかし、この所謂二大問題なるものが、作者によつて解決されてゐるのではない。そして、私などは、問題を別にして、この小說に興味を覺えるのである。場面と人物と心理とが、寸分の隙きの

ないやうに描出されてゐる。澄み切つた晩秋の月夜を見るやうな氣がする。

私は、鷗外晩年の作品では「高瀨舟」と「妄想」とを最も好んで、これまでに幾度も讀返してゐた。「妄想」は、最も聰明であつた一人の日本人の人生觀として敬聽して、自省の資としてゐたのであるが、それとゝもに鷗外の作品解釋の礎ともしてゐたのであつた。

私はこの二篇と「ぢいさん、ばあさん」とを好んでゐた。

「金毘羅」と「蛇」と「雁」とは、今度「現代日本文學全集」本によつて、はじめて讀んだのだが、かういふ小說に徴しても、作者の聰明な頭腦と明確な描寫力が認め得られるのである。鷗外は、ポオの怪奇小說の一つである「モルグ街の殺人」を「病院橫丁の殺人犯」と改題して、巧みに飜譯してゐる。その譯文には「ポオの推理的敍說は、今の日本文壇の好みに適しないから抄略する」といふ意味の添書きがしてあつたと、私は記憶してゐる。ポオの推理は微細を極めてゐて、「黃金蟲」の如きは、その點で古今に類を絕した驚歎すべき作物であるが、それほど傑れた頭腦を有つてゐたポオも、一面、神秘不可思議な人生と宇宙とに戰いてゐたのであつた。しかし、鷗外は、推理に傑れた頭腦は有つてゐても、神秘な世界に分入つて彷徨することはなかつた。彼れは「有りのまゝ」の世界を見極めるだけに滿足して、人智で分りもしない世界に歩を進めようとはしなかつた。「人生宇宙の不思議に驚きたい」のが國木田獨步の願ひであつたが、聰明なる鷗外は、さういふ願うて甲斐なき願ひに心を惱まさなかつた。十九世紀の終りに獨逸に留學してゐて彼れは、歐洲の世紀末の思潮と文藝に接觸した最初の日本文學者であつた譯であるが、その思潮に感染しなかつた。ハルトマンの厭世哲學を理解しても、さういふ哲學に心醉し耽溺しなかつた。

日本流の自然派文學の「有りのまゝ」主義を標準として批判すれば、鷗外晩年の作品の多くはその標準にかなつてゐるのではあるまいか。

「金毘羅」と「心中」と「蛇」は、題材に神秘らしい影が附纏つてゐるのだが、作者は、それを明るみに描出して、暗い影を殘さなかつた。愛慾の人情を描いた「雁」を讀んで、ことにさう思ふ。この可成り長い小說は、男女の色情についても、鷗外の目のよく働いて、理解の行屆いてゐたことを證明するものであるが、人情愛慾の不思議さについても、作者はそこに曖昧模糊の跡を殘してゐない。主人公末造にしても、その女房にしても、若い妾とその父親にしても、彼等の悲喜哀歡のもつれが、明かに秩序整然と說かれてゐる。底の知れない惱みが作品のうちに出沒してゐるのではない。……トルストイやドストエフスキーの文學と、わが森鷗外の文學との相違してゐる所以である。

「小說は說明をしてはならないのださうだが、自惚は誰れにでもあるもので、此話でも萬一ヨオロツパのどの國かの語に飜譯せられて、世界の文學の仲間入をするやうな事があつた時、餘所の讀者に分らないだらうかと、作者は途方もない考へを出して、行きなり說明を以て此小說を書きはじめる」(「百物語」)と、當時の雜評家を揶揄してゐるやうに、わざと堅くるしい說明語を用ひてゐるところもあつて、「雁」のやうな人情小說に於てさへ、時々學者くさい筆法が散見して、讀者の素直な鑑賞を妨げるところもあるが、描寫の才能がないために、說明語を用ひてゐるのではない。この小說の舞臺になつてゐる本鄕から下谷へかけての風物、明治初期の時代の空氣は、讀者の目に映るやうによく描かれてゐる。松源での妾の目見えの場面でも、決して說明で逃げようとはしないで、描寫で委曲を盡くしてゐる。描寫の巧みな作家は、日本にはあまりなかつたので、小說家らしい小說家の作品よりも、有島武郎の「ある女」や鷗外の「雁」などに、却つてしつかりした描寫の見られるのを、私は不思議に思つてゐる。

夏目漱石は藝術家として、鷗外よりも豐かな天分を有つてゐたに違ひないが、「私には、漱石の作品はいつもくどい感じがする。

（四）

私は、「青年氣質」以來の、明治の重な小說は、一通り見てゐる譯であるが、自己の天分を完成した作家としては、鷗外が第一であつたと思ふ。明治の重な作家は、早世したゝめでもあつたが、充分に自己を發揮し得なかつた。獨り鷗外は、「舞姬」から「北條霞亭」まで、青年期から晚年まで、藝術を樂んで、天分と修養とを兼ね具へた自己相當の文學に安んじて終りを全ふした幸福な文學者である。終りまで老衰の跡を殘さなかつた。

罪人を護送しながらその話に聞惚れてゐる同心庄兵衛の輕い懷疑の氣持は、つねに鷗外の心にも存じてゐたのであつたが、懷疑のために七顚八倒することの愚かさを知つてゐた彼れは、一生心の平靜を失はなかつた。「日の要求に安んぜない權利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科學で大發明をするとか、哲學や藝術で大きい思想、大きい作品を生み出すとかいふ境地に立つたら、自分も現在に滿足したのではあるまいか。自分にはそれが出來なかつた。」(「妄想」)と云つてゐる通り、古今東西の偉大なる作品に熟通してゐた彼れは、日本現代の文學者に有勝ちな誇大妄想的自惚れも起さず、また、聰明であつた彼れは、「辻に立つてゐて、度々帽を脫いだ。昔の人にも今の人にも敬意を表すべき人が大勢あつたのである。帽は脫いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた」(「妄想」)ので、一人の人間や一つの主義に雷同して狂奔することはなかつた。そして、「死の恐怖が無いと同時に死の憧憬も無い。死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、人生の下り坂を下つて行つた」といふ、晚年に到着した彼れの平靜な心境を、私は羨ましく思つてゐる。

私は、直接に鷗外に會つたことはなかつた。また會ひたいと思つたこともなかつた。たゞ、私が森川町に下宿して新聞社へ通つてゐた時分に、電車の中で、カーキー色の軍服を着けた額の少し禿げかゝつた男が、私の前に腰掛けて、小形の

洋書を開けて讀んでゐるのを見て、「この人が鷗外さんだな。よく見ると、何處か、三木竹二さんに似てゐるから、さうに違ひない」と思つたことがあつた。それから、「ホトヽギス社」に招待されて、能樂を觀に行つた時に、席を隔てゝその姿を見たことがあつた。

演劇を鑑賞するには、舞臺外の俳優に接する必要がないと同樣に、文學を鑑賞するには、作家に會ふ必要はないのである。私は目のあたり鷗外に接して教へを受けなかつたことを遺憾とはしてゐない。

前半生には、批評の筆を執つて盛んに論戰してゐた彼れも、後半生に於ては、彼自身半ば侮蔑してゐたらしい自然派の作品や評論に對して、表立つた論爭はしなかつた。しかし、自作に對する後進の種々雜多な惡評を冷眼視はしなかつた。他の大家のやうに默つてすましてはゐなかつた。短篇集「分身」に收められてゐる「不思議な鏡」や「田樂豆腐」、文學全集の「遊び」などは、小說といふよりも、當時の文壇の批評であり、自作に對する辯護文であるが、これ等を讀むと、雜多紛々の世評などは、實質的に何の力もないで傑れたる作品は、自分の持つてゐる力によつて、存在を續けて行くことが分るのである。

「創作のなかに自己告白をしない」「告白しない自己を有してゐないから遊びの文藝だ」「情熱のない作だ」といふのが、彼れの作品に對する重な非難であつて、私なども以前さう思つてゐたが、しかし、數十年間の鷗外の作品を通覽すると、その一生の自己が、自己告白を目標とした作家の作品に劣らないほどに現はれてゐるのだ。私はこの頃感じてゐる。

（五）

文學とは何ぞ？

私は年少の頃、内田魯庵の「文學一斑」を讀んで、文學といふものゝ理論的概念を注入されて以來、今日まで、文學の

分類や價値批判や、その他さま〴〵な理論について、絕えず聞かされて來た。「文學とはかくの如きものなり」「かくあらざるべからず」との理窟を、三十年來聞かされ續けて來たのであつた。この頃でも、月々日々文學論の絕える時はないので、我々文筆を職業としてゐるものは、さう議論に全然無關心ではゐられない譯であるが、「人生とは何ぞや」の問題が永久に分り切らない如く、「文學とは何ぞや」の問題も永久に解決されないやうに思はれる。畢竟わが好むところに從ふ外はないのである。

理論は兎に角、明治以來の代表的作家の重な作品を殆んど讀盡してゐる私は、どういふ作家のものに心醉し、「これこそ文學だ」といふ感じに打たれて來たのであらうかと回顧すると、可成り多くを數へ上げることが出來るのであるが、しかし、さういふものも、今日手に取つて見ると、大抵色の褪せたものとして、私の目に映るやうになつてゐる。色彩の絢爛なものも、簡潔直截なものも、明るいものも、暗いものも、そこに、作家自身の一しよ懸命になつたところは認められても、私自身讀みながら感激させられることは稀れになつた。そこへ行くと、森鷗外の作品は見ざめがしない。天才らしい猛烈な藝術の匂ひがないかはりに、鈍昧な跟を留めてゐないのがいゝ。明治以來の日本には、大なる天才は現はれなかつた。われ〴〵を渦の中に卷込むやうな作家はなかつた。せめて、聰明なる人鷗外の語るところを、私は耳を澄まして聽くことを喜んでゐる。（一月二十八日）

斷片語

數十年來さま〴〵な文學論を聞かされて來た私は、この頃は、「大衆文藝」といふ誰れによつて命名されたか分らない名稱の下に、新時代の文學論を聽かされねばならなくなつた。その所謂で、私自身が推服するに足るものにはまだ接しないのであるが、分らないながらもその口眞似でもしなければ、文壇に生存出來ないやうになりかゝつてゐるやうに思はれ

る。

「可成明るい、一般的に面白いものを書いて頂けませんか」と、ある雜誌からの小說の依賴に添書きがしてあつた。製作の態度に束縛を加へるやうな依賴に應じたことのない私は、躊躇するところなく斷つた。「大衆的なものを、何かあなたに書いて頂けませんでせうか」と、先日も、二三の雜誌から相談を向けられた。さういふものの書けさうにない私に書かせることが興味になるらしかつた。

私は、こと更暗いものを好んで書いてゐたのではなかつた。强いて一般的に面白くないものを書かうと志したこともなかつた。暗くも明るくも、よくも惡くも、これまで書いて來たやうなものしか、私には書けなかつたのである。何かの刺激によつて私の頭に大變動が起つて來ない限りは、將來私の書くものも今までと大した相違はないだらうと察せられる。若し私が年が若くて、これから末永く文筆によつて口を糊さなければならぬ境遇にゐるとしたら、大衆的であれ貴族的であれ、無理にも、世の流行に雷同して、雜誌や新聞の依賴に適するやうな態度を執らなければなるまいが、私は、自分の一生を略々通り盡して來た。今になつて、何の必要があつて、流行に雷同し世に媚びる氣になれようぞ。(二月二十九日)

「春秋」といふ雜誌の二月號に、齋藤龍太郎氏が、芥川氏のことを書いてゐる。「君、文壇生活ぐらゐうるさいものはないね。……文壇づき合ひがうまくやつて行けるやうなら、たとへ政治界だつて、實業界だつてうまくやつて行けるよ。こんなに神經をつかはなくつちや生きて行けないやうな世界は、どこにもないね」と、芥川氏は云つたさうである。數ケ月前田山氏か島崎氏かのどちらかゞ、ある雜誌に、「お互ひによくここまで通つて來た」と、互ひに過去の艱難な生涯を回顧し合つたことを詠歎的に書いてゐた。私は、これ等二つの感想に全く同感するのであるが、しかし、艱難の道は文學者だけが辿るべく運命づけられた道ではないので、五十までも六十までも生きて來た人間で、過去を顧みて、坦々砥の如き路を通つて來たと思ふ人は少いだらう。同じ文學者にしても、島崎氏や田山氏や芥川氏などは、艱難してもし榮えがあつ

た譯で、艱難ばかり經驗して、爲すところなく窮死し、あるひは老朽した人は、どのくらゐあつたか知れない。……私なども、文壇的には不運ではなかつた。

しかし、芥川氏の云つてゐる如く、私も隨分神經をつかつて生きて來たには違ひないので、文壇生活のうるさゝはよく感じてゐる。「私ツぱしらばかり强さうに見せてゐても、うちぢや案外くよくよしてゐるんだからね」と、芥川氏の云つてゐる言葉は、私自身でも多小思當るところがないでもない。誰れにともなく氣をかねることがある。……年を取ると、物分りのいゝ顏をしたがつて、自己の眞實の感じを殺したり、ぼかしたりするやうになる。……私は今、「芥川氏のこと」から、かういふことを考へつゞけてゐる。(一月二十日)

元祿の大作家

室生犀星

永い年月

彼は幽けさの中に美しさを見出し、美しさの中には遠方を眺めてゐる。おぼろげなもの、微かなものに永い年月を見、彼の心は年月の波とともに動いてゐる。彼は實に我々に取つて宗教のやうな、物の喜びを有つて迫つてゐる。

挨拶

自分が若し芭蕉に途中で邂逅つたとしても、自分は知らずに行過ぎるであらう。それほど彼は別に何人とも變つたところの無い人物にちがひない。

併し自分と芭蕉とが電車の中で對き合ふてゐたら、自分は芭蕉だといふことに氣が付くやうになるかも知れぬ。能く見れば變つてゐる多くのものを持つてゐる人に違ひないからだ。そして自分は心の內で平常からの尊敬の念を有つやうにな

るであらう、芭蕉も思ひ詰めてゐるやうな自分の眼附につひ注意せずに居られなくなり、何となく柔らかい表情を一段と優しく增すであらう、自分は挨拶のかはりに微笑つて見るやうになるかも知れぬ。微笑はときに餘徹に對する手厚い挨拶でもあるからだ。或は芭蕉もその時に微笑つて答へるかも知れぬ。何となく自分を好いてゐる男だと思ふであらうし、さういふ人には好意をもつ人であるから、他に人さへ居なければ話し合ふやうになるかも知れない。

野とか山とかの小徑で行き逢つたら私と彼とは十年の知己のやうに可懷しげに話を交はすであらう、伶俐らしい自分は謙遜して彼の發句なぞは褒めないで、野や山の景色を目立たぬ程度で靜かに物語るであらう、彼もまた發句の話なぞが出ない心安さにつひ穩やかな話を話し出すだらう、彼の方から發句のことを言ひ出すかも分らない、なぜかと言へば彼は彼の心の向いた時に默つて居られない人だからだ。何時も默つて暮してゐる人間は口を開けて話し出すと、平常貯めてゐることを可成大切なことまでを話し出すものだからだ。言葉をもたない人間はそれ自身一つの思想をもつてゐるからだ。

發句道

芭蕉は發句を一生の仕事として平常も何時もそればかり考へてゐたであらうか。彼の生きてゐる間の仕事は發句以外には道が無いと考へてゐたであらうか。發句が藝術の極北で精髓だと思ふてゐたであらうか。それは彼の發句論や連句の話や、遺語集を見てゐても解り過ぎる程、發句に身を委ねてゐるのだ。それにも拘らず芭蕉は一生の仕事として何時も平常も發句のことばかり考へてゐたであらうか。

自分は彼が晩年近くなつてから此の心が正確に彼に割り込んだものと思うてゐる。自分は決して世の識者等の言ふやうな芭蕉を說きたくない、彼は文學小說に心をひそめてゐたことは、決して見逃してはならぬことだと思うてゐる。

天の貢物

彼は發句道精進の傍、それらの子弟に依つて米鹽を得てゐることを恥ぢてゐたらうか、自分はこの事だけは彼は大膽に天からの貢物を受領するやうな氣でゐたらうと思うた。だから彼は餘り品物を貰うても感謝の情を述べてゐない、その心の一方は大きくひらいて、天からの貢物を入れるために優しい微笑みを漏らすくらゐであつたらう。さういふ芭蕉は生きてゐるのだ。どういふ藝術家の心にでも生きてゐる理解である。藝術の士はそれによる收穫については何時も天の貢物を受領する氣持でゐることには時代の變化はないやうである。

次郎兵衞について

自分が若し芭蕉に仕へるとして見ても、次郎兵衞の如く忠實ではない、去來丈草の如く恭愼の徒でもないやうである。自分は或は路通の心を心としてゐたかも分らぬ。今もなほ芭蕉に稿を起して市にひさいでゐることを思へば、路通のしたことくらゐは許さるべきことである。

女

獨身で通した彼の一生に、彼がどれだけ清淨な獨身であつたかどうかは分らぬ。奥の細道の旅にしても彼は全然清潔であつたかどうかは知らぬ。唯ひそかに思ふのは彼もまた枕紙のさわめく音に目ざめて、人生の獨身を嘆くために一夜妻を求めた彼であらねばならぬといふことである。誰も知らぬ間に彼は彼の寂しい現身をまかした女の一人や二人はゐたであらう、それを思ふ時、我々は芭蕉に一脈の勇敢を感じるのである。彼もまた我々のごときだつたかと恭む氣にさへなるの

である。決して悍卑の念を毛頭感じない。我俳聖はかくあらねばならぬからである。

若し彼が一夜を何處かで明したとしたら、彼は世にも悲しい顔附をして坐つてゐたであらう、恥と悲しみ、憐れみと卑しみとで彼は一杯になり、自分の發句道さへ汚れたやうに思うたであらう、正直な人々は皆さうであるやうに彼は人目に立たぬやうに歸つて行つたであらう、併し乍ら斯様な芭蕉の中に私は得も言はれぬ誠の俳聖を感じるのだ。一生を清い獨身で送つた彼よりも、斯様な挿話をも相携いてゐる芭蕉の現身は、我々には懷しくも愛慕の念さへ起させて來るのである。

芭蕉と女、斯様な悲しい文字は少ない、彼を遂に木石のごとく言傳へることは、彼を益々烈しい寂しさへ追ひ遣るやうなものである。生きるに物憂く寂しかつた彼を故なく一層孤獨に書き傳へることは、追從者の寧ろあさましい理想にすぎない。芭蕉は墓下で上目皺のある額を撩げ乍ら言ふであらう。「おれを此上どうしようとするのだ。」

句作

「一宿一飯の主もおろそかにおもふべからず、さりやとて又媚諂ふことなかれ、斯の如きの人は世の奴なり、此道に入るものは此道の人に交るべし。」

「夕を思ひ旦をおもふべし……しばしばすれば疎ぜらるゝの意を思ふべし……。」

――行脚の掟――

芭蕉もまた一介の放浪者である。延寶元年頃から江戸に流浪し始めてから、五十一歳の秋まで深川に四度庵室を造り、最後に石山寺に住むまで眼まぐるしく東に上り京洛に下り、此間に幾度となく故郷伊賀を往反してゐる。元祿二年の奥羽行脚の百五十餘日はその生涯の行脚の最長期のものであるが、殆その生涯に落着いてゐる暇もないくらゐ、小行脚に次ぐに小旅行を以て終始してゐる。彼自身「旅を思ふこと」は、「そゞろ神の物に憑きて、心を狂はせ」と言ひ、「予も何れ

の年よりか、片雲の風に誘はれて、漂泊の思ひ止まず……」と記してゐる程である。西行の心を真似び宗祇を思ふの彼には、それより先に先天的に漂泊者の魂が根を張つてゐたらしく思はれる。旅といふものはよくよく富めるものでなければ、よくよくの貧しい者の行ふものである。彼の落着きを以てしても、胸の酸ゆくなる思ひで苦しい工面を重ねて行脚にでかけることを思へば、彼もよくよくの旅藝人らしい悲しい氣もちを持つてゐたらしく思はれる。彼は行脚をもつて詩情に一味の幽暗を加へることは明記してゐるけれど、恐らく人情の新鮮、山河の變移などに心打たれて行くところの、やはりさびしがりの性分から旅を企てたものであらう。

彼ほどの人物が色々の土地で樣々な人々に逢ふことに珍しがつてゐたこと、新しい山河の姿に喜び驚き乍ら四顧してゐたこと、なほ彼が一代の俳匠たる隱れなき子供らしい大名を負うてゐるところなぞ、彼が存外澁い枯淡の中に大名を爲した人間らしい詩を持つてゐたやうに思はれる。口をひらけば戲談の裡に諷刺の相を帶び、笑ひの中に人を厭するものを持つてゐたやうである。彼が奧の細道の旅を終えてから始めて人に會ふことを厭うてゐる。五十一年の生涯に彼が人を厭うたことは晩年の暮しだけであつた。奧羽行脚の疲れ、人と物語ることに疲れてゆく老年期にさすがの深切な翁も、やつと門を鎖してゐる。「人生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わずかに二十餘年也、はじめの老の來れる事、一夜の夢の如し……」と言ひ、「人來れば無用の辯あり、出では他の家業をさまたぐるもうし。……」と稍々辛辣に皮肉めいて言つてゐる。人來れば無用の辯ありと言ふ彼が、朝暮の訪客に惱まされ乍らゐたことが解るではないか、此處に苦蟲を嚙みつぶした芭蕉翁が居る。どうにかしなければ身と心との靜かさを護ることができぬ、さういふ考へをもつ彼には、漸く放浪者の魂がしづまつて行く境に行き着いてゐるやうである。殆落着きを知らない旅人としての彼も、やつと渉獵した山河水色の寂びが心に寂びつき、宿りを深うした時に達してゐる。旅は旅の最中よりも後の心を清う洗ひ濯ぐものだ。彼の漂泊もやつと鏡にうつる山河の寂しい姿のやうに、彼の心に落着いて春花秋情を重うしてゐる。彼が閉關說を書いた心は、

旅に居て世俗の煩を忘れることよりも、最つと深く切なる老來の閑寂の中の閑寂にあこがれてゐる心を映し出してゐるものであらう。

朝がほや晝は鎖おろす門の垣　芭蕉

彼ほど作句に苦しんだものはない。彼の苦吟は長きは數年に亘つてゐる。一見、玲瓏玉の如き作句は恰も澱なくすらりと詠まれたやうに見える、併し其底を覗くと苦吟のありさまが韻律の合間に或は苦しげに漂うてゐる。材料で苦しんでゐる彼は、或るものは捨て、捨てたものを又拾ひ上げて眺めたりして、念々の苦吟は彼の中から一道の靈氣を吐いてゐる位である。結局、彼の幽遠寂情と雖も、彼の心魂からばたりと滑して落ちるものに外ならぬ。彼は刀鍛冶の鎚の味を知り、弓矢の道を心得、草木山川の何物であるかを識つてゐる「發句のすがたは青柳の小雨に垂れたる如くして……」と言ふ彼の素直さは、時にその全然反對の枯木寒巖の情をもつてゐることも又同様である。彼が考へながら寂然と坐つてゐる姿を思へば、しづかさ其のものゝ悌であり、俳諧其のものゝ佛體であるかとさへ思はれる。彼の苦吟の體は斯樣な靜かさの中に生れ、句に入る時苦しむ彼も句に形を終えたときは、廣やかにさらりと涼しい姿で表はれてゐる。

ほろほろと山吹ちるか瀧の音　芭蕉
鶯の笠おとしたる椿かな　同
一日〱麥あからみて啼雲雀　同
何の木の花とはしらず匂哉　同

「翁曰、發句は頭よりすらすらと云下し來るを上品とす。翁洒堂に敎て曰、發句は汝がごとく物二三取集る物にあらず、こがねを打のべたるごとく有べし。」と平常敎へ且つ語つてゐる。彼は心で苦吟し讀み上げる時の玲瓏を期待してゐるのである。

彼は一句の面の上に何かしら新しい言葉を意くことや、また作語することに巧みな事、上へ上へと登る言葉に常も苦心してゐる。何度も置き換えて見て、又捨てることは珍らしくない。彼が作意ある言葉の美しさ新しさを見ると、彼の苦心のあとが歴々と解るのだ。

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく　芭蕉

草枕犬も時雨るゝかよるのこゑ　同

こがらしや竹にかくれてしづまりぬ　同

髪生て容顔青し五月雨　同

起あがる菊ほのか也水のあと　同

枯芝ややゝかげろふの一二寸　同

行春にわかの浦にて追付たり　同

四方より花吹き入れてにほの波　同

日の道や葵傾く五月雨　同

初霜や菊冷初る腰の綿　同

八九間空で雨ふる柳かな　　同

風色やしどろに植る夜の秋　　同

これらはその當時嶄新な造語であり馳付であつたに違ひない。今見ても何かの新しさが立匂うてゐる。容顏青しの凄みのある寂漠、追付たりの思ひ切つて迫る調子、四方よりと初五文字から出た高びしやなまでの放膽、それを花吹き入れてと靜かに受け流してゐるところ、剃冷初るの美しい透明さ、風色やの新しい語彙、――これらが元祿の昔に彼によつて詠まれてゐることは、全く驚くより外はない。彼が文字に就いての深い心づかひと異常な神經とは、どういふ場合にでも落着いた効果を出してゐる。文字が彼のやさしい睨みにすくみ上り、彫られたまゝで凝乎として動かないでゐる。四方よりや、八九間や、一二寸なぞといふ文字は落着きの惡い文字づらであるが、彼によつて締めつけられると、押花のやうに平つたくなつて終ふのだ。彼の締め方が類外れて程得てゐるためであることは、句のなり姿が整うてゐるのを見ても解るのだ。彼のさびしおりの締手、その心も、こゝまで來ると色々な彼の役目の重きを負うてゐるのが解る。

彼はこの世を諸行無常だとは思うてゐない。彼はこの世をさびしいものだといふ風に考へ耽つてゐても、無常だといふことに片づけてゐないのである。この世の中で彼の必要なものは「靜かさ」であり「しめやかさ」であり「さびしおり」ではあつた。しかし此の世を詰らないとか無常だとかは思うてゐない。まゝならぬが故にさびしくは觀てゐるのである。彼の壯大も嚴肅さもみな彼のさびしい中から彼の喘ぎあて搜り當てたものである。彼は自分で自分の寂漠を擔り乍ら食べてゐる何者かである。酒のむものは酒を友とし、悲しめるものは悲しみを友とする彼である。彼こそは生活に面しても逃げも隱れもせぬ男であつた。寂しさを友とするものは何ものよりも勁い、彼の勁剛さの鍛へられたのも彼のさびしおりの信條があるからだ。それ故、彼の地盤はいつもゆるぎもしないでゐる。

うき我をさびしがらせよ閑古鳥　（嵯峨日記）

彼の此の呼びかけてゐる氣もちの底は、しつかりと張り詰めて氷のやうに澄んでゐる。正面に心を向け已れのさびしさを呼び出してくるのを待つてゐるところに、幅と深さと用意とがある。「うき我を」と言ふ彼は、已れのやうに物憂い何時も何か考へてゐるやうな人間、――物の美しさばかりを見てゐられぬ人間、――を指してゐるのである。

ほね柴や斯と見るより蝶の殼　（泊船）

年〱やさくらをこやす花の塵　（芭蕉翁全傳）

生きながら一つに氷る海鼠かな　（木曾の旅）

彼の人生觀といふものが、これらの形になつて現はれてゐる時に、さすがの彼も失敗してゐる。しかし「骨柴や」の場合は、斯と見るよりと急きこんでゐるところに、むしろ寫生的な味ひが出てゐる。併し乍らその根柢に脱けきらない人生觀上の悲哀を表象してゐることを見逃せない。「年々や」の場合は、ひた向きの無情感にすぎない。すくなくとも芭蕉の心の向きが露骨に沁み出てゐる。生きながらは何か烈しい悲哀を、此句の寫生の奥に控へてゐる。しかも表にあらはれてゐないのは、彼の用意の深いところであらう。

花屋日記を評す

花屋日記は文曉の僞作で、文曉の作としてのみ後世を問ふべきであらう。去來支考等の合作では毛頭無い。師の病床に合作の日記を附るほど彼らは職業的文筆の徒ではない、やうやく連坐の句作を以てする位の人々である。花屋日記が芭蕉易簀の目安を以て、日を趁うて記されてゐるのは何よりも後年の作であることを證左してゐる。

併し不思議なことは花屋日記の中にある或詩情ある嚴肅さだけは、何人もその當時の病臥の芭蕉とその周圍を髣髴するに足りることとである。文曉の遺業として後代に殘るものであることは歴然としてゐる。それ故、花屋日記は一卷の蟲くひ本としての値、木板書籍としての稀覯本としての値は、確に持つてゐる、――――印刷本よりも木板本として讀んだ方が、あの中にある初しぐれの降る日や、元祿諸家の入亂れて集るさまや、京へ上る伏見船やが沁々として讀まれる。それに花屋日記は一篇の小說的な値さへある。自分は此の蟲くひ本に時ならぬ時雨も感じてゐるくらゐ興味を有つてゐる。

肥後七代の僧文曉の作としての文章、及びその一人づつの性格範圍に稍々近づいた描寫には、油斷ならない文章のよいところがあつた。しかも此一篇は樂しみ乍ら書いたあとが偲ばれてよい。一夜づくりで書かれたものでなく經机に靠れたまま、靜かに翁の臨終を念ひながら筆を運ばせたもののやうである。それに自分だけの考へではあるが、時雨といふものの佗しさをこれほどまで、しみじみと書いた文章は古來すくないと言つてよい。翁の臨終を前にした去來丈草支考等も取まぜた病床記の中に、雨の降るありさまが述べられてゐるのである。

「十日初時雨せり夜の明かたより度數しれずひとしほ惱みたまへり。……」

「十一日朝またくく時雨す、おもひかけなく東武の其角きたる。……」

芭蕉易簀の前後は、平常懇しい門葉等の手厚い看護に守られてゐたのである。自ら野晒の果を夢見てゐた彼が子弟の間に、靜かに大往生を遂げたのは、昔律儀の門人等であつたとは云へ、今の世にも稀れに見る美談である。

病中のあまりすゝるや冬籠　去來

おもひよる夜伽もしたし冬籠　正秀

うつくまる藥の下の寒さかな　丈草

しかられて次の間に立寒さかな　支考

この病牀十日間の師を思ふの情、師、子弟を念ふの心は、芭蕉生涯中の樂しい十日間であつた。又、これほど門葉の心を沁々と感じたことも生涯を通して少なかつたに違ひない。醫師である木節を信じて、他の方醫を招くと言ふ木節を退けて言つてゐる。「吾生死も明暮にせまりぬとおぼゆれば、もとより水宿雲棲の身の、この藥かの藥とてあさましう、あがきはつべきにもあらず、たゞねがはくば、老子（木節を指す。）が藥にて最期までの唇をぬらし候と、ふかくたのみをきて、此後は左右の人をしりぞけて、不淨を浴し、香を燒て後安臥してものいはず。」（「笈日記」）と飽迄木節の醫藥に身を托してゐたところは、死に近づいても芭蕉は芭蕉たる所以のものを有つてゐた。今の世にこんな人は無からう。この子弟の情の深いことは後代に微しても稀有のことではないか？——。

落つきやから手水して神集め　木節

木がらしの容見なをすや鶴の聲　去來

足がろに竹の林やみそさゞい　惟然

初雪にやがて手引ん佐太の宮　正秀

神のるす頼み力や松のかぜ　之道

居上ていさみつきけり鴨の顔　伽香
起さるゝ聲も嬉しき湯婆かな　支考
水仙や使につれて床離れ　呑舟
峠こす鴨のさなりや諸きほひ　丈草
日にまして見ます顏也霜の菊　乙州
吹井より鶴を招かん時雨かな　普子

門葉一同の賀會祈禱の句を見ても、師の病の平癒を念々に祈つて止まぬ至誠が現はれてゐる。芭蕉といへども斯くまでに深い心遣りには莞爾として死に就くことができたであらう。「十二日の申の刻ばかりに、死顏うるはしく睡れる……」と其角の「枯尾花」にあるやうに、まことに睡るやうに芭蕉は眼を閉ぢたのである。「日にまして見ます顏也霜の菊」の祈も容れられなかつたのである。

芭蕉は病の中途で死を覺悟してゐたらしく思はれるのは、あれだけの人物であるだけに一屑死に對する從容たる心が見えて來るのだ。遺言をと望まれて俳句は一句一句遺言のやうなものだと云ふあたりは、その言葉よりも左う云ふ事を言ふ彼の氣質には感心させられる。事實に於て彼の晩年の作二十句ばかりを見ると、人間の終る時らしい俤と重みとを有つてゐる。「夢は枯野」の句のあとに尚彼の句があるとは思へない。しかも「夢は枯野」で終つてゐるところに、物の終る姿があつた。「此道や行く人なしに秋の暮」にせよ、「秋近き隣は何をする人ぞ」の大きな陰影にせよ、それらは遂にやはり彼が最終の陰影でもあつた。しかも一文の金も持たない彼が平和な、普通人にも望めない幸福な死を翁の上に運んだことも、誰がしたといふこともない自然さで手厚い情愛の間に行はれてゐた。その手當には彼もほとほとに喜んで謝してゐ

る。自分自身の心の温かさが却て彼自身に浸つたものとしか思はれない門葉の存在は、芭蕉の死に面する心を澄んだ沼のやうに靜かならしめたであらう。蕪村や一茶、西行や宗祇にしても、芭蕉の如き穏やかさの中に死んだ譯ではない。何よりも靜かさが死の前にあることは、この世で一番托むべきものである。「先づたのむ椎の木」どころではない。彼の大往生は花や音樂よりも、人間の一番大切な人情の中に遂げられたのであつた。何人も斯る至倖の死を死んだものは無いやうである。

大凡兆に就いて

芭蕉は千數百吟の發句を後代に遺した。そして一茶は一萬句を越える發句を殘した。蕪村も子規もその句作に於ては芭蕉を遙かに踰えてゐた。併し乍ら我が凡兆は僅かに七十數句の發句を殘したのみであつた。しかも凡兆が大凡兆の城壁の上に輝いてゐる所以のものは、僅かに七十數吟の發句に據つただけである。「木のまたのあでやかなりし柳かな」の古今に絕した光彩は、實に遙かに一萬吟を後世に委ねるよりも、一層大凡兆の所以を爲すところのものである。凡兆は天明の召波や明治の子規の比ではない。彼は元祿から明治へかけての芭蕉を除いた外では、大作家の巨鱗を實に千古に輝かしたものであつた。杳たる一凡兆は遂に今日に迨つては、再び我々の接しがたい大作家であつた。

季節の約定

けふは終日の雨である。幹は濡れ草は花季を經え起き上つてゐる。季節の約定が次第に開けて行くやうである。自分にかういふ穏やかな日に芭

蕉を感ぜずに居られない。漂泊たる二百年の雨の中に彼がなほ濡れながら漂うてゐることを感じてゐる。彼は我々に取つては一つの清い季節の感じの中にも存在してゐるやうに思はれる。

芭蕉その人は最早や單なる芭蕉ではなく、一つの漂泊を織りなすところの冴えであり靈感であつた。尠くとも彼は我々の視野に實に微妙な諸々の姿をもつて現はれてゐる季節の約定の一端であつた。彼自身は既に靈感そのものに我々に映するやうになつた。

風流

芭蕉は風流人であつたらうか？——自分は彼が風流人であつたとは思はない。彼は自分で謂ふところの風流は猒うてゐたに違ひない。彼の場合、風流は彼の氣質の中に在つたもので、後の人々がこの猒な文字の「風流」を冠せたものである。彼にはこの「風流」の證明は要らなかつた筈であつた。若し強ひてその風流を彼のために無理に押し立てようとするならば、風流の一寸前のもので、風流とは最つと純粹なものだつたに違ひない。芭蕉を風流の代表者としたのはよい加減の文人が筆の序にさう風流人と書いてしまつたのである。

風流は俗物と壁一重のもので、紛れ易いがために一層潔よい惑物である。風流の變遷は遂に予の見るところでは、今や清濁併せたものであつて清きに過ぎず、また濁るに永うせざるもの丶謂ひである。併し乍ら芭蕉の氣質の中に此の濁りの無かつたことは實際であつた。濁れぬ氣質であつたと云ふより、濁つてはならぬやうにされてゐたと言つた方がよい。門人は彼を模範とする前に彼は彼の持前の清い氣質を一層門葉の信賴からも磨き上げたと言つてよい。彼を永く逆境に置いたとしても濁らぬ人であつたらう、併し彼をあ丶まで清純の人として絶世に殘したかどうかは分らない。彼らは知らず識らずの内に己れを叩き上げてゐたのである。教へる者の教へられる渾然さは彼と門葉の間にこそ猒らかに考へられるので

ある。

彼は米鹽の資に事缺いても直ぐ心の荒むやうな人ではなかつた。彼はさういふ事すらしみじみと心に應へてゐた人である。さういふ生活の不如意のことさへ、彼の心へ何時も何物かを加へつゝあつたこと、それが彼を育てゝゐたことは疑はれない。貧乏人でよい素質を有つた人間の素直さは、何とも云へず美しいものである。八方に開いてゐる心のゆとりを見せてゐるものだ。ぬけ口を樂に持つてゐる彼らには辟屈してもその度合が違ふのである。小金のある輩は必らず一方のぬけ口しか持つてゐない。彼の辟屈は兩眉を塞らせる辟屈である。芭蕉はぬけ口を持ち合せてゐた人である。

「先日は立寄さまぐ御馳走殊にわらじまで貰ひ忝存候翌日俱利伽羅を越、金澤に着申候、因緣も候はゞ再御目にかゝり可申候以上。」わらじはわらじ錢のことである。しかも玲瓏として快い擽をもつて聞かれるではないか。しかもかういふ芭蕉でありながら同じ北越行脚で生駒萬子からの餞金二個を斷つたりしてゐるところを見ると、彼は彼だけ使ふ分を持てばあとは何時も斷つてゐたらしく思はれるのである。左ういふ心の正しさを自分で期してゐるところは、何者の清廉よりも一層清雅である。放浪人の性根にはこの一面の淸徹が無かつたら、遂に漂泊者たる雅人の資格を缺いてゐる譯である。

「伊三郎殿庭にて的御座候由見物致と御申越、弓見物きらひに御座候間參り不申候以上。」

これは風流とは反對のものを斷つてゐる彼である。溫和な彼が弓矢の興を覺えなかつたのは一理あるが、實際に於て武張つたものは餘り好まなかつたらしい。彼は彼の道さへ辿ればよいといふ考へを最後まで失はなかつた人である。彼の口訣掟によると、草木や鳥蟲の生命を容易にあやめてならぬと言ひ、門葉をいましめてゐる。實にさういふ一面もあつたらしいが、「草庵鼠多く候間今夜猫おかし可被下候長助御申付なされ」云々の書簡を見ると、かれも鼠の生命はあやめてよいものと考へてゐたらしい。草木鳥蟲に心を配る彼が、なほ鼠の憎むべきことを知つてゐる。魚の生命の場合でも、それが爲方の無い場合はよいと言うてゐる。彼もまた自分を信じすぎた時は、人間らしく寧るかに大見榮を切つたことも無いで

もないらしい。鳥蟲をあやめることとの不可をいましめる氣禀の中に、可成に思ひ上つた芭蕉が彷彿してゐるやうである。

しかも彼の性質の中に曾つて深い憎惡のあつたことを私は知らない。彼は憐みの情を超えて憐れむ心になつてゐるらしく思はれる。對手を憎むといふ強い心でなしに、さういふ氣もちを通り越した或るもの、つまり哀憐で終始されてゐることが解る。路通の場合もさうである。彼は餘りに苦勞人であつたゝめに何も彼も己れの中に、凝乎とおし靜めた人ではなかつたか？――そのため爲人としての彼があれほどまでに大成されたのかも知れぬ。貧乏人は自分の中に世間をおし靜める氣質を稀れに持つてゐるものである。又、世間の問題を自分のものとして慨する事もある。彼の場合は何事も沈めて置く優秀な本質から、憐み悲しみすら己のものとしたに違ひないと思うてゐる。

極局風流といふものも予の如き小量の人間に取つては、世間へのかくれ蓑だとしか思へない。その中にあれば靜かさがあり世間の騷音を拒絕できるからである。何事もそこには自分をいたはる心ばかりがある。他のものが無い。自分はさういふ隱れ蓑の中にゐることを願うてゐる。こゝから自分を引きずり出す者はない。さういふ者がゐても自分は出ないであらう。併し芭蕉はかくれ蓑を着てゐなかつたのだ。彼はその點では何の用意もない清朗の心でゐたらしく思はれる。予の如きは自ら立ち縮るところがあるが、かれは自然に自分の行くところに行つてゐる。すこしの濁りも見せずに。――其處は自分の如きは到底至らないところだと殘念乍ら思ふのだ。あれほど、すらりと行くにはその本質がどれほど善いものであつたかといふ事を感嘆させて來るのである。素直だとか、清純だとか、さういふ言葉では云へないものがあつたのだ。二百年の間にかういふ人物が再び得られなかつた程、かれは稀れな現はれであつた。これを思ふと何とも云へない快い氣もちになるのだ。

路通の俳號について

芭蕉は果して路通に俳號を與へたのであらうか、路上の一餓人に對して此の路通といふ命名は、芭蕉の憐しみ深い性質から推して、殆眞實とは思はれないくらゐである。乞食の俳號を路通といふのは、路通自身には輕蔑されてゐると同樣である。しかも永久に輕蔑されてゐるやうなものである。

これは路通自身が芭蕉に會ふ前から持つてゐた俳號であらう、路通は芭蕉に邂逅する前から歌俳諧を路上にひさいでゐた風流歌人の輩であつたらうから、その路通の俳號を持つてゐたことは事實であらう、自分は芭蕉が命名したとはどうしても思へない。

大新人

芭蕉が元祿を壓してゐた所以のものは、殆比類なきその時代の一大新人であつたからであらう。新人中の新人、殆何人も此の新しさには惹き付けられ驚かされたのであらう。今から想像して見ても國木田獨步の出現や、子規の時代の新しさではなかつた。前代未聞の新しさであつたに違ひない。

選料

芭蕉の生活費は句谷の選料であつた。貞德が一倆を取つてゐたことは傳說であるとしても、芭蕉の選料は相應に收入があつたものに思へる。しかもそれには額の多少もあつたらうが、彼の生活費の大部分はこの選から出たものであることを忘れてはならぬ。

短冊

芭蕉の短冊や書簡が比較的殘つてゐるのも、無理強ひに書かされたためもあらうが、彼の在世時分からして相應の市價があり、歿後その市價が勃然として上騰したゝめ、所藏家が大切に祕めてゐたのであらう。今は短冊一葉にすら數百金を抛打たねばならぬ。しかも僞筆に至つては天下に佐與の暇も無いくらゐである。

しかも蕉門の徒の短冊に至つては、殘つてゐるものは稀れである。路通の如きは殆絕望的に無いかも知れぬ。以後今までに家藏されてゐたものの發表されないかぎり、絕對に吾々の眼に入らないと言つてよい。この絕對に吾々の接することのできない蕉門諸家の眞蹟を念ふことは、限りない敢果ない氣もちである。

「かぴたん」の句

延寶年間、芭蕉三十五六歲頃の句に、「かぴたんもつくばはせけり君が春」といふのがある。かぴたんは當時のオランダ商館の主事のことを言つたものであるが、これほど芭蕉の句の中で俗流の匂ひ烈しい句は無いやうである。つくばはせけり等と言ひ、將軍家を君が春などと言ひ、一代の寂びを慕うた彼らしくも無い凡俗の情に走り、媚び諂ふた下賤の心でゐる彼を見ることができる。自分は彼のやうな人物にもかういふ作句を考へさせた時代的な習俗に同情はないではないが、併し何たる不愉快な發句であらう。

當時かぴたん輩が貢物を贈つて將軍に下坐したことは實際であるが、芭蕉までがその優越感を持つてゐたことは爲方がないとしても、作句の上にまでその氣持を殘してゐることは、後代の吾々を不愉快にするものである。彼と雖も遺憾なき人物の完成されたものではない、併し此の發句の上に現はれたものは吾々の信ずる芭蕉として受取りがたいところの、最も彼の彼らしくない凡俗の彼を代表したものである。併し乍ら此發句に據つて元祿時代のかぴたん趣味がいかに流行してゐたかゞ分るやうである。

理解

芭蕉を理解することは總ゆる元祿の文献を猟ることではない、彼の氣質に近い人間が自然に彼に惹かれてゆく心を言ふのであらう、最う一言いへば彼を理解する前に己の分を知らねばならぬ。己の分を知るものは、芭蕉の中に這入ることが出來よう、單なる彼の發句の解釋は文字通りの解釋となる前に、自分等の心の向きと彼の心の向きとの、秀が揃はねばならぬことだ。

人間ができてから芭蕉を理解せよといふのは、少くとも十匁を秤るものはそれだけの品物を持たねばならぬ謂ひでもあるのだ。秤にかけられぬものを持ち合せてゐても、それは叶はぬことではないか。

鶯の句

芭蕉の句の中には、最う一歩あとへ退いたら平仮の月並の谷間へ墜ち込むやうな危い句がある。彼の高雅と幽遠との砦を守るべき句の中には、僅かな微妙なつながりを有つてゐるだけに、一歩は月並の陳腐へ、一歩は高雅幽遠の城郭に引つかかつてゐる句がある。それでゐて月並へ墜ちないで立派なつながりを見せてゐる。

鶯や雀よけ行枝うつり　芭蕉

此の句の精神、動きの危なさは、心なきものをして鶯の高雅はその心に雀を避けるやうに考へ至るであらう、そして陳腐だといふかも知れぬ。しかし此場合の鶯の枝移りしてゆくありさまには、雀とは全で違うた素質の上からの枝移りである。微妙な鋭さ、當然別途に就くべきものの小氣味よい優越された氣持が、鮮やかに目前にある。併しながら斯様に高雅

な何であるにかゝはらず危なさをも一所に伴うてゐる。

芭蕉のうまさや高さ奥深さは、實に斯樣なところで何時も見事に完成されてゐるのである。吾人の心はかういふ危なさの上に確つかりと坐つてゐて動かないのだ。土俵ぎはで持ち應へる力である。假りに自分らが此の材料をこなすとしても、かういふ危い表現はしないで、安らかに詠んでしまふ。少しも月並の臭ひや凝ひのないものに作つてしまふだらう。併し乍らこれだけの表現のうまみを殘すことができない。

この句は寫生から這入つて行つてゐるやうであるが、その動きの幽かさ美しさは春寒のまだ芽のない楓か何かの、鋭い枝の間に動いて見える鶯である。觀念の句も多いが此には何等の意圖がなく、すらりとしてゐて氣もちの高い張りをも何の裏に窺はせてゐるやうである。

竹植ゑる日

此間からあとさき三度ばかり庭に竹を植ゑさせたが、三度とも晝深く夕方に近いころに風が出て來て、竹植ゑると風が出るのが我庭の歲時季のやうに思はれた。自分は芭蕉の竹植ゑる日の文を思ひ起した。

「ばせを植てまづにくむ荻の二ば哉」の如きは、その氣持の細かさは解るのであるが、芭蕉としての心のしぼりの沁み出てゐない句である。かれの失敗にはぬけ道はあるが、「かぴたん」の句のやうに、千古の惡句となることが無いでもない。

「一つ家に」の句について

奥の細道の越後の句、「一つ家に遊女もねたり萩と月」は、小說的な哀愁のある句である。遊女が隣の間にゐて一と晩ぢう老ひたる附添の女と物語つてゐる有樣に、眼冴えて眠られないでゐる芭蕉は、同じ心でゐる同行の曾良を顧見て、自分

のカでは女をどうも救へないことを嘆いたであらう。

女が芭蕉に身のありさまを掻き口說いたのは、行脚姿の芭蕉を僧都だと思つたにちがひない。普通の旅行者と見てゐたら幾ら遊女になる女でも、容易には身の上を話すものではなからう。片雲に身を委す僧と見るのは當り前のことである。彼の姿やその顏容、または物の言ひ振りの閑かさは、吾々がその當時見てゐても僧の外のものではない。

自分は芭蕉がこの女を振り切つて去つたのは、女が美人で無かつたのに原因するかも知れないが、それよりも肝心なことは、情に惹かれても身の及ばざることを知つてゐたゝめであらう。彼の經濟的生活には女を救ふだけのものがない、彼はよく自分を知つてゐるものであつたらう。進んで宜い加減なことを言はないで去つたのは、やはり情に惹かれてもその情に沈まない確かさを持つてゐたことが分る。

擬芭蕉手簡

杉風宛

先夜失禮致候其の節の忘れ物唯今次郎兵衛に屆致させ候間落手被下度、序乍夜來の春雨の爲め少々雨漏難澁致候、此前雨漏候ひしより何の加減にや久しく其事無之候ひしが、昨夜來急の事とて手の付よう無、屋根方丈八に言上願上度候、序乍ら先般の羽織の御禮內室に言上被下度有まで以上。

ばせを

北枝宛

御手簡辱く拜受、その節の御禮申上べきところ歸庵早々の疲勞にて諸方御無音に打過御許被下度候、御地風光まだ眼前に有之、野田山の松籟、蟬の啼音も今に忘難く存じ候、殊に野田產の茸お送被下、丈草諸共珍重致候、丈草も又御地一遊

の心有と申居候へ共、此儀披露下さるまじく候、
末雄乍、牧童、句空雅丈へ宜敷傳申可下候、萬子よりも先日音信有之、風流祝着に存居り候。　ばせを

去來宛

貴墨忝く拜受、後頃より參上致可候、御内室に宜敷申傳被下候。　ばせを

萬子宛

先日一笑より水鷄笛贈越し殊の外興多く存申候、貴樣御手翰に據ば河鹿笛なるもの御地に有之候由、鳩笛と又同樣の物ならんと存ぜられ申候。
お示しの發句三誦致候、風雅のしおり靜かならんもの殊の外喜入候。

編輯者雜記

×

「普通選擧」と「大衆文藝」號を特別號として突嗟の間にこれだけのものを提供し得たことを私かに寧ぶ。大體想像はしてゐたものゝ愈々解散になる、愈々普選が實施される。眼の廻るやうな急轉直下に應じて、この意義深き普選第一回戰を記念せんとした努力を買つて頂きたいと思ふ。

×

特選畫報も好個の記念として全國のポスターを陳列してお見えにかけようと思つた。それは或意味において普選はポスター戰だからである。たゞ少々遺憾だつたのはメ切を極力延ばして二月の八日までしか待てなかつたので、十分出揃はなかつたためと、地方の選擧事務所が不明だつたりしたため、比較的地方を逸しはしたかつたかと思ふ。何分忽卒の際とて萬全を期し難いが、代表的なものは大抵蒐めたつもりである。これでも十分好い記念にはなつたと思ふ。選擧多用の中を本誌の乞ひを容れて早速ポスターをお送り下さつた方々には此處で厚くお禮を申上げておく。

×

木村毅氏と阿部次郎氏のものは大したものだらう。近頃雜誌界の平盤を破るに功があるだらう。

○

政界は今や乾坤一擲の勝敗を賭けて既成、無產諸政黨が入亂れて戰つて居る。流石に普選第一次總選擧の爭覇戰の景況であるが、其渦中に在つて血眼になつて東奔西走して居る人々の行動は、之れを客觀的に眺めればたしかに興味ある心理的對象でなければならぬ。其處には總ゆる慾望以上に戰鬪的心理が強く働く。「勝敗」は結果である。其處へ行くまでの心理過程こそ複雜だ。本號所載の「勝敗」は諸家が戰鬪的心理の興味ある動きを扱つたもので、時節柄の好讀物であることを信ずる。

○

片上伸氏の「文藝時評」は本號に於ても亦休載の止むなきに至つた。前號休載の後なので本號こそはと期待して居たのであつたが、實に運わるくも今回も亦メ切間際になつて氏が病氣で執筆不可能になつたため遂に諦めるより致し方なかつた。續けて二回休載したことは讀者の期待に對して深くお詫びをする次第である。

○

不相變無責任な投稿が多いのに閉口する。今後住所氏名の明記なき又は返送及書留郵券封入なき投稿に對しては絕對に責任を持たないから承知せられたい。

▽

吾々の待ち憧れた明るい政治への第一歩が愈々踏み出された。吾々もこの普選を記念するため、既成、無產各黨の間を奔走して選擧運動以上の活動をやつた。その間に聞いた某既成政黨領袖の言葉、

――（一九四頁へ續く）――

新世界順禮

（豫告）

谷讓次
谷和子

雜誌に中間記事の忽諸（ゆるがせ）にすべからざるは言ふを俟たない。中間記事のない雜誌は藥味のない蕎麥のやうなものだ。藥味がなかつたりたれがまづかつたりしたのでは、いかに蕎麥でも喉へは通らない。

そこで中間記事だが、せい／＼旨く喰へるやうに隨分吟味してゐるのだが、日本の問屋では材料がきまつてゐる。可なり使ひ盡したと云へないこともない。それに、いくらいゝものでも同じやうなものでは味覺が承知しない。

そこで思ひ立つたのが、谷讓次君夫妻の新世界順禮である。

堺利彦氏の「當なし行脚」が我讀者子の興味を惹いたことは異常なものであつたが、それに百層倍輪をかけた大規模の計畫がこの「新世界順禮」である。

行先きは全世界である。歐洲、南北アメリカ、印度、亞弗利加、どんな世界の隅々までも、否、曾て日本人の一人もが足踏みしたことのない世界の端々までも探檢しようとするのである。スーツ・ケース一つで地球を跨にかけようといふのである。この行が三年かゝるか五年かゝるかは豫斷できない。その間に一度歸つてまた出直すかも知れない。最初に何處へ行くか、――吾々はそれも知らない。谷君夫妻が往く先き／＼でどんな藝當を打つか、――それは尚更解らない。

が、こんな事は解らなくてもいゝのである。谷君が往く先き／＼の汽車の窓から、船の中から、又は世界一のホテルから、或は裏街の木賃宿から我社に送つて寄越す通信を載せて行きさへすればそれでよいのである。「中央公論特派員　谷讓次」の名刺が何處へ飛んで行くか。同時に谷君の姿が何處へ現はれるか、又どんな姿をして現はれるか――そんな事は尚更わからない。寢言は今でも英語で飛出すほど彼地の生活に馴れた谷君のことだから、そして日本人離れのした放浪癖を有つた谷君のことだから、敗殘の獨帝や、黑襯衣のムツソリニを驚かせる位は朝飯前である。何よりも谷君の今度の旅は、地球の平面を歩いて行く横の旅行ではなくて、社會のいろんな階級に出入し、社會層の上下を跋渉する縱の旅行であ

ることを注意して貰へばよい。

間違つても、昔からよくある「世界漫遊記」とか「歐米見聞記」とかいふやうな平凡な旅行記を書くやうな我谷君でないことは、誰しも知つてゐるところだ。新時代の青年の心を動かさずにおかない新感覺的才筆は天下何人も認むるところだからである。今、その谷君が世界を舞臺として立つたのであるから、其活躍は期して待たれる。これが沈滯せる我雜誌文學に一大センセーションを捲起すことも亦請合である。

出發は多分三月上旬である。五月號の本誌には已にその第一回を掲載し得るであらう。君はこの雜誌界未曾有の新試みに對して絕大な責任を感じ、この「新世界順禮」記を書き終るまでは絕對に他の雜誌に執筆しないと言つてゐる。――我親愛なる日本の讀書子にフレッシュな感激と興奮とを以て此紀行を提供せんために……

さらば、君が行旅に祝福あれ!

さよなら

谷讓次

僕、もとより一個のこすもぽりたん。

日本にあること暫く、その間、煤煙と潮音を思ふこと切々として矢のごときを抑へて來たが、こんど妻といつしよに再び世界行脚の途につく。旅においてはじめて自分のこゝろを抱くことの出來る僕にとつては、魚が水に歸るやうなものだ。

旅は詩だ。詠嘆のうちにおのづから生活の實感がなければならない。だから、一家を世界に移す――この放浪的良心をもつて、僕はあらゆる經緯度の交錯を踏んで新しい地球をあたらしい眼で見直して來たいと思つてゐる。

僕の旅行鞄はびつくり箱だ。何が飛び出すか――そのすべては本誌をとほして諸君のまへに踊らせてみやう。諸君が驚くか、驚かないか――とにかく僕は出かけてゆく。

では、大きな聲で「さよなら!」

―（一九一頁より）―

「新聞雜誌は政黨や政治家の惡口を云ふことのみを以て能事としてゐる。モ少し理解と同情とを以て見て貰ひたい」

この言葉を聞いて啞然とするのは吾々のみではあるまい。教育の必要は一般民衆よりもさしづめ此方面にありはすまいか。地盤と選擧費用の捻出に腐心する暇に、せめて本號だけでも熟讀されんことを望む。

▽

新興政黨の演說會が何所へ行つても盛んで眞面目な聽衆を迎へてゐることは、注目すべき事である。その得票數などは問題でない。問題とされるのは寧ろ既成政治家側にある。彼等が新有權者の投票をどれだけ有ち得るかが興味だ。

▽

兎に角、決勝點ももう眼近かである。吾々はその結果を冷靜な目で批判したい。

◇

特權議會の解散に依つて、なんとなく世間が賑やかになつた。突如として押寄せた普選の波に、世の中がざわついてゐる時に、疾風迅雷的に本誌の普選號が世に送り出される。この内容を見られたら、その努力を買つて頂くに充分だらう。明るい世界が展開して來るやうに思はれて、一層吾等は英氣にふるえる。それに新年號あたりからは賣行も非常にいい。吾等の努力、いゝ雜誌、素晴しい賣行、この三つが三位一體となつて、颯爽たる姿で讀書界の波に乘り行くであらう。

◇

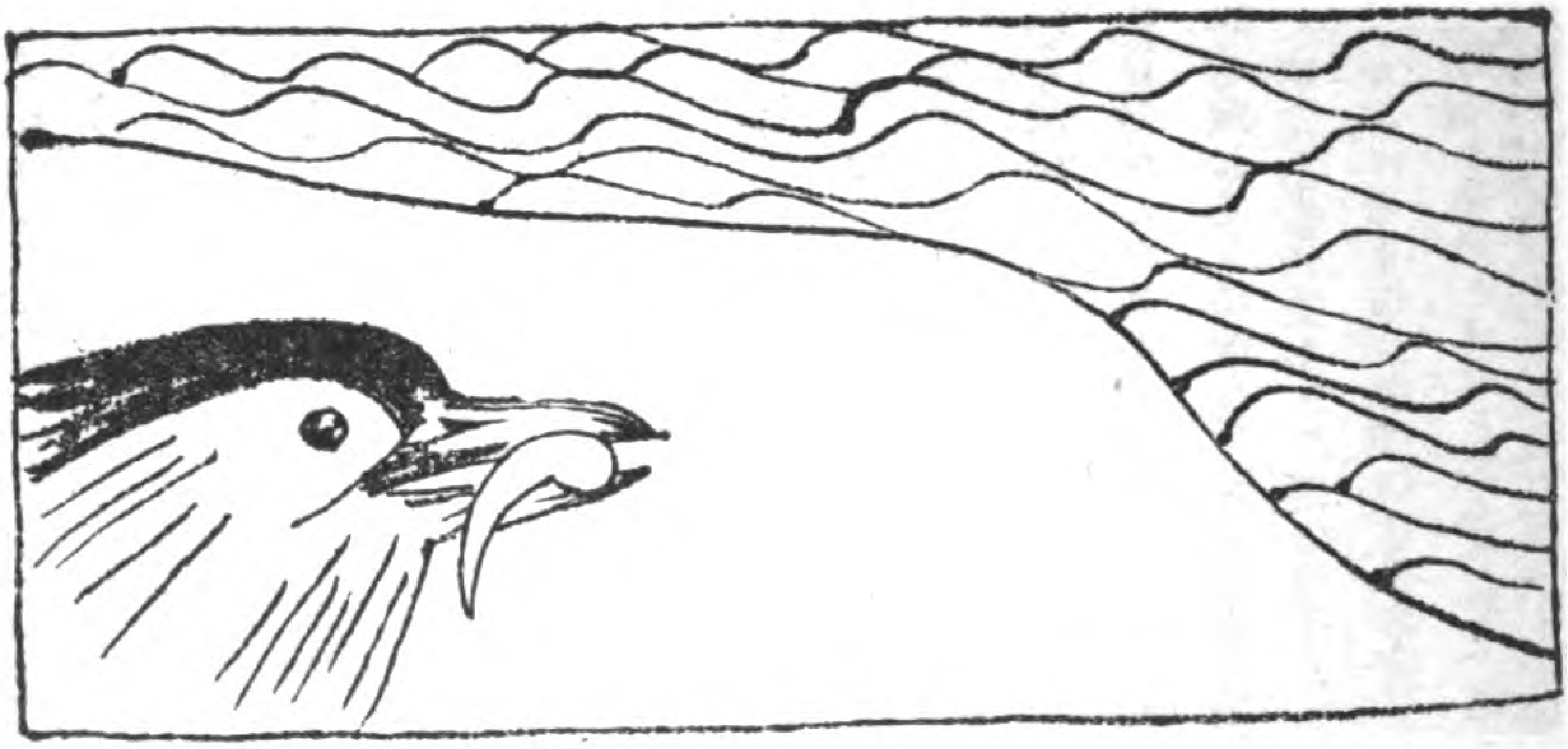
八ポイント欄の投稿は隨分來るが、どうしたものかこれといふものが少い。それにどれもこれも古臭い考證ものばかりなのはどうしたものだらう。考證もの決して斥ける理由はないが、なにも新時代ぢやありませんか、時には淸新なものも、ふるつて投稿して下さい。

×

新聞廣告のことについて一言したい。新聞廣告は雜誌の出來を知らせるのであるから、馬鹿げて大きい廣告は必要なかりさうなものだが、そこは矢張り競爭心理で、今では内容の如何よりも廣告面の大小で競爭してゐるやうな奇觀を呈してゐる。

本誌などは比較的其埒外に在つて其競爭圏内に卷き込まれないやうにしてゐるが、それは經濟的關係もあるので、出來るならば大きい廣告も出したいと思ふ。それは世が斯ういふ風であつて見れば、内容がいかに優れてゐても、活字が小さいために内容の貧弱さをまで疑はれるやうでは寄稿者に對しても濟まないと思ふからである。

そこで一寸お斷りしておくのだが、かうなれば勢ひ已むを得ないから、新聞はどの新聞にも廣告をしたいのは山々だが、經費の關係でさうはゆかなくなつて來たことを諒承願ひたいと思ふ。從來掲載してゐた新聞の中で一つ二つ掲載しない新聞ができて來るかも知れない。これは讀者諸君にも御注意願ひたいし新聞社の方にも御諒承願ひたい。少くとも當分の中のことだから。



海人族

(海洋年代記)

今東光

松丸太その他の材木を滿載した青雲丸は、膨らんだ船腹を病氣にかゝつた芝生のやうな海にどつぷりと浸し、船足も順調に針路を船籍港に向けてゐる……

青雲丸は、九月に熱田港を出帆し、すつかり積荷を終えて廻航の歸路に就いた。彼女は毎日、飽きるほど連翹色の海ばかり見て航行した。北海の深い鉛色の海に鯨や飛魚を見てゐる間はよかつた。しかしながらその海洋は必ずしも安全だといふことが出來なかつたのである。

彼女が北海道の西海岸の沖合を通過する時に、何度も濃厚な霧に襲はれた。汽笛を吹きならしながら目隱しをされたやうに速力を減じて、のろ〳〵と探り歩きをし

なければならないこともあつた。

船乗りは硫黄島のやうな魂を持つてゐる。それなのに彼女は、何週も南西の凄まじい風が吹く時には、港寄りの錨地に避難しなければならなかつた。さうして此の航海の一番危険なことは、想像することも出来ないやうな激流のために、時として頑丈な錨鎖をさへ切断される惧れのあつたことだ。

しかしながら軈て何日振りかで、船乗り共の友達である白いカラーをした意氣な鷗を見ることが出來る。

……次第に澤山の鷗を見た。

「内地だぞツ」

誰かゞマストの上で叫んだ。

彼等は本州の最北端である龍飛岬を遠望した。さうして此等の乗組員の無數の瞳は、禿げ上つた額のやうな龍飛岬の險峻な断崖を見ることが出來た。そこに屏風を開いたやうに屹立する岩石に、ラムネのやうに奔騰する丈餘の怒濤を見た。海鳥の糞のために灰白色に塗りこめられた巖石の上に、强靭な肉體を乾してゐる男と女を見た。さうして東方の山腹に何時も寂しさうに佇んでゐる地方気象風標さへ、レンズの奥に懐しく眺めるのであつた。

暗愚と古怒と残忍と吝嗇で肥り過ぎるほど肥つた船長は、股擦れのために出來た太腿の水膨をズボンの上からぼり〳〵と掻きながら、何時ものやうに船橋をこつ〳〵と靴音立てゝ歩き廻つた。

さういふ時、機關長は殆んど部屋から出なかつた。强烈なアブサンのために眞赤に膨れあがつた苺のやうな鼻を持ち扱ひかねてゐた。

コムパクトの蒐集癖のある事務長は、女のやうに色が白い。

獰猛な水夫長は、二割の利子で水火夫達に金を廻してボロイ事をするか、咽喉チンポが見へるほど大きな眞紅な口を開けて、誰彼の差別なく怒鳴り散らした。

賄長は、どうしたら乘組員の食慾を減ずることが出來るかといふ事ばかりに腐心してゐる。ヴイタミンの有無、その榮養價は彼の關心するところでない。腐つた牛の脂で彼等の食慾を滿して置いて、食料の頭を刎ねることが彼の職責となつて居る。

たつた一人のメートが船長代理をする。

傴僂の舵夫は、憂欝な顏をしながら、英利西人のやうにパイプを口から放したことがない。

獸のやうな水夫達は、寢て、食つて、酒を呑んで、博奕を打つて、淫らな女の噂話より他には何にも興味を感じないもののゝやうである。

かふして千九百年代の鐵の舟が、蕩揺する激浪に揉まれながら、目路遙かな水脈を殘して退屈な航海を續けてゐた。

「コーター・マスター。わしは少し休むからな」

「はい。船長」

「今直ぐチーフ・メートを寄來すから、よく見張してくれ」

『はい。船長』

『よしツ。そこでと。良い船長といふものは、晝夜の差別なく善良な見張(ワッチ)を置くことを怠るもんぢやない。わしは自分では可成り良い船長だと思つとる。お前はさうは思はないかね。いや。返事をせんでもよろしい。お前はわしのやうな嚴格な船長を見たことがあるまい』

『はい』

『しかしさう言へば、お前も長いこと船乘りをやつとるな』

『仰有る通りです。船長さん』

『船乘りはそれで好いのだ。アントワープに居るわしの知人のアイルランド生れの水先案内人(パイロット)は、四十七年間陸へ上つたことがないと言ふとつた。船乘りはそれが好いのだ』

『しかし。船長さん………』

『おい〳〵。わしはお前の意見を徴してるのぢやない。兎に角わしは休息しよう』

船長は六分儀を小脇に抱へ込むと、よた〳〵と家鴨のやうにデッキを下りて行つた。

船長は、自分の部屋に這入ると、荷主の船貨以外に積載して來た自分の貨物の價格に就いて思ひをめぐらせる。熱川港に戻つたら樺太で買ひ込んで來た蝦夷松や、椴松(とゞまつ)や、鮭や、鱒や、昆布などを出來るだけ高く賣り拂はふ。さうして彼は算盤を太い指で彈きながら、いつかしら若い妾のことをうつゝに想ひ描いてとろ〳〵と居眠りをはじめた。

さういふ時、誰かゞ機關長の部屋の前を通ると、

『ボーイ。水を吳れ。水を…………』

と怒鳴つてゐるのを聞くだらう。船長よりも年を取つてゐる機關長は、松脂臭い乾いた竿を嘗めづり廻しながら、性交

不能に陥つてゐるばかりでなく、そのために彼の胃袋は燃えさかつて、何時死ぬかもわからないほど危険な中毒状態にあつた。さうしては口癖のやうに

『ボーイ。水を呉れ。水を………………』

と喚いてゐた。

甲板では傴僂の舵取りが木像のやうに無表情な顔をして、舵輪(ホイール)をくる／＼廻してゐた。

その目の前を、背の高い一等運轉士が腕を背に組んで、彼方へ行つたり此方へ來たり、時々は望遠鏡で陰慘な空の下に、腕を伸したやうな陸地を眺めながら歩き廻つてゐる。彼は暫らくして思ひ出したやうに聲を低めて言つた。

『おい。君。この船に行はれてゐる不正を、君はどう思ふかね』

『不正ですつて。しかし當り前えのこつてさ』

『何故だ』

しかし舵夫の返答にむツとした彼は更に言葉を繼いだ。

『しかしそんな馬鹿なこつてあるかね。何が當り前なもんか。俺達は斯ふして生命を投げ出して働いてゐるんだぜ』

『だから月給を貰つてるぢやありませんか』

『それこそ當り前のことだ』

『メツサン。今流行の文句に大分似てますね』

『さうでもないがね………………』

『そんな事を言つたら船長さんはどうなるんです』

『ふん。船長かい』

　メツサン（メートさんの意）は冷笑するやうに顎をしやくつた。

『彼奴だつて氣に食はんさ。樂をしちや水蜜桃のやうな妾の頰ツぺたを舐つてやがる。船主や荷主の眼を胡魔化したり、俺達の月給の頭を刎ねちやあ獨りで甘い商賣をやらかす………』

『おツと。聞えますぜ。メツサン』

『何あに平氣だよ。本當のことを言つてころんぢやないか。俺にや何しろ不平だ』

『當り前のこつてさ』

『それでも當り前の事だつてえのか。君はまさか救世軍ぢやあるまいね』

『さうですよ。メツサン』

『へえ。今時分にや珍らしいね』

『よく御存知の癖に。メツサン。しかし貴方だつて船長になつたら同じ事をやりますよ』

『どうして』

『私は何遍も、そんなことを此の黒い眼で見て來たんですぜ。好いですかね』

　彼はゴホンと脂臭い咳をしながら、にや／＼と笑つた。

『メツサン。私の言ふことに間違ひはありませんよ。貴方のやうな方と私は何度も乘り合したことがありました。その度に誰でも不思議に同じ様なことを呟きますさあ。しかし私が何時までも舵取りをしてゐる間に、そんな方はどん／＼立派な船乘りになりました。それがどうです。皆なあの船長と同じ様なことを繰り返してゐますよ。船大工にや手前の調度を無

貸で拵へさせる。自分の商賣をする。月給の頭を刎ねるのは勿論のこと、水火夫長より利廻りの好い高利で、私等に金を無理に貸しつけます。さうして妾が出來る頃にや、地所や邸宅が出來るつて寸法です

傴僂の舵取りは、うちのメッサンも今流行の病氣に取り憑かれてゐると腹の中で思ひながら、彼の見て來た死太い人生觀をゆつくりと述べた。

『俺はしかし、さういふ不正と不合理にや、もう辛捧する事が出來なくなつたんだ』

『へえ。結構な御氣性ですね。ぢやあ一體、どう仕様つてんです。メッサン』

彼は外套の襟を立てながら囁いた。

『ねえ。どうすることも出來ないぢやありませんか。私だつて、これで乙種一等運轉士の免狀を持つてゐるんです。そりや誰に見せたつて恥しくない免狀ですぜ。それでも未だにメッサンにやなれませんや。いや。なれないこともないでしようさ。一枚の免狀がある資格といふ奴でね。しかし斯ふやつてコーター・マスターしてゐる方が結局お金になるんです。まして女房』

そこで舵取りは、につこりと髭の中から白い齒を出した。

『女房なんぞ持つ身にや、それより他に現在ぢやどうすることも出來やしません。それが當世といふもんですぜ』

『馬鹿言へ』

メッサンはきらりと、瞳を光らせると早口に反駁した。

『何が當世だ。そんな退嬰的な奴等ばかり揃つてるから、乙種免狀を持つてる海員の就職難が來るんだ。おい。今は高等海員の就職難が來てる時代だぜ。そ、そ、そりや一杯の石炭の焚き方ひとつで、如何したら効率を擧げることが出來るかと、より苦心し、より研究する普通海員の必要は言ふ迄もないことだ。しかし、しかしそれ以上、優秀な高等海員は或は

倘は更ら必要以上なんだ。俺は』

『しかし海員協會は――』

『何ツ。君は今、海員協會つて言つたね。海員協會は船舶職員改正運動をしてゐるといふいか。ところがそんなものは駄目だ』

『何故ですね。メッサン』

『そりや一時の糊塗彌縫といふもんだ。そりや海員の改正問題も好い。が、それ以前にもつと大切な問題があるのを閑却してゐる』

『それは何でしよう』

『海員の無數なる生産過剰だ』

『そりや然し、私共の知つたことぢやありませんね』

『さうさ。しかし誰か此の問題を片付けなければならないんだ。結局、失業者問題は何時まで經つても未解決のまゝだらうぢやないか、俺は君に、實際の統計的な數字を見せても好いと思つてゐる位だ。嘘だと思ふなら、後で僕の部屋に來てみたまい』

『もう交替の時間ですぜ。メッサン』

『さうだな。ぢや後で俺の部屋に遊びに來たまいよ』

舵取りはこくり〳〵した。

メッサンは高い背を折り曲るやうにして、ブリッヂの狹い急な梯子を猿のやうに素早く驅け下りた。

夜。

舵取りは約束通りメッサンの部屋を訪れた。

砂濱のやうに白ッぽいペンキ塗の部屋に、椰子の樹のやうなメッサンが所在なさそうに彼を待つてゐた。

『やあ、かけたまい。コーター・マスター』

『へえ。有難ふ…………』

メッサンは煙草をすゝめ、自分はウキスキーに炭酸水を割つたのを甘さうに飲んだ。

船窓の圓い窓の外は、暗い夜の波浪が泡沫を叩きつけてゐた。バンカーの貨物が、ごろり〳〵と轉るやうに揺れて居る。

『さう〳〵…………君は先刻、乙種一等運轉士の免狀を持つてゐると言つたね』

『え』

『さう言へば、俺だつて乙種船長の免狀を持つてるんだぜ』

『左樣なんで…………』

『御同樣に、もつと好い船にや乘れる身分なんだ。なあ君』

『お互ひにねえ』

『どうかしなくつちやならないと思はないかね。え。思ふだらう。』

『え』

『だらう。ぢや眞面目に聞いてくれたまい』

『聞きますともサ』

舵夫は改まつて鼻汁をチンとかんだ。

『好いかね。商船學校ぢや、あの一九一四年の大戰爭の最中に、六十名宛つまり四年間に二百四十名の生徒を採用してゐたんだ』

『ほう。そりや大變な數ですね』

『これは二十世紀末のヨーロッパを傳染病のやうに風靡した冒險思想の影響だと言ふ人もあるんだ。尤もそれはどつちでも好いがね』

『左樣』

『それが今では四十名になつて仕舞つた。即ち四年目に卒業して海員になるのは百六十名になつて仕舞つたんだ』

『やれ〳〵………』

『それなのに地方商船學校は斯ふいふ社會とは、まるで沒交渉に人員を採用増加してゐるんだよ。その證據には、隠岐商船水産學校と仁川商船學校を新に設立した。それから鹿兒島商船學校の航海專修科と、廣島商船學校の機關科を新設した。斯ふして海員は増加する一方だ。呪はれた海事思想の普及だ。俺の意見だと、地方商船學校はとりもなほさず失業者濫造所だ。俺達は次第にその影響を受け、生活が壓迫されて來るのは當然だらうぢやないか』

『へえ。さうですかね。そいつはやり切れませんな』

荷物を背負つたやうに椅子に淺く腰をかけてゐる舵取りは、大きく背いて見せて困つた表情をした。

『俺達貧乏人は何時まで經つても幸にやなれつこがないサ』

メッサンはコップの底に殘つてゐる透明な液體を、ごくりと呷ると嘆息して言つた。

『それ〳〵。私の哲學も、それに相違ありませんよ。メッサン』

『比較的富有なブルジョワの倅が這入る高等商船學校は、官費で生徒を養成してくれるんだ。さうして練習船を建造する段になると、百萬圓の巨額だつて、政府は何の苦もなく捻出する。それは俺達の夢にさへ見ることの出來なかつた幸福だ。その維持費にしたところで、少くとも數十萬圓の費用を支出するんだ』

『ほツほ。恐ろしいもんですね』

『さうさ。それから彼奴等は大概は郵船會社とか、商船會社とか、東洋汽船とかいふ大會社に高級で傭はれることになつてゐる。だから俺達なんぞは、社外船のボロ船にしか乘れやしない。うちの船長だつて、何時も船乘らしい法螺は吹いてゐるが、あゝ見へて香港から先は知りやしないんだ。ボロ船だよ……實際高が知れてるぢやないか』

『こんな事を言ふと、またメッサンに叱られるかもしれませんが………』

舵取りはおづ〳〵とパイプに煙草をつめながら言つた。

『それだつて、好い方ですぜ。メッサン』

『さあ。そこだよ。乙種免狀連の就職難つて奴あ、そのボロ船だつて一度取りはづしたら、滅多に廻つちや來ないんだ』

北國の海は濕氣と靜寂の匂ひを漂はせて、彼等の話はしんみりと理に落ちて行つた。

こつ〳〵。と扉をノックする音がした。

『誰だ。お這入り』

扉が開くと

『今晩は。メツサン』

オレンヂ色のランプ・シエードに幽かに照らされて、物凄い顔をした水夫達が三人、思ひがけないほど柔しい聲で挨拶した。

『やあ。這入れ。どうしたんだい』

『へえ………』

『どうしたんだと聞いてるんだ』

水夫達はおづ〳〵と部屋に這入ると、椅子の片影に、小さな舵夫の瘤を逸早く見出した。

『今晩は。コーター・マスター』

『御同様に今晩は。どうしたんだい。お揃ひで。え……』

すると突然

『此奴が――――』

と一人の氣の好さそうな水夫が、恐ろしく頑固な身體付きをしたもう一人の水夫を指して言つた。

『水夫長（ボースン）に擲られたんで』

『うむ。また彼ん畜生が暴れたのか』

『いゝえ』

『ぢや。どうしたんだ。言つてみろ』

『はい。實は、わしが』

とその胸毛の生えてゐる水夫は、情なさうに眉を顰めながら言つた。

『わしは博奕の資本を五圓七十錢、ボースンに借りたんで』

『何所で』

『へえ。樺太でした。その時は小ツぴどく負けたもんで、上陸することさへ出來ねえ始末でしたつけ』

『そんな事はどうだつて好い。それから』

『へえ。するてえと今夜、ボースンは貸した錢を返せつて言ふんですけど、氣まりが惡いほど無えんでさ。まつたく一文だつて持ち合せてゐねえ場合だもんで』

『おまけにね。メッサン』

ともう一人の可成り年を取つてゐるらしい左の手首に錨を刺青した水夫が引き取つて言ひ添えた。

『利子の付いてる錢だから七圓と一寸許りだつて言ひやがるんでさ、それぢや餘りだからつて、わしが口を利いてやると、傍から口を出すなツて、わしの面がひん曲るほどひツぱたきやがつたんでさ』

彼等は口々に水夫長の横暴を並べ立てた。しかし彼等は口汚く水夫長を罵りながら、メッサンの差すコップのウヰスキーを舌舐めづりしながら咽喉を鳴らして呑んでゐた。

『彼奴は船長さんのお氣に入りだからな』

舵取りは先刻から、この光景を眺めながら、胸許が苦しくなつて辛ふじて言葉を挿んだ。

『さうとも』

一人の水夫は、擲られた頬に殘つてゐる海盤車（ひとで）のやうな赤い蚯蚓脹れを撫でながら

『それに彼奴の力ぢや勝てツこがねえ。喧嘩ぢや駄目だ』

『何しろワイヤー・ロープを引きちぎるんだもんな』

『フ、、、鱶のやうな畜生さ』

メッサンは青白い眼を据えて默つて聞いてゐたが、少しばかり身體をふら〳〵させながら立ち上つた。

『ど、ど、どうするんです。メッサン』

傴僂の舵取りは氣弱くなりながらも、周章て一等運轉士の腰まはりに抱き付くやうにして椅子から飛び下りた。

『大丈夫。大丈夫だよ』

呂列が廻らなくなりながら、メッサンは滅茶苦茶に手を横に振つた。

『おい。お前達。安心してろ。今に俺が船長になつたら、そ、そ、そんな横暴はさせないんだ。俺が船長だつたら、あんなボースン風情に、一言だつて俺様の前ぢや口を開かせやしない。おい。貴樣。貴樣達。そ、その七圓なにかしは俺が出してやる。俺がそれをボースンに支拂つてやる。好いか。プロレタリアの味方の俺が出してやる………』

『どうも有難ふ御座います。メッサン』

『いや。禮は言ふな』

『しかしメッサンが船長さんになつたら、俺達はそれこそ萬々歳だな』

『おい。貴樣達それを心底から言つてるのか』

『メッサン。わし共はお世辭を言ふ人間でしようか』

『さうか。本當にさう思ふかね』

『まつたくでさ』

『それなら愉快だ。あゝ好い心持ちだ。なあ。コーター・マスター。今夜は實に愉快だね』

メッサンは、どたりと椅子に腰を落すと雛の子のやうに首を動かした。さうして快い酩酊は彼を少しばかり放心狀態に

置いた。

『おい。俺とコーター・マスターは今まで眞面目な問題に就いて話し合つてゐたんだ。その代り少し氣が沈んぢやつたよ……』

『へえ。どんなお話なんです。一體』

『こ、このコーター・マスターに聞けば解るさ。俺は海員の失業問題といふ大きな題目に就いて、聊か俺の意見を開陳してみたに過ぎないんだ』

『成程。そいつあ、わし等にとつても重大な問題だ』

メッサンは、むくりと頭を擧げると、また立ち上つて言つた。

『さうだ。さうだつたよ。好いか。おい、皆な水夫を呼んで來い。俺が演説しよう』

その時

『メッサン！』

と舵取が横から口を入れた。

『これだけの人數だつて充分ぢやありませんか』

『さうか。まあ好いさ。聞きたい奴だけ聞くが好い。おい。俺は醉つてるよ。しかし醉つてても頭はしつかりしてゐる心算なんだ。最近の統計表に現はれた海員の就職並びに失業者は、これだ』

メッサンは、上着のポケットや、机の上をきよろ〳〵と探し廻つた。

『統計表ですか』

『さうだよ。コーター・マスター。僕は確かに此所に置いたつもりだが』

「私が持つてますよ」

「あ。即ち、これだ」

彼は、ひつたくるやうにして急いで舵取の手から取りあげると、一葉の紙片を彼等の目の前に押しつけた。

甲板部

海技免狀受有者の求人數
5名
申込人數
30名
失職人數
25名

甲板部求人數
462名
申込人數
822名
失職人數
360名

機關部

免狀受有者の求人數
6名

申込人數
27名

失職人數
21名

水火夫

求人數
444名

申込人數
851名

失職人數
407名

事務部

求人數

401名
申込人數　968名
失職人數　567名

『この數字は何を物語るか。おい出鱈目ぢやないぞ。數は冷靜なもんだ。好いか。皆樣もよく聞いてくれ。合計一千三百十九名の求人に對して、吾々のカムラードは二千六百八十八名が應じてゐるんだ。それ等の悲慘な失業者共を、ど、ど、どう仕様つてんだ。俺は考へると悲しくなるんだ。俺は…………』

メッサンは椅子の上に這ひ上がらうとしてぐたりと首を垂れた。

『メッサン。危い』

舵取りは、はら〱しながら一等運轉士の身體が、まるで帆柱のやうにゆら〱蕩搖するのを氣づかつた。

『ハ、ヽ、未だそんなに醉つ拂つちや居ないよ。お。おい。お前達ッ』

メッサンはくわつと眼を見開いて、ふら〱しながらも仁王立になつた。

『皆を呼んで來い。俺は、俺は皆を集めて言ひ度いことがあるんだ。それはつまり――』

『不可ません。メッサン。それを言つちや不可ません』

舵夫は周章てメッサンを押し止め、彼の口に手を當てたいと思つたが、相憎く彼は半鐘のやうに背が高いので、腰のあたりで泳ぐやうな手付をして見せたに過ぎなかつた。

『闘はしないよ。つまり、つまりだ。げえッぷつまりだね。如何に青野丸に不正が行はれてゐるか。更に如何に健康であるべき彼女の脈搏中に不齊と結滞とが感じられるか。さうして如何に…………』

メッサンは何かしら自分の求めてゐる言葉を模索したが、舌が縺れてれろ／＼と譯の解らないことを口走り涎を垂らした。

『メッサン！』

舵取りは柄にもない大きな聲で叫んだ。水夫達はぴたりと話を止めて彼の眸を覗いた。その眸の奥は暗かつたが、奇妙にイリ・デ・フランセの谷のやうに柔和しかつた。

メッサンは何故か、はッと思ふとがくりと膝を馬のやうに折つた。さうしてげろ／＼と腹の中の物を吐き出した。

これらの樣子を紛見羅（ミクソスター）の事務長は、鍵穴から覗きながら磨硝子のやうな白い眼に、すつかり映し取つて居た。

明くる朝は、紺碧の空にきんきらきらと煌めいた太陽が、緑色の蜃氣樓を照らしてゐた。

風は凪いでゐたが波のうねりは大きい。さうして鯔（ぼら）が華麗な肚腹を人魚のやうに躍らせて跳ねあがるやうな日だつた。

宗谷海峽の脅やかすやうな濃霧や、耳や鼻をちぎるやうな颯爽の山風に、魂まで緊縮された青野丸の乘組員達は、洋々とした海洋に心を押つ開いてメンハッチの上で思ひ／＼に笑ひ興じてゐた。暫らくすると

『全員集れッ』

といふ船長の命令が下つた。

彼等は犇めき合ひながら甲板に勢揃ひした。象皮病患者のやうな船長は、猛悪な人相をした、まるでスコツトランドの山奥からでも出て來たやうな水夫長（ボースン）に助けられながら、彼等の整列してゐる鼻先へ横柄に立ちはだかつた。

『チーフメート』

船長は、びんと響くやうな大きな聲で一等運轉士を呼んだ。

『はツ』

メツサンは宿醉のづきん〳〵する顳顬に頭痛膏を粘つてゐた。船長の前に姿勢を正して立つた。

『君は、わしが誰だと思ふかね』

『…………』

『君は、わしが兼ね〳〵人一倍嚴格な船長であることを知つてる筈だ。ところで君は昨夜、船内の二三の馬鹿者共を煽動してゐたさうだが、そりや本當かね』

『はツ。しかしそりや』

『いや、わしは君の答辯を聞くために君を呼んだんぢやない。いゝかね。わしは事實を知りたかつたのだ。その事實が眞實でありさへすれば好い』

船長は、賤民に對するやうな冷酷な眼光を稻妻のやうに浴せると

『擲れツ』

と命じた。

ボースンは船長の命令を受けると、瓦を叩き破るやうな拳固で、メツサンの頬桁を思ひ切つて擲つた。よろ〳〵と蹌踉

いたメッサンはレールに掴つて辛ふじて轉ぶことを免れた。

『何をするツ。野郎』

『船長の命令だ』

『畜生ツ』

メッサンは眞蒼な顏をして歯を喰ひしばり、猛然と水夫長の脇腹に鋭い突きをくれた。

『何をツ』

水夫長は、まさかメッサンが抵抗するとは考へてゐなかつた。彼は瞬間、はつとひるんだが、立ち直るとメッサンの少しうつむけた頭を滅茶々々に擲つた。彼等はしかし、暫らく擲り合ひをした。軈てメッサンは獰猛な水夫長のために、鼻柱に素敵もない鋭いメリケンを食はされ、鼻血をどツと流すとつんのめるやうに前にどたりと打つ倒れて仕舞つた。さうしてメッサンは動かなくなつて仕舞つた。船長は、さうしたメッサンをぢろりと見下すと、さつさと自分の船室に戻つて行つた。

『おう。手前等、誰か手出しをしようツてんか』

ボースンは水夫達の顏を等分に眺めながら

『よう見とけ。誰でも斯ふだ。船長の命令に背いたり、不穏な行動を取るてえと、誰でもこんな目に會ふんだぞ。これが船乘りの掟だ。ふゝん。さあ見やがれ』

水夫長は苛々した目玉で睨みつけてをいて、冷嘲を交へて申し渡した。さうして彼も亦、後をも見ずに大股に歩いて行つた。

暫らく經つてメッサンは起きあがることが出來た。

『ひでえ事をしやがる………』

偏僂の舵取りは、舵輪につかまりながら甲板上の出來事を眺めてゐた。五六人の水夫の肩につかまりながら、メッサンも亦甲板から運ばれて行つた。

數日後の夕景。青雲丸は熱田港に入港した。

帆柱よりも高い日本化學肥料會社の大煙突から、もく／＼と黑い煙が名古屋の空を淡墨色に刷いてゐた。導燈から約三海里の距離に近づいた時に、青雲丸は三導燈を一線に見て、靜かに西突堤寄りの繋船浮標の傍ににじり寄つて行つた。町の騷音が海を渡つて手に取るやうに聞えて來た。胡麻をばらまいたやうにランチや荷足舟が散在する中を、船長は臆病氣に彼女を操つた。青雲丸の傍では北國汽船會社の船や、郵船の近海航路船が、から／＼と喘息を患つた人のやうに機械を動して荷役をして居る。足高蜘蛛の手足のやうなウインチが、がつしりと石炭を掴んでは船に運んでゐるのもある。さうしてペンキの剝げた汚い船は石炭積込のために五や十度も傾いて、黑坊のやうに眞黑な顏をした人間が、夕靄の中で何か聲高に叫んでゐた。給水船は、咽喉の渇いた船に水を飮ましてやつてゐる。その傍では砂を嚙むやうに退屈しながら碇泊してゐる帆船もある。『名古屋市の燈火が瞬きするやうに明滅してゐる。汽笛が鳴つた。波の音が俄かに靜かになつた。青雲丸の船內もがや／＼と活氣づいて賑はつた。雄牛の叫ぶやうに銅鑼が鳴つた。檢疫の汽艇が白い波を蹴立てゝやつて來た。さうして彼女は長い航海のために錆びついた錨を、海底の軟泥に食はせた。

會社の重役が毛皮の襟の付いた外套を着て船に來た。船長は甚しく上機嫌だ。彼は土耳古の王樣のやうにくびれた顎を顫はせながら葉卷を噛んだ。シヤンペンの代りに黄金色をした日本酒の祝杯を擧げる。偏北風に鼻の感覺をすつかり取り落した商人達は、舌たるい言葉を使ひながら、狡るさうな眼を光らせて船長の膨らんだ腹の中を觀破しようとする。しかし實際は船長は一刻も早く上陸したかつたのである。

さういふ時、機關長はもう夙くに、ぺちやんこに潰裂した胃袋をサンパンで運んで仕舞つてゐた。

船長が上陸してから、遲くなつて舵夫は上陸の支度をした。彼は青鬚を奇麗に剃り落した。妻の頬を痛くしないためである。それから新らしいネクタイをかけた。玉羅紗の外套を着るのが一苦勞だつた。何故なら背中の荷物が別式の外套にも無理な點が多かつたのである。彼の右のポケットには古い薔薇の根のパイプがある。左のポケットには月給がそつくり這入つてゐた。彼は自分の部屋に鍵をかけると

『メッサン』

と運轉士の部屋の扉の前で聲をかけた。しかし中からは何の應へもなかつた。

『もう上つたんですか。メッサン』

彼は拳でこつ〳〵と扉を叩きながら、內心少し不平で言つた。それでも何の返事もなかつた。彼は軈てあきらめたやうに其所を立去つた。さうして暗い海を一葉のサンパンに搖られて運ばれながら、早く土を踏みたいと願つた。

舵取の上陸して行く後姿を見ながら、水夫長は頑丈な身體をゆさぶり立てて笑つた。さうして彼も亦美少年のボーイの手を痛くなるほどぎゆッと握りながら上陸した。

事務長と賄長とは肩を組んで港の女を買ひに行つた。

船の中はだん〳〵空ッぽになつた。

無精にベツトの上に寢てゐた運轉士は、猫のやうに欠伸をして起きあがつた。船の中は森閑としてゐる。當直の足音と鼠の騷ぐ音が聞えるだけである。彼は女が逢ひに來ると約束してあつたので、却つて上陸しなかつた。

扉が默つて開いた。

其所から若い女が風のやうに轉り込んで來た。メツサンはその彈力のある華やかな身體を、がつしりと抱き締めた。さうしてベツトへ運んで行つた。

……暫らく經つて女は言つた。

『貴方は妾を押し潰すのかと思つたわ』

メツサンは薄鬚を噛みながら指を洗つた。ベツドは素馨の匂ひとアルカリ性の芳香がした。

舵夫は暗い足許に注意しながら小さな戸を押し開けた。彼の綻びのある靴に蕁麻や、地獄草や、枯れた炭が引つかゝつた。戸はどうしても開かなかつた。

『どうしたんだらう』

兵器廠裏の淋しい町影から蟲の啼く音が湧き起つた。家内の灯が外に洩れないやうに、まるで窓といふ窓が釘付けにされてゐるのを見出した。

「何故だらう。しかし解らないこともない」

彼は古着屋で買つた運轉士の洋服包みをぶら下げて、隣りの家へ聲をかけた。

『今晩は。お主婦さん』

『どなたです』

『私です』

『どなたさんでしたつけね』

『私ですよ。お主婦さん』

『あゝ。お隣りの旦那ですか』

小さな窓が開いて灯が暗に水のやうに流れた。

『こんなに遲く起してすみませんね』

『いいえ、そんなことあるもんですか。お船の旦那』

『實は私の家内が居りませんが、もしや』

『おや。何にも御存知ないんですか』

『何にもとは』

『まあ。へえ。それがね旦那。お船が入る十日許り前のこと、お内儀さんは誰れにも默つて引つ越して仕舞つたんですよ』

『えゝ。何故でしよう』

『そりや妾にもわからないんですがね』

舵取りはそれ以上押して訊く勇氣がなかつた。

「さうですか。や。どうも……」

「いいえ」

さういふと小さな臆病窓が彼の鼻先でぴしやりと閉つた。彼は暗の中に立ち盡してゐた。貧乏な國には小さな帆前船も寄り着かないといふ格言が犇々と思はれた。どうすれば好いのか――彼はとつおいつして、また足許から湧き起る蟲の音に哀感をさへ誘はれるのであつた。

「お前さん。お前さんッたら。隣の旦那が歸つて來たんだよ」

「うむ」

「隣の淫賣が夜逃げをしたのを知らないんだよ。乾度。教へてやらうかね」

「うちつやらかしてをけよ」

暖さうな部屋の内部から簡拔けにそんな會話が聞えた。彼は泣き出したいのを堪へてとぼ／＼と立ち去つた。

きれ／″＼な夢ばかり見た彼は、船員宿泊所から、武平町の船長の妾宅を朝早く訪問した。海のやうな青く塗つた木造の洋館に、船長は彼の愛する若い玩具を藏つて置いた。舵取りはそこの玄關寄りの應接間に暫く待たされた。桃色の壁紙で張つた一方の壁に大きな青雲丸の油繪と、獨逸帝政時代の軍人のやうな風貌をした船長の寫眞が額にして飾つてあつた。彼はフリゲート型帆船の置いてある桃花心木の卓を前にして、甘い紅茶をぴちや／＼と飲んだ。

彼はぐるりと部屋を眺め廻して船長の心臓肥大症と、彼の旺盛な機能に就いて考へに耽つた。

「……………しかし俺も獨り者になつて仕舞つた。さうすると小金でも貯蓄して妾でも圍つてみるかな。いや／＼。それと

もそれは非常に有害なことでもあるんだらうか。けれども肥つた船長を見ろ。神様。私をも肥らしめたまへ………だ』

彼は昂然と頭を擧げて、もう一度、この女部屋のやうな應接間を眺め廻した。メッサンの義憤を瞬間感じた。さうしててら／＼と耀いた桃花心木の卓に映つた自分の顔は、ヨーロッパの貴女のやうに眼瞼が稍れてゐた。稍や暫らく經つて、壁一重の彼方で聞き慣れた船長の咳拂ひを聞いて、彼は椅子の上で魚のやうに跳ねあがつた。やがて彼は恥しさうに椅子に落着いた。さうして聞耳を立ててゐると船長の低いバスに交つて、鼻聲のからんだ艶めかしい聲が折り／＼聞えた。

『はゝあ。船長さん。格別今朝は朝寢をしてゐたんだな』

彼は瞬間、エロテイツクな想像を描いた。

『船長は今』

と彼は考へ續ける。

『その年頃から一種の肉體讃美をしてゐるんだ。肉感は確かに嫌惡すべきである。しかし肉體讃美は、この俺にだつて許されて好い』

彼は白蠟の人形を舐めるやうに、べろりと舌を出して唇を舐めた。

『救世軍一等卒の俺は、こんなことを知つてゐる。それは舊約書の列王紀略の文句だ。えゝと………ダビデ王年邁みて老ひ、寢衣を着するも温らざりければ、その僕臣等彼に言ひけるは、王わが主のために一人の若き處女を求めしめて、之をして王の前に立ちて王の左右となり、汝の懐に臥て王わが主を暖めしめんと、彼等すなはちイスラエルの四方の境に美しき童女を求めて、シュナミ人アビシャグを得て之を王に携きたれり。此の童女、甚だ美しくして王の左右となり、王に事たり。然ど王これに交はらざりき。…………ひよつとすると船長さんもダビデ王と同じ保温法をやつてるかもしれん』

舵取りはしかし、船長の顏を見たら何よりも妻の行方を搜索する休暇を貰ひたいと思つたが、手荒く扉が開き、そこに睡不足の機嫌の悪い船長を見た時に、その言葉は咽喉の奥へ引つ込んだきり出て來なかつた。

『何しに來たんぢやね。コーター・マスター』

船長はまるでブリッヂでのやうな調子で、椅子にも腰かけない立つた儘で、いきなり怒鳴つけた。

『お早ふ御座います。船長』

『言ひ給い。明瞭に。簡單に。君はわしの日頃の癖を知つてゐる筈だ』

『はい。實は昨夜、上陸いたしますと急いで家へ歸りましてです』

『おい〳〵』

『は』

『そんな當り前のことはオミットしてくれよ。誰しも家に歸るために上陸するんだからな』

『はい。相すみません。ところで手前の家に戻りましたところが、その家が釘付けになつて居りました』

『ほう釘付けに』

『はい。仰有る通りです。船長』

『だつて、そんな馬鹿な……』

『いゝえ。まつたくのところ本當なんでして。それで近所で問ひ合せましたところが、その手前の家内が逃げましたんで。はい。手前を置き去りにして逃げて仕舞つたんです』

『ほゝう。君を置いて引越したといふんぢやね』

船長はチヨコレート色をした葉卷に火を點じながら、椅子を引き合せて腰を下した。

『左樣でございます。船長』

『つまり君の妻君が、君を捨てて逃げたといふ譯になるね。さうぢやないかね』

『つまりさうなんで』

『君は妻君に逃げられた。いや。餘り器量の好い話ぢやないね。アハヽヽいや。これは』

船長はどうかして可笑しさを堪へ樣としながら、悲痛な顏色をしてゐるコーター・マスターの矮小な身體を見ながら、

その太鼓のやうな膨れた腹部をもく／＼と動かした。

『アハヽヽこりや可笑しい。いや。失敬。しかしこれは笑はずには居られないよ。君』

『ウフヽヽアハヽヽ全くお氣の毒だ。しかし奇拔な話には相違ない。君にはアハヽヽお氣の毒千萬だがハヽヽヽ』

船長は蟇蛙のやうに圓卓に凭れかゝつて身體をゆさぶりながら笑つた。

『御尤もで。それで船長――』

『何をそんなに笑つてゐらつしやるの』

扉の影で甘つたれた鼻聲を聞くと船長は益々笑つた。舵夫は先の見へない海原で人魚の聲でも聞いた時のやうに吃つとした。

扉が靜かに開いた。そこに朝の光りを浴びて立つてゐる艶の好い髮を少し亂した素晴らしい婦人を見た。彼は椅子から飛び下りると、身體を無理に二つに折つて窮屈なお辭儀をした。

黑い房々とした毛だ。狹いのが可愛らしい白い額だ。二皮眼瞼の艶やかな瞳だ。血液の循環の好ささうな紅い脣だ。船長の保溫器は確かに蒟蒻のやうにぶるん／＼した水々しい身體付きだ。

『おい。この男はわしの船の舵取りだ。それが、昨夜、女房に逃げられたんださうだ。フヽヽそれほど甲斐性のある舵

取り男だ。アハヽヽヽ、しかし凡そ滑稽な話だ。いや。滑稽と言ふと失敬ぢやね。しかし、しかし思ひ切つて笑はして貰はふ。アハヽヽヽ』

船長は椅子から腰を浮かし、眞紅な毒々しい色をした舌を、から〳〵から〳〵と輪轉機のやうに廻しながら、さも可笑しさうに笑ひ廻つた。

舵取りは先刻から、自分の目の前で笑ひ崩れる一個の肉塊を眺め、次第に悲しくなつて來るのをどうすることも出來なかつた。

『奥樣。お初にお目にかゝります。船長さんには兼ね〴〵お世話になつて居りましてす。早速で御座いますが、手前は女房の行方を探すために、少しばかりの休暇を戴きたいので御座いますが、どうか船長さんに、奥樣からも御口添えをお願ひ申します。奥樣』

『何ッ』

突然、ぴたと笑ふのを止めて船長は、彼の日に燒けた顔を穴のあくほど見つめた。

『は。はい。只今も……』

『君は何か言つたかね』

『はい。只今奥樣にお縋り申しまして』

『不可ん』

『は』

『碇泊期間だけが君に與えられた時間なのは、君も知つてゐる筈だ』

『はい。それはもう……』

『それ以上の休暇が取りたくば辭表を出し給へ』

『はゝ。しかし』

もう一度、彼が何か言はふとする刹那、卓越しに船長の大きな平手が、ぴしやりと飛んで來た。

『あッ』

傴僂の舵取りが頰を押へるのと、椅子から轉落すると殆んど同時だつた。彼は今度こそポロ〳〵と涙を流しながら、船長の妾宅から押し出された。

メッサンは女を連れて海邊の宿屋に暮らした。

夏場の盛る海邊の旅宿は、人目を避けるには格好だつたが、不意のかうした客のために開けた部屋の茶褐色の疊は饐ゑて女の腰卷のやうに甘酸つぱい匂ひがした。しかし窓の外は、紺青の版畫のやうな渥美灣の縮緬皺の浪が見へ、遙かな大空の下には柔い女の二本の腕を差し伸べたやうな知多半島と渥美半島とが眺められた。彼はしかし海を見ることに興味を寄せなかつたが、女は透明な海洋とオゾーンに昂奮しては、波に洗はれる夢を見ると言つたりした。けれども直きに退屈した。彼は次第に痩せ、女は眼の隈が黝づんで見えた。

『あゝ。退屈しちやつたわ』

女は腋毛が見へるほど腕を擧げて伸びをした。彼はきらりと神經的に瞳を輝やかすと

『もう歸りたくなつたんだらう』

と言つた。

『さうでもないわ』

『君は危險な性格だ。凝結して仕舞つたやうな男女愛には、直ぐに飽きて仕舞ふんだね。船乘りを好きになる女ぐらひ危險なものはない』

『だから退屈させちや不可いのヨ』

彼女は彼に身體を絡みつけながら言つた。海を戀する女の心を囚へることは容易なものではなかつた。メッサンは彼女の言つた言葉の內容を吟味せずには居られなかつた。彼は、こんなことを言つた。

『ノルマンデーの漁師達の間には奇妙なしかし極く有りさうな迷信が瀰漫してゐたさうだ。

『どんな迷信――』

彼女は窓から渫洋灣の青海波の上に點綴する古風な白い帆の上に瞳を遊ばせながら、たしかに如何なる種類の迷信も迷信と名付けられるものは幸福か不幸の案內となるものだと心で思つてゐた。運轉士は關はず話を進めた。

『それは傴僂男の背中の隆起の中にはラギュル、オリベル、トビエルなどといふ惡魔が棲んでゐると、まことしやかに信じられたんださうだ』

『まあ。だけどちつとも面白くないお話だわ』

『默つてお聞きよ。それが西暦七百四十五年の頃、法王ザシヤリーのために、傴僂男の背中の袋から、その惡魔共が皆な放逐されて仕舞つたさうだ。それからといふもの傴僂の男は、まるで馬鹿になつて仕舞つたさうだよ恰度君んところの駱駝男のやうにね』

『ふん』

『何がフンだい』

『そんな嫌がらせなんか、ちつとも應へないことよ』
『さうだらうともさ。何故なら、君はあの背中の愛すべき術を意識的に、また無意識的にいつも撫で廻したんだ。しかし君のやうに何時も刺激を求め、また同時に感覺的な女性は、愛撫な夫婦生活の中にあつては、あのやうな奇態な玩具は確かに必要かもしれない』
『さう〳〵。まつたくさうだわ』
彼女は手を拍つて喝采した。
『そして今、君にはあのたん術が必要なんだ』
言ひ終るとメッサンも亦欠伸を嚙み殺した。
『けれども』
と彼女はヴキナス型の乳房で張つた胸を開いて言つた。稀有の感受性がぎら〳〵と白く光つた。
『貴方には未だ本當に妾がわかつてゐないわ。そりや妾だつて妾自身がよくわかつてゐないんですもの。妾は少々の好奇心と遺傳過多を持ち過ぎてゐやしないかと思ふところもありますわ。妾は伯母の血をよけいに引いて仕舞つたのネ。恰度イタリー人が衣裝に對するやうな嗜好を、男に對して感じますもの』
メッサンは彼女の言葉に少しばかり辟易したのは事實である。
『その伯母さんのことを話して御覧よ』
『妾の伯母さんは十六回も御見合をしたんですつて。だからどんなに好奇心の强い女だつたかおわかりでしよう。伯母さんは妾の夫の留守中の生活を、それでゐて非難するの。けれども妾は伯母さんと同じ經驗をしたに過ぎませんわ。伯母さんは眼で、妾は皮膚で、その上に妾だけはその度毎に多少の愛着を感じながらですわ』

さう言ふと女は暖い日向に背を炙られながら小さい欠伸をした。

『御免なさいネ。欠伸ばかりして………しかし妾は本當に疲れてゐるんですわ』

『しかし君の機能は別に疲れてもゐないがね』

『何故なんでしよう。妾は屹度、結婚生活に疲れてゐるのかもしれませんわ。誰だつて類型的な夫婦生活には疲れるもんですわネ。疑ひもなく妾もその一人ですわ。あゝ。思ひ出しても倦き〱する………』

『しかし僕には　君がわからない』

彼は頭を抱へるやうにして言つた。

『それ御覽なさい。しかし何故――』

『そんな風な物言ひをしてゐると、君は確かにコーター・マスターの夫人だ。僕は姦通といふ罪の意識を頻りに感ずる。けれども君は、まるで淫賣婦のやうなことを言つたり、したりする』

『その、どちらもだわ。屹度』

『そんな……』

『妾は伯母さんに引き取られて暮しましたわ。伯父さんは聖書を讀むことと、オルガンを彈くことを妾に敎へてくれました。その上伯父さんは、誰も人の居ないところだと妾の唇に接吻をしましたわ』

『そりやひどい話だ』

『いゝえ。それが本當なんですわ。小娘の妾でしたけれど、妾はだから何にも知らない娘ではありませんでしたわ』

『そ、そ、それから』

『それから何もありませんわ。その頃、あの傴僂の夫が太鼓を打ち鳴らして居りました。彼は伯父さんの隊の何事にも法

げない勇氣と根氣とを持つた一兵卒でしたが、軈て妾の好奇心に乘じ、妾を伯母さんから持つて行つたのです。そんな顔をなさるもんぢやありませんわ。そりや妾だつて、誰だつて小娘は、自分を掠ひに來た場合、少しは掠はれてみたいものなんです』

『成程』

彼は、女の道德上の柔軟性を責めることは出來なかつた。

『貴方だつて、かふして妾を掠つてるぢやありませんか』

彼女はニラ〱と身體を反らして哄笑するのであつた。

鮀夫は、妻を失つてからめつきり心が弱つた。

彼は碇泊してゐる青雲丸の船室に寢泊りをしたり、時としてはタラップの階段に腰をかけて靴下のつくろひをしたり、パイプをくわへては熱田港の築港工事を憮然と眺め暮らした。內港と外港とを決定する東西の兩突堤は蟻のやうに人がうごめき、浚渫船はヘドを吐くやうに、どす黑い軟泥をげろ〱と吐いてゐた。

『コーター・マスターさん。元氣がないぢやありませんか』

宿直の當番や、博奕に負けた水夫や、それ等の金を失つた荒くれた男達の異常な性慾の對象にされる可愛らしい船室ボーイなどが、たま〱聲をかけると

『わしは初から元氣なんてありやしないよ』

『しかし馬鹿に弱々しいぢやありませんか』

『ふん。風船玉が凋んだやうなもんだ』
彼は不機嫌にさう答へた。
『おい。くれぐれも言ふがな。わしをうツちやらかしといてくれ』
さうして彼は浚渫船を見る度に、自分も吐きたい衝動を感じた。

或る日曜日の晩、彼は珍らしく短い外套を抱へて、ゆらゆらするサンパンに股を開いて立ち、上陸した。
『おやおや。コーター・マスターが陸へ行くぜ』
二三人の水夫達は青雲丸のレールに凭れて、のどかに黄金蝙蝠を吸ひながら、その敬虔らしく見へる舵夫の後姿を眺めた。

彼はサンパンから一度振り返つて見た。
汚らしい老朽船の青雲丸は、しかし今では此の寡夫になつた舵取りの眼からは悲哀を帯びた艶色をさへ持つてゐるやうに懐しく顧みられた。この感情こそ船乗りのものであつたらう。
彼はサンパンが桟橋に着くと、身軽に陸に飛び上つた。
彼は電車通りを注意して歩いた。夜店の並んでゐる巷路を抜けた。カツフエーから胸をむかむかさせるやうな油の煮える匂ひが流れた。親工場のある通りや、女郎屋町を、ひたもの歩いた。
『お船の旦那………』
彼は怪し気な笑顰を見せる車夫を睨みつけた。女房に逃げられた男の見たそれ等の街の顔は、無禮にも歪んだ嘲笑を泄

らしてゐる。

彼は、かすかな太鼓とタンバリンの音を聞いた。彼は愚かな廻顧的な感情を捨てゝ仕舞ひたいと希つた。さうしてとある工場の拔け道を拔けた時に、その工場の裏の小さな廣場に一塊りになつてゐる救世軍の街頭傳道の一隊の眞正面に立つた。

『止めろッ』

『神樣。彼等を許してやつて下さい。彼等はその罪を知らない者共であります……』

傴僂の舵取りは喝ッとして叫んだ。

『能ふところなき天にましします父なる神よ……』

『止めろッ。嘘吐き。止めろと言つたら止めろ。馬鹿。畜生』

舵夫はよろめきながら叫び續けた。

『もし〳〵。貴方は酩酊してゐらつしやる。どうかお靜かに願ひます』

『何ッ。わしは一滴だつて飮んで居やしないよ』

『いゝえ。そんなに酒臭い……』

『君は何だ』

『私は救世軍の一兵士であります』

『ふん。さうかね。俺にも然し曾つては一度、そんな時代があつた。そんな迷蒙明の洗禮を受けた覺えはあつた。しかしそれが何だ。何にもなりやしないぢやないか』

彼はどもりながら名狀することの出來ない痛恨に顏をひきつらせた。彼は喪服のやうに黑い着物をきた彼女が敬虔な態

度でパイプオルガンを彈いてゐたのを想ひ描いた。彼は大きな太皷を胸から吊つて聖戰に從事したことを廻想した。茶色の雀斑のある手で洗禮を授ける彼女の伯父なる士官を思ひ出した。老いても嫁らしい彼女によく似た伯母を想起した。さうして何處に彼等と自分の相違があつたらう。僞善者だ。嘘吐きだ。邪惡な淫賣婦だ。

何時の間にか一人の士官が、親切らしく彼の耳許に囁いてゐた。

『悔改めなさい。悔改め……』

『何を俺は悔改めれば好いんですかい』

『罪ある貴方は』

『罪は俺には無い筈だ。それとも嫁が逃げたのは俺の故だとでも言ふんかね』

『その事情は存知ませんが――』

彼は一滴だけ淚がぽろりと落ちた。彼は誰かに苦衷を訴へたかつたのだ。その言葉を待つてゐたのだ。彼は彼等の一團に取り卷かれて、一切を告白した。その瞬間は甘やかな一刻だつた。

『アーメン』

彼等は、彼の言葉の途切れる度に囁いた。好色な眸をした靑鬚の士官は寧ろ好奇心を寄せてゐるやうに見へた。若い女士官は耳を赤くして聞き入つた。兵隊共は新約よりもより物語的であるために、彼の懺悔に聞き惚れた。

『貴方はしかし、奥樣の罪をお許しなさいますか』

『勿論ですとも』

舵夫は人々がぎよツとするほどしつかりと眞面目に答へた。

『私は確かに取り亂しては居りますが、未だ妻に、妻の誤謬を訂正させるだけの餘裕を持つて居りますさ』

士官は彼を祝福した。彼の背中の瘤はだんだん沈んだ。彼は泣きながら自己嫌惡の感情から幾分か離脱することが出來るやうに思はれた。さうして彼女が、彼の醜さに愛想を盡したのでないことを念じた。

その夜遲く、彼は輕やかな氣分でお濱の附近の彼女の實家を訪れた。小隊長の彼の家は昔ながら硝子戸に十字架を描き、青白い瓦斯燈が闇の路をほのかに照らしてゐた。

『今晩は……』

彼は勢よく硝子戸を開けた。土間に置き並べられた長椅子には人の影もなかつた。彼女の夫は未だ徹宵傳道から歸らなかつた。年取つた伯母が、青褪めて舵夫を凝視した。

『伯母さん。私です。青雲丸の舵取りです』

『おう』

伯母は氣を失ふ様に膝をついた。

『神様。彼女(あれ)をお許し下さい。彼女を許してやつて下さい』

舵夫は驅け寄つて抱きあげた。

『何を仰有るのです。伯母さん。妻のことですか。彼女は間違ひました。しかし私は許してやりますよ』

『あゝ。さうですか。さうですか。有難う。神様は貴方に屹度お惠みを與えて下さいますでしよう、

『私もそれを信じて居ります』

『ほんとうに彼女は意志の弱い子で、どうしても誘惑には打ち勝つことが出來ないのです』

『誘惑と仰有いますか』

『さうですとも。彼女は妥協に背いて貴方にも從ひました。それから今は亦、お船の一等運轉士とかの方に從つて居ります。まあ、何と云ふ間違つた思想の中で行動してゐるんでしよう。それに彼の子は』

『お待ち下さいッ』

眼を吊し上げた癲癇病者のやうな顏付をした舵夫は突如叫んだ。彼の身體は不吉な豫感に小刻みに顫えた。

『伯母さん。彼女は私の船のメートと一所なんですか』

『まあ……』

『あのチーフ・メートですね』

『貴方は御存知なかつたのですか』

伯母さんの唇は桑の實のやうに黑くなつた。

『初めてです。たつた今初めて聞くことです。妻の不貞を確然と知つたのは此の刹那です』

傴僂の夫は念を押すやうに言つた。眼玉だけぎら／＼と光つたが、背中の荷物のために顏は次第にうなだれた。彼の頰を苦い淚が頻りに傳はつた。

『何のために泣くのだ。誰のために泣いてゐる俺なんだ……』

彼は肚裡で自問自答した。彼は怒鳴り散らしたい衝動にわな／＼して來た。彼の足許で蟲の啼くやうな伯母の啜り泣きがした。彼女はもみくちやの紙のやうに泣きながら祈つてゐる。しかし彼には、彼女が何故祈るのであるか皆目わからなかつた。

我慢し切れなくなつた舵夫は、海に吠えるやうに絕叫した。

『止めてくれ。止めろ。止めて仕舞へ。何故泣くんだ。何のために祈るんだ。』
がらんとした傳道館の中で彼の叫び聲が空しく反響した。彼女は彼の怒聲に脅えて飛び上つた。
『あー貴方。神樣』
『泣くのは止めて頂はふ。祈つても欲しくない。何といふ醜惡な泣き面だ』
『恐ろしい事は言はないで下さい。それは未信者のすることとです』
『默れッ』
舵夫は說敎壇の上に驅け上ると、椅子だの、聖書だの、植木鉢だのを叩きつけた。さうして傍の太鼓を取りあげると、氣狂ひのやうに叩きながら、
『僞善者。ペテン師。噓吐き。不貞腐れ。淫婦。泥人形……』
とありとあらゆる惡罵を洪水のやうに咆吼した。さうして彼は
『貴樣の汚れた姪は賣女の根性を持つて生れて來たんだ』
と耳許で怒鳴る拍子に、どん〳〵と太鼓を打ち鳴らした。
『貴樣の姪の身體は、たゞ嫌らしくばかり成熟したのだ』
そこでもう一つ太鼓を叩いた。
『彼奴の肉體は、眼を瞑じてだけ愛することが出來るんだ』
太鼓の皮が破れるほど叩いた。
『彼ん畜生の淫亂さ加減は、一人の夫を守ることとさへ出來なかつたのだ』
伯母は耳を蔽つて說敎壇から辷り落ちた。

「父無し子。おひきずり。賣女。賣女。賣女。さまあ見ろ」

彼は太鼓を亂調子に打ちながら、心ゆくまで罵り盡した。表には人立ちがした。彼は充分にそれを意識しながら、到底聞くに堪へない罵倒を浴せた。

しかしながら次第に彼は、誰も聞き手の無い中での罵倒に疲れて來た。聲も枯れて來た。さうしてゐるうちも、彼女を愛したことのある男は、どうしても彼女を愛せずにはゐられないであらうことを想像して一重に不幸を感じた。この忌はしい想像は、眼が廻るほどの嫉妬心をも煽つた。

軈て硝子戸の外が白くなつた。

夜が明けた。

一等運轉士は殺されべきである。

さうして彼は、彼女に對する愛着をいよいよ深めながら、憤怒と哀憐に泣いじやくりながら、氣狂ひのやうに太鼓を打ち鳴らしつゝ、蹌踉として暁の街へ歩み出た。

彼はまた青雲丸の鼠の小便臭い部屋に戻つて來た。しかし一層憂欝になり、誰とも口を交さなくなつて仕舞つた。

十日の碇泊期間は逸早く經つた。

「今度航海して來たら、お前は船長さんになつてゐる俺を見るだらうよ」

メッサンは女を膝に抱へて言つた。

『乾度ネ』

彼女は確信あるもの丶やうに答へた。夜は潮の香に滿ちてゐた。彼等は別離を前にして長い接吻をした。その切々とした音が森閑とした夜を艶めかしく彩色した。なんと良い夜であらう。

船長は、毎日寝過しては瞼の腫れた顔を妾の鏡の中に見出した。

さういふ間に、青雲丸はすつかり化粧を整へて、新造船のやうになつた。

青雲丸の出帆する日が來た。

船長は何時ものやうに船橋（ブリツヂ）に上つた。傴僂の舵取は凄惨な表情をしたから羅針盤（コンパス）の後方にある舵輪（ホイール）をくる／＼廻した。出帆旗（ブリユーピーター）が檣頭にひら／＼飜つた。赤線の煙突から黒い煙がもく／＼と出た。號笛が鳴る。がら／＼と激しい音がして錨が海苔をつけたまゝ卷きあげられた。

メッサンは滋養に富んだ鶉の卵を呑んで、陸の方を觀測した。彼には町の御天守の上に立つて、彼女が手を振つてゐるやうに思はれたのである。

彼女は、夫と戀人の乘つてゐる靑雲丸が、全く眼界から水平線の彼方まで遠離るまで波止場で見送つてゐた

彼女は歸途、赤線汽船會社の航海課に寄つた。さうして靑雲丸の歸航の日を手帳に書き留めた。外に出ると赤線汽船社の飾り窓に出てゐる日本地圖を眺め、靑雲丸の航海路を確めた。

「壯麗な海だわね」

これが彼女の彼等に贈る言葉だつた。

それから三十分後、彼女は波止場をうろ〳〵と物色して、逞ましい海の男を生擒つた。彼女は男と手を組みながら、氣が着かれないやうに小さな欠伸をした。のろ〳〵と歩いてゐる通行人、水夫、荷場人足、稅關吏、醉どれ、淫賣婦、放浪者などの頭の上に、煤の混つた石炭殼の雨がほろ〳〵と降り濺いだ。

無事な航海が續いた…………。

さういふ航海は退屈だつた。暫らくの間は鷗や海猫を見た。しかし間もなく彼等は何ものも海上で見るものを失つた。

四日目に燈台監視船に行き會つた。

一週間の終りに、鯨の一群を見た。

さうして北海にはいると、海草が推進機に絡みついて、船足が俄にのろくなつた。

妻を奪はれた舵夫は、同じ甲板に健康なメッサンの姿を見ることを欲しなかつた。ベネヂクト派の修道僧のやうに理屈

を並べるのが嫌ひな船乘りは、メッサンを殺害する手段を考究した。

青雲丸は古くから乘り廻されてゐる航路を驀進する。何所を見ても水と空ばかりだつた。さうして夜になるとメッサンの寢息をうかがひ寄つた。しかしながら朝の太陽が洋上の彼女の存在を明らかにする時に、彼は屢々瀕死の彼女に身を振りむけた。彼は、またしてもデッキの上に、呪はしい背中の瘤の影法師を再び三度見出さなければならないのであつた。

小樽で燃料や食料を新に積み込んだ彼女は、宗谷海峡の濃霧を突き進んで茫漠とした亞庭灣を横切り愛郎岬を迂廻した時に、そこから十一海里半の距離に猫の爪のやうな富内岬を見出した。

三〇〇呎の岬端に赭色三角標が氷柱で煌めいてゐた。

晴雨計は下痢を患つたやうに下る。

氷雨交りの北風が吹いたかと思ふと、からりと富内岬附近の紫紺色の尖峯を見出すことが出來た。さうかと思ふとオホツク海の濃霧が颯と襲來すると船乘り共の味噌汁が凍つて仕舞ふ。さういふ瞬間の隙を見て、岬の南東方一海里、富内部落の前面にある泊地に赤く錆びついた錨を投げ込んだ。

青雲丸が富内泊地に投錨すると、未明から材木積み込みが始つた。石油發動機船に曳かれた筏の大群が、結氷期の氷塊のやうに彼女を取りまいた。蝦夷松や椴松や落葉松その他の丸太類は土左衛門のやうに白い肌を露はしてぶはり〳〵と浮いてゐる。揚貨機はあたりの澄み切つた空氣を搖した。貧しい荷主は漸く二三十石の筏しか組んで來ない。さういふ中には生木の落葉松や、半ば腐つた椴松などもあつた。富内を初めとして愛郎岬附近の海岸を集材しつつ、積荷を早く濟さうとする。間もなく結氷期だからである。

青雲丸の最終航路はさういふ季節の少し手前まで繼續される。アンテナラインに氷柱がぶらさがり、デッキがスケート場のやうになつて、舷側に衝突する流氷の壞れる不氣味な音を聞きながら、漸く最終航路を閉じる。この邊は八月木枯が吹き、九月氷雨が降り、十月雪が降る。さうして海面は十一月中旬の頃から結氷しはじめ、翌年の三月でなければ融解しない。春めいて來た樺太の河川は水で膨脹し、琺瑤玥水道の如きは流氷の去來が、船乘り共の荒くれた膽つ玉を萎縮せしめるのであつた。

漸く木材積込を終つた彼女が、東岸から西海岸の宗仁岬燈台の南方、菱苫沖合にさしかゝつた時には、濃霧を伴ふ南東の輕風が、軈て南西の高い波濤に轉向しつつあつた。彼女は次第に醉どれのやうに漂搖した。

『低氣壓が來るぞッ』

船乘り達は一勢に惡い豫兆を感じた。

午後三時過ぎ、船長は宗仁燈台の南微東、三海里の地點に轉錨した。

『こんな所ぢや駄目だ。安全な場所ぢやない』

メッサンは聞えよがしに船内を叫んで歩いた。

午後六時頃には、南西の疾風に、いよいよ波浪が高まり、青雲丸はその位置を保つてゐることが出來なかつた。時折り鐵釘のゆるむような凄じい音がした。

七時半、西能登呂岬燈台の北東方、七江沖に避難する目的で、北西方に向つてゐた船首を左方に廻轉し、南微東に針路を取り、南南東方に向つて流れる海流に乗りながら一時間十海里の全速力で出發した。その頃は全く濃霧が一切の展望を拒絶して仕舞つた。船長は冬裝束のまま暫らくデッキに立つてゐたが、夕食を取りに部屋に引つ込んだ。洋々とした北海の波濤をうつつに聞き、針路を更にに更に一分一點、右點し、西能登呂岬燈台の白光を霧の深い膜を通して東微南二分の

一南に認めつゝ進航した。

『距離は』

見張りのメッサンが言つた。

『三海里』

そこで針路は、また南南東に變つた。しかしその時は、彼女の展望はあやめもわからぬほど遮蔽し盡されて居た。さうして時折り正規の霧笛をぴよう〳〵と吹き鳴らしつゝ西能登呂岬燈台を二海里半以内外の距離に繞航した。

八時、船長が退儀さうにブリッヂに上つた。

船長の少し遠い耳は燈台の霧笛を北西方に聞いた。それに依つて長年の經驗から船首を北東に轉じ、漲潮流に遡航して約十分ほど航行してから、北北東に針路を轉じた瞬間、船首にあたつて他の汽船の長聲を聞いた。

『おいツ。コーター・マスター。舵柄激右偏ツ……』

船長はブリッヂで躍り上るやうに叫んだ。さうして狩えるもののやうに全速力後退を命じた。

『舵柄激右偏だツ』

もう一度、船長は咽喉が破れるほど叫んだ。青雲丸の船内も何かしらざわ〳〵と犇めいて、騷々しく人々の右往左往する足音が入り交つた。

『舵柄右偏だと言ふに、何をしてをツかツ』

船長は傴僂の舵取りの耳許へ嚙みつくやうに怒鳴つた。

瞬間、霧が破れた……

見知らぬ汽船の人魂のやうな檣燈が、ぼんやりと右舷船首に指すことが出來るほど認められた。

それから次に紅燈を認めた。

『わあツ』

船長は、いきなり舵夫に組みつくと

『この馬鹿野郎ツ。間抜けツ氣狂ひツ』

と罵りながら、盲打ちにひつぱたいた。彼は此の命令を奉じない傴僂男を、擲り殺しても飽き足りなく思ひながら、その背中の瘤をガリ〳〵嚙つた。

舵夫は舵輪に掴りながら、何時この二つの汽船が物凄い、悲壯な衝突を敢てするであらうかと眼を閉つて待つた。

『はツ』

と思ふ間もなく、肥つた船長の重みを背中に感じ、左に蹌踉いた。

青雲丸は、だから左へ急廻轉した。

何故彼が船長の命令に背いたか、誰も知ることが出來なかつた。しかし實際、彼も思ひもかけなかつた偶然の出來事のために、危いところで青雲丸は衝突を免れた。

舵夫は、眞紅になつて怒り狂つてゐる船長に、耳朶を掴まれて引き曳り廻されながら、惘然として二つの拳を見た。さうして馬の眸のやうに大きく見開いた眼玉から、ボロ〳〵と口惜し涙を流した。

青雲丸は、本船と競爭しつつある海豚と平行に進みながら南下した……

『おい。皆な集れ』

暗い船艙で、蠟燭を前にしてメッサンは水夫達を集めて叫んだ。彼は潮風に吹き曝れた眞黒い身體を整列させた。

『何よりも俺は君達に言はなくつちやならない。君達は西能登呂岬附近で、本船が非常な危險に瀕したことを忘れやしないだらう』

『覺えてるとも』

鬚だらけの顔の栽積した中の一つが應じた。

『幸に佩儻のコーター・マスターの機轉で、吾々は恐るべき海難から脱れることが出來た。しかしだ。よく聞け、しかし若しあの際、吾々の船が衝突してゐたとしたらどうだらう。誰だツ。其所でこそ〳〵と勝手に饒舌り合つてる奴は………俺はその事で君達に言ひたいのだ。即ち本船の如き老朽船はひとたまりもないのだ。ぽかりと横つ腹に大穴をあけられるのは必定だ。さうなつたら何も彼も木つ葉微塵なんだ』

『さうだ〳〵………』

『俺は君達に』

とメッサンはポケットから一葉の紙片を取り出すと

『その事を言ひたいのだ。親切に、よく解るやうに此の危險な事實の說明をしようと思ふんだ。好いかね。おとなしく聞いてゐろ

彼は空箱の上に立ちあがると說明しはじめた

『千九百年一月の調査によると、現在日本の在籍噸數一〇〇〇噸以上の汽船は合計九六五隻だ。即ち三四八五二五六噸だ。この內老齡船二〇年以下のものが三二九隻。即ち一〇二四七四〇噸で、全體の二九・五パーセントを占めてゐる。さうして此等の老朽船は二九七隻まで外國製造船で、實に九三七七一〇噸、老齡船の九一・七パーセントを占めてゐる。從つて老齡船の殆んと全部は外國製造船だ。だから斯ういふ事が言へるぢやないか――――外國の古船を日本の貪慾な資本家が、非常に廉價に買ひ入れるために、日本は世界で第一等の老朽船國だといふんだ』

『ヒヤ〳〵』

『その通りですよ。メッサン』

水火夫達は嬉しさうに共鳴して拍手した。

『おい。横から口を利いちやいかん。好いかね』

彼は大袈裟な表情をしてみせるために双手を高く擧げて叫んだ。

『最も極端な例は、千八百六十四年即ち元治元年、德川十四代將軍が長州征伐をした年だ。更に橫須賀に初めて造船所が建つた年だ。よく覺えておけ。その年に進水式を擧げた船齡六十三年の一二〇〇噸級の鐵船、とりもなほさず汽船中の元老ともいふべき老朽船が今尙ほ日本では就航してゐる事實があるのだ。これは吾々から見ると、海の化物でなくして何であらう。そも〳〵こんな……』

『ウフ、、、、』

『おい。へら〳〵笑ひをしてゐる場合ぢやあないぞ』

『笑つてゐるんぢやありませんや。苦笑なんで』

『さて。諸君。俺は君達に現在總噸數一〇〇〇噸以上の汽船、約三百五十萬噸の中、船齡二〇年以上のものが凡そ百萬噸餘もあることを說明した。これは明白な事實だ。解つたかね。それがだ。若し今後、現在船三百五十萬噸が此の儘に二〇年持續されるとしたら、各年次老齡船の噸數が、どんなに增加するか、恐らく想像外の數字だらうと思ふのだ。

『わからねえッ』

誰かゞ辛氣臭さうに叫んだ。

『よしッ。數字は面倒だから止す。ところで諸君、會社側では今迄の狀態上、なか〳〵老齡船の整理はしない。その上に不埒なことは新造船など買ふ氣が皆目無いのだ。それは彼等の平生に徵して明白だ。さうしていよ〳〵價の廉い外國の古船で間に合はせるのは知れ切つてゐる。一體全體俺達の生命は、どうするんだ。どうすれば好いんだ』

油染みた澤山の顏はゆさ〳〵と動搖した

『遞信省は、さういふボロ〳〵の老朽船が活動してゐるのは日本近海航路だと發表した。これは國辱ではないか。人權蹂躪ではないか。瀨戶內海、九州、北海道、それから本州の港灣に出入する船で、二〇年以上經つてゐない船はないのだぞッ。見ろ。この船だつてさうぢやないか。艙口へは海水が漏る。機關室だつて絕えず水を搔出さなければならない。舷側の鐵板さへ用をなさない位に腐蝕してゐるんだ。俺達の力で鐵槌を打ち込んでもぺこりと穴があくだらう。吾々海員にとつて流氷は恐るべき危險物だ。衝突は更に致命傷だ。俺達の生命は、どうなつても關はないと言ふのか。そんなやくざな生命ではない筈だ。おいッ。皆な。俺達は餘りに從順ではなかつたか。もう好い加減に從順といふ欲口器を投げ捨てる時が來たんだ。しつかりしてくれッ。』

彼等はすつかり煽動されて仕舞つた。メッサンは今こそ船長に對する復讐を遂行することが出來ると確信した。彼等は

『やれ〳〵〳〵………』と口々に罵りはじめた。はじめ蜂の咆り聲のやうなのが

『ストライキだッ』

『闘ふもんか。暴れろッ』

『思ひ切りやッつけろ』

などといふ罵聲に變つた。彼等は昂奮し、熱情を帶び、殺氣立つて來た。

『しかし諸君。冷靜にやつてくれ。何故なら吾々を支配するものは俺達の理智や感情ではなくて、彼の船長なんだ』

『何ッ。あんな船長』

『しかし』

『糞喰らへッ』

煽動は確かに惡意のある興味に相違ない。メッサンは北叟笑みながら尚ほ自分の言葉が意味を成したか、どうかを確實にするために言葉を吐かふとした時に

『一層メッサンを船長にしろ』

と叫ぶ喜ばしい一つの荒々しい聲を聞いた。

『船長にしろ』

『船長だ』

『船長』

『メッサンを船長に……』

船内が破れるやうに怒號した。外は烈風と怒濤だ。一本の蠟燭だけが靜かに炎を燃やし續けて明滅する。その光りに映し出された赤銅色の面、澤山の面、無數の面がぎら／＼と凄まじく脂切つて輝いた。

メッサンは腹の底からこみあげて來る笑ひをまぎらしながら

『好しッ。諸君の推薦ならば、敢て俺も船長を辭さない』

船乘り共は嬉しがつて雀躍した。彼は腹の中で言つた。

『あの舊式な、運用術の拙い船長を見ろ、富内では出帆するのに、たつぷり二時間も費したぢやないか。鈍い出帆振り、臆病な入港振り。それでゐて優秀な海員の心算だからやりきれない、ウフ、、彼奴を今度は帆柱に縛りつけてやれるのだ』

メッサンがそんなことを考へてゐる間、彼方に四五人、此方に十人と一塊りになつて、ひそ〳〵と彼等は密議に耽り、瞬時に執行委員と指揮者が決定した。

それから一勢に、どや〳〵と彼等は艙口から這ひ出して行つた。

『戰鬪開始だッ』

彼等は艫の方の一つの扉を蹴破ると吹雪のやうに躍り込んで行つた。水夫長が襲はれた。しかし彼は猿臂を伸すと一人の水夫の頸の付根を捻ぢ折り、もう一人の水夫は鼻柱が曲るほど突き上げられた。しかし水夫等は選りづまに彼の幅の廣い胸や、逞ましい腕に絡みつき、掻く、捩る、嚙む、蹴るして格鬪した。六人の水夫が此の雄牛のやうなボースンを捻ぢ伏せることが出來なかつた。

『死太え畜生だ』

「何をッ生意氣な」

すると機關部から飛び出して來た一人の火夫がシャベルで、橙の實のやうに堅固な彼の髓頂を、思ひ切りぐわんと擲りつけた。清新な血が噴水のやうに飛んだ。水夫長の頑丈な高い身體が崩づ折れるやうに打つ倒れた。さうして動かなくなつた。

事務長は後手に縛られると机の下に押し籠められた。

「密告者めッ」

水夫は白い粉をふいたやうな事務長の頬を毛もくぢやらの手で擲つた。

『もう一つ踏んでやれ』

他の一人の水夫が彼を踏み付けた時に、女の太腿のやうに柔い、脂肪で盛りあがつた腹がぐにやりと押し潰れた。

賄長は煮えた油をぶつかけられて大火傷をした。糸屑のやうに縮れた毛髮がはら〳〵と拔け散つた中で、彼は氣を失つた。

機關長は酩酊してゐた。彼はぴか〳〵光つた鋼鐵の梯子から突き落された。蝙蝠傘の骨のやうな彼の身體は三回宙で舞

つて石炭庫に落ちた。中は真暗だつた。しかし機關長の白い海盤車のやうな掌と五本の指が、によつきりと石炭殼の中から出てゐた。

梯子の上り口や、艙口や、通風筒から飛魚のやうに一勢に彼等は跳ね上つた。船長が驚いて見廻した時には、もう此等の水夫達が船橋に溢れ、船長を取り卷いて平常の憤りを充分に晴さうとしてゐた。

『何を仕様といふのぢや』

船長が一言口を開いた時に、一人の水夫は握り拳を船長の真紅な口の中に押し込んだ。彼は苦しがつて身をもがいた。彼等は此の暴行が氣に入つた。さうして船長の肥滿した身體は、揉みくちやの紙屑のやうに彼等の手で丸められて仕舞つた。彼等は

『わツしよい〱』

言ひながら、潮の香の染み込んだ襤褸でぐる〱卷きにした船長を前檣に縛りつけた。彼等は思ひ〱に罵つたり、嘲つたり、唾を吐きかけたり、平手打ちをくはしたり、弱腰をどんと蹴つたりした。抵抗の出來ない船長は默つてゐた。彼の油引きの帽子は何所かへ吹つ飛んで、額からは血がぽた〱と滴つてゐた。

水夫、火夫、ボーイその他の下級船員は悉く甲板に集つた。彼等はまるで氣狂ひのやうに船を占領したことを喜んだ。驅り立てられた獵犬のやうに手當り次第に彼等の暴行と掠奪がはじまつた。風浪はしかし依然として強く且つ高かつた。

新に船長に推戴されたメッサンは、船橋に登つた。峻嚴な號令と命令が激越な調子で下つた。彼は船長の所持品である六分儀で見へぬ太陽を觀測した。また水と空とを盛り上げる水平線の彼方に、彼は希望と淫蕩な戀人の面影を思ひ描いた。

船乗り共は厨房から奪つて來た酒に心持ちよく酩酊した。

『コーター・マスターは何所へ行つたえ』

彼等が覺める舵取りは、彼等のギロ〳〵探し廻る眼に觸れなかつた。稍や暫らく經つて、彼等が彼の存在を瞬間忘れてゐた時

『あれ〳〵………』

と一人の水夫は叫んだ。彼等は一様にその水夫の指さす方へ視線を向けると、後檣へ猿のやうに驅け登る舵夫のねぢけた背中の小さな瘤を見た。彼等は思はず

『アツハ………』

と一勢に哄笑した。宮守のやうに帆柱にぴつたりくつついて、思はせ振りに攀ぢ登つてゆく彼を見て、彼等は

『彼奴は怖いのだ』

と決めた。

『彼奴は恐しがつてるんだ。しかし彼奴は寄実丸を、そして俺達を危險から救つたぢやねえか』

『さうとも、俺達はコーター・マスターをやツつけるとは言ひやしねえ』

『臆病者』

彼等は自分達の判斷を正しいと思つた。そして舵取りに對する解釋で、いよ〳〵機嫌を好くした。彼等の發展段階における戰ひに、このやうな正しい行動を戰ひ取つたことは彼等を少くとも穩和にした。さうしてマストの頂上に、怯えるもののやうな眼付をしながら、臆病な小猿のやうに背をまるめて、凝つと此方を眺めながら嚙りついてゐる滑稽な格好に、もう一度彼等は晴れ〳〵と笑ひ興じたのであつた。

新しい船長さへも、ブリッヂから身體を乘り出して、人々の視線の集る後檣の頂上に双眼鏡を向けた。レンズに映つた舵夫は、マストの天邊に自身の身體をきり〳〵と結びつけてゐた。

それから一時間餘も青雲丸は航走した。

彼等の祝祭は未だ靜まらなかつた。彼等は廣々とした甲板を占領して、いよ〳〵饗宴に有頂天になつてゐた。酩酊した。亂舞した。高らかに放歌した。取つ組み合ひの喧嘩をした。そのまゝ眠つてゐる水夫もあつた。そうしてその間中、新らしい船長は、時折りマストの上の舵夫が自殺をするのではあるまいかといふ懸念が浮んでは消えた。

海洋の色彩は刻々に變つた。太陽と風と波によつて、海に慣れた船乘りの眼をも眩惑する。新らしい船長は船長として見る海も亦自ら違ふものであることを發見して心に誇るところがあつた。突然

『火事だッ』

といふ叫喚を人々は聞いて、ぎよッとした。歌は止んだ。亂舞は止んだ。喧騒はぴたりと靜まり返つた。不氣味な靜寂が彼女を支配した。一體その聲は何所から來たのであらう。彼等の耳は怪しい無線電信を受信したよりも驚き恐怖に戰いた。

『火事だッ』

また怒聲がした。

乘組員は一勢に後檣の頂上を振り仰いだ。彼等の血走つた瞳は、マストの上で身をもがきながら、嘲るやうに笑つてゐる舵夫の醜怪な姿を見た。

『火だッ』

『火だッ』

『青雲丸が燃えるッ』

はじめて彼等は口々に叫んで躍りあがつた。

艙口から、通風筒から、さうしてあらゆる窓といふ窓から煙と炎がもく〳〵と吹き出してゐるのを見た。

彼女は恰も薪を積んでゐるやうに良く燃えた。赤い炎が這ひ廻つた。

彼等は右往左往した。錆びついて使用に堪へないやうな平押しポンプが噴水のやうに海の水を吐いた。しかし間もなく彼等の强健な腕が痺れて來た。

ワイヤロープが蜘蛛の巣のやうに甲板や船橋を絡んだ。水夫達はそれに足を取られて膝頭を挫いた。

誰も船の内部に這入ることが出來なかつた。むッとした火氣がじり〳〵と髮の毛や鬚を焦した。

機關室は油と火だ。

船艙の木材は威勢よく燃え盛つた。

『もう駄目だ』

誰かゞ絶望的に叫んだ。同時に誰が火を放つたか彼等には直感することが出來た。白い烟や黑い煙や青い焰や赤い火が渦を卷いて、彼等の剝き出しの胸や腕や脛を燒いた。

『俺等の手ぢや仕樣がねえ』

奇蹟でも起らない限り、彼等は此の火を消し止めることが不可能であることを悟らなければならなかつた。防火作業は中止された。龍骨のはじける音が痛ましく彼等の胸を搏つた。

火は、あらゆる所で燃えた。

『逃げろ………』

新らしい船長は命令した。

救命艇が下ろされた。彼等は爭つてそれに乘り込んだ。しかしながら一艘は人員過多のために顚覆した。一艘はがぶりと打ち込んだ大波のために吞まれて仕舞つた。他の一艘は浸水のために使用に堪へなかつた。

石炭庫から惡い瓦斯が發生した。そのために彼等の中の數人が窒息した。

人肌の焦げる不快な匂ひがそこらあたりに漂つた。燒けた皮膚からどろ〳〵としたどす黑い脂が流れた。逃げ惑ふ水夫やボーイ等は、その脂にずるりと滑つては再び起きがることが出來なかつた。

ぶよ〳〵に膨脹した燒死體が散亂した。

靑雲丸は燒えつつ南下した。

渦を卷いて流れる海流は、三時間餘りも燒えあがる船を搭せて、次第に南方の洋上へ漂流した。

しかしながら新らしい船長は未だブリッヂに立つて居た。彼は今になつて不具の舵取りの執念深い復讐を覺つた。

『畜生ッ。何も彼にも滅茶滅茶にされて仕舞つた』

彼は靜かに呟いた。

火炎は靑雲丸の燒くべき凡ての物を燒き盡した。彼の踏まへてゐる船橋のチーク材も次第に熱く堪へ難くなつて來たのを靴の下で感じた。

『しかし誰が何と言つても、俺が船長になつたことは明らかな事實だ』

彼は剛情にその守るべき位置を捨てなかつた。

やがて火勢が次第に弱つて來た時に、彼女の解體が始まつた。機關は疾くに停止してゐた。船は推行しない。舵は流れた。さうして瀧のやうに海水の浸入して來る水音がした。

龍骨は曲つた。

鐵釘は蝕齒のやうにぼろ〳〵と拔け落ちた。

前檣は根元からぽきッと折れた。
黒く焦げた船材は波に漂ふた。
溺死體は浮んだり沈んだりしてゐる。
通風筒は海水を呑吐した。
彼女は次第に沈下した。
新らしい船長は羅針盤に自分の身體を縛りつけた。彼の足許まで水がひた〳〵と寄せてきた。
『俺はしかし船長だ』
黄昏が迫つた。
海水は彼の腹部を浸して寒氣が身に沁みた。さうして彼は船長の夢に破れた。
『俺は船長だ』
その自意識を未だ失はなかつた。緑玉色の夜光蟲が彼の身體を遶つて耀いた。
海水はもう彼の首まで欲しがつてゐる。
『わあッ………』
その次の大きな波のうねりが、船長の頭ごとがぶりッと呑み込んだ。

それを舵取りは冷やかに見下してゐた。
『フン。さまあ見ろ。俺は貴樣のくたばるのを、最後まで見てゐたかつたのだ………』

この劇的な終末を飾るのに、彼は多少の芝居氣を出して叫んだ。彼はしかし間もなく次第にマストが刻むやうに沈むのを、少しばかりの感動をさへもつて待たなければならなかつた。

頭の上には南十字星が煌めいてゐた。

全く海が、彼とマストを呑み込んだ時、大きな波紋に似た渦卷がきり〱と其所らあたりに浮んでゐる青雲丸の小さな破片をも、悉く啣へて深海の底に引き曳り込んだ。

本篇は本號即「大衆文藝」號のために執筆せられたものでないといふ事を特に斷つておく。——といふ意味は作者が特に之を所謂「大衆文藝」として書かれたものゝやうに誤解されざらんことを願ふのである。本號に收めたのは偏へに編輯上の都合である。が、然し、大衆文藝といふのは嚴密にどういふものを意味するかは知らないが、本號に收めた諸篇もすべてさうだが、本篇なども新しい意味での大衆的な藝術品と呼んで呼べないことはないと思ふ。特にその點をお斷りしておく。

（編者識）



多田滿仲

土師清二

一

『どうだ？』

滿仲は、足もとから二間ばかり下の石の上に腰をかけてゐる震旦九郎に聲をかけた。

『はい、齒に付きますわい』

震旦九郎は、さう云つて振仰ぐやうに滿仲を見た。左の手に六七尺、鱒の干物をつかんで、右の手には喰切つたばかりの鱒の干物をつまんでゐる。

『固いか？』

『え？』

『固いか、といふのだ』

『いや、さほどでもございませぬ』

『さほどでも——ないか』

『へい』

とは云つたもの〻筬旦九郎。相手の満仲は玄米の押飯を頬張りながらモグ〳〵やつてゐるので、云つてゐることがハツキリとわからない。

満仲の背後には、舵ノ兵衛、櫓ノ兵衛、帆ノ兵衛、碇ノ兵衛、綱ノ兵衛の多田ノ水衆五人。新月の形にならんで、これも干物を噛み押飯を頬張り、竹筒の水を呑んでゐる。

この一團から小半丁下に、三十人ばかりの一團が石の上、草の上、木の根に腰を下して食事をはじめてゐる。その中に十人は各々左の拳に鷹をすえてゐるのだつた。

満仲は、その一團を見てゐたが

『おい、九郎。あの中に頼貞がゐるやうだな、彼奴……』

『はい、ゐられます』

『彼奴、變な奴だ。俺の六人の倅の中で困つた奴は、彼奴と坊主だ!。坊主の奴はナニかといへばメソ〳〵泣く、頼貞の奴は、ナニかといへば俺をおひやらかし居る、箸にも棒にもか〻らぬ奴だな』

『へえ……』と筬旦九郎。

『おウい。頼來ウい!』

満仲は、大きな聲を出した。

と、下の一團の中から、

『おウい……』

答があつて、一團の中から立上つたのは滿仲の第五子賴貞である。賴貞は鷹匠の裝束で、左拳に名鷹鈴懸をすえたまゝ、石ころの山肌を小走りに驅けのぼつて來る。

『ヤ!、彼奴、鈴懸をすえてゐるぞ、九郎!。お前が許したか』

滿仲、驚きながら、さう云ひながら驅けのぼつて來る賴貞を睨んでゐる。

震旦九郎は鷹匠の宰領で、多田館に飼つてある七十羽の鷹のことも一切合切責任を持つてゐるのだつた。

『いや……』と口の中で要領を得ないことを云つて震旦九郎は、竹筒の水をゴクリ〳〵飲んでゐる。

『參りました』

賴貞は片膝ついて父を見た。

『うム』と一ツ首肯いて滿仲

『コラ、お前は鼬か、鼬といふ名前か?』

『はい』

『はい、とは汝……』

『父上の下された名前でござります』

『おのれ、また……』

『いや!、若し賴貞が鼬ではわるいといたしましても、先刻父上は鷹匠の者共に向はれて、鼬來ウいとお呼びになりました。で、鼬――正物の鼬が木の根からでも驅け出してくれればよろしいが、若し鼬奴が出て來ぬといたしますると、いや、そ

れよりも、臆になつて誰一人父上の前に出て來ぬといたしまするとも、父上の威光にかゝはりませう。京師の月卿雲客悉く多田滿仲の武勇を憚ると聞ゆる折柄、苟且の一言にいたしましても、威令行はれざるは……』

『ア、わかつた！　わかつたよ』

『はい』

『相變らずの奴――が、その鷹は？』

『はい、鈴懸でござりまする』

賴貞は惡びれない。サラリと答へて平然としてゐる。

『俺の秘藏の鷹だぞ』

『はい』と、賴貞は事も無氣である。

滿仲は、睨みつけてゐたが、咎めて見ても結局無駄になりさうなので、默つて了つた。

誰彼の容赦はせず、氣に入らねば首を刎ねる、手を打落す、足を斬り放つ、簀卷にする、逆吊りにする、縛つたまゝ山中に運び入れさせて生きながら野獸の餌食にさせる。箕面ノ瀧の落口から逆吊り逆落しにするといふやうなことは、日常茶飯事と思つてゐる多田滿仲だ。だが、子にはかなはない。おひやらかされて嬉しがるやうなところがあるのだつた。

『ドレ、一拃やらうか』

滿仲は腰をあげた。滿仲一流の我武者羅な鷹狩をはじめようといふのである。

長旦九郎は、立つて合圖の右手を、空に向つて高くさしのべた。

と見て、鷹匠の一團は草が生えあがつたやうに一齊に立上つた。

水索五人、これも昂然と立上る。

『オヤ？、蟲生の堤を早馬が飛んでくるやうだ』
と云つたのは賴貞である。
『ナニ？、早馬』
さすがの滿仲、不意で、蟲生の堤の方を見た。
枯草色の堤を此方へ、疾風のごとく飛んで來る一騎！。馬は首をのびきりのばしてゐる、人は折れるやうに前に身を屈して、驀地に驅けて來る。
『なるほど。曾利平らしい、慌て者奴が泡を食らッて來るぞ』と、滿仲。
『曾利平でございますな』
賴貞は、さう云つてから、震旦九郎に向つて
『少時休息だよ』といふ。
震旦九郎は、心得て、鷹匠の一團へ、左の手を高く上げて振つて見せた。鷹匠達はまた腰を下した。
『待つてやらう』と滿仲は、石の上に腰をかける。
曾利平は、山道の登り口で、ヒラリと馬から降りたかと見ると、石ころ道を跳ねながら懸命に驅けのぼつて來る。
『曾利平イ』と滿仲。
『唯今、そこへ……』と曾利平。
『早ウ來ウい』
『心得……』
呼びかはしながら曾利平は驅けのぼり、息を切つて滿仲の前にやつて來た。

『コレ、何事だ？』

『はい、權中納言兼通卿からお使者でござります』

『又か――で、待たせてあるのか？』

『はい、泉殿に通してござります』

『よし／＼。俺は獵をして居る、直ぐには歸れん、夕景まで待たせて置け』

『しかし……？』

『いや、構はん！。俺は武人だ、公卿衆の泣き言ばかり聞いては居られん。泣き言よりは獵だ、獵だ！』

『なるほど！、左樣でござりまするな』

と云つたかと見ると曾利平、向直つて悠々と山を降りて行く。

『九郎、始めるぞ！』と滿仲。

『おウ――』

震旦九郎は、鷹匠の一團に向つて、右手を空へ、高くさしあげた。

二

多田ノ館では、泉殿で、權中納言兼通の使者沙門永西と滿仲の長男賴光が對坐してゐた。

賴光は後世『鬼退治』『土蜘蛛退治』の傳説を生まされた程の豪の者であるが、今は未だ若輩で、父の滿仲も賴光が父の勇名を凌ぐとは知らなかつたらう。

その賴光は父滿仲ほど單純でなかつた。機略的であつた。武力も必要だが、一身一家の榮達を圖るには是非とも藤原氏

と結ばなければ手も足も出ないことを父滿仲以上によく知つてゐた。

で、今日も權中納言兼通の使者を請けると即刻早馬を鳥脇山の狩場へ駈けつけさせる一方、自身使者を出迎へて泉殿に招じ、應對してゐるのだつた。

『相憎と父は狩に出かけまして不在でございます。が、迎への者を驅けさせました故、程なく歸邸いたしませう』

『折角のお遊びを沮みまして相濟みませぬことで——』

永西は、法衣の袖の下で珠數を爪繰つてゐる。黒紫檀を透して、水晶の玉が次ぎへ〳〵繰られてゐるのが見える。

『何樣父は武一圖、狩は戰と心得てゐるやうでございます』

と頼光、微笑していふ。永西が『お遊び』と云つたのを、輕く押へた態である。まつたくうまい呼吸だ。

相手は父滿仲の武力を目當にやつて來てゐる。その使者が狩と聞いて『お遊び』と云つた。それをつかまへて抗議とも戲談とも謙遜ともつかない調子で『狩は戰』と云つて頼光は微笑んでゐる。表面如何にも敬意を拂つて恭しくしてゐるやうで、肚の底は『かうなのだぞ』といふところを、相手の胸に打込んで行く——といふ緩急のうまさ。

永西はやんわりと一本打込まれた恰好になつたが、藤氏一門の權勢家兼通の使者として京師からわざ〳〵多田郷まで來たのである。悪びれず、自若として

『左樣でございまするな、私どもも佛に仕へまする者には武家の作法は、不案内でございますが、佛門にも佛敵と申すこともございますやうで、武家の狩は、私どもも不斷の潔齋、精進に當りませうかな』

と、永西も達辯だ。

『なるほど、父滿仲も私奴も冥加に遠い下根でございますが、弟どもの中の一人は横川の源信僧都のお弟子に參つて居ります、佛家では一人出家すれば九族天に昇ずと申されてあるさうでございますな』

賴光は、さういふのだ。どうにも相手を外らさない賴光だつた。

『左樣。出家の功德でござりまする』

永西も、釣込まれて『それは御奇特』とも『そのお名前は？』といふやうなことは云はない。弟が出家してゐると聞いても大した事のやうに思つてゐない態度である。

滿仲の歸館を待ちながら、かうして賴光と永西とはお互に降らず、またお互に相手を外らさずいろ〳〵と話してゐる。

一方。鳥脇山の滿仲は、飛ぶ鳥、山肌を驅ける兎に鷹をかけさせては、いい氣持になつてゐるのだつた。

さうして夕方になつて、鴻二十餘、丹頂鶴六羽、兎十餘頭を獲物に、滿仲の一行は蟲生の堤を多田郷へ引揚げる。

先頭は震旦九郎の率ゐる鷹匠の一團、その次ぎが滿仲賴貞父子、それに續いて水桨五人。あとは雜夫の一團である。

『おい、賴貞』

滿仲は、胸を張つて正面を向いて步きながら聲をかける。

『はい』

『俺と並んで步るけ』

心得て賴貞は、滿仲の左に寄つて一緒に步いて行く。

『使者は、待つてゐるだらうかな？』

『待たせてあるのですから、待つてゐませうな』

『うム。賴光が相手をしてゐるだらう。お前と賴光は、うまが合はんやうだが、彼奴は豪いぞ』

『はい、豪いには豪いやうです』

『サ、それが可かん！。豪いには豪いやうです——可かんな』

『はい。が……』

『まアいゝ。それはそれだ。それとして、今日の使者の兼通卿の一件、俺は會はんでも使者の口上はわかつてゐる、弟の館にばかり出入せずと俺の館にも遊びに來い――といふ口上にきまつてゐる』

滿仲は、さう云つて兩腕を組んだ。さうして頸を引いて、ぐん／＼歩く。

『が、俺は兄御の兼通卿よりは弟御の大納言兼家卿が好きだ、好きな人の所へは行くが嫌ひな人の館へ行く氣にはなれん。弟の兼家卿の方が地位も位も上だから、滿仲は權門に阿る奴だと、いふ者があるかも知れんが――』

滿仲は、考へ深さうに、一語々々間を置いてさういふのだ。

實際滿仲のいふやうに、兼通と兼家は兄弟でありながら兄の兼通は權中納言、弟の兼家は大納言で右近衞大將を兼ねてゐるといふ勢ひであつた。兼家は父師輔に愛され、冷泉院上皇、圓融帝に殊遇を忝うして、兄兼通よりは常に上位高官にあつた。

『な――若し、これが逆で、兼通卿が大納言、右近衞大將で、兼家卿が權中納言であられたとしても、俺は兼家卿のお館に行くな』

『それは――さうでせう。父上の目には兼通卿よりも兼家卿の方が公卿、月卿雲客の氣品があるやうに見えるのでござりませう』

『うム。そこもある――』

『が、兄上は――』

『賴光が――といふのか？』

『はい、兄上は兼通卿にも良くして置かうとしてゐますな。そこが、豪いには豪いところなのであらうと思ひますな』

「うム」

と呻るやうに云つたきり、満仲は、それから多田ノ館に帰り着くまで一言も口をきかなかつた。

満仲にして見ても、萬更兼通を決して憚らない譯ではなかつた。權勢の爭奪が盛んで、藤氏一門のうちでも、昨日まで權勢を張り、門前に車輿絡繹であつた家が今日は筑紫に左遷されて明日は門前雀羅を張る——といつたやうな例はいくらでもあつた。

で、若し兼家が躓いた、となると、そこに出入してゐた人々は絲の切れた紙鳶同様、次ぎの絲につながるのを待つてゐなければならない。待つても／＼繋がらないとなると、野盗の群にでも成下らねばならない。

これも例のあることで、近年京師には夜盗群盗横行し、時には殿中の兵庫に押入つて武器を奪ひ、右近府西司を襲ふて物品を強奪し、馬寮を脅かして馬を盗み出すといふやうなこともあつた。これら夜盗の多くは一方の權門に出入してゐるうちに、その權門の没落に遇つてからの自暴自棄やら鬱憤晴らしに、出没してゐる連中であつた。

満仲は、武將なので、さうした夜盗群盗の検擧捕縛に働いて、捕へて見れば萬更知らぬ顔でもなかつた——といふやうなのもあつたのだ。が、源經基の子として満仲ほどの家系に生れ、満仲ほどの地盤を持つてゐれば獨立性があつて寄生木生活を本位としてゐないのだが、それでも出入する權門の榮落に影響されることは非常のものだつた。

で、満仲も、今のところ聲望隆々たる大納言兼家に良くして置いて異變の時には用心棒になる覺悟もしてゐるのである。

そこへ、近頃になつて、兼家とは兄弟ながら犬と猿の仲である兼通から屢々招待の使が來るやうになつたのである。

満仲の長子頼光は、兼家も兼家だが、兼通にも萬更でないやうに仕向けようとしてゐる——これが、満仲にとつては、どうも痛し痒しなのだ。

賴貞は、さうした父滿仲の肚の底を知つてゐる。そこで『兄上は兼通卿にも良くして置かうとしてゐますな。そこが、豪いには豪いところで……』と云つたのである。
それが、滿仲の胸にピンと響いた。滿仲にして見ても、底を割つて見れば兼家、兼通の兩方に良く思はれたい氣持がある。
で、滿仲は、むつちりと默つて了つて、多田ノ館に歸り着くまで、むつかしい顏で、鹿皮の行縢を蹴つた譯であつた。

三

攝政藤原伊尹は、病んで、再び起つ望みを捨てなければならなかつた。伊尹は上表して攝政を拜辭した。
順位、家門から云へば右大臣賴忠が關白太政大臣に上らなくてはならない事情にあつた。けれども兼家は冷泉院上皇、圓融帝の御信任が篤い。兄兼通の位を凌いで大納言にあるほどの兼家だつた。
兼家は、ひそかに奏請して、關白太政大臣にならうと企てた。
權門に阿ることのほか、仕事のない面々は何所から聞き出したか『次ぎの關白太政大臣は兼家卿に内定してゐる』と言觸らしはじめたのである。
で、周圍からさう云はれると兼家もその氣になつて、何時の間にか自分も關白太政大臣になれるやうな、なつたやうな氣がし始めた。
さうして關白太政大臣にのぼる支度用意に、甞役奔走し、懸命になつてゐるのだつた。
多田滿仲は、多田郷から京師にのぼつて二條の兼家の館に詰切り同然に、努めてゐる。滿仲は得意だ。

今宵は骨体め——といふことにして、滿仲は八坂社に近い旅舍に戻つて來た。

『酒盛りだ、酒だ！』

滿仲は上機嫌だ。一座は賴光、賴貞の兄弟と、震旦九郎と曾利平と、水粲五人。

『賴光、ドウだ？』

『何でございます？』

『空とぼけるな、兼家卿萬歲だ、俺の目は黑いと思はぬか』

『……』

賴光は苦笑してゐる。

『兼家卿萬歲！。俺は、疾うからかうなると睨んでゐたンだ。これで多田滿仲、力瘤の入れ甲斐があつたわい。賴貞、お前はドウ思ふ？』

『結構でございまするな』と賴貞。

『可かん！、お前の返事の仕振は、ドウも可かん』

滿仲は、ぐツと一ぱい呷つて

『おい！、九郎、一番相撲へ』といふ。

『へい、相撲でございまするか？』

震旦九郎、不意を食らツて、杯を置きながら滿仲を見る。

『さうだ。オイ曾利平、お前と九郎と相撲て見い』

と滿仲は、醉が廻つて、怒氣をさへ含んでゐるやうだ。兼家が關白太政大臣になるに就て滿仲は欣び樂んでゐるのに、

息子の頼光と頼貞の二人が、あまり嬉しさうな顔をしない。満仲は、それが気に食はないらしい。

曾利平と震旦九郎は、縁から庭に下りて烏帽子を外し布衣を脱いで、裸になつた。

舵ノ兵衛は結び燭臺を縁に運び出した。

當麻蹶速と野見宿禰には違いかも知れないが震旦九郎は總身に黒毛が生えて、肩から脊へ黒裘を被たやうに見え、胸毛も黒々と一ぱいだ。

曾利平は、仁王尊のごとく筋骨隆々、全身赭黒く一枚肋かと見える胸のあたり、四股を踏んで、両腕を左右一ぱいにウンとのばした。

震旦九郎も、ドシン、ドシンと四股を踏み試みる。

満仲は、眸を張つて酔眼を据えてゐる。

『ヨウ！』

『ヨウ！』

左右に開いたと見ると、双方拳を固めて彈き合ひ、足をあげて蹴りつける。肩と肩と打突り合ふ。相撲と云つても手に制限も約束もない。打倒され、投倒されるまでの勝負、滅茶苦茶に殴り合ひ蹴り合ふのだ。

『コレ！、これ〱ッ、九郎、ヤ、曾利平ツ、えい足を！、足を！』

と満仲。赫ツ赫ツとなつて怒鳴る。

が、双方互角なのか、お互に日頃の友達なので加減をしてゐるのか、なか〱勝負がつかない。

『えゝ、弱蟲奴！。俺が一番』

満仲は、呻つて立上つた。さうして手早く指貫を脱ぎ、素裸になる。

頼光と頼貞は、苦笑ひをしてゐるだけで、手傳はうとしなければ、また止めようともしないで、見物してゐる。

頼貞は、心中『なるほど親爺は老ひても、筋骨はシッカリしてゐる。たゞ肌に光澤がない、干大根のやうなところがあるな。が、何しろ頑健だなア』と思つてゐる。

頼光は『年寄の冷水で、仕様がない、震旦九郎、曾利平のどちらが相手になるにしても、若し間違つてゞも親爺を手酷い目に逢はしてくれねばいゝが』と思つてゐる。

息子二人が、どう思つてゐやうと一切分らず頓着のない滿仲、庭に下りて

『おい！、止めい』

曾利平と震旦九郎。組合つて揉み合つてゐたが、ハッと左右に別れる。

『曾利平、俺が相手だ。ソレ行くぞ！』

と云つたかと見ると滿仲、右拳を固めて曾利平の横面をブンと張りつけた。

まだ構もつけてゐないところを、毆られたので曾利平、赫ッとなつて、右足を飛ばして滿仲の左の腰の番ひどころをバッと蹴りつける。

『うゝ……』

滿仲、後へ三足ばかりタヽヽ、ッとよろけて、踏止つた。

が、次ぎの瞬間、曾利平は『アッ、失策つた』と思つたのである。毆られた刹那で、主人も糞もなく蹴りは蹴つたものの、よろけるところへ、飛込んで腕では首根ッこを、足では足を、打ッ違ひに働かせて、撥取り型に打倒す——ことは思ひ止り、遠慮しなければならなかつた。

『フウ……フウ……來い！。來い曾利平、來い』

詰られて滿仲、膝の調子を失つた氣味合ひで、踏戻しかねてゐる。が、口では下手を受けてやつてゐるやうに『來い來い』とやつてゐる。

けれども曾利平は、踏出して行く氣になれない。行つてポンと當たれば、ヨタ〳〵ツと來るにきまつてゐたからだ。

『ヨウ！』と曾利平、氣合だけは力んで、左右の拳固を前へグツと突き出した。

途端に

『勝負あツた！』

と云つたのは賴貞だ。賴貞は先刻から吹き出しかけてゐたのを、押へてゐたが押へ切れなくなつて聲をかけたのである。

『勝負あツたか？』

滿仲は、さう云ふと足の砂を拂つて緣に上つた。能ノ兵衛と綱ノ兵衛が前に進んで裝束をつける。

殿且九郎と曾利平も、もとのやうに布衣を着て座に直つた。

賴光は始終を、笑つて見てゐた。常の親爺なら『勝負あつた』と云つた時『俺が勝つたのだな？』とか、なんとか云はねば承知しない親爺だが――と思つてゐるのだつた。

滿仲は、罅の入つた盃を捧げてゐるやうな賴りない氣持になつて、杯を舐めねばならなかつた。

滿仲にして見れば、自分が味方をしてゐる兼家が關白太政大臣にのぼるといふことの前祝ひ、從つて滿仲も立身し國守附將軍に任じられるであらう前祝のつもりで、かうして酒盛りを始めた。けれども賴光は兼家が關白太政大臣にのぼることを信じてゐないやうである。それは賴光のことだから『いよ〳〵就任して見ねばわからぬ』と考へてゐるのかも知れない。が、俺が、かうして歡んでゐるのだから一緒に歡んでくれるべきだ、俺は彼等の親ではないか、親だ〳〵――と滿仲

は思ふのだつた。

むしやくしや晴らしに相撲を取らして見れば八百長臭く、自分でやつて見れば、舟利平の一蹴で腰が浮いて了つた――さすがの滿仲も憂欝にならざるを得ない。

で、變に頼りない氣になつて、押し默つて滿仲は酒をチビリ〳〵飮んでゐる――

夜は次第に更けてゆくやうである。近くの寺で鐘の音がしてゐる。その鐘の音が滿仲には遠いところから聞えて來るやうにも、近くからのやうにも思はれだした。

四

翌朝。

滿仲は、意氣揚々として二條の兼家の館に伺候した。

今日、或は兼家が召されて關白太政大臣の宣下があるかも知れない――といふ豫感が何故か滿仲にはあつたのである。

四足門を通つて中庭を通る。左は寢殿、右は池になつてゐて、池には中島があり橋が架つてゐる。

滿仲は寢殿の前を通つて、東の對屋に入つた。

そこでは多くの工人が、新調の五尺屛風に黄金の鐶を打つてゐた。唐錦の荷を縫ひあげてゐた。鏡筥を拭いてゐた。天井から懸ける香嚢を調へてゐた。燭台を拭きそろへ、几帳の折目を調べてゐた。

滿仲は、さうした光景を見ると、いよ〳〵宴禮の準備が始つたのだ、いや、整ふてゐるのだと思つて、包み切れない歡びを、眼皺に湛え、頤髭を撫でた。

公卿衆仲間でやかましい宴禮といふものを俺はよく見て置かねばならん、俺も何時宴禮の必要のある身分になるかも知

れん。が、いや、その時は金々！。金さへあれば、有職故實に委しい世帶の苦しさうな公卿を顧問に雇へば、萬事遺漏なくやつてくれるだらう。が、しかし俺も多少その方面の心得がある方がいゝな――

滿仲は、そんなことを考へてゐる。樂しい空想である。

と、そこへ、水色水干の童子がそゝくさと出て來て滿仲の前に手を突いた。

『多田滿仲樣。お召しでござります』

『おゝ、案内を賴む』

と滿仲は、衣紋をつくらつて、童子に伴れられて對屋を出て、渡廊から寢殿に參入して行く。

寢殿は正殿で主人の起臥する所、南面して建てられるのが普通であつた。

滿仲は、兼家卿は帳台に坐つてゐらるるだらうと思つてゐた。綾羅金繍を垂れた帳台に坐つてゐる兼家卿の高雅な容儀を心に描いて參入して來たのである。

が、兼家は几帳の前に、脇息に凭つて唯一人坐つてゐた。

滿仲は、恭しく挨拶をした。

兼家は、鷹揚に、それに答へた。が、その調子が常の兼家でない。

滿仲は、不安に襲はれた。思ひがけない不安が、むく〳〵湧きあがつて來る――

『滿仲』

『はゝ……』

『わしは、負けたよ』

『ト……とは、如何なことで？』

『兄兼通が、關白殿になられるさうな』

兼家は、笑つた。淋しさうな、遣瀨無さうな、遣りどころのない憤り、失望を包んだ笑ひであらう。

滿仲は、信じられないやうにも思ひ、信じなくてはならないことのやうにも思ふ。

兼家は、兄兼通に負けた事情を、滿仲に語つて聞かせた。

それは、かうである——

昨日まで一切は都合よく兼家のために運ばれてゐた。が、昨日晝過ぎになつて、決定的に兄の兼通が關白太政大臣にのぼることになつたのだつた。

それは、兼通が主上の御生母にあらせられる村上皇后の御遺書を叡覽に供へたからであつた。

兼通は、村上皇后に乞ひ奉つて『關白の職は、たとへ官位の淺深はありとも、必ず兄弟の順を逆へぬやうに』との御趣旨の御遺書を拜受してゐた。

さうして兼通は萬一の時にそなへてゐたのである。そこへ今度伊尹の攝政拜辭となり兼家が關白太政大臣の位にのぼらうと企てゝゐることが明かになつた。

それと知つて兼通は昨日參内して、母后の御遺書を叡覽に供へ奉つたのであつた。

申すも畏い極みであるが、至孝に渡らせられる主上は御生母の御遺旨を奉じさせ給ふて關白太政大臣には藤原兼通を以て任ずべしと御決定遊ばされた——兼家は、さう語つた。

兼家は、絕望に近い氣持であつた。

滿仲は、兼家の語つたことの當否はともかくも事聖慮に出でたる以上、最早兼通が關白太政大臣に任じられることは動かすべからざるを信じなければならなかつた。

滿仲は、兼家の館を退出すると直ちに一族を率ゐて京師を發して多田郷に引取つた。

兼通關白太政大臣陞任の式には、賴光を名代として參列させ、滿仲は賴貞を相手に多田ノ館に引籠つてゐた。

その後、賴光が關白兼通に眷遇をうけてゐるのを他所目に見ながら滿仲は、毎日のやうに山野を驅け廻つて鷹を放ち、弓を射、網を打つた。

夜は宴を張り、女にも戲れた。

滿仲にして見れば、兼家の失意に伴ふ自分の失望もさることながら結果としては息子の賴光に負けた氣がしてならない。

賴光奴、內心鼻をうごめかし居らう――と思ふと、賴光が自分の子であるだけに、滿仲は氣に入らない。

で、俺は老ひても、まだおのれらに敗けはせぬぞ、といひたい。それを狩で、酒で、女で、現はして見せてゐる氣持であつた。

賴貞は、滿仲と一緒になつて、狩に遊び、酒、に遊び女に戲れて、父滿仲の行狀を傍觀して、いつもニヤリ〳〵笑つてゐた。

さうした滿仲の行狀を傳へ聞いて、哀しく思つたのは橫川の源信僧都のもとにゐる源賢であつた。

源賢は滿仲の第五子であつたが、他の兄弟が武人である中に唯一人出家して佛に仕へてゐるのであつた。

源賢は、師に乞うて暇をもらひ、一笠一鉢の旅僧の姿で多田郷に歸つて來た。

歸つて來て見ると、滿仲は、慈愛深い父の姿で、歡んで源賢を迎へた。

『おゝ、よく戾つて來た、源信僧都も御壯健かな?』

滿仲は、眼皺を寄せて、源賢を見る。

見るたびに、淸淨さうに、貴げに生長して來る源賢――滿仲には、さう思はれる。

行く〳〵は、なにがしの聖と稱ばれるやうにならう――滿仲には、さう思はれてならないのだ。

源賢は、今度こそ父を苦諫して罪深い殺生を止めさせよう、滿仲がこれまでに斬つて來た人々、斷罪した人々のために、切めて供養でもするやうに諫め歎いて見よう――と決心して山を降つて來たのであつた。
だが、來て見れば父の相貌は惡鬼の姿でもなく羅刹の相貌でもなく、慈愛の溢れる父だつた。
幾分か、前よりは相貌にも氣力にも衰えさへ見えてゐる。またそれだけに温しい父に見える。
源賢は、云はう〳〵と思つて來た諫言も、その決心も鈍つてくるのをどうすることもできないのだつた。
その日は、そのまゝ暮れて翌日になつた。
滿仲は早朝臥床を出ると
『狩に行くぞ』と家中に命令した。
源賢は、滿仲の前に出た。
『お早う、疲れたであらう。ゆつくりと眠れたか、うム、臥て居ればいゝのに』
『はい、朝は早うござりますので……』
『うム、さうだらうな。朝の勤行があるで、お山の朝は早からう』
『はい』
『俺は狩に行く、お前は佛に仕へる身だから行けぬか。俺と一緒に……どうだ、見物ならよからう。山で食ふ飯はうまいぞ！。山海の珍味といふ奴は、俺からいへば、海へ出て食ふ飯の味、山で食ふ飯の味だ。金襴の上で食べる美味佳肴なんてものは、アレは飾りものだ。どうだ？。あツはゝゝ』
滿仲は、上機嫌である。
『それは……』と云つたまゝ、源賢は目を伏せた。
『うム？、相變らず俺は元氣だらう、あツはゝゝゝ』

『しかし……』と源賢は懸命だつた。
『うム、しかし!』と満仲。
『殺生は、深い罪業でござりまする……』
『いや、俺は武人ぢや、止むを得ん』
『後生のことも御考へ下されまし……』
『後生は頼まん、いや、後生のことはお前に頼む。ソレ一人出家すれば九族天に昇ずといふぞ』
『それは、譬でござります、出家の功徳の大きいといふ譬でござります、兄上も最早近く昇殿のかなふ官位におのぼりになると承つて居りますれば……』と源賢。

満仲は、それを聞いてゐる間に、だん〳〵嚴めしい顔になつて來た。さうして
『源賢、お前は兄の頼光に頼まれて來たな!』
『いゝえ!、左様な……』
『いや! 頼まれて來た!。俺の目は黒いぞ。頼光奴、お前に言ひ含めて、俺を隠居させようと図つてゐるのだ。殺生を止めよ――それから髪を剃れ、坊主になれよ、だらう。まだ〳〵俺は頑張つとる!。息子どものまゝにはならん。まアえゝわ、俺はお前を咎めはせん。休んで居れ〳〵。今日は早目に切上げて戻つて來る』

満仲は、打萎れてゐる源賢を見てゐる中に、だん〳〵やさしい父に返つて來る。

源賢は、うなだれたまゝ、凝ツと涙をこらへてゐる――

五

關白太政大臣兼通は、大患だつた。

兼通は、再び起つことはできないのではないか、と思はずにはゐられなかつた。

醫藥、加持祈禱。手をつくすだけ盡して見ても、その驗がない。

が、それよりも最も強く兼通に『わしは死ぬのかも知れないといふ豫感』を與へたのは近頃見舞の車馬が兼通の門前にあまり訪れなくなつた事。

兼通の病臥が知れ渡つた當座、堀川の兼通の門前は、見舞の車、輿、馬で身動きもできない有樣であつた。

それが今は、稀に、と云つていゝほど見舞の車も馬も來なくなつたのである。

凝ツと病臥してゐて、兼通は、何故さうなつたか――を思ふて見た。

さては、誰も彼も次代の關白職に就くだらう誰かの館へ出入するのに忙しくなつたのだ。わしは死ぬものと見極めが付いたのだ――兼通は、さう思ふよりほかはなかつた。

側近の者に、それとなく京中の樣子を探らせにやると

『近頃は、東三條の兼家卿の館に多くの方々が出入してゐられるさうにござりまする』といふ。

それを聞くと兼通は『おのれ!、死すとも彼奴には』と思つた。

しかし、病が篤くなるに伴れて、氣も弱くなり、時には、次ぎの關白には弟兼家を候補者として奏請してもいゝ、兼家も相當の器量を持つてゐるから――とも思ふのであつたが、その兼家は今度の病臥の最初から見舞ひにも來なかつた。來さうにもなかつた。

兼通は、死を前に、淋しい自分を凝ツと見てゐなければならない氣持だつた。

そこへ、或る日。

兼通の館の前に、威勢のよい前駆の士の人拂ひの聲が聞えて來た。

病床の兼通は、それを聞いて侍臣に

『誰が來るぞ？』といふ。

侍臣は、心得て下つて行つたが間もなく引返して、平伏した。

『東三條卿の御車でござりまする』

『ナニ……弟の……よし〳〵、此所らを淨めい、わしの裝束を出してくれ』

兼通は、歡びに堪へないものゝやうであつた。

兼通は病み衰へた手を振り、瘦せ尖つた頰を撫で、顎の髭をなで、侍臣達を指圖するのだつた。

これまで爭ふたが、やはり兼家はわしの弟だつた。肉身の弟だつた。兼家はわしの重態を知つて見舞ひに來た！。これが本當だ！。これが本當なのだ！。わしも折れるぞ兼家よ。わしは永い事はない、いや、萬一幸に生きながらへることがあつたとしても、わしは今日かぎり關白太政大臣の位を拜辭する！。さうしてお前を奏請する！。お前の見てゐる前で、奏請の文書を書く。印を捺すぞ！。

兼家よ！。わしはお前に後事を托さねばならぬ！。

兼通は、心で、叫び、兼家に呼びかけてゐるのだ。

もう着到の知らせが來るか――まだ來ない。いや、そんな儀式張つたことは止して、兼家一人、そゝくさと此部屋へやつて來るのだらう。さうだ兼家はわしの弟だもの、弟が兄の部屋に入つて來るのに、仰山なことはいらないことだ……

だが、兼家はまだ來ない。

兼通は、待遠しかつた。心氣が昂つて背汗が額に滲み出して來る。

『オ……弟は、ド……どうした？』

『はツ……』と侍臣。

『ドウ……どうした？』と兼通。

『はツ、御通過でございました……』

『ナニツ……』

兼通は、ヨロ〳〵ツと起上つた。

『おのれ！、何用あつて參内か……兄の館を素通りにして……ヨシツ、供揃をせい！、わしは最後の御用を勤めて見せる！、供……供……』

兼通は、冠を出させ、裝束をつけさせ、手水うがひを取つて、ヨロ〳〵と車に乘つた。

兼通急の參内である。

禁中に到着して見ると、兼家はまだ拜謁を得ないで、溜に控へてゐた。

兼通は、伏奏して退下して來ると、藏人頭を呼んで兼通最後の除目を發表した。

右近大將兼家は治部卿に

權中納言濟時を右近大將に

といふやうに、弟兼家を左遷したのである。さうして關白太政大臣には左大臣賴忠が就任することになつた。

兼家は事の意外に驚倒せん有樣だつた。兼家は今度こそ關白職にのぼれることだと信じてゐた。衆目もさうだつた。

殊に、兼通重患と聞いた多田滿仲は、今度こそ兼家卿萬歲だと信じてゐた。それ見ろ——と賴光の顏を見てやらう、滿仲は、それを樂んでゐた。

さうして今日の參内で一切は決定すると思ひ、東三條の兼家の館に入つて、その吉報を待ちあぐんでゐたのである。

が、結果は右近大將から治部卿に貶せられたといふ凶も凶、彼にとつては霽天霹靂の悲報を聞かねばならなかつた。

満仲は、兼家の歸館を待たず、また匆々と多田郷へ引揚げて行つたのである。兼家卿のお顏を見るに忍びない――満仲は、さう思つた。

満仲は、また狩に、山野を驅け廻つた。

その頃の満仲の行狀を記したものに

――年は既に六十に餘りぬ、殘の命いくばくにも非ず。見れば鷹四五十を繋きて、夏飼さするに、殺生量り無し、鷹の夏飼といふは、生命を斷つ第一の事也、亦河共に簗を打たせて多くの魚を捕り、亦多くの鷲を飼ひて生類を食しめ、亦常に海に網を曳かしめ、數の郎黨を山に遣し鹿を狩ること隙なし。これは我居所にして爲る所の殺生なり。其外に遠く知る所々に充て殺さしむる所の物の員計へ盡すべきに非らず。亦我が心に違ふ者あれば、蟲など殺すやうに殺しつ、少し宜しと思ふ罪には足手を切る――

といふ有樣であつた。が、世の中に階級の貴賤が甚しかつた當時のことであつた。人間一人を蟲など殺すやうに殺しても、満仲には、さして非道を働いた氣はしなかつたのかも知れない。

賴貞は、さうした父の満仲を見てゐたが、だん／＼氣力が衰へて行くのが目立つて來るやうに思つた。

淋しさうな後姿なあ……と思つて、父を見る日もあつた。

あんなに我武者羅に荒れてゐるのは、父としては最後の氣力を振り絞つてゐるだらう、消える前の火なのだ。賴貞は、さうも思つて父満仲を見てゐた。

六

横川にある源賢は、いよ／＼満仲の行狀を哀しいものに思つた。

もう一度、父を諫めて見よう――さう決心した源賢は、師の前に出て、子としての心持をのべた。すると源信僧都は、

『よく分つた。では、御身一人、先づ多田へ歸るがよい。わしは覺運阿闍梨をお誘ひして多田へ參らう、萬事はその上のことにするがよい』

といふのだつた。さうしてまた

『それに就ては、手立を試みねばなるまい』と云つて、源賢に一策を授けた。

それは先づ、滿仲濟度のために覺運、源信の二人が多田へ赴いたのではないといふことにする事であつた。

源賢は師恩の有りがたさに、心を躍らせながら急いで多田に歸つた。

歸つて見れば相も變らず父滿仲は毎日の狩殺生である。

二三日の後、使者があつて『覺運阿闍梨と共に箕面の御山に詣でしが、近くを通るなれば便するぞ』と源信僧都からの文だ。

源賢は、父滿仲にそれを見せた。

『ほゝウ、これは止事なき貴き人々、御立寄は願へまいかな？』と滿仲。

『左様でござります、御二方とも公の御召にも心に叶はねば參られぬ方でござりまする』

『なるほど――だが、弟子のお前から願へば御立寄下さるかも知れぬぞ』

『はい、では一應御願ひ申して參りますことに……』

『それがよい、それがよい』と滿仲。

源賢は、急いで二僧の休息してゐる寺へ行つてその由を傳へた。

源信僧都と覺運阿闍梨は、滿仲の館に到着した。

滿仲は手を擦つて有がたがつた。只管恐懼して饗物なども清淨にも清淨を選ぶのだつた。

源賢は、滿仲に云つた。

『思ひのほかの御立寄でござります、この時に佛像經文の御供養をなされませ』

『願ふてもないことぢや、お前からお願ひ申してくれ、賴む』

滿仲は、直樣畫工に命じて阿彌陀佛の像を描かさせ、經卷を經机に積みあげさせた。

その翌日、寢殿は佛經供養所に當てられ、覺雲阿闍梨、源信僧都は因緣因果を說き經文の有りがたさ、佛の慈悲を說き、殊に源信僧都は聲涙ともに下る慨があつた。

滿仲は涙止め敢ず、手を擦つて有りがたがり『年は罷り老ぬ、罪は數知れず作りて候、何卒滿仲を佛道に入れさせ給へ！』といふ。

『しからば、明日早旦に』といふことになつて、終夜讀經となつた。

滿仲は、一族郎黨を寢殿前の庭に呼集めて命令した。

『俺は不思議の結緣で、明早朝出家する。俺は永い年月を兵に依つて暮らして來た、しかし滿仲が兵の道に立つのは今夜限りだ。お前達、その心得で、今夜は俺を良く護つてくれ！。滿仲最後の兵の道だぞ』

郎黨達は、甲冑をつけ弓矢を取り、篝火を焚き、滿仲の館を三重四重に圍んで警護に當るのだつた。

東の空が白むのを待つて滿仲は齋戒沐浴、剃刀のあたるのを待つてゐる。

その間に鷹屋の鷹は悉く足緒を切つて大空に放たれ、川に掛けた魚簗は切崩され、數十帖の網は切放された。これがそのまゝ放生會である。

滿仲は、滯なく出家した。

けれども聖人達は、まだこれだけでは道心が元に戻り、殺生を又始めるかも知れないと危ぶがつた。さうして此際一層有りがたい心にならせて置く必要があると考へて、この上にも一策を用ふることになつた。

——菩薩の裝束を十具ばかり持たせたりける。笛、笙などを吹く人どもを少々屈ひたるに、それを着せつ。かくて池の方に隠れさせたり。新發意（滿仲）の出で來り、道心の事どもいふ程に、池の西にある山の後より笛、笙など吹き立つる。新發意こは何の樂ぞと怪しめば、聖人達不知顏にて、何の樂にかあらむ、極樂の迎へなどの來るは、このやうにや聞ゆらむ、念佛唱へむと云ひて、聖人達ならびに弟子とも十人ばかり、諸音にて貴き音を以て念佛を唱ふれば、新發意手を摺りて貴ぶ事限無し——

といふ結果になつた。まだ、それはかりではなかつた。

滿仲が、とある障子を引開けて見ると、そこには金色の菩薩が、金蓮華をとつて靜かに坐し給ふてゐたのである。

——新發意これを見つけて聲を放ちて泣き、板敷よりまろび落ちて拜む、聖人達もこれを貴く拜む——

といふ有樣であつた。

賴貞は、廣い館の中の彼方へ行き此方へ行き始終の有樣を見てゐた。見ては例のごとくニヤリ／＼笑つてゐたのである。

七

程經て滿仲は、寒々とした後頭のあたりを平手でヒタ／＼叩きながら

『なあ、賴貞。かうやつて俗を離れると淸々といい心持だ、兼家卿も兼通卿もナニもないな。ああいふことは俗情ぢや。俺は何時お迎へが來てもよい。貴い聖人のお導きで、生きながら菩薩を拜した俺だ。極樂の樂の音を聽いた俺ぢや。ア、有りがたい！。俺は有りがたいとばかり思ふてゐる』

さう云つて滿仲は、口の中で念佛唱名するのであつた。

『さうですとも！』

賴貞は、さう云つて父滿仲を見た。見てゐるうちに賴貞は瞼が熱くなつて來た。(をはり)



春

谷譲次

1

瀬川は自分の受持の卓子に二三組の晩餐客を濟ませると、忘れてゐた喫烟慾に驅り立てられて、すひかけの葉卷をポケットにさぐりながら食堂を飛び出した。廊下には着飾つた人々が立つたり掛けたりして昇降機を待つてゐるばかりで、やかましい給仕長の顏は大椅子のむこうにも鉢植えの棕櫚のかげにもなかつた。瀬川は常連のたれかれの笑顏のあひだをすり拔けて、いつもの小宴會用の別室へ逃げるやうに滑りこんだ。

瀬川が日本を出て、亞米利加ぢうをあちこち流れ歩いた末、このM州のD——市へ落着いてからでも、もう十二年になる。彼は四十あまりだつたが、見たところは

まだ廿歳代だつた。この十二年のあひだ瀨川は一たい何をして來たか。明けても暮れても午後の一時過ぎに場末の安下宿に眼をさまして、それからこの俱樂部の食堂へ出てきて晩餐の給仕をする。食堂は九時にしまつたが、夜つぴて地下室に給仕人仲間の歌留多賭博が行はれて、瀨川が俱樂部を出るのはきまつて朝の三時か四時だつた。

俱樂部はW廣場（スクエア）をまがつて小公園に面したホヰツトニイ・ビルデイングの五六七の三階を占めてゐた。會員は市長や判事や實業家たちとその家族で、かなりに四角四面の社交場だつたが給仕人は全部日本人だつた。それで割りに氣易に働けたけれど、仕事の最中に煙草をのむためには瀨川はかうして空（あ）いてゐる別室をそのときどきの隱れ家にしなければならなかつた。

窓のところに立つてそとを眺めながら、あわただしい二三服を味はつてゐる瀨川を、同じ給仕人服の石田が驚かした。石田はこつそり這入つてきて、自分も紙卷を一本取出して火をつけた。そして何故か薄ひげの生えた円い顏をにやにやさせて近づいて來た。

「何うだね？　儲かるかね？　閑散（ひま）かね？」

「ひまだね今夜は。馬鹿見ちやつた。」

「どうして？」

「さつき俺んとこの右の卓子にゐたおやぢさ、フラア教授とかつて。非道いよあいつは。牡蠣を三度も取り換へさせやがつて、立つて行つたあとに廿五仙が一つ轉がつてるなんて。」

「はつは。込められたね。あいつ古い會員（メンバア）だが質が惡いよ。せんの嚊あを追ん出しやがつて——何んな女を伴れてた？」

「よくも見なかつたが若い——。」

「それそれ。費府から引つ張つて來たんだ。女優でね、かう嫌に頸の長い——。」

「あゝ。」

ふたりはちよつと會話が途切れて、一緒にめいめいの煙草の灰をふつと吹き落した。それから暫らく石田はしきりに何か思ひ出して笑ひを押さへてゐるふうだつたが、やがて食堂のはうにＪＡＺＺの奏樂が起ると、そのきつかけを待つてゐたやうに言ひ出した。

「見せやうかな。」

「何を。」

「見せやうかな、濟まないけど。」

「何だ。また詰らない物を有難がつてるんぢやないかな。」

「濟まねえな。ほら！こいつだよ。すまないね全く。」

石田はかう言つて瀬川の鼻さきへ握り拳を突き出した。手に何か四角い物を隱してゐた。

「何だ？」

「何だつて、さう矢鱈に見せられるもんか——こいつだ。See？」

石田が指をあけると、安價な金屬製の卷煙草入（シガレット・ケース）が手の汗で微かな水蒸氣を上げた。

「開（あ）けてみ給へ。」

瀬川はちよつと眞面目な顔にさせられて、その白い平べつたい小箱に指をかけた。

「あ！いけない！」

石田が小さく叫んで手を出したが、その時はばちんと音がして殻が弾き返つてゐた。なかは安つぽい金いろで、最初の

視線では何も見えなかつたほど、その地色と同じ黄金色(ブロンド)の毛髮が四五本、保護色のとぐろを卷いてゐた。瀬川は覗きこんだ。

「何だい、これあ。」

「どうだ、參つたらう。」

石川は迫るやうに言ひながら、幾分瀬川を擊飛する樣子で毛髮を摘み上げた。斷髮らしい短い金色の毛にふつと縱客のにほひがして、一ばん短い毛で眞ん中のところが縛つてあつた。その四五本の痩せこけた束が、ごく精緻な條蟲類か何ぞのやうに媚態を作つて石田の手にぶらさがつた。

「何だ、かみの毛ぢやないか。」

「髮の毛さ。女の。」

「何うしたんだ？」

「やつが呉れたんだよ。これにこれを入れて。ね、はゝはゝ。」

「ブロンドだね。」

「さうさ。ブロンドさ。」

「やつつて何處の女だい。」

「そりやあ言へないよ。いゝぢやないかそんなこと。」

「ブロンドは君、喧嘩つ早くて直ぐに引つ搔いたりなんかするつていふぢやないか。」

「けちをつけるなよけちを。けど、さうだな、何ていふか、つまりから感情が露骨なんだね。ミスタア・イシダつてわけで、やつとても大變なんだ。」

石川はじぶんと自分の言葉に非常な幸福を感じたらしかつたが、急に不安げに眼をしよぼつかせて、「いゝんだ。やつ

の keepsake なんだから、とにかく。」

と辯解するやうにそして主張するやうに繰り返すと、矢庭に手を伸ばして瀨川から箱を奪ひ取つて、元のとほりに毛髮を圓く寢かして覆をした。

二人は默つた。石田は笑はなければならないやうに無理ににたにたしてゐたが、瀨川は莫迦々々しい憂欝が押しかぶさつて來るのを意識した。なぜなら、石田が女から贈られたといふ紙卷入れは、大河原といふ佛蘭西の戰線から歸つて來た男に貰つて瀨川もおなじのを一つ持つてゐたからだ。たぶん大河原は巴里からその戰勝記念のシガレット・ケイスをしこたま仕入れてきて、それをD市の日本人の友達のあひだに大分ばら撒いたものに相違なかつた。その一つを貰つた石田が、出所を忘れて、いまどき女の贈物だなぞと噓をついて擔ぎまはつてゐるのだつた。金髮の拔毛は食堂うらの女使用人の洗面場へ行けば何時でもすこしは落ちてゐた。じつさい台所のグラス・パンツリイに働いてゐる波蘭女は金いろの斷髮だつた。だから石田は洗面場で皿洗ひ女のかみの毛を拾つて來て、これを大河原の佛蘭土産の卷煙草箱へ入れてかうして大事さうに持ち廻つてゐるのだといふことだけは瀨川にも直ぐにわかつた。しかし彼はそれを洗ひ立てゝ石田に不必要な恥をかゝせやうなどとは思ひも寄らなかつた。いゝ年齡をして詰らない眞似をすると思つても、べつに笑ふ氣になれなかつた。事實、石田が詰らない眞似をしてゐるとも瀨川にははつきり考へられなかつた。ましてかうして長く外國にゐて商品以外の女を知らない男たちには、すこしでも情事に似たすべてのものには絕對に神聖で、自他ともに何時でも陶醉できるのかも知れない。石田に女が出來て、彼女から毛髮の一部をシガレット・ケイスに入れて dedicate してきたといふ淡い錯覺が石田から瀨川に働きかけてゐた。それが現實に乘り移つてくるのを瀨川は決して拒まうとしなかつた。かへつて石田と石田の假想の彼女とがそれほど割りない仲であることに對して、彼はかすかな羨望を味はひさへした。それは不思議な氣もちでも何でもなかつた。暗默のうちにそのまゝ受け入れる妥協がついてゐたからだつた。もし石田が先に思ひつか

なかつたなら、瀬川が思ひ付いて實行してゐたらう。石田はそとから窓硝子を打つて消える雪片に眼をやつて、

「降るね、さかんに。」

と觀察してから事務的に附け足した。

「今夜も行かなくちやあ。」

「おやおや。」

瀬川はたうとう笑ひ出したが、頭のなかでちよつと「彼女」と灯の赤ぐらい寢室とを心描してみた。石田もあわてゝ笑つた。そして煙草のさきにぺつと唾をして消して歩き出した。ばたんと扉がかれの猫脊を呑んだ。石田の、それが特徴のすこしびつこを引く背ろ姿が、むこう側が暗いので鏡の作用をしてゐる窓の硝子に映つて前を向いたまゝの瀬川にもはつきり見えた。

石田が出て行つたあとも瀬川はごく自然に石田のうその惚氣をぼんやりと肯定してゐた。そのうちに次第に其のブロンドの女がありありと瀬川の腦裡にえがき出されて來た。それは石田の女のやうでもあつたし、やがてまた彼の女のやうにも思へてきた。

じつさい瀬川や石田に近づく女性はすべて青春婦だつたから、かれらは女はそれでいいものとして一こう疑はなかつた。つまり共有の女が一様に荒れた膚の所有主だつたので、心臓や戀愛となると何だか及びもなく高級な文學上の問題のやうに漠然と概念して、皆はじめから若手にきめてゐた。で、石田の場合のやうにほかにこつそりと自分だけの相手を想定するなどといふことは、それだけでも明らかに公約に反してゐた。瀬川は、あんな細工までして自ら慰めなければならない石田と、生じつかそれに理解のゆく自分が堪らなく可哀さうになつて來たが、それでも何だか無理からぬ事のやうに怺へて聲を立てゝ笑ひたかつた。

―― 下 ――

2

七階のそこの窓に立つと、燈火の洪水の底に眞下の歩道の半分から向うが見えて、ずゐぶん大きな石疊なのが、まるで酒場のすてんど・ぐらすの組合せ模様だつた。その上の光線の縞を裂いて、雜多な通行人が扁平に動いてゐた。女の帽子と毛皮の襟巻の下がすぐ細い脚になつて、それがちよこ才に出たり引つ込んだりして都會の8・―5・P・Mの行進曲を刻んでゐた。識りあひとみえて、二つの女帽子が立ちどまつて、すぐに駈け寄つて、それからちよつと驚いたやうに離れたかと思ふと、今度は帽子から腕が二つ出て組み合つて人の流れを避けた。かうして何時までも立ち話しをつゞけてゐる。ときどき笑ふらしく、帽子がいろいろに揺れるのを瀬川は窓から見おろしてゐた。

今年の恐らくは最後であらう雪が、灣からの風に乘つて、上層の濃灰色の闇黑をトウヰイドのゴルフ服みたいに見せてゐる。白いちらちらのなかにビルデングといふビルデングは斜にかしいで、それへ自働車の車頭燈（ヘツドライト）が crazy な直線を投げた。

GOLDEN GATE FLOUR
EVENTUALLY
WHY NOT NOW

の電氣看板が赤・青・黄・綠と眼まぐるしく變化して、くるくる中空に廻り出した。眞向ひのウイリアム・フオツクス劇場で「ますいりん・すらう」を封切りして、切符賣場に男女の一列があふれてゐる。白いけむりと黑い煙が建物の屋根の角

々にむつくりと凍りついてゐた。

PAGODA　CHINESECHOP-SUEY

DINNER　DANCE

$1,00　$1,00　$1,00

あるひはかうだ。

LUCKY　STRIKE

It's Toasted

これらのすべての電燈廣告の巨塔がそれぞれ商工業時代の樂しい役目と生活を有ちはじめた。色彩の海でもよければ音響の怒濤でもいゝ。

TEXACO　OIL

TEXACO　OIL

TFXACO　OIL

夜の散歩者は自動車を侮蔑する。

STOP

And then

GO

——＊——

交通巡査の桐油外套が雪と灯に濡れて白くぼつちりと光つてゐるのが、乾酪(チイズ)のかけらみたいに食慾的だ。女の足はCHICの藝術である。だから一せいに露西亞長靴(アシアンブーツ)をはいて、どれもこれもひどく生意氣だつた。

瀬川は煙草の火先を窓枠にこすり消して、上衣をつんと引つ張つたのち、左腕にタオルを直して部屋を出た。出たところを氣取つた音波がぶつかつてきた。食堂はウオルツだ。

ていんら・ら・らん・らあん・ら

ていんら・ら・らん・らあん・ら

It's 3 o'clock in the morning

といふ、あれだつた。毛むくじやらのH博士の手がP夫人のほそ腰を抱いてゐた。ミスPの息は無慚に上氣して般樂會

社々長W氏のすつぺりした頬に絡んでゐた。自動車王と辯護士の妻、海軍士官と銀行家の令嬢と。

そしてみんなが、ていんら・ら・らん・らあん・ら、である。
石田の笑顔が食堂の隅から舞踏をとほしてwinkした。

黒人のバス・ガアルが猫のやうに近寄つてきて、熱い聲で耳の毛を吹いた。
「瀬川さん、お電話ですよ。」
「ありがとう。誰から？」
「日本人らしい男のかた。」
瀬川はちよろりと給仕長の眼をごまかして六階のダリルの電話室へ駈け下りた。

電話は忘れてゐた友だちの卑呂からだつたが、交換手のてまへを憚る氣もちもあつて何時ものやうにはじめからしまひまで英語だつた。例の巾の廣い卑呂の聲がSの發音をひゞかせて受話器を躍り出た。最初こつちは卑呂だがと言はれても瀬川にはちよつと思出せないほど、卑呂は彼にとつて遠い關係でもあり、それだけまた意外でもあつた。その氣分が先方へも通じたとみえて、瀬川がまだ魔誤々々してゐるうちに卑呂は卑呂だよ卑呂だよといひ直した。それでやうやう瀬川にあの卑呂かとわかつたわけだが、同時に瀬川はぷうんと强烈な日光に漂ふ黒土のにほひを嗅いだ氣がした。毒々しい日向葵の花がかれの網膜に咲いて消えた。瀬川は一昨年の夏オハイオの田舍の卑呂のところに轉げこんでゐたことがあるのだつ
「何うした？いつ出て來たね？」

瀬川は卆呂にべつだん好意が持てないわけではなかつたけれど、まる一年半のあひだに相手がどう變つてゐるかも知れないといふ警戒心が動いて、彼は意識して冷く言つた。じつのところ卆呂のこの突然の出市には何かしら五月蠅いことの豫告が感じられて、瀬川はもう迷惑でならなかつた。

「今日。いま着いたばかりなんだ。八時四十五分さ。ユニオン停車場（デイツポウ）――驛前の藥品店から掛けてるんだよ。どうだい景氣は？」

「面白いこともない。駄目だねこんな町。で、遊びかい？いつまでゐるんだ？」

「こんだあそんな呑氣なんぢやないよ。何かさせて貰はうと思つてね、困つてやつて來た。」さう言ふときも、相變らず愚鈍にまで見える平たい顔を光らせてゐるであらう樂天家の卆呂を想像すると、瀬川はむしやくしやに腹が立つてきた。しかし何でもほしい物はぐんぐん要求してくる卆呂の、顔ぜんたいといつた感じの迫り方はあきり憎めない氣もした。卆呂が何か言ふたびに電話口から唾が飛んでくるやうに思はれて瀬川はすこし身體を離した。そして聞くだけのことは聞き言ふだけのことをいはふと決心した。誰が瀬川から日常に關する以外の興味を引き出し得たらう。

「困つてやつて來たつて、そんなこと言つたつて困るぜこつちも――一體どうしたんだ。Aのはうはよしたのかい？」

卆呂はオヘイオのAに輕便食堂（ランチ・カウンタア）を經營して、それで妻のメエベルと二人の子供を養つてゐた。上のメエベルの連れ兒のアウサアはメエベルの父親に預けて何處かインデアナのはうへやつて、ハイ・スクウルなんかに通はせてゐた。そつちへも月々幾らか送らなければならないと卆呂が何時もこぼしてゐたのを瀬川は思ひ出した。

「ホテルへ來て呉れないか。いろいろ話しもあるしね。」

卆呂は何んな不幸をもぶちまけて聞いてさへ貰へればいゝやうにはしやぎ切つた聲をしてゐた。瀬川は卆呂のホテルといふのが何だか柄にもなくて嫌な氣がした。卆直に押しかけて行くぜと言はれたはうがまだ諦めがいゝと思つた。それと

もそもそもあれからどんな世帯の苦勞が本呂に彼らしくない氣扱を教へたといふのか。けれど、どつちみちそれは瀬川には縁の遠いものだつた。

「ホテルつて何處だ。」

「どこつてまだ取つちやゐないがね、何處がいゝだらう?」

瀬川は無意識にすこし意地わるくなつてゐた。

「メエベルも子供も連れてるんだらう? おれんところには部屋はなし——。」

「一人で來てるんだよ、ひとりで。」

「メエベルや子供は何うしたんだ? けど寢台は一つだし、それに君んとこみたいにダブルじやないから——。」

「いや。僕は何處でもいゝ。」

「さうか。さうも往くまいけど、ぢやあおれのうちへ行つてゐ給へ。婆さんへ電話をかけてそ言つとくから。知つてるだらう俺んとこ。」

「知つてる知つてる。ぢや、先に行つて待つてるぜ。何時に歸る。」

「もう後片付だけだ。一時間もしたら。」

本呂はいきなり電話を切つてしまつたので、メエベルや家族のことを訊かうと思つてゐた瀬川は拋り出されたやうにちよつとむつとした。しかしそれが小さなことである限り何でも結局自分の思ふとほりのものを世の中から取つていく本呂の先天的手腕には瀬川も微笑させられた。同時に、困るはなしなぞ聞かなくとも知れきつてゐると考へると、本呂と本呂の退屈な饒舌がかれの歸を待つてゐることにうんざりさせられた。要するにどつちでもいゝことばかりがさも重大さうに瀬川がの身邊に轉つてゐて、それが何處までもつゞいてゆくのを發見して彼は輕く驚きながらもう一度電話をかけて下宿

のは夫人に本邸の行くことを告げた。

給仕用のタヲルを振りまはして階段を驅け上つて行くと、うへからジョウヂ・聖デニスが下りて來た。ジョウジ・聖デニスは白髪の老人で市の三つの劇場を持つてゐた。飲物は冷水とウヰスキ、肉は生燒けが好きで染みのあるなぶきんが大きらひなくせに、商賣物の踊り子を取つかへ引き換へ舞踏用につれて來てゐた。

「おい。」とジョウヂ・聖デニスが言つた。「お前は常雇ひのボウイかね。」

「は。」

「では、これをやらう。」

ジョウヂ・聖デニスは醉つぱらつてゐた。ポケットから何か取り出すのにずゐぶんひまがかゝつた。見ると彼の所有してゐる劇場の切符が二枚あつた。

「たまには芝居でも見て好い時間を持つがいゝ、ジイジヤス・クライストのために――それから、この若い御婦人を覺えておくんだ。」

「は。」

と切符を受取りながら瀬川がそばのいはゆる若い御婦人を見ると、何といふ奇體な小動物だらうと瀬川を凝視してゐた踊子がつんと横を向いた。

頸にぽつんと一つあざがあつた。

「お歸りですか。」

「いや。これこれ。」

ジョウヂ・聖デニスがさいころを振る手つきをした。

はしご段の上の高貴ぶつた半暗に支配人のふらんす人が浮彫りになつてゐた。

「瀬川、手をお見せ。」

「いやはや。」

「いやはやぢやない。爪を切らなくちや。」

「切つてますよ、こんなに。」

瀬川は兩手を突きつけた。

「もつと短く。」

さう言つて佛蘭西人はおぢぎをした。瀬川のうしろをＫＫＫの大立物だといふ歴史家が細君と肘を組んで通りすぎてゐた。瀬川もおぢぎをした。ＫＫＫも細君も程よくほゝえんで行つた。それが支配人を悦ばせたので、瀬川の爪の問題はそれきりになつた。

PAINLESS DENTIST

Dr.Davis

七階の大窓の眞んまへにこんな「痛くない齒醫者」の看板が出てゐて、ちか・ちか・ちかと色電氣の字が明滅するたびに一めんの硝子が赤く青く黄いろくなつて赤と青と黄の雪が降つてゐた。

食事に行くと日本人の給仕人が集つてわいわい言つてゐた。使用人の食堂は臺所の横の一室なので、ちつとぐらゐ騒いでも客へは聞こえつこなかつたが、瀬川のはいつて行つた時はみんな食事をすまして籤を引いてゐた。いま他に二つ宴會の申込みがあつて、そのために殘る給仕人をかうして決めてゐるのだつた。その二つの小宴會(パアテイ)といふのは一つはパタスンが女と隱れ飲みをするのと、もうひとつは誰かの「獨身者の夜(バチエラアス・ナイト)」の會だつた。パタスンは或る大きな煙草會社のM州の總代理人で、しぢう倶樂部の一室に寢泊りしてゐる不良紳士だが、不良のわりに金が切れなくて一般に不人望だつた。しかも誰が見ても「獨身者の夜」のはうが氣骨は折れず貰ひになりさうなので、どうせ居殘るくらゐならと一同が後者を志願して果てしがなかつた。指命しては不公平になるし、給仕長も困つた末、そこで籤といふことになつたものだつた。かういふ場合のつねとして石田がすぐに人間の數だけ新聞を裂いて小さく捻つたのを食卓のうへにばら撒いてゐた。

「廿三人だな。Xのしるしのついてるのが當り籤だ。さあ、引いたり、ひいたり。」

「どうぞ當りませんように――俺あ運が惡いんでね。」

誰もかれも草臥れてゐた。たとへ幾らになつたところで、これからまた皿を運んだり酒を調合したりするよりも、すこしも早く地下室の自分たちの溜りへ下りて昨夜からのつゞきの勝負を決したかつたので、みな逃れることを祈つてゐた。そしていつそ押しつけられるならパタスンのはうではなく「獨身者の夜」であるやうにと一樣に望んでゐた。

「Xはいゝがね、パタスンかもう一つのはうか何うして判るんだ。」

ひとりが訊いた。石田は心得顏に見廻して言つた。

「まあ默つて開けてみろよ。Xが一つあるのがバチエラアスで、二つがパタスンだ――ほうら、おれは白紙(ブランク)だ。」

めいめい其の新聞紙の切れ端をひらいてみてがやがや言ひあつた。瀬川は並んで食べてゐる六番の理髪店のおやぢと掃爪術の女とにこのさはぎを説明しながら、自分も一つ拾ひ上げてひらいてみた。Xが一つ書いてあつて、彼は「獨身者の役」の會を引きうけて殘らなければならないことになつた。疲れてはゐたが下宿へ歸つて寢臺に惱まされるよりは増しだと考へて瀬川はそれほど口惜しがりもしなかつた。パタスンには本部といふ經育から來た海員上りが當つて、瀬川のほか岡村と南の三人が「獨身者の役」に廻されたが、南は何うしてもボウカアが思ひ切れないで、片つぱしから拜み歩いた結果、七弗出して須山に代つて貰ふことにした。そのあひだに給仕長が壁の黒板に書きつけてゐた。「パタスン氏、二人、部屋(ルーム)A――ケリイ氏獨身者の役の會、十八人、D室」そして料理や酒のことは料理長(シェフ)が知つてるからと言つてさつさと地下室へ下りて行つた。みんなもそれについて、けさ早く一時打ち切つた博奕の戰況を話しあひながら裏の昇降機へ雪崩れ込んだ。

パタスンの本部はぶつくさ立つて行つて部屋Aの仕度にかゝつた。瀬川は準備を岡村と須山に頼んでおいて、しきりにバス・ボウイの運んでくる皿を腰を据えて平げてゐた。瀬川付きのバス・ボウイは黑人の少年で十仙も抛つてやれば何でも台所から盜んできて瀬川の食卓にならべた。その盜み方がじつに巧妙で瀬川にとつてはこの上なく便利だつた。瀬川が特別の意味で廿五仙の銀貨を掴ませたところが、彼は自信に滿ちた足どりで出て行つたが、間もなく何處で誤魔化したものか三分の一ほど殘つてゐるジヨニイ・ウオウカアの壜をさらへ込んで上衣の下に忍ばせて來た。これには瀬川もすこし氣味が惡くて躊躇してゐると、床屋が傍からどれどれと手を出して、がぶつと一口呑んで掃爪術の女へ渡した。女は立てつゞけにあふつて壜を瀬川へ返した。この女は倶樂部やホテルを專門に渡り歩いてゐるマニキュリストだけに手に負へない阿婆擢れで、青い顏に厚化粧をして驛馬のやうに締まつたくるぶしをしてゐた。倶樂部員の誰かれと何處へでも出かけたし、給仕人のなかでは石田がすでに値段を知つてゐた。If you let me, I'll show you what I can――定食とか新聞

ともつかず何時もそんなことを言つてゐた。瀬川がそとを通る足音を氣にして卓子の下から酒壜を出したり引つこめたりしてゐるところへ樂手の連中が食事に押しかけて來たので、かれは早々に座を立つて部屋Dへ行つた。

もうパタスンのはうは初まつてゐるとみえて、閉めきつたA室からふくれつ面の木部が出て來た。スウプに掛つたばかりだと言つて木部はいらいらしてゐた。

「やり切れやしない。變なやつを引つ張つて來やがつてふざけるだけふざけてるんだ。接吻ぐらゐなら我慢してやるがね。」

木部は忙がしさうに小走りに去つた。

D室へ行つてみるとすつかり用意が出來て馬蹄形に作つた食卓に銀具が光り、ナプキンが花のやうに小賢しく立つてゐた。ケリイの友人が二三人岡村をつかまへてあとの餘興のはなしをしてゐた。

「獨身者の夜」の會といふのは誰か友達のなかで結婚するものがあると、その結婚を祝福し揶揄する意味で、獨身時代の悪友が集まつて無禮講の宴を張るのだつた。あした結婚するといふ前の晩に、これが獨身者としての最後だとあつて、相棒の主催のもとに過ぎし日の「不良な自由」を悼み、「僕らの手から彼女のふところへ彼を送る」のがその主旨だつた。このユウモラスな獨身輩のあつまりは若い紳士連間の一つの習慣だつた。それは男にだけ共通に理解される a joke だつた。今やこゝに又しても「一個の話せるやツ」が結婚によつて「話せないやつ」にならうとしてゐる。彼はけふが日まで我黨の人氣者だつたが、明日からは一女袴の完全な支配を受けやうとしてゐるのだ。いまゝでのやうに倶樂部に徹夜して競馬を論ずることも出來なからう。葉卷も一日二本に限定されるだらう。日曜には細君の腕をとつてかの教會とやらへも端然と居眠りに行かなければなるまい。カアドに一指を觸れることは直ちに恐るべき悪德であらうし其の他すべての樂しい個人的趣味と別れなくてはならないであらう。さうしてわれらに勵してゐた勇敢な彼は今日をもつて存在を失ひ、あす

からは彼女に屬する彼として善良な家畜にまで馴化されやうとしてゐるのだ。それはわれらの仲間にとつて悲しい事件である。が、しかし、彼の幸福のためとあらばわれわれは悅んでその行を盛んにしやう——「他人にならうとしてゐる」彼よ！彼女との陶醉のあひだにも時々は倶樂部の爐邊を思ひ出して呉れ。そして俺たちにだけはあの「禮儀」といふやつを許してくれ。もし望み得るなら昔どほりに「おいヘンリイ」と呼ばせて貰はふ。だが新夫人が僕らとの交渉を好まないといふなら、われまた何をか言はん——たゞ遠くから君を見守ることに滿足しやう。とはいへ、おれたちを忘れずにたまには倶樂部へも忍でこい。細君の惡口ならわれわれにもよくわかるし何時でも、歡迎して謹聽するであらう。

かういふ好謔的な感情をたゝへて、けふまでの毎夜を駄辯と喫煙に送つてゐた友達を結婚へ放してやるのが、その前夜の「獨身者の夜」の會だつた。だから集るのは男ばかりで、かなりに桁を外して亂痴氣におはることが珍しくなかつた。女にも結婚のまへの晩に女の友だちだけが集つてこれに似た會合を催すことがあつたけれど、男の場合ほど悲痛壯烈なゆうもれすくの實感が伴はなくて兎角上すべりの幸福氣分に終始してしまふやうだつた。女の會の時には、めいめい嚴重に包裝した贈物を持つてきて花嫁になるべき人の前へ積み上げておいた。會食がすんでから正賓の女がみんなの見てゐるまへで一つづつ包みをひらくと、ずゐぶん顔を赫らめなければならないやうな物が出て來たりして、そのたびに拍手して笑ひ合つたが誰からとも判らないので一同涼しい顔をしてゐた。これから見ると男の「獨身者の夜」は淑やかにそして無頼だつた。今夜のはケリイが市第一の靴屋の娘と明日結婚する其「獨身者の夜」の會だつたからケリイの友人の若い倶樂部員はほとんど全部出席してゐた。

黒光りのするD室は男の會だけに何一つ裝飾らしい裝飾もなかつた。保險會社の重役の息子でM大學のラグビイの主將だつたケリイが、眞ん中から分けた頭髪をてかてかに光らせて中央の席に引きずつて行かれると、みなは笑ひながら椅子について直ぐに食事がはじまつた。瀬川に[illegible]たので自分では皿にさわらなくてもよかつた。岡村と宮山が二人のパス・

ボウイを突ついて會話と杯（グラス）のあひだを飛びまはつてゐた。瀨川はポストのやうに部屋の戸口に立つて知らず知らず職業的た謹面をつくつてゐた。それには何んな素晴しい洒落や途轍もない失敗が連發しても決して一座といつしよに笑つたりしない修行が必要だつた。瀨川は炸裂する哄笑のなかで假面のやうな顏をしたまゝ牢呂のことを考へてゐた。

食事がすむと喫烟と猥談が空氣を追ひ出して、部屋ぢうをむらさきにした。そして誰かゞ言ひ出して今夜の正客のケリイは童貞であるか何うかが問題になつた。ケリイは狡さうににやにやしてゐた。すると一人が起立して演說口調で素つ破ぬいた。ケリイは在學中によく二三日の小旅行に出たが、その期間必ずあの眼の下に黑子のある女圖書館員が校庭（キャンパス）から姿を消した事實に氣がついたことがあるか。そしてその時二人を市俄古のホテルの一室に正確に發見するのはさして難事でなかつたらう。彼がかう結んですわると、ほかのひとりが大聲に言つた。

「なあに童貞どころか飛んでもない。ケリイは君、食はせ者さ。いや、ひでいやつたんだよ。いつか黑ん坊の女を買ひに行つてね、いよいよつて時にあんまり黑いもんだから先生氣を惡くして、そいつの上から新聞をかぶせたんだ。はゝゝゝ、可哀さうに黑んぼのやつ、何もそんなにまでしてといふんで泣いたり怒つたり――ケリイはやつと謝つてほうほうの態で逃げ歸つたさうだ。こいつあ傑作だよ。」

ケリイは散々だつた。近くの人に絡められて彼はうつむいて酒ばかり飲でゐた。しきりにぶつぶつ言つて苦笑してゐた。

それからまたそんなやうな話しが彈んで、やがて猶太人らしい若い女が三人押しあふやうにして這入つて來た。男たちはわあつと喚聲をあげて、それと同時に瀨川をはじめボウイはみんなそとへ出されてしまつた。戸には直ぐ室內から鍵が下りて間もなく彼女らの不思議なエンタテエメントがはじまつたとみえる。おそらく獨身者として今夜が最後のケリイのために、さういふことを職業にする女達によつて想像も出來ない莫迦々々しさが演じられてゐるのだらう。たかはしいんと變に凝結してゐた。

「始まつたな。」

通りかかつたベル・ボウイがちよつと部屋の戸を指して、首をすくめて舌を出した。

「ふむ」

岡村が欠伸をしながらうなづいた。こんなことは毎夜のやうにあるのでみんな慣れ切つてゐて、それよりも一分も早くすんで地下室のばくちに加はりたかつた。崩れるやうに廊下の椅子に腰をかけて、三人は扉があくのを待つてゐた。女たちの余興が濟めば、いゝ加減に後仕末をして歸れるのだつた。

「ゆうべは高かつたよ。十二圓食はれちやつた。」

須山が言つた。圓といふのは弗のことだ。これで話が地下室のボウカアの評判へ移つていつて、岡村は急に氣がついたやうにポケットから銀貨や紙幣を摑みだして今日の貰ひを數へ出した。室内では女らの見世物が佳境に入つたらしく、咳の音一つ聞えずに靜まり返つてゐた。これが明日結婚するケリイに對して考へ得る唯一の「獨身者の夜」かも知れないが、瀬川は何だかすこし桃屋の娘が氣の毒になつてきた。ちよつと猛獸たちが寄り合つて、あした食べる餌をこの奇怪な祭りによつて聖化しやうとしてゐる感じがないでもなかつた。

A室では喧嘩がはじまつてゐた。木部は麺麭と火星については何一つ知らないくせに麺麭屋の職人といふ觸れ込みで紐育からこゝまで到るところの麺麭屋を荒らしてきたほどの男だけあつて、食堂に立つても本職の水夫丸出しだつた。すぐ日本語で客に食つてかゝつてゐた。何を言つても相手が解らずに笑つてゐるのを面白がつて、女客などには隨分下等な日本語を面と向つて口にしてゐた。ことにパタスンの貧乏くじを引いて初めから不平たらたらだつたので、ちよつとパタスンが名前をきいたら木部はむきになつて突つかゝつて行つた。

「人に名前を訊く時は先に自分の名をいふものです。」

「失敬なやつだな、僕はパタスンだ。よしんば何にしろそれは對等の場合の禮で、何をジャップの給仕人づらが――。」
などといふことから二人は摑み合はんばかりに罵つてゐた。木部は蒼白く笑つて、パタスンは眼にいつぱい涙をためてゐた。

これでまた木部はあつさり首になるだらう。そしてまだ彼を知らない麵麭屋を探して早速西部(ウエスト)へでも旅立つだらう。瀬川はかう思つて知らん顔をしてゐた。

あとのことを岡村と須山に任せて地下室におりると、大きな圓卓をかこんだ日本人の顔が十幾つそつくり眞赤に上氣してゐた。みんな默りこくつて手のとらんぷを凝視してゐた。なかには低く唸つてゐる者もあつた。電燈の光りの屆かない隅から悪臭が鼻を衝いて來た。圍ひも何もない便器を跨いで誰かゞ脱糞してゐるのだつた。ラッカアをあけて手早く脊廣に着換へた瀬川は、牟呂のことがあるので卓子の現金を眼で數へたのち直ぐにそとへ出た。だれも瀬川の出入に氣のついた者もない様子で聲もかけなかつた。ぱたんと札を投げる音がしてゐた。

4

雪がやんで外套の襟は立てなくてもよかつた。すきとほつた風が星と紙屑と巡査を吹いてゐた。

7188と縦に眞鍮の番號字を打つた下宿の玄關に立つて、瀬川は二階を振りあほいだ。正面の窓から赤いひかりが洩れて牟呂がまだ起きてゐることを語つた。瀬川がポケットから鍵を出して戸をあけてゐると、うしろの歩道をきゆつきゆつと雪を踏んで女が通りかゝつた。

「今晩は。」

と言つてくつくつ笑つて行つた。瀬川はちよつと振り向いて白い顔と紅い口びるを見た。呼びとめられるのを待つて女は歩調をゆるめてゐた。

鈍い音のドアがあいて瀬川を入れると、うす暗い廊下兼應接間の電燈にこの家特有の異臭が絡んでゐた。それは家庭の體臭とでもいふべきもので、このG夫人の家のは玉葱を刻んでテレピン油をかけたに似た一種の混合的なにほひだつた。ピアノのまはりの床に樂譜が散らばつて小卓の花瓶に花が枯れてゐるのも、壁にかゝつてゐる何かの海戰の銅版畫もいつもと同じだつたが、瀬川は深夜の他人の部屋に輕い好奇を感じてあちこち見廻しながら階段に足をかけた。古い板が軋んで隣室の寝台からG夫人の聲がした。

「誰？」

「瀬川です。」

夫人は寝返りでも打つたらしくそのまゝ何も言はなくなつた。

牟呂は瀬川が戸棚に隠しておいた酒を捜し出して大半飲んでしまつて、明りを點けつ放しにしていぎたなく眠つてゐた。だいぶ醉つてゐるとみえて靴をはいたまゝの片足を寝台に載せて、もう片つぽうは不愉快に擴げて下に引きずつてゐた。オハイオの頃よりも肥つて丈夫々々してゐた。何か斯うぐにやりとした生温い感じを與へる大きな顔を見詰めてゐると、身體ぢうの毛穴といふ毛穴から酒の氣が發散してゐるのがわかつた。こんなフライ・パンのやうな神經を持つた男には何んなかなしみも近づき得る筈はないと思ふと、瀬川はみちみち幾らか感じかけて來てゐた牟呂への關心をさらりと捨てゝしまつた。さうして近頃にない朗らかな心もちになつて殘つてゐた酒を飲みほした。かうしてすつかり安心して、牟呂と牟呂のすべてを受入れる用意の出來た瀬川が、さつさとバス・ロウブに着かへてゐるところへ牟呂が眼をさました。かれは舞台でどぢを踏んだ役者のやうに照れて、顔を撫でながら粗暴に笑つてみせた。牟呂はどんな立場におかれても自分の

利益のために自分を巧妙に扱つて其の立場に合はせてゆく術を無意識のうちに心得てゐた。だから彼は人によつていろいろに觀られてゐたが、この場合は先づ瀬川の前に出來るだけ自分を悲慘に擴げるのが順序だつたので、彼は見るみる必要以上に萎縮して行つた。

「君んとこへ來たと思ふとつい氣がゆるんぢやつてね。それに待つてるのが辛かつたもんだから飲つちやつたよ自棄酒を。はつはつは、やけ酒。」

最初のことばがこれだつた。が、それは救はれることを期待して水に飛び込んだ人でも飛びこんでからはほんとに溺れるやうに、哀れな努力の効果がすぐに彼じしんへ反射していつて平吉はたちまち暗い顔になつた。ことに自棄酒といふ明暸の思ひつきにわれながら感心して二度くりかへした時、かれは泣んばかりだつた。そしてそれを笑ひほごすために飽くまでも酒のことにこだはつて行つたが、瀬川には一層ほろ苦いだけで平吉としてもますます味氣なかつた。

「久しぶりに好い酒を飲んだよ。違ふね。違ふ。」

さういふ平吉を瀬川は一思ひに抉りたくなつた。人に會つても挨拶らしい挨拶をしない此の社會の習慣によつて、瀬川はすぐに本題へ觸れて行つた。これはべつに殘酷ではなかつた。

「メエベルは何うしたんだいメエベルは。それから子供も。」

すると平吉は呆れたやうに暫らく默りこんで、つぎにごくりと唾を呑んで言つた。

「白狀するよ。」

そして面白さうに燐寸をすつて煙草に火をつけやうとした。

が、瀬川の發議で話は寢ながら聞くことになつて、彼らは間もなく肌着の脊を擦り合はして狹い寢台に横になつた。かうしてゐるうちにおはよくば眠つてやらうといふ人の悪い考へが瀬川にないではなかつたが、それでもはじめは義務ばか

りではたしにいそがしく合槌を打つてゐた。四十男の一つ寝は充分情なかつた。油くさい卒呂のにほいがすぐに毛布のなかに籠もりはじめて、脊中につたはる卒呂の體温は妙にぬめぬめとして不氣味だつたが、それに眉をひそめるには瀨川にもあまりに長い流浪の生活があつた。寝るまへに飲んだアルコウルが瀨川の血管を驅けめぐり出して、卒呂の聲は遠くの町をゆく電車の音のやうにだんだんぼやけて行つた。ときどき卒呂の調子が強くなると、瀨川ははつと驚いて大きな聲でうなづいた。半分眠つてゐるのでそれがいつもとんちんかんだつた。

「おい。聞いてるのかい。」

「聞いてるよ――聞いてるとも。」

卒呂は勇んでまたひとりで饒舌り出した。

七年前に卒呂がインデアナの鐵道に線路工夫をしてゐるとき、汽車の衝突があつて火夫として乘つてゐたメエベルの良人を殺した。メエベルはチエック・スロバキアの女だが夫は丁抹人だつた。卒呂は彼らの家に寄寓して、メエベルとはまだ丁抹人が生きてゐる頃から情を通じてゐたので、寡婦メエベルはすぐに丁抹人の子を連れて卒呂と結婚した。もちろん日本人といつしよになることについてメエベルの父親や兄妹のあひだに相當の反對があつたけれど、メエベルは主エホバは人を同じに造り給ふたといつて泣いたり喚いたりした。卒呂はそのあひだ相變らずにやにやしてゐたことだらうが、メエベルの親類はメエベルを惡魔に憑かれたものとして悲しんだ。しかし二人が結婚してから彼らは日本人もかなりに良人の役目を演じ得るといふことや萬事思つたほど自分達と違はないことを發見して人情に變りはないと悦んだ。そして間もなく卒呂に親んで、メエベルの祖母なども訪問して來て卒呂にあつたりした。その祖母は英語が解らないので半日卒呂と向き會つて默つて笑つて歸つた。そのうちに女の兒が生れてメエベルの父がエリザベスといふ名をつけた。つぎに男の子のアルフレッドが生れて、卒呂は一家をあげてオハイオのA町へ移つてそこで輕便食堂をはじめた。瀨川が卒呂に會つた

のは彼が市俄古から其の食堂へ雇はれて行つた一昨年の夏だつた。

A町は一つの停車場からはじまつて一つの森におはつてゐた。停車場には煤烟で黑ずんだ木柵にそつて日向葵の花が汚車に話しかけて、荷物手押車の楔から緑いろの濃油がこぼれてゐた。森のなかの小徑は一般に戀人の港と呼ばれてゐた。とにかくその馬鹿げて甘つたるいのが如何にもオハイオらしいA町で、農具・馬糞・雜草に支配された人間が毎日を雜談と食事に送つてゐた。そのために牟呂の輕便食堂(ランチ・カウンタア)もわりに流行つて、市俄古の桂庵へ申込んでちようどぶらぶらしてゐた瀬川を呼んでおもて(フロント)を任せたくらゐだつた。牟呂は台所を引受けて上機嫌だつた。いつも其處らにゐるメエベルを指して瀬川に日本語で言つてゐた。

「こいつの先の亭主が生きてた時分ね、火夫だから、そら、家に居ない晩が多いだらう。そこで俺はこいつが便所へ這入るとあとから知らん顔して押しかけてつてね、や、御免なさいつて直ぐ出て來るんだ。そんなことを二三度くり返してるうちに何てこともなく出來ちまつたのよ。」

メエベルは解らないものだからお愛想ににこにこしてアルフレッドの頭を撫でてゐた。瀬川がお世辭にアルフレッドに、

「こら。大きくなつたらおやぢ以上の料理人になつて負かしてやれ。」

といふとアルフレッドはメエベルのかげに隱れて鼻を鳴らした。牟呂とメエベルは眼を細くして笑つてゐた。

瀬川はこんなことを思出してゐるうちにすつかり寢そびれてしまつたが、こんどは話しの中途で牟呂が鼾をかき出した。不幸な話題でもしやべつてゐるといゝ氣もちになつたらしく、牟呂は樂しさうに眠つてゐた。で、牟呂の不幸な出來事といふのが瀬川にはよくわからなかつたが、何でもA町の人が續々都會へ飛び出して行つて商賣が不振になつたあげく、メエベルが子供を連れて實家へ逃げて行つてしまつたやうなことだつた。それもメエベルが二三日、もとのインデアナの町へ遊びに行くと言つて家を出たあとで、牟呂が偶然メエベルの父の手紙を彼女のエプロンのポケットに發見して眞相が

判明したのだつた。もうその日本人と一緒にゐても仕様がないから別れて來い。別れにくければこつそり逃げてくるがいい。エリザベスとアルフレッドはちつとも日本人らしくないから連れてきたはうがいゝだらう。そんなことが手紙に書いてあつた。

瀬川は眠りこけてゐる李呂を突ついて詳しく訊くほどのことでもないので、自分もそのまゝ眠らうと努めたが李呂が何か間違へて擦り寄つて來て足をかけたりするのに醒らせられた。それを邪慳に拂ひのけてゐるうちに怒が凹んで瀬川もぐつすり眠つた

5

翌る日は一つも雲のない蒼穹だつた。紺いろの氣體の層へ都會の呼吸が立ちのぼつて、街路樹の芽の伸びる音がしてゐた。正裝した南北戰爭の老兵士が三人窓の下をフォウドを驅つて行くのが見えた。何とかいふ軍人が町へ來てゐて今日はその一般の接見日だと新聞に載つてゐたのを瀬川は思ひ出した。天氣のいゝ亞米利加の朝のみが持つ古風な民主的なよろこびが家具にまで溢れてゐた。戶外の明るいわりに家のなかがおどんで暗いのは、もう春が叩戶(ノック)してゐる證據だつた。

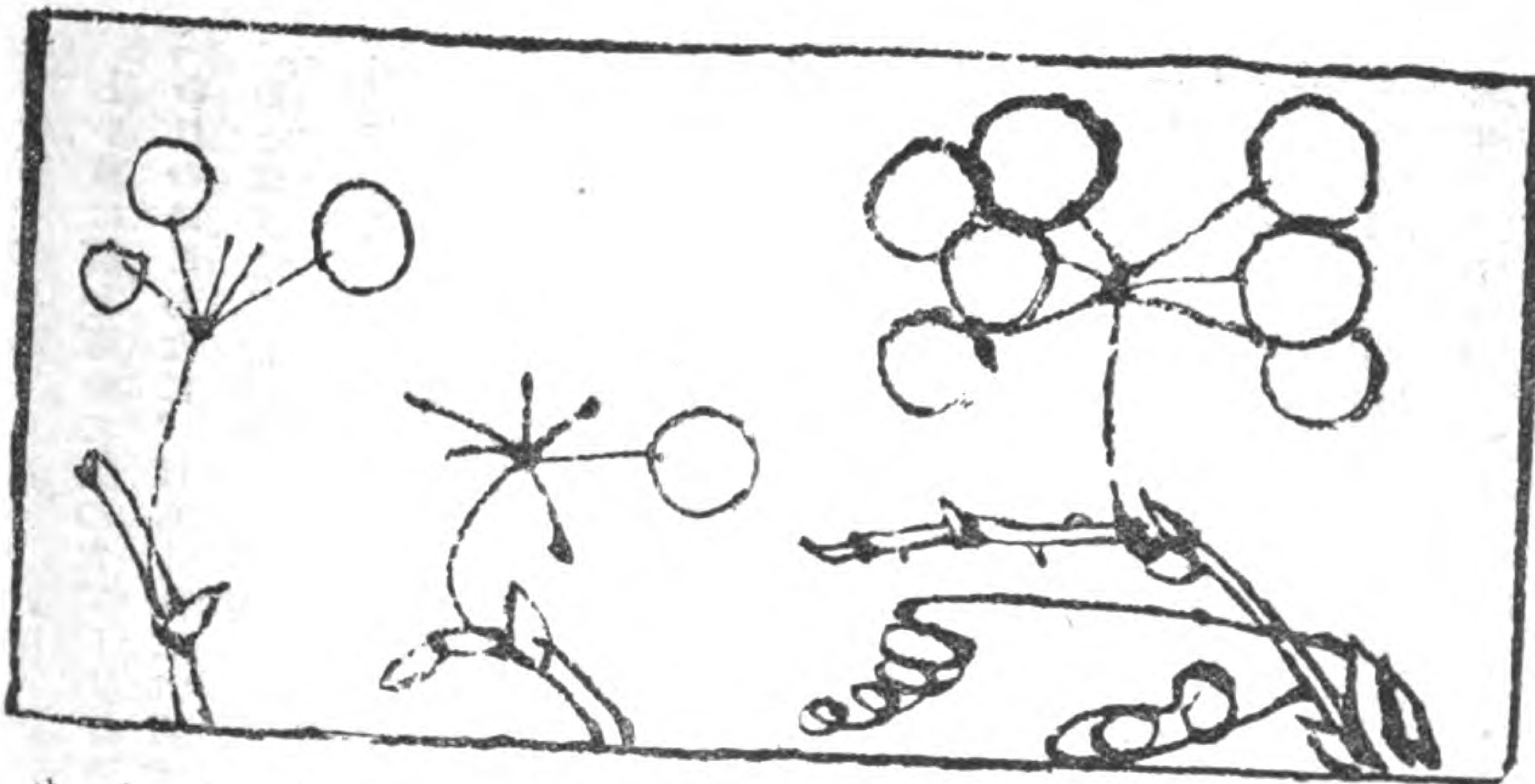
このD——市で何か仕事を探すと言つてゐた李呂は、ネクタイを結びながら急に何處か汽車へ乘つて行くといひ出した。かれは別人のやうに元氣づいでひとりではしやいでゐた。

「廿弗解れよ。返すから。」

とねだつて仕樣がなかつた。解るといふのは金を貸すことだつた。瀬川がやうやう十弗札を二枚渡すと、李呂はそれを小さく疊んで短衣のポケットへ押し込んだ。そして彼は默つて瀬川の靴下をはいて、自分のは寢台の下へほうりこんで立つて部屋中を見まはした。

「君の帽子、あれいゝだらう？いゝぢやないか。」
と小鼻に皺を寄せて笑つた。
「おれのはこんなに、ほら――これぢやああんまり可哀さうだ。日本人の恥にもなるしね。」
あとはすこし餘計だつたが瀬川はたうとう噴飯してしまつた。すると牟呂はもう勝手に瀬川の帽子をかぶつて、
「煙草も二三本貰つてくよ――ぢや、さよなら。」
と言つていそいそと部屋を出て行つた。瀬川は新聞を讀みながら、
「おいおい止せよ。冗談ぢやないぜ。」
と追つかけるやうに呶鳴つたが、べつに立つて行つてとめやうとも見送らうともしなかつた。牟呂の跫音が階段を下りていくのを聞いて瀬川は新聞の競馬欄に眼をさらしてゐた。毎朝二三頭の勝馬を豫想して何百弗なり何千弗なり賭けた氣になつて、夕刊の最終版（ファイナル）で勝負を見てそれで何百弗なり何千弗なり儲けたり損したりした氣になるのが、瀬川の道樂のひとつだつた。かれはあれこれと馬の名を漁りながら、頭の隅で牟呂はこれから何處の町へ行つてどんな生活をもち何んな女を拵へるだらうと考へてゐた。

その年は早い春だつた。牛乳のやうな濃度の空氣にギヤソリンのにほひが流れて、子供と女の笑ひ聲がそこにもこゝにも瀬川の耳を擽つた。人々は忘れてゐた輕い着物を着て出て挨拶し合つた。外套をぬいだよろこびが町ぜんたいを有頂天にしてゐた。商店街の飾窓は一せいに色彩を増して街頭にはライラツクの切花が賣りに出た。家族とカメラとサンドキツチを滿載した自動車の列が日曜ごとに歡聲をあげて郊外のピクニツクに突進した。そしてそれが歸つて來て疲勞と草の香を町ぢうへばらまいてゐた。



杜鵑

大佛次郎

吉さん。お久し振りで御座います。私は六太郎で御座います。お前さまに、腰拔けの、男の風上に置けない奴の、と云はれた腑甲斐ない駿河屋でございます。おつきあひしなくなつてから、もう十一年になりますから、あるひはその腰拔けのことも忘れておゐでかも知れません。家附の女房の不義を知りながら、駿河屋の身上に未練を殘して、おめ〳〵と指を咥へて、尻の下に敷かれてゐた養子をとこが手前、と申上げたら、なるほど昔の友達の中にそんな馬鹿野郎がゐたつけと思ひ出してくださいませう。今もなほお前さまの昔の癖が殘つておゐでなら、むつと不機嫌らしく顏をしかめて穢らはしいものを避けようとするもの丶やうにそつぽを向いておしまひなさることでもありませう。今も、この手紙を書きながら、十一年前のお前さまのお顏が、私には、はつきりと思ひ出せます。御立腹とは承知で吉さんとお呼び

するのも、そのせいで御座います。そんな、しつ腰のない奴は以後友達とは思はない。俺れとこれまでどほり附合ひたかつたら女房のお粂を叩き出すか、手前が駿河屋を蹴飛して出て裸一貫の男になつて來いと啖を吐きかけないばかりに深川の橋本で仰有つて別れたきりの私で御座いますから、今更なれ〳〵しく吉さんとお呼びいたすのも如何かと存じますが、まあ今日だけは我慢して、これをおしまひまで讀んで頂きたいもので御座います。決して、お前さまに關係のない話ぢや御座いません。實を申せば、私ももつと早く、このことをお知らせしてお前さまにも悦んで頂きたかつたので御座いましたが、やはり持前の氣のちいさいことが、知らぬ間に十一年もずるずるに延引させて終ひました。今なら、それが申上げられます。お前さまがこの手紙をお讀みになつて、[illegible]でかした、六さんよとほめてくださらないわけはないと思ひます。十一年前に吉さんが仰有つたとほりに、私はお粂をたう〳〵叩き附けて終ひました。まつたく思ふ存分に、これならば吉さんも滿足して、昔どほり附合つてやると云つてくださるに違ひないと手前も考へるくらゐ、氣持よく、やつつけたので御座いますから。

吉さん、これなら、お終ひまで讀んでくださいませうね？

吉さん。

まことを申せば、私も、さう口幅つたいことは申上げられないので御座います。この覺悟がほんとうにきまつたのは、橋本でお前さまからお叱りやら御忠告を頂戴いたしてから、さつと半年ばかりの後のことでしたから。けれども、その半年の間も、お前さまのおさとしのことがずつと私の頭について、このみぢめな養子をとこが持合せてゐなかつた度胸をすこしづゝ養つて行つてくれたのでした。そのほかは、今、思ひ出してもぞつとするやうな真暗な氣持で御座いました。さ

ぢや御座いませんか？　私は女房に裏切られた上に、頼みに思ふ友達からも見捨てられたのでした。しかも、この惨めな境遇から脱けるだけの氣力は持つてゐず、たゞ成行にまかせて、これから、またくどんなどい仕打にあふことかと思へば、お言葉どほり豆腐の角に頭を打附けて死にたいやうなおもひで御座いました。

わかつてゐますとも。これが私の何よりも惡いところで御座いました。腑甲斐ないと思ひながら、どうしても克てない敵で御座いました。けれども、御立腹にならないで憐れだと思召してくださいまし。私だつて、生れて、ものごゝろ附くまでは世間様のどの赤ン坊とも變らない、いや、人並よりも陽氣で、始終にこにこしてゐる可愛らしい子供だつたと申しますし、それから見れば、この弱い氣性も生れつきのものとも思はれません。家が貧しかつたので七つの年から奉公にやられる、そして、庇の深く暗い暖簾のなかの世界で店と土藏との間を十何年も往つたり來たりしてゐる内に、自然とかう出來て終つたものと見えます。お前さまのやうに身上のある立派な商人の家に生れて、たゞ修業のためと云ふのでこの店へ奉公に入つてゐられた方には、おわかりないかも知れませんが、この店から出されたら、みすみす路頭に迷ふものといつも考へてゐれば、人間はどんなにでも卑屈になるものらしう御座います。倖ひと、おなくなりになつた旦那のお目鏡にかなつて、奉公人としてはまるで夢のやうに望外なお嬢様のお婿様になる、十間間口の駿河屋が自分のものになつた、と云つて、私が、鷹揚にお育ちになつたお前さまのやうに行かなかつたのに不思議は御座いません。主筋にのぼらせて頂いても、やはりどちらを向いても頭があがらない窮屈さがどこまでも附纏つてゐますし、またいつ自分がこの倖せな境涯から蹴落されるかわからないと思ふと、不安で不安で世間様の旦那衆のやうにお稽古ごとに身をやつすなど云ふ呑氣なことは、まあ夢。思つて見れば、奉公人だつた昔の方が、反つて、裸一貫になつてやり直す元氣も持つてゐたので御座います。お前さまから、腰抜け腑抜けとまで仰有つて頂いても、もとの六太郎に返れなかつたのは、そのせいで御座りました。自分の女房になつてからもお糸にはやはり頭があがりません。どこまで行つてもお嬢様、お嬢様と云つてゐた昔が消えず、自

分の幸不幸がこのひとの心持次第できまるとすつかり頭に沁み込んでゐる……それが、あの恐しい事實を始めて知つた時にも、私の氣持をずつと支配してゐたので御座いますから、お前さまに腰拔け腑拔と罵られたぐらゐで、どうして乾坤一擲の度胸が附きませう。お前様は御存じなかつたことですがお粂があの時もう罪の子を胎んでゐたのでした。しかし、それと知つてさへ、私が何よりも先に心配したことは、自分がこの家から追はれはしまいかと云ふことだけでした。腹を立てる力など、とうに失くなつてゐたものと見えます。反つてそんなことでもしたら、自分から、出してくれと云つて出るのも同様だと、この情ない用心深い考が、眞先に働いてゐたのでは御座いませんか？ また申すまでもなくお粂は、私がこんなにまでして放すまいとしてゐる現在の幸福の中でこの店の身上と同じくらゐに大切なものになつてゐました。このことは、お粂を憎みとほした此の十一年間ずつと變らずにゐたことです。まして其の當時は、お粂も若くて綺麗でしたし、これをすつかりなくして終ふよりは、たとひ半分は人にとられて殘りの半分だけでもいつまでも自分のものにして置きたいやうに私は考へてゐたので御座います。

吉さん、私がなぜ世間様のやうに、きれいに出來なかつたかは、おほよそ、これでおわかりでせう。

きれいに……

何でも、きれいにやる。この世間様のやりやうは、腰拔けの養子をとこにとつては、夢で御座いましました。たとへ、どんなに踏附けられ泥まみれにされたところで存外平氣でゐる人間もゐるものです。いや、女房の尻の下にも敷かれてゐる内に、そこが日本中で一番氣樂な場所だと思ひ込んで、しまひには自分から求めて平氣に住み込むやうになるのですから、人間の心持と云ふものは飴のやうにどんな形にでも變へられるものと見えます。

吉さん、おこつちやいけません。

その、人外の、鼻つ垂れの、腰拔けの馬鹿野郎は、馬鹿野郎なりに仇討の仕様を考へ出しておきました。尻の下に十一

年、私は一刻もお前さまの御意見を忘れてゐませんでした。ほめて頂きたいのは、これからで御座います。

お粂が變にめそ〳〵して沈んでゐるのを私は冷く眺めてゐました。

お粂も流石にからだの加減から自然と不安を感じて來てゐたものに違ひありません。私に妙に優しくしてくれて、頻りと同情を求めてゐるのです。私は、どこまでも何も知らない振りをして、これを熱心に慰めてやりました。お粂は、お前さまのやうに世間をきれいに過したく思つてゐる人間の一人ですから、おなかの子供も最後まで私の子供にして置きたく思つてゐるのでした。こちらにとつては思ひ掛けない倖せなことです。私は、懷姙を打明られた時も、それア難有いと云つてまつたく別の意味で悅んでやりました。お粂も、もとよりほつとしたやうに、生れる子供が男でお父さんに似てゐてくれゝばいゝがと申しました。もとより「お父さん」とはこゝでは私のことですが、私はその時流石に變に氣が沈んで終つたことを今でも覺えてゐます。

お粂は、それから每日、俄かにいそ〳〵として、赤ン坊の着物を揃えさせたり布團を作らせたり始めました。今はもう、すつかり安心して、生れる子供のことに心持をそつくり奪はれてゐるやうに見えました。これは至極いゝことでした。私もいつの間にか自分の子供が生れて來るやうな氣持になつて、初産のことでいくらか不安になつてゐるらしいお粂を頻りといたわつてやりました。

その頃、二人は婚禮からこの方になく仲善くなつてゐましたし、家の內は、まことに春風のやうにおだやかで、私も至極愉快だつたので御座います。しかし、臨月が次第に近附いて來て、或る晩私は、かたきの和泉屋によく似た赤ン坊の夢を見てはツとして寢汗にぬれて目を醒したことがあります。それから朝までまたと睡られずに暗い天井を睨めて考へ込ん

でゐたのでした。腕をのばせば屆く隣りの床に、お絹は、すや〱と氣樂な息を聞かせて、睡つてゐました。あゝ、どんなに私は急にこの女を絞殺したい心持とたゝかつたことで御座いましたらう。それがまた來るのが恐しさに次の晩からは、私は別の部屋に寢ることにしたので御座います。

ところが、それから四五日して湯屋へまゐりまして、石榴口の湯氣の中にゐて誰れかゞ、話の中にほとゝぎす、ほとゝきすと頻りと云つてゐるのを聞きました。私が入つて行つて見ますと店の番頭と町内の鳶頭でしたが、私の顏を見るなり急にその話を歇めて終ひました。二人が、いかにも間の惡さうな落着かない樣子でゐるので、『ほとゝぎす』が私の氣になり始めました。寒い時分でしたし決して故なくほとゝぎすが噂の種になるわけはなかつたのです。

『ほとゝぎすがどうしました？』

と尋ねて見ますと

『いえ……なアに……』

と妙に話をそらして、まるで逃げるやうにして、あがつて行つて終つたのです。その途端に、私は、この杜鵑と云ふ鳥が、自分の卵を他の鳥の巣に運んで孵させると云ふ話を、急に思ひ出して、かつとしてゐたのでした。

町内で知らぬは亭主ばかりなり。とんと、これに見られてゐたので御座いますね。

ひとを……

始めてその時、私は心から泣きました。

けれども、からだを拭いてあがつて來た私は、やはり、いつもの私に戻つてゐました。

ほとゝぎす、結構。

どこまでも、知らぬ顏で、杜鵑の雛を孵てやらう。これがどうも一番自分にあつた仕事らしい。手拭を何杯も湯をかへ

て丁寧にゆすぎながら、誰れがどんな目で見ようが平氣だと思つたので御座います。

氣持は、反つて、前よりもずつと落着いてゐて家へ歸ると早速女房のところへ行つてわざと馬鹿話をして、涙の出るほど笑はせてやりましたし、床へ入つてからも近頃になく、ぐつすりとよく寢込むことが出來ました。

間もなくお糸は、やす〳〵と男の子を生み落しました。もぢや〳〵と生毛が一面に生へてゐて、皺だらけで可愛氣などはすこしもないものでした。私が馬鹿な面をして枕もとに座つてゐるとお糸は、この大役を果してうつとりとしてゐるなかに、これこそまごゝろと思はれる精一杯の思ひを籠めた腕をのばして私の手を探して訴へてゐるのでした。

最初私は、わざと、その手を避けてやりましたが、まあ、どつちでもいゝことだと思ひ直しましたから、優しくその腕を撫でてやつたり、どうもこの子は俺れに似てゐるやうだと云つてやつたりして、お糸ばかりではなく幾分情を知つてゐる取上婆さんや手傳ひの女達にもどのくらゐ自分が滿野呂で鼻の下が長いか充分見せてやつて、いくらでも悦ばしてやつたものです。それから店の者や町内の者がぞろ〳〵出て來て祝ひを云ふのを、滅多に見せない上機嫌で一々受けて、強飯をたかせるやら酒樽を打抜くやら、自分が先棒になつて、店も奥もまるで祭のやうな騒ぎにして終つたのです。

私の役廻りは實に氣樂で嬉しいものでした。行燈や提燈で晝間のやうに明るくなつてゐる家の中を歩いて、どこへ行つても私をそつと蔑むやうに眺めてゐる顔を見付けると、自分でもおかしくなるくらゐ、はしやいで來て、嬉しくて嬉しくて、つひ、何とか馬鹿なことを云つて、もつと見物を悦ばしてやりたくなるのでした。かうして他人も倖せだし、自分も倖せになるやうなことは世の中にさう澤山ないことだらうと思ふのですが、どうでせうか？　とにかく、この晩は私のこれまでになかつた樂しい夜でした。これだけでも私は充分滿足だつたのですが、今度は別の「ほとゝぎす」を思ひ附いた

わけです。これは夫の晩用事があつて本所へ行つて、歸りの夜道に割下水の傍で、女の乞食が露路でお産をしてゐるのを見て、急に思ひついたことなのです。

私は、人だかりが散るのを待つてゐる間に、春らしい黄ろい月を見ながらすつかり筋書を編み上げてゐました。

おせつかいな産婆が驅附けて來てゐて、すつかり始末をしてやつたのですが、どうして乞食なんて丈夫なものです。それでなくても、すぐと子供を抱いてどこかその邊の川へざぶ〳〵洗ひに歩いて行きさうに元氣に見えました。

『赤ン坊は、男かね？』

傍へ寄つて、私は、かう尋ねました。

『へえ。』

と云ひます。

私は、はやり立つ心を抑えて、つとめて靜かに、二三日中にその子を俺れに貰つてくれないかと申出たわけです。乞食は、流石に掛引を知つてゐました。手放さなくても結構稼業の元手になるのだからと云ひます。私が金もやるが、別に代りの子供もやると云ひましたら、驚いて目をぱち〳〵させてゐましたが、私がわけを話すと、自分の子供の出世になると思つたせいもあつたのでせうが、ひどく私を氣の毒に思つてくれまして、さう云ふことなら、いつでもお渡しいたしますと云ふのでした。

吉さん。

その歸り途の、私の有頂天な心持を察して下さい。まつたく天へのぼる心持と云ふのはこのことでせう。誰れだ、今までに、これだけに嬉しいおもひをした者がゐませうか？

三日目の晩から、お粂は、乞食の子を抱いて寢てゐたのです。

私は、お粂がその子に乳を呑ませたり頬ずりしたりしてゐるのを、樂しく見まもつてゐたのです。

『お前に似てゐるよ。』

と云ふと

『さうでせうか?』

と、慈愛に溢れて溶けさうに見える目附で、ぢいと子供の顔を見詰めます。お粂は、多分、その、まだ、形もきまらぬくしやくしてゐる小さい顔に、和泉屋德兵衛の目鼻立を探し出さうとして苛立つてゐたのではありますまいか? 私はまた、お粂が丈夫になつて、私に隠れて和泉屋へこの子を見せに連れて行く日が來るのを空想しながら、無上やたらに悦に入つてゐるのでした。

許さん。

どうです?

私は德兵衛の德の字をとつて、德太郎と云ふ名を子供に附けてやりました。もとよりお粂には、それを申してありません。駿河屋の先々代に德右衛門と云ふのがあつたのを倖ひ、御先祖にあやかるように附けたのだと聞かせてやりました。お粂は、いゝ名前だと云つて、ひどく悦んでゐました。

德太郎は、まことに達者な子供で、十一歳になつた今日まで一度だつて風邪をひいたことがないくらゐです。智慧も相當ですし、よく躾ければ、この駿河屋を背負つて立つ天晴れな人間に成人することでせう。私も、この子を可愛がつて毎晩讀書算盤を教へてやつてゐます。

さて、もう一人の子供のことです。その子は、あの後に女乞食に毎月仕送りして本所へ小さい駄菓子屋を出させ、育てさせてあるのでした。その女乞食のおくらが、時々德太郎を見に來るやうに私も折々本所へ行つて、この子を見るのが樂

みしでした。顏は和泉屋に生寫しです。新八と名を附けましたが、この子が、放縱に育つて言葉も性質も下卑てゐるのは私にとつてまことに嬉しいことでした。

この新八を連れて來てお粂に會はせる氣になつたのは、最初はまつたく私の氣まぐれから出たことでした。三年前、つまり二人の子供が九つになつた時、和泉屋が急に死んだのです。私は、お粂が私に隱して涙を流してゐたのを見て、お羞しいが急に何だか自分も悲しくなつたのでした。

もう草臥れてゐたことは確かでした。和解してもいいと思ふ心持も動いてゐました。

私は、こんな風にして話掛けました。

『お粂、まことに申譯ないが、私に、よその女に出來た子供がゐる。』

なんと云ふ恐しい顏を、その時お粂が見せてくれたことでしたらう。

『お前はどうした！　私のは嘘だ。』多分吉さんたら、かう云つてひらき直つたところでせうね。私は例によつて、病ひが起つて來たのです。

『もつともだ、もつともだ。』

たゞもう恐れ入つたやうに、かう云つて疊の上に匍ひつくばつたのです。

『まことに、お前には會はす顏がない。御先代樣御佛前にも申譯ないことだ。どんなに蔑まれても致し方ない。だが喃、私も、としのせいかその子を手放して置くことが我慢出來なくなつた。堪忍してくれ。小僧丁稚にして店使ふのでもよいから、この家へ引取らせておくんなさい。それだけだ。頼む、頼みます。』

どうでせう、かう云つて口說いてゐる內に自分の言葉の一句一句に私は急に泣けて來たのです。それも、いつもの方便の涙ではない、嬉しいやら悲しいのやらわからず、むやみやたらに、涙がほろ〳〵こぼれて來たのです。考へて見ればほ

んとうに新八が自分の子供でとんだことをし了終つたやうな氣がしてゐたのです。

お条も、これにはあきれた樣子でしたが

『それア連れていらつしやい。』

と云ふのでした。

私は、まだ、その夢中な心持の殺きで飛立つやうな思ひがして、いそいで本所へ行つて新八を連れて戻りました。ところが、どうでせう、お条は、新八をきたないものを見るやうにして斥けて

『よくあなたに似てゐらつしやること。』

と、ひやゝかに云つただけでした。

その刹那に、私は、躍り上つて馬鹿のやうに笑つて聞かせたい氣持のほかに、腹の底から揺り上げて來る怒りを味ひました。今度はもうどんな時期が來てもお条には、新八が誰れの子供か、まことのことを決して云ふまいと、その時にきめたのです。たゞその代り、私は、この子を、徳太郎と同樣に可愛がつてやることにしました。どちらも私にとつては他人の子供です。たゞ女はゆるせない。それから三年、今日が日まで、ずつとその秘密をとほして來ました。お条も默りませんでした。

吉さん。

お条は、昨晩、たう〳〵何も知らずに杜鵑の子の徳太郎の手を握つて死んだのです。

私も、遂に默りとほしました。

吉さん。

如何で御座いませう

（終）

オノト選手

競技界の數種の選手權を保持する者をオノト選手と云ふ。オノトがペン先の走り、インキの流出、耐久、型等に於て常に萬年筆界の最高榮譽を獨占する事實より起る

オノト萬年筆 × × × 七圓五十錢以上
アテナ萬年筆 三圓五十錢以上
萬年筆用アテナインキ 三十五錢
送料各十八錢（カタログ進呈）



"VALET"
Auto Strop
Safety Razor

切れること！切れること！

唯一と剃りで斯んなに綺麗になる。成る程斯れなら三分とはかゝるまい。ドンナ髭でも、ドンナ初心者でも

× × ×

バレー自働研安全剃刀（カタログ進呈）

一枚の刄が半年の使用に耐へる

B型 十三圓五十錢以上　C型 一圓八十錢以上

賣捌店　大百貨店著名洋物雜貨金物店等



東京日本橋通三丁目

丸善株式會社

大阪｜神戸｜京都｜名古屋　横濱｜福岡｜仙臺｜札幌

東京＝神田｜芝三田｜早稻田｜丸ビル

婦人

◈三月特輯◈「普選から婦

■婦人と新選擧法……關口泰

■權威崩壞期の婦人……平林初之輔

■(經濟講座)日本はなぜ貧乏か……石橋湛山

■草山の徑……吉田絃二郎

■最初の普選に際して

◇婦選への接近……市川房枝

◇私の願ひと望み……坂本眞琴

◇婦人の覺悟と努力……ガントレット恒子

◇婦人の立場から……久布白落實

◇婦人の政治運動……奥むめお

◇太郎の鉛筆……金子しげり

◇傍觀者の言葉……與謝野晶子

■少數同胞の惱み……野々宮晋 深川武

■候補者の妻の心づかひ

◇不安と希望……大山柳子

◇み佛に念じて……安藤歌子

◇勇み立つ心……中野たみ子

◇一椀の番茶……武藤千世子

◇水泳の先生……今井邦子

◇感謝との信頼……柳原燁子

■總選擧に直面して……高信峽水

■歸省三日記……島中雄作

■婦人論壇(三篇)

■恥をかいた話(四篇)

■獨身家列傳 春山作樂

■戀の人形と呪ひの人形……安成三郎

定價

毎月一回一日發行

定價送料	
一冊	八十錢 參錢
六冊	四圓八十錢 送料共
十二冊	九圓六十錢 同

△但し前表は普通號のみの定價にて年四回發行の特別號は定價送料共不同に付其の都度別に申受けます

△外國行送料は普通號一冊に付十六錢申受けます

△御送金は前金にて可成振替貯金を御利用下さい 郵券代用は一割増の事

△集金郵便で誌代取立希望の方は其旨御通知願ます

廣告料

△御照會次第詳細御回答申上ます

昭和三年二月十八日印刷
昭和三年三月一日發行 (禁轉載)

編輯兼發行人 島中雄作

印刷人 高木鳥三

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社 秀英舍

東京市丸ノ内ビルヂング七七六區

中央公論社

電話丸ノ内二〇六番
振替東京三四番
同 長野三二〇五番

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co. Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48, Single copy 80 *sen* including postage. Entered at The Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

